
魔法少女リリカルなのはStrikerS スクール・ラブ・パニック!!

F20C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers スクール・ラブ・パニック！！

【Nコード】

N0647N

【作者名】

F20C

【あらすじ】

私立聖祥大学付属高校の一年生、ルーク・ハラウン。彼には少し困った姉がいた。超美人&スタイル抜群、性格も良し。加えて運動・勉強　なまさに才色兼備な、理想的な姉、フェイト・ハラウン。

彼女こそが、ルークの悩みの種であり、同時にドキドキの原因でもあった。

溢れんばかりの愛情を向けてくれるフェイト、そして、その愛情に

素直でないながらも甘えてしまうルーク。

そんな、姉弟に見えないくらいにベタベタな二人に突如知らされる事実。それは二人の関係を新しいステップへと踏み出させていく…。

青春×イチャイチャ×ラブ×ちょいエロ！？なドタバタラブコメをどうぞご堪能あれ！！

著者、F20Cの連載作品、魔法少女リリカルなのはStrike
rS Lost Memoryから生まれたスピノフ作品。
読者様達からの声援を頂き、ついに連載開始です！！

ついに200万PV達成！！皆さま、本当にありがとうございます。

第一話 普通じゃない日常の始まり（前書き）

どうも、F20Cと申します。

はじめましてな方とそうでない方も、このお話に興味を持ってくださって、本当にありがとうございます。

この魔法少女リリカルなのはStrikers スクール・ラブ・パニック！は私が現在連載しております、魔法少女リリカルなのはStrikers Lost Memoryの企画から生まれたスピノフ作品でございます。

本編を読まなくても理解できるように書くつもりではありますが、よろしければ本編の方も読んでやって頂けると本当に嬉しく思います。

この作品内でのフェイトさん達は、原作とは大きくかけ離れてしまっているかと思うので、原作のイメージを壊したくない、という読者様はご注意ください。

でわ、主人公ルークや、フェイトさん達のお話をお楽しみください。感想など、もちろん大歓迎です、何かございましたら遠慮なくお聞かせください。

OPテーマ曲『Platonic syndrome』 Song
by Ducca

第一話 普通じゃない日常の始まり

突然だが、人生とは何だろう？ 自分達が生活を送っているこの毎日、時間の経過とは一体何の意味を持っているのだろうか？

この疑問に対する答えの一つ。

それは軌跡だ。

人生とは、人の軌跡。過ぎゆく毎日、時間の経過というものはその人の軌跡を内包する、大きな流れ。

その大きな流れの中では、人の軌跡など小さなものだ。軌跡が一つ潰えたくらいでは、なんの支障もなく、この世界の毎日は流れていくことが出来るようになっていく。

だが、確かにその流れの中で、人は生きている。自らの人生、軌跡を刻んでいる。

このお話は、そんな無数にある内の軌跡の一つ。

とある少年と、その大切な人たちの軌跡の物語……

春が終わりを告げ、季節は夏に差しかわるうとしていた六月。
地球の日本、その中の海鳴市という町にある、とある家。その家の

部屋のベッドの中でルーク・ハラオウンは朝日を顔に受け、意識を徐々に覚醒させ始めていた。

「んん……」

ルークは目を覚まそうとしながら、一度寝がえりを打とうとして……出来なかった。

なぜかと言えば、単純に体が動かなかったからだ。

「んん……？」

何かと思い、腕を動かそうとしたのだが、それも叶わない。代わりに背中に何か柔らかな感触が二つ、その存在を主張していた。

「むう……」

なんとか、謎の拘束から逃れようとするルーク。だが、その時この部屋では聞こえるはずのない人物の艶めかしい声がルークの耳に飛び込んできた。

「んん……動いちゃ……らめ……」

寝ぼけた感じの気だるい声。そして、明らかに女性の声である。なんとなくだが、拘束している何かの力が強まった気がする。

「（……何……？）」

寝ぼけた頭で、この小さな異常にようやく疑問が生まれた。そうして、その正体を見極めるべく、ルークは目をゆっくりと開く。

「…………手…………？」

まず、視線を下に向けると、彼を拘束する物の正体が目に入った。
誰かの手である。

「…………まさか…………」

ルークは朝から嫌な予感という物を感じ取った。というより、目を覚まして、頭が働くようになって、段々とこの金縛り状態の正体に対して、嫌な予想が成立しつつあった。
ルークはその嫌な予感が当たらない事を祈りつつ、視線をゆっくりと反対側に持っていく。

「……………」

このルークの体を拘束している手の持ち主を確認するルーク。そして、その正体は……

「ふにゅ…………ルーク…………」

綺麗な金髪、そして整った容姿。加えて我儘なボディーを持て余し、ルークに柔らかい二つの物体を惜しげもなく押し当てていたのは

「…………ね…………ねーさん…………？」

ルークの姉、フェイト・ハラオウンであった。

「はあ……………また、勝手に俺の布団に……………」

許可を取れば良いというものでもないが、やれやれと言った感じでそう呟くルーク。実を言えば、フェイトがこうやって布団に潜り込んできた事自体はそう珍しいことではない。

昔はこの逆のパターンもあったが、それはまた別のお話だ。

「……………俺、何もしてないよな……………」

実の姉に対して、そう言う展開を期待するのはどうかと思うが、変に心配になってしまうルーク。彼女はルークから見ても十分過ぎるほど魅力的だ。故に、自分が寝ぼけて如何わしい行為に走ったりしていないかと、いつも心配になってしまう。

「いやいや、大丈夫だって。俺の保健体育の成績は５なんだし。うん、大丈夫何の問題もない。ビリ〜ブ…信じる、俺……………」

そして、いつものように自分に自信を持たせるためにそう言い聞かせるように呟く。この展開も最早何度目になるのか、数えるのも面倒になった。

「にゅ……………やぁ…ルーク……………そんなところ……………触っちゃちゃ……………らめ……………」

たった数秒で自分に言い聞かせて付けた自信が粉々に砕け散った。

「……………え…？　なに？　触るって何を……………？　いやいや、ないない……………」

と言いつつも、脳内では最悪のシナリオが随時更新されつつある。自分の中のなにか大事なモノが徐々に黒く塗り潰されている感じがした。

「と、兎に角……起きよう……うん。朝練もあるんだし、ねーさんだって大会が近いとか言ってたし……」

脳内で絶賛進行中のピンク色のシナリオをデリートしつつ、もっともらしい事を理由に体を動かすルーク。とにかく、この困ったお姉さんを起こさない限り、ルークの精神はガンガンと削り取られてしまう。

「はふう……ルーク……お姉ちゃんにそんなこと……責任……とってくれる……?」

近いうちに、この姉とはじっくりと話し合いをする必要があると痛感した朝だった。

ルーク・ハラオウンの優雅な一日は朝食から始まる。

早朝に起こったフェイトのルークのベッドへの侵入というビックイベントがあったが、気にしたら負けである。

「おはよう、ルーク。それにフェイト」

「おはよう、母さん。」

「おはよう」

リビングに行くと、すでに母であるリンディ・ハラウンが朝食の用意を済ませてルーク達に朝の挨拶をしてくる。ルーク達も挨拶を返して食卓につく。

今でさえ、食卓を囲むのはこの三人だけだが、実際ハラウン家は五人＋一匹家族である。父であるクライド・ハラウンは単身赴任中。ルークとフェイトの兄であるクロノは結婚して、家を出たのだ。家を出たと言っても、顔を合わせる頻度はかなり多い。この理由は直に分かるだろう。

そして、一匹というのは番犬？アルフである。今はソファに陣取って寝ているが、怒らせると物凄く怖い……らしい。

「今朝も大変だったみたいね、ルーク？」

「母さん……知ってたなら助けてくれればよかったのに……」

どうやら、フェイトがルークの布団に潜り込んでいた事を彼女は知っていたようだ。おもしろそうだったので、そのまま放置していたらしい。

結局、あの後、ルークは彼を抱きしめたまま熟睡していたフェイトを叩き起こし、天国と地獄が同居していた状況から脱出したのだ。

「うう……ごめんね、ルーク。夜、御手洗いに行った時、部屋間違えちゃったみたいで……」

そうやって申し訳なさそうに謝ってくるフェイト。世の男性ならば、

誰もが一発でなんでも許してしまいそうになる仕草である。

「もういいよ。別に何か実害があつたわけじゃないし……姉弟なんだし、何かある筈も……ないじゃん……」

周囲からは極度のシスコンと言われているため、姉に対しては少し素直でないご様子だ。

対するフェイトは、極度のブラコンと言われているが、ルークへの溢れんばかりの愛情を隠す気はサラサラないらしい。布団に侵入してくるあたり、狙ってやっているのではないかと疑ってしまうほどだ。

と、素直でない反応を返しながら、食卓に並んだミルクティーに砂糖を投入していくルーク。

ポチャン、ポチャン、ポチャン、ポチャン……以下エンドレス

「る、ルーク……いつも言ってるけど、砂糖入れ過ぎじゃない……？」

「ん？そう……かな……？」

と、フェイトに返事を返しつつ……

ポチャン、ポチャン……以下略

尋常でない量の角砂糖を紅茶の中に惜しげもなく突っ込んでいくルーク。そして、何個目か数えるのが嫌になったところで漸くスプーンで紅茶をかき回し始めた。

「うう……見てるだけで胸焼けしそう……」

糖分満載のミルクティー、いやミルクティーと呼んでもいいものか迷うような飲み物を平然と飲むルークを見て、フェイトは軽く胸焼けを起こしそうになった。

「フェイト……糖分は頭の栄養なの？ それに何より、甘い方が何でもおいしいモノよ」

「栄養って言っても限度があるから！！ 二人とも糖尿病になっても知らないよ？！」

と、ルークと同じように紅茶に大量の角砂糖を投入している母に突っ込みを入れるフェイト。

この二人の健康に関しては、胃の痛い思いをしているフェイトであった。

こうして、いつもと変わらない朝食の時間が過ぎていった。

「あ、そろそろ時間だし、俺行くね。今日も朝練なんだ」

「あらそう？ 今日帰りは遅いの？」

「ん……多分いつもと同じくらいだと思う。何かあったら連絡するよ」

時間的にはルークの部活の朝練には今から出ても余裕がある。だが、なににことにも余裕を持って行動する、ということをもットーにしているルークはいつもの様に時間にゆとりを持って出発することにしたのだ。

リンディからの問いかけに答えつつ、床に置いていたスポーツバッグを背負って玄関に向かう。中には部活で使う道具の一式と、教科書やら弁当やらの一切合切が入っている。

「待つて、ルーク。私も一緒に行くから。」

ルークが玄関で靴を履いていると、これまたいつものように一緒に登校すべく、フェイトも支度を済ませてやって来た。

年頃の姉弟で揃って学校に行くなど、希有なことかもしれないが、この二人にとっては、もはや当たり前な事になっていた。

「それじゃ、行ってきまゝす」

「行ってくるね、母さん」

「はゝい、いつてらっしゃい。気を付けてね」

そうして、リンディの送り出しを受け、ルークとフェイトは揃って学校に向けて出発した。

「あら、おはよ、ルーク。それにフェイト先輩」

と、家を出るなりいきなり朝の挨拶が二人に飛んできた。これもまた、あまり珍しい事ではなく、ルーク達も挨拶の主にもどおり

に挨拶を返す。

「おはよ、ティア。流石は我が部、期待の新人マネージャー。いつも朝早くにご苦勞様だね」

「おはよう、ティアナ。ルークもそうだけど、大変だよな」

フェイトと同じタイプの制服に身を包み、橙色の髪をツインテールにした少女、ティアナ・ランスターにルークとフェイトはそれぞれ朝の挨拶をする。

「そうでもありませんよ、フェイト先輩。一年生でレギュラー候補に選ばれてるルーク程じゃありませんから。そうよね？ 野球部期待の一年生さん？」

「それは周りが勝手に言ってるだけだよ。俺は先輩達に付いていくのがやっとなの」

「あははは……。でも、ルークの名前、私の教室でもよく聞くよ？ 野球部の男の子達もルークの実力に驚いてるみたい」

と、この会話から分かるようにルークの所属している部活は野球部である。そして、ティアナはその野球部のマネージャーというわけだ。加えて、ルークにとってはお隣さんであり、幼なじみでもある。物心ついた時には、すでにフェイトを交えて遊んだりしていたので、その付き合いは長い。

気心知れた仲と言えば聞こえはいいが、昔の弱みなどを握られているため、頭が上がらないことが多いのもまた事実だった。

「すごいレベルで言うなら、ねーさんの方がすごいと思うけど？

テニス部のエースなんだもん。しかも、副部長だもんね。」

「まあ、それは言ってるわね。美人でスタイルも良い上に、成績も優秀。まさに完璧な女性って感じするもんね」

「うう……二人してそんなに持ち上げないでよあ……」

フェイトはテニス部の副部長であり、エースの一人でもある。もう一人は……白いあの人だが、登場は来週なので悪しからず。と、話は逸れたが、ルーク達の通っている私立聖祥大学付属高校では、フェイトはかなり有名だ。

ティアナが言った通り、容姿・スタイルともに文句なし。加えて運動も出来て、勉強も出来る。男女問わず、フェイトは人気があつた。少し恐いくらいに。

こうして、彼女と一緒に歩いているだけでそれは実感できる。ルークは周囲からの視線が痛い事を先程から感じ取っていた。まあ、これも例によっていつものことなのだが……

「はあ……でも、二人って本当に仲いいですね？ 本当に姉弟なのか怪しいくらいに」

「え？ そうかな……？ これが普通じゃないの……？」

とティアナの言葉にフェイトは心底不思議そうな顔をしてしまう。まあ、ティアナがそう言いたくなるのも不思議ではない。なぜなら

……

「普通の姉弟は、学校の通学路で腕なんか組みませんよ？」

そう、ティアナの指摘通り、フェイトはルークの腕をとって、自分の腕を絡ませているのだ。

朝っぱらから、腕組み登校というわけだ。フェイトはご機嫌だが、ルークはやれやれと言った感じである。嫌なら拒否すればいいのだが、ずっと前にそれをやった時に……

『お姉ちゃんところするの……嫌……？』

と、涙目×上目づかいという、凶悪コンボを繰り出されてしまい、ルークは敢え無くその凶器の前に撃沈させられたというわけだ。以来、フェイトからのスキンシップを拒否することが出来なくなってしまったのだ。諦めの極みとでも言えいいのか。

「はぁ……周りの視線が痛い……」

当然、学園内での人気が高いフェイトが、弟とは言え男と腕を組んでルンルン気分で登校しているのだ。通学路を歩く男子生徒からの嫉妬の視線が半端ないのだ。

ルークの隣に、ティアナが居ることもその理由の一端を担っていることは言うまでもないだろう。

「ま、フェイト先輩のブラコンぶりも有名だしね。ラッキーとでも思っておきなさい、ルーク。じゃないと、身が持たないわよ?」

「ははは……朝錬前からこんなんじゃ、先が思いやられるよ……」

「ん〜? 二人してなんの話してるの?」

ルークに突き刺さる嫉妬の視線の原因であるフェイトは、ルーク達の会話の意味を理解していないようで、首を傾げてしまう。

こうした、天然っばいところも彼女の人気を支えている重要なファクターというところだろうか。ルークは歩きながら、そんな事を分析していた。

これが、ルーク達の日常の始まり。

何の変哲もないような、普通的一天。そのスタートである。

だが、人の日常に無変化という物はない。

どんなに微細なものだったとしても、確かに何かが変化している。

要するに、それに気が付けるかどうかの問題なのだ。

その小さな変化に気が付けるという事は、より人生を楽しむという事に繋がる。

そして、今日も。そんな小さな変化を伴った一日が始まりを迎えたのだった。

第一話 普通じゃない日常の始まり（後書き）

F20C「さて、というわけで始めましたスクール・ラブ・パニツク、略してスクラバ！第一話、如何だったでしょうか？皆様に興味を思っただけならば、とても嬉しく思います」

ルーク「ついに始まっちゃったね……。ああ、この先不安だ……。」

F20C「なにを出だしから気弱なことを……。そんなんじゃ、この先の展開を乗り切れないよ？」

ルーク「あんたは俺をどうするつもりなんだよ……」

F20C「勿論……フルボッコに……キリッ」

ルーク「なんだろ、この作者物凄く俺のことが嫌いみたいだ……」

F20C「とまあ、冗談はさておき……。今回は第一回目ってことで、キャラはあんまり多くは出てこなかったね。」

ルーク「ていうか、俺って野球部なんだ。しかも、ティアナがマネジでフェイトさんはテニス部……。なんだかスポコンな匂いがするな」

F20C「まあ、野球なら作者は経験者だし、ルールも分かるしね。テニスは……ちよくちよくだけど。」

ルーク「舞台も仮想の日本、しかも海鳴市なんだよね。原作には出てこなかった聖祥の高校が俺達の通う学校ってわけだ」

F20C「学校とかの設定は公式とはちょっと違ってるけどね。あとフェイトさんの名前とか。話を成立させるために少し変更させてもらってます。」

ルーク「でもって……一話目からフェイトさんの攻めがすごかったなあ……」

F20C「まだまだ、こんなものは序の口さ。あのお姉さんの底力を舐めちゃいけないよ……」

ルーク「なんでだろ、その言葉の裏にR18な匂いがぶんぶんするのは……」

F20C「それは君の心が薄汚れてるからだよ。…はい、というわけで今日はこの辺りで失礼させていただきます。詳細な人物設定なども近いうちに更新する予定なので、少しお待ちを。」

ルーク「でわでわ、感想などお待ちしてます！！また来週、お会いしましょう！！」

EDテーマ曲『You have a dream』 Song
by 水樹奈々

バルディッシュさん、EDアイデアを本当にありがとうございます！！やっぱり、EDを飾るのは奈々様に決定ですww

第二話 素直になれない午前（前書き）

というわけで、やってきました第二話。

今回、他作品からのゲストキャラさんの登場です。この作品への友情出演を募ったところ、多くの応募があったことに軽く感動してしまった作者でございます。

さてはて、今回はゲストキャラを交えての初回です。どうなるのやら…。取りあえず、ルークには恥ずかしい思いをしてもらおう。

第二話 素直になれない午前

バットを握る。二、三回、そのままバットを持ったまま振り子の要領で腕を左右に振る。

お決まりのモーションを終え、そして構える。この間、大体5～6秒くらいか。

目の前にはマウンドで打撃投手をしている二年生の姿がある。

チームメイトのその男子が振りかぶり、投げられたボールの球速は大体110キロくらいか。予想されるコースは外角高め、球種はストリート。球がリリースされてから約0・1秒で、球種とコースを判断する。

「…ッ！」

左足を少し持ち上げ、打ちに行くモーションに移る。外角の球なので、体格的にもパワーの面から考えても、サード・レフト方向にひっぱる事は無理だ。ここは力に逆らわず、セオリー通りに流すことにする。

キイイイン!!!!!!

甲高い金属バットと高級のぶつかる音。バッター、ルークは視線をインパクトさせているボールに注ぎながら、バットを振りぬく。

打球は綺麗にライト方向へ飛んでいく。今はシートバッティングでもない、守備は付いていないため、キャッチされたかどうかは分からないが、普通に行けば十分ヒット性の当たりだった

「はぁ…ハラオウンのやつ、綺麗な打ち方しやがるなぁ……」

「ま、一年の中ではコーネルドと並んで、期待されてる奴だからな。俺達も、うかうかしてたら、あつという間に追い抜かれちゃうな」

「何言つてやがんだよ、お前も俺もレギュラー候補でもないだろうが。俺達は追っかける側なんだよ、初めから」

恐らくは二年の先輩だろうか、そんな会話をしているが、ルークには聞こえないようだった。それほど集中しているという事だ。そうこう言っている間にも、今度は内角に食い込んできたシュートを腕をたたんで綺麗に打ち返していた。

今は朝練の時間である。朝のフェイトとの腕組み登校を乗り越え、なんとかグラウンドまで辿り着いたルークである。フェイトとは校門で別れ、ティアナとともに朝練に参加している。彼女はマネージャーの仕事に従事し、ルークは一年生ながら2、3年生に交じって打撃練習をさせてもらう事が出来たのだ。

聖祥高校の野球部は部員数、約40人であり、地区内でもなかなかの強さを誇るチームである。去年の夏大は地区大会のベスト8まで勝ち残ったらしい。ここの野球部は能力さえあれば、一年生でも使うタイプのチームであり、ルークはそんな期待の一年生の一人であった。故に、こうやって打撃練習に参加させてもらっているのだ。

「（次……左中間！！）」

ルークは右に左にと、ホイホイと打ち分けていく。バットコントリールと、目が良いルークの得意技でもある。

体が小さく、パワーはまだ伸びしろがあるとはいえ、まだ一年生。ホームランを狙えるタイプのバッターではないが、打率を伸ばすタ

イプのバッターとしては優秀と言っていていいだろう。

「ありがとうございますー!!」

決めた球数を打ち終え、投手に挨拶をして次の先輩にバッターボックスを明け渡す。

「相変わらず気持ちのいいバッティングだよな、見てるこっちがスカッとしちまうよ」

「あはは……ありがとうございます」

交代しながら先輩とそんな言葉を交わしつつ、ルークは球拾いに参加すべく、バットなどを片づける。

「（狙ったところに飛ばせたのは、七割くらいかなあ……。やっばり、ライルみたいにはいかないか……）」

ふとそんな風に、この野球部の監督をしている昔馴染みの奴の顔を思い出す。ライルというのはこの聖祥の国語教師でもある。ルークとは昔からの付き合いだ。

一昨年、この高校の教師兼野球部の監督になると聞いた時は驚いたが、存外上手くやっているようで、生徒からの人望は厚い。

今日は教員会議があるとかで、朝練には参加していないが、いつもなら選手に交じってボールを相手に駆け回っているような人だった。夏大前に来る、取材の記者に選手と間違えられても仕方ないと、ルークは思っている。

野球のレベルは言わずもがな、なんで教師をやっているのか不思議なくらいのモノを持っている。チームのレベルのアップに貢献して

いる事は、誰の目から見ても明らかだった。

と、そんな事を考え始めていたルークに、声がかかる。

「さっきの打撃練習に満足してないって顔だね、ルーク」

いきなり声をかけられたが、ルークはその声の主をよく知っているため、驚く事もなかった。

ルークもその声の主が誰なのか分かった上で答える。

「ライルみたいに自分の狙ったところに打ち分けたり出来るようになりたいなあ……なんて、自分でも生意気なことを言ってみたり……」

「ははっ…七割も思った所に打ち返せば、十分だよ。ていうか、一年で監督みたいな事が出来るなら、それはそれでビックリしなきゃいけない事だしね」

その声の主は、ルークの冗談めいた答えに、苦笑交じりでそう返してくる。

思えば、彼とも長い付き合いだ。聖祥の初等部るとき、クラスメイトになって以来の友人であり、野球のチームメイトでもある。

「そついうriosだって、さっきまでノック受けてただろ？ あんな綺麗なフィールディング見せられたら、ちよっと自信無くすよ」

「ルークだって、守りはあんまり悪くないだろ？ それにルークは打つ方が好きなんだしさ。」

ルークにriosと呼ばれたこの少年。名前をrios「コーネルド。ルークのクラスメイトにして、野球部の期待の一年生のもう一人で

ある。

会話から聞いても分かるように、リオスは守備にかけては、先輩からも一目置かれる存在だ。

基本的に、投手・捕手以外なら、どこを守らせても安心感を持てる動きをしてくれる。彼としては、遊撃手ショートが一番好きらしいが。

まあ、どこでも守れる万能野手というところだ。

「そうだ、今朝も見たよ？ フェイト先輩いつも同じように腕組んで登校してたよね。いやあ……いつもラブラブだよな」

「違うから……。アレはほら……ねーさんの病気というか……癖みたいなもんだから。もうなんとかする事を諦めたんだよ」

「またまた」。実は嬉しかったりするんだろ？ 傍から見てもお熱い関係に見えちゃうよ」

どうやら、今朝の登校風景をリオスに見られてしまったらしい。とは言え、これが初めてではないので、そんなに気にはしていないが、やはりこうも一方的に弄られては堪ったものではない。

ここは一つ、こちらも反撃してやろうとルークは意地の悪い笑みを浮かべながら言っちゃった。

「そういうリオスはどうなんだよ？ 今朝も先輩と一緒に登校したんじゃないの？」

「ぼ、僕は一人で来たよ！？ なのはさんと一緒になんて……あれはほんの偶然で……。まあ、家も近いわけだし、バツタリと会う事も無きにしも非ずな感じで……。あんなに良い笑顔で一緒に行こうなんて言われたら、流石に断れないっていうか、断ったとしたら、紳士道に反するっていうか……」

どうやら、なのはと一緒に来たらしい。

なのはというのは、高町なのはという、フェイトと同年で彼女の親友でもある。テニス部のエースの片割れであり、さらに部長を務めている。

今まさにルークの目の前で、顔を赤くしながらブツブツ言っているリオスとはご近所さんであり、幼なじみだ。

「俺は別になのはさんと一緒に、なんて一言も言っていないよ。……ほほお……つまりモテモテのリオス君は、今朝も愛しなのはさんと仲良く登校を……いやあ、あんなに美人の幼なじみのお姉さんと一緒になんて、男冥利に尽きるねえ……」

「い、愛しのとて……！！ 僕は別にそんなんじゃ！！ まあ、美人なのは確かだけどさ……」

と、こんな風に弄り返せば、こんなにも初々しい反応を返してくれる。

ていうか、古い言い方でいえば、完全にリオスなのはに水の字だと、こんな話ばかりに時間をかけてばかりでは、他の一年生に申し訳ないと思ったルークは、一人赤くなつてぶつぶつ言い始めたリオスに苦笑しながら言う。

「ノロケるのは後にして、俺らもボール広い行こうよ。なのはさんとのラブラブ談義は、そんな時に聞くからさ。」

「だ、だから違つて……。つて、ルーク！！？ 待つてよー！！」

言う事だけを言って、さっさと行ってしまうルーク。リオスも顔が赤いまま彼の後を追いかけた。

さて、学生というからには、ルーク達は部活だけをやっていたらいいというものではない。昼間は無論、学校の授業というものが学生達を待っているのだ。

ルーク達、一年生がこの聖祥高校に中等部からエスカレーター式で上がってきて、今で漸く二カ月が経つ。

元から顔馴染みが多いのは当然であるが、新しい教室や環境に浮足立っていた4月が少し懐かしく感じてしまえる時期でもある。

「えゝこの公式は……」

ルーク達生徒の前では、数学の先生、ヴェロツサ・アコース先生が教鞭を振るっている。なんだか、『まっがーれ スペクタクル』とか『カレーの歌』とかを歌ってそんな声の人だが、気にしたら負けだ。

若い先生だが、教え方は非常にうまい。一部では、実は何かの捜査官だとか、特別な任務を背負ったエージェントだとか、変な噂が立っているが、所詮は噂だろう。

「……………」

ルークは静かにヴェロツサの授業を受けている。野球部の方針で、赤点など取るものなら、グラウンドに立ち入り禁止になってしまったので、勉強も疎かにはできない。

それに、学校の授業は集中力を鍛えるという点では、トレーニング

にもなる。そう思えば、勉強に精を出しておいて損はない。

「……ん……？」

そんな感じで、静かに授業に集中していたルークだが、ふと視界の端に映ったモノがその集中を一時切った。

何やら、白いモノが視界の端を横切ったような気がしたのだ。

『位置に付いて、よい……』

パン！！！！

と、先生らしき人の声の後に、スターター独特の高く、大きな音がルークの耳に入ってきた。

ルークは視線だけをそちらに向ける。と、さっきの白い何かの正体が分かった。

『三枝、12秒52』

どうやら、体育の時間で100メートルのタイムを計っているようだ。さっきの白いモノの正体は体操着の上の部分だったのだろう。

加えて、女子の体育の時間らしい。さらに体操着に入っているラインの色を見れば赤。つまりは三年生のモノだった。ちなみに一年なら青、二年は緑だ。

纏めると、今は三年生の女子の体育の時間らしい。見れば、周囲の席の男子生徒達の視線は度々その方向へ向いている。

若さゆえの過ち……というほど大層なものではないが、まあ男の子だもん、仕方ない。

我らが主人公ルークにしても、その一部である。健全な男子たるも

の、女性との体操着姿を心のファインダーに納めないなどというのは愚の骨頂、逆に相手に失礼なのだ。（決してそんなことはない）

だが、ルークは心のファインダーに納めるだけではない。このクラス、一年三組のエロティック大統領、マエストロ・ルーク、おっぱいソムリエなどの異名を持つ彼（本人はその呼び方をされると怒る）は更にその上を行くのだ。

「（……83……80……78……81……）」

ルークは心の中で冷静にそんな数字を唱え始める。否、唱えているのではない測っているのだ。

「（85……86……。やっぱり、三年生なんだなあ……。姉さん程じゃないけど、やっぱりそれなりの成長を……）」

そう、彼は女子の体操着の上から、バストの大きさを測っていたのだ。なんという変態。

友人達からは、神と崇められ、その神眼に敬意を表し、エロティック大統領の称号などを授与されているのだ。

彼に言わせれば……

『見れば、大体分らない？』

との弁。

その瞬間、ティアナに殴られたのは言うまでもない。他の女子達からは『スケベなところがないければ、もっとモテるのに……』、『だがそれがいい』、『コーネルド君とハラオウン君、どっちが受けでどっちが攻めなんだろう？』などなどのコメントを頂い

ている。

ちなみに、最後のコメントの主は未だに誰なのか分かっていない。

兎も角、変態チックな方面でも、目の性能の高さを発揮するルーク。流石は、ルーク。真正のスケベである。

そして、なんとなく視線を流した時、それは彼の視界に入ってきた。

「（九じゅ……！！！？？）」

思わず立ち上がりそうになったルークだったが、何とか堪える。予想外の大物に出くわしたのだ。彼のエロセンサーがエマージェンシーを告げる。

「（一体どんな……）」

ルークはその大物の持ち主が誰なのか確かめる為、視線を上を持つていく。

そうすることで、段々とそのけしからん二つの兵器を所持している人物の全貌が露わになっていく。

まず目に入ってきたのは、綺麗な金髪。ルークの中での点数が80点にまで上がった。

そして、綺麗な深紅の瞳、整った容姿。

「（エクセレント……100点……）」

ついに、満点がついた。

だが、その女性の全体像を見た瞬間、ルークは啞然とした。もろに

つてきた。見れば、フェイトの隣には友人であるなのは姿も見える。なのは「仕方ないなあ」といったような顔をしている。

ここで素直に、且つばれないように手を振り返せばいいのだが、胸を凝視してしまったことなどが、頭を過り、ルークは赤面してしまう。

そして、プイツと目線をフェイトから外してしまった。恥ずかしさと、自分への自己嫌悪がそうさせたのだろう。

「（……………流石に冷た過ぎるかなあ……………」

と、やってから後悔してしまうルークである。フェイトの向けてくれる愛情に素直に反応するのは少し気恥ずかしいのは分かるが、少し冷たい態度に見えてしまったかもしれないと、そう感じたのだ。

「（ちょっとだけ……………」

そう一人、心の中で一人呟いて、フェイトの方をもう一度確認すると、気になるフェイトは……………

『（。 ｌｌｌ）ガーン』 フェイトの表情

どうやら、物凄くショックだったらしい。

そのまま崩れ落ち、―― ｉｌ―― ｌｉ こんな感じになっ
てしまう。

「（ああ、やばい！！ やっぱり落ち込んだじゃってる??！）」

悪い予想が当たり、ルーク的にはよろしくない状況に事が動いてしまいつつある。このままでは、家でもフェイトは落ち込んだままに

なってしまうかもしれない。

それだけは何んとしても避けたいルークは、恥ずかしさを乗り越え、手を振ろうとするのだった。

一方、フェイト達の方では……

「うう……ルークに無視されちゃった……」

「ま、まあまあ。ルーク君だって、授業中だったんだから仕方ないよ。それにルーク君って恥ずかしがり屋だから……」

orzになってしまったフェイトをなのはが必死で慰めていた。
なのはにとっては、親友のブラコンぶりは、最早日常と化しており、それに関するフェイトの扱いも心得ている。

「昔は……昔は何かある度に、私の後ろを『おねえちゃん、おねえちゃん』って、付いて来てくれたのに……。最近のルーク、なんだか冷たい……」

「そんなことないよ、ルーク君はフェイトちゃんの事大好きだよ？
今朝だって、仲良く一緒に学校来たんだよね？」

兎に角、ポジティブな路線の話題を振るなのは。フェイトの思考をプラスに持つていくにはこうするしかないだろう。

「最近……ご飯、あ〜んで食べてくれないんだよ……？」

「あはは……それはまた、恥ずかしいからで……」

どうやら、今回の落ち込みっぷりは、かなり重傷らしい。フェイトのしたい事のレベルが、かなり高い為、ルークが恥ずかしがってしまうのも当然かもしれないが。

その時、なのははルークの教室に目線を向けると、クスリと笑った。

「ほら、フェイトちゃん。ルーク君、ちゃんとフェイトちゃんの気持ちに忖えてるよ?」

「ふえ……？」

なのはのそんな言葉を受け、フェイトはもう一度ルークの方に視線を向ける。

すると……

⌋
⋮
/
/
/
/
/
/
/
/
/
/
⌋

見れば、ルークが顔を赤くしながら、小さくだがフェイトに向かって手を振り返している。ぶっきらぼうな感じではあるが、確かにフェイトに向かって小さく手を振っていたのだ。

「ルーク」

それを見た瞬間、フェイトの表情が再びふにやりと綻ぶ。彼女としては、それだけでも十分だったらしく、先ほどのどんよりオーラもどこかに忘れたように、幸せオーラ全開になっていた。

「……………／／／／／／／／／／」

もうどのくらい手を振っているだろうか。時計を見れば、時間的には3分しか経っていないが、ルークの中では一時間ほどの時間が経っているようにも感じられた。

相対性理論を肌で感じた瞬間だった。

と、そんな事を考えていたのだが、まあ教室の中でどんなに目立たないようにしていても、手を振っていれば見つかるのは当然のことだった。

「ふうむ……。ルーク君、確かに窓の向こうには理想郷アウアロンが広がっている。男ならそれに見惚れるのは、当然だね……。」

「うげ……………」

突然降りかかった、ヴェロッサの声。どうやら、ルークがフェイトに手を振り返していたのを見られてしまったらしい。それだけでも、死にたくなるくらい恥ずかしかった。

「お姉さんが大好きなのも分かるけど、今は授業中だよ？　もう少し、集中しようね。」

「すみません……………」

当然のお言葉に、ルークは真摯に謝るしかなかったのだった。隣の席のティアナからは、呆れたという表情が。その前の席、斜め

横の席に座っているリオスはなのはに見惚れていたのか、慌てて視線を黒板に戻していた。

次の休み時間、ルークが『シスコン』と弄られまくったのは言うまでもない……。

第二話 素直になれない午前（後書き）

F20C「というわけで、神崎はやて先生の大作！！魔法少女リリカルなのはStrikers　氷翼の天使からの友情出演、リオス＝コーネルド君です！！！」

リオス「どうも、どうも。」

ルーク「いやあ、嬉しいね。こんな形で共演出来るなんて。友人役としての出演を快諾してくださって、神崎先生とリオス君には本当に感謝感激だよ。」

リオス「いやいや、そんな。それに僕もなのはさんとの絡みをメインにしてくれるみたいで……ちょっと嬉しいかも……／／／／／」

F20C「二人には、熱い関係に……おっとこれ以上は言えないよ」

ルーク「すでに手遅れだと思う……。ていうか、今回の俺完全に恥ずかしい奴じゃん！！！」

リオス「フェイトさんに赤くなりながらも手を振ってたルーク君、あの子の弄られ方はすごかったよね」

F20C「ふふ、計画通り……キリッ」

ルーク「この調子じゃ、次回も怖いなあ……」

F20C「次回は午後のひと時を書いてきますよ。この作品、基本的にゆっくり進みますからね。のほほんとした気持ちで読んでいた

できれば嬉しいですww」

リオス「次回も僕の出番あるのかな？」

F20C「めっちゃあるよ。あと、夏菜先生の作品からの友情出演の昭人さんも、もしかしたら出てくるかも。予定通りなら……」

ルーク「不安が残る言い方しないでよ……」

F20C「尺の問題があるんだよ……。というわけで、次回もお楽しみに！！来週もちゃんとほめられて、伸びちゃおっと」

ルーク「ここでほめらじ！！？お前、どんだけS音様好きなんだよ！！！？ていうか、このネタ分かる人いるのか？？」

F20C「考えるな、感じるんだ……」

リオス「難しいね……このお話」

ルーク「ここは軽く流そう、でないと体が持たない……」

第三話 やる気MAXな午後（前書き）

さて、やってまいりました第三話！！今回は、ゲストキャラの二人目が満を持しての登場でございます！！

ついでに、あの組織も登場！！？

いつも通りにハチャメチャが押し寄せ来たようなお話ですが、どうぞお楽しみくださいww

全然関係ありませんが、『TVアニメ『ぬらりひよんの孫』のキャラクター、つらら（CV堀江由衣さん）が可愛過ぎて、生きるのが辛い今日この頃です。

でわ、本編スタート！

第三話 やる気MAXな午後

昼休みを告げる鐘の音。

4時限目が終了し、先生が2、3次回の授業についてのことを言った後、教室から退室して行った。これから約1時間、ルーク達学生は昼休みを過ごす事が出来る。とは言っても、やる事と言ったらほとんどの者が共通しているのだが。

「腹……減った……」

「お、同じく……」

「あんた達ねえ………まったく……」

ルークが情けない声を出して机にへばる。リオスもそれに続いて、自分の机に突っ伏した。

その二人を見て、ティアナはやれやれと言ったような顔をした。まあ、この光景もいつもの事なので殊更珍しがるものではないが。

「ま、成長期だしね。仕方ないか」

「そゆこと……。てなわけで、昼飯食べに行こうよ。」

「うん、賛成。ていうか、昼休みってその為にあるようなもんだしね。」

三人はそう言いつつ、鞆からそれぞれ弁当を出す。大きさはそれぞれ違うが、当然ながらティアナのが一番小さい。

だが、三人は弁当を広げることはせず、何かを待つ態勢になる。ま

あ、これもいつもの光景だ。

「……………／／／／／／／／／／」（そわそわそわ……………）

「リオス、そわそわし過ぎ。」

「え?! そ、そうかな!?!? い、いつも通りじゃない!?!?」

明らかに挙動不審なリオスにティアナがそう突っ込む。本人はこうして否定しているが、誰の目から見てもそわそわしている。

「仕方ないよ、ティア。もうすぐ、リオスの奥さんが来るんだもん」

「ああゝ、奥さん……………ねえゝ。今日はなんのおかずを交換するのかしら?」

「ふ、二人して変なこと言わないでよ!!」

すかさず、幼なじみコンビネーションスキルを発動させ、リオスを弄るルークとティアナ。

だが、昼休みにルークが展開する、ある人物とのダダ甘な固有空間はリアルな2828動画（ニヤニヤ動画）である。

「る、ルークだって、フェイトさんやティアナにおかず貰ったりしてるじゃん!?!? あゝんで食べさせてもらってるじゃん!?!?」

「ナ、ナンノコトデショ……………?」

思わぬ反撃を喰らい、思わず棒読みになってしまふルーク。ティアナも少し顔を赤くしてしまい、顔を背けていた。

と、そんな男子からすれば羨まけしからん会話をしていれば、当然のごとくその反感を買うわけで。

ルークMOGGERO

リオス女装しろ

ルーク×リオスが良いなあ……

ルーク君が攻め、これだけは譲れないわ……

などなど、教室のあちこちから怨恨？の声が次々と……

「ちょっと待つて??！ 最後の二人、明らかにおかしかったよね
!!!? 女の子の声だったように聞こえたんだけど!!!?」

「前二人も嫌な感じだけど、後半二人は突っ込むのが怖い……」

クラス内での二人の認識が少し分かってしまったルーク達だった。
と、そんな風に馬鹿騒ぎしているうちに、ルーク達の待ち人が教室に入ってきた。そして、その内の一人がルークにとんでもない事をしてきた。

「ルーク、お昼食べに行こー」

「むぎゅっ!!!?」

教室に入ってきたのは、言わずもがな姉であるフェイト。加えて、
リオスの幼なじみお姉さんであるのはである。

だが、問題はそこではない。フェイトはルークを見つけた瞬間、その豊かな胸に収まるように抱きしめてきたのだ。

「さつきは、ちゃんと手振り返してくれたね。お姉ちゃん嬉しいよ」

「そ、そんなのは良いから、早く離して……！ し、視線が……！ ティアやクラスからの視線が痛いから……！」

当然、そんな事をされれば周囲からの視線は、それそのものが凶器になる勢いである。
ルークはじたばたと体を動かし、フェイトのハグから逃れようとする。

「ええ……良いじゃない。今朝だって、一緒のお布団でこうやってたんだし」

ピシッ……！！！！

その一言で、世界の時が凍りついた。

その時、クラスの意識は一つの方角性を共有していた。

見ているこっちが羨ましいハグ

今朝のお布団でも……？

布団でハグと言えば……？

「ルーク・ハラウン~~~~~!!!!!!」

「うわ、出た!!!?」

そうやって、突然教室に怪しげなフード付きコートで全身を隠した謎の集団が突入してくる。頭の額の部分に『F』の文字がプリントされている。そう、彼らこそ……

「姉であるフェイト先輩と……ききき近 相 とは……貴様……生きて帰れるとは思うなよ……。」

そう、彼らこそ、1年3組の平和（色恋沙汰について）の守護者、FFF団である。圧倒的な物量、そして連携によって、女の子とのイチャつきなどといった血の掟に反した裏切り者に正義の鉄槌（羨ましさからくる）を下す者たちだ。

「き、近 相 とかしてないから!!! ただ単に、起きたらねーさんが布団の中に潜り込んでただけだ!!!」

「なに!!!? この腐れ外道が!!! フェイト先輩をリアル抱き枕に仕立て上げ、口では言えないようなアブノーマルなプレイを夜が明けるまで延々と繰り返しただど!!!?」

「お前ら一回耳鼻科行けよ!!! どういう聞き間違いだ、それ!!!」

と、フェイトのハグから抜け出し、FFF団の追撃から逃れようとするルーク。だが、FFF団の圧倒的な力の前ではそれとて全く意味を為さないのだ。

「まあ、しゃあないわな。二人とも、あの子らからボコられるに十分なほど女の子に囲まれとるんやし」

「はやてさん……人事じゃないんですって……なんだから、卒業するまで生き残れるか不安になって来てるんですって……」

「ああ、なんだかそれ分かるかも。今日の一撃はここ最近でも、一番殺気が込められてたし……」

ここで補足を加えると、今現在ルーク達は6人で昼ごはんを食べている。先ほど教室に居た五人に加え、ちび狸……ではなく、フェイト達同様、ルークとリオスの先輩である八神はやてが弁当を広げてルーク達の会話に参加している。

まあ、これもいつもの事だ。さっきなのは達と一緒にではなかったのは、はやての肩書に依る。

「はやてさん、お願いですから生徒会長の力でFFF団なんとかしてくださいよ」

「このままじゃ、僕達命の危険が……」

そう、ルークが言ったようにはやてはこの聖祥高校の生徒会会長という役職に就いているのだ。先ほどは、その仕事関連で先生に呼ばれており、屋上でルーク達と合流したというわけである。

「だが、断る……!」

ルーク&リオス「なんで……!?!?」

「その方が…… おもしろいじゃん。主にうちが」

ルーク&リオス「駄目だ、この会長……。早く何とかしないと……」

とまあ、面白そうな事にかけては、一切の妥協を許さないなど偶にルーク達の悩みの種となる事もあるが、基本的には優秀であり、生徒会の運営も滞りなく順調なので生徒からの不満などはほとんどない。

「ま、後三年なんだし、頑張ってしっかり生き残りなさい。ほら、卵焼き上げるから」

「むう…… なんだか納得いかない……。はむ……」

どこか何気ない動作で、箸で自分の弁当の卵焼きを掴み、ルークに差し出すティアナ。そして、こちらも当然のようにその卵焼きを貰う。

俗にいう、あぐんで食べさせてもらっているようにも見える。

ていうか、もろにそれだった。

「そいう何気ない行動にあ奴らは反応するんちゃうか？」

ルーク&ティアナ「???」

「はあ、これやで………」

はやてはため息をついてしまう。このグループ内では、無意識下でこついったイチャイチャシーンが生産されてしまう。FFF団の活

動が活発化するのも仕方のない事だろう。

「あ、ルーク。そのシューマイ頂戴」

「はいはい、ほい」

「ありがと……はむ……」

今度は、フェイトがルークにシューマイを食べさせてもらっている。ルークに食べさせてもらってことで、フェイトの機嫌は上々である。基本的に、フェイトはティアナとだけはルークを取り合う事はしない。昔から一緒に過ごしていたからなのかは不明だが、この三人の間で修羅場が起こった事は一度たりともないのだ。まあ、偶にむすつとされる事はあるのはご愛敬であろう。

そして、そのダダ甘の光景から目を逸らす為に、視線を反対側に向けて……

「はい、リオス君。あゝん……」

「あ、あゝん………」

こっちはこっちで、リオスがなのはにあゝんをしてもらっていた。

「うちに安息の地はないんか………」

右を見ても、左を見ても、イチャイチャイチャ……。はやてがげんなりとしても仕方がない事だろう。付き合いが長いのでこの甘い空間に砂糖を吐く事は無くなったが、やはり精神衛生上よろしくはないだろう。

そうして、なんやかんやお昼の弁当を消費していくルーク達。まったりとしていて、時間の流れがゆっくりにも思える昼休み。ルーク達は普段からこうやって昼を過ごしているのだ。

そんな時、ルーク達に話しかける人物が一人。中世的な顔立ちで、綺麗な黒髪の青年である。ルークよりもずっと身長が高く、肉付きも悪くない。

「相変わらず、仲の良い連中だな」

「あ、高坂先輩。こんちわっす」

「キャプテン、こんにちは」

「こんにちわ、高坂先輩」

ルークとリオス、そしてティアナはその先輩、高坂昭人にすぐにあいさつをする。先輩だからという理由もあるが、それだけではない。リオスが口にした『キャプテン』という単語に注目して頂きたい。そう、彼はルーク達が所属している野球部のキャプテンであり、部長なのだ。

「あ、昭人君だ。どうしたの？　こんなところで、珍しいね？」

なのはが親しげに昭人にそう尋ねる。フェイト達と昭人のクラスは一緒、つまりは昭人も聖祥高校の三年生というわけだ。

「ああ、少しルーク達に伝言をな」

「伝言ですか……？」

昭人がルーク達を探して屋上まで来たのは、誰かからの伝言を伝える為である。三年生の先輩に伝言をさせてしまったことに少し引け目は感じるものの、まずはその伝言の中身を聞いてみなければ始まらない。

一同は昭人が口を開くのを待つ。

「監督からの伝言だ。明日、お隣の学園である桜ヶ丘高校と練習試合をすることになった。第二土曜だからな、授業もないので朝からだ」

ルーク達「へ……？」

突然の練習試合の決定。だが、変だ。こうもいきなり練習試合が組めるものなのか？という疑問が当然湧き上がってくる。まあ、練習試合事態は願ってもない事なのだが。

「明日の試合でルーク、それとリオス。お前達二人はスタメンだ。その結果次第では、地区予選からのレギュラー入りを検討するらしい。」

ルーク&リオス「……ま、マジですか……？」

練習試合の告知、そしてレギュラー入りへのチャンス。今のルーク達の顔はかなり間抜けなモノになっているだろう。

「それって、すごいよね！！ルーク、レギュラーになれるかもしれないんだよ?!」

「リオス君も、すごいよ！！ 頑張つてね、私達明日絶対応援に行くから！！」

と、フェイトとなのはも我が事のように喜びを表す。何気に、応援に来るといふ重大イベントも発生した。

「監督も、俺も。お前達二人には期待している。励めよ」

そう、短く言つて話を終わらせると、昭人は踵を返して屋上を後にする。冷たいような感じもするが、根元はとても優しい人物である事をルーク達は知っている。

ルーク&リオス「あ、ありがとうございます、先輩！！！」

そして、すぐさま昭人に伝言を伝えてくれたことに対するお礼をしつつ、彼の後ろ姿を見送った。

昭人の実力は本物である。キャッチャーとして、その論理的且つ、精密な配球・ゲームメイク。バッティングも申し分ない。まさに野球部のブレインという存在なのだ。

その彼や、監督であるライルが期待していると言ってくれているのだ。ルーク達のテンションは嫌が応でも上がってしまう。

「リオス……………」

「うん、分かつてるよ……………」

二人は顔を見合わせ、不敵な笑みを浮かべる。どうやら、明日の試合に向けてのテンションはトップギアに入っているようだ。

明日が楽しみでならない、そんな感じである。

「そんじゃ、こっは一つ……」

「だね……思いっきり……」

そう言いつつ、二人は互いに腕を上げて……

パシンー!!

そうして、小粋な音を立てながら、勢いよく手を組み交わす。同時に同じセリフを口にする。

ルーク&リオス「やってやろうじゃん、相棒!!!!」

なんとも青春な一ページ。フェイト達も、そんな二人を見ながら笑っていた。

突然決まった練習試合ではあるが、ルーク達のテンションは最高潮だ。

試合は明日。逸る気持ちを押さえながらも、今日も午後の授業を終えた後は思いっきり部活に精を出そうと、今からやる気全壊な二人だった。

「ふうむ……あんたら、やっぱりアレやる? 正直に言うてみ? どっちが攻めなん?」

ルーク&リオス「あんたの発言で良い感じに終わりかけてたのが、

台無しだよ……！」

はやての芸人としての魂もしっかりとそのテンションに押されていた……。うん、そう思いたい。

こうして、ルーク達の一日は過ぎていくのだった。

第三話 やる気MAXな午後（後書き）

F20C「というわけで、ゲストキャラ二人目！！！夏菜先生の作品、魔法少女リリカルなのは〜ヒヨリの日記。から友情主演して頂きました、高坂昭人さんです！！！」

昭人「よろしく頼む。」

ルーク「いやあ、やっとご登場だね。ここまで長かったよね」

昭人「とは言っても、まだ三話目だかな。週一更新ならこんなものだろう」

F20C「本編ではルーク達の先輩であり、野球部のキャプテン。当然、めっちゃめっちゃうまいと……うん、ほんとゲスト出演して頂いて光栄ですよ」

ルーク「次回からは桜ヶ丘高校？と試合みたいだし、楽しみだなあ……。あれ？この学校名どっかで聞いたような……」

昭人「恐らく、またゲストキャラを呼ぶつもりなのだろう。要請もあつた事だしな」

F20C「はい。仰る通りで……。次回も友情出演のキャラクターをお招きしたいと思います。誰なのかは……まあ、乞うご期待という事で。学校名から大体の予想はつくと思いますがww」

ルーク「どうなるのか少し不安だけど、次回からの練習試合編、どうぞお楽しみに！！！！俺も昭人さんもりオス君も頑張るので！！！」

昭人「やるからには必ず勝つ。では、また来週だな。」

F20C「でわでわ」

第四話 リ、リア充のこと……！？べ、別に羨ましくなんかないんだからね！？

タイトルに意味はありませんww今回のお話にリア充の単語が多かったので、こうしました。

はいそうです、勢いですねww

今回から練習試合でございます。あの作品と若干クロスすることに……。

ついでに今回は長いです……見ればカウントが9000文字を軽くオーバーしているではありませんかw

でも、ぶち切るのも少し気が引けたのでそのまま投稿した次第です。野球話がメインとなっておりませんが、笑いもございますので、どうかお楽しみに！！

でわでわ、本編スタート！！

第四話 リ、リア充のこと……！？べ、別に羨ましくなんかないんだからね！？

「ふう……お隣の学校って言っても、チャリだと結構かった気がするなあ……………」

「片道5キロだけどね。坂道が多かったからじゃない？ それを考えたら、帰りは下りだから、楽できるよ」

「あ…………でも、ここまで来るのだけで体力持っていけたわ」

ルークとリオス、ティアナはそんな会話をしながら、指定されていた自転車の駐輪場に、自分の自転車を止めていた。

後から来るであろう、野球部の先輩たちも同じように、自転車を止めることになるのだろう。

本日は件の練習試合当日。野球部は隣の学校である桜ヶ丘高校に来ていた。本日の試合は相手側の学校のグラウンドを使うようで、ピジター戦というわけだ。

練習試合の移動の際には、バスやらなどの何らかの交通手段が手配されるのだが、今回の場合は目的地が近いということで、チャリになったのだ。電車を使えばいいのでは？ と思ったりもしたのだが、一番近い駅でもかなり距離があるらしく、却下された。

トレーニングの一環でも思ってた朝からペダルを漕いできたわけだ。

「ん…………現地集合って聞いてたけど、僕たちが一番乗りみたいだね。相手校の野球部の姿もまばらだし、結構早く着いちゃったね」

「気合い入りまくりなのバレバレって感じね。」

「やる気なしよか、万倍も増しだよ。ほら、折角早く来たんだし、体温めて空けてもらってる練習スペースでキャッチボールでもしてようぜ。」

駐輪所でいつまでも駄弁つていても仕方がない。事前に聞いていた、聖祥側の練習スペースに移動することにした三人。

ちなみに、応援に来るとか言っていたフェイト達はあとから一緒に来るようだ……車で。

少しだけ羨ましいと思ってしまったのは内緒だ。

「へ〜……桜ヶ丘って、結構きれいなんだね。初めて来たから知らなかったなあ」

「ま、俺たち基本が小学生からのエスカレーター式だしな。他の学校に入る機会もほとんどないし」

「あちらさんはあちらさんで、他校の制服着た奴が校内にいることに戸惑ってる感があるわね。ま、ここはもともと女子高だったのが二、三年前に共学になったところだしね。他校の男子が珍しいって言うのも少しくらいはあるのかもね」

リオスを皮切りに、ルークもティアナも周りを見渡し、話しながら移動する。

学校の規模からすれば、聖祥のほうが大きいのは明らかだが、桜ヶ丘の校舎も綺麗なものである。そんなに新しくはないらしいが、手入れなどが行き届いているということだろう。

「そう言えば、ライルはもう来てるのかな……」

「まだじゃないの？ 確か一回学校に顔出してからこっちに来るって言ってたし」

ルークとティアナにとってはライルは昔からの顔なじみなので、公の場以外では普通に名前で呼ぶ。

「とりあえず、この辺に荷物まとめて、少し走っておこうか。柔軟もやりたいしね」

「そうするか。よっこいせ…と…」

ルークとリオスは荷物をまとめ、練習スペースの邪魔にならない所に置いておく。ティアナもその近くに自分の荷物を置いた。

更衣室も貸してもらえるので、各々ユニフォーム、ジャージに着替えて再度合流した。

「じゃ、ちよつと一っ走りしてくる。」

「ええ。あんまし校舎側に行っちゃだめよ？ あんた方向音痴なんだから、迷子にでもならね面倒だしね」

「分かってるよ……お前は俺の母親か」

「だって、あんたって、気が付いたらすぐどこか行っちゃうでしょ？ 小学生の時の修学旅行の時だって」

「あ、あれは違っつつつの。こっちのが近道かなあ、って俺のシックスセンスが……」

「ははは……それって方向音痴の典型だよ……」

ルークとティアナの漫才じみた会話にリオスが苦笑いしながら落ちを付ける。なんだか中等部のころから、この構図が完成度を増してきているような気がする。

そんなことをしながらも、ルークとリオスは体を温めるために走ることにした。

忠告通り、あまり校舎側には近づかないようにしたが。

「……………」

グラウンドの周囲のランニングコースのような道を二人で走るルークとリオス。

走りだして数分が経ったところあたり、ルークはあることに気がついた。

「……………（そわそわ）」

「リオス……そわそわし過ぎ」

そう、隣を走るリオスのそわそわ度が本日最高値を記録していたのだ。

試合に出ることが出来るということといえば、ルークだってそわそわしているかもしれないが、リオスのそれは軽くその範囲をはみ出していた。

まあ、原因などは一つくらいしか考えなれないのだが……………

「なのはさんの応援の下での試合だもんなあ？ そりゃあ気合も入るよなあ？」

「う……………／／／／／／／／／／」

どうやら図星のようだ。

いつもなら慌てて否定してくるのだが、今日は珍しいことにそれがない。おそらく、そんな余裕もないのだろう。

「ど、どうしよう……………。もし、フアンブルとかフィルダースチョイスなんかしたら…………。ものすごくカッコ悪いし…………。それに僕は、ルークみたいなバッティングは出来ないし…………。守りでしっかりできないと、いいとこ見せられないし…………。」

なんともまあ、心配性なりオスらしいと言えはらしい考えだ。少し、ネガティブな方向へ行き過ぎなことは確かだが。

ちなみに、フアンブルとは打球を取り損ねること、所謂お手玉というやつだ。

フィルダースチョイス（FC）は、ランナーがいる状況下で打球を捕った野手が、ランナーをアウトにするため進塁先に送球するも、ランナーがセーフになってしまい、塁上のランナー全員が生き残ってしまうプレー。

簡単に言つと、『結局一つのアウトも取れないわ、ランナーは増えるわ、良いことなしだよ、こん畜生！！』みたいな感じのプレーだ。

「リオスがフアンブルつて…………それこそ心配することないと思うけどなあ。それに、リオスは送球の見極めも確かだし、FCなんかもほとんどないじゃん。」

「で、でも緊張して、もしもってことも……………」

「いやいや…………生まれ初めての試合じゃないんだからさ…………。それになのはさんならエラーしたくらいでリオスにがっかりしたりはしないよ。」

本当に心配性なりオスである。まあ、それだけ普段から周囲に気を配っているということでもあるのだろうが。

「そ、そうだよね…………。ごめん、変なこと言っちゃって……………」

「いいて、いいて。」

まあ、ルーク自身も応援に来るであろうフェイトにはカッコ悪いところは見せたくないという気持ちはある。

そこは男の子、プライドというものがあるのだ。

そして、しばらくそんな感じの話をしながらランニングを続けているときだった。何やら少し口論しているような会話が二人の耳に入ってきたのは。

「もう！ 今日とは軽音部で一日練習しましょうって、一昨日からずつと言ってたんですよ？ それなのに英樹さんは……………」

「梓…………すまないと思ってる。でも、これも人助けなんだ。出るのは途中からでいいて言われてるから……………」

「むう……………」

何やら、男女の組み合わせでの小規模な口論がルークたちの20メ

ートル先で繰り広げられている。男の子のほうは身長も高め、しかもテライケメンだ。明らかにリア充っぽい感じである。

女の子のほうは身長は150?台で、綺麗な黒髪をツインテールにしているかわいらしい感じの子だった。はやてが居たなら『あれはレベルが高いで……桜ヶ丘も侮れへんなあ』と言いそうである。

「なんか揉めてるっぽいね」

「だな……。なんとなく前に進みづらい状況に出くわしてしまった……」

ルークたちはなんとなく体が動いてしまい、気がつけば樹の陰に隠れる形で二人の様子を観察してしまっていた。

というか、この状況で何も見ていないかのようにスルーするのは難しい。

「本当にスマン！ この埋め合わせは今度必ずする、おまけに梓の行きたいところにも連れて行ってやる。これでどうだ？」

「……！ それって……もしかして、デートってことですか……？」

梓と呼ばれた女の子は、怒っていた状態から少しだけ機嫌が直ったのか、期待した目を英樹というらしいイケメンに向けながら尋ねる。どうやら、会話からして二人は付き合っているようだ。

「ああ、ええと、それは……」

「………違うんですか？」（少しむっとした顔）

「い、いや……！ そうだ、デートだ……！ お前と俺の……」

一瞬、不機嫌ゾーンに再度踏み出しかけた梓を、慌てた様子で準備ゾーンに押し留めた英樹。なんとなくだが、この二人の力関係が少しだけ見えたような気がした。

「そうですか……。デ、デート……。ですか……。／／／／／／」

「ああ……。どうだ？　それで今日のことは勘弁してくれないか？」

「……。わ、分かりました……。でも、今日の試合は私も見に行きますから。カッコいいところも見せてくださいね？」

「ああ、任せておけ。ありがとな、梓」

てな感じで、どうやら丸く収まったようだ。二人は先ほどまでのプチ口論など感じさせない雰囲気になった。なんというか、そう、こそばゆい感じだ。

「良いなあ……。僕もあんな風に、なのはさんと……。デートの約束とかができたら……」

「こ、心の声が口に出てるぞリオス……」

その様子を見ながら、リオスが羨ましい感全開でそう呟いていた。まあ、あんなやり取りを見せられてしまえば、無理もないだろうが。

「（デート……。ねえ……。）」

悩み多き主人公、ルークもリオスの様子に苦笑しつつも、頭の中で

はもし自分が女の子とデートをしているなら……とかを想像してしまっ……。

仲睦まじい男女。充実した時間。繋いだ手から感じる事が出来る相手の体温。

ルークが想像したデート、そしてその相手は……どういわけか姉のフェイトだった。

「（な、なんでこんなところでねーさんが出てくるんだよ！！！！？ ああやばいな俺……。もしかして疲れてんのかな？ それとも煩惱が……？）」

自分自身のことが分からなくなりそうになってしまいうルーク。なんというか、変な感じに繊細な奴である。

と、そんな感じで二人して悶々としているルークとリオス。その時の二人は自分の頭の中のことで精一杯だったため、外界の情報をほとんど処理できていなかった。

故に、英樹と梓がすぐそこにいて、怪訝そうな顔をしていることに気がつくことが出来なかったのだ。

「あのお……？ あなた方は……？」

ルーク&リオス「え？」

梓が少し苦笑いしながらそう尋ねてくる。どうやら、この女の子に對しての二人の第一印象は『おかしな二人組』に準ずるものになってしまった瞬間でもあった。

「ん？ そのユニフォーム……もしかして聖祥の……？」

「ああ、えつと…………その…………」

「し、失礼しましたー！ー！ー！！！！！！」

英樹が二人の格好を見ピンと来た様子でそう口にする。

今までの自分たちの姿を見られてしまったことに顔から火が出るほど恥ずかしくなってきたルークとリオスはその場からダッシュで逃げた。戦略的撤退だ。

「…………？ 変な二人だな？」

「あははは…………もしかしたら今日の試合のメンバーかもしれませんね」

英樹と梓は走り去っていく二人を見ながら、そう言い合って苦笑いを浮かべた。

「よおし、そんじゃメンバー発表するぞー！！ 集まれ野郎ども」

ルークとリオスが恥ずかしい思いをして、ダッシュで退散してから少しして。野球部は全員揃い、少しの時間全体練習をした後、試合に出る者はベンチ入りし、その他は応援ゾーンに集まった。無論、ルークとリオスはベンチに呼ばれた。

時間は試合開始間近。野球部監督のライルが部員を集めて、本日の

練習試合のメンバー発表を開始する。

「一番、センター、マサ！！ 一番の仕事、しっかりな」

「はい！！」

一番打者は二年生の先輩である。ライルは基本的に部員のことは名前で呼ぶ。まあ、今呼ばれた先輩の呼び方はニッケネームだが。

「二番、セカンド、ヨシト！ バントの機会も多いかもしれんからな、お前が頼りだ」

「はい！！」

順々に名前が読み上げられていく中、ルークとりオスは少しばかり緊張していた。周りは2、3年生ばかりなので無理もないだろう。

「三番、サード、ルーク！ 本当はお前を一番にやってもよかったんだけどな、こっちのほうが打点つきそうで面白そうだろう？」

「は、はい！！」

7番当たりかと思っていたルークにとっては意外な打順だった。まさかクリーンナップに回されるとは思ってもみなかったのだ。

しかも、三番だ。三番はパワーよりも打率が求められる。加えて、確実に初回に打順が回ってくるため、一番、二番がランナーに出ていれば、確実にホームに返すか、進塁させなければならないし、ランナーがいない場合は自分がチャンスメイクをして四番に繋げなければならぬのだ。

先制の確率を左右する役目であり、チーム内でも優秀な選手に任さ

れる打順である。

打率に関しては優秀なルークだ、ライルの言うとおり一番につかせても面白いが、三番に抜擢されたのは、ルークを試すという意味合いもあるのだろう。

ルークの打順発表に続いて、四番は捕手であり、キャプテンの召人となった。そこからしばらくは先輩の名前が呼ばれていく。

「八番、シヨート、リオス！ 下位打線だが、上位打線に繋げることを意識しろ。守りの時も期待してるぜ」

「はい！！」

守備の得意なリオスは八番に。守備に関しては三年生にも引けを取らないリオスだ。そのあたりを考慮しての配置だろう。

もちろん、後々のことを考えれば、打つほうもしっかりと鍛える必要もあるが。

そして、その後、九番のピッチャーの先輩の名前が読み上げられメジャー発表は終わりとなる。ルークたち一年が試合に出ることに、異を唱える者はいない。実力主義とはこういうものだからだ。

「今日は一年坊主を交えての試合だ。まあ、こいつらのテストも兼ねてる試合でもあるんだがな」

試合前にプレッシャーをかけないでくれと言いたくなってしまうルークとリオスである。

「だがな、駄目だと感じた時は即変える。ベンチに入ってる奴らも

いつでも出れるように準備しとけよ。誰にだってチャンスはあるんだからな!!」

全員「はい！！！！！！」

「よし、あ、いい返事だ!!
んじゃ、そろそろ開戦と行こうか。
ああ、そうそう……」

準備が出来たことを主審に伝えるために、ライルは立ち上がりながら、意味深な笑みを浮かべながら言った。

「桜ヶ丘は元は女子高だ。言うことで、必然的に女子が多い。となれば、当然出会いも多いわけだ。するとどうなる？　相手校の野球部は……かなりの確率で彼女持ちだと予想できるよな？」

いきなり何を言い出すかと思えば、とルークは思った。見れば隣のリオスは苦笑い、キャプテンの昭人はやれやれといった様子である。

だが、実際ライルの言うことは正しいようで、相手校の応援ゾーンにはかなりのギャラリー（８割が女生徒）が集まっているのだ。

その事実を確認した野球部メンバー（ルーク達を除く）達。その眼に、何かが宿った。

「お前ら！！！！ この試合、絶対勝つぞ！！！！ リア充が世界の中心でないことを、この試合を以って証明してやるのだ！！！！」

ooooooooooooooooooooooooooooo

一人の野球部員がそう高らかに宣言すると、それは一瞬で他のメン

バーにまで伝播した。

それは羨望、妬み、ちょっとした敗北感が生み出した結束だった。

「……………やれやれ……………アホ共め……………」

昭人はやれやれといった様子で指で目頭を押さえた。ルークとリオスはただただ苦笑いをするしかなかった。

「プレイボール!!!!!!」

主審のプレイボールの声。この瞬間、試合が始まったことになる。ちなみに、攻撃順は聖祥が先攻だ。

本当は後攻の方がよかったのだが、じゃんけんに負けてしまつては仕方がない。

現在、一番のマサ先輩が左のバッターボックスにて、バットを構えている。

ネクストバッターズサークルにはヨシト先輩がスタンバツており、ルークもすぐに出番なので、ヘルメットを頭に被り準備を終えていた。

「相手のピッチャー、二年生みたいだね。」

「ああ、三年生のピッチャーが居ないのかな？ それともあの人がエースなのか……………」

ルークとリオスは桜ヶ丘のメンバー表を見ながらそんな話をしていた。だが、妙なことはこれだけではなかった。メンバー表をよく見れば、おかしなことに三年生の名前がほとんどないのだ。

試合に出ている三年生はキャッチャーとセンターだけである。控えの投手もいないようだし、なにより総勢30名くらいのチームであるはずなのだが、ベンチには15名ほどしか選手が居ない。

「舐められてる……ってわけじゃないよね？」

「多分……。だってこの人数の減り方はおかしいよ。なにかあったのかな……？」

どこか不気味なこの練習試合。相手チームもそのことは重々承知しているのか、どこか様子が変である。

キーン！！！

「お、先頭出た！！」

と、そんな話を話しているうちに、こちら側の先頭打者がシングルヒットを放った。これでノーアウト一塁。次は二番のヨシト先輩である。

「んじゃ、俺行くな。」

「うん、しっかりね」

ルークは手短かにリオスにそう言うと、ネクストサークルに入った。その瞬間、背後から元気な声が聞こえた。

『あ！ あれルーク君だよ！！　すごい、今日はスタメンで三番なんだね！』

『いやあ、フェイトちゃん、お姉ちゃんとしては鼻が高いんとちゃうか？　三番言ったら、クリーンナップやで？』

『う、うん！！　ルーク、ほんとに今日の試合はレギュラーなんだあ……………今日は一杯褒めてあげないと……………』

どこかで聞いたような声に、ルークは半身だけ後ろを振り返ると、そこには案の定なのはにやて、そしてフェイトが応援に来ていた。しかも、彼女たちだけでなくルークのクラスに連中の姿もちらほら見える。

フェイトが阪　タイガーズのハッピとメガホンを持っていなくて、少しホツとしたルークだった。

「みんな見に来たんだなあ……………。ちよっとプレッシャーかも……………」

と、言いながらも早く打ちたくて堪らない様子のルーク。

その間に、二番のヨシト先輩がライルのサイン通りにバントを決め、ランナーを二塁に進めていた。危なげないバントが出来るあたり、流石というべきか。

これで、状況は一死二塁、スコアリングポジションにランナーが進んだ。一回からチャンス到来である。

「うつし！！　行ってみようか」

そうやって自分に気合を入れながら、バッターボックスに向かうルーク。

すると、その瞬間ベンチから……

「ルーク……！！ 絶対、返せよ……！！ 非リア充の底力を見せてやれ……！！」

「お前のバッティングで幸せ過多な奴らに鉄槌を……！！」

「あはは……先輩方ってば……」

なんとも本能むき出しな声援？に笑うしかないルーク。だが、その声援も一瞬で別のものと変わってしまうのだ、応援席にいるお姉さんが原因で……

『ルーク……！！ 頑張れ……！！ お姉ちゃんたちも応援してるよお』

フェイトによる声援。まあ、これはいい。逆に力にもなることだが、人間の一言で状況が一変してしまうことが世の中にはあるのだ。

「そう言えば……あいつもリア充だった……！！！！？」

「ちくしょう……ハラOWNさんの応援を独占できるなんてルーク……裏切り者め……」

一気に孤立せざるを得なくなったルークであつた。

ともかく、打者としての仕事をせねばなるまい。ルークは駆け足でバッターボックスに向かう。

その途中で、バントに成功し、ベンチに帰る途中のヨシト先輩がルークに耳打ちをする。

「球種はほんとコストレートとシュート、カーブだ。ストレートはあんまり速くないけど、カーブが少し厄介かもな。変化が大きめだった」

「了解です」

一番の打席と自分の打席を合わせて得た、相手ピッチャーの球種などを手早く聞き、ルークは右のバッターボックスに入る。その際にベンチの方を振り返り、ライルのサインを確認する。

「（……………好きに打て……………ね……………。よぉ〜し……………。マサ先輩をホームに返して、俺も二塁まで行ければ100点かな……………」

ライルのサインは出すだけで、特には意味のないものだった。つまりは『好きに打て』。チャンス一回分をルークに任せたことになる。試されている、その感覚が肌に伝わってきた。

「よろしくお願いします!!」

審判に挨拶してから、ボックス内でバットを2、3回左右に振り、いつもどおりに構える。余計な力は抜く。変な場所に力みがあるとフォームが崩れるのだ。

「プレイ！」

主審の声と同時に、ゲームが再開される。ルークは相手の守備を見る。

「（外野が少し前に出てる……………多分、俺にパワーは無いって思われてるんだろうな。ま、当たってるけど……………。）」

外野が少し前に出ている守備配置。つまりはルークには外野の頭を越すようなあたりは無いという評価がなされているようだ。一年生ということもあって、身長もあまりないのでそう思われても不思議でもないが。

「（だったら……………空き気味のライトとセンター間を狙おう。カーブにヤマ張って、流していこう……………）」

相手のカーブは変化は大きいが、球速自体は遅い。おそらく相手側もルークのパワーでは遅いカーブをはじき返して、外野を越すことはできないと踏んで、カーブを投げてくるだろう。ルークはそう予想した。

そして、相手ピッチャーがセットポジションからルークへの第一球を投げた。

スパアン！！

「ボール！」

念のための警戒なのか、一球外してきた。体の大きさだけを見れば大したことはないが、三番という打順に警戒したのだろう。

「（１２０キロ後半つてとこかな……………、確かにそんなに早くはないな。やっぱり、エースは他にいるんだ）」

その一球で、このピッチャーが敵チームのエースではないと確信したルーク。狙い球に変更はない、カーブを狙って流す、だ。

そして、第二球。様子見はもうやめたようだ。ピッチャーは一回首を振り、再度セットポジションから第二球を投げた。

「（来た！ カーブ！！）」

先ほどのストレートに比べて格段に遅い球速、そして球の回転の仕方。ルークの待っていたカーブを投げてきた。

コースからして、外角。狙いはいいが、高さが駄目だ。少し高めに球が浮いている。

「（頂きい！！！！）」

ルークは左足を少し上げ、その踏み込み足を元あった場所よりも内側に着かせ、インステップする。外角だが、バットは十分に届く。狙うは開き気味の右中間。

バットとボールは、磁力で引き合うかのように接近しつつ……

キイイイイイン！！！！！！

甲高い音を上げて、インパクトした。

おおおおおお！！！！

ベンチや、応援ゾーンからそんな声が聞こえるが、ルークの耳には入ってこない。打ったと同時にルークは一塁に向かって走り出す。打球は、ルークの狙い通りに右中間へ。そのままライトとセンターの間を抜けて、長打コースになった。

センターが捕球し、中継のセカンドにボールを戻すが、すでに遅い。

「よっしゃ！！ 先制！！！」

マサ先輩は自慢の俊足を生かして、スライディングをするまでもなく、ホームインしていた。ルークもその間に二塁まで進んでいた。打つ前にルークが考えていた、100点の展開である。

「ナイバッチー！！！！ リア充だけど、ナイバッチー！！！」

「普通に褒めてくれないのかなあ……………」

ベンチからの風は未だに向かい風である。でもルークは負けません、男の子ですから。

『やったあ！！ なのは、なのは！！ ルークが打ったよ！？ 点入れたよ?!』

『にやはは………… うん、見てたよ…………。(フェイトちゃんにテンションが最高潮だ…………)』

見れば、応援ゾーンのフェイトや、クラスのメンバーはすでにお祭り騒ぎである(大半がフェイトだが)。

「(よし、とにかくまずは一点だ。試合はまだ始まったばかりだし、またチャンス回ってくるかなあ…………)」

ルークは塁上でそんなことを考えながら、気を引き締める。今は自分がランナーである。四番の昭人の結果次第では追加点になるのだから。

一回表時点、ルークのスコア：一安打、一打点

練習試合は、始まったばかりであった。

第四話 リ、リア充のこと……！？べ、別に羨ましくなんかないんだからね！？

F20C「というわけで、鮮血の刻印さんからの申し出を受けまして、今回はいおん！Fragmentとのコラボが実現してしまいましたww」

ルーク「あの英樹つと人と梓って子がその作品の登場人物なんだよね？」

F20C「そうそう、梓は原作のキャラだけどねwプチクロスさせてみたんだよ。不自然になってなきやいいけど……」

ルーク「そのあたりは俺からはなんとも……。まあ、二人の本格的な出番は次回からだと思うし、次に期待しようよ。」

F20C「このちょうしだと、次回も長くなるかな……。とにかく、作者は頑張るだけですわ」

ルーク「というわけで、情けない作者ですが、次回もお楽しみに！」

F20C「ああ……。今回の野球の試合のシーン……。変とかじゃないかなあ……。もしもどこがおかしかったら……。うう」

ルーク「意外とナイーブなんだな作者って……」

F20C「ガラスのハートなんだよ！」

第五話 彼女持ちVS非彼女持ち 負けられない戦いがそこにある (前書き)

申し訳ありません!!!

今回、物凄く長くなってしまいました……。軽く一万文字をオーバーですよ……

こういうときは、分割するべきなのでしょうが……。少し悩んだのですが、一気に出すことにいたしました……

そのせいで、読みにくい!!!という方がいらっしゃいましたら、お申し付けください。編集したうえで、もう一度二分割でアップしますので。

テンション上げてキーボードをたたいた結果がこの文字数……。ちょっと反省します。

さて、本日で練習試合は終了ですね。いったいどんな試合運びになるのか……。どうぞお楽しみください!!!

第五話 彼女持ちVS非彼女持ち ―負けられない戦いがそこにある―

試合は進んで、回は五回表まで進んでいた。

現在のスコアは3対0でルーク達聖祥がリードしている。

ルークは一回表のタイムリーに続き、三回にもランナー1人を置いた状態で、又してもタイムリーツーベースを放ち1点を追加させていた。

片や守りの回に入れば、リオスのフィールディングが冴え渡った。試合前はあれだけガチガチだったにもかかわらず、グラウンドでの立ち振る舞いには余裕すら見受けられた。

ルークとリオスによる三遊間コンビは連携においてもなかなかのもので、リオスが難しい打球を体勢を崩しながらもキャッチし、即座にボールをルークにグラブトス。そして、ルークが一塁に送球しアウト。といったような素晴らしいプレーも飛び出した。

一年生コンビの活躍に応援に来ていたクラス連中やフェイト、なのは、はやても大興奮状態である。

が、試合は突如としてその流れを変えることになる。

桜ヶ丘側の一人の助っ人の存在によって……………

「おいおい、ルークにリオス。相手校のメンバーになんで三年生が全然居ないのか分かったぜ！」

「え、マジですか？ 一体どうして……………」

「やっぱり怪我とかなんでしょうか………?」

ルークはこの回に打順が回ってくるかもしれないので、その準備をしていたのが、二年の先輩から試合前から疑問だった事については気になっていたので、そばに居たりオスと共に話の詳細を聞くことにした。

「なんでも、三年のレギュラー陣がさあ、この前あったらしい中間試験で赤点だらけらしいぜ? そんで、そのペナルティとして一週間の部活動禁止処置喰らったんだとさ」

「あらら………。てことは、今日の試合で向こうに三年が全然居ないのは………」

「ああ、練習試合だろうが部活動だからな。参加不可ってことらしい」

「あはは………僕は試験頑張つてて良かったですね。」

相手のチームの赤点騒動に少なからずの同情と、自分たちのテスト期間中の努力にホッとしながら、ルークたちは言い合った。

まあ、基本的に学生は学業優先なので、今回の事は仕方がないと言えはそうだろう。

対戦相手の選手もいつものレギュラー陣が居ないことに戸惑っていたであろうことは一回表から分かっていたことだ。

と、敵の内情も判明したところで、リオスがグラウンドに散らばった桜ヶ丘のチームメンバーの変化に気がついた。

「……あれ？ ルーク、見て見て。なんだか向こうのピッチャー交代みたいだよ？ さっきまで投げてた人、ベンチに引っ込んでる」

「え？ ん……あ、ほんとだ。あれ……？ ていうか、今マウンドに上がってる人……どっかで見たことあるような……」

ルークもリオスに言われて、マウンドの方に目を向ける。すると、そこには先ほど投げていたピッチャーよりも体躯もよく、見た目からして速球派な投手が立っていたのだ。

しかも、その交代ピッチャー、どこかで見たような記憶があった。

そして、そのどこかで見た感の正体はすぐに明らかになった。桜高側の応援席からの声援によって。

「英樹さ……ん……！！！！ 頑張ってください……い……！！！！」

応援ゾーンから黒髪を二条に結んだ、ちびかわいい女の子がマウンドに立っている謎の助っ人に応援のエールを送っている。

ルークとリオスはその女の子を見て、助っ人の男性の事を思い出すことになった。

「ああ……！ あの時バカカップルか……！！」

「る、ルーク……その表現はどうかと思うよ？ 否定はしないけどさ」

「ん……流石にバカカップルはもう古いか………んじゃ、なんて名付けよう………G I Cでどうだ？」
グレート・イチヤイチヤ・カップル

「いやいや、呼称の仕方の今昔じゃないから。ていうか、そのG T

「Oテイストなネーミングはいまいちだよ」

謎の助っ人達の事についてあれこれ二人で話している内に、五回表が開始された。指定された投球練習を終え、謎の助っ人・英樹は大きく振るかぶり、第一球を投げた。

スパアアアアン!!!

ストライク!!

第一球が投げられた瞬間、周囲は静まり返った。

「速っ……」

応援席から、そんな小さな声が聞こえてきた。そして、その声を皮切りに英樹の投げた速球に場内のざわざわは最高潮に達した。英樹の投げたストレートの速さに騒然と言う感じた。

「ねえ、ルーク? 今の見た?」

「ああ、見た」

「あれ、何キロくらい出てるかな?」

「スピードガンで測ってないからよくわかんないけど……。140は出てるかも……」

ルークとリオスも呆けた様子で英樹の第一球について啞然としていた。

謎の助っ人の投げたストレートはとんでもなく速かったのだ。

「ふう……。まあ、こんなもんだな」

第一球を投げ、英樹はまずまずといった様子でキャッチャーから投げ返されたボールを受け取る。

調子は上々。球も走っているし、制球力も特に問題ない。

「（昨日、いきなり助っ人として試合に出てくれて言われた時はどうしようかと思っただけど、まあこうやって目一杯体を動かすのって、やっぱり楽しいんだよなあ）」

英樹は第二球を投げるモーションに入りながらそんなことを考えていた。

視界の端には梓の姿が見え、彼女の応援の声が耳に入ってくる。

「（何より、梓が見てるしな。否が応でも、気合が入るってもんさ！……）」

将来の嫁……。もとい、ついこの間、紆余曲折を経て付き合うことになった女の子が見ている。それだけで英樹のエンジンの回転数は跳ね上がる。

スパアアアアアン！！！！

第二球も景気の良い音を立てて、キャッチャーのミットに収まる。念のためにキャッチャーを務めている同級生とは昨日からの短い時

間ではあったが投球練習をしておいた甲斐があった。
ぶつつけ本番だったら、捕球すらままならなかったかもしれないからだ。

「（三球、ストレート勝負ね。了解了解）」

キャッチャーからのサインを確認し、首を縦に振る。力勝負は臨むところ、英樹は全力投球でボールを投げる。

スパアアアアン！！

ストイライク！！ バッターアウト！！！！

おおおおおお！！！！！！

一人目の打者を三球三振に抑えると、桜高側から歓声上がる。それほどまでに英樹のまっすぐには力が籠っていたのだ。

「英樹さん！！！！ カッコいいですー！！！！」

完成に交わる感じで梓の声が聞こえた。もはや彼女のその褒め言葉だけで何十回でも投げていられるような、そんな気さえしてくる。こういうちよつとしたこと一つで、自分は梓に心底惚れているんだと、英樹は改めてそのことを認める。

「さて、あと二人。景気よく打ち取って行こうか！」

英樹はそう呟くと、再びキャッチャーからのサインを確認し、投球モーションに入るのだった……………。

結局、五回表は聖祥学園は三者三振に終わった。

1番のマサ先輩と2番のヨシト先輩は少し粘ったのだが、球速にまだ体が追い付かないらしく、三振に終わった。

五回の裏の守備は相手校の4、5、6番のバッターを危なげなく打ち取り、チェンジとなったが、謎の助っ人、英樹は投手と交代したため打順は9番。

何かあるとするなら、彼に打順が回る次の六回裏だろうとルークは考えていた。

「さてと……………あのやたらめったら速い球をどう攻略するかなあ……………」

六回表、打席には本日三打席目となるルークの姿。六回のトップバッターとしてマウンドに立つ英樹の姿を見ながらそう呟いた。

ライルからの指示やアドバイスは一切無かった。この試合での打席の勝負はルーク自身の力でなんとか切り抜けてみるということらしい。

「(さっきの五回の攻撃。先輩たちの打席で球の大体のイメージは出来た。問題はそのイメージを実際の打席で役立てられるかってことだな……………。変化球を投げてこないのが少し気になるけど、投げないなら投げないで、じっくりストレートの攻略に専念させてもらおう)」

そう心の中で考え、ルークはバットを構え。英樹の投球を待つのだ。
った。

「あれ？ あの人……よく見たらさっきの変な二人組の一人……。
やっぱりあっちの学校の選手だったんだ……………」

応援席から英樹の活躍を見ていた梓はバッターボックスに立つ人物
が先程中庭あたりで見かけた妙な二人の片割れであることに気がつ
いた。

ユニフォームを着ていることから聖祥の野球部員であろうことは分
かっていたが、まさかレギュラーだとは思ってもみなかった梓。
世の中、妙な偶然があつたものだと思った。

そして、その思考に至っていたのは梓だけではない。梓の旦那もま
た同じことを考えていた。

「（へえ。レギュラーメンバーだったんだ……。確か、メンバー
表では……三番是一年だったな。上級生を押しつけてのレギュラー
入りで大活躍な選手。これはちょっと面白い勝負になりそうだ……
……………」

と、ルークが一年生であることを今日の聖祥側のメンバー表で思い
出した英樹。（試合前に対戦相手校同士はお互いのメンバー表を交
換します）。

一年ながらにレギュラー入りしている、目の前のバッターに英樹は
少なからず期待をしていた。

「ルークウウ！！！！ その助っ人もリア充だ！！！！ お前もほ

ぼりア充だが、彼女はいないからな！！！ 俺たち非彼女持ちの底力を見せる！！！」

「速球がなんだ！！！！ 男は早いだけだと嫌われるんだ！！！！ どつちも満足できてこそ、一人前なんだ！！！！ それを忘れるな！！！！」

「先輩方、その熱いパッションをこの試合に向けましょうよ！！！！！！？ ていうか、下ネタは危ないですから！！！！」

・
・
・

「ふむ……突っ込みもなかなか………これはさらに楽しみだ」

英樹はルークとベンチの上級生たちとの掛け合いを見て感心しながらそう呟いたのだった。

「（よっし、来い！！）」

ルークはバットを構えながら英樹の第一球に備える。

英樹は先ほどの回と同じようにおおきく振りかぶり、力いっぱいストレートを投げた。

スパアアアアン！！！！

ストライク！！

一球目、ルークは英樹の速球をジッと観察するため、一球様子を見

る。

「（あんまり伸びてる感じはしない……。どっちかっていうと、軽い感じの球なのか？）」

一球目をじっくり見て、頭の中のイメージと実際の球を比較し、イメージを修正する。

イメージと実際はかなり近いものだったが、手元での伸びは感じない。

ただ、速さはあるため慣れるのには時間がかかるかもしれない買った。

「（次は振ってく……）」

二球目。英樹はキャッチャーからのサインを受け、再び振りかぶり先ほどと同じようにストレートで勝負してきた。

チッ！！！！

ファール！！

二球目はバットの少し掠めた。バットによって軌道を変えられたボールはバックネットに当たった。

「（ボール半分のさらに半分くらい下だったかな……？）」

ルークはバットの掠った部分を見ながら、先程のバッティングの身を再確認。ボールのイメージを確実なものにし、次に備える。その表情は真剣そのものだった。

そして、そんなルークの真剣な表情に目を輝かせているお姉さんがここに一人。

「ふわぁ……あんなに真剣なルークの顔……カッコいいなぁ……」

「フェイトちゃん……目が になってるよ？」

「あかんでなのはちゃん。今のフェイトちゃん、完璧にルークの事しか目に入っていないから」

「やっぱり……」

なのはとはやてはフェイトの緩みきつた表情に苦笑しながらも試合の展開を見守っていた。フェイトはルークのワンプレイ、ワンプレイに大興奮の様子だ。

「寝てる時の顔も可愛いけど、野球してる時のカッコいい顔もやっぱり良いかも……」

はやて&なのは「ダメだこのフェイトちゃん……早くなんとかしないと……」

なのは達の気苦労もまた、試合とともにその勢いを上げていくのだった……

「（うーん……やっぱり、目が慣れるまで時間かかるなぁ……。あともう何球が見たいとこだけど、粘った拳句に変化球でストンって

「というのは勘弁だなあ」

今のところ、ルークはストレートの事しか攻略するつもりがない。というより、相手がまっすぐ以外を投げてこないのだからそうする他ないのだ。

「（兎に角、この速い球を捉えないと、出塁なんて無理だし。打つてくしかないでしょ）」

ルークはそう考えると、バットを手に第三球目に備える。カウントはツーナッシング（2ストライク、0ボール）。相手バッテリーからすれば、一球遊んでもよし、三球勝負を仕掛けてもいい場面だ。

そして、英樹からの三球目。相手バッテリーは三球勝負に出てきた。相変わらずの豪速球がルークのストライクゾーンをめがけて勢いよく走る。

「（内角……！！！！）」

英樹のボールは内角をえぐり込むように狙っている。かなりきわどいコースだが、ぎりぎりストライクゾーンを掠めている。ルークは迷うことなく振りに行った。

キィィィン！！！！

ルークは体を開き気味にして内角の球を引っ張る形で打った。三球目にしてルークのバットが英樹のボールを捉えたのだ。しかし

パシィィン！！

アウト！！

「むう……ちょっと正直に打ちすぎたかな………」

ルークの放った鋭い当たりは、ショート定位置のライナーとなり、ショートがキャッチしたことにより、ルークはアウトになってしまった。

普通に打っただけだったので、どこを狙ってとかは考えていなかった、否、そんなことを考えている余裕がなかったのだ。

「（三球目で合わせてくるとはな………」

英樹自身、こんなに早く捉えられるとは思っていなかった。少なからずショックを受けはしたが、結果を見れば英樹の勝ち。決して気に病むことではない。

「（でも、この打席で分かった。あの助っ人の弱点と攻略法。）」

アウトになったルークはベンチに駆け戻りながらそんなことを考えていた。それは決して負け惜しみでもなんでもない。

確かに見つけたのだ、あの速いストレートの攻略。いや、正確に言うとうと英樹という投手の攻略法を。

「（次の打席でリベンジだ！！）」

ルークは心の中でそうやって気合を入れベンチに戻っていったのだった。

しかし、この六回の裏。桜ヶ丘の攻撃時に流れが変わった。
相手の7番にシングルヒットを打たれた聖祥の投手。それで少しリズムを崩し始めたのか、次の8番にはフォアボールを出してしまい、一塁に歩かせてしまった。

そして、9番は謎の助っ人英樹。

ヒットに続いてフォアボールというよくない流れを作ってしまった
投手のボールは少し上ずり気味になってしまうものだ。
そして、聖祥側の投手とてそれから漏れることはない。

キイイイイイン!!!!!!!!!!

そんな甲高い音とともに、高めに浮いた球を英樹は見逃すことなくバットにジャストミートさせる。
打球はグングンと伸びていき……………

ガサガサ!!

レフト方向のフェンスの向こう側の森の茂みに消えていった。

同点スリーランホームランである。

わああああッああああ!!!!!!!!!!

桜ヶ丘サイドからは割れんばかりの歓声が上がる。英樹の活躍に梓も大興奮し、小さな体で目一杯喜びを表していた。うん、やはりかわい(r y

「同点にされちゃったね……………」

「さっきの打球はすごかったなあ……。パワーがあるとあそこまで飛ぶもんなんやなあ……………」

同点にされた聖祥学園サイドのなのはたちは純粹に先程の打球に呆気にとられていた。

「だ、大丈夫だよ。だってまだ六回だし……。あと三回も攻撃があるんだから、また勝ち越せば良いだけなんだから」

「そうやけど、相手のピッチャーさんがそれを許すかどうかで……。今んとこ、あのたまにまともに当てられたんで、ルークと昭人君くらいやろ？」

「確かに、それだけ見れば厳しい試合だね……………」

そしてその後、試合の流れはこう着状態が続いた。

フェイト達が話していた通り、試合はそう簡単には動くことは無かったのだ。

7回は両校とも打者三人でチェンジ。八回も聖祥に快音が聞こえることは無かった。上位打線は当てることが出来るのだが、如何せん当たりが悪かった。

桜ヶ丘も同じく、英樹以外の打線があまり奮わなかった。八回に英樹がシングルヒットで出塁するも、その次の打者の打った打球は見事にダブルプレーコースとなり、6 - 4 - 3（ショート セカンド ファースト）の教科書通りにダブルプレーに終わったのだ。

そして聖祥学園対桜ヶ丘高校の練習試合は3対3の同点のまま、最

終回の9回を迎えることになったのだ。

この場面で、9回表のトップバッターを務めるのが、我らがエロテック大統領、ルーク・ハラオウンであった。

「なんだか物凄く失礼な呼び方された気が……。うん、気のせいだな」

「一人で何話してるの？」

地の文に少し違和感を感じながらも、ルークはバッターボックスに向かうべくベンチを出る。

その際に、リオスがルークを呼びとめる。

「ねえ、ルーク？ あの時球、打てる自信ある？」

どうやら、この試合になるかのキーポイントである、英樹のストレートの攻略についてだった。

先程はやてたちが言っていた通り、この試合中で英樹のストレートをまともに前に飛ばせたのはルークと昭人だけなのだ。ここはルークと昭人に期待する他、試合に勝つ方法がないのだ。

「大丈夫。閃いたから」

「閃いたって、攻略法を？」

「そういうこと。んじゃ、ちょっと行ってくるな」

ルークはリオスにそう言うなり、バッターボックスに向かって走って行った。

ルークが閃いたというときは基本的になんとかなるのだが、今回に限ってはどんな攻略法なのか見当もつかないリオスだった。

「よろしくお願いします!!」

ルークは元気よく挨拶しながらバッターボックスに入る。先程まで立っていた右打席とは反対の左打席に。

「ルーク、左打ちになんかしてどうするつもりなんだろ？ 確かに、ルークは両打ちだけど……。この状況で左打席に立つメリットって……？」

「ふむ……。なるほど……。ルークはそういう攻略法を思いついたか……」

と、ルークの行動に首をかしげていたリオスの横に昭人が立ち、そう呟く。その口ぶりからして、どうやら、ルークの狙いを理解しているようだ。

「キャプテン、ルークの考えた攻略法って……？」

「まあ、見ていれば分かることだ。ここは黙ってルークのバッティングを見ていることだ」

「は、はあ……」

尋ねてみたが、そう言われてはしつこく追及するわけにもいかない。リオスは言われたとおり、左バッターボックスに立ったルークに視線を戻したのだった。

「（なるほど、両打ちってわけか……。でも、この場面で打ち方を変えて、何になるっていうんだ？）」

ルークの行動に英樹も首をかしげていたが、敵の心中など測れるはずもない。英樹に出来ることは一番良い球を以って、目の前のバッターを打ち取ることなのだから。

そして、第一球。最終回ということだが、途中出場の英樹にはまだまだスタミナが残っているため、球威が衰えることはまずない。前回のルークの打席と同じように、140キロ台をマークする速球が英樹の手から投げられた。

スパアアアアン！！！！

ストライク！！

ルークは左打席にて、タイミングを合わせているのだろう、一球目は空振った。だが、ただの空振りではなく、次のボールに繋げるために必要なことなのだ。

第二球。先ほどとは違うコースに放たれたストレート。だが、左打席にたったルークは果敢にもボールに手を出していく。

キン！！

ファール！

打球はキツイライナーとなって、一塁側のフェンスにぶつかる。

「（よっし、今の二球で完璧に測れた。次で行く……………！）」

前回の打席と合わせて、ルークは英樹のストレートを五回目にしている。速度の限界やタイミングの計測は完璧になったのだらう。

「（確かに、この人の球は速い。でも……………）」

英樹が第三球目を投げるべく、振りかぶる。ルークはここまで見ることが出来た球のイメージを頭に浮かべる。

「（この人、いつも野球をやってるわけでも、ましてやそんなに長い経験者でもない。その証拠に、投球フォームにまとまりが感じられない。上半身を頼りに投げてるんだ。だから、ボールに重さが生まれない。）」

ルークは自分の打席以外の時は、ずっと英樹の投球を見ることに専念していた。そして、見ている内に疑問を持ったのだ。英樹の投球フォームにまとまりがないことに。

英樹が変化球を投げないのも頷けることだ。投げないのではなく、単に投げられないのだ。

投げ方を知らないのかは分らないが、この目の前の助っ人はそう頻繁に野球をしているわけではない。

ルークはここまでの打席でそういう結論に達した。

「（これだけの球速が出るのは多分、身体能力が高いからだ。でも、

結局は軽いだけの球だから、確実にミートさせてやれば、力のない俺だって……！！！！」

第三球は内角気味のボール。ルークはそのボールを十分に引きつけ……

キイイイイイン！！！！！！

バットにジャストミートさせた。

打球はやや低いが、その勢いを止めることは無い。そして、そのままライトのフェンスの数センチ上をとり、フェンスの向こうに落下していった。

勝ち越しホームラン。

わあああああああ！！！！！！！！

瞬間、聖祥サイドから大歓声が上がった。ルークの放った勝ち越しホームランに応援に来ていた連中全員が沸いた。特にフェイトは最早お祭り騒ぎである。

『今日は一緒のお布団で（ry』とか、皆が正常なときに聞けば、暴動が起きそうな際どい褒美ワードを口にしまっていたのだ。

ルークは晴れ晴れとして様子でベースを一周して、ホームベースに足をつけた。

4対3。その瞬間、スコアパネルの聖祥の得点に一点が追加された。ベンチ前で待ち構えていた先輩たちに、賞賛や褒める意味が詰まったハイタッチを交わしたルークだった。

そして、結局。その一点が決勝点となった。9回裏の桜ヶ丘の攻撃を難なく抑えることが出来た聖祥学園。
最終スコア、4対3でルーク達の勝利となったのだ。

こうして、ルークとリオスのレギュラー入りをかけた練習試合は最高の形で幕を閉じたのだった。

「だああああ！！！！！！　ねーさん！！！！！！　なんで当然の如く俺のチャリの荷台に座ってるのさ！！！！？」

「ええー。だって、帰りはこうやってルークを褒めながら帰りたいんたいたもん。」

試合が終わり、グラウンド整理などの諸々の作業を終わらせたルーク達はまっすぐ帰路に就くことになった。

ルークとリオスのレギュラー入りについては、追って通達するとかで、詳しくは教えてもらえなかったが、昭人とライルの満足そうな表情を見る限り悪いことにはなりそうにない。」

ルークとリオス、ティアナは来た時同様、チャリで帰ろうとしたのだが、そこで待ち構えていたのがフェイトとなのは、そしてはやてだった。

どうやら、一緒に帰るつもりのように、フェイトはルークの自転車の荷台に乗せてとせがんできた。

「ダメだつてば……！ 交通ルールで二人乗りはNGなの……！」

「むう……これでも……？」

ムニユ……

ルークの正論に、フェイトはムスツとしながらルークの体に手を回し、彼の背中に自慢の胸を押しつけた。

「ああ……ちよつと良いかも……つてそうじゃなくて……！！！！ もつとNGだよ……！！」

「今、一瞬やけどめっちゃ気持ちよさそうな顔しよつたで、このスケベ。」

「まったく……私だつて、少しくらいはあるのに………」

ルークのお約束な反応にはやては呆れかえり、ティアナは悔しげだった。

そうそう、あと残ったリオスとなのはは……

「リオス君も、今日頑張つてたね？ とつてもカッコ良かったなあ……。」

「そ、そうですね……？ な、なのはさんにそう言ってもらえると……僕としても嬉しいっていうか……」

「今度の夏の大会も、絶対見に行くね？ それで、またリオス君のカッコいいところ見せてくれたら、私も嬉しい」

「も、もちろん！！！！ 絶対見に来てください！！！！（ヨッシャ
アアアアアアアアコラアアアアアアア！！！！！！）」

というように、超自然体でイチャついていた。

FFF団が居たら、『裏切り者に制裁を！！！！』という感じで逆さ吊りにされた揚句に、子供のころに学校の先生の事を『お母さん』と呼び間違えてしまったことをネタに弄りまぐられるところだったのであろう。

と、なのはたちがナチュラルイチャイチャ空間を形成している間に、フェイト達の方はさらにカオス度を増していく。

「むう…… ルークはお姉ちゃんの胸、嫌いになっちゃったんだ？

この前はあんなに熱心に揉みしだいてたのに……」（はやての裏声）

「……………」

「だったら、今度は胸なんかよりもっとすごいところを……………」
（はやての裏声）

「……………」

「あのお…… 一応ボケてるんやけど……………？」

はやての渾身のボケだったのだが、肝心のルークは無表情。フェイトはルークに抱きついたまま幸せそうな表情になっている。

「はあ…………… ねば良いのに……………」

「グハッ！…… ルークの、まるでウジ虫を見るような視線がうちを貫きよる……」

「はやて先輩……初めからやらなきゃいいのに……」

はやてとルークのやり取りにティアナはやれやれといったような感じのため息をついた。

その時だった、ルーク達に声をかけてくる二人組がやって来たのは

……

「あはは……なんだか随分と賑やかな一団だね」

「あれ？ あなたは……謎の助っ人さん……」

ルーク達が声のした方に視線を向けると、そこには梓を伴った英樹の姿があった。

ルークは英樹の名前を知らなかったもので、とりあえずの名前で呼んでみた。

「な、謎の助っ人って……。まあ、自己紹介もしてないし、仕方ないな。灘宮英樹。桜ヶ丘高校の三年だ。よろしくな、ルーク君に皆さん」

「あ、えと……同じく桜ヶ丘高校一年生の中野梓です。よろしくお願いします」

流石にこの緊急措置の名前は採用されることは無かった。英樹と梓は交互に自己紹介をしてきてくれた。

ルーク達も、それにお返しするかたちで自己紹介を済ませる。

「ええと……ルーク君に抱きついたらまま寝ちゃってる、その金髪の人は……？」

ルーク達が自己紹介を済ませたあと、英樹はいつの間にかルークに抱きついたまま、眠ってしまっているフェイトについての質問をしてきた。

「……恥ずかしながら……俺の姉です……」

「うわぁ……綺麗なお姉さんですね……」

ルークの回答に梓が率直な感想を告げてきた。梓も十分すぎるくらいかわいいと思うのだが、彼女から見ればフェイトが美しい部類に入るらしく、羨ましそうにそう言った。

「何言ってるんだ、確かにルークのお姉さんは美人だけど、梓も十分すぎるくらいかわいいだろう？」

「にゃ！！！？ ひ、英樹さん……いきなり何を……！！！！？」

「ここにも固有結界術師が……」

いきなり二人の世界に入ってしまった梓達にはやてはげんなりするしかなかった。

彼女に安息の地が見つかることはあるのか、少し気になるが……まあいいだろう。

閑話休題

「そうそう、ルーク君。実は聞きたいことがあったから、こうして

会いに来たんだった。」

「はあ、聞きたいこと……ですか」

話をなんとか軌道修正し、英樹の本来の用事を聞くことにした一同。
(フェイトは未だに寝ているため、不参加)
その質問はリオス達も気になっていたことだった。

「最後の打席、決勝点になったホームランだけど、どうして左で打つたんだい？」

「ああ、そのことですか。結構単純な話ですよ？」

「単純……ですか……？」

ルークの返事に梓がさらに興味深そうな表情になった。まあ、それはリオスや英樹にしても同じことが言えるのだが。

「まず一つに、英樹さんって普段から野球をしてるってわけじゃないですよね？」

「ああ、うん。俺の本分は軽音部だからな。梓も一緒なんだ」

「へえ……。 (なんで軽音部に……？って、これはどうでもいいか) 」

英樹の答えに若干の疑問を感じつつも、話を進めるルーク。深く追求すれば、藪蛇なことにもなりかねないような気がしたのだ。

「英樹さんは身体能力はずば抜けて高いんですけど、野球に慣れて

るわけではないです。だから、投球フォームが不安定なんです。上半身の力だけで投げてるみたいでしたから、確かに球は速かったですけど、ボール自体は当たればよく飛ぶ軽い球だったんです。」

「ふむふむ……。まあ、俺もうすうすそんな気はしてたんだけどね……。四番の人にも結構軽く打たれちゃったしね」

ルークの説明に英樹はなるほどといった様子で頷いていく。本人もなんとなくそんな気はしていたらしい。

「で、思い切って長打を狙ってみたんですね。左打席に立ったのは、ただ単にこのグラウンドがレフトよりもライトの方が狭かったからです。狭いライト方向に打てば、運が良ければホームランを打てる可能性もありましたしね。つまりはそんなところです」

「ああ、なるほど!!! 狭い方を狙って、パワー不足を補ったのか……。ルークが言ってた閃いたってそう言うことだったのか……」

リオスも疑問が解けたようで、少しすっきりした様子でそう言った。英樹も同じのようで、納得したような顔をしていた。

「あはは……。やっぱり、本職には勝てないなあ。でも、ルーク君との勝負はとても楽しかったあ」

「それは俺も同じですよ。あんな速い球、始めてみたんで、物凄く楽しかったです。また、機会があれば、勝負してください」

「それはもちろんよろこんで。草野球でも良いし、楽しみにしてるよ。その時は、うちの軽音部の連中も連れていくからさ。みんなで仲良く楽しもうよ」

「はい、是非。」

と、気がつけば、かなり親しげな間柄になっていた一同。スポーツを通じて生まれる新しい友情……なんとも青春である。

こうして、ルーク達の長い一日が終わりを告げた。

新しい出会いなどもあり、ルーク達にとってはただの練習試合ではなく、それ以上の意味を持つものになった……

「ふみゅ……ルゥクウ……胸だけじゃ足りないって……やん……
そんなところはダメだよ……。ああ、でもね……ルークがどうしてもって言うならお姉ちゃんは……」

「ねーさんはいろいろ自重して……！……ただでさえ、抱きつかれたまま自転車押すのって大変なんだから……！！！」

「だ、大丈夫……お姉ちゃんも初めてだけど……ルークの為に頑張るから……クゥ……」

帰り道にて、ルークに抱きついたまま眠ってしまったフェイトを荷台に乗せ、必死に自転車を押すルークの姿。

フェイトのしている夢の内容は恐ろしすぎて聞く気になれないルーク達だった……

第五話 彼女持ちVS非彼女持ち 負けられない戦いがそこにある (後書き)

F20C「本当にごめんなさい、こんなに長くなってしまって……」

ルーク「でも、一万文字超えたのって初めてじゃない？今まではどんなに多くても9000文字くらいだったのに……」

F20C「いやさ、本編同様、スクラバもご好評らしいしさ、それに恥じないようなものにしようとしたら、ご覧のあり様だよ……」

ルーク「まあ、決して悪いことではないけどさ。」

F20C「日曜日ということなので、お時間が空いたときにでも読んでいただければw次回からは、普通の文字数に戻る……かもしれないです」

ルーク「未定なのかよ……」

F20C「いやね、次回のお話も下手すればかなり長くなっちゃうかもだしね……覚悟してよねルーク？」

ルーク「……え？俺……？」

F20C「でわ、また次回。第六話 第35回円卓会議 転校生の考察について」に期待ください」

ルーク「ちょ……！？ なんか不安なおいしかなタイトルなんだけど……！？」

F20C「計画通り……キリッ」

第六話 第35回円卓会議 〱転校生の考察について〱（前書き）

今回、ルーク君がノリノリですww

読者さま方の笑いが取れるのなら………と体を張ってくれました。
流石は主人公、やる時はやってくれます。

今回のお話はアニメ、ゲームネタが少し多めかもしれませんが。分かんなくても全然オツケーですのでご安心をww

全然関係ありませんが、魔法戦記リリカルなのはForceなどの
三期終了後のお話の漫画作品でのフェイトさんの髪型……

作者のドツボでしたww

やっぱり美しい………流石は女神様ですねww
ツインテだけがジャスティスではないのだよ!!!!!!

ではでは、本編どうぞww

第六話 第35回円卓会議 ―転校生の考察について―

桜ヶ丘高校との練習試合があつた土曜日から二日経つた、明くる週の月曜日。

今朝もフェイトとティアナと共に登校してきたルーク。

通学途中で、練習試合を見に来ていたらしいクラスメイト達から、かなり声をかけられた。

話したこともない人からも声をかけられた時は流石に少し驚いたが、まあ悪い気分ではなかつた。

フェイトは下駄箱付近で遭遇したなのと共に教室に向かい、ルーク達とはそこで一旦別れた。

ルークとティアナも、今朝もなのはと仲良し登校だったらしいリオスを交えて自分たちの教室に向かつた。

「はよーっす」

「おう、おはよルーク。土曜日の試合見たぜ?! リオスもそうだけど、すごかつたよなあ」

「ははは、そりやどうも。」

「リオス君もかつこよかつたよ」

「あはは……なんだか光栄だなあ、そんなことわれちゃうと……」

教室に入り、ルーク達がクラスメイトに挨拶すると、皆口々にそう

言ってくれた。なんだか物凄く有名人になった気がする、ルークとリオスだった。

クラスの友人たちとのやり取りを終え、三人はそれぞれの席に座るとはいつても、三人の席は近くにかたまっているの、そこから時間まで駄弁るのだが……。

「はあ……今日は朝錬がないから、なんだか気が抜けちゃうなあ……。グラウンドの照明器具の点検じゃあ仕方ないけどさ……」

「偶にはいいじゃない。こうやってのんびりした朝を過ごすのも。時間をのんびり使えるのって、結構な贅沢なのよ?」

「ああ……それ分かるなあ……。忙しいと、余暇時間が物凄く貴重に思えちゃうよね。まあ、部活は僕らが好きだからやってるわけだけだよ」

三人はそんな会話をしながら、朝のホームルームまでの時間を過ごす。休み時間もこんなことが多いが、朝のこんな時間からのんびりと出来ることなどは少ないだろう。

だが、そんな三人の穏やかな朝の時間が唐突に崩壊することになる。ある男子生徒が、転がり込むようにして1年三組の教室に入ってきた事によって。

「み、皆聞け!!!!!! こ、このクラスに………転校生が来る………!!!!!!」

ざわ!!!!!!

教室の入り口からヘッドスライディング気味に突入してきたその男子生徒は、物凄く真剣な表情で、そう告げた。

それだけで、教室が一瞬だけざわつくが、すぐに収まる。そして、クラス中の（主に男子）視線が、ルークに集中する。

「……………」

ルークもまた、深刻そうな顔をして、顔の前で手を組み合わせる（エ アンゲリオンの司令的な）。

「ルーク……………」

「ハラオウン……………」

「ルーク君……………」

クラスの連中から何かを期待するかのような、そんな視線と呟きが生まれる。

その視線には畏怖が、呟きには緊張も含まれていた。

ガタッ……………」

そして、それに応えるように、ルークは席を立ちあがる。ティアナは『まーた始まった…』という顔で呆れかえり、リオスも『やれやれ…』という表情をしていた。

二人とも、これから始まる事を見越しているようだ。

立ち上がり、席を離れたルークは、教卓に手を置き、華麗に腰掛け。そして、その双眸を開く。その目は、完全にいつものルークのものではない。いうなれば、一つの道を極めし者のみが到達するこ

とを許された境地に達したものが持つ、鋭い眼差しである。

そして、ルークは高らかに宣言する。1年三組における、重要なイベントの名前を……

「これより、第三十五回、円卓会議を始める………本日の議題は転校生の考察についてだ。各員、速やかに会議の準備にかかれ……！」

クラス連中（主に男子）「Sir, Yes, sir!!!!」

ルークがそう宣言した途端、教室の机が数秒で円形に配置され、その席には神妙な顔をしたクラスメイト達が腰掛ける。そして、準備は出来たと言わんばかりに、ルークに対し熱い視線を送ってくる。

「よろしい………では、諸君………。これより、円卓会議を開始する………。佐藤軍曹……！！！！転校生情報のソースは？」

「は、閣下……！！！！情報源は職員室前、担任であるカリム先生と学年主任のクロノ先生、お二人の会話からであります……！！」

ルークが佐藤と呼んだ生徒、先程転校生が来たと慌てて教室に転がり込んできた男子である。その彼が席を立ち恭しくルークにそう報告してくる。

「なるほど………あの二人がソースならば、確定情報と見て間違いないな……。で？性別は？」

「閣下の御想像通り………『おにゃのこ』でございます………」

「素晴らしい……」

それにしてもこのルーク、ノリノリである。

たまにだが、ある一定の条件を満たすと、ルークはエロティック大統領として覚醒してしまうらしい。

この際の、彼のカリスマ性、統率力は半端ないものとなり、クラス全員が彼の事を『閣下』と呼ぶ。

覚醒する条件については、未だに謎のベールに包まれているが、フエイトがその謎を知っているとかないとか……

ともかく、今のルークは萌え、そしてエロスに対し一切の妥協を許さないくらいの変態紳士なのだ。

「では、諸君……。今回の作戦、オペレーション『おいでやす、一年三組』の前準備として、まずは転校生についての考察を頭に叩き込んでもらう。ケースごとに、対応が変わってくる、各員集中して聞くように……」

「Sir, Yes, sir!!!!!!」

ルークの問いに一糸乱れぬ返事が返ってくる。このときのクラスの結束の力には目を見張るものがある。

というより、主に男子がアホなのだ。……女子もちよくちよく混じっているが。

「よろしい、ではまずはケースAだ。ケースA、すなわち転校生の中でもかなりの割合を占めている部類……クール系転校生だ。」

「俺はクール系が良いなあ……」

「バカ……お前……転校生はパン啞えて角曲がったら主人公とぶつかるって相場は決まってるんだよ」

「それは化石染みてるっての。今の世の中、転校生とのファーストコンタクトってのはな、穏便に教室って決まってるんだよ」

「え……俺は街中での戦闘で偶然知り合った感じが……」

「戦闘って何だよ……!!?」

ルークの発した言葉で、会議はいきなり紛糾しだす。皆それぞれの好みを主張し合い、ざわつきが目につき始める。それをルークはため息を一つ吐き、一喝する。

「静まれ。君たちの転校生属性への熱い気持ちはよく理解出来た。だが、議論は考察が終わって後でも遅くはないだろう?」

円卓のバカ達「し、失礼しました、閣下!!!!!!」

「なにこの無駄な統率力……」

ルーク達の様子を見ていたティアナはそう呟かざるを得なかった。

「では改めて……。このクール系転校生だが、ぱつと見の印象から、取っつきにくいようなタイプが多い。しかし、その大半が実は物凄く思いやりのある優しい人物であることが多い。さらに、お嬢様属性を兼ね備えているパターンも確認されている、これはケースA2と呼称する。」

ルークは自信の組み立てた、転校生理論を詰まることなく滑らかに

説明していく。その演説に円卓のバカたちは聞き入っていた。

「クール系転校生を攻略する上で、最も大事なことは根気、これに尽きる。いくら冷たい態度であしらわれても、諦めない根性だ。選択肢を選ぶ際は、この根気を忘れないように。あと、さりげない優しさに満ちた選択肢も有効だ。」

「なるほど……………」

「メモメモ……………」

円卓バカ達はメモを取る手を休めることなく、授業中よりも熱心に聞き入っているくらいだ。恐らく、教師人が見たら、複雑な思いに駆られること間違いなしだろう。

「だが、マイナスな事ばかりではない。クール系転校生は、デレたら最後、エンディングまでデレデレなパターンが多い。最初のクールっぷりはその影を潜め、主人公のみ限定だが、そのデレ具合は核兵器並だと、データ上では証明されている。」

「ツンとデレのバランスが崩れるということか……………」

「初期はツン8・デレ2くらいの割合で、シナリオの終盤あたりでは、その割合が逆転している筈だ。残ったツンは、決して消し去ってはならない、マンネリ化してしまう可能性があるうえに、ヤンデレ化の可能性も捨てきれないからな」

「中に誰もいませんよ……………とか？」

「あれは転校生じゃないだろう……………」

「空鍋……あれ怖かったなあ……………」

「あれは幼馴染だったの。ちなみに俺は神界のプリンスス派かなあ……………」

「バッカお前wwそこはプリ　ラだろjk」

「ハイハイ、ロリコン乙」

と、ルークの話から色々複雑なネタに走り始める円卓のバカ達。
今回のざわつきは先ほどの事を考えてか、すぐに収まり、ルークが
続きを話し出す。

「では次のケースだ。ケースB、天然系転校生だ。クール系と比べ
ると、エンカウント率は低いが、決して馬鹿にも出来ない。このケ
ースBはケースAよりもお嬢様属性が混じっている事が多い。これ
も同じく、ケースB2と呼称する。」

ルークは黒板も使って様々な公式を書いていく。その公式にどんな
意味があるのか、ハッキリ言って『なるほど、分かん』状態だっ
た。

「天然系は低い確率だが、なにか重いものを背負っている事がある。
その何かを隠そうと、敢えて天然を装っている場合も考えられる。
攻略の際は、その点に留意。下手な地雷を踏むと、フラグが修復不
可能レベルにまで破壊されてしまうこともままある。」

「閣下!!!!　フラグ管理にバクが出た場合はどうすればいいので
しょうか!!!!?」

「リアルなら諦める。パソコン画面上ならば、公式サイトでパッチを落として当てる、たまにそれまで使っていたセーブデータが使えない場合があるから、その点に注意だ」

「ハッ！！　ありがとうございます、閣下！！！！」

なんだか論点が少しずれた気もしたが、ルークはすぐにその話題から次のテーマへとシフトする。

「では、次、ケースCだ。ケースCは高飛車&ツンデレ系転校生だ。ハッキリ言おう、このケースCはリアルではなかなかお目にかれない。というか、ほぼ無い。理由としては、このタイプはほとんどが金持ちだからだ。金持ちがわざわざ一般庶民が通うような学校に転校してくるようなエロゲ展開などが起こる可能性は極めて低い。」

ルークは黒板に『ツンデレは二次元に限る』とでかでかと書きながら、一同に向かってそう言い放つ。

「リアルはリアル。二次元は二次元……………世知辛い世の中だぜ……………」

「なあ、俺考えたんだけどさ。世界を微分すればいいんじゃない？　そうすれば、俺も二次元の住人に……………」

「閣下！！！！　ここに天才を発見しました！！！！」

「とりあえず保健室に連れて行れていけ。でもって早退させる。」

「Sir, Yes, sir！！！！」

天才発言をした中村少尉が、衛生兵によって担架で運ばれていく。
一同、中村少尉に敬礼をしてそれを見送った。

「さて、気を取り直してケースDだ。このケースも少々稀だが、ケースCよりは幾分現実的でもある。ケースD、即ち、昔は近所に住んでいた幼馴染だったが、小学生の頃くらいに転校してしまい、音信不通だったが、何かの拍子で故郷に振り返り、転校生という形で再会するパターンだ。」

「幼馴染かぁ……。このクラスでガチでそれに当たるのって、閣下とランスター少将だけじゃない？」

「ああ、そう言えば……」

「ちょっと待って！！！！　なんで私がいつの間にか少将になってるわけ！！！！？」

ティアナの突っ込みが入るが、皆さん華麗にスルー。今さら変更する気はないという意思表示のようだ。

「ケースDは攻略自体はあまり難しくはない。再会した瞬間に、感動のあまり人目も憚らずハグ……というパターンもよく見られる。だが、問題は攻略した後だ。このケースは乗り越えるべきハードル的な問題がかなり高めに設定されている事がある。半端な覚悟でルート選択をすると、痛い目を見ることを覚えておけ」

「Sir, Yes, sir!!!!」

一通り話し終えたのか、そこで一息つくルーク。

だが、これで終わりではない。彼の真の力はここから発揮されるのだから。

「転校生のケース別の分析はこのあたりでいいだろう……。だが、諸君。最も大事なことが、まだ議論に上がっていない事に気が付いているのだろうか？」

そのルークの問いに、円卓のバカ達はウンウンと首を縦に振る。それを確認したルークは満足げに頷くと、ニヒルな笑みを浮かべながら、その最も大事な事を口にした。

「そうだ……。転校生のおにやのこレベルを図るための指標だ……。まず一つ目……。それは…『絶対領域』だ。」

バカ一同「おお~~~~~!!!!!!」

ルークの一つ目の指標にどこか敬服を表すような歓声が上がる。この意見には、誰もが賛同を示す。

「ソックスとスカートが構築するあの現代の科学でも解明が難しい部分の多い領域……。あれの有る無しで、その後の人生が大きく変わってくると言っても過言ではない……」

「さすがは閣下だぜ……。言うことに隙がねえ……」

「ああ……。俺たちはこの人に付いていけばいいんだ……」

「ルーク……。いや、閣下!!!! 一生付いていきます!!!!!!」

円卓の変態紳士（淑女）達はルークを崇める勢いである。こんな統

率力があるのに、なぜ日ごろからFFF団にボコられているのか……
まあ、その答えはすぐに分かることになるので少し待っていた
だろう……。

その答えはルークが二つ目の指標を口にした瞬間に判明すること
なる。

「そして二つ目……ある意味では、この指標こそが最大のポイン
トであると俺は考えている。そう、神の定めたルールと言ってもい
いだろうー!」

「なんだ……？ よっぱどすごいものなのか……？」

「閣下のお考えになることは絶対正しいに決まってるだろ？ 何を
今さら」

変態紳士たちのざわつきの中、ルークは高らかに宣言する。彼の萌
え理論の極み、彼の到達した境地を……

「それは……巫女服が似合うかどうかだ……」

シーン……

瞬間、世界が凍りついた。

「……あれ？ おかしいな……どうしちゃったのかな……？」

変態紳士&淑女たちからの反応が薄い事に違和感を覚えたルークは、
この前二ニコ動画で見た、管理局の白い悪魔というキャラの名台
詞を引用し、事態の收拾を図るがその効果は芳しくなかった。

この時、クラスの連中の心は一つになっていた。

クラス一同「……………いや…それはどうかと思う……………」

そう、ルークのたどり着いた萌えの極みに賛同してくれる者が居なかったのだ。

「俺、看護師さんコスなら……………」

「はあ？　そこは客室乗務員のお姉さんのカッコだろうjk」

「俺は……………婦警さんかなあ……………」

「あのお……………軍服萌えの俺はどうすれば……………？」

「とりあえず、進路を自衛隊にすればok」

先程までルークに跪く勢いだったクラスの変態紳士&淑女がルークとは別の指標を打ちて手始める。千差万別、人によって好みは異なるといえど、ここまで差が出るのは全くの謎である。

「いやいや！！！！　普通巫女服だろ！！！！　あの神々しさとエロさが2DKのアパートで同居してるんだよ！！！！？　これに勝る衣裳なんぞ俺は認めません！！！！！！！！」

「閣下！！！！　ではお聞きしますが、実際にその巫女服コスによって閣下は萌えられたのですか！！！！？　このリアルで、現実のにおいのこに巫女服を着てもらった事があるのですか！！！！？」

ルークの反論に、幹部の一人がそう異議を申し立てる。確かに、いくらここで言葉を並べただけでも、実際の経験がものを言うのがこの道である。

「……………ね……………ねーさんが……………その……………着てくれた……………」

・
・
・
(。 。) クラスメイトの表情

「はやてさんのコレクションを皆で着てみようってことになったらしくて……………。それで……………ねーさんが巫女服でさ……………。その……………物凄く……………エロかった……………」

なぜか両手の人差し指をツンツンと突き合わせながら、滅茶苦茶恥ずかしそうにとんでもないカミングアウトをするルーク。

リオスとティアナはその時の事を知っているらしく、苦笑いをしていた。

「いやね、ねーさんって何着ても似合うんだけど……………あそこまで凄い事になるなんて……………」

なんだか姉自慢になり始めているが、クラスメイトの様子が激変している事には気が付いている。

皆一様に、表情を険しくして、視線だけで人を殺せそうな勢いである。

ルークがFFF団に追われる理由はこれである。

フェイト関連で、美味しい思いをしまくっているからなのだ。(リオスはなのは関連で)

「皆のもの……」

「応……」

「え……？ あれ……？ み、皆？ なんだか顔が……怖いんですけど……？ ちょっと……その十字架型に加工された木と、縄の意味は………」

異常な殺気を出しながら、円卓のバカ改め、FFF団達がルークを完全に包囲する。そう、円卓会議は終わりを告げたのだ。これから開始されるのは、裁き。異端者を裁く、絶対的な儀式なのだ。

「これより、異端審問会を始める……。被告、ルーク・ハラオウンを拘束し、尋問を……」

「Yes , s i r ! ! !」

「あ、ちょ……やめ……いやあああああああああ……！！！！！！……」

こうして、地獄はその扉を開いたのだった。

「はあ……アホね……基準が全部フェイトさんってことなのよね……」

「ルーク……… どんだけフェイトさんの事が好きなんだろう……」

FFF団によつて磔にされ、拷問を受けてばろきれのように扱われているルークを見ながら、ティアナとリオスはそう呟きながら、席に戻った。

それから10分後、席にはズタボロになったルークの姿が。黒板の前には、1年三組の担任、カリム・グラシア先生が立っており、今日の連絡事項などを手早く話していた。

皆、話を聞きながらも早く転校生の話題にならないものかとそわそわしていた。

「ルーク、ルーク。そろそろ転校生の紹介みたいだよ？」

「……………ヘンジガナイ、タダノシカバネノヨウダ（裏声）」

「起きなさい！！！」

「あべしっ！！！！？」

リオスとのやり取りの後、ティアナの手刀がルークに叩き込まれた。

「転校生の紹介くらい、しっかり聞いときなさい？」

「分かったよ……………」

ティアナにそう窘められ、ルークは視線を黒板の方へやる。ちょうどその時、連絡事項が終わったようで、カリム先生が生徒たちの視線を読み取り、にっこり笑って話し出す。

「皆さんも知っているようですが、今日からこのクラスに新しい仲間が増えることになります。親御さんのご都合らしいのだけれど、詳しくは本人から聞いてくださいね。では、入ってきてくださーい！ー！」

カリム先生がそう告げて、一瞬あってから教室の扉が開かれる。そこから入って来たのは、長い真紅の髪を腰辺りまで伸ばした、超美人だった。

「……………」

クラスの皆、その綺麗さに息を飲んでいた。そんな空気の中、転校生はしっかりとした足取りで教壇に向かって歩いていく。凜としたその雰囲気から清楚なイメージが漂ってくるのは、決して気のせいではないだろう。

「はい、では、クラスのみんなに自己紹介をお願いします」

「はい」

カリム先生が転校生にそう促すと、彼女はそう短く返すと、ルーク達一年三組をその綺麗な双眸に捉え、自己紹介を始める。

その一連の動作も、どこか美しいオーラを放っているようにも見えた。

「アイリス・オルセルンと申します。こんな時期での突然の転校生

となりますが、皆さん、どうぞよろしくお願いします」

凜とした口調、態度、オーラ。少し冷たさを含んでいるような感じもするが、決して拒絶のオーラを出しているわけでもない。恐らくこれが彼女のスタンダードなのだろう。

アイリスの自己紹介に、数瞬押し黙った一年三組。アイリスはその様子に、自己紹介に何か不備があったのかと思ったが、実際はそんなことはない。

そして、自己紹介へのレスポンスが帰ってくる。クラスから、一斉にそろった状態で。

クラス一同「「ケースAだ!!!!!!!!!!」」

「……………はい…?」

一年三組に、アイリスの戸惑いの表情と言葉が生まれた瞬間だった。

第六話 第35回円卓会議 〈転校生の考察について〉（後書き）

F20C「ほんと、今回のルークは萌え&エロ談義に積極的だったよね」

ルーク「うあああああ！！！！あれは俺じゃないんだあああ
あ！！！スイッチが入っちゃうと、ああなっちゃうだけで、普段からあんなキヤラじゃ。」

F20C「いつも通りのルークだったよね。めっちゃ生き生きしてたし。まあ、それはさておき、やっとアイリスさんが登場だったね。最後のシーンはポカンとしてたけどww」

ルーク「いや、あれじゃあ仕方ないと思うよ?」

F20C「だねwwでは今回はアイリスを交えたフェイト達とのお昼休み的一幕となりますww今回はあまりなかったので、次回はフェイトさんと存分にいちゃついてもらって……………」

ルーク「ゴクリ……………」

F20C「おや?今ルーク君は何を期待したのかな?お姉さんに対して、ピンク色な想像をしていたのではないだろうな?」

ルーク「そ、そんなわけないじゃん！！！！変なこと言うな！！！」

F20C「変に焦るところもまた怪しい…まあいいや、では次回。
第七話 居心地のいい場所というのは、人それぞれ でお会いしましょうww」

第七話 友人の前で子供の頃の話を見ると、恥ずかしくて堪らない（前書き）

今回はルーク君の恥ずかしい過去が明らかにw

ていうか、私の地元、京都府の国勢調査のイメージキャラクターが
けいおん！！である件ww

一昨日、新聞の一部に梓達が映っているときは、思わず二度見して
しまいましたよww

京都府、始めましたねww

第七話 友人の前で子供の頃の話を見ると、恥ずかしくて堪らない

キンコンカーンコン……………

お馴染みのチャイムの音と時を同じくして、本日午前の授業がすべて終わる。あとは昼休みをはさんで午後の授業。それは終われば楽しい部活が待っている。

4時間目を終えるという事は、一日の折り返し地点に到着したということでもあるのだ。

「ルーク、お昼はいつも通りで良いでしょ？」

「ああ。ねーさんたちもすぐに来るだろうし、ちょっと待ってようよ。」

ルークとティアナはいつもと同じようにお昼をリオスやフェイト達と共に取るつもりだ。まあ、このメンバーが揃わないという事になり稀なのだが。

「にしても、オルセルンさんの人気はすごいわね……………。昼休みだつていうのに、まだ質問攻めにあつてゐるわよ？」

「ああ……………まあ、それが転校生の宿命ってやつだもんなあ。リアルじゃそうでもないけど……………」

「ルーク、さり気なくメタな発言を混ぜるのは止めとこうよ……………」

ルークのメタ発言にリオスが苦笑いをしながらそう言ってくる。だが、アイリスへの質問攻めは一向に止む気配がない。このままで

は彼女がお昼を食べる事が出来るのかも疑問である。

「……………ティア」

「あゝ、はいはい。分かってるわよ。」

ルークの意図をその一言で理解したティアナは、やれやれといった感じで、質問攻めに遭っているアイリスのところに行ってしまう。なんというか、こういう形の意思疎通が普通になっていることに、リオスは感心してしまっていた。

「ほんと、二人はすごいね。あんな短いやり取りで気持ちが伝わるんだもん」

「ニユー イプだからな」

「いや、それは違うでしょ!!?」

ルークの捻くれた答えに突っ込みを入れながら、アイリスの下に向かったティアナの首尾を見る二人。

見れば、ティアナが適当な理由を付けて、当たり障りのないようにアイリスを質問攻めの嵐から救い出している途中であった。

「俺たちが行くより、同性のティアに頼んだ方が確実だし、それになにより…………… F F F 団の制裁も怖いしな……………」

「ああ、それは同感……………」

やはり人は恐怖には勝てないということだ。 F F F 団による裏切り者（リア充）に対する制裁は厳しい。クラス内で制裁回数が断トツ

で多いのがルークなのはお約束だろう。

と、二人が遠い目をして過去の制裁のシーンをフラッシュバックさせているさ中、アイリスを伴って、ティアナがこちらに帰って来た。

「アイリスも一緒にお昼することになったけど、良いわよね？」

「ああ、もちろん。リオスも良いよね？」

「うん、僕も大歓迎だよ。お昼は多い方が楽しいしね」

どうやら、アイリスとお昼を一緒にするという事でこちらまで引張って来たらしい。まあ、彼女としても助かったという様子だが。

「ええと……私も一緒にしてしまつてよろしいのでしょうか……？
ハラオウンさんも、コーネルドさんも………」

「いいのいいの、そのつもりでティアにオルセルンさんの救助を頼んだ節もあるしね。あと、ハラオウンさんじゃなくて、ルークでいいよ。」

「そうそう、僕の事もリオスでいいからさ。」

ルークとリオスは迷い気味のアイリスにそう言う。転校生との触れ合い、これもまた珍しい体験でもある。

「でしたら、私の事もアイリスと。一方だけが名前呼びは少し変ですから。」

「うん、わかったよアイリス。よろしく………」

と、ルークがアイリスに改めてそう言おうとした時、ルークの姿がティアナ達の視界から消えた。というより、何かに押し倒された。

「ルークゝ 迎えにきたよゝ、みんなでお昼行こっか」

ルークを押し倒していたのは綺麗な金髪。

お気づき方もいらっしやるだろう、まあ学校内でこんな事をしてくる人は一人くらいしか居ないわけで……

「ふえ、フェイトさん…… お楽しみのところ申し訳ないんですけど………」

「ふえ……？」

ティアナが苦笑いと複雑な乙女心を含んだ表情でルークの方を指さしながらフェイトに話しかける。

「ルーク…… 気絶しちゃってます」

ティアナの指先、フェイトの我がままなボディゝに押しつぶされながら、ルークは気絶していた。なにかをやり遂げた顔で。

「わわわ!! る、ルーク!!!!? どうしちゃったの!!!!? もしかしてどこかに頭ぶつけた!!!!?」

「多分それもあるでしょうけど…… 一番大きいのは………」

「間違いなく、フェイトさんの胸だね……。 もろだったもん………」

「あはは……な、なんだか楽しいお昼になりそうですね……」

気絶したルークに若干涙目になって、ほっぺを叩いたりして起こそうとするフェイトと、ルークの気絶の原因を冷静に分析するティアナとリオス。

そんなイレギュラー過ぎる、転校初日のお昼休みの光景にアイリスは困った様子を見せながらも、笑っていた。

「というわけで、今日転校してきたアイリス・オルセルンさん。ケースAの転校生だよ」

「もうその無駄な考察はいいわよ!!!　なんで週末まで同じネタ引つ張るわけ!!!!?」

「あははは……」

ルークによるアイリスの紹介に、彼女本人は苦笑いしていた。そんな中、フェイトやなのは、はやても自己紹介をし返す。

「高町なのはだよ、よろしくね」

「はい、こちらこそよろしくお願いします、高町先輩」

「にやはは……なのはでいいよ。苗字だと硬い感じだしね。皆だつて名前で呼び合ってるしね」

「そ、そうですか？ では、そうします、なのは先輩」

なのはとの自己紹介はなかなか順調に進む。彼女の自己紹介中、彼女のスマイルにリオスがやられていたのはルークだけしか知らない。

「フェイト・ハラオウンです。よろしくね、アイリス」

「はい、よろしくお願いします。ハラオウン…ということは、フェイト先輩はルークさんの……………」

「うん、お姉ちゃんだよ」

「そこで俺の腕を取る意味を教えてよ！！！」

ルークの腕を抱き、ぽわぽわした笑顔を振りまくフェイトに、アイリスはまたしても苦笑する。なんともキャラが立っている人達が集まっているように思えてしまってもおかしくは無いだろう。

「うちが最後やな。八神はやてや。よろしゅうな、アイリス」

「あ、はい。たしか、生徒会長の……………」

「そうそう。生徒会長のはやてさんやで。あ、そや。アイリス、この学校で生活する上で、生徒会長として一つアドバイスや」

「アドバイス、ですか…？ な、何でしょう…？」

珍しく転校生の事を気にかけての行動なのか、はやてがアイリスに

アドバイスなるものを受けようだ。
ルーク的には嫌な予感しかなかった。

「ルークに触られると妊娠してまうから気をつけや？　この子、人畜無害そうな顔して物凄い女たらしやからね」

「待てやこら、このちび狸。触ったら妊娠って何さ！！？　なに、俺って存在自体が卑猥なものみたいじゃん！！？」

「なんや、今頃気が付いたんか？」

「違うからああああああ！！！！！！！！！！」

「あ、あははは……………」

ルークの嫌な予感通り、はやてのアドバイスはアドバイスではなく、ただのルーク弄りだった。

と、その時。フェイトが少し顔を赤くしながら呟く。

「ど、どうしよう……………私さっきルークに抱きついちゃったし……………朝もイロイロ……………。それに、最近つわりもあるし……………もしかして私……………ルークの赤ちゃんを……………／／／／／／／／／／／／」

「違えよ……………！　それ絶対違う……………！　ていうか、触っただけで子供出来てたら、今頃野球チームが出来る勢いだよ……………！！」

「ていうか、フェイトちゃん、朝にイロイロって一体何があったんや……………」

はやての冗談に感化され、どんどん赤くなりつつも妄想が止まらないフェイトさん。ダメだこのフェイトさん、早くなんとかしないと。

「はあ……ぼ、母子手帳ってどうやってもらえば…… / / / / / / / / / /」

「ねーさん、お願いだからリアルに戻ってきて……！！　そもそも俺達、姉弟だから……！！　子供どころか、結婚もNGだからね……！！？」

妄想全快のフェイトをなんとか元に戻そうと必死なルーク。はやて達はその様子をニヤニヤと見つめているばかりである。

と、ルークの願いが通じたのか、フェイトは少し正気に戻ったよう。でルークの方を見てくる。そして、あまり思い出したくない思い出話をしてきた。

「え………だってだって、ルーク昔言ってくれたよ？　『お姉ちゃん俺の婿になるんだ』って」

「昔の俺、婿と嫁が逆だよこれ……！！　って、そういう問題でも無くて……！！　そんな昔の話持ってこなくていいよ……！！　というか、脳内メモリーから今すぐデリートして……！！」

昔の思い出をこんなところで思い出すことになるとは思ってもみなかったルーク。何としてでも、この路線から話を逸らさなければ、平穏な昼休みは訪れる事は無い。

だが、世間はそんなルークのささやかに願いを許してはくれないのだ。

その場に居た全員「「「そこんとこkws k」」」

ルークの昼休みにゲリラ豪雨が降る事が決定した瞬間だった。

「最悪だあああああ！！！！！！！！？？ ていうか、はやてさんとかティアは知ってるだろ！！？ 今さら聞く必要無いじゃん！！？」

「いやいや、ここは世界の空気を読んだだけやで？ こんな面白そうな話題、拾わんかったらバチが当たるわ。それにアイリスにも面白い話を提供せな悪いやろ？」

「おーい、この生徒会長なんとかしてよ。激しく帰りたくなってきた……………」

最早、覚悟を決めて碎けるしかない。ルークは妙な悟りを開きかけていた。こうなった以上、誰にも止めることは出来ない。

ルークの赤裸々な過去話が白日の下に曝される。

「あれはね、私が小学生で、ルークがちょうど幼稚園の年長さん当たりの頃の話かなあ……………」

フェイトは懐かしむような表情を浮かべながら、朗々と語り始めた。

ルークは『もうどうにでもなれ』といった感じで、弁当をブルトーザー食いしていた。

以下、回想シーン。

それはまだ、ルークが幼稚園に、フェイトが小学校に上がったところのお話。このころから、ルークはエロティック大統領の素質を開花させ始めていたという事は周知の事実だろう。

とまあ、そんな話はさておき。この頃のルークはかなりのお姉ちゃん子であった。（今はそうでないとはい切れないが）

何をするにも、どこに行くにもいつもフェイトの後ろにくっついて行く勢いであり、またフェイト自身がそれを嬉しく思っていたので、二人は仲の良い姉弟という事で微笑ましいシーンを周囲の人間に提供していた。

だが、小学校と幼稚園。聖祥はすべてが同じ土地内にその類の施設があるとはいっても、面積は広大だ。無論、幼稚園と小学校間の距離は子供にとってはかなりのもの。

ついこの間までは、少し歩けば大好きな姉に会えたルークだが、そうもいかなかった現在、少しだけ毎日が憂鬱になり始めていたのだ。

「ルーク。きょうもボーっとしてるね」

「ん……」

幼馴染であり、幼稚園でも同じクラスにいたティアナは、よくその事を覚えていた。

毎日を、どこか退屈そうに過ごしていたルークの事を心配して声を

かけたりしていた。

「フェイトおねえちゃんがないから？」

「……………」

そのティアナの問いに、ルークは小さく首を縦に振る。どうやら正解のようだった。

「しかたないわよ、だって、おねえちゃんはショーガクセーになっちゃったんだから。」

「しってるよ……………。あゝあ…………俺もはやくショーガクセーになりたいなあ……………」

と、愚痴のような事をティアナに漏らすルーク。家に帰れば会えるのだから、良いのではないのか？　とも思えることだが、幼心というものは複雑なものなのだ。

そして、そんな退屈な毎日を送っていたルークだったが、ある日、フェイトの友人でもあり、ルークにとっては面白いお姉ちゃん的存在だったはやてから、衝撃の事実を聞かされることになった。

それは退屈だったルークの毎日を吹き飛ばすような事だったのだ。

「ルーク、ルーク……………！　大変や……………！　フェイトちゃんが、フェイトちゃんが、同じクラスの男の子から告白されよった……………！！！！」

「こくはく……………？　ってなに？」

はやての言葉の意味が分からなかったルークは、そう尋ね返す。色恋沙汰にあまり興味のなかったルークにとっては初めて聞く言葉だった。

「ええとな……男の子が、女の子に結婚してくださいって、お願いすることや。夫婦になるための第一歩やな」

大事なステップを、というか、ステップそのものをぶっ壊すような勢いである。

まあ、はやては本当の意味を知っていて、あえてこのような間違った意味を教えたのだから。

「どないする、ルーク？ このままやったら、お姉ちゃん取られてまうで？ …………… って、ルーク？」

はやてに対して、何の反応も返ってこない事に、はやてはルークの方を見る。

（。 。 ） ルークの表情。

ルークはあまりのショックに、その場で気絶してしまっていた。

「お姉ちゃん！！！！ お姉ちゃん！！！！」

ルークははやてに介抱され、意識を取り戻すとすぐに家に帰り、フエイトのところに転がり込んだ。

「ルーク？ どうしたの？」

弟のあまりの慌てように、フェイトも何事かと思い、ルークの方を向く。

ルークは息を切らしながらも、はやてから聞かされた事を聞いたです。

「お、おねえちゃん、ケツコンするって、ほんと????!!」

「ふえ？」

またしてもいきなり過ぎる問いに、フェイトはそんな声を出してしまふ。

どこから結婚という単語が出てきたのか、全く分からなかったのだ。というか、この時、ルークは半泣き状態だった。

「おねえちゃん、ケツコンしたら、3LDKで庭付き一戸建てで、子供が二人になるの!!!?」

「え？ え？ちょっと、ルーク…?」

恐らくははやてに吹き込まれた単語だろうが、意味は分からなくとも、それがヤバい事であろうことだけは、ルークの本能が叫んでいたのだ。

「俺ヤダよ!!! おねえちゃんがケツコンして、『光子さん……あなた掃除もまともに出来ないの……? ほうら、こんなに埃が……全く、一郎ったら、女性を見る目だけは無いんだから……』みたいな、シュウトメさんのいる家に行っちゃうのは!!!!!!」

はやての結婚に対する知識が、昭和時代なものであることがよく分かる。

「そ、そんなところにお姉ちゃんをやるくらいなら、俺がお姉ちゃんをお婿さんに貰う！……！！！」

「え？！」（ドキンッ）

この時の、幼いルークの間違えだらけのプロポーズ？ に不覚にもときめいてしまったフェイトだった。

後日分かった事なのだが、フェイトへ告白した男の子は確かに居たらしい。だが、その告白自体は……

『あ、あの……ハラウンさん！！ つ、付き合ってください！！！！』

『?? ええと……どこまでかな？』

という、ベタ過ぎる結末だったらしい。

この事実を知らされたルークが、はやてに制裁を加えたのは言うまでもない……

「ああ、あの時のルーク、かわいかったなあ……。もちろん、

今のルークも可愛いんだけど……」

「ぷくくく……あ、改めて聞くと……笑いが抑えられへん……くくく……」

「る、ルーク……純情過ぎるよ……くくく……」

「あははは……！！！」

フェイトの話聞き終わった、ルークを除く一同は皆爆笑していた。幼いころとは言え、インパクト抜群な話に、ポーカーフェイスを決める事が出来るような人物はここには居なかった。

「うわあああああ！！！！ 殺せよおお！！！ もういつそのこと殺してくれえええ！！！！ 俺が死ねばいんだろおおおお！！！！！」

あまりの恥ずかしさに、ルークは屋上の地面を頭を抱えながら転がり回っていた。

古傷をナイフで抉られるような恥ずかしさ。流石のルークも、これには堪えてしまったようだ。

「ま、まあまあ……こ、子供の頃の話だもんね。ルーク君が本当にフェイトちゃんの事が好きなんだってことなんだよ」

「そ、そうですね！！ ある意味では良いお話じゃないですか。」

なのはとアイリスが気を利かせてフォローを入れる。流石に笑い過ぎたと反省しているようである。

「そやなあ、ホンマにあの頃のルークはフェイトちゃんにべったりやったしな。うちも少しりり過ぎたわ、今さらやけどゴメンな？」

「…………マジで今さらですよ……………」

ルークも恥ずかしさに悶絶するのに飽きたのか、会話に戻ってくるというか、屋上で悶絶すること自体がかなり恥ずかしいような気がしたのだ。

「でもね、ルーク？」

会話に戻って来たフェイトが、ルークに優しい笑みを浮かべながら話しかけてくる。

そんないつもと同じような、笑顔なのに、ルークにとっては先程の思い出話の所為なのか、やたらとまぶしく思えてしまう。

「あの時のルーク、ちょっとカッコよかったよ」

「なっ！！？ にやにをバカなこと……………」

そのフェイトの言葉がやたらとルークの心を揺さぶった。思わず噛んでしまうほどに。

その時のフェイトが、姉ではなく、なにか別のものに見えてしまったような気がした。

それが何なのかは、ルークには分からなかったが。

「あはは！！ ルーク照れてる、赤くなってる！！」

「て、照れてない！！！！！！」

「フェイトちゃんに劣情を……………」

「あ…………うるさい、うるさい………………！！！！！！！！」

もちろん、そんなルークの様子をはやてたちが見逃すわけもなく、再び弄られる事になるルーク。

リオスやはやてに鉄拳制裁を食らわせるために、フェイトに覚えた謎の気持ちがあるのかを考えるのをやめるのだった。

こうして、ドタバタな昼休みが過ぎていった……………

第七話 友人の前で子供の頃の話を見ると、恥ずかしくて堪らない（後書き）

ルーク「うあああああ！！！！！恥ずかしい……………」

F20C「昔からお姉ちゃんの事大好きなルーク君な回だったね。
このころから女たらしスキルを磨いていたなんて…………ルーク、恐ろしい子！！！」

ルーク「違っつて言ってるじゃん！！？ あれは昔の話で、今は！！！」

F20C「ほお…？ 別に好きではないと？」

ルーク「うつ！！……………そ、それは……………」

F20C「ふふふ、正直な奴め……………そんなにおねえちゃんに甘えたいのかww」

ルーク「そういう言い方されると、余計に否定したくなるんだよ！！！」

次回は、皆でルーク君の家への訪門です。遊びにくるわけですねw
どんなハプニングが待っているのやら……………乞うご期待！！！！

第八話 少年はエロ本を通して大人の階段を上っていく（前書き）

どうも、今月号のコンプエースの表紙を飾られているフェイトさんに心奪われた作者です。

フェイトさん、マジ女神。

そうそう、グーグルの画像検索や、pixivで フェイト けいおん で検索をかけてみてください。

なんとまあ、けいおんパロのフェイトさんのかわいい姿が描かれているではありませんかww

作者のipodの壁紙ですよw

さてさて、では本編スタート!!

第八話 少年はエロ本を通して大人の階段を上っていく

ルークの恥ずかしい過去が暴露された日から二日経った、とある日の放課後。

ルークは自室に居た。そう、普通な事と言えばそうだ。どこもおかしなところは無い。

「そういえば、ルークの家に遊びに来たのって高等部に入ってからじゃない？」

「あゝそうかも。進学したての頃は部活で以上に忙しかったしな」

「今日は久々のオフだもんね。少しゆっくりできるけど、なんだか物足りない気もするよね」

「だったら、こんなところで俺と駄弁つてないで、なのはさんとデートでも行ってきたらどうなんだ？ 姉さんたちも今日は部活休みみたいだし」

「そそそそそそ、そんなの無理だよ！！！！ も、もし断れちゃったりしたら、あとが気まずいだろ！！？」

と、こんな風に友人のリオスが普通に遊びに来ている事も特におかしいことではない。

部活が珍しくオフという事で、久々に遊びに来ているということだ。そう、至って普通な事。

「る、ルークだって、フェイトさんやティアを誘ってどこかに行かないの？」

「あの二人の買い物に付き合わされるのがちょっと怖い……………」。
ティアはかなり買い物に長考するタイプだし、いや、それだけなら
まだいいのか……。ねーさんに至っては、俺を女性用下着売り場と
いう紳士の社交場……………じゃなくて絶対不可侵領域に連れ込もうとす
るし……………」

「途中で明らかにおかしい単語が出てたよね！！！！？」 紳士の社交
場って何！！？」

こんな風に何気ない話に花を咲かせるのも昔から何一つ変わっては
いないのだ。

だが、人生というものにはその普通をぶっ壊すようなイベントフラ
グがそこら中に落ちているもので……………彼らもまた、そのフラグを
踏んでしまう事になるのだった。

全ては、ルークの携帯電話が鳴ることから始まった。

P r r r r r r r r r r r……………

リオスとの話の途中で、ルークの携帯が着信を知らせる音が鳴る。
どうやら電話のようだ。

ルークが携帯のサブディスプレイを確認すると、そこのはお隣さん
兼幼馴染のティアナの名前が浮かんでいた。

「ティアだ。ちょっとごめん。」

「うん、いいよ……って、僕の携帯も鳴ってる……」

ルークとリオスはお互いの携帯を開き、通話ボタンを押して電話に出る。

「はい、もしもし〜?」

『あ、ルーク? 私だけど……』

「Oh〜…一体どうしたんだい? マイハニー?」

ルークが冗談めいた感じでティアナからの電話に出る。まあ、こういったやり取りもいつもの事で……

『急に声が聞きたくなったのよ、愛しのダーリン』 露骨な棒読み

「…………ごめん、とりあえず謝つとくわ……………」

『だったらアホな事してないで、普通に電話に出なさいね。』

こんな風にあしらわれてしまうルーク。なんというか、ルークの扱いに関しては手慣れているティアナだった。

『冗談はここまでで……ルーク、今家に居るの?』

「うん、居るよ。リオスも遊びに来てるからね」

『あ、そうなんだ。じゃあ、一石二鳥かな……。今日ね、あんた

達のユニフォームに着ける背番号が出来たらしくて、それを渡したいのよ』

背番号……そう、ルーク達が使っものだ。二人はこの間の試合での活躍によって、晴れてレギュラー入りを果たしていた。

そこですぐにでも背番号を貰える筈だったのだが、引き継いできた背番号がかなり傷んできていたようなので、新調してもらっていたというわけだ。

ティアナの話ではそれがやっとできたらしい。

『それで、これからあんたの家に行こうかと思うんだけど、良い？』

「ああ、もちろん。なんなら、自転車で迎えに行くけど？」

『いいわよ、もうすぐそこまで来てるから。じゃあ、あと五分くらいしたら着くから、待ってなさい』

「おゝ、わかった。そんじゃ待つてるよ」

ルークとティアナの通話はそうして終了となった。どうやら来客の数が増えるようだ。となれば、飲み物やお菓子の用意をせねばなるまい。

母、リンディは今現在仕事で不在であるので、ルークは台所まで自分で取りに行くことにする。

「飲み物持ってくるけど、なにかリクエストある？ 青汁以外なら大抵のものあるけど……？ って、リオス？」

飲み物のリクエストを聞こうとリオスの方を向いてそう尋ねたルーク。だが、彼の目にはリオスの予想だにしない姿が映った。

「……………」

「どうしたのさ？　まるで、『なのはさんからの電話が来て、フェイトちゃんと遊ぶから、リオス君も一緒にどう？　今ルーク君とフェイトちゃんのお家に向かつてる所んだけど……？』みたいな電話が来たみたいな顔だね？」

「ルークってエスパー……！！？　ていうか、その台詞そっくりそのままんだけど？！！」

どうやらルークのニュー　イプ能力は本物のようだ。
そろそろ、キュピーン……！とかのSEをバツクに何かを感じ取ることも出来るようになるのかもしれない。

だが、ルークの悪夢がこの時から始まっていたということには気づく事が出来ていなかった事を、彼は知る由も無かった。

五分後、約十畳のルークの部屋に、素晴らしい輝きを放つ美少女三人が揃っていた。

フェイト、なのは、ティアナというハイレベルな美女が揃っているこの空間は一見すると、ハーレムにしか見えない。

「はい、ルークにリオス。あんた達の背番号」

「ありがと。おお……5番だ………なんだか感動………」

「よかったね、ルーク」

「リオス君もすごいね？ 6番だよ？」

「ひゃ、ひゃい！！！！ あその……これも一重になのはさんのお力で……」

まずはティアナがルーク達に件の背番号を渡す。フェイト達からもお祝いの言葉をもらい、リオスは明らかに対応がおかしくなっているが、いつもの事なので気にしない方向で良いだろう。

「ルーク、お姉ちゃんが付けてあげよっか？」

「いいよ、こういうのは自分でやらなきゃね。ていうか、ねーさん裁縫できたっけ？」

「フェイトちゃん結構上手だよ？ 手動かすのもかなり早いし」

「へえ……（物凄く意外そうな顔）」

「る、ルーク……そんなに意外そうな顔されると、ちょっと挫けちやいそうかも……」

フェイトが裁縫をしている姿をあまりみなかったルークは、姉の持つ意外な特技の一つにちょっと感心、そしてかなり意外、という表情をしまいフェイトは少し苦笑い気味だった。

「リオスはどうするの？ 自分でつけるの？」

「ああ、はい。僕は……」

フェイトが何気なく聞いたリオスへの問い。

ルークはそこにすかさず、悪意……ではなく、友達としてのお節介をかけてみる。

くっ付きそうでくっ付かない、なのはとの仲を少し後押ししてやろうと思ったのだ。（面白半分なのだが）

「リオスなのはさんに縫ってもらえばいいじゃん。」

「自分で……って、ちよつとルーク……!? いきなり何言いだすのさ……!?」

「いや、なのはさんも裁縫上手そうだし。リオスもなのはさんが来るまではずっと言ってたしね、『背番号はなのはさんに縫って欲しいなあ、キャハ』って」

「え！？／＼／＼／　　そ、そうなの……リオス君………？　最後の
キャハ　はどうかと思うけど……」

ルークの話によって、リオスは焦りまくり、なのはは真っ赤になってしまう。

ちなみに話の内容は、フィクションであり、実際の人物・団体とは一切関係ありません、である。

「な、なのはさん!!? これは違いますよ!!
る、ルークが勝手に……………」

「よ、良かったら……私……縫おうか……？」

「ほ？」

慌ててルークの発言を取り消そうとしたリオスだったが、赤くなつたなのは台詞に、意味不明な声をあげてしまう。

「だ、だから……リオス君の背番号……よかつたら、私が……縫うよ？」

「ま、マジですか……？」

「ま、マジです……」

なにやら良い雰囲気の二人。ルーク・フェイト・ティアナはそれをニヤニヤしながら見ている。

リオスとなのはは固有結界を形成しつつあり、ルーク達の存在が見えなくなっているようだ。

「じゃ……じゃあ……なのはさんが……よろしいでしたら……よろしく……お願いします／＼／＼／＼／＼」

「……はい、お願いされました……／＼／＼／＼／＼」

なぜか物凄く丁寧な言い回しで、そんな約束を取り付けることに成功したりオス。

なのはも満更ではないようで、結構やる気であるところを見ると、リオスの事を少なからず意識してる事が窺える。

「（あの二人、鈍感な上に奥手だからな……。ちょっとお節介かもだけど、口出ししたくなっちゃうんだよね……）」

自分の事を棚に上げて、そんな事を考えるルーク。彼の両隣から、ティアナとフェイトの呆れ気味の視線には気付くことも無い。

と、そんなルークに、リオスが思い出したように睨みを利かせてくる。顔が真っ赤なので全く威圧感はないが。

二人はデスノ ト風のやり取りで、先程の事に関して意思を通じ合わせる。

「（ルーク…… やってくれたね…… 上手くいったからいいものの、一歩間違えれば気まずい関係になっちゃうフラグじゃないか!!）」

「（何を言うか…… 俺には確信があった…… なのはさんなら縫ってくれるという確信が……）」

「（そんな事がどうして……?）」

「（ギャルゲー的…… もとい、なのはさんのような優しい女性ならそれくらいは……）」

「（待つて!!!? 今ギャルゲーって聞こえたんだけど!!!? おかしいよね、どう考えても二次元の話を三次元に適用した感じじゃないんだけど!!!?）」

ルークの粹? な計らいでなのはに背番号を縫ってもらった事になったリオスだったが、考えてみればかなり危ない橋を渡ったものだ。それを思うと、少しルークに仕返しをしたくなってしまうのもまた、人間の感情を言うものだ。

「（なにか…… 武器（ルークの弱み的な意味で）はないのか……!」

「！！？」

どこかのガンのパイロットのような台詞を心の中で唱えながら
ルークの部屋を見回すリオス。このままやらつればなしでは男が廃
る。ここは同じくルークにも赤面してもらつ事にしよう……そんな
事を思っているリオスの目にあるものが飛び込んできた。

「（あ、あれは！！！？）」

ベッドの下から、微妙に出ている雑誌のようなもの。見れば、微妙
に女性の姿が映っているようにも見える。

「（ベッドの下＋本＋女性っぽい何か……えろ……保健体育の実践
的な応用解説書に違いない！！！　ふふふ……ルーク……僕に隙
を見せたのが仇になったね……）」

リオスは黒い笑みを浮かべながら、ルークの方を見る。そのルーク
はティアナ達と談笑中でこちらに気がつかない。
仕掛けるなら今である。

「（ルーク、君にも秘蔵コレクションを女性陣に見られるという恥
ずかしさによる精神的ダメージを受けてもらおう！！！）」

リオスはそう決断すると同時に、ベッドの下からはみ出していた本
に勢いよく手をかけ、それを引っ張り出した。
そして、ルークに黒い笑みを浮かべながら表紙をあちら側にして、
SEに『ドンッ！』というような音を設定しつつ、口を開く。

「へえ……ルークってこういう女の人が好きなんだね。結構いい
趣味してると思うよ……」

リオスはいつもと変わらないような口調で、しかしどこか勝ち誇ったような雰囲気を出しながらそう言い放った。
今、一同の視線はリオスに手にある本に集中している。

「でも、ルーク。エロ本隠すならもつと他の所にしないと……女の人も来てる事だしね……」

止めの一撃。

『これで決まった！！』リオスはそう確信した。だが、フェイト達の表情は変わる事はない、むしろ、何を言っているんだろう？という顔である。

その時、リオスは見た。ルークの口元がニヤリと吊り上がった。

「おいおい、リオス？ エロ本って何の事だ？ いきなりマガンなんか手に取ったと思ったら……」

「え？ マジン……？」

リオスは慌ててその雑誌を反対側に向け、その表示を凝視する。そこには大きな文字で『マガン』と表記されており、アイドルの水着写真がそこに加えられている。

見れば、そのマガジンは二年ほど前のものであり、古さからか本自体が半分に割れており、ちょうどエロ本と同じくらいの厚みになっているではないか。

これではいくら女性の水着写真だからと言っても、さほど大したものとはいえない。寧ろ、あっても何ら問題にはならないのだ。

「（や、やられたあああああ！！！！？ まさか、こんなところ

るに古いマガ ジンが隠れていたなんて……!?)」

リオスは心の中で絶叫した。完全に墓穴を掘った。これでは、リオスがルークの部屋でわざわざエロ本を探していたという風に見られてしまうではないか。

偶然の起こした奇跡だともいうのか……?

「(いや、まさかこれは……!!!?)」

リオスはハツとなった様子で、マガンの表紙からルークの方に視線を走らせる。

そこには悪魔の顔があった。

「(ふふふ……バカめが、功を焦って自滅したな……!!! それ
はただのブラフ……お前がそれを見つかるだろうと思って、わざわざ用意しておいたんだよ!!! 大昔のマガンを半分にぶった斬
つてなああああ!!!)」

「(な、なんだとおおおおおお!!!!!!)」

「(大体、この俺がエロ本をベッドの下などというデッドゾーンに
隠しておくはずがないだろう? そんな場所にマイベストコレクション
ヨンは存在しない!!!! ひよっこめ……格の違いを思い知る
がいいわあああああ!!!!)」

なんと無駄な頭脳戦。というか、無駄な労力を使っている二人であ
ろうか。

だが、ルークの戦略によってリオスに対するなのは達の視線は、苦笑いの中に少し呆れが含まれたようなものになってしまっていた。

$\Gamma(\cdot, \cdot, Z)$

リオスはその場でorzになってしまふ。これがエロスに賭ける情熱のレベルの違うというものなのだろうか。

ルークはエロ関連になると通常の三倍の能力を発揮する（赤くもな
んともないが）

「ま、リオスも男の子ってことね」

「にやは……り、リオス君？ 男の子だもんね、仕方ないと思うよ？」

「（ガー————ン！！！！）
いい！！！！！！」

なのはさんの視線が物凄く重い
恥ずかしい、めっちゃ恥ずかしい！！！！」

なのはとティアナの氣を使うような言葉がリオスに突き刺さり、追加ダメージを与える。

「（ふっ………　まだまだケツが青いな小僧………　ビジネスジャプ
が読めるようになってから出直してこい！！！！）」

ルークはなぜ勝ち誇ったような表情になっていた。そう言った要素は皆無だが、この二人の間では、一つの重要な勝負に区切りがついたということだろう。

しかし、完璧だと思われたルークの戦略を、彼のお姉さんの一言が、
 跡形も無くぶっ壊すなどとは、この時のルークは予想だにしてい
 なかった。

「で？ ルークのエッチな本の隠し場所ってどこなのかな？」

「ははは、絶対に分かるわけないよ。ゲーム機ハードの空箱に二冊、学校のシラバスを表紙に加工して本棚に二冊隠してあるんだ……絶対に見つかるわけが………」

この時、ルークは完全に油断、というより自分の置かれた状況を忘れてしまっていた。故に、ガードの緩い隙をフェイトは見逃すことなく突き、エロ本の在り処を誘導的に吐かせられてしまったのだ。

「ふうん………今度はそんなところに隠してるんだ………」

「ルーク………あれほど破廉恥な本はダメだっていったのにね………前のやつも全部消し炭にしたのに………もう忘れちゃったのかな………かな？」

「し、しまったあああああ………!!!!………?」

フェイトは顔は笑っているが、目が笑っていない。ティアナも瞳からつやが消し飛んでおり、鉈などを振り回しそうでかなり怖い雰囲気醸し出していた。

そして、フェイトとティアナは、ルークが自滅した形で口にしてしまった場所から、件のエロ本を見つけ出し、四冊を並べてルークに突きつけた。

一冊目「巫女萌え」

二冊目「義姉との秘密の関係」

三冊目「幼馴染が　　になる瞬間」

四冊目「ドSなあなたへ贈る、正しい調教の仕方」

ルークの性癖、ここに極まる。彼の趣味がこのエロ方面の参考書四冊に凝縮されているといっても過言ではない。

「ていうか、一番最後のはどうかと思うよ……!? 明らかに危ない橋渡ろうとしてない……!?」

「良いじゃん……!! 人の趣味にケチ付けるな……!!」

ティアナ&フェイト「ルークは黙ってなさい……!!」

「申し訳ありませんでした……!!」

「ルーク、弱っ……!?」

リオスに反論したルークだったが、ティアナとフェイトの一喝により、一瞬にして縮こまってしまう。まるで捕食者を恐れる小動物が如く。

「兎に角……この四冊は全部シュレッダーにかけた上で、来週の燃えるゴミの日に出しておくから」

「そ、そんな殺生な……!? 俺のマイベストコレクションを……!?」

ティアナ&フェイト「……問答無用っ……!!……!!」

フェイトの無慈悲な決定にルークが天を仰ぐ。まるでこの世の終わ

りを見せられたようなリアクションだ。まあ、彼にとってはそれほどの価値があるという事なのだろう。

「にやはは……ルーク君も大変だね……」

「まあ、完璧に自滅でしたけどね……」

なのはとリオスはフェイト達に厳しく怒られているルークを遠目から見ながら、苦笑いをしていた。

「そうそう、リオス君？」

「はい、なんですか？」

「リオス君の部屋も……帰ったら家宅捜査……だよ？」

(。・。) ゲゲッ リオスの顔

リオスにも死刑執行のカウントダウンが始まった瞬間であった。

その後、ティアナの部屋にて……

「もう、ルークってば……またあんな本ばっかり……」

ティアナは夕方に起きた事件の事を思い出しながら、少し不機嫌になっていた。

まあ、あんな本を見せられては女心としては難しいところもあるのかもしれない。

「……でも……幼馴染の本……あつたよね……てことは……興味く
らいは……あるのかな……？」

そう呟きながら、ベッドにある枕を抱きかかえ、顔をうずめるティ
アナ。

彼女の顔は少し赤らんでいた。

「絶対……振り向かせてやる！！」

ティアナはそう言うと、ベッドに体を預けた。その声は力強さと、
熱っぽさが同居した声だった。

一方フェイトの部屋にて……

「る、ルーク……義姉……って……ていうことは、もしかして私の
事もそう言う目で見てたり……はう……／／／／／／／／」

こっちはこっちで顔を真っ赤にさせて、ベッドの上をゴロゴロと転
がる。

「ああ、でもでも……ルークの本に調教とか……そんな感じの本も
あつたし……」

四冊目の、あからさまに危ない（趣味的な意味で）雑誌の存在を思い出し、ハッと顔を上げるフェイト。

この時、彼女の頭の中では様々な妄想が走りまくっていた。

「ふわあああ！……！　だ、ダメだよルーク……お姉ちゃんにそんなことしたら……」

一体何を想像しているのか、非常に気になるところである。

「ちょっと、ルーク……強く縛り過ぎ……ああ、でもルークに虐められるの……ちょっと良いかも……はう……／／／／／」

フェイトの妄想劇場は、リンディに夕飯に呼ばれるまで続いたらしい。

インスピレーションが優秀過ぎるのも、考えものであるという悪い例であった。

他方、リオスの部屋では……

「リオス君……？　この本は何かな……？」

「ああ、いやこれはそのお……」

まさにリオスの処刑が開始されているところであった。

「これは？」

「……………保健体育の参考書……………です……………」

「リオス君……………？　ちよつと……………頭冷やそうか……………？？」

「あ、ちよつとなのはさん……………？　その猿轡は一体……………？……………ぎゃあああああああ！！！！！！……………？……………？……………」

また一つ、尊い命が散って行つた瞬間だつた……………

最後に、ルークの部屋では……………

「あゝあ……………本は全部没収されちゃつたなあ……………惜しかつたなあ……………」

コレクションを全て没収され、ルークは失意のどん底に居た。ルークと共に大人の階段を上つて来た同士達を失つた悲しみ、喪失感は簡単には拭い去れなかつた。

「はあ……………こうなつたら……………」

言いつつ、しよげた様子でルークは自分のパソコンの前に行き、電源を点ける。

そして……………

「バルド　カイの兵装レベルでも上げて……………悲しみを紛らわせよ

う……………今だけは……………何もかもを忘れて、仮想世界での凄腕気分
に浸ってやるううう！！！！」

そこには悲しみにくれる哀れな男の姿があった。

一本の電話から始まった悲劇。エロティック大統領の悲しみは大き
かった……………

第八話 少年はエロ本を通して大人の階段を上っていく（後書き）

ルーク「うわああああ！！！！また千夏に良いところ持ってかれた！！！！？？？」

F20C「お前は……まだやってるのか……」

ルーク「イージーオペレーション……キリッ じゃないよ！！！？折角あそこまで敵の体力下げたのに、横取りは無いんじゃない！！？」

F20C「腕の所為だよ……。てなわけで、ルーク君のエロ本を巡る不毛な頭脳戦楽しんでいただけたでしょうかw次回はゲストキヤラを出したいなあ……とか考えております。まだ決定してはいませんがww」

ルーク「メニュー画面開いた時のレインのちびキャラの絵って、破壊力抜群だと思うんだ……」

F20C「ああ、それについては否定しないよ……」

バルドのネタは分からなくても全然okですww

第九話 エロゲコーナーの暖簾をくぐるには勇氣がいる……………なんてのは最初だ

またしてもタイトル長ッ!!？

今回はエロゲネタ多しです。作者のやりたい放題ですね、すみませ
ん。

ついカッとなってやりました、後悔はしてません。

さて、今週のスクラバはゲスト回です。

伝説・改先生の神作品『けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE
E！アンコール！！』より、主人公の日暮遼祐さんがゲストとして
遊びに来てくださいました!!!

とまあ、そんな感じで、本編どうぞ!!

第九話 エロゲコーナーの暖簾をくぐるには勇氣がいる……………なんてのは最初だ

男には……………やらねばならない……………時がある。

月末の金曜日、時間は19時過ぎ、部活終わりのルークはそんな決意を胸にしながら、街にある我が聖地『ソフッパ』の前に立っていた。

その服装は普段着、鞆もスポーツバッグではなく、普通のリュックだ。

リュックの中には、学校の制服が突っ込んである。公衆トイレで普段着に着替え、家に寄ることなく学校から直でここに来たのだ。

このあたりで、本日のルークの目的の品について少し説明しておかねばなるまい。

ルークがここまで気合を入れてまで入手したがっているモノ、それは二つある。

まず一つ目、それはBDだ。
ブルーレイ・ディスク

『劇場版 Fate / stay night - UNLIMITED BLADE WORKS』

これが第一目標である。

今年の初めに公開されたのだが、映画館に行こうとするたびにフェイトやはやてたちのバカ騒ぎに巻き込まれ、結局見に行く事の出来なかった作品であり、ルークにとっても楽しみにしていたBD作品なのだ。

そして、第二目標となるモノ、それは……………エロゲだ。

『BAL RSKY DiveX』 DREAM WORLD 』

第二目標としているのはこれだ。Dive1、2ともにアクション性に富み、且つシナリオも というADVソフト。まさに神ゲーと呼ぶにふさわしいソフトである。

ファンディスクが出るということで、ルークはずっと心待ちにしていたのだ。

なぜ高校生がエロゲを買えるのかって？ この作品内では、気にしない気にしない。

リアルでもエロゲユーザーになっている高校生なんて沢山いますから。気にしたら負けである。

ルークがこの日をどれだけ待ち焦がれていたか。

事実、今日のルークは朝からそわそわしていた。授業も珍しく集中できなかったくらいだ。まともに頭が働いていたのは、部活に精を出していた時くらいだろう。

「行くぞ、ソフマップ……ソフトの貯蔵は十分か！！！！？」

そう言つて意気揚々と店内に突入して行くルーク。

財布の中には、BDとバルドスカイの予約券に諭吉が二人、そしてソフマップのポイントカードが入っている、朝から2、3回確認し直したから確実だ。

しかし、その歩みは僅か散歩で止まってしまふ事になる。彼を呼ぶ声によって。

「あれ？ ルーク、こんなところで何してるの？」

「……………ね、ねーさん……………」

ギギギギギと油の切れた人形のように首を動かしたルーク。その視線の先には、今一番会ってはいけない人、フェイトの姿があった。何故彼女がこんな場所に？ とか、様々な疑問は浮かぶものの、この状況下では、BDは兎も角として、エロゲーゲットは至難の業である。

こんどこそ、朝日を拝ませてもらえなくなるかもしれないという恐怖がルークを震え上がらせた。

「ね、ねーさんこそ、こんなとこで何してんの？」

「私？ 私はおつかいだよ？ 空のBDが無くなっちゃったから、買って来てって母さんに頼まれたから」

どうやら、フェイトはただのおつかいらしい。何と云うか、おつかいという歳でもあるまいに、とか思ってしまうが。

「それで？ ルークは？ 何か買い物だったんじゃないの？」

「ああ……………うん……………俺はその……………映画のDVDをね……………ほら、前に言ってた見に行きたかった映画の……………」

「ああ、あのアニメやつだよ。はやてが見に行った、とか言ってたね」

とりあえずの逃げ道として、ルークは本来の目的の内の一つを正直に話す。とりあえず、フェイトもこの時点では何も不審がっていない。

「（大丈夫、俺なら出来る！！　ねーさんの目をなんとかくらませ
て、バルドを手に入れる！！！！）」

その情熱をもつと別の方向に向けるべきだとは思うが、まあ人それぞれ
それぞれということ。

ルークは決意を新たに、フェイトの監視を掻い潜った上で如何にし
てエロゲコーナーに侵入するかを考える。

「（兎に角……　ねーさんを遠くにやるしか……　先にねーさんの買
い物を終わらせて……　いやダメだ、ねーさんの事だ、俺の買いい物に
も付き合うつて言うに決まってる……）」

ルークはフェイトの性格などを考慮し、さまざまなシュミレーショ
ンを行い、もつとも成功確率の高い作戦を練っていく。

「ルーク？　どうしたの、いきなり黙り込んで？」

「い、いや！！　なんでもないよ！！！！　兎に角、店に入ろう、早
く買いい物済ませて帰ろうよ」

「う、うん……」

急に黙り込んだルークを不審そうに見つめるフェイトに、ルークは
思考を一旦止め、彼女と一緒に歩きだす。

「（まずい……　出鼻を挫かれた……。ていうか、ここでねーさんと
エンカウントする時点で、詰んでる気が……　いやいや、弱気になっ
ちゃ駄目だ！！　ここで諦めたら、バルドが遠のく！！）」

ルークは歩きながら作戦を考える。だが、無情にもDVD・BDコーナーは店に入ってすぐのところであり、二人はあっという間に目的のものを手に入れるところまで来てしまった。

「あ、ルークの言っただのはこれだね。BDの方で良いんだよね？」

「あ、ああうん……ありがと、ねーさん」

フェイトがFateのBDを取って渡してくれる。なぜだか、今、ルークは奇跡のような瞬間を見たような気がするが、恐らく気のせいだろう。予約しているので、現物を持っていく必要はないのだが、ここは彼女の行為に甘えておく事にする。予約券を見せれば、特典は確保できるだろう。

「ええと……BDのディスクは……っと……うわ……結構種類があるんだね……値段もイロイロだし……迷っちゃうなあ」

フェイトはすぐに自分の買い物にシフトしていた。BDの種類の高さに驚いているようで、どれにしようか悩んでいる。容量や複数回の使用が出来るかなど、様々な種類を揃えているため、どれがいいのか分からないのだろう。

「ねえ、ルーク、どれがいいと思う？」

「うん……一応繰り返し使えるやつで良いんじゃない？ ちょっと高いけど、そっちのが良いと思うよ。（って、なんで俺は普通に答えてるんだ……!? この隙を利用してエロゲコーナーに直行して物をゲットすればよかったのに……!）」

フェイトがあまりにも自然な感じで話しかけてきたので、ルークもそれに引つ張られる形で普通に返事をしてしまったのだ。
ルーク、千載一遇のチャンスを逃してしまった。

「じゃあ、そうしようかな……。よし！ それじゃあ、レジ行こつか？」

「あ、う、うん……」

ルークはなんの策も講じる事が出来ないまま、FateのBDを手レジに向かう。フェイトも目当てのBDを片手に、一緒にレジに来る。

「（いけない……このままでは、直帰するコースだ……なんとか店内に残らなければ……）」

しかし、無理矢理な理由付けでは、頭の良いフェイトには感づかれてしまう。このお姉さん、普段はぼわぼわしているだけの、ブラコンお姉さんではない。成績も優秀であり、頭も回るのだ。

とか何とか考えている間にも、二人とも会計が終わってしまい、ルーク万事休すな状態に。未だにバルドを手に入れる事が出来ておらず、このままでは敗残の兵となってしまう。

「（と、兎に角、少しでも時間を稼がねば……！）」

ルークは少し強引な手を使う事にする。このままではフェイトの流れに乗せられ、家に帰る事になってしまう。

「ねーさん、ちょっと俺、来月に出るDVDの予約するのを忘れて

て……………」

「え、そうなの？ それじゃあ、その予約だけしてくる？」

「う、うん……………」

「わかってる。ここで待ってるから、早くしておいで？」

「ごめん、ちょっと待っててね。（くっ！！ 手強い……………流石に先に帰っててとは言えないか……………まあいいこれで少しは時間が稼げる……………」

ルークはそう考えつつ、もう一度DVDコーナーに足を伸ばす、この際にエロゲコーナーに行きたいのだが、そこに行くためにはどうしてもフェイトの目に入ってしまう。フェイト自身が、進行ルートを塞ぐ壁となって立ち塞がっているということだ。

「（体がもう一つあれば……………」

と、もう一枚カードが欲しいと思ってしまうルーク。この状況では大人しくDVDの予約だけを済ませ、一旦家に戦略的撤退をするのが賢いかもしれない。だが、ルークとしては早く購入しパソコンにインストールしたいのだ。

今日は徹夜する気持ちでここに臨んでいるので、失敗は許されないと、その時だった。ルークの前に救世主が現れたのは……………

「え〜と……………ガンダムユニ……………ンの予約券は……………っと……………」

ルークの隣で、目当ての予約券を探している一人の男性。ルークは何気なくその方向を見た。

「（こ、この人は！！！！？）」

そして、体に電流が走る。そう、彼の何かが、目の前の青年に何かを感じ取ったのだ。

「??.....!!!!!!？」

そして、相手もルークの方を見て目を見開く。彼も、ルークから発せられている只ならぬオーラに気がついたようだ。そして、二人は同じ事を頭の中で叫ぶ。

「（こいつ……かなりの凄腕だ、間違いない！！！！！！）」「」

二人は互いがバルドマニアである事を、体から発せられていたオーラの何から判断した。どうやら、分かる人には分かるオーラらしい。

「^{ネット}仮想の深みに潜る時は……」

「ワイアード（有線）で」

ルークが確認の為にバルドネタを振ってみる。すると、その青年は即座に返してくる。

「親父の機体名は……」

「ニーズヘッグ（嘲笑する虐殺者）」

相手の青年からも、確認の合図のように問いかけが飛んでくる。ルークはそれにすぐに答えた。そして二人は確信する。

「「同志よ！……！！！」」

ガシィ！！！！！！

二人はそう言つて勢いよく腕を組み合わせた。同じ穴のムジナ、とも言えいいのだろうか、この青年もまたバルドマニアだったようだ。

「俺は、日暮遼祐だ。」

「ルーク、ルークハラオウン」

二人は自己紹介を済ませておく。何と云うか、こんな形で同じ趣味の持ち主と出会うなどとは思つてもみなかつた。

「ルークか……良い名前だな。で……お前もアレを買いに来たのか？」

「うん……でも、ねーさんと鉢合わせしちゃって……買つて買えないんだ……」

「姉さん……？」

「ほら、店の入り口に居る金髪の……」

二人はどこかの特殊部隊のような動きでフェイトの様子を窺う。彼女なのはからでも掛けて来たのだろうか、電話で話し込んでいる。

「お、お前の姉ちゃんめちゃくちや美人じゃねえか!!」

「それだけならいいんだけど……この間、エロ本見つけてされかけた……」

「そ、そうか……お互い苦労してるな……」

「も、もしかしてそう言う遼祐も……?」

「彼女に見つかったら後が怖いんだ……」

どうやら、二人とも似たような悩みを持っているようだ。なんと贅沢な悩みかと思ってしまう。

「なるほど……確かにエロゲコーナーに行くのは無理だな……」

「うん……今日は家帰ってから貫徹する気持ちで来てるんだよね……だから何としても今日手に入りたい!!」

二人はDVDコーナーに体を引っ込め、ヒソヒソと話しあう。あからさまに怪しい二人に他の客からは少し変な目で見られてしまった。

「よし、そう言うことなら俺が代わりに買ってきてやるよ。ほれ、予約券貸しな」

「え?! 良いの?! マジで??」

「当たり前だろうが、同志の危機とあっちゃあ、見捨てるなんて出来ねえよ」

何と言う男前。ルークはそう思った。

今の遼祐からは後光が差して見える勢いだった。

「ありがとう!!! これでまたジルベルトをタコ殴りに出来るよ!!!」

「ノイてんてーにも会わせてやるぜ、もちろんレインにもな!!!」

ルークは遼祐にバルドの予約券を託す。金はお釣りとかが面倒なので、あとで返すことにした。

「んじゃ、行ってくる!!! お前は予定通り、DVDの予約を済ませておけ、またここで落ち合おう。」

「ヤー!!! (了解)」

そして二人は行動を開始する。

遼祐はエロゲコーナーに、ルークは劇場版マクロスのBDの予約券を持ってレジに向かい、予約を済ませたのち、DVDコーナーに集結すること。

エロゲー一つ購入するのにここまで苦勞する人を、未だかつて見た事がない。

ルーク&遼祐「オープンコンバット!!!!!!」

「ほれ、買って来たぞ」

「おお！！！！　ありがとー！！　はいこれ、お金」

「おう、確かに」

二人は商品と購入代金を渡し合い、作戦の成功に満足気な様子だ。かなりきわどい作戦ではあったが、ルークにとっては渡りに船、文字通り遼祐は救世主だった。

「じゃあ、さつさと姉ちゃんところに行った方が良いな。流石に時間がかかり過ぎてるし……………」

「だね。行こうか」

これ以上、時間が掛ってしまつと流石にフェイトを待たせ過ぎることになる。そうなつては何か不審がられてしまうので、二人はそそくさとフェイトの所に向かうことにした。

電話はすでに終わっていたらしく、彼女はルークが戻ってくるのを待っているようだ。

「ごめん、待たせちゃって」

「ううん。大丈夫、なのはからの電話で少し話しこんじゃってたら。あれ？　そっちの子は？」

「はじめまして、日暮遼祐といいます。ルークとはさっき知り合っ

たばかりでして……」

遼祐はフェイトに丁寧に自己紹介した。

「そうなんだ。えっと、私はフェイト」ハラウンっていいいます。
ルークのお姉ちゃんです」

「だから……なんでそこで俺の腕に手を絡めて来るのさ………」

「ダメ……?」

ルークが腕を組んできたフェイトに少し抗議すると、彼女は上目づかい+ちよつと涙目という凶悪コンボを使用してきたのだ。いくらルークといえども、このコンボからは逃れることは無理だった。

「だ、ダメじゃない……けど………」

「じゃあ、良いよね。家までこうしたまま帰るのも」

「えー!?!?」

どうやら地雷を踏んだらしい。帰り道は女性とは言え、姉と腕を組んで帰えるという恥ずかしいイベントになってしまった。

「ははは……仲良いよな二人とも。ルーク、良い姉ちゃんじゃないか?」

「ま、まあ……それは否定しないけどさ………こつやってベタベタしてくる悪い癖さえなければ………ね」

遼祐はそんな二人の姿に苦笑しつつ、ルークにそう言った。ルークは恥ずかしいのか、顔を赤くしながらそう返事した。

「おっと、じゃあ俺はこつちだから。ここで、な。」

「あ、うん。今日は本当にありがとう。助かったよ」

駅付近で遼祐とはお別れになる。どうやら、彼の家は逆方向らしい。

「なあに、良いってことよ。そういや、ルークとフェイトさんはどこの学校なんだ？」

「俺たちは聖祥大付属だよ。」

「そうなのか、俺は桜ヶ丘なんだ。ま、お隣さんみたいだし、また会えるだろうな。」

遼祐はこの間、野球部で試合をした桜ヶ丘高に通っているらしい。案外近くに住んでいるようだ。

「それじゃあな、ルークにフェイトさん。また会おうぜ！」

「ああ、またね遼祐」

「気をつけて帰ってね？」

三人はそう言葉を交わし、それぞれの帰路へと着いた。ルークのリュックの中には、バルドのソフトが入っている箱がしっ

かりと隠されている。

一時はどうなるかと思ったが、なんとか手に入れる事が出来た。本当に、遼祐様様だ。

この偶然の出会いに、ルークは深く感謝しながら、フェイトと腕を組むという羨ましいシチュエーションの中、家に向かって歩みを進めるのだった……………

「ところで、ルーク？」

「ん？ なに、ねーさん？」

「鞆の中に入ってる大きな箱は一体何なのかな？」

ルークの表情。　（　）。　エツ？

帰宅後、ルークの部屋にてバルドスカイのパッケージを挟んで、ルークはフェイトによる折檻を受けた事は言うまでも無いだろう。

「も、もう……………！　なんでこんなエツチなゲームばかり……………！　そんなにエツチな事したいなら、お姉ちゃんがしてあげるよ……………！！」

「それはダメ!!!! 倫理的に問題大アリだから!!!! ごめん!!!! とりあえず謝るから、その怪しいロープと赤い蝋燭とか鞭をしまつて、ねーさん!!!!!! ねーさんのそつち方面に関する知識の偏り方が怖くて仕方ないんだけど!!!!?」

「だ、だって、だって!!! ルークって女の人を虐めて喜んじやう変態さんなんでしょ!!!!? こないだのエッチな本にもこういうこと書いてあつたし!!!! お、お姉ちゃん、ルークになら虐められても良いから…… ああ、でも他の子にはしちゃ駄目だよ? 流石に受け止めてくれる子はいないかもだから……」

「俺の趣味はそこまで歪みきつてないから!!!!!! あれは趣味の一部だよ、あれが俺の全部じゃないから!!!!!! だから落ち着いてよねーさん!!!!!!」

フェイトによる折檻は翌朝にまで続き、バルドを徹夜プレイするどころか、インストールすることすら出来なかったルークだった……

というか、フェイトからの認識が物凄く気になって仕方ないルークだった。

第九話 エロゲコーナーの暖簾をくぐるには勇気がある……………なんてのは最初だ

フェイト「あのあと……………ルークすごかったよね……………」

ルーク「いや、何もしてないから。朝までお説教で疲れ果ててただけだから」

F20C「とか言いつつも、フェイトさんにSM的なプレイをしたんですね、分かります」

ルーク「やってないってば!!!!!!!!!!」

フェイト「……………ポツ／／／／／」

ルーク「姉さんもややこしいリアクションはいらないから!!!!!!!!!!」

F20C「というわけで、今回のゲストは伝説・改先生の作品、けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！アンコール！！ より、主人公である日暮遼祐さんがゲストとして友情出演してくださいました!!!!!!!!!! 伝説先生、本当にありがとうございます」

ルーク「恐らく再登場されると思うので。その際にはまたよろしくお願い致しますw」

F20C「さて、今回は王様ゲームをやっていたいただきますwwさて

はでどなってしまっのやら……どう「期待」！」

第十話 王様ゲームとは、人類の英知を脈々と受け継いできた由緒正しきゲーム

長くなりそうなので、二回に分けますw w

今回は予告していましたが通り、王様ゲーム回です。

エロ回と思っていたで差し支えないと思いますw w

でわでわ、本編スタート!!

第十話 王様ゲームとは、人類の英知を脈々と受け継いできた由緒正しきゲーム

「王様ゲームでもしよか」

全てはこのはやてからの一言で始まった。

いつもと同じ昼休み的一幕。違うことといえば、今日は土曜日の授業で午前中しか授業が無く、あとは部活をするなり帰るなり、というように選択肢の多い日であることだった。

ルークとリオスは前者であるが、練習までには2時間ほどあるため、かなりゆつくりと昼食を取る事が出来るというわけだ。
なのはとフェイト、生徒会のはやても同じような感じだった。

「いや、いきなり王様ゲームって……合コンとか飲み会じゃないんだから……」

「いや、だってな？ このお昼休みにしては長い時間をどないして潰すか、結構難しいで？」

そう言うわけで、王様ゲームや」

「あんまり理由になつてないような気が……」

はやての言い分に突っ込んだルークとアイリスは苦笑いするしかない。こうなつたはやては最早誰にも止めることなど出来ない。

「あのお……王様ゲームって……？」

ルーク&リオス「何想像したのさ！！！！？ 一体何を想像したのか一字一句説明してくんない！！！！？ 僕らの貞操に関わるような気がしてならないんだけど！！！！？」

フェイトとなのはが顔を真っ赤にしながらの妄想に、ルークとリオスは素早く突っ込みを入れる。

何故だか、フェイトは受け側、なのはは攻め側とそれぞれ相手に求めているモノが違う事がよく分かるような気がした。

「で？ フェイトちゃんとなのはちゃんはどうする？ 参加するん？」

二人「是非！！！！！！」

「なんだろ……今すぐここから逃げたくなってきたかも……」

「ははは…奇遇だな、実は俺もだ……」

はやての参加の確認に、光の速さで参加の意を示すのはとフェイト。

二人のそんな姿に、ルークとリオスはどこか疲れた顔をしていた。これから起こるであろう惨劇を想像したのだろう。

「なら決定やな。ほな、王様ゲーム、始めるで！！！！！！」

ルーク達「……お、お……！！！！！！」

こうして、地獄への門が開かれた。

メンバー一覧

ルーク

フェイト

リオス

なのは

アイリス

ティアナ

はやて

ルール

『王様の命令は絶対』（逆らったらスターライトブレイカー）

『基本的に金銭的、犯罪チックな命令以外ならオールおk』

『くじは全員同時に引く』

『プレイヤー同士のくじの交換は認められない』（交換した場合はルークによる萌え談義を二時間聞かせられる）

『命令は数字で指名すること』

以上

一回戦

全員「「「王様だーれだ！！！？？」」」

全員同時にくじを引き、各々自分の番号ないしは王様のマークを確認する。

そして記念すべき王様ゲーム一回目の王に君臨したのは……

「あ、私ですね」

「あ、アイリスか……よかった……」

「そうだね、アイリスならとんでもない命令は無いだろうし……」

王様のマークが刻まれたくじを手にも、王様宣言をしたのはアイリスだった。常識人である彼女が王様ということで、ルークとリオスはホッとしていた。

「ほなアイリス、記念すべき一回目の命令いこか？」

「あ、はい……ええと……それでは……」

アイリスは少し思案した後、うんと頷くと、命令を下した。

「4番の方、これ以降は語尾を『にゃあ』で統一してください」

ルーク&リオス」「意外にレベル高い命令してきた!!!
「!!!?」

常識人だと思って舐めてかかっていたルークとリオス的には、アイリスがこう言った命令を下すとは思っていなかったなので、少し驚いてしまった。

彼女もこのゲームの本質を理解した上で、盛り上げようとしているのかもしれない。

「あう……4番私だ……」

そして、ご指名の4番として手を挙げたのは、フェイトだった。ということで、これ以降、フェイトは語尾を『にゃあ』で統一、平たく言えば猫語を使うことになるというわけだ。

「ほんなら、フェイトちゃんはこれ以降、語尾は『にゃあ』、もしくは猫語やな。アイリス女王もそれでよろしいか？」

「はい!!」

はやての補足兼確認に、楽しそうに答えるアイリス。彼女としてはこう言ったイベントモノは好みのもので、なかなか楽しんでいるようだ。

「うう……語尾を統一って……結構難しい……に、にゃあ……
／／／／」

「グハッ!?!?!?」

「る、ル……ルーク!?!?!?!?!」

フェイトがはにかんだ様子で『にゃあ』を語尾に付けるといური
サルウエポンに、ルークの萌えドライヴがトランザムバーストした
ようだ。

高濃度の萌え粒子（鼻血）を放出し、満ち足りた表情で昇天してし
まっている。

「る、ルーク！！！？？ 大丈夫…にゃあ…？」

「ゴハツ！！！？」

「フェイトさん、今は、今だけはやめてあげて！！！！ ルークの
ライフはとくにゼロです！！！！！」

ルークに追加攻撃（本人にそのつもりなし）をしてしまうフェイト。
だが、ルークは恍惚とした表情を浮かべたまま、しっかりと携帯の
ボイスレコーダー機能を使用しフェイトの猫語を録音していた。

どんな時も萌えに対して一切の妥協を許さない。彼がエロティック
大統領と呼ばれる所以はこう行った処にあるのだろう。

王様ゲーム、一回戦目から流血沙汰という事態に、一同はこのゲー
ムの危険性を改めて再確認し、二回戦に臨むのだった。

ルークがなんとかこちら側に戻って来て、漸く王様ゲームが再開さ
れた。

全員「「「王様だ〜れだ!!!?」」」」

そして、二回目の王様が選出される。ルーク達全員が、緊張の面持ちで自分たちのとったくじを開いてみる。
そして、王様となったのは……

「うちが王様やな」

「リオス、帰ろうか」

「そうだね、ちょうど新しいスパイクが欲しかったところだから、市内まで買い物に行こうかと思ってたんだ」

「オツケー。是非とも一緒にさせてくれ」

はやてが王様と分かった瞬間、ルークとリオスはその場を後にしようとする。

ハッキリ言つて、彼女が王様という時点で嫌な予感しかしないのだ。

「はい、その二人。一旦参加したら、このゲームからは逃げられへんで？」

二人「「い〜〜〜〜や〜〜〜〜〜〜〜〜!!!!!!」」
だつて、下に走るのが目に見えてるんだもん!!!!!!」

はやてに首根っこを引っ張られながらルークとリオスは元いた場所に引き戻されてしまった。

王様ゲーム、それは一度でも足を踏み入れたら最後、リザイン不可という厳しいゲームでもある。

「まあまあ文句は命令を聞いてからにしようや。そんなら………2
番と3番の人、この本を朗読してもらおか。」

そして、はやてからの命令が下る。

栄えある犠牲者となつたのは……………

「あ、二番つて私だ……………」

「さ、三番……………orz」

二回戦結果

王様 はやて

二番なのは

三番 リオス

「ほ……………」

ルークがあからさまに安堵した様子で息を吐く。とりあえず、二回戦はなんとか切り抜ける事が出来たようだ。

対して、リオスは完全に心が折れてしまったようだ。なのはは朗読する本をはやてから手渡されながら、ドキドキした様子だ。

「二人とも、中は見たらあかんで？ それと読むときは感情をこめて、登場人物の名前は自分らに合わせて読むように」

「う、うん……………この厚さ……………文庫本か何かかな……………」

「何故だろう、はやてさんの持ち物な時点で詰んでる気がするの……………」

リオスも観念したようで、はやてから本を受け取り読む体制になる。ルークやフェイト達は、何が始まるのかという様子でドキドキしている。

「でわ、朗読開始」

ここからはなのはとリオスの朗読をお楽しみください。

二人は同じ会社に勤める同僚同士だった。なのはの方が一歳年上、先輩ということで、彼女は後輩であるリオスを可愛がっていた。

リオスも彼女の指導の甲斐あってか、新人の中でも仕事の覚えが格段に早く、上司からの評価も高いものになっていった。

だが、彼にとってはそんな評価よりも大切な事があった。そう、なのはと一緒に仕事をする時間、言いかえれば彼女と共に居られる時間だ。

自分の世話を色々と焼いてくれるなのはに、リオスは完全に惚れていた。

リオス「はあ……………なのはさん……………」

リオスは昼休みの屋上にて想い人の名前を呟き、物思いに耽る。こ

このところ休みに入るたびにこんな感じだ。

一步を踏み出す勇気がなかなか出せない。関係を崩してしまう事が怖かった。

今のまま、ぬるま湯に浸かったような状態に身を任せてしまったままでいたかった。

だが、心の中でもう一人の自分が言うのだ。「本当にこのままでもいいのか？」と……

そして、同じような悩みを抱えた女性がいた。

「リオス君……結構アプローチかけてるつもりんだけどなあ……全然だし……私って魅力ないのかなあ……」

そう、リオスに想い人、なのはその人である。

彼女もまた、年下のかわいい後輩に惹かれつつあった。彼と一緒に居ると、どうしようもなく癒されてしまうのだ。

一種の麻薬のような感覚さえ覚えてしまう。なのはの体が、本能的にリオスを欲していた。

そして、そんな微妙な関係だった二人の均衡を崩す事件が起こる。それは起こるべくして起こった。

「きゃ……！」

「危ない……！」

切っ掛けは些細な事だった。バランスを崩したなのはを、リオスが受け止める。そう、ただそれだけ。

だが、この二人にとってはそれだけの事でも大事件なのだ。

「は、はひ!!!?」

思わぬ爆弾発言でリオスの脳細胞が沸騰するところだった。
その間にも、なのはの手は動き、リオスの服を脱がせていつてしま
う。

そして、普段の優しい眼差しを秘めていた瞳に、妖艶さを浮かべ
なのはがリオスに宣言する。

「リオス君……………いただきます……………だよ……………」

リオスを見降ろしていたのは、優しい先輩であるなのはではなく、
リオスにとっては初めて見る事になった女のなのはの姿だった……

……

なのは& a m p ;リオス「……………
……………
……………」

その他全員「……………」

朗読が終わり、その場に居た全員が固まってしまっていた。
発起人、命令を下した王様、はやてもまた、なのはとリオスの朗読
に呆氣にとられていた。

「な、なんというか……………お二人とも物凄い演技力でしたね……………」

第一声を放ったのは、アイリスだった。苦笑いを浮かべてしまうのは仕方ないだろうが、こうして切り口を開いてくれたことは有難い。

「だ、だよな。ていうか、寧ろ真に迫るような……そう、生の感情を込めてたって言うか……」

二人「！？　／／／／／／／／／／／／／／／／」

ルークの言葉になのはとリオスはさらに真っ赤っかになってしまう。

「バカ！！　止め刺してどうすんのよ！！」

「いや、だってさ。他に何言えばいいんだよ？」

「そりゃあ……ほらアレよ……痛くなかったの？　とか……」

「いや、そっちの方がアウトだと思う……」

どうやら、先程の毒気にティアナもやられてしまったようだ。普段のような冷静な思考が働いていない、寧ろ少し妄想が入っている。

「ええ」と……そうにや！……早く、三回戦行ってみようにや！……」

「あ、ああそうやな。二人もそれでいいか？」

二人「（コクコク）」

フェイトが気を利かせて二回戦の宣言をする（しっかりと語尾を猫

語にするのを忘れずに)。このままでは、このなんとも言えない空気のまま時間が過ぎてしまうような気さえした。

はやてもフェイトの助け船に乗っかる形でなのはとリオス（真っ赤）に確認を取り、二人も顔を俯せたまま、こくこくと頷いてくれた。

一同は微妙な空気の中、王様ゲーム三回戦を始める事になった。

なんというか、ここまで気を使う王様ゲームは始めてだと、ルークは内心で思っていた。

全員「「王様だゝれだ！！！？？」」

そして、くじを再び引くルーク達、なのはとリオスも少し持ち直したようだが、未だに頬が赤いままだ。

しかも、お互いに意識しまくっており、先程から互いをちらちらと見合っている。視線が合うたびに、サッと顔を背けるといいうようななんともこそばゆい光景がそこにはあった。

次回に続く！！！！

第十話 王様ゲームとは、人類の英知を脈々と受け継いできた由緒正しきゲーム

リオス「////////////////////」

なのは「////////////////」

ルーク「ねえ、どうするのさあの二人……………未だに意識しまくってるって…………」

F20C「流石にあの二人には刺激が強すぎたかな……………」

ルーク「純情カップルだしね……………そこが売りでもあるんだけど……………」

F20C「まあ次回までには何とか復活してもらわないとね。次回の後半、王様ゲームはまだまだ加速して行きますよwww」

ルーク「不安だ……………でわ、次回もお楽しみに!!」

第十一話 王様ゲームとは、人類の英知を脈々と受け継いできた由緒正しきゲ

さて、王様ゲーム編も今回で終了でございます。

ルークとリオスの運命やいかに！！！？

まあ、どっちにして美味しい思いをする二人に嫉妬の念を覚えずにはられないのですがww

でわでわ、本編をどうぞ！！！！

第十一話 王様ゲームとは、人類の英知を脈々と受け継いできた由緒正しきゲー

「王様だ〜れだ!!?」

前回に引き続き、そんな元気な掛け声と共に幕を上げた王様ゲーム。はやてのエロ小説の朗読という恥ずかしさ爆発の命令を受け、それを実行に移さざるを得なかったリオスとなのはは未だに浮足立った様子だ。

だが、ゲームは二人を待つてはくれない。王様ゲームは時に非情なのだ。

「さ〜て、王様は誰や?」

そう言うはやては恐らく王様ではないのだろう。それだけでもルークとリオスはホッとしてしまう。

先程のエロ小説朗読レベルのものをまだ隠し持っている事は火を見るよりも明らかだった。

「あ。僕だ……」

そう言つて、王様と書かれたくじを高らかに掲げたのは、先程撃沈させられたリオスだった。

王様という絶対者の地位（一時的）を手に入れた彼なのだが、いざなってみると命令の内容を決めかねてしまうようだ。

「リオスが王様か……命令とかでなのはちゃんにいやらしい事し

リオスの命令、それは屋上から、自分の恥ずかしい体験を暴露するというものだ。これならば、誰に当たってもそれなりのダメージになる筈だ。

先程からの連続攻撃に対するささやかな反撃ということだろう。狙いははやて、もしくはルークである。

だが、やはり人生はそんなにうまくは行かない物で……

「うう……私だ……にゃ、にゃあ……」

前回の語尾を猫語で統一するという罰ゲームを律義に継続しているフェイトが、三番のくじを皆に見えるように見せる。
なんというか、今日は当たりの多い日である。

「フェイトちゃん、その語尾で屋上からシャウト……うん、多分校庭に残つとる運動部が何人かやれてまうやろうな……」

「にゃはは……フェイトちゃん、人気あるもんね」

「む……」

はやてやなのはがそう話しているのを聞いて、ルークは少し面白くないような顔をする。

どこの馬の骨とも知らない輩に、姉は渡さん、というような気持と、自分でも何なのかよく分からない気持ちちがルークの表情をそうさせた。

「おやあゝ？ ルークどないしたんや？ フェイトちゃんに人気があるのが、ちょっと気になったりするんか？」

「べ、別に!!」

はやてがそんなルークを放っておくわけ無く、すかさず突っ込んでくるが、ルークは即座にあさつての方向を向き追及を逃れる。

「それじゃ、フェイトさん。恥ずかしいかもしれませんが、どうぞ……………」

「うう……………わかったにやあ……………」

「ほんま、フェイトちゃん律義やわ……………」

リオスに促され、フェイトは屋上から校庭を見渡せる所に立つ。見れば、運動部の何人かが既に準備を始めており、それなりの数が揃っている。

今からここで恥ずかしい経験をシャウトするとなると、それはも恥ずかしいだろう。

「それじゃ……………いくにや……………」

フェイトは大きく息を吸い込み、大声を上げる準備をする。彼女はもともとはそんなに大きな声を出さない方だが、その声は透き通っており、大変耳に良いともっぱらの評判である。

そんな彼女がこうして大声で話そうとしている。これはかなりレアな光景だろう。

そして……………

「こ、この前!!! ルークに、『一緒にお風呂入ろう?』って言ったら、絶対にダメ!!!!って断られちゃったのが、悲しかった!

「！！！！にゃあ……」

・
・
・
・
一同の顔（。。。）

校庭に残っていた生徒達 ポポポポ（。。。。。）
。。。。ポカーン……

「あ、あれ……？」

余りの衝撃に、現場に居たルーク達だけではなく、校庭に残っていた生徒たちまでフリーズしてしまっていた。
このおかしな沈黙に頭にはてなマークを浮かべているのは、かなり
際どい事をカミングアウトしたフェイト本人のみである。

「ちょー！！ちょっと、ねーさん！！！！？ なんて事を暴露しちゃ
うのさ！！！！？」

「だって、だって！！！！ 偶にはいいかなって思って、勇気だして
誘ったのに……。ルーク意地悪にやんだもん！！！！」

「ここでも猫語を忘れへんとは…… フェイトちゃんやるなあ……」

我に返ったルークが慌ててフェイトにそう言うが、そんなもの知ったこっちゃないというような感じで、フェイトは頬を膨らませる。
（その仕草にちょっとかわいいな、とか思ってしまったのは秘密である）

そして、そんな衝撃的な暴露があつたのだ。無論、校庭でこれを聞いていた輩（主に男子）が黙っている筈も無く…………

「ルーーーーークううううう！！！！！！！！！！ てめえええええ！！！！ 週明けの学校はお前の血の雨で真っ赤になる事を、ここで宣言してやろう！！！！！！！！」

「あいつ………… あいつばかりそんな羨ましいイベントを発生させやがってえ…………！！！！ ちくしょう！！！！ 俺にもフェイト先輩みたいなお姉ちゃんいたら…………」

「でもさ、あの二人ならそれ以上の事はすでに経験済みとか…………」

「バツカお前、あの二人姉弟だぜ？ そんなことになってみるよ…………… うほww背徳感マックスで興奮してきた…………」

「ええ、そこはやっぱり、ルーク君はリオス君とのカップリングでしょ？ ルーク君ってDSだから、きっとM気質のリオス君がひたすらに虐められちゃうんだよ。ルーク×リオス、これだけは譲れないわ」

「あら？あなたってそっち系イケるの？今夜は飲みましょうか？」

「待つて待つて！！そこはリオス×ルークよ！！！！ きっと、普段はDSなルーク君も、ベッドという名の四角いリングの中では虐められたくなっちゃって…………」

などなど、様々な方向に飛び火してしまう。最早校庭はカオス状態である。

「ほら見たことか!!! 週明けの学校で俺の処刑が決まっちゃったじゃないか!!!!」

「それ以前に突っ込むべき所があるでしょうが!!! なんか、あんたとリオスのカップリングで女の子たちが物凄い勢いで盛り上がってるわよ!!!?」

「この学校……まともな奴はおらんのか……」

「にはは……まあ、会長さんがはやてちゃんだもん、仕方ないよ」

「ちょっと、なのはちゃん!!? その台詞の真意を聞かせてくれへん??! 事と次第によつては、うち泣かなあかんのやけど!!」

「こ、こんなはずじゃなかったのに……人を呪わば穴二つとはこういうことか……」

と、屋上に居たルーク達もフェイト発、お風呂宣言ショックによって大混乱だ。ルークが頭を抱えて絶望したり、ティアナが突っ込みを入れたり、なのはとはやてが友情の再確認の必要性を見つけていたり、リオスが藪蛇でorzになっていたり、実に賑やかである。ここまでネタに困らない連中というのも、また珍しくもあるが。

「ま、まあまあ……。もしかすると、そう言う需要もあるかもしれないじゃないよ? ルーク×リオス……。ちょっと良いかもしれないじゃないですか////////」

ルーク&リオス「アイリスもそっち側！！！！？」

「じゃあないなあ……今度そっち系の同人誌を貸したるわ。結構ハードな奴とかも一緒に……」

「はやてさんは黙ってて、お願いだから！！！！話がややこしくなる！！！！」

アイリスの新しい可能性が垣間見えた瞬間でもあった。

閑話休題

「はあ……………」

「ああ……………」

「疲れちゃったかも……………」

「まあ、あれだけ騒いだらこうなるわな……………」

あの騒動をなんとか乗り越え、一同は再び円形に座っていた。もちろん、彼らの中心には王様ゲームのくじが入った箱が置かれている。あんな事があつたにも拘らず、やめるつもりはこれっぽっちも無いようだ。

「あ、そうだ。ちょっとこの辺りで休憩しませんか？ 僕、お菓子持って来たんです。」

「おお！！！！ ナイスや、リオス！！ あんたはやれば出来る子やっつて信じとつたで！！！！」

「はやてったら……現金にやんだから……」

なんだか、フエイトの猫語が標準っぽくなって来たのは気のせいだろうか？ なかなかどうして様になって来ているような気がしてならない。

と、そんな話を話している間に、リオスは持ってきたお菓子を全員に配る。どうやら、チョコレート系のお菓子のようだ。十円玉サイズの球体型のチョコをその場に居た皆に振舞ってくれた。

そのチョコレートが自らの首を（正確にはルークの首も）締めることになるとは露とも考えずに……

「おお、美味い！！ 相変わらず、リオスはお菓子作りが上手いな」

「リオスさんにこんな特技があつたなんて……」

「うん……いつも通り美味しいわねこれ。なんだかちょっと大人な感じのチョコね」

「ホンマやな。なんやら……このほのかな苦みというか、コクというか……」

ルーク、アイリス、ティアナ、はやてはリオスのチョコレート？

を堪能している。

どうやら、リオスのお菓子は新しい事に挑戦したらしく、少し大人な仕上がりになっていたようだ。

「ああうん。ちょっとだけだけど、お酒が入ってるんだ。ウイスキーボンボンみたいな感じ。まあ、お酒といっても少量だしねこれで酔う人なんていないでしょ」

「……………お酒……………だと……………？」

「ああ……………ヤバいわねこれ……………」

大人な感じの正体はどうやらお酒だったらしい。まあ、お菓子に入れる量なので、高が知れているのだが、ある事を知っているルークとティアナは青ざめた表情をしている。

そして、二人の視線の先にはなのはと一緒に、リオス特製ウイスキーボンボンのものを食べているであろう、なのはとフェイトの姿があった。

「え……………？ 何かまずい事でも……………」

と、リオスがまずい事でもしてしまったのかと聞いてくるが、時すでに遅し。フェイトは既にチョコレート（お酒入り）を平らげてしまっていた。

ルークとティアナは『まずいなあ』というような表情のままである。

「よし！！ それじゃあ、次のゲーム行ってみようにや」

リオスの心配をよそに、フェイトは元気よく王様ゲームの続きを宣言する。

少しテンションが高いのが少しばかり気になるが……………？

「おー！！！！」

フェイトに続くように、なのはもテンション高めで乗っかる。

「なのはさんもなんだな……………」

「まあ、お約束な感じもするけどね……………」

「え？ え？ 何々？？ なんなのさ？」

二人で納得してしまうルークとティアナに、リオスは若干の焦りを覚えてしまう。自分の持って来たものが、それだけエライ事の切っ掛けになってしまっていると思うと、居てもたっても居られなくなつたのだ。

「ああ……………実はねーさんな……………あと多分なのはさんもだけど……………」

「う、うん……………」

かなり真剣な、それでいてどこか諦観している感じすら窺えるルークの表情に緊張しながら、彼の話を聞くリオス。

「ねーさん……………異常にお酒に弱いんだ……………お猪口一杯の料理用のお酒で泥酔するくらいのレベルで……………」

こうして、さらなるカオスがルーク達を襲う事が確定された。

お酒、それは時に人の心を癒し、豹変させる。そのお酒の魔力に、若者たちは翻弄されることになるのだ。

「私が王様にやゝ」

そして、再開された王様ゲーム。
王様宣言を、巧みに猫語を使いこなして宣言したのはフェイトだった。

「終わった……さよなら、俺のいろいろな初めて……」

ルークはどこか遠い目をしながらそう呟いている。ティアナ達も、フェイトとなのはの明らかにおかしいテンションに、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それじゃあゝ……」

そうして、命令を下そうとするフェイト。どうやら度の番号を選ぶのか熟考しているようなのだが、あからさまにルークの方に熱い視線を送っているように見えるのは気のせいだろうか？

「ルーク、今持つてくるくじの番号を覚えてくれたら、この前没収したエッチな本返してあげようかにやあゝ？」

「四番です！……！！……！！」

ルークを除く全員が『あ、やつちゃったよこの人』というような顔になった。

自らの煩惱によつて、その身を破滅に（正確には羨ましい経験）導くことになつたルーク。

もちろん、フェイトがルークの大パ力を見逃すわけもなく……

「王様として宣言するね。今回、四番を引いた人は以降のゲームでは、くじの番号を王様に公開する事にやあ」

「な、何いいいいいいいい！！！！！！！！」

その声は、ルークの上げた悲鳴だった。そして、彼の手から？と書かれたくじが地面に向かってひらりひらりと落ちていく。

「こ、こんな裏ワザが……、ねえ、はやてさん、これってありなの????!?!」

「うん……微妙なこやけど……うん、おもしろそうやしアリやな」

「納得出来ねええええええええええ！！！！！」

「いや、ルーク……ほぼルークの大ポカが原因だと思うんだけど……」

地面に崩れ落ちるルーク。身から出た錆とはまさにこのこと。リオスの言い分も尤もなので、それ以上反論できない。

だが、この次のゲームで、ほとんど同じ手法をなのはが使って、リオスも王様に自分の番号を教えなければなくなってしまうのだ

った。

そして、王様ゲームはフェイトとなのはの独壇場と化した。

「それじゃあ……………二番は以降のゲームを王様の膝枕でプレイすることじゃあ」

「なななな！！！！！？？？　なんで膝枕！！！！？　そんな体勢でゲームをプレイなんて……………その……………精神衛生上も……………」

「王様の命令やで、ルーク……………」

「orz」

ルークはフェイトの膝枕で以降のゲームをプレイすることになったり…………

「一番は以降のゲームを、今の王様をお姫様抱っこしながらプレイすることなの」

「おおおおお、お姫様抱っこ！！！！！！！！？」

「なのはさんも容赦ないなあ……………」

フェイトに膝枕されながら、しみじみと呟くルーク。その目には同類を憐れむようなそんな色が滲んでいた。

「やん！！ リオスく〜ん……？ 右手が胸に当たって……ひゃうん！！！！」

「あう、あう……ご、ごめんなひゃい…… / / / / / / / / / / /」

「もう……そんなに私の胸触りたいなら、いつでも言ってくれば、24時間ウエルカムなのに…… / / / / /」

お酒の力とはここまで人を変えるものなのか。フェイトものはも、物凄い酒乱だ（悪い方向に）。

しかも、二人とも大胆になりまくっており、王様になるたびにそれぞれルークとリオスの番号を開示させて命令を出す。少しエッチなものまで種類は様々である。

ルーク以外の面子はというと、はやてはなぜか屋上の片隅で亀甲縛りで吊るされている。

ティアナとアイリスは、はやての持ってきた際どいBL本を朗読させられて真っ赤っかになってぶっ倒れていた。

屋上は最早屋上ではなくなった。

そう、それはさながら戦場だった。

「私が王様なの〜」

「わわ！！　なのはさん、そんなに暴れないで！！！」

王様になってそんなにうれしいのか、リオスの御姫様抱っこの状態で体を動かすものだから、少しよろけてしまうリオス。

まあ、その大きな原因は、彼に手に当たる胸とか、形の良いお尻などが大部分を占めているのだが。

「それじゃあ、それじゃあ……………リオス君は、今日、私のお父さんに挨拶すること！！！！　ただならぬ関係ですって、ちゃんと説明しなきゃダメだよ？」

「それなんて死亡フラグ！！！！？　なのはさんのお父さんが激昂するのが目に浮かぶんですけど！！！！？」

罰ゲームによって、生命の危機に見舞われるフラグを立ててしまった者。

「わーい、また王様にゃあ　ええと……………二番……………ルークは今日、王様と一緒に布団で、抱き枕にされながら寝ること！！！！」

「ちょっと待った！！！！　流石にそれはダメだって！！！！　俺の理性が……………！！！！」

「あれれ……………？　ルークったら、お姉ちゃんに欲情しちゃったりするのかにゃあ？」

「ち、違うよ……!!」

続けている危ない路線の命令に、流石のルークも最早正常な判断ができなくなり始めている。

失言から、フェイトに隙を見せてしまう事になる。

「あはは……… ルークがオオカミさんになったら、私美味しく食べられちゃうんだにやあ」

「食べないよ!!!」

「だ、大丈夫だよ？　そうなったとしたら、お姉ちゃんが優しくリードしてあげるから……／／／／／／／／／／わ、私ももちろん初めてだけど、その……ちゃんとそつち方面の勉強はしてるから……！」

「そう言う問題じゃないからあああああああ！！！！！！！！！！」

ある者は、貞操の危機を迎えていた。

こうして、様々な爪痕を残しつつ、王様ゲームはその後も繰り広げられていった。

ルーク&リオス「誰か、助けてくださあああああああい
!!!!!!!!!!!!」

海鳴の空に、男二人の叫びが舞い、それは飛行機雲と同じように広く、青い空に消えていった……………

余談だが、翌週の月曜日、ルークとリオスが異端審問会によって裁かれたのは言うまでもない。

第十一話 王様ゲームとは、人類の英知を脈々と受け継いできた由緒正しきゲ

ルーク&リオス「……………（魂の抜けた表情）」

F20C「ああ……………何というか……………乙」

ルーク「結局、あの日は一睡も出来なかった……………姉さんが胸を猛烈に押し付けてきて……………」

リオス「まだいいじゃないか……………僕なんか、なのはさんのお父さんと、どこから出てきたのか、お兄さんにひたすら剣の修業（リンチにしか見えない）に付き合わされてて、体中が痛いよ……………」

F20C「でも、そのおかげであの二人に認めてもらえたんだし、良かったじゃないか？ これで婚前の挨拶が少し楽になったと思えば……………」

リオス「こ、婚前って……………」

F20C「さてさて、真っ赤になっているリオスは置いておいて……………次回はダブルデートです。なのは×リオス、そしてルーク×……………誰にしようか……………悩むなあ……………」

ルーク「いや、そこはもうなのはさんとリオスのイチヤイチャデートの観賞会で良いじゃん」

F20C「まあ、それも考えたんだけどね。一応君が主人公なわけだしね。ううム……………君の相手をだれにするか……………フェイトさんか……………ティアナか……………アイリスか……………あれ？ なんだか段々ムカつい

てきた。お前の周囲女の子多すぎだろ??!」

ルーク「今さら!!!?」

F20C「お前なんか、お前なんか………納豆のプールで溺死すればいいんだ!!!!」

ルーク「なんて臭い死因なんだろう………」

F20C「というわけで、ルークのデート相手をだれにするか……
……少し皆さんのご意見を頂ければww」

ルーク「ここでルート分岐とかするの?」

F20C「さあ、それはどうでしょうwwでわでわ、また次回ww」

第十二話 そうだ、遊園地行こう その？（前書き）

さて、今回の主役はリオス×なのはです。

二人のデートを陰ながら支えるべく、ルークとティアナが（悪ふざけしながらも）奮闘いたします。

そして、終盤ではあの二人が満を持しての再登場！！

加えて、エロティック大統領の覚醒！！？ 萌えドライブがトラムザムバースト！！

ルークの提唱する擬人化萌え理論に新たなページが加わる……………

と、そんな感じで始まります、でわ本編どうぞ！！！！

第十二話 そうだ、遊園地行こう その？

『よしリオス。まずは腕組め。オーバー』

「腕！？ いきなり組むの！！？ それはいきなり過ぎないかな？
オーバー」

『バツカお前……腕組みイベント』腕になのはさんの胸がディープ
インパクト、この公式が成立するだろうが。オーバー』

「でもさ！！ そんな下心丸出しで誘ったわけじゃ……。オーバー」

『男って言うのはな、下心と不器用な優しさ、でもって底知れない
性欲で出来てるんだ。まずはそこを認めるところから始める。ほれ、
なのはさん待ってるぞ。オーバー』

リオスは耳に付けている超小型イヤホンから聞こえるオペレーター
（ルーク）の声に突っ込みなどを返しながらも歩き始める。

「ああ……緊張するなあ……」

『今日の目標は朝までにベッドインだからな。こんなところで緊張
してちゃ、身が持たないぞ。オーバー』

「ベッドイン！！！？ ステップなんてお構いなしな感じしかしな
いんだけど？？！ オーバー！！」

『冗談だ。今日の目的はあくまで楽しいデートだ。なのはさんとお前が上手く行くように俺と助手がしっかりバックアップしてやるから。オーバー』

『ちょっと、誰が助手よ！ お、オーバー』

『ふふ、頼りにしてるよワトソン君。オーバー』

「はあ……二人が羨ましい……。ていうか、二人一緒に居るんだから、『オーバー』の掛け声いらぬような気がするんだけど……まあいいか」

そう、本日はリオスにとって勝負の日である。なのはとのデート。少し遠出して遊園地にまで来てしまったのだ。

でもって、なぜルークとティアナがオペレーターと助手などをしてるかというところ……

それは二日前に遡る。

「ルーク……！！ なななのはさんは……今度の日曜デートすることになって……その……手伝ってくれ……！！」

「ええ……日曜は積んでたエロゲーを崩そうかと思ってたんだけど……部活オフだし。ていうか、デート……まったくこれだからリア充は……マジ爆発すればいいのに……」

「友情よりもエロゲー……？ ていうか、間違いなくリア充って類に、ルークも入ってるからね……！！？」

ルークのやる気のない返事に、リオスは彼の襟首を持ちあげてブンブンと振りまくる。

リオス、必死過ぎて涙目だが、それだけなのは事に関しては真剣ということなのだろう。

「頼むよー！！！！　なのはさんと二人きりなんかになったら、僕緊張して倒れちゃうだろ　！！！！！」

「いつも登校中は二人きりだろうに……………」

「登校中とデートはなんか違うの！！！！　例えるならシェア専用か、そうでないかくらいの違いがあるの！！！！」

「なるほど、要するに3倍くらいは違いがあるってことだな。」

リオスの例えに冷静に対処するルーク。だが、未だにエロゲーか、友人の色恋沙汰への武力介入か、日曜のスケジュールを決めあぐねていたルークだった。

「行つてあげなさいよ。一緒じゃなくても陰から見守るくらいは出来るでしょ？」

と、そこに救いの女神よろしく、ご降臨召されたのはティアナだった。

リオスを見かねての助け船を出してくれたというわけだ。

「む……………でもなあ……………ましろ色　ンフォニーの2週目が……………」

「2週目！！！！？　って、それ積んでないじゃん！！　一回クリア

してるじゃん！！！」

「これだから素人は困る……。良い作品は何回やっても、その旨みが薄れないモノなんだよ……。俺は今度こそ結子さんに保健体育を実技で教えてもらうんだ！！！！ 結子、結子してもらうんだい！！！」

「ネタ分らない人いるから、そう言うのは自重しなさいよ！！！」

すこし熱の入りが掛けたルークの頭を冷やさせ（強制終了させて）話を元の路線に戻すティアナ。このままルークに話させたままだと、読者様の頭上には？マークがスタンディングオベーション状態になりかねない。

「まあ、分かったよ……。陰からのサポートならやるよ。」

「ほんと！！！！？」

「ほんとほんと」

結局放っておけないようで、ルークはリオスにお願いを聞きいれた。そして、次にティアナを見て、宣言した。

「で、ティアナにも来てもらおうかな。」

「わ、私も！！！！？」

いきなりの指名に、ティアナは少し意表を突かれた様子だったが、満更でもないようだった。

「考えても見ろ……日曜の昼下がり、男女の後をコソコソ付ける男が一人遊園地に……通報されてもおかしくないだろ？」

「だ、だったらフェイトさんでも……」

「ねーさんはダメだ。あの人が一緒だと、気が付いたらジェットコースターをオール制覇してそうな気がする。」

リオス&ティアナ「ああ……なんか納得……」

ティアナとリオスの脳裏に、ルークを引っ張りまわして満面の笑みを浮かべながら遊園地で遊び倒すフェイトの姿が映し出された。まあ、そこまでハイテンションにはならないだろうが、ルークを連れている時の彼女の行動はいまいち予想が出来ないため、確実な事は言えない。

「てなわけで、日曜は俺とティアでリオスの一世一代の晴れ舞台。なのはさんとのデートをサポートする。はい、決定！」

「はあ……ま、良いけどね。言い出したのは私みたいなもんだし……協力するわよリオス」

「あ、ありがと……！！二人とも……！！」

と、こんな感じでルーク&ティアナによる、リオスxなのはのデートのサポート作戦。オペレーション「そうだ、遊園地行く」が決定されたのだった……

「な、なのはさん!!」

「うん？ どうしたの、リオス君…？ なんだか今日顔ずっと赤いけど……」

「あはは……これはその昨日の我が家はハバネロ祭りだったもので」

「なにその、とんでもなく辛そうなお祭り!!？」

リオスの少々天パリ気味の答えに、なのはのリアクションは思いのほか良いレスポンスだ。恐らく、普段からドタバタ騒ぎに巻き込まれているからであろう。

「で、ですね……その……結構人も多いことですし、はぐれない様に……あの……」

「……??？」

リオスの今一つ要領を得ない様子になのはは小首を傾げる。その動作だけでリオスは軽く萌え死ぬところだったが、寸での所で踏みとどまった。

「ああああ／／／／／ええと……」

リオスは言葉にならないような声を出してスチームを出してしまう。

腕を組めという（そこまで行かなくても、手を繋ぐだけでも良い）
ミッシオンはまだ彼には早すぎたのだろうか。

「変なりオス君。ほら、はやく行こう？ 時間なんてあつという間に無くなっちゃうよ」

「へ……？ ふひゃあ！！？」

リオスが奇声を発してしまうのも無理なはい。なぜなら、なのはの方から腕を組んできたのだ。とても楽しそうに、リオスの腕に自分の腕を絡め歩き出すのは。

リオスはただされるがまま、という状態だった。

もちろん、リオスの腕にはなのはの胸が押し付けられている。彼はそれだけで昇天しそうになっていた。

「何から乗ろうか？」

「はへ……？」

『おい、しっかりしろ。今はデート中だぞ、オーバー』

「はっ！！！！ ああ、ええと……………」

リオスが違う世界にトリップしていると、なのはが今日の遊園地最初のアトラクションを何にするのか聞いてくるのだが、リオスがそれに答えられる余裕はない。

即座にルークが注意を促し、リオスは漸くこちらの世界に戻ってくる。だが、どこから回るのか、完全に頭か吹き飛んでいるようだ。

「ええと、ええと……あ、あそこで……………」

リオスは慌てて、且つ何も見ずに指をさす。慌てているのは分かるが、この行動がリオスにとっての自爆フラグであることが数秒後に証明されることになる。

何を隠そう、リオスが指さした先にあったのは……………

「お化け屋敷かあ……リオス君って、こういうの好きなんだね。ジエットコースターとかだと思ってたけど、ちよつと意外だなあ」

「（し、しまったああああああ……………！）」

リオスが指さしたのは、まさかのお化け屋敷。彼自身このジャンルがあまり得意ではないのに、天パっていたが故の不幸な事故とも言えいいのか、最初のアトラクションからクライマックスな感じである。

『ちょ、リオス……………？ 初っ端からお化け屋敷チヨイスは、どうかと思うよ……………！ まずは少し歩きながら、君の小粋なトークで2、3笑いを取ってからアトラクションに行くっていう計画を……………。オーバー』

「し、仕方ないだろ……………！ 僕だっていきなりの事でパニックだったんだよ……………！ オーバー……………」

さすがのルークもこればかりはどうしようもない。というか、ここで「やっぱり別のことに」とかは流石に恥ずかしい。

男の威厳（今日のリオスには少し望み薄だが）を守るためにも、ここは虎穴に入るしかないようだ。

「なにしてるの、リオス君？ 早く行こう？」

「あ……はい……」

そうこうしている間に、なのはと腕を組みながらリオスはお化け屋敷に入っていく。

彼の表情には、もうどうにでもなれ、という感情となのはの胸の柔らかなさに感動しているという複雑なモノになっていた。

でもって、当然ながら二人の（正確にはリオスの）サポートの為にルークとティアナもお化け屋敷に入ることになる。

「あゝあ……いやだなあ……俺もあんましこういうの得意じゃないんだけど……」

「つべこべ言っでないで、さっさと行くわよ。二人の事見失っちゃうでしょ」

と、ルークもまたティアナに引きずられるような形でお化け屋敷に突入して行ったのだ。

お化け屋敷のコンセプトは、『手術中にうつかりな執刀医がメスを落としてしまい、それが精密機械のコンセントを次々に切断、それによるさまざまなトラブルにより、手術ミスで多大な犠牲者を出した廃病院』という設定らしい。

長い上に、笑い事では済まされないようなダメ病院である。リオスは看板でそれを見た瞬間、ピタゴラ イッチを思い出してしまった。だが、笑えるのはその部分だけだった。病院を模ったアトラクション内に入ってリオスとなのはを襲って来たのは、尋常ではないレベルの完成度を誇る恐怖。首のない死体、メスを持って襲いかかって来る看護師さん、なぜか全身黒タイツのドクターらしき人（聴診器を付けていたことから推測）などが、次々とリオス達を恐怖のどん底に追いやることになったのだ。

「AAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!!!!!!!」

リオス&・なのは「ほえら!!!!!!!!!!!!????????（キヤアア!!!!!!!!!!!!）」

手術室から突如として襲いかかって来る血まみれの看護師。リオスとなのは共に悲鳴を（リオスの悲鳴はユニークだが）上げ、思わず身を寄せ合ってしまう。

普段ならば、真っ赤になってしまいう事なのだが、この時にリオスとなのはにそんな事を気にするような余裕は無かった。

『うーん……………このお化け屋敷の看護師さん……………血まみれでなければかなりポイント高いんだけどなあ……………オーバー』

『少しは怖がりなさいよ……………。恐怖じゃなくて萌えを堪能しにお化け屋敷に来るやつ始めて見たわ、私……………。オーバー』

がパターン化して行った。
普段ならこうはいかないモノだが、流石は遊園地。さまざまな萌えイベントの宝庫である。

その後も、ルーク達の支援を受けながら遊園地を楽しむことが出来たりオスとなのは。時間が過ぎるのは速いもので、時間は既にお昼である。

周囲でもお昼ご飯を食べ始める人達が目立ち始めており、リオス達もそれに漏れなかった。

二人は手ごろな休憩所でファーストフードを頂くことにした。お昼ということもあり、ハンバーガー一つ買うのにもかなりの時間を要したが、こればかりは仕方あるまい。

「ふう〜…遊園地なんて久しぶりだけど、やっぱり楽しいねリオス君？」

「そう言ってもらえれば、誘った甲斐がありますよ。でも、最初の方はすみません、少し緊張してしまって……………」

「ああ、うん。いいよ。その……………私も……………結構緊張してたから……………男の子と二人でこういうところ来るの……………初めてで……………」

「っ!！」

その台詞にリオスの中の萌えメーターが振り切れそうになった。

緊張していた、しかもリオスと、二人きりだったから。この事實はリオスの心拍数を上げるのには十分すぎる武器だった。

「ぼ、僕も……その…女性とこんな風に二人きりで遊園地は……なのはさんとが初めてです……」

「そ、そっか……。そうなんだ……。／／／／／／／／／／／／／／／／」

「は、はい……。／／／／／／／／／／／／／／／／」

気が付けば固有結界を形成しているこのお二人。少し周りの空間がピンク色に染まり始めているのは目の錯覚ではあるまい。

FFF団に見つかれば、間違いなく される光景であろう。

ともあれ、お互いに初めてのデート（本人たちはそういう意識は吹き飛んでいる）になるのだが、かなりの好感触である。

こうして、お互いに、お互いの事を意識しなくなりながら午前過ぎで行った。

後半戦、デートの第二ラウンド、午後の部が始まりを告げようとしていた……

そして、リオスとなのは達から少し離れた席で、ルークとティアナも昼食をとっていた。ここで、ルークの病気が発動するなど、この時にティアナは考えもしなかった……。

「なあ、ティア。俺考えたんだ……車のシートベルトを付けてない時に鳴る警報音あるだろ？ あれを擬人化してみたんだ。」

「あんたはまたそんなくだらない事を……」

「いや、これが中々バカにしたもんでもないんだよ。たとえば、シートベルトを付けずに運転するとするだろ？ そこに、あのピーつて音が上がるわけだよ。」

「また始まった……ルークの病気……」

ティアナがルークのスイッチが入ってしまった事を感知し、ため息を吐く。

「で、これを擬人化した場合『もう、あんたまたシートベルト付けてない！ まったく、私が言わなきゃつけないんだから……。って、なにニヤニヤしてんのよ？！ べ、別にあんたの事心配して警報鳴らしてるわけじゃないんだからね！！？ 勘違い……しないでよ……』みたいな展開を構築できるわけなんだよ」

「あーハイハイ。それは萌えるわねー」

「で、実は警報装置とシートベルト、でもって運転手は三角関係なわけ。シートベルトはいつも運転手にべったり張り付いて離れない、それを警報機は歯がゆく思っていたんだ。私は叫ぶだけなのに、あいつ（シートベルト）はいつも運転手を独占してる、ってね。」

ルークの擬人化萌えはもはやランザム状態である。純度の高い萌え粒子を放出し、男たちの共感を呼びこむ。

「でも、運転手の身の安全を考えればシートベルトの力を借りるしかない。彼女は自分の気持ちを隠してまで、運転手の安全だけを考えて、あの警報を鳴らすんだ。うーん……健気だ……」

ルークの妄想は留まる事を知らない。というか、シートベルト未着用の警報音を擬人化した奴など、こいつが初めてではなかるうか？

と、その時だった。ルークの病気に少しだけだが、自分の気持ちを再整理する必要を感じはめてしまっていたティアナにとっては救いの神のような、それくらいありがたい人から声が掛った。

「あれ……？ ルーク君と……ティアナさん……？」

「おや、君たちもデートかい？」

ルーク & amp ; ティアナ「へ？」

かわいらしい声と、男らしい声。その二つがルークとティアナに分けられる。二人がその声のした方に顔を向けると、そこにはこの前知り合った一組の男女の組み合わせがあった。

「英樹さんに……梓さん？」

ルークがそう言ったように、そこには私服姿、且つ手を繋いで如何にもアレな関係ですと言いたげな、灘宮英樹と、その嫁……もとい彼女である中野梓が居たのだった……。

第十二話 そうだ、遊園地行こう その？（後書き）

F20C「記念すべき再登場！！！鮮血の刻印先生の神作品、『けいおん！Fragment』より、主人公の英樹さんとあずにゃんです！！！」

ルーク「今回はこの二人も交えて、リオスとなのはさんのデートをプロデュース！！さらに、俺の新たな擬人化萌えを……」

ティアナ「もう良いから！！！！あんたの話長いのよマジで！！！」

ルーク「ええ……折角電車の踏切を擬人化したお話考えたのに……」

ティアナ「読者さん達の需要を考えなさいって言うてんの！！！」

F20C「……意外にありそうで怖いな……」

第十三話 そうだ、遊園地行こう その？（前書き）

予想外に長くなってしまいました……しかも、今回でもまだ終わらないという……

今回は後半がネタ祭りでございます。

皆さまもどうか、クリーク……!と叫びながらお楽しみくだされね

ww

でわ、本編をどうぞ……!

第十三話 そうだ、遊園地行こう その？

「なるほど……リオス君とこの前一緒だった、なのはさんのデートのサポートを……」

「ま、そういうことです。成り行きな感じかもしれませんが、頼まれた以上ほっとくわけにもいきませんからね」

「あはは、友達思いなんですね、ルーク君は」

お昼を過ぎ、フェイズは午後の部に突入した。なのはとリオスは引き続き遊園地を堪能するつもりのようで、ルーク達の前方を歩いている。

しかも、超自然に手を繋ぎながら。

「でも、私達まで参加しちゃっても良いんでしょうか……？」

「そうですよ、お二人もデートなんでしょう？ だったら、楽しんでこられた方が……」

女性陣二人がそう言うが、男性陣ルーク & amp; 英樹は……

「いや、ここはリアル嫁・梓さんを見事に射止めた英樹さんのお力も借りてミッションを進めたいんだ。」

「よ、嫁…… / / / / /」

嫁という単語に梓は真っ赤になって俯いてしまう。そこがまた可愛い。

「で、どうでしょうか、英樹さん？」

「ふむ……なんだかお節介してる気分にもなるけど……。まあ、君たちがサポートを頼まれたんだしね、それを手伝うのも悪くないかな」

と、英樹自身オペレーション『そうだ、遊園地行こう』に参加するのはやぶさかではないらしい。

そして、英樹が参戦の意を示したので、梓も自動的に参加が決定となる。

「わ、私も……ちょっと気になりますから……。その……一緒に行かせていただきます」

「よっし！！！！これでパーティが4人揃った。この面子なら、ゾーだろぅがエス　クだろぅが恐くない。グレゴリー神父も秒殺できるホットドガー（凄腕）チームが完成だ！」

「どんなパーティ！！？　ていうか、本来の目的と全く違う方向で頑張るみたいな感じになってるような気がするんだけど？？」

梓の気合の入った参加表明に、ルークもテンションを上げてやる気を見せる。些かその方向がずれている気もしないではないが。

「あれ……？　そう言えばリオスとなのはさんは？」

梓&英樹&ティアナ「「あ……………」」

バカな事をしている間にリオスとなのはの事を見失ってしまった一行であった。

「もしもし、ルーク？………ルーク？？！！」

いつの間にか、ルーク達とかなり離れてしまったらしいリオス達。無線通信内臓のイヤホンなのだが、如何せん小型過ぎて通信範囲がかなり狭いので、一たび距離が開いてしまうと見事に通信が出来なくなってしまうようだ。

「（どうしよう………ルーク達とはぐれちゃったよ………これじゃあサポートも何もあったもんじゃ………）」

リオスは焦っていた。午後の部の最終目標、観覧車でチュー、または押し倒し作戦（リオスは拒否しているが）の決行など、リオス一人ではどうやっていいものか皆目見当がつかない。

そこで様々な修羅場、数多くのエロゲにて数千のフラグ戦地を駆けてきた戦士（笑）であるルークの力は必須だというわけだ。（実際に役に立つかは微妙だが）

「リオス君？ さつきからどうしたの？ 独り言？」

「あ、ああいや………！ 何でもないですよ？？！ あははは………

………」

通信機に呼び掛けていたのがバレるのは正直あまりよろしくない。
あくまでルーク達の存在をなのはに悟られるわけにはいかないのだ。

「（と、とにかく……自分の力でなんとかするしかない！！）」

最初からそうすれば良いモノを……とかの突っ込みがありそうだが、
ここでは敢えてスルーする。

さて、なのはを満足させられるような楽しい選択肢は………？

・押し倒す

・草の茂みに連れ込んで……おっとこれ以上は言えねえな

・チューする

・ルークを真似てエロティックスキル、躪いて胸にダイブを発動させる

・ホテルに（ry

・今夜は寝かせないよ、子猫ちゃん？

「（って、どの選択肢も選べないものばかりじゃないか！！！？
ていうか、この選択肢、作者の悪意の塊だ！！！！）」

目の前に出てきた選択肢（選べば即通報モノが紛れ込んでいる）に
絶望するリオス。

自身の中の煩惱の数だとしても言えはいいのか。それだけは否定したいリオスだった。

「（そうだ、何か食べるモノ……はさっきお昼食べた所だしアウト……。子供っぽ過ぎる所もアウトだし……）」

リオス、考えに考える。こういう時のリオスは物凄い集中力を見せる。が、少し周りが見えなくなってしまうことも間々ある。

そして、今回もそれが災いして、とも言えはいいのか。兎に角、リオスとなのはは面倒な事に巻き込まれてしまうのだった。

そう、二人に近づいてきた男性の誘いによって。

「あのお。そこのお二人さん、ちょっとお時間の方よろしいでしょうか？」

リオス& amp・なのは「はい????」

「うーん……一体どこに行ったんだか……」

「バラけて探すのもアレだしな……合流しようにも、この人ごみだとちょっと面倒だし……」

「でも、そんなに遠くには行っていないと思いますよ？ 目を離してたのは、ほんの少しの間だけでしたから」

「そうよね……兎に角、リオスの無線イヤホンの電波を拾えれば、なんとかなるんだけど……」

上から、ルーク、英樹、梓、ティアナの順に、絶賛行方不明中のリオスとなのはを探す四人。だが、流石は日曜日の遊園地、入場者が少なくなっているとか言われているが、そんな情報も当てにならないと思えてしまうくらいの人で溢れかえっている。

こんな状態の中から、特定の人物を探すなど極めて困難なミッションである。

「ふむ……こうなったら迷子の放送を……」

「いや、それはダメでしょ……。俺たちの事がばれちゃいますし、何よりあの二人に一生に傷を残す事になりかねません」

「ああ、なんだか分かる気がします。祭りの最中に親とはぐれちゃって、放送で呼び出されるのってかなり恥ずかしいですよ……。次の日学校行くのがかなり億劫になった記憶があります……」

英樹とルークの会話に共感できるものがあつたのか、梓は懐かしむようにそう言った。

そんな梓を見ながら、「迷ってちよつと涙目になつてる梓もまた良い……」とか少し危ない事を呟いている英樹は放っておく事にして、一行はリオス達の搜索を再開する。

リオスの事が信用できないとかではないが、彼は偶にだが大ボカをやらかす時がある。未然に防ぐことが可能な危機をそのままにしておくのは得策ではない。

ここはいち早くリオス達の位置を確保しなければ。

そう思い。中央広場まで来てしまったルーク達。ここに来るまで、やはりリオス達の姿はなかった。

「ん…？　なんだかここは特に人が多いな……………なんかのイベントでもあるのかな…………？」

「ええと…………あ、あれじゃない？　ほら、本日開催・ミスコンテスト。このあと3時から始まるみたいよ」

ティアナに言われ、その看板の方に視線を送る一向。三時ということとは、あと10分もすれば開幕である。

リオス達がここに来ている可能性も高いが、如何せん人が多すぎる。

「あ！！　居ました！！！」

だが、奇跡的とも言えいいのか。梓が二人の姿を見つけたらしく、ちっちゃい体を目一杯使いながら、ミスコンのステージの方を指さしている。

そう、そこには確かにリオスとなのはが居た。なのはは着てきたモノとは違う服に着替えさせられており、不安そうにステージの端から広場を見ている。

そして、問題はリオスだった。彼は確かになのはの隣に立っていた。
……………

女物の服で女装した姿で。どこか魂が抜けてしまっているように見えるのは気のせいだろうか？

一向「」「」「何してんのあいつ?????!」「」「」

ルーク達は口を揃えてそう叫んでしまった。

「ああ、もう!!! リオスのやつ、またボーッとしてる間に面倒事に巻き込まれたな?!」

「ええ!!!? これが初めてじゃないんですか?!」

「イロイロね、あつたのよ……昔……」

梓の問いにティアナが少し遠い目をしながらそう呟く。どうやら、その時はティアナ達も巻き込まれたようだ。

「と、兎に角!!! なんとかするしかないだろ。」

と、言いながら飛び出すルーク。ティアナ達も慌ててその後が続く。だが、今から行っても恐らく出場を取り消すのは無理だろう。ルーク達に出来る選択はそう多くはなかった……

「（どうしてこうなった……）」

リオスの心中はその疑問だけで一杯一杯になっていた。考えてみれば、今日はなのはとのデート。嬉し恥ずかしな展開の数々などをこの日までに何回妄想した事が分らない。寝る前のシャドーデート（シャドーボクシングのデート版）も毎日

欠かすことはなかった。

だが、現実はどうだ？ リオスはなのはの隣で女装させられ、ミスコンに参加しようとしている。流石にこんな展開は予想外過ぎた。

加えて……

「り、リオス君って女の子の格好も似合っちゃうんだね………なんだかちよつと複雑な気分………」

「……………」

そう、リオスの女装はなかなか様になっており、周囲の参加者達に比べても決して見劣りなどしていない。

たまたま参加者から欠員が出てしまったので、臨時の代役を頼まれたのだが。その時は呼ばれたのはなのはだけだと思っていたのだ。なのはが面白そうだから出ても良いということで、ホイホイ付いて行ってしまったのだが、それが全ての間違いだと気付いたのは、メイクさんや衣装係のお姉さんたちの目が怪しく輝いた時だった。

瞬時に身の危険を感じたりオスは逃走を試みたのだが、時すでに遅し。次に目が覚めた時には、今の女装した格好でご覧のあり様状態だったというわけだ。

「はぁ………なんでこんな事に……………」

と、リオスが何度目かも分からないため息を吐いたその時だった。

『リオス……！ リオス……！ お前そんなところで、そんな格好し

て何やってるんだよ！！！！？」

「る、ルーク！！！！？ どこ行ってたんだよ今まで！！！！ たった一週間空いただけでこの有様になるって一体どういう事さ！！！！」

耳に付けたままの無線イヤホンから、行方不明だったルークの声が聞こえてきた瞬間、リオスはそう叫びたくなかったが、何とか抑えて小さな声でそう言った。

『こつちもお前らを探し回ってたんだよ。で？ なんでお前女装なんかしてんのさ？ 今、ステージの結構近くまで来てるから結構見えるんだけど』

「聞かないでくれ…………… なんだかじぶんの中の大切な何かを円盤投げの勢いで捨てちゃいそうなんだ……………」

『はあ…………… まあ、お前の事だ。どうせなのはさんとのデート内容に必死で頭が回って無かったんだろ？ 俺たちにも責任あるしな……………』

リオスからの事情を聞いたルークはため息を一つ吐いてから、頭のスイッチを切り替えたようで、リオスに指示を飛ばしてきた。

『リオス、今の段階で辞退とかはもう無理だから、とりあえずこのミスコンは適当にこなせ。それにここで逃げたら、なのはさんを置いて行くことになるしな』

「うう…………… 僕に選択肢はないのか……………」

リオスはその場に倒れ込みたくなった。だが、服が汚れてしまうのもアレなのでなんとか堪える。変なところで律義な奴である。

『まあ、リオス。落ち着いて考えてみる。歌舞伎役者でも、男の人が女の人を演じたりするだろ？ あれはあれでカッコいいじゃないか。もしかすると、いつの間にかバルキリーのパイロットになってVF-25を颯爽と駆ってバジユラを千切っては投げ、千切っては投げ……』

「それなんてマク スー！！！！？ しかも、あの主人公さんもアト姫とか言われてからかわれてたから！！！！ ていうか、バジユラなんかいないから！！！」

ルークの比較対象のズレっぷりに、リオスは最上級の突っ込みを入れる。

『兎に角、俺たちに任せとけて。心強い助っ人もいるんだ。じゃ、ミスコン頑張れよ！』

ブツ

「ちょ！！！！？ ルーク！！？」

言いたい事だけ言っただけでルークは通信を切ってしまった。いくら呼び掛けても応答はない。どうやら、本気でリオスにミスコンで頑張らせるつもりらしい。

心強い助っ人というのもし少し気になるところではあるが、この状況では彼の言葉を信じるよりほかなかった。

『さて、時間となりましたので、第30回ミスコンテストを開始したいと思います！！！！ それでは、参加者の方はステージにどうぞ！！！！』

「って、始まつちやった！！！！？」

「ほらほら、リオス君。早く行こう？」

そして、無情にも始まつてしまうミスコン。リオスはなのはに手を引かれて、若干涙目でステージに出る事に。

うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！

「（うわぁ……すごい熱気だ……）」

ステージを囲うのは野郎が大半である。その所為なのか、中央広場には妙な熱気が充満し、リオスは軽く中てられてしまった。

『さて、本日の戦乙女たちも粒揃い！！！ この中から『ミス・日曜日の遊園地にて偶然にもミスコンに参加しちゃった、テヘ』に選ばれるのは一体誰なのか！！！ 皆さんの投票に全てが掛っております。どうか、最後までお楽しみください！！！！』

うおおおおおおおっお！！！！！！！！！！

会場となった広場のテンションは最高潮である。司会者が投票の仕方などを説明し、ミスコンの準備は着々と進められていく。

「あれ……？ あの司会の人……どこかで見たような……？」

リオスは司会の役を務めている男性をどこかで見た事があるような気がして首を傾げる。

そんな中……

『さて、それでは最後に。今回のミスコンに特別ゲスト、兼解説としてご足労いただいたこの方に挨拶をしていただきましょう！！！！』

「（特別ゲスト兼審査員……？？……いやな予感しかしない）」

司会者の言葉に、リオスの感がそう告げる。
いや、寧ろ確信に近いだろう。

そして、その予感は的中する事になる。

舞台袖から現れたその人物に、リオスは激しい頭痛を覚えた。

そして、その人物は舞台中央のマイクを手に取り、話し始めた。

金髪を隠すために黒髪のウィッグを付け、伊達メガネで変装したルークが、そこにはいた。

「諸君……私は女の子が好きだ……」

ざわっ！

「諸君…私は女の子が好きだ……」

ざわざわー！！

ルーク（変装済み）が演説を始めると、途端に観客たちがざわめき出す。だが、そのざわめきは戸惑いではない。どちらかと言えば、そう、彼の持つ只ならぬオーラに畏怖を込めたような、そんなざわめき。

「諸君、私は女の子が大好きだ」

「ツンデレが好きだ、ヤンデレが好きだ、クーデレが好きだ、幼馴染属性が好きだ、お姉ちゃん属性が好きだ、妹属性が好きだ、人妻属性が好きだ、ロリ属性が好きだ、お嬢様属性が好きだ、巫女属性が好きだ」

「道端で、学校で、家で、公園で、街角で、駅前で、橋の上で、川で、屋上で、山で、海で、プールで、保健室で」

「この地上に存在する、ありとあらゆる女の子が大好きだ」

「絶対領域によって構成される見えるか見えないかの瀬戸際を行ったり来たりするのが好きだ！！！」

「お風呂場で一糸纏わぬねーさんと鉢合わせた時など心が躍る！！！！」

「勉強を見てもらっている最中、腕に胸が当たってしまうという状況が好きだ……」

「いつもはクールな幼馴染がたまに見せる優しさを向けて来てくれ

る時など、胸が漉くような気持ちだった…」

「席と席の間に落ちてしまった消しゴムを、同時に取ろうとして手と手が触れ合う展開が好きだ」

「恥ずかしがり屋のツンデレ妹がデレた時など、感動すら覚える！
！」

「近所に住んでる優しいお姉さんの抱擁など、もう堪らない！！！！
！」

「躓いてしまった時、女の子の胸にダイブ出来た時など最高だ！！
！」

「巫女服姿のねーさんがモジモジしながらも、かわいい笑顔を浮かべながら駆け寄って来る時など、絶頂すら覚える！！！！」

「ヤンデレ属性の女の子に滅茶苦茶にされるのが好きだ……」

「ずっと一緒だと思っていた幼馴染が、突然転校を余儀なくされてしまうのはとても悲しい事だ……」

「ツンデレ妹に、腹に飛び乗られて起こされるのが好きだ……」

「半年以上、楽しみに待っていた新作のエロゲが地雷だった時は屈辱の極みだ」

ルーク（少佐殿）は右手を観客達の方に向けて、さらに続ける。その頃には、先程のざわめきは綺麗さっぱり消えてしまっていた。

「諸君……私はラッキースケベな展開を、天国のようなスケベ展開を望んでいる」

「諸君、今私の目の前に居る、萌えとエロスの探求に全てを捧げている諸君。君たちは何を望む？」

「更なるエロい展開を望むか？ 血沸き肉躍る、エロゲのようなスケベ展開を望むか？」

「選べる選択肢を全て尽くし、ハーレムエンドなど敵にもならないような、甘イチャイチャな展開を望むか？」

クリーク……！クリーク……！クリーク……！クリーク……！
クリーク……！クリーク……！クリーク……！クリーク……！
クリーク……！……（ここでのクリークは、あっちの意味での戦争で

無く、もっとう性的な意味での戦争である)

「よろしい……ならば、クリーク（やはり性的な意味で）だ」

今、間違いなく会場の男たちと、ルークの心は一体となっている。
ステージ上の女性陣は、ポカンとしているが。

「我々は、大きな期待を込めて、今まさに支払いの為に諭吉を握りしめている拳だ……！」

「ハッピーエンドを……一心不乱のラブラブイチャイチャ・ハッピーエンドを……！」

「我らは未だに一介の非リア充。リア充になることを夢見ることしかできない敗残兵だ」

「だが諸君は、一騎当千の古強者だと、私は信仰している……！」

「ならば我らは、総兵力100万と一人のおにゃのこソムリエ集団となる……！」

「我々を社会のヒエラルキーの最下層へと追いやり、眠りこけてい

る連中を叩き起こそう！！！！」

「萌え属性の重要さを叩きこみ、妄想の重要さを思い出させよう！！！！」

「連中に、マガジンの表紙だけを見て、これはエロ本だと勘違いしていた時の若さゆえの恥ずかしい勘違いを思い出させてやる」

「連中に、最近の深夜アニメのエロさレベルの高さを再確認させてやる！！！！」

「リア充になったことで、逆に見えなくなってしまった事があるという事を思い出させてやる……」

女の子だ！！！！ 女の子の光だ！！！！

「アニメの間どいエロシーンに出てくる白い霧など、我らの心眼の前では無意味だという事を教えてやる……」

「そうだ……あれこそが諸君が待ち侘びていた、女の子の光だ」

「私は諸君らを、アヴァロンに連れていくぞ……あの憧れだった

ヴァレンタインデーの前日に紙袋を用意しなければならない夜に……あの憧れだった、周りに何故かしら女の子が居るというエロゲ展開に!!!!」

大統領!!!! 大統領閣下!!!! エロティック大統領殿!!!!
! 大統領!!!! 大統領閣下!!!! エロティック大統領殿
!!!!!!

「この場を集った全員に告げる、大統領命令である!!!!!!」

そして、ルーク（いつの間にか大統領化している）は宣言する。

「さあ、諸君………フラグを建てるぞ………」

おおおおおおおおおお!!!!!!

瞬間、ミスコン会場は最高潮の盛り上がり記録した。

「なんで少佐殿!!!!!!? ヘルングネタ分かないと共感できない筈なのに、なんでここに居る全員が乗り気マックスなのさ!!!!!!? ていうか、突っ込むところが多すぎて、どこから処理すれ

第十三話 そうだ、遊園地行こう その？（後書き）

F20C「後半は完璧にスーパールクタイムだったね。ヘルシグネタ全開だったけど」

ルーク「まあ、これも我が友、リオスを助けるがための策の一つで……」

F20C「嘘っぱさ全開ですね。さて、今回はミスコンです。ルーク解説員の鋭い意見が光りますww加えて、あずにゃん、英樹さん、ティアナの活躍も……」

ルーク「なんだかんだで頑張っておりますリオスのデート編。次回で恐らくクライマックスですので、皆さんどうかお楽しみに!!」

ヘルシグネタが分からない、という方はこちらをどうぞ。

少佐殿の演説に聞き惚れてくださいww

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm4652913>

第十四話　そうだ、遊園地行こう　その？（前書き）

今回はリオス君にとことん嫉妬してください。

私自身、キーボード打ちながら嫉妬という名の黒い感情が心の中を真っ黒に染めていく様を感じていました。

最後は嫉妬モードのフェイトさんです。今回でデート編が終わるので、次回からはフェイトさんメインで行こうかな……

ともあれ、詳しくは本編で！！　ではどうぞ

第十四話 そうだ、遊園地行こう その？

さて、状況を整理してみよう。

ただいまのリオスの居る場所は遊園地の中央広場の特設ステージの上。そして、見た目は完全に女。女装という名の兵装で完全武装したりオスの姿がそこにはあった。

ルークは特別ゲスト兼大統領役としてこのイベントに潜り込み、英樹は司会者として参加している。本来、この役目を実行する人達には少しの間眠っていただいた。（方法は禁則事項です）

ティアナと梓も舞台裏にて、様子を窺っており、来るべきタイミングでサポートに回るように手配してある。

このミスコン大会、リオスが偶然にも巻き込まれてしまったがために陥った事態ではあるが、ルークはこのイレギュラーをも利用してやろうと考えていたのだ。何という無駄な思考能力をしているのだと言いたくなる。

「さて、一番手は x 県からいらっしゃった……………」

司会の英樹が手近にあった資料（少しの間拝借した）を読み上げながら、ミスコンを進めていく。

なのはとリオスの出番は一番最後。まさにフィナーレを飾ると言った感じだ。本人、特にリオスにとっては嬉しくもなんともないが。

「（ルークのやつ……………一体どうするつもりなんだろう……………）」

一抹の、いや不安材料しか見つからないこの状況にリオスの精神的なダメージはじわじわと蓄積していく。

リオスが不安に駆られながらもステージを見ていくと、壇上にて可愛い女の子達が自分達のアピールポイントなどを披露し、その度に観客達（主に野郎）から驚喜の声上がる。

「うゝむ…………得意技が舌でサクランボのヘタを結ぶ事だとは…………非常にエロい…………。その技が披露される事に、今後注目していきたいですね」

「大統領からのコメントでした。いやあ、まさに変態。あっち方向に関する話題に関しては留まる事を知りません」

「H A H A H A 照れちゃうな、そんなに褒めないでください」

「またまたご謙遜を…………（梓にセクハラしたらどうなるか…………分かってるよね…………？）」

なぜか司会の英樹の心の副音声が聞こえたような気がしたルークだった。

「それでは次の……………」

英樹は一瞬で表情を元に戻して、ステージを進行させる。名前も知らない女の子が綺麗な衣装に身を包んでステージに。

またしても観客からの唸り声が上がったのは言うまでもないだろう。

「綺麗な人ばかりだね？」

なのはからの問いかけに、リオスは周囲を見渡しながらそう返した。実際、参加者はレベルが高い女性ばかりで、そこに居て不自然さの無い女装が出来てしまっている事に、リオスは紐無しバンジーをしたくなってしまった。

「ふにゃ！！！？ わわわ私！！！？」

「衣装だって完璧に着こなしてるし、スタイルだって物凄くバランス良いです。それになにより、なのはさんはこれでもかかって言うくらい優しいですから。その雰囲気も合わさって、この中でもずば抜けて可愛いと思います」

リオスの悪い癖、その？である。本人にそのつもりはないのに、気が付けばいつの間にか口説いている。FFF団が見たら間違いない。異端審問会にかけられてしまうレベルだ。

276

ミスコンに出るといふ羞恥心など関係なく、なのはは真っ赤っかになってしまふ。

流石はリオス、天然の女たらしの異名は伊達ではない。

その後、二人の間に会話は無く、緊張した面持ち（一人は真っ赤）で自分達の出番を待っていた。

「さて、ついに最後の二人となりました……主催者サイドとしても、今大会の注目株と位置付けさせていただいています。では、二人同時に出てきていただきましょう、高町なのはさんと、リース・マースフェルさんです……！」

うおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

なのはとリオス（リオスの名前は偽名）が壇上に上がった瞬間、観客達の完成の大きさが本日最高値を更新した。

なのは&リオスコンビの相乗効果は、ツイン萌えドライヴ並の萌え粒子を発生させているかのようだ。

「にやはは……皆物淒く元氣一杯だね……」

「いや、多分そうじゃないと思います……」

赤面をなんとか処理し、のほほんとステージ上でそう呟くのは、に、
リオスは嘆息しながらそう言った。

彼らは純粹になのはの（正確にはリオスもだが）レベルの高さにこれまでにないくらいテンションが上がってしまっているのだ。

「（さ）てリオス……ここからが俺からのプレゼントだ」

大統領、ルークは解説者席には不敵に微笑むと、舞台裏に居た梓とティアナに目配りをして、合図を飛ばした。

瞬間、ステージ上に何やら格式高い音楽が流れ始めた。

どうやら、梓とティアナが音響機器を操作し、音楽を再生しているらしい。

「な、なんだろう……？」

「さ、さあ……？（これもルークの作戦か何か……？）」

なのはとリオスは突然流れ出した音楽に驚きはしたものの、リオスにはそれがルークの手によるものだと分かった。

「さて、お二人にはこれより小芝居を演じてもらいます。台本はこちらで用意いたしましたので、どうぞ」

司会（英樹）が短い台詞がプリントされた紙を二人に私、これからやることの趣旨を簡単に説明した。どうやら、この妙に格式高い音楽もそのお芝居の為のものらしい。

「お芝居かあ。面白そうだね、リオス君？」

「ははは……ですね……（嫌な予感しかない……）」

純粹に主催者の演出を楽しもうとしているのはと、それに対して不安感マックスなりオス。

表面上は笑顔だが、リオスは嫌な予感を拭えないでいた。

そして、その予感はまたしても的中する事になるのだった。

「（ええとなになに………？）」

リオスはプリントに書かれている台詞に軽く目を通して見た。そして、コンマ何秒かで後悔した。

「リボンの帯が曲がっていてよ」とか、「お姉さま」とか………その他もいろいろと、その筋の匂いのする台詞のオンパレードだったのだ。

「（ルークウウウううう！！！！！！　おま、これ実行に移したら、ステージ場が百合百合な感じになるだろうが！！！！　お前、一体僕に何を求めてるわけ？？？！！）」

リオスは視線だけで殺せそうな殺気をルークに見せながら、表情だけで抗議する。

だが、大統領ルークにそんな脅しは効かないようで……

「（………リオス、男（今は女の格好だけど）を魅せる）」

と、言いたげな様子、且つどや顔でサムズアップしてきた。

「（誰でも良い………あいつの指を折ってくれ………頼むから………）」

「

が、ここでしたとしても仕方ない。寧ろ、なのはやる気十分っぽいので、ここでやめてしまうと心証は良くないだろう。結局のところ、リオスに選択肢などは無かった。

「でわ、準備も整いました所で、高町なのは&リース＝マースフェルによる、演劇『魔王様が見てる』をお楽しみください」

タイトルのにも、嫌な予感しかなかった。

その演劇の事は、リオスの心のシークレットファイルに嚴重に保存され、恐らくは二度と世に放たれる事はないだろう……

そう、決して……

「ふう……なんだか変な疲れ方したなあ……」

「あはは……ま、まあさっきの寸劇は確かにちょっと疲れちゃったね……精神的な意味で……」

ミスコンをなんとか切り抜け、デートの締めに観覧車に乗っているリオスとなのは。

先程のミスコン、大成功に終わったのだが、直後に司会と解説者が姿を消してしまい、なんとも言えない謎を残してしまっていた。

「でも、結構ドタバタしちゃったけど、楽しかったなあ」

「そう言ってもらえると、僕としては嬉しいです。なのはさんに退屈な思いさせてないかって、めっちゃめっちゃ不安でしたから……」

「あはは…私としてはリオス君と一緒にだったから、それだけでも楽しかったよ?」

「ほえあ!!!? ななは何を……なのはさんは……」

なのはの飾り気のない言葉に慌てふためくりオス。
この一言だけでも、今回のデートは大成功だったと言っても良いだろう。

「（ルーク…やり方はめっちゃよかったけど……結果オーライ
ってことにしとくよ……まあ、少し復讐させては貰ったけどね…
…フッフ）」

リオスは頭の中で今日、一応助けとして陰ながら見守ってくれた友人達に心の中で感謝、加えてニヒルな笑みを浮かべ、手に持った携帯を握る力を強くした。
そして、なのはと共に観覧車からの美しい夕陽を見つめていた。

「おお………幸せそうな顔しちゃって………チッ…リア充が………」

「あんた、応援するのか呪うのかどっちかにしなさいよ………」

そして、ルーク達一行は観覧車に乗っている二人の事を地上から確

認し、本日の作戦の一応の成功に安堵していた。

「あのお二人、上手く行くと良いですね……」

「だな。まあ、今日は俺としても久しぶりに無茶した感じもあったから不安だったが、結果としてあのお二人が良い雰囲気になってくれたのなら、成功だったな」

梓と英樹もそう言いつつ、ほっこりとした気持ちになっていた。憎らしくも、この二人はいつの間にもやらずに手を繋いでおり、密着度は結構高くなっていた。

「お二人も、今日はありがとうございました。ホント、折角のデートだったのに……」

「あはは、いいよ。俺達としても楽しかったからね」

「はい、普段では出来ない体験でしたから。逆にこれはこれでドキドキして楽しかったです」

ティアナが改めて英樹と梓にお礼を言うと、二人はにこやかにそう言ってくれた。

「俺からも、本当にありがとうございました。英樹さん、梓。俺達も今日は楽しかったです」

「そうか。また四人で、いや君のお姉さんや、あそこに二人も一緒にどこかに行けたら良いな。君達となら、良い思い出が出来そうだな」

「はい、その際は是非。ねーさんも喜びますから」

今日一日で、より一層仲良く慣れた気がするこの四人。学校はい違うので会う機会は少ないものの、こう言ったイベントで親交を深めることも、また良いものだ、しみじみ思ってた。ルークだった。

その後、英樹と梓、ルークとティアナはそれぞれの帰路に着いた。

故に、四人はこの後に起こる、決定的且つ、衝撃的なシーンを見逃す事になるのだった……

「もうすぐ一周しちゃうね……………」

「ですね……………」

リオスとなのはどこか名残惜しそうな口調で、お互いにそう呟く。もう少し、もう少し観覧車の回るスピードが遅くなればいいのに、リオスは思わずそんな事を考えてしまう。

「（僕、そのくらいなのはさんに惚れてるってことなのかなあ……………うわあ、ルークに聞かれでもしたら。間違いなく限界まで弄られるだろうなあ……………」

とかなんとか考えていたリオス。こういうシュチュエーションにあつて、自分の気持ちの強さを再認識するなど思っても見なかった彼の頬は少し紅くなった。

「リオス君……………あの……………ね……………？」

とかなんとか、玄人向けな独り言を呟きながら、ドアノブに手を駆けるルーク。

彼の頭の中には、エロゲの攻略の事しかなく、この後に起こる地獄をこの時は知る由も無かった。

「ただいまあゝ……………間違えました」

ボタン

玄関を開け、挨拶してからコンマ数秒でルークはドアを閉めた。

「え…？ 何あれ…………？ なんであんな怒ってらっしゃるの？ 俺なんかしたっけ？」

ルークの目に飛び込んできたモノはよほど恐ろしいものだったらしく、ルークは玄関先で身の危険を感じてしまった。

扉を開けたすぐそこに居らっしゃった、あるお方があまりにも怖かったためである。

「そろゝつと……………」

ルークは扉を数センチ開けて中の様子を窺う。もしかしたら、さっきのは目の錯覚なのかもしれない、という粒子サイズの希望に縋りつきながら。

「お帰り、ルーク」(顔は全然笑ってない)

ボタン！！！！！

「いや、違うな。そうだ、ここ俺んぢじゃないな。うん、きつとど

こかで道間違っただよ。でないと説明付かないだろ、なんで玄関にあんな鬼神のごとき表情でねーさんが鎮座してるんだよ……………」

そう、そのあまりにも怖いお方とは、姉であるフェイトの事だった。表情は全く笑っていないのに、口調だけは作った上機嫌モードといういろんな意味で恐ろしいフェイトの姿がそこにはあったのだ。

「よし、そうと決まったら、一旦引き返そう。そうだな、駅辺りまで引き返して……………うん、ちょうどいいや、そのまま長期の旅行に行こう。東京行って、秋葉原あたりで……………」

「旅行かあ……………私も行きたいなあ……………ルーク？」

「……………お、女と男の二人旅って言うのは、ちょっとダメって言うか……………」

いつの間にか、玄関のドアが開け放たれ、フェイトが仁王立ちでルークの前にご降臨召されていた。

ルークは悟る、今日ここで、自分の生涯は幕を閉じるのだと……………

「ティアナとデートだったんだってね？ 楽しかった？」

「で、デートじゃないし……………あれはリオスとなのはさんの……………っというか、なんでねーさんが知ってるのさ！！！？？」

「リオス君がメールで教えてくれたんだよ」

ルークの質問に、自分の携帯を手にしながらフェイトはそう答えてきた。

どうやら、リオスに一杯食わされたようだ。まあ、彼にとっては復讐なのだが。

「あんの野郎おおおおおおお！！！！！！！！！！」

「もう、ルークったら家の前で大声出しちゃ駄目だよ？ めっ！」

こんな状況にもかかわらず、フェイトの『めっ！』に不覚にも萌えてしまった自分を殴りたくなったルークだった。

「さあ、ルーク？ 今日の事、一切合切、洗い浚い、事細かに、偽りなく、お姉ちゃんに説明してくれるよね？」

「は、はい……………（ねーさんの後ろに、スタンドみたいなのが見える…………めっちゃ怖い…………）」

フェイトの放つオーラにルークは捕食者に睨まれた小動物のように縮こまってしまう。

そして、フェイトに首根っこを引っ張られて、家の中に迎え入れられた（強制的に）

数分後……………

『ティアナばかりずるいよ！！！！ 私もルークと一緒に遊びに行きたい……………！！！！！！！！！！』

『ちょ、ねーさん落ち着いて……………』

『私なんか……今日、朝からルーク居なかったから、部屋に忍び込んでルークの布団でモフモフすることしかできなかったのに……』

『ちょー！？ そこんとこ詳しく聞かせてくれない？？？！ 俺の布団で何してたわけ？？？！』

そんなやり取りが、夕暮れ染まる海鳴市のハラオウン邸から聞こえた。

第十四話 そうだ、遊園地行こう その？（後書き）

F20C「お疲れ様でした……」

ルーク「おお……はあ、結局エロゲ出来なかった……orz」

F20C「大丈夫、俺が変わりにプレイしていたから。翼、かわいいよ翼。翼ルートだけでもおなか一杯だったよ」

ルーク「いいなあ……。っていうか、今回女装してたりオスだけど、名前って本家の性転換ネタの時の奴だよね？」

F20C「うん、まあ。一緒の方が自然な感じするしね。さてさて、次回からはフェイトさんメインなお話になりますね。今回含めて三話、ほとんど出番無かったの……嫉妬モード全開になってしまわれるのも仕方のない事でしょう」

ルーク「今から胃が痛いよ」

F20C「とか言いつつ、フェイトとのイチャイチャを楽しみにしているルークなのであった……」

ルーク「勝手に変なモノログ入れるなよ……!」

第十五話 俺の姉さんがこんなにエロ可愛いわけがない（前書き）

タイトル自重ww

関係ないかもしれませんが、俺の妹がこんなに可愛いわけがない、のゲームが来年の一月に出るそうですね。

こ、この私が妹ゲーを買われる・・・・・・だと・・・・？
まあ、別にダメな事はないのですが。今から楽しみにですね。

ではでは、お話が少しシリアスっぽくなる予定の15話、どうぞお楽しみくださいww

第十五話 俺の姉さんがこんなにエロ可愛いわけがない

リオスとなのはのデートがあつた次の日。全国の学生のみならず、社会という名の戦場に多くの人が重い腰を上げて向かう事になる月曜日。

いつも通り、フェイトとティアナとで登校していたルークの視界に妙な二人組の姿が入って来たのは、爽やかな月曜日の朝だったのだ。

「ねえ……いい加減放してくんないかな、ねーさん……？」

「……………ダメ」

「いやさ、ご近所さん達からの『あらあら、まあまあ』的な視線だけで恥ずかしさがトランザム状態になりそうなんだけど」

「紅くなつて三倍恥ずかしがればいいよ。」

「ダメね、ルーク。諦めなさい。今日のフェイトさん、ちょっとやそつとじゃ離れないわよ……………」

ルークの腕にしがみつくような感じ（本人としては腕を組んで密着しているとの事）らしいのだが、やはり通学中。それも朝の住宅街という事で、人目が半端なく多い。

知らない人が見れば、朝からお盛んなバカップルにでも見えてしまうのかもしれない。

「はぁ……………ねーさん……………。ホント昨日は悪かったって……………。だから、

次の日曜はどこか連れてくって言ったでしょうに……」

「む……。ルークは私とこうするの嫌なんだ……？」

と、ルークがフェイトと離れたがっている事をそう取ったようで、フェイトはムスツとしてしまう。

「ああ、いやその……。嫌とかではなくてさ、単に恥ずいだけで……」

「うう……。昔はあんなに可愛かったのに……。夜は毎晩私の布団に潜り込んできて……。『お姉ちゃん暖かくて柔らかいから大好き』って言ってくれたりしたのに……。これが姉離れなんだね、グス……」

「昔の事は勘弁してください！！！！ お願いだから！！！！」

今もシスコンだが、昔のルークはそれを遥かに凌ぐレベルのシスコンであったという事は最早周知の事実だろう。

昔懐かしのエピソードを持ってこられると、ルークに勝ち目など万に一つもない。

「もうこうなったら、いつその事押し倒して既成事実を作って……。ううん、でもやっぱり初めては穏やかに済ませたいって……。終わった後の余韻の中、ベッドの上でまったりって感じで……」

「あれ、おかしいな？ 朝から俺の貞操の危機？？！ ていうか、姉弟の間でどんな妄想してるのさ！！！！」

「ああ、そんな……。ルーク、いくら初めてだからって、いきなり

三回戦なんて……。明日は学校もあるんだから、そろそろ……。え…？ やだルークったら、『今夜は寝かさない』だなんて…仕方ないね、明日は学校休んじゃおっか……。／／／／／／／／／／／／」

「生まれて初めてだ……。通学路で泣きそうになったの……」

「ていうか、フェイトさんからピンク色のオーラが出てる気がするんだけど……。あと、涎出てるし……」

朝から妄想全快のこのお姉さん。この方の今の頭の中を映像化してしまえば、間違いなくR20レベルだろう。R18なんてレベルではない。

そんな妄想フェイトに抱きつかれたままティアナと三人、通学路をひたすら歩く。家から学校までの約15分。

そんなに長い距離ではない筈なのに、腕に当たる途轍もなく柔らかい何か、ぶつちやけてしまえば、フェイトの胸が気になって気が気でなかったルークには15分など、ものの数秒程にしか感じられなかった。

そして、この時の三人は気が付いていなかった。

ルークと、彼に抱きつきながらフニャーっとなっているフェイトを少し遠くから隠れて見ている存在に。

そしてその人物の表情が、異常に怒気を含んでいるという事に……

……

「……………」

「……………」

そして、ルーク達がしばらく歩くと、学校の校門が見えてきた。朝練の為に早めに来たので、生徒の数はまばらだが、それでも全くのゼロ言うわけではない。

その証拠に、一行の前には見知った二人組が並んで歩いていた。そう、リオスとなのはである。

「ねえ、ルーク……………」

「ああ、皆まで言うなティア。分かってる……………アレって……………何かな……………」

ティアナとルークは揃ってそう口にして、目の前のリオス達を見て呆れ顔になる。というより、変なモノを見るような視線だ。（フェイトは未だに妄想中である）

だが、そんな二人のリアクションが正当化されるような光景が、今まさに目の前で起こっているのだ。

そう、リオスとなのは、並んで歩いている二人の様子がどこからどう見てもおかしかったのだ。

「リオス君……………」

「なのはさん……………」

今現在、二人は熱い視線を交わしながら見つめ合っております。

「……………／／／／／」

「はう……………／／／／／」

そして今度は紅くなって顔を伏せてしまう。そのタイミングまで全て同じである。

寧ろシンクロしていると言っても良いだろう。

二人とも、お互いを意識しまくって、そのまたさらに上を行くくらい意識しており、行動パターンが絡み合っているような感じである。

「き、今日はいい天気ですね！！！」

「そ、そうだね！！　あ、あはは……………／／／／／／／」

本日の天候、曇り時々雨である。

「どう思うっ？」

「どう思っつてあれは……………確かに昨日のデートが影響しまくっている感じしかないわね……………ていうか、二人とも軽く不審者に見えるレベルよアレ。職質されないか心配だわ……………」

ルークが意見を求めてきたので、ティアナは率直な意見を返す。まあ、ルーク自身も同じことを考えているようだ。

「ねーさんはどう思うっ？」

と、ルークは二人の様子についてフェイトにも意見を求めてみる。
なのはの親友たる彼女ならば、どこがどうおかしいのかより深く分かるかと思つて…………

「えへへ」この子の目元はルークにそっくりだね／＼／＼／
髪の色と眼の色は私達と同じだけど……………はにゆう……………可愛いよ
おゝ」

「いつの間にか一児のパパになつてよ、俺！！！！ ていうか、
ちよつとは姉弟つて観点からくる抵抗感を身につけてよねーさん、
お願いだから！！！！！！！！」

今のフェイトからは建設的な意見など期待するだけ無駄だという事は分かった。

「はあ…………… うゝん……………でもさ、二人とも物凄く幸せそうだな」

「まあ、お互い好き合つてるのはバレバレだしね。知らぬは本人達ばかりよ。惹かれ合つてるんだろっし、距離が縮まってもそんなに不思議でもない……………か……………」

二人はしみじみとした様子でそう呟く。昨日の件に関わつた者としては、二人の關係に何かしらの変化があつたのであれば、それだけで十分という事だ。

結局、二人は良い雰囲気のままのリオスとなのに声をかけることなく、空気を読んで登校する事にしたのだった。

正直に言うと、あの糖質全開の固有結界に近づきたくなかっただけである、というのはルークとティアナだけの心の声だった。

「うーん……やっぱり学校は私学が良いかなあ……それとも普通に公立かなあ。うーん、でもでも、私たちがみたいに幼稚園からのエスカレーター式の方が何かと……」

「ねーさんは妄想で一体何年先まで見据えてるのさ！！！？？も
う未来が見えてる勢いだよこの人！！！」

刻が見えそうになったルークだった。

学校の門をくぐり、下駄箱に到着した一行は、そのぞれ靴を上履きに履き替える。

男女での上履きの違いなどはデザインのうえでは全くないが、強いてあげるなら色くらいだろうか。変わり気のないデザインだが、一応お金持ち学校の聖祥のモノらしいので、それ相応の品なのか、とかルークはそんな事を考えながら靴を履き替えていた。

「おーい、ねーさん。行くよ」

学年と暮らすと同じティアナと同じタイミングで上履きを履き替えたルークは廊下にさし当った辺りで、フェイトを待つ。
何をしているのか不明だが、彼女が上履きを履き替えてくるのが遅

かったのだ。

「何してんだか……」

やれやれと言った様子で、フェイトが靴を履き替えているであろう三年の下駄箱レーンに顔を向けてみる。

下駄箱といえば、ラブレター、若しくは画鋏、冬ならば雪玉を靴の中に入れたり、虫の死骸を大量に突っ込んだりと、イジメ的な手段、若しくは青春のページを飾るイベントの温床になり得る場所ではある。フェイトに限って、イジメなどはないだろうが。

まあ、ラブレターは流石に古い気もするが。昨今、手紙よりも携帯メールが普及してきた時代、年賀状もメールとする時代なのだ。ITの発展と共に、廃れてしまった青春イベントもあるだろう。

とかなんとか、またしてもどうでも良い事を考えてしまったルークだが。下駄箱の前で青い顔をして佇んでいるフェイトの姿を見て、すぐに我に返った。

フェイトの手には何やら紙が握られている。一瞬、まさか古典的な告白方法を採った勇者が居たのかとも思ったが、フェイトの普通ではない様子を見て、その考えもすぐに吹き飛んだ。

「どうしたの？」

「……!？」

ルークが真剣な表情でそう尋ねると、フェイトはようやく彼の存在を認識したのか、体をびくつと震わせた。

同時に、手に持っていた紙をポケットに押し込みながら。

「な、なんでも……無いから……」

嘘だ。

誰が見ても嘘だと分かる嘘。

そも、嘘だと分かってしまう嘘など、嘘に定義があるとするのなら、そのフレームに当てはまるものなのか定かではない。

嘘というのは、言った事が偽りであると相手に認識されてしまえば嘘ではないのだ。

「何でもないなら、なんでそんなに顔色が悪いんだ？」

「た、体調が悪い……ただだから」

「はいそれダウト」

二つ目の嘘ならざる嘘を指摘するルーク。

体調が悪いのならば、先程の妄想状態など保っていられるはずもない。

明らかに、先程の手紙がフェイトを動揺させているのだ。

「俺にも言えないのか？」

「……だつて……これは……」

「私の問題だから、かい？」

フェイトの言うであろう言葉を先に言ってしまうルーク。だがこれ

でハッキリした。

フェイトには何かしらの、『問題』が存在する。そして、それが彼女をここまで動揺させているのだ。

本当ならば、ここでこれ以上踏み込むのは、いくら姉弟とはいえど憚られるべき事なのだろう。

だが、ルークは敢えてその一線を越える。

直感とでも言えはいいのか、ここで何もしないでいると一生後悔する。そんな確信めいた予感をルークは感じたのだ。

「そのポケットに隠した紙。それが原因なんだろう？」

「……………」

沈黙は肯定とみなし、ルークは続ける。

「ねーさん。俺じゃあ頼りにならないか？」

「そんな事無いよ！」

今度の問いには即座にそう答えてきた。

だが、その言葉を聞いた時点でルークの勝ちだった。同時に、彼女の抱える悩みをなんとかしなければならぬという義務も発生した。

「分かった。じゃあ、昼休みにでも話してくれ。他の奴に聞かれない事なら、俺だけが聞くってことでもいい。」

「うん……………お願い……………。それと、ありがとう……………」

「どう致しまして。それじゃあ、さっさと行くよ。いい加減、授業に遅れそうだ」

「わわッ!!?」

ルークはフェイトの手を取ると、スタスタと歩き出した。やや足がもつれそうになったフェイトだったが、ルークとしては今すぐにも下駄箱からフェイトを遠ざけたかったのだ。

「（うざったい視線送りやがって……………）」

そう、下駄箱で青い顔をしたフェイトを舐めまわすような視線を、ルークは感じていたからだ。

「ストーカー……………ねえ……………」

「うん……………」

そして約束通り昼休み。フェイトとルークは屋上ではなく、人気の少ない樹木林のベンチに腰掛けながら弁当を広げ、加えてまずいおかず、フェイトの下駄箱に入っていたストーカーからの手紙を置いて話し合っていた。

なのはやりオス達には適当に言っておいた。まあ、ルーク達の様子に何かを感じたのか、深くは追求してこなかったただけだろうが。

「いつから？」

「一か月前くらい……最初は変な視線を感じるな、って思ってたけど、最近になってこんな手紙がかなりの頻度で来るようになって……」

フエイトは机上の手紙に視線を落としながらそう呟く。

表には出さなかっただけで、かなり精神的にも来ていたのかもしれない。朝の元気は見る影もなく、疲れが前面に出てしまっていた。

「『君の全てを僕のモノにしたい。君の全てを見せて欲しい。僕達は結ばれる運命なんだ。この定めから逃れる事は出来ない、二人でこの運命を受け入れよう……』……………うげ、やば……………弁当吐きそうになっちった……………」

ストーリーカーからの手紙の文章のあまりの気持ち悪さに、ルークは危うく先程胃に収めた卵焼きをリバーズしそうになった。

「この他に、なにかされた事とかは？」

「えと……………前は隠し撮りした写真何かが一緒に入ってた……………」

「よし、とりあえず、そのストーリーカーを血祭りに上げよう。その上で、その写真は俺がしっかりと保管するから。」

犯人ではないが、ほとんど犯人に見えるルークだった。

「……………どうすればいいのかな……………？ やっぱ、先生が警察に……………」

「無駄無駄。どうせ形だけの警告とか、カウンセリングして終わり

だつての。お役所仕事なんて高が知れてるよ。隠し撮り写真なんかはある程度のパンチにはなるかもだけど、それでも決定打には欠けるだろうね。クロノ兄さんに言えば、別だろうけど。縁者の中でのえこひいきって取られちゃ、兄さんの立場的にもまずい。」

ストーカーの被害を相談されながらも、殺人事件にまで発展してしまふという悲劇など、最近では珍しくもない。

結局、実害がなければ何もしてはくれないだろう。世の中など、所詮はそういうシステム下で動いているのだ。

「じゃあ……」

どうすればいいの？ と綺麗な双眸に少し涙を溜めながらそう呟くフェイト。

ルークにとつては、そんな彼女のかなしい顔を見せられるだけで、ストーカーを殴りとばす理由になるだろう。

だが、今はそんな事は出来ないし、するつもりもない。攻めるならば精神的にジワジワ甚振る、それがルークのポリシーだ。ティアナからは『ドS』と言われてドン引きされたが。

「ねーさん、今日から部活終わったら、野球部の練習グラウンドに来なよ。とはいっても、テニスコートは隣にあるから目と鼻の先だけだよ」

「…え？」

「もうすぐ地区大会だし、ちょっと待たせちゃう事になるかもだけど……」

「え？ え…？」

フェイトはルークの申し出の真意が分からないまま頭に？マークを浮かべてしまう。

「この写真、撮った日付はこの前の土曜日か……練習試合で全員参加だったし、野球部は白かな。複数犯でやってるなら話は別だけど、コンビ組んでのストーキング何ぞ聞いた事無いし……ま、大丈夫でしょ」

「あのルーク？？ さっきからなんの話を……？」

状況証拠や写真などから、身近な存在にターゲットが居ない事を予測していくルークに、フェイトは慌てて割って入る。
ルークが何を考えているのか、分からなかったのだ。

「何って、決まってるじゃん。」

言いながら、ルークはSっ気全開の笑みを浮かべながら答えた。

「ストーカー 狩り」

「か、狩り……？」

ルークの口から出た台詞を復唱してしまうフェイト。

どうやら、ルークは本気でストーカーを血祭り（精神的に）に上げるらしい。

「隠れてるんなら、炙り出すまでだ。この気持ち悪い手紙の送り主をさ」

ルークはお箸の反対側で、手紙をトントンと突きながらそう言う。
「どうやら、彼にはなにやら考えがあるらしい。」

こういう時と、エロいことに關しては頭の回転が速いルークである。

「あの……でも……ルークに迷惑……」

フェイトがそう言いかけた瞬間、彼女の口に春巻きが突っ込まれる。
ルークが弁当箱から箸でつまんだ春巻きを突っ込んだようだ。

「そついうのは言いつこなし。次言ったら乳揉むから」

「ち、乳！！？」

本当に、別の立件でルークを警察に突き出すべきなのかもしれない。
だが、ふざけた様子でも、彼の表情は真剣そのものだった。どうも、
フェイトを恐がらせた犯人に対してかなりご立腹の様である。

ちなみに、フェイト的にはルークになら揉まれても良いと返事しか
けた事は言つまでもないことだろう。

「大丈夫　ねーさんの事は、俺が守るよ。はい、約束」

「あ、ちょっと……」

言いながら、ルークはフェイトの小指と自分の小指を絡めて指切り
げんまんした。

一方的にした場合、有効かどうかは不明だが、ルーク曰くやる事に
意味があるらしい。

第十五話 俺の姉さんがこんなにエロ可愛いわけがない（後書き）

F20C「というわけで、今話からフェイトのストーカー撃退編が始まりました」

ルーク「姉さんに舞い込むトラブルってこういう事か」

F20C「ま、あり得ない事じゃないだろうしね。あれだけ目立つ存在なら、その手の輩も当然出てくるだろうし……」

ルーク「ていうか、姉さんの妄想が日に日に酷くなって行っているような気がするんだけど、気のせいなのかな……」

F20C「もうフェイトさんは妄想族を超越しつつあるからね……
…今後の活躍が楽しみだ」

ルーク「活躍しなくても良いから……!!」

第十六話 シスコン×2による、ストーカー血祭り作戦（前書き）

さて、今日は二作品同時更新ですww
スクラパをご覧の皆さま、Blood of Promiseの方もどうぞよろしく願いしますww

今回は久しぶりに新しいゲストキャラのご登場でございます。

最初についた出演希望アンケートの中から……ついにあの方が……

……

シスコン風紀委員、堂々の初登場。

では、本編をどうぞ!!

第十六話 シスコン×2による、ストーカー血祭り作戦

ルークはフェイトのストーカーの件を知った日から、基本的にフェイトと同じ時間に学校に行き、同じ時間に帰るようになった。

登校は今まで通りだが、下校は部活での終わる時間に差があるため、基本的にはフェイトは野球部の活動が終わるまで、グラウンドに来ており、ティアナの手伝いなどをしていていた。

それだけで

「ああ、ハラウンさんがついにマネージャーに……………」

「俺、もう死んでも良い……………」

「マネジってなんかエロい単語じゃね？」

などなど、やっぱり野球部のメンバーも疑うべきなのでは、と思いたくなる発言が目立った先輩方及び同級生には、シートバッティングの際に、全員の股間に弾丸ライナーを食らわせておいたルークである。

彼のバットコントロールが異才を放ち始めた瞬間であった。

さてさて、そして次の日の朝。ルークはとある場所を訪れていた。教室のプレートには『風紀委員会』と圧迫感のある名称が書かれている。そう、ルークはこの主に用があるのだ。

コンコン……

「失礼しまゝす、ヒスイセンパゝイ!!」

ルークは怖気づくことなく、寧ろ気楽にドアをノックして風紀委員の部室に入り、目当ての人物の名前を読んだ。

「ん？ おお、誰かと思えばルークか。何か用か？俺としてもあまり暇ではないんだがな」

「またまた御冗談を。今日の朝もコハクに近づこうとした二年生を血祭りに上げてたじゃないですか。どこからどう見ても暇人でしょ……」

「あれは高度な戦略的な……」

「シスコンですね、分かります」

「お前にだけは言われたくない!!!!!!」

と、二人は賑やかな会話（傍から見れば仲が悪いようにも見えなくもないが、実際はからかいあっているだけ）を済ませ、ルークは風紀委員の部屋のドアを閉める。

ちなみに、コハクとはこの眼の前の先輩、ヒスイ・ハーツ（シスコン）の妹である。

可愛さレベルは高いので、男に言い寄られている事が多いのだが、彼氏はいない。

なんでも、彼女の近づいた男子生徒は次の日には東京湾に浮いてい

るとかいないとか。

要するに、ドが付くほどのシスコンなのだ。本人は力一杯否定しているが。

ルークとは初等部からの付き合いであり、かなり、いや、めっちゃめちゃ頼りになる先輩の一人である。

「で？ 今日は何のようだ？ お前の事だ、どうせまたフェイトとのことなんだろう？」

「あはは、まあそうですね。でも、今回はちょっと面倒な事になってて……」

「ふむ……よし、言ってみろ」

ヒスイはルークから漂う只ならぬ雰囲気を感じ取り、表情を引き締めて彼の話を聞いてくれる体勢になった。

なんだかんだ言いながら、面倒見の良い子の先輩、女の子からの人気は最早トランザム状態にも拘らず彼女が居ないのは、恐らくシスコンがたたつての事なのか、若しくは心に決めた相手が居るのかもしれない、とルークは勝手に想像していた。

そして、ルークはフェイトのストーカーの事について、ヒスイにかいつまんで説明したのだった。

「なるほど……フェイトにストーカーか……」

「そうなんですよね……。」

二人はソファに座りながら、神妙な顔付で、どこかの司令よろしく机に両肘を置き顔の前で手を組む。

「よし、そのストーカー……消すか」

「ああ、やっぱりそう言いますよね先輩は。なんとなく分かってましたけど。」

「こんな陰湿なやり方しか出来んのなら、日の下に引きずり出してやればいいだけだ。その上で、生まれてきた事を後悔させて……」

「あゝストップ、ストップ。それじゃあ完璧に先輩が悪役っぽくなっちゃいますから。ていうか犯人に何するつもりだったんです？」

このヒスイ先輩、見た目はクールなのだが、熱いハートをお持ちで一旦火が付くと沈下に時間がかかるのだ。彼を務所行きにする気は毛頭ないので、とりあえず血祭りエンドだけは回避させる事にする。

「ふむ、ダメか……。折角、恥部を露出させた上で、亀甲縛りを施した後、校門に吊るしておこうという素敵なプランを考えついたというのに……」

「この人悪魔だよ！！ 良いのかこの学校??！ こんな人風紀委員にしておいて??!!」

この学校の行く末が少し心配になってきてしまったルークだった。

「まあ、とつちめるのは賛成として、まずは犯人を炙り出したいんですよ。相手が分からない以上、恥部を露出も何もないでしょ？」

「それもそうだな。で？ その為の方法、もう考えてあるんだろう？」

そう言つて、ヒスイは不敵な笑みを浮かべながらルークにそう尋ねてくる。

無論、ルークも何の考えも無しにここに来たわけではない。策はあるのだ。

人の精神をダイレクトに攻め、ズダボロにする事が出来るほどのドS、エロティック大統領としての性に対する知識だけでなく、スピリチュアル・アタック（精神攻撃）も、彼の得意技の一つである。（ティアナやリオスからはドン引きされたが）

「ええ、策はあります。そこでなんですけど、少し先輩の権力……顔の広さをまずはお借りしたいなあ」と……

「ふむ……『まず』はということは、俺の出番はまだあるようだな？」

「はい、今回の作戦の締めの際に……」

「ふん……良いだろう。乗ったぞ、その話。もともと俺はストーカーというの類が大嫌いなんだ。以前、コハクも少し被害に遭つていてな……フェイトまでその被害に遭つているとなれば、手を貸さないわけにはいかん」

と、ヒスイはルークの話に乗って来てくれた。

この学園の風紀委員長たる、このヒスイ・ハーツ。学園に対する裏側の権力（どうやって作り上げたのかはまるで謎だが）は相当のモノである。

余談ではあるが、この男弓道の腕も相当のモノであり、弓道部のエースである。

「では、作戦名『ストーカー、血祭りワツシヨイ』の概要を説明しますね……………」

「うむ」

そうして二人は、揃ってドSな笑みを浮かべながら、風紀委員会室にて、話し合いを始めたのだ。

ストーカーは後悔することとなる。この二人を敵に回すと、どれほど恐ろしい事になるのかを理解していなかったが故に……………

その日のお昼休み……………

ヒスイとの話し合いを済ませ、作戦の第一段階となる昼休みを迎えたルーク、そしてフェイトは、今日はなのはやりオス達と共に昼食を取っていた。

ちなみに、ヒスイはいない。彼にはこの第一段階において最も重要

な仕事が割り振られているのだ。

「はい、リオス君。あ〜ん」

「あ、あ〜ん……………」

と、一昨日のデートから距離が縮まりまくっているのはとリオスは、ナチュラルにイチャツイている。
ハッキリ言おう、お昼の弁当に入っていた唐揚げが途轍もなく甘くなってしまったと……………

そんな中、少し硬い表情のフェイト、ルークにストーカーの事を打ち明けてからは無理な笑顔を作る事が無くなったが、どこか不安を感じているのだろう。

「ね、ねえ、ルーク？ どうやって炙り出すつもりなの？」

「ん？ 大丈夫、直に分かるさ。ヒスイ先輩に頼んで手は回してあるからさ。……………さてと、こっちも一応牽制しとくかな……………」

「ふえ？」

言いながらルークは自分の弁当箱から春巻きを箸でつかみ……………」

「ほい、ねーさん。あ〜ん」

「はえ！！？ あう……………その……………」

「なんや、今日のルークは、えらいフェイトちゃんに優しいやん？
なんや、ついに姉弟の關係に終止符を打ったんか？」

突然、ルークは春巻きを手に、フェイトのあぐんをしてきたのだ。
無論、この予想外の展開にフェイトは顔を真っ赤にしていまい、はやてもニヤケ面でからかってくる。

「あはは……はやてさん、部屋にある数百冊にも上るエロ同人誌、全部焼き払ってあげましょうか？」

「すみません、それだけは勘弁してください」

「どんな脅し文句！！？ ていうか、はやてそんなに数持ってるの知らなかったんだけど？？」

はやての意外な弱点、そして秘蔵の品物についての事実にはフェイトはいろんな意味で驚愕するのだった。

「兎に角、ほら、ねーさん」

「あ、うん……あぐん……／＼／＼／＼」

ルークに促され、フェイトは春巻きを頬張る。

傍から見れば、完全にイチヤついていているようにしか見えない。だが、ルークにとっては、そうでなければ意味がないのだ。

「（…………ふん……。見てるわけですか…………）」

ルークはフェイトと接近している所をあえて強調し、彼女を常に監視している輩の視線を探り当てようとしていた。

フェイトのを見せてくれた隠し撮り写真の枚数はかなりのモノで、ほとんど丸一日中彼女をどこから監視していなければ撮る事は無理

なレベルだった。

昼休みに關してもそれは言える事だろうと考えたルークは敢えてフ
ェイトに接近し、ストーリーカーからの僅かなアクションを期待してい
たのだ。

結果は見事に的中、舐めるようで、それでいて気持ち悪い視線を
感じた。

「（なら、ヒスイさんとの作戦でアプローチをかけてみますか……
……）」

ルークはフェイトに接近したまま、薄く笑みを浮かべながら、フル
タッチパネルタイプの携帯電話の時計を見た。
12時30分。

予定通り、例の作戦が始まった。

ピンポンパンポーン……

そんな音と共に、校舎のあちろちに配置されている放送スピー
カーから、放送の開始を告げる気の抜けた音が流れた。

『あ……風紀委員会・委員長、ヒスイ・ハーツだ。風紀委員から
落し物のお知らせがあるので、校内に居る愚m……生徒は全員しっ
かりと聞くように』

（今完全に、生徒のこと、愚民って言いそうになったよね……！！？
あの人何余計なアドリブ入れてんの……！！？）

ルークはヒスイの放送に若干の不安を感じてしまった。

「落し物か……風紀委員がわざわざ知らせてくれるなんて珍しいなあ。確かに、落し物関係もあそこに押し付け……頼んでおいたんは確かなんやけど……」

この時、ルーク達は思った。

『この学校、本当に大丈夫なのか？』と……

『え〜とだな、その落し物なんだが、妙な手紙なんだ。差出人の名前も無し、宛先人もない。』

「……………ルーク、もしかして……………」

「うん、そのまさか」

フエイトの問いかけに、ルークはSっ気全開の笑みを浮かべてそう答えた。

『え〜、内容を少しだけ出すとだな……………』君の全てを僕のモノにしたい。君の全てを見せて欲しい。僕達は結ばれる運命なんだ。この定めから逃れる事は出来ない、二人でこの運命を受け入れよう……………』という様な、厨二病と粘着質さ全開の内容だ』

そう、ルークとヒスイはストーカーからの手紙を落し物として処理し、放送を利用して全校生徒の前で内容をぶちまけてやろうとしているのだ。

ストーカーというのは、基本的に大勢の人間に気付かれた上で行う事ではない。

被害者も、ストーカーなどの被害に対しては、あまり周囲を頼りづらく、情報が周囲に漏れない。

狭いコミュニティ内に留まり続けると、被害は増長していく一方なのだ。

そこで、被害者と犯人の存在を暈した上で、手紙の内容だけをぶちまける。

あの手紙の内容を考えれば、誰もが知る事になるだろう、この学園の誰かがストーカーに遭っているという事実を。

この学園は基本的に女の子レベルは高いので、誰しもが被害者になり得るため、女性陣のストーカー等の存在は嫌悪の対象にしかない。

そして、ストーカーからすれば、名前が公表される事は無くとも、精神的ダメージ、恥ずかしさはかなりのモノだろう。

加えて、自分がその手紙の持ち主だと周囲が知らなくても、自分がストーカーだと誰か見られているかもしれない。という、疑心暗鬼になってくれば、なお面白い。

それに、ストーカーの中には、自分のしている行為がストーカーだと自覚していない場合もある。

まあ、どちらにしてもこの放送での目的はハッキリしていた。

「（精神的ダメージ、恥ずかしさ、疑心暗鬼。相手の精神を徹底気に圧迫しまくって、向こうからこっちのステージにお越し願おうか……………。ここまでやられれば、流石に黙っちゃいないだろう？ どうかにいるストーカーさんや……………」

ルークの作戦の第一段階は、詰まるところそう言う事だった。

『さて、この手紙の内容に心当たりがある奴は風紀委員の部屋まで取りに来てくれ。安心しろ、名前を公表したりはしないからな。では、これで放送を終わる。』

そうして、再び気の抜けた音楽と共に、放送が終わった。これで、作戦の第一段階は終了である。

「る、ルーク??！　こんな事して本当に大丈夫なの??」

フェイトはなのは達に聞こえないようにルークにそう尋ねる。

周囲ではすでに、手紙の内容を気持ち悪がる奴等が続出しており、ルークの思い描いた通りの展開になっていた。

「ああ、これで良いんだよ。あとはあっちから出てくるのを待つだけさ。」

「出てこない場合は？」

「あはは………そのときは………引きずり出すまでさ　ま、犯人が俺の思い描いた通りの人間なら、今日の帰り道にでも出てくるさ」

ルークはそう言いながら、弁当を頼張る。

相手の出方は、大方予想できるし、その為の駒も既に揃っている。

すでに、このストーカー狩りゲームは詰みの状態だった……………

離れ校舎の裏にて……

「ふざけやがって…… ハラオウンさんを惑わす悪魔め…… 彼女の夫に相応しい僕にこんな無礼を働くとは……」

その男は壁に向かってブツブツとそう呟きながら、血走った目を光らせていた。

「はあはあ…… 待っててね、ハラオウンさん…… すぐに迎えに行くからさ…… クククク……」

男は懷から取り出したフェイトの隠し撮りした写真を見ながら、息を荒くして気味の悪い笑いを浮かべる。

ストーカー男は、ルークの思い描いたシナリオ通りに動き始めた。

その先に地獄のような苦しみが待っているとも知らないで……

第十六話 シスコン×2による、ストーカー血祭り作戦（後書き）

F20C「やべーよ……自分で書いておきながら、このストーカーきめえって思っちゃった……………」

ルーク「次回でボコボコになる予定なんだから無問題だよ」

F20C「お前が捕まらないのかが不安だ……。さて、今回ゲストキャラとしてご登場いただいたのは、バルディッシュ先生の神作品、魔法少女リリカルなのはStrikers！天を撃ち抜く烈風！よりお越しいただいた、ヒスイ・ハーツさんでございます。」

ルーク「弓道部のエース×風紀委員のボス……………最強じゃね？」

F20C「当初の予定では、弓道部の先輩って事だったんだけど、やっぱりヒスイさんって私の中では学園の裏の支配者的なポジションなんですよね。勝手な設定でホントすみません、バルディッシュ先生……………」

ルーク「次回はヒスイ先輩と一緒に、ストーカーを再起不能にしたいと思いますので、どうぞご期待くださいww」

でわでわ

第十七話 ストーカーは絶対に許さない、絶対にだ（前書き）

今回も私特製の最高に気持ち悪いストーカーの生態と、彼の末路をご覧ください。

ストーカーの描写を書いている最中、四回くらい腹痛に襲われました。

文章上から作者の消化器官を攻めてくるなんて……その執念もうざキモイです。

さてさて、ギャグ&エロ&うざの詰まった内容になりますが、どうぞお楽しみください。

第十七話 ストーカーは絶対に許さない、絶対にだ

放課後の部活動時間直前……………

二人の男がとある場所にて秘密裏に会っていた。

「首尾は？」

「ふ、俺を誰だと思っている？ お前のプランの為に必要なものはすべて手配済みだ。あと二時間もあれば準備は完了する。」

「なるほど、ということは部活が終わるころには、ということか……………。流石はヒスイ先輩、それなら既にこのゲーム、勝ったも同然。あとはターゲットが来るのを待つのみですね……………」

「来るのか？ 本当に？」

男、ヒスイ・ハーツは目の前に居る男、ルーク・ハラウンにそう尋ねる。

「ええ。もちろんですよ。もしも来ないのならば、彼はストーカーとしても、男としても中途半端だったというレッテルを、自分自身に張る事になる……………。人としての尊厳が残っているのならば……………必ず来るでしょう……………」

「ふ、その残りかすの尊厳を、ぐちゃぐちゃにするというわけか……………。ふ、ルーク、お前もなかなかの鬼畜だな……………？」

「先輩こそ……顔がニヤケまくってますよ？　なんだかんだ言いながら、ストーカー狩りを楽しんでませんか？」

二人は笑いあいながら、お互いにそう言い交わす。
今の二人を端的に露わす言葉があるとすればそれは……………

「ふふふ、俺はな……………陰湿且つ粘着質な方法でしか女に近づくことの出来ない奴の、人間としての残り少ない尊厳を踏みにじるのが最高に好きなんだぞ？」

「おや、奇遇ですね……………。俺も、その類の人間の絶望する顔を見ると心が躍っちゃうんですよ……………」

二人「はははははは……………はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは……………」

そう、悪魔だ……………

「ルーク、お疲れ様」

「うん、んじゃ、帰ろうか」

さて、部活も終わって帰宅の時間。フェイトは今日も自分の部活終わりに野球部の手伝いをした後、ルークの練習が終わるまでグラウ

ンドにいた。

ルークからも今日が勝負だと言われているので、彼女としても緊張してしまいが、あまり表情に出すわけにはいけないので、極力平静を保つ努力をしている。

と、フェイトが緊張を出さないように必死にしているところに、ルークが意外過ぎる提案をしてくる。

「ねーさん、手でも繋ごうか」

「ふえ！！？ てててて、手を繋ぐの！！？」

そう、ルークは自分から手を繋ごうと言って来たのだ。基本的に自分からはそういう事を絶対に言ってこない彼からそんな言葉が出たので、フェイトもまた珍しく真っ赤っかになっていた。

どうやら、自分からするのと、相手から誘われるのではグレードが違うようだ。

「どうしたのさ？ いつもは腕まで組んでくるのにさ」

「う、ううん！！！ つ、繋がります！！！ 是非！！！ ふふ、不束者ですが、よろしく願いしましゅ！！！」

緊張のあまり、嫁入り前のような台詞を口にしながら、モノの見事に噛んでしまったフェイトだった。

そして、二人は仲良く手を繋いで帰路に就く。傍から見れば仲睦まじい男女だが、実際彼らは姉弟だ。

加えて、これもルークの策の一部だ。でなければ、恥ずかしがり×

フェイトに対して限定のツンデレである彼がこんな積極的な行動に出る筈もない。

ルークはヘタレなのだから。

「（オーオー……………付いて来てる付いて来てる。隠れてるつもりだろうけど、殺気が半端ないから全然隠れてないよ、ストーカーさんよ……………」

ルークはそんな事を考えながらチラツと後ろを見る。

姿は見えないが、ストーカーは確実にルークとフェイトの後を付いて来ている。ルークとフェイトが仲良さげに手を繋いで歩いている所を見て、かなり殺気だっているようで、恐らく子供でも分かるレベルである。

そのまま、ルークとフェイトはいつもと同じ住宅街に入っていく。この辺りは少し地形が入り組んでおり、初めて来る人間はほぼ間違いないく迷ってしまうことから、『迷宮住宅街』などというセンスの欠片も無い名前が付けられていたりする。

今宵、この場がストーカーを血祭りにする舞台になるなどと、誰が予想したであろうか。

「（はあ／＼／＼／＼／ルークが自分から手を……………はふう……………／＼／＼／＼こ、これってもしかして……………姉弟の関係からのステップアップのフラグが立ったのかな！！？　うう、だとしたらどうしよう……………私、毎晩ルークに口では言えないような激しいプレイを……………ううん、そこは年上の私がリードして……………うん、逆に私がルークを虐める方向で……………）」

ストーカー被害者の当の本人は、先程の緊張などどこ吹く風。妄想

に向かつてひたすら突き進んでいる。

ある意味では、ストーリー以上にこちらを早急になんとかするべきなのかもしれないが、まあ良いだろう。

「さてと……………このへんで良いかな……………」

「え？ ルーク……………」

と、道なりに進んでルークとフェイトは先が行き止まりの一本道の地点で立ち止まった。

突然のルークの行動にフェイトの頭には？マークが浮かぶ。

「ねーさん、これからする事、慌てないで対応してね」

「ふえ…？」

ルークはフェイトの耳元でそう呟やき、体を放す。

そして、次の瞬間とんでもない行動に踏み出したのだった……………

その男は、ルークとフェイトの後を付け、ずっと様子を窺っていた。昼間の放送での屈辱を晴らすため、そしてフェイトに相応し人間は自分だと信じて疑わない彼、ストーリーカー男は目の前で仲良く手を繋ぎながら歩いている二人を見て、彼の人生史上最高に怒り狂っていた。

「（あいつあいつあいつ！！！！ ぼ、僕のハラウンさんの手を…

…… あれは僕のモノなのに！！！！ 弟だか何だか知らないが……
…… 絶対に許せない！！！！！！！！！！（「」

思い込みもここまで来ればあつ晴れとも言つべきか。

ともかくこのストーリー男、思い込みが激しい男だった。

フェイトにここまで、ストーキングをするまでに惚れてしまった理由も、たった一回、フェイトに教室で挨拶をしてもらえたからである。

たったそれだけの、フラグ構築イベントにもならないような事で、彼はフェイトが自分にあるかと思ひ込んだのだ。

「（お前は知らないかもしれないが。教室ではいつも彼女は僕の方に視線をくれているんだ！！）ハラウンさんは、どうしようもないくらいに僕の事が好きなんだよおお！！！！）」

人間の思い込みの力とはすさまじいもので、目隠しをされたまま、熱せられた鉄を背中に押し付けると言われた人間に、何の変哲も熱を与えてもない鉄の棒を当てた所、当てた部分が火傷したように腫れ上がったという。

そう、彼の思い込みの力は尋常ではないのだ。

たまたま目があったりただけで、この有様。もしかすると、フェイトの行動の一つ一つが彼の中では自分に対する行為の現れのように見えてしまっているのかもしれない。

と、その時だった。ストーカー男の目に、とんでもない光景が飛び込んできたのは。

「あああああああああ、あいつ……ハラウンさんを……」

……壁に押し付けて……キキキキキキキ、キスしようとして
いる?????!」

そう、なんとルークがフェイトを暗がりにつれ込み、彼女の唇を奪
っているではないか。

暗さ故にハッキリとは見えないが、ストーカ 男からはそう見えた。
無論、思い込みの激しい、フェイトを自分のモノだと勘違いしてい
る人間ならば、流石に我慢の限界を迎える事になるだろう。

この時、男の思考回路はフェイト（プリンセス）を誑かす悪人、ル
ークをプリンスである自分が助けて、ハッピーエンド。
行く行くは結婚、子供は二人で、3LDKの一戸建てという未来予
想図まで立てていた。

男は、立ち上がる。

勘違いも甚だしい思考回路から出た結論は、目の前でフェイトにふ
しだらな行為を働いている男を排除することだった。

「ぼ、僕のハラウンさんから、そ、その薄汚い手を放せ!!!!!!
! この変質者!!!!!!」

どっちが変質者かは、読者の皆さんの判断に任せる事にする。

「ごめんね、ねーさん。これも作戦の内だから」

「は、はひ……／＼／＼／＼／＼／」

ルークとフェイトの距離はほぼゼロだった。そう、彼らの間には5ミリほどの間隔しか空いていない。

がしかし、5ミリという間隔が存在するという事は接触はしていない。

キスしているように見せかけているだけである。ストーカー男を炙り出すために。

が、こんなにも接近してしまえば、もちろんの事恥ずかしさ全開なわけ……

積極的過ぎるルークに、フェイトは最早オーバーヒートしそうになっ

ていた。

少し、彼女の脳内を覗いてみよう。

「（キタ　（ノ・（エ）・）ノ　：。　・：＊：・。　！。　：。　＊：　・。　」

＊：　・。　！　　！！！！　　これ！！！！　　ルーク！！！！？？

キスじゃない！！！！？　　これほとんどキスだよね！！！！？　　え？え？

？　　もうこの状態って、帰り道で我慢できなくなって、暗がりになれ込んでガバーッってやつなのかな！！？　　ででででも、初めてがお外だなんて……………　　ルークって意外にワイルドなプレイが好きなのかな……………？　　ううん、もしかしたら衆人觀衆の前でないと興奮しないって趣味なのかも？？！　　ああ、でもやっぱりお姉さんとしては性欲旺盛な弟の欲求を満たしてあげるって言うのも仕事なわけだし……………）　　」

やめよう。

このままでは脳内回想だけでこの小説が消されかねない。

さて、時間を進めよう。

只今、ルークはフェイトを優しく壁に押し込んで、かなり接近している状態にある。

あとは、この状態を目の当たりにしたストーカーが飛び出してくるのを待つばかり。

こんなので飛び出してくるバカが居るかって？

居るんです。

「ぼ、僕のハラオウンさんから、そ、その薄汚い手を放せ！……！
！ この変質者！……！」

ほらね。

「ハラオウンさんを誑かして………お前なんか、僕がこの手で………」

と、ストーカーは謎のボクシングポーズを取りながら、暗がりから飛び出してきた。

そして、ルークとフェイトを引き離すように、歪なファイティングポーズから拳を繰り出してきた。

ひゅん……！！

「何このへなちょこパンチ？」

ルークはフェイトの手を引きながらそのパンチを軽々と避けた。バツターとしての動体視力を持つてすれば、ストーカー男の素人丸出しな拳を避けるなど造作もない事だった。

「ふう……ふう……！！！！！！　お前……僕のハラウンさんに……」

「僕のとて……ねーさん、この人の所有物になった覚えは？」

「ふえ！？　な、無いけど？」

気持ち悪さ全開のストーカーの突然の登場に、フェイトは絶賛ドン引き中だった。

ルークはとりあえず、フェイトを安全な場所まで離れさせ、ストーカー男と相對する。

「これはこれは……。どんな奴がねーさんのストーカーかと思えば………。俺初めて見たよ、リアルで牛乳瓶の底みたいなグルグル眼鏡を付けてる奴。」

「うるさい！！！！　僕はド近眼なんだ！！！！　毎日勉強漬けなんだ！！！！」

ハッキリ言おう。別に威張る事ではない。

ストーカーの容姿は、ルークが言ったようにグルグル眼鏡で、ひょろりとした長身、髪はうざったいくらいに伸ばしており、肩辺りまで伸びている。

カッコいい兄ちゃんが髪のを伸ばせばバツチり決まるのだが、こ

の男がそれをやると逆に不快指数が上昇する。

今すぐにバリカンで丸坊主にしてやりたくなるレベルだった。

「お前……ハラオウンさんに弟のくせに、キキキキキキスするなんて……！！！」

「お前バカか？ フリに決まってるだろjk。お前をおびき寄せるための」

スト男（略称）の突っ込みに、欠伸を混じらせながらそう答えるルーク。

が、相手の方はそれでは納得いかないようで、話も聞かずに罵声を浴びせてくる。

「ハラオウンさんは、僕と結ばれる運命なんだ！！！ お前なんか邪魔していいものじゃない、早々に立ち去りたまえ！！！」

「ぶはwww 『たまえ』 だってwww やめてくれw 腹が振れるwww」

スト男の口調にルークは腹を抱えて笑ってしまう。

このスト男、陰湿な方法でフェイトに付きまとっていた割に、キャラが濃過ぎる。

「ま、そんな事はどうでも良いか……。さて、ストーカーさん。モノは相談なんだけど、金輪際ねーさんに付き纏うのはやめてもらえるかな？ ねーさん、ここのところあんたの嫌がらせの所為で食事も喉を通らないらしいんだよね。この前なんか、体重が2キロ減ったとか言って、嬉しさと悲しさがごちゃ混ぜになった顔してたし」

「ちょ???！　なんでルークがそんなこと知ってるのかな???！
！　体重測ってたのお風呂場だよ!!!!？」

やはり、ストーカーよりも先に、このエロティック大統領を務所送りにした方が世界の為なのかもしれない。

「うるさい、うるさい、うるさい!!!!　付き纏うだつて？

違うね、僕はハラウンさんを見守っているだけだ!!!!　僕の半身となるべき存在を守るなんて、当然の義務であつて権利だろう！
!!!!　彼女を幸せに出来るのは僕だけなんだよおお!!!!」

「思い込み激しい奴…………。　ねーさんの気持ちは完全無視ですか………」

ルークは最後通告を蹴ったスト男に軽蔑の眼差しを送りながら溜息を吐く。

やはり、いや、ここは思い切り目の前の汚物を殺菌しなければなら
ないらしい。

そうと決まれば後は殺るだけだった。

「僕の……僕の花嫁を…………　お前なんか汚されてたまるか!!!
!!!　僕は……僕は君に決闘を申し込む!!!!」

「は？」

と、頭の中で地獄の拷問フルコースをどうやって吹っ掛けようかと思
い、思案していたルークだったが。

ラッキーな事に、相手の方からその機会を作ってくれたのだ。

「小学生のころ、通信教育で習ったボクシングで、君を叩きのめす

そう、決闘開始のタイミングなどはどうでもいいのだ。

周りが見えなくなるくらい頭に血が上った状態で、こちらに走って来てくれさえすれば、それだけでルークの策は完成するのだから。

「マイエンジェル・ハラウンさんに捧げるううう、ゴットハンド……クラッ!!」

「中二病乙」

リアルで初めてだ、技名を叫びながら殴りかかってくる輩を見るのは。

ルークは彼の中二つぷりに敬礼をしながら、手に持った謎のスイッチをポチッと押した。

ガコン!!!

「ひょ??」

ルークが謎のボタンを押した瞬間、スト男の足が付くであろうマンホールのふたがパカッと開いたではないか。

当然、足場がなければ人間には落下という物理現象が待っている。スト男はマンホールの中に勢いよく落下していった。

「あああッあああああ~~~~~~~~!!!!!!??」

「良い旅を」

落下していくスト男を見送りながらルークは穴を覗きこむ。

無論、本物のマンホールを開けて、スト男を下水に叩き落としたわ

けではない。

この落とし穴は、ヒスイのコネクションを通して聖祥の科学部が全力を挙げて作ってくれた、ストーカー断罪用の落とし穴だ。

「な、なんだこれ！！！？ 下水じゃない……？？！ なんだかベトベトしているが………というか、この卑怯者！！勝てないからってトラップまで使うのか！！！？」

「いや、お前に触るのが嫌なだけ。うん、なんかもう生理的に無理。というか、ストーカーにだけは卑怯者とか言われたくないわ！！」

落とし穴の深さはせいぜいが2メートルで、普通に上がってこれるだろう。

が、ルークがただの落とし穴を用意している訳がない。

今、スト男が使っている謎の液体プール、それこそが今回の撃退作戦の要でもあった。

「さてと………」

言いながら、ルークはもう一度ボタンを押した。すると、液体プールごとスト男が地上にせり上がってきたではないか。どうやら、機械的な仕掛けが施されているようだ。

「……………きゃ————！！！！？？」

そして、スト男が完全に地上に戻ってきた瞬間、フェイトが悲鳴を上げた。手で目を隠して、スト男の方を見ないように必死である。

「は、ハラオウンさん……？ 一体何を……？」

「おいおい…… ストリーキングだけに飽き足らず、ストリップの趣味まであるとは…… 最早犯罪者級の変質者じゃないか……」

訳が分からないというスト男に、ルークが汚いものを見る視線を送ってくる。

何事かとスト男は彼の視線を追って、自分の現在の姿を目にした……すると……

「な、なんだこれは！！！？ ふ、服が溶けてる！！！！？」

全身、一糸纏わぬ、言い方を変えれば全裸の男の姿がそこにはあった。

彼の着ていた制服はドロドロに溶けて、液体の上に浮いている。どうやらあの謎の液体、服だけを溶解する効果があるらしい。

パシャパシャ！！！！

「うあ！！？」

スト男が自分が全裸である事を確認した瞬間、その場にフラッシュが焚かれる。

「ふむ、良い写真、とはとても言い難いが、なかなか面白いものが取れたな」

「流石はヒスイ先輩、シャッターチャンスを逃さない男」

そのフラッシュの先には、ヒスイ・ハーツがデジカメ片手にドSな表情を全開にしながら立っていた。

どうやら、彼が全裸のスト男をカメラに収めたようだ。

「や、やめろ!!! 撮るな!!!」

「やめろだと? 同じ事をお前はフェイトにもやっていた。当然の報いだと思うがな」

フェイトを盗撮していたスト男に何も言える義理はない。

フェイトの場合、裸ではないにしろ、女性の姿を無断で撮影するなど、変態紳士道に背く行為である。

「さあ、これを知り合いのアイコラ職人（お馴染みの豆狸）に頼んで、いろんな合成をもらって、校内にばら撒けば……」

「ふん、我らの計画は完成する……か……」

「なっ!!!?」

スト男の顔が、ルークとヒスイの一言で凍りつく。

もちろん、そんな事をすれば学園内での笑い物で済まないばかりか、ストーカーと変態とのダブル受賞で一生家から出られなくなるかもしれないだろう。

「ふ、ふざけやがって……ハラウンさんの夫である僕に……」

「夫? 笑わせるな、お前には村人Dの役目、いや、物語の最初で魔王に殺される名前すら出てこない人間の役で十分だ……おや?

お前は……」

と、そこでヒスイがスト男（全裸）の顔を見て何かに気が付く。

「お前は確か、俺とフェイトのクラスの……」

「北条院だ！……！　そして、行く行くはハラウンさんの伴侶となる男さ……！」

どうやら、スト男（全裸）の正体はフェイトとヒスイのクラスに居たらしい。まあ、盗撮の時間帯を考えれば、納得も出来ることだ。

「北条院って……名前と行動と容姿にここまでギャップのある人も始めて見たよ俺……。名前負けし過ぎ」

「う、うるさい……！　ああ、もう……！　君たちは少し黙っていてくれたまえ……！　僕はハラウンさんに大事な話が……」

スト男はしつこくそう言いながら、フェイトの方に熱い視線を送る。彼女はその視線に怯えてルークの背中に隠れてしまった。

「ハラウンさん……！　愛しています……！　どうか、この僕の溢れんばかりの愛を、受け取ってください……！　そして、僕達が結ばれるという運命に身を委ねましょう……！」

スト男（全裸）はフェイトに向かって気持ち悪さ指数全開の告白をかました。

その告白のあまりの気持ち悪さに、ルークとヒスイは軽くお昼に食べたモノをリバーシそうになった。

そして、気になるフェイトの答えは……

「ぜ、絶対に嫌です……！　そもそも、私あなたの事全然知りま

せん！！！！！」

「ひよ？」

瞬間、世界に電流走る。

「し、知らない？ 同じクラスで毎日一緒なのに？ そ、それに毎日のように僕に熱い視線を……………」

「だ、だって、全く全然記憶にないんだもん！！！ それに、仮に知っていたとしても私はあなたに視線になんて送りませんから！！！」

どうやら、このスト男、フェイトから自分に熱視線が送られていると思っていたのだが、フェイトからすれば、記憶にも残っていないような存在だったらしい。

「あ……………言にくいことなんだが……………フェイトは興味の無い男の顔を全く覚ええないし、熱視線を送るところか、普段からボケーっとしてる時もあるから……………」

ヒスイの説明に補足すると、そのボケーっとしている間、彼女の頭の中を占めているのは、基本的にはルークの事である。

「じゃ、じゃあ！！ 去年の終わりに僕に挨拶してくれた事は！！！」

「あ、挨拶って…………？」

「それは多分、お前の席の後ろに居たなのに対してのモノだろう。席順からしてそうとしか考えられん」

「結局、全部このスト男の思い込みってことが……………」

スト男は放心状態になってしまった。まあ、惚れていた相手に、しかも同じクラスにも関わらず『知らない』と言われただけでも大ダメージだろう。

「くそ……………畜生……………クソおおおおお！！！！！！！」

スト男はいきなり動き出したかと思えば、地面を殴りつけ始めた。

「な、何だなんだよお前は！！！！　お、俺はただ、ハラオウンさんが僕の事を好きなんだから、その気持ちに応えようとしただけなのに！！！！！」

「うわ……………これでもまだ認めないとか……………」

このスト男、どうあっても自分の思い描いた通りに事が進まないと気が済まないらしい。それもかなり思い込みが激しいため、行動が過激になりやすい危険な種類である。

「それにお前ら！！！！　道端にこんな落とし穴を掘るだなんて……………公共物をこんなにした事を警察に言えば、お前らだって捕まる事に……………」

「公共物？　何の事だ？」

ヒスイはスト男がやったのことで考えついた反論に、馬鹿を見る目を送りながらそう答えた。見れば、ルークはニヤリと笑みを浮かべている。

「とばけるな！！！！　こんな住宅街のコンクリの道路を破壊すれば……………」

「お前バカか？　俺達がそんな危険な事する訳ないだろうが。ここは、私有地だよ。」

「何をでたらめな…………、ならこの周囲の光景はなんだ！！？　住宅街の道路そのものじゃないか！！」

「ああ、それ？　これはね……………」

言いながら、ルークは三度謎のスイッチを押す。

するとどうだろうか、周囲を取り囲んでいた一軒家、塀などが地面に向かって埋まっていく。

「は、ハリボテ…………だと…………？」

「正解。ここはヒスイ先輩の実家。その大庭園の一角だよ。さっきのハリボテを使って、周囲を何の変哲もない住宅街に見せかけてただけさ。このへんの道、かなり入り組んでるからね途中で気がつかなくても当然だ」

「でかいだけの家だが、役に立って何よりだな。あとで作業に協力してくれた黒服達にはお礼を弾んでおかなければ……………」

ヒスイの実家。ハーツ家はこの辺りでは有名なお金持ちであり、ハーツ家の持ち家の一つであるこの家はとんでもなく広い。住んでいるのも、ハーツ家おかかえの黒服やメイドさん、加えてヒスイに妹のコハクのみである。

「私有地なら、穴掘ろうが何しようが問題無い筈だけど?」

「く……………!!」

スト男を唯一の隙を突く事が出来なかった事で、悔しげな表情をする。

すでに、ゲームは詰みである。

「さあ〜て……………では、ヒスイ先輩?」

「うむ、始めるとするか」

「ひよ……………?」

ゲームの勝敗が決し、悔しがるスト男に悪魔二人が忍び寄る。

「ああそつだ。お前達、フェイトを屋敷に案内してくれ。俺とルークも後で行くから、食事の用意を頼む」

「「はい!! 若頭!!!!」」

ヒスイが指をパチンと鳴らしてそう言うと、どこからともなく黒服達が現れ、テキパキと動き出す。

ハーツ家の黒服達は有能で、料理をさせても掃除をさせても、無論戦わせても天下一品なのだ。

というか、若頭と呼ばれているヒスイだが、決して危ない家業をしている訳ではないので、誤解しないように。

「ささ、フェイト様、こちらに。若頭とルーク坊ちゃんも後でいらつしゃるので」

「は、はあ……。ルーク?? ヒスイ?!?!? それじゃあ、私先に行ってるからね??」

そして、黒服達に案内され、フェイトはルークとヒスイに手を振りながら屋敷の方に行ってしまった。

「あ、ま、待つてハラウンさん!!!! 僕達二人の愛を……………」

往生際の悪いスト男は、全裸である事を忘れているのか、諦めることなくフェイトの名前を叫ぶ。

だが、彼女がそれに答える筈もなく…………

代わりに…………

ジュウ…………

「あ、熱い!!!!!!??? な、何をするんだ君は!!!!!!???」

「何って………… 根性焼き」

「火傷するだろうが!!!!!!」

スト男の背中に火を着けただけのタバコを押し付けるヒスイ。

加えて…………

「ほれ、これ食いな」

ベチャ

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！？？ 何だこれ、臭い！！！！とんでもなく臭い！！！！？」

今度はルークが何やら怪しげな缶詰めをスト男の顔に叩き込んだ。その缶詰のあまりの臭さに、スト男はのた打ち回る。（ルークとヒスイはマスク着用である）

「シールストレミング、スウェーデンの缶詰だよ。ニシンを塩漬けにして発酵させた食べ物だね、臭気指数計ではくさやの6倍の臭さらしいよ？さあ、味わって食べなよ」

「ぐがあああああ！！！！！！！！！！？？ 鼻が、鼻があああああ！！！！！！！！！！？？」

これに始まり、ハーツ家の庭園にてストーカーに対する拷問の刑が執行されたのだが、

その内容はあまりにも凄惨だったため、文章にするのも恐ろしいものだった……………

「が、あが……………ハラウンさんは……………僕の……………」

「まだ言うか……まずその間違った認識を正そうか。ねーさんは、お前なんぞの嫁にはならない……いや……それ以前に……結婚なんて……結婚なんて……」

ルークは、間を開けてスト男に対する止めの一言を言い放った。

「ねーさんが結婚するなんて……相手が誰だろうが……俺は断じて、絶えええええつ対、認めません!!!!!!」

「こいつタダのシスコンだああああああ!!!!??……
…ふべらっ!!!!!!?」

ハーツ家から聞こえたスト男の悲鳴は、それが最後になった。

その後、スト男を身柄は、他世界のなのは作品の作者様と主人公達の下を順々に巡るように、ヒスイによって手配されたとか何かとか

……

ヒスイ曰く

「こんな楽しい遊び、俺とルークだけで独占するのもずるいだろう」とのことだ。

第十七話 ストーカーは絶対に許さない、絶対にだ（後書き）

F20C「最後はルークのシスコンパワー全開で締めくくられたね。」

ルーク「あと、スト男の死亡フラグが立ってたよね。いろんなのは小説の作者さんと主人公さん達による、拷問のフルコースが待ってるんだろっなあ……」

F20C「ま、彼にはその役目だけにこの作品に出てもらったからな。本望だろう……」

ルーク「さて、次回からは？」

F20C「ええ」と、次回からは体育祭編に入ります。体育祭、エロティックなイベントが盛りだくさんだと思いませんか、皆さん？」

ルーク「。。。〇ミ。おっばい！おっばい！」

F20C「はい、我らが大統領もノリノリでございますwwあ、もしよろしければ、参考までに皆さんが体験した体育祭の種目でネタになりそうなものがありましたらご一報くださいww取り込んでいきたいと思いますのでww」

ルーク「ではまた来週」

第十八話 体育祭という名の戦争、その始まり（前書き）

先週は誠に申し訳ありませんでした！！（土下座）

NECパソコンお姉ちゃんが天に召されてしまったため、更新ができず、毎週このお話を見てくださっている読者の皆様に最新話をお届けする事が出来ず、私としてもごめんなさいの思いでいっぱいです。

新しく、東芝さん家のパソコンお姉ちゃんを相棒に、ようやく復帰する事が出来ましたw

さてさて、復帰後最初のスクラパということで、今回からは予告通りに体育祭編に突入します。
またしても立ち上がるエロティック大統領と円卓のバカたちの活躍をどうぞお楽しみください。

ではでは

第十八話 体育祭という名の戦争、その始まり

体育祭

それは教育機関であるならば大抵の学校で行われる一年に一度の大きな催し物だ。

教師側からすれば、アクシデントの発生に胃を痛める気分につまり、年を忘れてハッスルし過ぎたせいで次の週の授業が辛いという事態に陥ったりする可能性が出てくるいろんな意味で厄介な行事である。

一方、生徒側からすれば、行事ということでお祭り騒ぎで楽しもうとする奴も若干数いるだろう。体を動かすことが好きなものからすれば、退屈な授業を受けて机に噛り付いているよりもこちらのほうが良いという輩もいることだろう。

だが、それを妨げるものがある。

それは……

「暑いね……………」

「暑いわね……………」

「暑いですね……………」

そう、何をおいてもこの茹だる様な暑さだ。

上の、リオス、ティアナ、アイリスの四人組も、この暑さには完全に参っていた。

「そういえば……………今日の最高気温、37度越えるとか言ってたっけなあ……………」

「うわぁ……………そりゃあ暑いわけよ……………。午前中からこんなに暑いんなら、午後はもっとくるでしょうね……………」

「あまり考えたくはありませんね……………。ですが、こんな暑さの中でも、元気な方が結構いらっしゃるようですけど……………」

と、アイリスの視線を追って、ティアナとリオスは自分たちのクラスに割り振られた応援席のスペースを見る。

そこには異様な光景が広がっており、物語開始から姿が見えなかった我らが主人公の姿がそこにはあった。

一昨日、全裸で三角木馬に座らされ、女王様に鞭の刑に処されたクズ男の決定的瞬間を収めた写真が校内にちらほらと広まったとき、腹を抱えて笑い転げていたルークなのだが、ここ最近は何かこの体育祭にかけているようで、かなり頻繁に動き回っていたようだ。

ちなみに、写真にあられもないところを撮られ、醜態を全校生徒に晒すことになったクズ男の消息を知る者はいない。

「何やってんのあいつらは？」

「第36回円卓会議だったさ」

「今までもかなりの頻度で開催されていたんでしょか……………」

彼らの視線の先には、昨日の内に教室からグラウンドに持って来ておいた椅子を円形に配し、さながら円卓のように見立てて神妙な顔つきで座っているバ力達がいた。

そう、今日はただの体育祭などではないのだ。

彼らにとってこの行事は……………まさに戦争だった。

「……………」

「……………」

「……………」

円卓のバ力達は、皆真剣な表情で、視線はすべて同じ方向にむけていた。

その視線の向かう先には、我らがエロティック大統領、ルークの姿が。彼もまた、腕を組みながら真剣な表情で精神統一をしていた。

「……………」

そして、その閉じられた瞼が開かれると同時に、ルークはその重たい口を開いた。

「諸君……………分かつているかと思うが、今日のこの日、今から始まるうとしているものは体育祭であって、体育祭でない……………」
……………そう、戦争だ」

そのルークの宣言で一同はカリスマ的存在を見るかのように、そしてルークからあふれ出んとするカリスマ（変態的な意味で）の力に当てられているかのような表情になる。

「紅白チーム別優勝、学年クラス別優勝なども当然狙っていくが、所詮俺たちにとっては通過点でしかない。」

ルークは言いながら、どこから取り出したのかチェス盤を円卓に見立てた机の上に置き、コマを一つ動かす。

「さあ、君たちに敢えて聞こう。今日、我らが真の目的はなんなのかを……………」

女の子の体操着姿……………

際どいアングルによって生まれおちるシャッターチャンス……………

揺れる乳……………

引き締まった生足……………

ルーク君×リオス君……………

大統領の言葉に、円卓のバカ達は勢いよく答えていく。
若干一名、妙な発言があったように聞こえたが気のせいだと、ルーク

クは信じたかった。

「そつだ!!! 我らは今日、スポーツをしに来たのではない、女の子を見に来たんだ!!!!!! この日のために、力を蓄え、エロ本を買う予算をデジカメを新調する予算に回すことしか考えていなかった!!! 苦しかった……練習明けの150円の水分を蛇口の水で我慢するのは!!! 辛かった……同じ月に欲しかったエロゲーが三つも出てしまって、一つしか買えなかったことが!!!」

うう……俺もさ……大統領……

ほんと、今月は辛かったよ……色々……

ああ……結局あのゲーム買えなかったんだよね……

……やっぱりルーク君が攻めなんだよね……これだけはガチよ……

やはり、約一名おかしな声が聞こえるが、大統領たるものそんな小さなことでは動じない。たとえ、クラスの女の子からBLの疑いを掛けられているとしても。うん、負けない、だって男の子だもん。

「それも!!! すべては今日のための布石!!!! 今日の開会式を終えたところには、我らはこの手に収まりきらないほどの財宝（具体的にいえば、心のファインダー的な意味で）を手に行っていることだろう!!!」

おおおおおおお!!!!!!

瞬間、グラウンドが震える。

一年三組の円卓のバ力達の気が、大気を震わせたのだ。

「佐藤軍曹、カメラ部隊の準備はどうか？」

「は！　すでに配置完了しております！　いつでもOKです」

そして、全員の心が一つになったところで、ルークは同志の一人に確認をとる。

このカメラ部隊というのは、今回の体育祭のカメラ撮影係達のことである。

後々、さまざまな写真、集合写真やお昼のひと時など、そういった穏やかな写真を取り、希望者には刷り増しするというシステムがある。

ルークはこのカメラ係の人員の約半数に一年三組の手のものを潜り込ませていた。

そう、すべては市場に出ることのない女の子たちのナイスショットを独占するためのものである。

「（ふふ……………これでねーさんの写真が他の男どもに渡ることはないまいるまい……………。データは後で俺のパソコンにコピーするとして……………」

と、彼がここまで本気を出すのもすべてはシスコン魂からくるものだったりする。

フェイトやなのは達の写真は市場でもかなりの高値になっており、そのレア度は高い。

だが、いくら数が少なからうがそういう写真（フェイト限定で）

を許しておけるほど、ルークは大人ではない。

「ふむ…………今日の山場になるのは水風船合戦と…………騎馬戦…………後は大縄跳びに最後はリレーといったところか…………高橋二等兵、その時間帯は人員を増やせ、他のクラスのカメラ係りは排除しろ、手段は問わない」

「サー・イエッサー！！！」

朝のホームルームにて、カリム先生から配られた体育祭のプログラムに目を通しながら、ルークはチェス盤の駒を動かしていく。

「すまない、誰かコーネルド元帥をここに」

「は！　ただいま！！！」

そして、ルークはチェス盤を見てニヤツと笑みを浮かべると、近くにいた山本少尉にリオスを呼ぶように伝えた。

「元帥閣下、大統領が呼びです。至急、作戦本部までお越しください」

「ええ！！？　ぼ、僕元帥なの！！！？　ていうか、いつの間にルーク達の組織の一員に？？！」

「大統領閣下曰く、『股の間にぶら下がってる男の勲章がある時点

で、お前はこちら側だろうがjk』とのことです」

「卑猥すぎる……………ていうか、女の子も結構いるって言うのに……………」

リオスはルークの伝令役としてやってきた山本少尉の伝言を聞き、ティアナ達から憐みの視線を向けられながら、先ほどまでただ見ていただけだった円卓のバカ達の作戦本部に向かう。

「やっと来たか、リオス……………。まったく、お前が今作戦の要だというのに…………少しは元帥としての自覚を持ってくれ」

「いやいや、なつた覚えないからね！！！？ ていうか、僕どんだけ偉いのさ！！？ 元帥って言ったら、かなり上人だよね！！！」

「無論だ。お前は私の右腕にして、フラグ大魔王なのだ。それに見合う位にやらなければ、下の者に示しがつかん」

「なんだろう…………この半径二メートルあたりが、一つの国に見えてきちゃったよ……………」

リオスはやれやれと頭を振りながらルークに言う。

「ルーク、別にこんなことしなくても、後で写真は買えるんだし……………そんなに頑張らなくても……………」

「お前らしくもない…………。数多の戦場（決して血生臭い意味ではない）をぐぐり抜けてきたお前が言うことか……………」

「だつてさあ……」

と、リオスはなかなか今回の作戦には乗り気ではないようだ。ルークの真意を理解しているのか、直接的に言つてはこないが、フエイトの写真を何としてでも回収しなければというルークの考えに彼としてはインセンティブを感じれないらしい。

まあ、そんなリオスの返答も織り込み済み。

ルークは、リオスが絶対に食らいつくであろう餌を放った。

「タダとは言わん……。なのはさんの写真、すべてをお前に回してやる。あんなカッターも、こんなサービスカッターもな。」

「あ、あゝんないけないサービスカッターや、こんなエッチなカッターに、そんなエロいアングルからの……。なのはさん……。だと……?」

誰もそこまでは言っていない

「ルーク、僕も手伝うよ。なのはさんや、フエイトさんの写真は僕らが守るんだ!」

「ふ、当然だ。頼むぞ、相棒」

二人はそう言いながら、手を叩き合わせるのだった……

「計画通り……。キリッ」

そこには悪魔が降臨していた。

「え……本日はお忙しいところを……………」

そして、それから10分後、ついに体育祭の開会式が開始された。
校長が保護者の方々にたいしての言葉を話している最中、多くの生徒たちがタダならぬオーラをある一団から感じ取った。

無論、ルーク1年3組である。

やべえ、あいつら……今年来るぞ……………！！

あの眼はやべえ……………あれは捕食者の目だ……………

ていうか、あいつらここに何しに来たんだ？　なんで体育祭に特殊部隊みたいな格好した奴がいるんだ……………？

いろんな意味で、ルーク達は目立っていた。
その勢いたるや、上級生たちをも震え上がらせるほどだった。

「ふ……………あいつを敵に回さずに済んでホッとするべきか……………」

ルーク達のクラスと同じ白組みであるヒスイ・ハーツは不敵な笑みを浮かべてそう呟いた。

「（リオス君たちと同じチームかあ……………うん、今年の体育祭は楽しくなりそう……………）」

体育祭を純粹に楽しもうと、今からテンションが上がりつつあるのは。

「ルークと同じチーム」 えへへ……… やん、だめだよルー
ク………… / / / / / 今は体育祭の最中なんだよ？ それなのに、
草むらの陰でこんな…………… / / / / /

いろいろと危ない妄想に突入しているフェイト。
 というか、そろそろ本格的にルークの貞操の心配をするべきなのかもしれない。

そして……

「なんでうちが実況担当なんや……………」

生徒会長だから、という訳のわからない理由によって、体育祭の実況を担当することになったはやて。

それぞれの思いを乗せつつ、校長の長話が暑い空に吹く風と共に大空へと舞い上がった。

さて、今日の第一種目は、クラス別対抗の短距離走である。100

メートルの距離を5人で走る、何の変哲もない短距離走である。

クラス別対抗の競技で得たポイントは、そのままクラス別の得点に入るだけでなく、紅白チーム対抗の得点にも影響してくる。

要するに、否が応でもやる気は出てきてしまうのだ。

本日のルーク達の目的はもちろん、女の子たちの写真だが、先ほど言っていたようにクラス別対抗戦にも紅白対決にも負けるつもりは毛頭ない。

何しろ、優勝賞品が豪華なのだ。

「紅白対抗優勝チームには豪華客船でのディナー、クラス別対抗優勝組には海外旅行か……さすがは聖祥、金の使いどころがすごいわ……」

ルークはプログラムの最後のページを見ながらそう呟く。
なんでも、校長が宝くじに当たったとか何とかで、物欲に乏しい校長が身に余る大金の使い道に困っていたとき、体育祭の商品の提供というアイデアを思いついたということらしい。

校長のかつこよさに全俺が惚れた。

「さてと……んじゃ、その気前のいい校長の厚意、ありがたく頂きに行くとしますか……」

ルークはプログラムを椅子に置き、立ち上がる。目の前にはすでに準備が整ったクラスのメンバー達がルークを待っていた。

どうやら、円陣を組んで気合を入れるらしい。
ルークはそんな粋な彼らの演出が気に入ったのか、すぐにその円陣に入り声を上げた。

「よし。それじゃあ行こうか、慎ましくな」

初めに爽やかなセリフで場を整え……………

「すう……………絶対領域は……!!??」

「……………絶対構築……!!」

「露骨なエロ……!!」

「……………着エロ……!!」

「リア充は……!!」

「……………ぶっ潰す……!!」

なんとも煩惱全快な掛け声だった。

女の子たちは、もうヤケクソ気味に男子のテンションに乗っかる形で叫び倒した。

「よっしゃあー！！ 行くぞ、1・3！！！！ 戦争じゃああああ！！
！！！！！！！！」

うおおおおおおお！！！！！！！！！！

こうして、さまざまな思惑（煩惱）を抱えた体育祭の幕が、ついに切って落とされたのであった……………

第十八話 体育祭という名の戦争、その始まり（後書き）

F20C「わーい、パソコンお姉ちゃん」

ルーク「よっぽどパソコンの無い生活にストレス溜まってたんだろ
うなあ……………パソコン買った時のテンションったらもう……………」

F20C「その分、財布へのダメージは半端ないものがあつたけど
ね……………お陰でガンダム無双3が買えるかどうか怪しくなっちゃった
……………」

ルーク「でもシャイニング・ハーツは必ず購入とはこれいかに」

F20C「もう予約も済んでるからね。それにほっちゃんボイスに
癒されるのと、エアリィに会ってくるという使命が」

ルーク「お前どんだけ堀江由衣さんの声に癒されてんの?！」

F20C「いや、リアルにマイナスイオンが発生しているかのような
気分に……………」

ルーク「典型的な堀江病だな……………」

次回、エロティック大統領たちの本領発揮です。

フェイトさんの妄想族っぷりもトランザム状態になる予定ですの
で期待ください。

第十九話 これって騎馬戦？ いいえ、戦争です（前書き）

さて、巷では青少年育成なんたらとかがホットなニュースのよう
でゲソ。

規制のベクトルがおかしくなイカ？

とまあ、暗い話は置いて今週もスクラパで少しでも皆さんの元
気が戻ることを願っているでゲソ。

作者も今回の条例には結構イラツとしています、それよりも就職
内定率の低さが昔の氷河期を下回っているというニュースをその後
に見たせいで怒りが吹き飛んで絶望感が襲って来たでゲソ……

今週の火曜日は張り切って企業説明会に行くことにするゲソ……

第十九話 これって騎馬戦？ いいえ、戦争です

さて、聖祥高校の体育祭が華やかに開催され、グラウンドは燃えに燃えていた。

第一種目の学年別100メートル走、ルーク率いる1年3組は、見事な結果を残していた。

順位的には大部分が高順位に食い込んでおり、得点率もかなりのものである。

100メートル走が開始されたたん、多クラスの走るべきコースに男子ならばエロ本、女子ならばバラ色な雰囲気漂うBL臭の漂う本などが落ちていたりしたのだが、そこは気にたら負けである。

「さて諸君、第一種目が終わった時点での我ら帝国軍（白組）の得点は80点、共和国軍（赤組）は75点。クラス別にみれば、我ら1年3組は20点だ。まずまずのスタートダッシュと言っているだろう。」

ルークと円卓のバカたちは、自軍の野営地（待機スペース）にて、戦況の確認と次に行われる種目についての打ち合わせをしている最中だった。

大統領なのに帝国軍？という素朴な疑問は一切受け付けないとお達しである。

「エロ本地雷と、BL本クラスター爆弾の配置も素晴らしいものだ

った。後で作戦関係者には褒美を取らせよう」

「「「ははっ！！　ありがたき幸せ！！！！」」」

「何この会話……頭痛い……」

体育祭らしからぬ会話、風体、間違った熱の入り方には、ティアナが頭痛を覚えるほどだった。

ルークは体操服の上にどこから持ってきたのか勲章がじゃらりと付いた軍服、加えて円卓のバカたちは、皆黒一色の軍服のようなものを羽織っている。

ちなみにリオスは元帥ということで、一人だけ白いカラーリングになっている。

ティアナとアイリスは体操服のままの方が萌えるから、という大統領閣下の命令のもと、軍服の着用は控除された。

はやてが一週間で完成させた軍服コス用の衣装がこんな形で役に立つなどとは、本人ですら思っていないだろう。

競技には不向きではないのかという懸念が残るかもしれないが、そこは一応体育祭、競技開始前には脱ぐので問題ない。

「戦力的にも、帝国軍にはねーさん、高町なのは大佐、ヒスイ・ハーツ殲滅部隊隊長、タヌキと申し分ない。共和国軍には運動部員がかなり固まってもいるようだが、この戦力ならば力負けの心配もないだろう」

「確かに、ある意味ではドリームチームといったところだな。だが、敵も一筋縄ではいかんだろう。運動部の中でも、あちらは空手部や

柔道部、ボクシング部などといった手練れも多い」

大統領の戦力分析に、殲滅部隊隊長のヒスイがそう付け加える。彼の言うとおり、こちらでもドリームチームであることは確かなのだが、あちらもあちらで腕っぷしが強い連中が多い。

「問題ありません。あちらが力づくで来るというのであれば、こちららは頭を使っていくまで……綺麗さっぱり叩き潰して差し上げますよ」

「ふ……お前ならそういうと思ったさ……。分かっているのならば俺から言うことはない。俺は次の戦闘の準備を進めておく」

「はい、お願いします」

ヒスイはそう言って立ち去ってしまった。彼もまた、今回の戦争においては重要なポストに位置付けられており、何かと忙しいのだろう。

「さて……次は『騎馬戦』か……。各員、事前に説明したプランは頭に入っているだろうな？」

「Sir, Yes, Sir!!!!」

「ふむ、良い返事だ。では、騎馬戦に参加する男子は私に続け、女子は後方よりの支援。具体的に言えば、元気の湧いてくるようなかわい声援を頼む」

騎馬戦は、競技内容からか参加は男子のみである。女性陣は野営地での応援が主な仕事なる。

「はつきり応援してくれって言えばいいのに……」

「ルークさんなりの照れ隠しなんでしょうか……?」

ティアナとアイリスは苦笑いを浮かべながら、テンションの上がつているほかの女の子たちと共に声援を送ることにした。

「ルーク……!!!!!! 頑張っ……!!!!!! お姉ちゃん応援してるよ……!!!!!!」

「ちょっとフェイトちゃん?! 気持ちはわかるけどちょっと落ち着いて……!!!!!!?」

三年生の待機スペースから、早くも黄色い声援が飛んできていた。まあ、発信源は言うまでもなくブラコンお姉ちゃん、フェイトさんなのだが。

『全部隊、通信機器の受信状況はどうか?』

競技が開始される直前、赤白対抗一年生の部の騎馬戦に参加する男子たちは、グラウンドに繰り出きっており、あとは予め決めた騎馬達と乗り手が準備を終えるのみである。

一年生のクラスは全部で6クラスなので、白組と赤組で半々に分けられている。加えて、騎馬戦参加者は総勢100人。お互い10機

の騎馬を作って戦うことになっている。

騎馬役に4人、騎手が1人なので、5人で一騎の騎馬となるのだ。

そんな中、ルークは取り付けた超小型イヤホンマイクに向け、白組の円卓のバカたちにインカムの感度の状態の報告を求める。

『P1、問題無し』

『P2、問題ありません』

『こちらリオス、問題ないよ』

『P3～P8、準備整いました。』

『よろしい。カメラ部隊、場所取り及び他勢力の排除状況はどうなっている？』

白組の一年生クラスの息のかかった者たちからの準備完了報告を確認したルークは、続けて体育祭のもう一つの主役でもあるカメラ部隊に連絡を取る。

無論、むさ苦しい男共の騎馬戦風景などを撮らせる気は全くない。そう、何も競技に参加しているものだけがエロスのターゲットになるというわけではないのだ。

騎馬戦を観戦している麗しいましゅまるちゃん……もとい、女の子達。彼らの真の被写体はそれ以外にはありえないのだ。

『応援席側の某所にて、作戦に最も適した地点を押さえ、他のカメラ役員には少しの間眠ってもらいました。』

『よし、条件はこれですべてクリアだな。あとは俺たちが騎馬戦で敵軍を蹂躪するのみだ。各員、抜かるなよ』

『『『『Sir、Yes、Sir！！！！』』』』

作戦はすべて順調である。カメラ部隊の配置、騎馬戦に臨むにあたってのプラン。

勝利への道は、すでにルークたちの目の前に広がっているのだ。

「ふ……では諸君……戦争をしに行くぞ……」

おおおおおおおおおおお！！！！！！！！

そしてルークがそう言うと同時に、騎馬役の男子達が騎手を持ち上げ、立派な戦士となってグラウンドに立ち上がる。

ルークもまた、四人一組の騎馬の男子達に持ち上げられ、一人の戦士となる。

対して、敵側の赤組もまた、次々と騎馬を構築していく。

ルールはオーソドックスなもので、敵側の騎手の鉢巻をどちらが多く奪取できるかというものである。

加えて、騎馬から落ちた場合はその場で失格となり、鉢巻のポイントは敵軍のものとなる。

『それでは、騎馬戦1年生の部、スタートや！！！！』

そして、実況兼スターターのはやて（だんだん仕事が増えている気がするが気にしない気にしない）によって、騎馬戦の競技が開始と

なった。

「てめえらあああ！！！！！！ 行くぞ！！！！ 突撃だああああ！！！！！！」

おおおおおお！！！！！！

開始早々、敵赤組の騎馬10機が一斉にルークたち赤組に向かって突撃をかましてきた。向こうは腕っぷしではめっぽう強い重戦車級の騎馬である。パワーというアドバンテージを最大限に生かすつもりなのだろう。

それに対して、白組（自称帝国軍）のルークたちは……………

「全機、プランA2でフォーメーションを組め。P2とP5はポイントE-3へ。P7、P8はA-5地点。リオスは手筈通りに、その他は正面の敵を距離を取りつつ迎撃。深追いはするなよ」

「Sir, Yes, Sir！！！！！！」

ルークが敵の配置や移動スピード、これからの敵の行動などを予測し、帝国軍の騎馬達に指示を与える。

友軍達は彼の指示を疑うことなく、華麗且つ、素早く移動を開始する。

「よし、我らは団として行動する。ポイントE-8まで移動してく

れ」

「お任せあれ！！！」

ルーク自身も、囃役という司令塔としては不向きな役目を熟すべく移動を開始する。

敵側も、だれがこちら側の司令塔なのかは理解しているであろうことから、彼を積極的に狙ってくることは目に見えていたが故の作戦である。

それに、ルークからしてみればただの力押しの敵軍に後れを取るつもりなど毛ほどもなかった。

「居たぞ！！！ ハラオウンだ！！ てめえら、あいつを狙え！！
！ あいつさえ落とせば、この騎馬戦勝ったも同然だ！！！」

「「「「おう！！！」」」」

相手もルークの狙い通りに10組のうち4組ほどがこちらに向かって突撃してくる。

全体の三分の一の敵勢力だが、ルークにとっては予定通りである。

「これはこれは……綺麗に作戦にはまってくれたね……。 P2、
P5！！！！ やれ！！！」

「Sir, Yes, Sir！！！」

と、ルークが指示した瞬間、先ほど先行させておいたP2、P5がいつの間にか突撃してきた敵軍四機の側面を取っていた。

そして……

「くらえやあ！……！」

「どらああああ！……！」

P2、P5は息の合ったコンビネーションで、四機の敵騎馬の両端の騎馬に攻撃を仕掛けた。

彼らの進行方向に足をヒョイと出して。

「ぬがあああ！……！？」

その足掛け攻撃に、かなりスピードの乗っていた二機の騎馬は反応する事が出来ず、見事に引つかかってしまう。

無論、バランスを崩した騎馬に待っているのは、地面との熱いキスである。

「あ、足掛け……なんと卑怯な……」

「卑怯？ 何を言うか……これは戦争、勝てば官軍という言葉を知らんのか」

派手に転倒した敵軍の騎馬と騎手達からそんな声が飛ぶが、P2とP5は学生ではなく、兵士としての表情でそう返してやった。

そう、これは最早競技ではない、戦争なのだから。

「へへ……だが、俺たちだけを倒したとしても、まだ二組の仲間が

ハラオウンを落とす……どの道俺たちの勝ちだぜ……」

と、地面に無様に転がっている敵兵の一人がしてやったりという表情でそう言ってくる。

確かに、ルークの誘いに乗って突撃してきたのは四組の騎馬である。二組を戦闘不能としたところで、残り二組がルークを落とせば良いだけの話だ。

だが……

「ふふ、お前たちは分かっているいな。我らが閣下の本当の力を……」

「今日のあのお方は、いつもとは一味も二味も違うのだ。そうら、見ているがいい」

そう、P2、P5がルークと、それを襲わんとする残り二組の騎馬の方に視線を向ける。

ルークと敵二組の距離は既にかなり縮まっている。

「ハラオウン！！ 伏兵とは良い手だが抜かったな！！ 我らが残っていた時点で、貴様の負けだ！！！」

「往生せいやああああ！！！！」

恐らく柔道部と空手部のメンバーであろう。暑苦しい筋肉質な体から生まれるトルクを生かし、グングンとルークに肉薄してくる敵の騎馬。

だが、この状況にあっても、ルークは余裕を崩さない。

それに加え、何を思ったのかルークも相手同様騎馬を前に進め、相手の突進攻撃に立ち向かっていったではないか。

「はっ血迷いやがった！！　パワーで俺たちに勝てるわけないだろうが！！！」

「これで終わりだ！！　落ちろおお！！！」

ルークの意外な行動に、相手は嬉々とした様子で太い腕でルークの鉢巻を奪わんと手を伸ばしてきた。

「直撃コース」

「避けてみせろよ！！！！！」

が、直前で騎馬の一人、佐藤軍曹がそう呟くと、ルークはそれに応える。

同時に、騎馬の男子達の素晴らしいフットワークで敵の攻撃を完全に避ける。

「軸線と合わせて」

「腕と」

「同時攻撃を！！！」

そして、攻撃を避けられ態勢を崩した敵の片方に狙いを定め、ルークは素早く手を伸ばし……

「ぐう！！？」

見事に相手の赤い鉢巻を奪い取った。

だが、彼らの攻撃はそれだけに留まらず、残りの敵兵に向かって高速で接近し強襲をかける。

「な、なんなんだこいつら！！？ 騎馬戦で見れる動きとスピードじゃねえぞ！！？」

相手の騎馬は動揺を隠せないながらも、ルークの強襲に対し迎撃の構えを見せる。

だが、完全に役不足である。一対一で今日のルーク、円卓のバカたちを止めることなど不可能である。

「お前たちは騎馬戦の何たるかを理解していない……………」

「なに！！！！？」

「反射と思考の融合、そして騎馬と騎手の絶対的な信頼関係……それこそが……………」

「騎馬戦の有るべき姿だあ！！！！！」

どこかの超兵のようなセリフと共にルークの伸ばした手。

「腕力に依存しっぱなしで、俺たちに勝てるわけねえーだろお！！！！！！」

敵兵とルークたちが一瞬交差したかのように見えた次の瞬間には、彼の手には赤い鉢巻が握られていた。

「ち、畜生……」

「では、アディオス」

悔しげにしている鉢巻を奪われた敵兵にそう言い残して、ルークはP2、P5を引き連れ、リオスたちの奮闘している主戦場に向かっていった。

その頃、騎馬戦を観戦していたフェイトさんかというと……

「ルークウ!!!!!! かつこいいよ!!!!!!」

「久しぶりだなあ……こんなにハイテンションなフェイトちゃん……」

フェイトは腕をぐるぐる回しながら、嬉々とした様子でルークの応援に熱中していた。

その興奮度はかつて無いほどである。

分かりやすく例えるならば、こんな感じである
キャッツ（

(*)
 // ム
 (*)
 ()
 // キヤツ

「……はっ！！？」

と、今の今まで大興奮で応援していたフェイトの動きが唐突に止ま

る。

どうやら、何かに気が付いたようである。

「ど、どうしたの？ フェイトちゃん？」

なのはが恐る恐るといった様子でフェイトに尋ねる。こういう場合は大体が悪い予感しかしないのだが……

「なのは、チアガールだよ……！」

「はい？」

いきなり過ぎる、加えて脈略の無い単語になのはは素でそう反応してしまった。

「ルークも頑張ってるんだし、ここは私がチアガールになって応援を……」

「ちょっと待ってフェイトちゃん！！ チアガールって服とかどうするの？！ というか、10年来の親友のはずのフェイトちゃんのこと最近分からなくなってきたんだけど……?!」

なのはの言うことはごもつともである。加えて、こういう時のフェイトの行動はたまにだが、なのはでも理解不能なことがあるようだ。

「ずっと前に、ルークってば『チアガールって………なんかいいよね（エロくて）』って言うてたし……衣装もはやてに頼めば………」

「うん、ちょっとフェイトちゃん落ち着こうか??！ 最近忙しかつたからきつと疲れてるんだよ!! 劇場版のDVDの発売とか、

劇場版の第二弾の決定とか、二年連続の紅白出場とかで……」

なのはもフェイトの行き過ぎたルークへの愛情表現を止めるために必死である。

どこことなく実在するとある人のことを言っているようにしか聞こえないが、そこは気にしたら負けだろう。

と、そんな様子で応援席側も盛り上がりまくっている中、騎馬戦がそろそろ終局を迎えることになる。

騎馬の動きのリズムが変わったのだ……

「全機！！ プランA2をフェイズ2に移行！！ 残る敵兵を一騎残さず殲滅するのだ！！ より多く敵を落とした物には褒美を遣わす……」

「じゃああ……！ お任せをおお……！」

「オールハイルルーク……！」

「褒美は俺が頂く……！」

ルークのその檄に、円卓のバカたちは次々と敵兵に襲い掛かり、パワーの差を感じさせないスピードで敵の鉢巻を奪いまくる。

捕食者と餌、今のルークたちと敵軍を表すのにこれ以上の例えはないだろう。

「ルーク！！ そろそろ決めにかけよう！！！」

「ああ、リオス。私に続け！！！」

ルークはリオスを引き連れ、残党兵を叩き潰しにかかる。

敵はこちらの統率された動きに翻弄され、完全に足が止まっている。でたために兵を動かし、力にのみに頼った敵軍と、スマートな兵の運用、加えて絶対的な統率力でまとめ上げられたルーク達白組。

どちらが戦闘において有利なのかは、この騎馬戦でハッキリとしただろう。

「リオス！！ プランBだ！！」

「……………！！ ああ、了解だ！！！」

騎馬に指示を出しながら戦場を縦横無尽に駆け巡りながら、ルークはリオスにそう叫ぶ。

リオスは一瞬表情に戸惑いが浮かんだが、すぐにルークの意図を察して了解の意思を示してきた。

二人の走る先には、敵兵の最後の一人。赤組一年生でも最も腕っぷしに自信のある、柔道部の期待の一年生、……………名前を忘れたので男子生徒Aとする……………男子生徒Aが白組の騎馬を一騎落としていた。

そして、ルークのリオスへの指示で彼らの存在に気が付いたようで、猛禽類を思わせる目を光らせながら、こちらに突進してきた。

彼としてもこの状況は背水の陣だろう。だからこそ、行動に迷いがない分思い切りがいい。

「どんな姑息な作戦かは知らんが……この俺に通用せんわ!!!」

雄叫びのような声を上げながら、男子生徒Aはものすごいスピードでリオスとルークに接近してくる。

それに対し、リオスとルークはアイコンタクトを一回とり……

「プランB………」

「行けぜ!!!」

二人は並んで男子Aに突撃をかける。スピードを落とすことのない全開ノーブレーキ。

「（どうする……？ どちらを先に仕留める……？……奴らの言うプランBというのがなんなのかさえ分かれれば……ええい!!!）」

ルークとリオスが何かしらの策を持って突撃してくるという予想に、男子生徒Aの攻撃に若干の隙が出来る。

いくら意気込んでいても、人間というものは言葉に惑わされるものだ。

事前に『プランB』という手札を予め見せることで、ルークとリオスは敵の混乱を誘ったのだ。

そして、男子Aとリオス&ルークが交差する。

その瞬間、まるで時間が止まったかのような、ルーク達の周囲の時間がスローモーションになったかのような錯覚が騎馬戦を見ていた観客を襲う。

そして訪れるのは静寂、この瞬間だけは誰もが声すら出せなかった。

「……………一つ聞いておこう……………プランBとは、なんだったんだ？」

一瞬の交差の後、互いに背を向けあった状態になったところで、男子生徒Aがそう呟く。

その彼の頭には、赤い鉢巻はなかった。

そして、行方知れずの鉢巻は……………

「ああ？　ねえよ、そんなもん」

そう答えるルークの手にしっかりと握られていた。

騎馬戦、一年生の部。

勝者、帝国軍（白組）

第十九話 これって騎馬戦？ いいえ、戦争です（後書き）

F20C「アメリカではよくあることだね、プランB〃あ？ねえよ
そんなもん ってな感じのやり取りは」

ルーク「さてさて、次回の競技は何かな？」

F20C「次回は大縄跳びを予定しています。予告としては……………
揺れます」

ルーク「な、なにが？」

F20C「……………わかってるくせに……………」

ルーク「……………ま、まさか……………」

F20C「そうだね、乙女心だね」

ルーク「orz」

F20C「おやおや？君は一体何を想像したのかね？」

ルーク「……………ましゅまろだよ！……！」

第二十話 真・リオス無双、そして揺れる乳（前書き）

タイトルにありますように、本日はリオス無双がお茶の間の皆様に
ww

トランザム状態で暴れまわるリオス、そして知略を巡らすエロティ
ック大統領……

果たして、二人率いる帝国軍（1年3組）は撮影場所を占拠できる
のか！！！？

続きは本編でどうぞw

シャイニングハーツをちよつとずつ進めているのですが、ルフィー
ナ姫が美しすぎて困る……

ほっちゃん！ ほ、ほーっ、ホアアーツ！！ ホアーツ！！

第二十話 真・リオス無双、そして揺れる乳

さて、いきなりではあるが、この世には持つ者と持たざる者が存在する。

金が無い者、ある者

恋人がいる者、いない者

内定を勝ち取る者、勝ち取れない者

モンハン3rdを買えた者、買えなかった者

世の中には、この様にさまざまな対称性を持つ人間が存在している。ちなみに、作者的には三つ目が一番怖かったりする。

そして、本日開催されている聖祥高校の体育祭・午前の部、最終競技に於いて、最も重要視されるのはいつの世も持つ者である。

「閣下、カメラ部隊の配置が予定より2秒ほど遅れております。どうやら、他クラスの勢力による妨害を受けていると思われます」

「慌てることはない。ヒスイ殲滅部隊隊長に連絡。オペレーション『気が付いたらあの世でした、テヘツ』の実行を指示してくれ。カメラ部隊にはこちらからも増援を送る。前線メンバーにはそれまで現状の維持を通達」

「Sir, Yes, Sir!!!!」

ルークは伝令からの報告を聞くと、顔色一つ変えずにそう指示を出す。

将たる者、いついかなる時も冷静でなければならないのだ。上が動揺すれば、それは下の者にまで波及してしまう。

「今回の大縄跳びにはカメラだけでなく、DVD・BD部隊も投入する。リオス、お前にはDVD・BR部隊の指揮を任せる。俺は全体の指揮を執りつつ、大縄跳びに参加する。一年の部が終わり次第、そちらに向かおう」

「ああ、任せてくれ。よし、DVD・BD部隊は、僕に続いてくれ
!!!!」

「「「「「おおおおお!!!!!!」」」」」

リオスがそう叫ぶと、後ろに控えていたDVD・BD部隊が、高性能機材を手にリオスにつき従って戦地に赴いた。

そう、いつの世も静画だけでは成り立たない。動きのある、生きているという躍動感あふれる動画。これの重要性を忘れてはいけない。

DVD・BD両方に対応しているのは、家にBDデッキが無かったり、PS3を持っていない者達に対する措置である。

この政策により、ルークの円卓のバカたちからの支持率はさらにうなぎ登りとなるのだった。

「さて、諸君。他クラスの映像については心配することはない。上級生の『例のアレ』も含めて、私に任せておけば何の問題もない。

今はただ、目の前の競技に全力を尽くすのみだ」

「信じております、閣下！……！」

「どこまでもお供いたします……！！！」

「閣下になら掘られてもいい……！！！」

約一名おかしな輩もいるようだが気にしたら負けである。

そう、時には認識を放棄することで前に進めることもあるのだから。

さて、何が何だかわからないという方のために説明しよう。

先ほども話したが、今回の競技の於いて重要視されるのは持つ者である。

その、持つ者が一体何なのかを、皆様にお話ししておかねばなるまい。

「佐藤軍曹、事前に作成しておいたサイズ別要注意ターゲットリストは既に配布済みだろうな？」

「は、もちろんであります、閣下。むしろ、皆の者はリストをすべて暗記しており、もはやリストを持つ必要すらない状態にあるとの報告を受けております」

「ふ、さすがは我が同志達。エロティックな情報に関しては学習に余念がないな」

「は、閣下の日頃の教育の賜物とお見受けいたします。」

今の会話から、分かった方は分かっただろう。
サイズ、即ち大きさである。

サイズ＋大縄跳び＝揺れる

この公式を頭に浮かべる事が出来たあなた、是非とも我が軍に入っていたきたい、と閣下が仰っているので後程のご連絡をお待ちしております。

「宇宙にその存在が確立して以来、人類は重力に支配され、物理法則に支配されてきた。故に、人は空を飛ぼうとした。その為の技術を生み出し、研鑽し、日々進化を続けている。」

いつの間にか、ルークの周りには配下の者達が集まり、彼の演説に聞き惚れていた。

「だが、それらの世界の法則があったからこそ我らに与えられた奇跡も存在していることを忘れてはならない！！！」

メモを取る者や何故か涙ぐんでいる者、中には『オールハイルルーク』と叫んでいる輩もいた。

その光景に、ティアナが『もうやだこのクラス……』と呟き、アイリスに慰められていたのは仕方のない光景なのかもしれない。

「そうだ……物理の法則があるからこそ、人はジャンプすれば一瞬だが宙を舞い、地に舞い戻る。我らが追い求める理想郷はそこにこそ存在しているのだ」
アウアロン

「「「「「おおおおおおおおお！！！！！！！！」」」」」

ここまで言えばもうお分かりだろう。

そう、ルーク達が狙っているターゲット、それは……

「女子の揺れる乳が見たいかああああ！！！！！！……」

「おおおお当たり前だぜええええ！！！！！！」

「今日はそのためにここに来たんだ！！！！」

「俺、この戦いが終わったら、エロゲ買いに行くんだ……」

約一名、死亡フラグを建てているが、内容が内容だけに成立させるのがかわいそうなのでスルーすることにする。

「物理法則が生み出す奇跡をその目に焼き付けたいかああああ！！！！……」

「心のファインダーはいつでも準備OKだぜ！！！！！！」

「俺は……この日のために生きてきたようなものなんだ……」

円卓のバカたちにとって、自分たちが参加する大縄跳びなどただの通過儀式。

彼らの本当の闘いは、その後にこそあるのだ。

「よっしゃあ、てめえらいい度胸だ！！！！　ならば貴様らの命、この私が預かったあ！！！！　大縄跳びをクリアし、来るべき対話（性的な意味で）を迎えようではないか！！！！！！」

「「「「「おおおおおおお！！！！！！」」」」」

かくして、ルーク達は大縄跳びの競技に参加すべく、グラウンドに向かつて行った。

大縄跳びはクラスから20人が出場するので、リオスやカメラ部隊、DVD・BD部隊以外の戦力で臨むことになっている。
ティアナや、アイリスも一緒である。

「……………あの、ティアナさん？　もしかすると、私たちの飛んでいる姿も写真に撮られたりしてしまうのでは？」

「大丈夫よ。昨日のうちにルークを脅し……………もとい、お願いして私たちのクラスは撮らないようにしてもらってるから」

「そ、そうなんですか……………」

エロティック大統領、幼馴染の脅迫には勝てなかったようである。

そして、大縄跳びの一年生の部は、ルーク達1年3組の圧勝に終わった。

問題は、この後である。

エロの戦士たちにとっての真の戦いは、自身の競技が終わり上級生の部に競技が突入してからなのだから……………

「くっ……予想よりも敵の攻勢が激しいな……どうあっても僕らにすべての撮影ポイントを明け渡すつもりはないみたいだ……」

「こ、コーネルド元帥……！　DVD・BD部隊所属の田中二等兵との交信が途絶しました……！」

「すぐに吉田・竹中軍曹をバックアップに回してくれ……！　あのポイントには死守だ……！」

「Sir, Yes, Sir……！」

大縄跳び一年生の部が終わったこと、女子の揺れる乳を求めた円卓のバカたちは他クラスの勢力との交戦状態にあった。

制圧率は6割といったところで、まともに撮影が出来ているのはその中のさらに4割といったところである。

「ええい……ヒスイ先輩の準備はまだ整わないのか……？」

リオスは指揮を執りながら校舎の屋上を見つめる。だが、未だに準備完了の合図はない。

オペレーション『気が付いたらあの世でした、テヘツ』の成功無くして、全フィールドの占拠はあり得ないのだ。

「こうなったら……。僕が直接前線に出る……！　各員、戦闘の状況は逐一報告の上、勝手な行動をとらないよう……！」

「Sir, Yes, Sir……！」

リオスは時間稼ぎのために自ら前線に出ることにする。武器（吉本

とかでよく見る柔らかいけど叩かれると痛いあの棒）を取り、部下に指示を出してから本陣を飛び出していった。

「こ、コーネルドが前線に！！！？」

「ま、まずい！！」

敵軍からのそんな声が聞こえたが、リオスは弾丸のようなスピードで自軍との交戦状態にある敵の一团に剣（柔らかい棒）一本で飛び込んでいく。

「どおおおけええ！！！！！！！！」

リオスは剣を自在に振り回しながら次々と敵を屠っていく。その姿はまさに鬼神。

彼を単独で止められる者など、敵軍にはいない。

「ひ、怯むな！！！！ 相手は一人、多対一ならば勝機はある！！！！ 者共、畳かけろお！！！！！！」

「ま、負けるかよおおお！！！！」

「ハラオウン先輩、高町先輩の動画は俺たちが手に入れるんだ！！！！！！」

が、敵とて負けることは許されていない。
大軍を持ってリオスに襲い掛かってくる。

が、リオスの前でののはの名前を出したのがよくなかった。

「君たちが見てもいいのはさんの動画なんてあるかあああああ！
！！！！ あれは全部僕が回収するんだあああ！！！！！！」

リオスがそう叫んだ瞬間、彼の体が赤く輝き始める（実際はそんなことありません、敵の錯覚です）。加えて、リオスの周囲に光り輝く粒子が舞い始める。

「な、なんだ！！？ コーネルドの動きが急に……うわあ！！！！？
」

「この機動性は……ぐはあ！！！！？」

「なんなんだ……何なんだありやあ！！！！？？ ふべら！！！！？」

赤く輝き、美しい粒子を纏ったリオス（何度も言いますが、敵の錯覚です）は通常の三倍近くの機動性とパワーを叩きだし、敵の大軍をまとめて叩きのめす。

「今のうちに、ポイントの占拠を！！！！」

「は、はい！！！！」

「了解いたしました！！！！」

傍でリオスの戦闘を惚けながら見ていた友軍にそう指示を出し、撮影ポイントの確保を進めるリオス。

そう、これはあくまで時間稼ぎ。撮影ポイントの確保とヒスイの準備が終わるまでの時間稼ぎなのだ。

「見せてやるよ……。煩惱の真の力ってヤツをおおおおおおおお

おおおおッ！！！！」

リオスは普段ののんびりした雰囲気などどこかに吹き飛ばし、阿修羅をも超える存在として剣を振るう。

「うおおおおおおいよオオオオオ！死にたい奴から前へ出るよオオオオオ、うをおおおおおおオオオオオオオオッ！！！！」

「真・コーネルド無双だ……………」

「流石は閣下の懐刀だぜ！！俺たちも負けてられねえぞ！！！！」

「円卓の騎士は元帥だけじゃないってなあ！！！！」

リオス無双に押され気味だった友軍の士気がグンと上がり、他の戦場でも帝国軍が押し始める。

リオスの奮戦がうまく実を結んだ形になった。

そして、共和国軍（敵）にとって、止めともいえる人物が戦場に舞い降りたのだった。

「帝国軍諸君！！！！よく頑張ってくれた！！！！これより、大統領直属部隊が敵の殲滅作戦を開始する！！！！各員、此処が最後の正念場だ！！！！」

そう、帝国軍の大將、エロティック大統領ルーク・ハラウンが満を持して戦場に到着したのである。

「か、閣下だ！！！！ 閣下がいらしてくださった！！！！」

「勝てる……この戦争、もうもらったも同然だ！！！！」

「閣下に続けええええええええ！！！！！！」

ルークの登場が味方にとって最大級の後押しになった。形成は完全に逆転し、帝国軍が共和国軍を次々に打ち負かし、屍を積み上げていく。

「ち、畜生……まさか奴が直接出張してくるとは……」

「こうなつては最早手の打ちようも……」

「バカ野郎、諦めてんじゃねえ！！！！ 昨日交わした血の約束を思い出せ！！！！ 俺たちに敗北は許されないんだ！！！！」

敵は既に背水の陣、諦めようとする部下を必死に奮い立たせる敵のリーダー。

だが、勝負は既に決まっている。もう覆ることはない。

そして、敵の数が当初の3分の1になったあたりで、ルークが敵軍にオープンチャンネル（メガホン）で最後通告を出した。

「敵勢力諸君、我が軍門に下るつもりがないというなら、我らは全精力を持って諸君らを殲滅する。諸君らの懸命な判断を期待する」

これは情けである。敗北、即ち写真&動画を諦めるということ。それは漢達にとっては死よりも恐ろしい現実である。

『ルーク、こちらの準備は整った。いつでもいけるぞ』

「了解しました。合図があるまで待機しててください。軍曹、コーネルド元帥を前線から下がらせる。それに続いて、全軍今いる位置から10メートル後退を指示。プランCは最終段階にシフトする」

「Sir, Yes, Sir!!!」

敵からの反応を観察しつつ、次の一手を打っておくルーク。

最も、降伏を通告した敵が素直にルーク達に下るなどとは思ってもしなかったので、最後の仕上げを予め準備しておいただけの話なのだが。

「俺たちは……お前たちには屈しない!!! これは煩惱と同時に誇りをかけた聖戦でもあるんだ!!!! そうだろう、お前ら!!!!?」

「「「おおおおお!!!」」」

と、ルークの予想通りに敵さんは敵対の道を選ぶ。

「命よりも誇りを選ぶか……まあ、それもいいだろう……。ヒスイ先輩、お願いします」

雄叫びを上げつつ、決死の強襲を仕掛けてくる敵軍。それを確認したルークは、インカムの向こうのヒスイに作戦の最終プランの実行を指示した。

『了解した。敵はすべて殲滅する。』

「部隊は下からせておきました。突っ込んでくる輩全員を仕留めてくださいよ」

『ふ、誰に向かって言っている？この俺、そして俺たち殲滅部隊に失敗の二文字はあり得ない』

「はは、そうでしたね……。では、俺たちは一足先にカメラとDV・BDの準備を……」

二人の通信はそこで終わる。

この二人の間に無駄な会話など必要ない。そう、二人はシスコンという固い絆で結ばれているのだから。

「では行くぞ！！！！ 弓道部の威信にかけて、敵勢力すべてを狙撃し殲滅する！！！！ 麻醉入り狙撃銃構え！！！！」

そうして、校舎の屋上でスタンバっていたヒスイは、部下（弓道部の舎弟共）に指示を飛ばし、ハーツ家特製スナイパーライフルを構えた。

弾には麻醉針が仕込まれており、当たればその場でボタンきゅーである。

作戦の最終段階、即ちスナイパーライフル部隊による遠距離狙撃による殲滅作戦である。

ちなみに、スナイパーライフルは本物ではないが、玩具でも人に向けてはいけない。絶対だ。

良い子のみんなはマネしないでね

「総員、狙撃戦開始い！！！！！」

ヒスイのその一言で、校舎屋上にいたスナイパー達の狙撃銃が火を噴いた……

五分後、撮影ポイントに敵勢力の姿はなく。ルーク達1年3組の手の物により、ポイントすべてが占拠されていた……

「いち、にい、さん………」

ふにゃん……

「じゅーいち、じゅーに、じゅーさん………」

ぽよん……

「にーじゅうに、にーじゅうさん、にーじゅうし………」

たゆん……

「にー、にーがへヴンか………」トサマ……

「る、ルー……ーク……!!??? 逝くな、まだ君にはやらなきゃいけないことが山ほど……!!」

どんな世界にも主、王者という者は存在する。

湖の主、ボクシングのライト級王者など、ある分野、ある地域に於ける絶対者という者が存在し、ある種の象徴として畏怖を込めてそう呼ばれる。

ルーク達帝国軍が激しい戦いを潜り抜けて手に入れた撮影ポイントからは、大縄跳びの王者の姿がよく見えていた。

「うう…… ハラオウン先輩、すげえや……」

「高町先輩もすごいぜ……」

「二つ上には見えないよな……」

ルークのほかにも、大縄跳びにの王者にのみ許された、戦略ミサイル級の攻撃力を秘めた二つのメロンが物理法則に従って揺れ、若いリビトーを大いに刺激する動きを目の当たりにし、次々と同志たちが倒れていく。

「流石はねーさん…… 90の大台突破は伊達じゃ…… ないってことか……」

鼻血を大量に出しながら、エロティック大統領ルークは、今まさに大縄跳びに出ているフェイトの姿にそう評価を付けた。

「な、なのはさんも…… これはかなり…… ごくり……」

同志リオスもまた、思い人のメロンが作り出す奇跡に鼻血を出しながら惚けている。

多くの同志たちが、目の前で繰り広げられている物理法則が生んだ奇跡に倒れ行く中、ルークとリオスだけは意識を保っていた。

「こ、コーネルド元帥。ねーさん達のクラスの映像と写真は青少年には刺激が強すぎると判断した。よって、あとで秘密裏に全員のカメラ、DVD・BDからデータ抜き取っておくように」

「Sir、Yes、Sir………」

ルークとリオスは二人でしか聞こえない声で、フェイトとなのはの映像を守るため、決意を新たにした。

こうして、様々な競技の裏でしょーもない戦いが繰り広げられていた事は誰にも知られることもなく、体育祭の午前の部は恙なく進み、昼休みを迎えるのだった……

第二十話 真・リオス無双、そして揺れる乳（後書き）

F20C「これ体育祭じゃなくね？」

ルーク「言っちゃったよ、作者が言っちゃいけないこと言っちゃったよ……！」

F20C「いやさ、もうお前がエロい方面で異常なスペックの高さを発揮することを前面に押し出したらこうなった」

ルーク「まともに体育祭やればよかったんじゃないか……！」

F20C「案ずるな、次回は平和な？昼食タイムだ。そうそう変なことにはなるまいて……」

ルーク「なんでだろう、このやり取り事態がフラグな気がしてきた……」

第二十一話 大統領の『穏やかな』昼食風景（前書き）

皆様あけましておめでとございます。

新年明けても、相も変わらず体育祭という季節感完全無視なお話で
申し訳ありません。

さてさて、上にあるように本日は大統領閣下の昼食の風景をお楽し
みください。

ええ、穏やかな風景ですよ？ とても穏やかです（大事な事なので
ry

加えて、最後ら辺には私の作品からあの二人が新規参戦します。
誰なのかはお分かりの方もいらっしゃるかと思いますが、お楽しみ
に〜

第二十一話 大統領の『穏やかな』昼食風景

さてさて、人間という生き物は食べないとやっていけない。腹が減っては、戦は出来ぬとはよく言ったものである。

消費したエネルギーを補給するには、食物を体内に摂取しなければならぬ。人間ならば、誰しもが日常的に行うこと、それが食事だ。

なのだが……

「はい、ルーク。あ〜ん……………」

「ちょっと待って、ねーさん！！！！ あ〜んはお箸で食べ物を挟んで口元につけてくる動作だから！！！！ 口の中に入れて柔らかくしたものを食べさせる行為じゃないから！！！！！」

人間、誰だって普通に食事を取りたいものなのだ。

あ〜ん攻撃ではなく、口移しでお昼を食べることなどあってならない。しかも、こんな真昼間から。

「ええ！！！！？ じゃ、じゃあじゃあ！！ 私に体に食べ物を載せて……………？」

「それ女体盛りだから！！！！ ていうかそれ、なんてプレイ？？！
こんな大衆の目があるグラウンドであっていい光景じゃないよ！
！！ お子様アニメタイムに凌辱系エロゲーのエロシーンが流れる

のと同じレベルだよ！！！！」

やはり、このお姉さん、本格的にルークの社会的立場を叩き壊すつもりらしい。まあ、本人にはそのつもりはないのだろうが、客観的に見ればそう捉えられても仕方ない。

「わ、分かったよ！！ ルークがそんなに言うなら……………」

「や、やっとわかってくれたんだね……………」

ちょっとシヨンボリしながらも、フェイトは脱ぎ掛けた体操着から手を放す。

姉の裸体を世間に晒すという（ある意味では興奮するが）公序良俗に反する行為を何とか阻止して、ルークは胸を撫で下ろす。

これでようやくまともに食事をとれる、そう思い箸を取り直s……………

「固形物がダメなだけだもんね？ だったら……………その……………出るか分からないけど、私のおpp……………」

「論点はそこじゃねえええええええええええ！！！！！！ ていうか、子供もいないのに、母乳なんぞ出るわけないだろ！！！！！！ なに急に母性に目覚めてんの！！！！？？」

やはりフェイトは何も分かっちゃいなかった。

「ていうか、今フェイトちゃんがおっぱいって言い切る前に母乳って理解しよったであの子……………」

「豆狸はシャラップ！！！！ コミケで人の波に流されて圧死して

しまえ！！！！」

「なにその無さそうで、意外にありそうな死因？？！」

余計な口を挟んできたはやてに、ルークは高速で突っ込みを入れた。
「コミケ、行きたかったなあ……………」（作者談）

「はいはい、フェイト。その辺でよしておきなさい。このままじゃ、
ルークが突っ込み過ぎて過労死しちゃうわ」

「ええ！！！？ わ、私の所為なの？？」

「自覚無しだよこの人！！ 数行前のやり取りなんかお構いなし
だよ！！！」

と、暴走するフェイトを止めたのは、フェイトとルークの母、リン
ディであった。

体育祭ということで、応援兼お弁当配達までしてくれたのだ。まさ
にザ・お母さんである。

「にやはは………… フェイトちゃん、いつにも増して全力全開だよね
……………」

「昼食の場所取り、人が少ないところでよかったですね、いやホ
ントに……………」

なのはとリオスは苦笑いしながら困った二人を見ていた。
この二人もある条件下では暴走する可能性が大なのだが、此処まで
フェイトがハイテンションだと、逆に冷静になってしまふのだろう。

「あらあら、相変わらずルーク君とフェイトちゃんは仲がいいのねえ」

「ふむ、姉弟の仲が良好というのは良いことだ。」

そして、リンディの隣で子供達を見守りながらそういうのは高町夫妻。夫、高町士郎はダンディという単語がピッタリであり、妻桃子はなのはの姉と見間違っほほどに若い。

「お、おじさんにおばさん……明らかにルークは泣きそうな顔して」「リッオッスさん」ほわああ！！！！？？？」

目の前の光景を微妙に間違って認識している高町夫妻に、リオスは正しい認識を教えようとしたのだが、彼を襲った柔らかな衝撃により、それは中断された。

「はふう…… やっぱり『私』のリオスさんは、抱き心地が最高ですね……何年経つても（悦）」

「か、母さん！！！！？ なななにやにやって！！！！？」

この柔らかな衝撃、というかりオスに後ろから抱きついていて美しい女性の正体は、リフェル「コーネルド、リオスの母である。

この母、高町家の血を受け継いでいるのではないかと疑ってしまうくらい若い、とても35歳には見えないくらいに若いのだ。

「はっはっは！！！！ 母さんなりの愛情表現だ、ありがたく受け取れ息子よ！！！！」

「この年になって母親に抱きつかれる息子の気持ちにもなってよ父さん！！！！」

でもって、この豪快の一言が似合うこの御仁はユリウス「コーネルド、リオスの父である。

『今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ！！！！』とか叫んでる方にそっくりだが気にしない気にしない。

こう見えても、リオスの父ユリウスは、凄腕の名医で患者からの信頼も厚い。楽天家で大抵のことを今さっきのように豪快に笑って済ませるところが小さな欠点だが。

「はあ、こうしていると思ひ出します……リオスさんがまだ私のおっぱいを飲んでいた頃のことを……今もそうですが、あのころからリオスさんの可愛さはY o u T b eに動画をアップしたくなるほどでした……」

「何てことしようとしてるの???！ ていうかいい加減に離れてよ！！！！ みんな見てるんだから！！！！」

意外なところで自身の動画が流出の危機にあつたことを知ったりオスは、慌てて若々しく抜群のスタイルを持つ母を引き剥がしにかかる。

こんなことをいつまでも続けていては、隣にいらっしゃるお姉さんが……

「むう……リオス君、やけに嬉しそうだね？ 顔真っ赤にして……

……」

「え、いや……なのはさん??」

「良いもん良いもん……リオス君はただの幼馴染ただけなんだし……」

そう、こうして拗ねてしまわれるのだ。なんかこう、『ほんと結構って欲しいけど、でもでも私にはそんなつもりなんだからね!!?』みたいなかわいい拗ね方である。

そのかわいい拗ね方に、当然ながらリオスはハートキャッチされてしまう。

「あらあらなのはさん? どうしたのですか? うちのリオスさんが何か粗相を……?」

「粗相というか、今母さんがやってる事そのものに怒っちゃってるんだよ、なのはさんは!?!?!」

そう言いながらも、リフェルはその豊満なバストを惜しげもなくリオスに当ててくる(決して故意ではない)。

「むむ、感心せんなりオス。将来の花嫁の機嫌を損ねるとは、それでもコーネルド家の跡取りか!?!?!」

なのは&リオス「ははははは花嫁!?!?!?!?」

そして今度はユリウスの発言によって、なのはとリオスは同時に真っ赤になってしまう。瞬間湯沸かし器にも負けない性能である。

「すまん、士郎よ。我が息子が不甲斐ないばかりに……君の愛娘には苦勞を掛けてしまう」

「いやいや、多少の嫉妬もあつた方が男女の仲は上手く行くものだよ。それに、なのはにリオス君しかいないと私は考えている。」

なのは&リオス「え、え、ちよつと!!!!!!?」

父親同士で何やら将来的な未来予想図まで設計していらつしやる中、なのはとリオスの混乱は今季最高値を記録した。

「仮にリオス君がなのはを泣かせるようなことがあれば、御神流の技を以て……」

「ふむ、その際は私も同席しよう。息子の罪は私の罪でもある。介錯は私が責任を持って行おう。」

「やばいよ、なんか僕の命をどうこう、な話になっちゃってるよ……」

士郎とユリウスは、剣術での付き合いもある。休みの度に高町家の道場にてガチンコバトルを繰り広げており、たまに道場の屋根が吹き飛んだり、壁が崩壊したりするが死人は出ていないので良しとしよう。

と、本日は体育祭ということなので、かなりの割合で生徒の保護者が学校に足を運んでいる。

家族ぐるみの付き合いであるハラウン家、高町家、コーネルド家はこうして同じ場所で昼食を取っているというわけである。

ティアナの家と、はやての家、アイリスの家の人は都合が合わなかったようで今日は来れていないが。

「なのはちゃん、なのはちゃん。ええんか、このままで？　このままやと、リオス取られてまうで？」

「……………だつて……………リオス君あんなにデレデレして……………私……………あんまり大きくないし……………」

「なのはちゃん、あんたの胸が小さい部類なら、うちはどうしたらええんや？　言つてて悲しくなるんやけど……………」

はやての自爆気味のフォローに、なのはは依然ムスツとしながら答える。乙女というのは複雑な生き物なのだ。

「なのはさん」

「は、はい！！？」

と、むくれているなのはに、リフェルが少し真面目な顔で名前を呼んできたので、なのはは驚きを隠すこともできないまま、間の抜けた返事をしてしまう。

「心配しなくても、リオスさんはなのはさんのことしか見えていませんよ？　この前もこの子の部屋を掃除中に、あなたの写真が数百枚入ったアルバムが……………」

「ちょっと待てええええええ！！！！！！　なんで人の部屋勝手に掃除した上に、僕のトップシークレットに手を出してるの??！」

母のカミングアウトによって、一気に社会的な立場を失いそうになるリオス。まあ、学校内の裏ルートで入手したのはの写真なのだが、流石に数百枚は持ち過ぎな気もするが……………

「え？ え？ り、リオス君？？？」

「いや違いますよ、なのはさん？？！ これはその……………そう！
！」

「なのはさんの事が気になって気になって、もう夜も眠れずに『ハ
アハア』しているんですよ？」

「母さん、お願いだから少しの間黙ってて！！！！！ 母さんが喋
るたびに僕の社会的な死がにじり寄ってくるから！！！！！！！」

最早、リフェルの勢いは留まることを知らない。彼女が口を開くと
同時に、リオスの秘密が次々と暴露されていってしまうので、彼か
らしてみれば核弾頭にも等しい存在である。

「り、リオス君？ 私達、まだ学生だし、そういうことはもうちょ
っと先だと思うんだ……………」

「なのはさんも深読みし過ぎだから！！！！ エスカレーターを四
段飛ばしで駆け上がってる勢いだからそれ！！！！！」

もじもじしながら、なのはは深読みし過ぎたのか大事なステップを
飛ばしまくった事を口走ってしまっている。

お昼休みの、しかも昼食中だというのに、彼らが陣取っているところ
だけテンションがおかしなことになっていることに気が付いているのは、
周りの皆さんだけである。

「あらあらまあまあ こんなに早く孫の顔が見れるなんて……………
ユリウスさん、私達おばあちゃんとおじいちゃんになってしまいま

すよ？」

「ハッハッハッハ！！！！それはめでたい！！　早速名前を考えねばな！！！！　士郎、君の意見はどうだね？？」

「ふむ、やはり字数はしつかりと考えた方がいい。名前は一生付き纏うものだからな。なあ、桃子？」

「はい、元気な子に育って欲しいですからね　早速その手のことに詳しい方に問い合わせを……………」

高町家、コーネルド家、両家の大人たちはさらにその上を行っていた。

というか、若々しい彼らがお爺ちゃんお婆ちゃんになると、ある意味でこの世の奇跡を目にすることになりそうである。

「孫……………あかちゃん……………リオス君との？／／／／／……………ふにゅう……………」

「な、なのはさん？？？！！！！　だ、大丈夫ですか！！！！？」

恥ずかしさから、オーバーヒートしてしまったのはが、リオスにもたれかかる形で気を失ってしまった。

なんというか、リオスにしてもなのはにしても、こうも大人に振り回されまくっているところを見ると、逆に可哀想に思えてきてしまう。

「ルーク！！！！　お姉ちゃん、覚悟を決めたよ！！！！　もうこの際、

私を食べちゃえばいいんだよ！！！！」

「食べるって行為の意味くらいは統一させてよ！！！！　その『食べる』をここでやったら、間違いなく捕まるから！！！！　ていうか、なのはさんとリオスのドタバタに影響されてるだけだろが！！！！」

ルークとフェイトの方もいまだに決着がついていないようで、フェイトは最早食べるという行為をあっち方面限定で考えてしまっている。

「もうね、お姉ちゃん最近思っんだ。既成事実を作っちゃえば、姉弟なんて関係ないんだって……………」

「関係大有りだから！！！！！！　犯罪だよ、普通に！！！！！！」

「わかってる、ルークは大勢の人が見てる中でお姉ちゃんを虐めて興奮しちゃう変態さんなんだってことも……………。でも、お姉ちゃんはルークのそういうところもちゃんと受け止めるから！」

「俺の性癖はそこまで歪み切ってないわ！！！！！！　ていうか、ねーさんの中では俺ってどれだけ鬼畜なのさ！！！！！！？」

このお姉さんの勢いもまた、リフェルに負けず劣らず留まる事を知らない。

何と言うか、本格的にフェイトの中でルークの変態レベルがどうしようもないことになりつつあるが、彼の日頃の行いを鑑みるに否定もし切れないのが痛い。

ルーク&リオス「お願いですから！！！！　普通にお昼ご飯を取ら

せて下さああああああい！！！！！！！！」

ルークとリオスの魂の叫びは、気持ちの良い青空に吸い込まれ、虚空に消えていった。

その後、ルーク達は体育祭実行委員の仕事で遅れてやってきたティアナとアイリスに騒ぎ過ぎだとしてり絞られてしまった。

もちろん、大人たちも一緒に正座しながらお叱りを受けたことは言うまでもない。

所変わって、聖祥学園中等部の校舎、その屋上にて……………

「んあ？　なんか今日はやけに騒がしいな……………日曜だったのに……………」

「今日は高等部の体育祭だそうですね？　かなり盛り上がってるみたいですね」

日曜に何故か学校に来ている、聖祥の中等部の制服を着ている黒髪の少年、そして彼を膝枕している青い髪の少女はそう呟くと、高等部のグラウンドに目を向けた。

「ふわぁ…………生徒会の仕事を片付けて一休みしてたつてのに……………」

「だから昨日の内に終わらせておきましょうと申し上げておりましたのに……………」

「だって、昨日はN Kで奈々様にハートキャッチされなきゃいけなかったんだ。仕方ないだろう……………」

「ソラ様、メタな発言はお控えください。」

黒髪の少年、ソラの発言に青い髪の少女が修正を加える。
P H A N T O M M I N D S 最高でした……………」

「って、エステル……………。二人の時は様は付けるなって言っただろう。あと敬語」

「え、あ、はい！！ 申し訳……………じゃなかった、ごめんね？ ソラ……………」

ソラがジト目でそう言つと、エステルという名の少女は、少し顔を赤くしながら言い直した。

「どうやら、いろいろ複雑な事情があるらしい。」

「謝っても許さないよ……………さてと……………どうお仕置きしてあげようか……………」

「そ、ソラ……………／／／／／」

ソラはエステルの顔に手をやると、スツと近くに寄らせる。

素早い動きにエステルは反応できずにされるがままだった。

「~~~~~っ!!!!!!／／／／／／／／」

エステルは顔を真っ赤にしながらも、なぜか『ドンと来い』という感じのオーラを出している。どうも嫌がっているわけではないようだ。

「はは、冗談だって。いつまでたっても、お前は初心だなあ……………」

「冗談って……………むううう!!!!!!」

と、あと少しで両者の唇がディープインパクトする寸前のところで、ソラはエステルを解放した。
からかわれたのだと理解したエステルは、頬を膨らませる。

「昨日の晩はあんなにかわいい声で鳴いてたくせに……………」

「にやにやにや、にやに言って!!!!!!??／／／／／／／ 何もしないもん!!!!!!／／／／／／」

と、終わったと思った弄りが再びターンしてきたので、エステルはムツとした表情から顔を真っ赤にして恥ずかしそうな表情になる。

ナニをナニしていたのかは不明だが、気にしたら負けだろう

「にしても、結構面白そうなことやってんじゃない。」

「ふえ……………？ 体育祭のこと?。」

弄りから一転、面白い玩具を見つけた子供のような表情で体育祭で盛り上がるグラウンドを見るソラ。

その時、エステルは嫌な予感がした。『きっと良くないことが起くる』と…………

「だ、ダメだよ？ あれは上級生の体育祭なんだし……………私たちも来週にはあるんだし……………」

「早とちりするなよ。誰も参加しようなんて言っていないだろう？」

「そ、そうだよね……………（ホッ……………）」

面白そうだから参加してやろう、とか考えていたのかと思ったのだが、杞憂だったようだ。

エステルは思わずホッと胸を撫で下ろした……………

「乱入して、引っ掻き回そうと思ってるだけだよ」

「もつとダメだよ！！！！？ って、ちよつとソラ！！！！？」

期待通りの展開に、ソラを止めようとしたエステルだったが、ソラの動きは早く、気づいた時には屋上のドアが開いたまま、『キィ、キィ』と寂しい金属音を奏でていた。

「もう！！ ソラってば！！！！！！」

エステルも彼を追うべく、開けっ放しの屋上のドアを閉めてから彼を追ひ、屋上を後にした。

そして、異変は起きた……………

ここまで快進撃を続けてきたエロティック大統領、ルークの計算を大きく狂わせる男が、体育祭に彗星の如く登場したことによって…

……

午後の部・第一種目

競技・水風船当て（要するに水風船を敵にぶつけて、戦闘不能にする競技）にて、それは現れた。

「閣下！！！！ 我が軍の兵たちが何者かに次々と撃破されております！！！！」

「何……………？」

「敵の正体は不明、ライブラリにもデータはありません！！！！ ですがまさに一騎当千の勢いで友軍は3割が戦闘不能にされています！！！！」

ルークの計算に、狂いが生じ始める……………

「慌てるな、リオスに501大隊を任せ、迎撃せよ！！！！」

「Sir、Yes、Sir！！！！」

ルークはすぐに指示を出す、その内心は少し揺らいでいた。

謎の敵の出現によって、想定されたいたプランに歪が生まれるのを感じていた。

「（どうなっている……………？ 敵の勢力データは解析済みのはず……………特に危険視する戦闘力を持った者はいなかったはずだ……………」

ルークは平静を保ちながら水風船当ての戦場全体を見る。広いグラウンド内で1〜3年生が赤白組に分かれて水風船を投げまくっている。

この戦場の中で、一体何が起こっているのか。不気味なプレッシャーがルークに悪寒を感じさせた。

「な、なんだこいつ！！！？ 動きが早……………ぎゃあ！！！？」

「怯むな！！ 相手は一人、纏まってかれ！！！ ぐああ！！！！？」

立ちはだかる白い鉢巻を身に着けた兵たちを水風船をクリーンヒットさせて戦闘不能にする。

何てことはない、簡単な種目だ。

「うーん……………戦場の匂いだねえ……………いい感じだ……………」

黒髪の少年は、高等部の体操着＋赤い鉢巻を身に着けて、水風船をお手玉のように操りながら呟く。

「これなら、退屈しのぎには申し分ないな。」

そう、ルークの計算を狂わせるのは、この黒髪の少年・ソラであった……

第二十一話 大統領の『穏やかな』昼食風景（後書き）

F20C「というわけで、新年一発目の更新なんだけど……………」

ルーク「最初にお礼だね。リオスの両親のアイデアを提供くださった神崎先生、本当にありがとうございました！！！！先生の期待に添えているかは分かりませんが、楽しんでいただけると嬉しいです」

F20C「本当に助かりました。私の考えていた設定よりも断然輝いてたしね。と、さてさて、最後の最後であのお方がついにスクラパに参戦してしまったな……………」

ソラ「呼んだ？」

F20C&ルーク「呼んでねえ！！！！」

ソラ「呼べよ……………呼んじまえよお！！！！」

ルーク「なんでそらのおとしものネタ！！？　まあ確かに面白かったけどさ……………」

F20C「とまあ、そんな感じでの登場です、私の現在の連載作品でもあります、『魔法少女リリカルなのはStrikers Beyond of Promise』より、主人公のソラと、ヒロインその？のエステルでございます」

ソラ「どーも、どーも」

エステル「こ、こんにちは……………」

F20C「ていうか、昨日の晩お前ら一体ナニしてたんだよ？」

エステル「え？！／／／／／ ええと、それはそのお……………／／／／／」

ソラ「一発しけこn……………」

ルーク「言わせないよ！！！？ ていうか中3の分際で何やってんだお前らは！！！！」

ソラ「何言ってるの？中学で経験ある奴らなんぞそこら中に居るつての。昨今のエロゲーでさえ、そんな感じになりつつあるんだから……………。子供に夢見ないほうがいいぞ」

F20C「ていうかさ、本編と違ってエステルがソラに敬語使ったりしてたけど、あれはどういう……………？」

ソラ「その辺は追々わかることだしいいんじゃないの？次回は俺とルークの旦那でバトルみたいだし……………」

F20C「いやな予感しかしない……………とまあ、新規参戦のお二人も交えて今年も頑張っていく予定なので、皆さんどうぞよろしくお願いいたします」

ルーク「ソラとエステルのプロフィールに関しては、Blood of Promise本編のキャラ設定と同じです」

ソラ「あ、もちろんこの作品内では特殊能力もくそも無いんで、ただちょっと運動神経が良いだけなんで。そういう感じでよろしくお願いします」

キャラクター大図鑑（スリーサイズなどは記載されておりませんので悪しからず
キャラクター紹介ですね。

今の今までないことを不思議に思わなかった作者をお許しください。

ソラとエステルに関しては、来週以降に掲載したいと思います。

キャラクター大図鑑（スリーサイズなどは記載されておりませんので悪しからず

主人公

ルークⅡハラウン

年齢 15歳 聖祥学園一年生

身長 165? 体重55?

髪型 綺麗な金髪 長過ぎず短過ぎず

瞳の色 真紅

性格 エロい、スケベな事に対しては一切の妥協を許さない。加えて、その分野に関してはかなりストイックである。

さらに、極度のシスコン。姉であるフェイトに姉弟以上の感情を…
…?

DSでもあり、たまにやる事がえげつない。

イメージC.V 櫻井孝宏さん（コードギアスシリーズの枢木スザク、
テイルズオブブレイセスのアスベル・ラントみたいな感じ）あくま
で、イメージ。

称号 エロティック大統領：すべてのエロを司り、エロティック帝
国と円卓のバカたちを率いる無敵の大統領。彼の前では中途半端な
エロなど、無いも同然。

シスコン：フェイトのことに關しては素直になれないながらも、内心では氣になって仕方がない、何とかしてください。

出演作 F20C作【魔法少女リリカルなのはStrikers
Lost Memory】・【魔法少女リリカルなのはStrikers
Blood of Promise】

メインヒロイン

フェイトⅡハラオウン

年齢 17歳 聖祥学園3年生

身長・体重・スリーサイズ すべて不明

容姿に關しては、アニメ三期と同じ感じ。我儘なボディの持ち主

性格 かなりのブラコン。ルークに対するスキンシップがかなり激しい。というか、一線を越えようとする傾向アリ。

お姉さんぶってルークを甘やかすが、その行動の一つ一つが、ルークの社会的な死を呼び込むきっかけになる。

備考

ルークの姉。

学園では、なのは・はやとと並び、まさにアイドルのような存在だが、ブラコン。

称号 ブラコンお姉ちゃん：目標はルークの童t……ゲフンゲフン！！！！ 弟がかわいくて仕方ない、豊満な胸で抱きしめたくなるほ

どに。

ナチュラルエロス：天然もののエロさ。人工的でないが故に、恐ろしいほどのエロさを醸し出す。まさに兵器クラス。

弟至上主義：ルークのためならなんでもします、例えエロであつてもw

CV：水樹奈々【様】（なのはシリーズ、フェイト役・テイルズオブシンフォニア、コレット役など）声優でもあり、歌姫。奈々様、マジパネエっす。

周囲の人々

リオスⅡコーネルド

年齢 15歳 聖祥学園一年生

髪型 プラチナブロンドの短髪

瞳の色 金色

備考

ルークの親友。そして懐刀。

エロティック大統領いるところ、常にコーネルド在りと言われるほどの猛将。

普段は人当り、面倒見とにもよく、お菓子作りにかけては彼の右に

出る者はいない。加えてメカオタクでもある。

幼馴染の高町なのはとは、家族公認の相思相愛。だが、2人とも今一歩が踏み出せずに幼馴染の位置から脱せずにいる。

クラスの女の子からは、ルーク×リオスorリオス×ルークというようなBLチックな評価素されており、どちらが攻めでどちらが受けなのかでの論争が後を絶たない。

称号 大統領の懐刀：大統領の片腕とも呼べる存在、変態ではないが、女性への興味は一般男性並みにはある。

男の娘：貴方は攻めなのか受けなのか？ 究極の難題を生み出す容姿を持つ貴方に贈られる称号。

出演作 神崎はやて先生作【魔法少女リリカルなのはStrike
rs 氷翼の天使】

高町なのは

年齢 17歳 聖祥学園三年生

容姿はアニメ三期を参照のこと

備考

フェイト、はやての親友。加えて、リオスとは家がお隣の幼馴染。まさに恋する乙女であり、幼馴染であるリオスの事はかなり昔から好きだったようだ。

少し天然な部分もあるが、それを上回る天然ボケの兆候が見られる

フェイトにツツコミを入れたり、非常にお笑いのにも優秀な人物。学園では、フェイト・はやとと並ぶアイドル的存在。が、リオスとの固有結界を頻繁に発生させているため、高嶺の花のような感じの扱い。（同時に、リオスの生命の危機が危ぶまれる、嫉妬的な意味で）

CV：田村ゆかり姫『永遠の17歳』（なのはシリーズ、高町なのは・ひぐらしのなく頃に、梨花ちゃん）ゆかり王国の最高権威、ゆかり姫であることはあまりに有名。

八神はやて

年齢 17歳 聖祥学園三年生

容姿はアニメ三期を参照。

備考

聖祥学園の生徒会長。仕事は出来るのだが、芸人魂全開のノリが影響し、良くも悪くも台風の目になりがち。

フェイトやなのには対するセクハラもよく見られ、その度にルークとリオスには【豆狸】と呼ばれ、吊るされている。要するにオチの人。

CV 植田佳奈（なのはシリーズ、八神はやて役・テイルズオブグレイセス、パスカル役）

伊藤かな恵さんを溺愛中らしい。

ティアナ・ランスター

年齢 15歳 聖祥学園一年生

容姿はアニメ版を参照。

備考

ルークの幼馴染でお隣さん。

エロティック大統領として覚醒し、暴走仕掛けるルークを止められる良く出来た幼馴染さん。（最近は止めることが難しくなっている）

ルークに好意を持っている様子。

クラス内では頼りにされている存在であり、同時に憧れの対象。

CV 中原麻衣（なのは三期、ティアナ役 テイルズオブヴェスperia、エステル役）

ひぐらしのなく頃にのレナ役など、怒りや狂気の溢れるキャラの演技に定評がある。（当時の作者を震え上がらせた）

アイリス・オルセルン

年齢 15歳 聖祥学園一年生

髪型 真紅のロング 腰辺りまで伸ばしている

瞳の色 橙色

備考

転校生として聖祥学園にやって来た。

ルーク達のドタバタに巻き込まれるも、ティアナと共になんとか止めようとしてくれる常識人。

ティアナと並び立つ美女のため、転校初日の時点で崇拜の対象に。

イメージC.V 後藤邑子さん（コードギアス反逆のルルーシュR2より、アーニヤ役・SHUFFLE!より、芙蓉楓役）

愛称はゴットウーザ様。新宿二丁目でニューハーフに間違えられるという有得ない体験をしたらしい。

称号

実はxxx!?:「アッーーーーー!」な展開が好きなのか!?
疑惑が絶えない彼女への称号。

出演作 F20C作【魔法少女リリカルなのはStrikers
Lost Memory】

ヒスイ・ハーツ

年齢：17歳 聖祥学園高等部3年生

備考

バルディッシュ先生作品【魔法少女リリカルなのはStriker
S〜天を撃ち抜く烈風〜】の主人公。

ルークとは同じシスコン同士、馬が合うらしい。（本人は否定）

フェイト達とはクラスメイトであり、風紀委員のトップ。名家の生

まれでもあり、高等部の事実上の支配者 いろんな意味で

同じ家柄のソラとは面識があるようで、彼の実力をよく知る人物でもある。

冷たい感じがするかもしれないが、基本良い人。なんと云おうが良い人。

称号：シスコンツンデレ兄貴

最強風紀委員長

学校を牛耳る程度の能力

キャラクター大図鑑（スリーサイズなどは記載されておりませんので悪しからず
キャラクターの称号を受け付けております。

こんなの面白くないカ？

こんな称号を考えてみたでゲソ

という方、いらっしゃいましたら、侵略されている、いないに限らず、お気軽にお申し付けください。

第二十二話 動き出す戦闘凶（バーサーカー）、そしてBL疑惑（前書き）

さてさて、ソラの独壇場となる今回。

と言っても、我らには最強の大統領が付いているので負けはないですが…………。

本日も、閣下が奇跡を起こしてくださいます。

そう、誰もが予想もしなかった奇跡です。

暴走機関車フェイトさんも最後ら辺にやらかしてくれますよww

と、気が付けば11327文字という長い話になってしまいました
が、皆さんどうぞお楽しみくださいw

ソラの名字のアイデアを出してくださった皆さん、本当にありがとう
ございましたww

しっかり採用させていただいたので、そちらの方もご確認くださいw

第二十二話 動き出す戦闘凶（バーサーカー）、そしてBL疑惑

午後一発目の体育祭種目は『水風船当て』である。

ルールは至ってシンプル。

水の入った風船を武器に、全学年が紅白軍に分かれて対戦し、被弾したものは失格。

先に自軍が全滅した方が負けというものである。

なお、水風船以外の武器の使用は御法度。毎年、水鉄砲などを忍ばせようとする強者がいるのだが、朝一番で捕まっていた。

エロティック大統領、ならびに円卓のバカたちにとっては、女子の水で透け透けになった体操着姿というエロレベルが非常に高い写真が撮れるということで、作戦上でもかなり重要視されている。

如何にして不自然さを出すことなく、敵味方関係なく女の子達を被弾させ、且つ競技自体に勝利するかで、数百回の綿密なシュミレーションが行われたことは想像に難くないだろう。

エロティック帝国軍の目的は、あくまで体育祭勝利と、女の子たちのナイスショット（水で透け透けな）なのだ。

敵勢力の分析、編隊のコントロール、兵士の錬度、どれをとっても帝国軍に隙はなく、この水風船当ては、始まる前から勝負がついているようなものだったのだ。

がしかし、いつの時代も物事は人間の頭の中の図面通りにはいかないモノだ。

そう、今回で言えば一人の少年の介入がルークの計算をすべて狂わせた……………

「閣下！！！！ 何者かによって我が軍の第3攻撃部隊、ならびに5番攻撃部隊が撃墜されました！！！！ 被害は拡大しており、このままでは第一防衛ラインはあと数分と持ちません！！！！」

「501大隊とリオスの状況はどうなっている！」

「すでに向かつておられますが、この乱戦です……。進軍に手を焼いているようで……」

謎の敵襲、それによってルーク率いるエロティック帝国の軍勢が次々と屠られていく。

ルークは部下に事細かに指示を出し、なんとか進行を食い止めようと躍起なのだが、敵の戦闘力は未知数であり、なかなか成果を上げる事が出来ない。

「ポイントG3に第三歩兵部隊を回せ！！ 道を作らせる！！ F8には第1特殊部隊を向かわせ、側面から敵の横っ腹に穴を開けよ！！！！」

「Sir, Yes, Sir！！！！！！」

戦場全体を完全に把握し、且つリオス達の進む道を切り開く為の兵を動かす。

謎の敵襲によって、確かに打撃を受けはしたが、共和国側にもこちらの攻撃によって確かな被害が出始めている。

ここで慌てて無骨な突撃でもかけようものなら、軍は一瞬で瓦解してしまうだろう。

ルークにとつては、ここは文字通り我慢の場面だった。

「ねーさん、それになのはさん、ティアナ、アイリス達の位置は？」

「ポイントB4にて固まって戦っておられます。今のところ被弾することも無いようで、順調に敵を撃破しておいんです。我が軍のサポートもございます、警備は万全です」

「よし、5分後、ねーさんたちにはポイントA7に移動するよう指示。第3防衛ラインの内側に来させるように！！！」

「Sir、Yes、Sir！！！」

ここで忘れてはいけないのは、フェイト達の安全である。敵のど真ん中で被弾させるわけにはいかない。

仮にフェイト達を被弾させれば、彼女たちの透け透けシーンが大勢の男子共の視界に入ることになる。それだけは絶対に阻止しなければならなかった（後々、ルーク達の近くでさり気無く被弾してもらうつもりである。）

「全く……一体どこのバカだ？ 敵に注目すべき戦闘量を保持する者はいなかったはず……。だが、実際にイレギュラーは起きている………確かめなければならんな、敵の正体を………」

ルークは情報を集めることを考えた。今の状況では兵を動かしても、

謎の敵にあつという間にやられてしまう。敵の正体を突き止めないことには、この水風船当てはゲームにすらならないのだ。

「偵察部隊に打電しろ。ポイントK1にて敵の正体を探れと。加えて、絶対に手出しをするなともな」

「S i r , Y e s , S i r ! ! !」

ルークはすぐに部下に指示を出し、偵察部隊を向かわせる。

情報戦で負けている時点で、このゲームは不利である。自軍を次々と撃破していく謎の敵の状態を見極める。

「さて、鬼が出るか、蛇が出るか……………。何にしても、厳しい戦いになりそうだ……………」

ルークはそう言いながら、再び険しい表情で戦場全体に注意を巡らせた。

一方、謎の襲撃者ことソラは……………

「ひ、怯むな!!!! 敵は一人なんだ、纏まってやれば!!!!」

「我ら帝国軍の力をなめるなよおお!!!!!!」

眼前には鬼神のごとき表情の体操着姿の男共。彼らの手には水をたつぷりと内包した水風船が握られており、まさに今からソラに向か

って投擲されようとしている。

「ムサイ男共に興味はないんだなこれが」

が、ソラはそんなものはお構いなしに、一個大隊は在ろう帝国軍の軍勢に突っ込んでいく。姿勢を低く保ち、手には水風船。身に着けている体操具や鉢巻は、保健室から失敬した。

「畳み掛けろおおおおお！！！！」

そして、帝国軍のその掛け声とともに、大量の水風船がソラに向かって投げられた。
がしかし、時を同じくしてソラも地面を力強く蹴る。

「当たらなければどうということはない！！！！」

と、まるでどこかの赤い彗星のようなセリフを口にしながら、異常なスピードでダッシュし始める。
飛んでくる水風船の弾幕の隙間を縫うようにして疾走するソラ。まるで、水風船の軌道がすべて読めているかのような動きである。

「な、なんだこいつは……グア???!」

「に、人間の動きじゃ…………ガフツ!!?」

ソラの驚くべきスピードと、尋常でない身のこなしに驚いていた間に、ソラは素早く水風船を投擲。両手から放たれた水風船は、綺麗に帝国軍の兵士の顔面に直撃し、瞬時に破裂。
彼らの顔を水浸しにした上で、戦死（失格）とさせる。

「しかし、これであいつに投げるべき水風船は……」

ソラの所持していた水風船は二個。それを投げたということは、現在ソラは丸腰である。

狙うべきは今と、帝国軍の隊長は部下に総攻撃を再度命令しようとしたのだが……

「弾なら……腐るほどあるっての!!」

と、次の瞬間、ソラは自分めがけて飛んできていた水風船、つまりは帝国軍が投げた水風船を走りながらキャッチ。そして、素早く投擲する。

「がつ!!?」

「くそ!!??」

「無念……!!」

走りながら、飛んでくる水風船をキャッチしてリリースするというソラの荒業によって、またしても帝国軍の兵士が次々と撃破される。

「く、くつそおおおお!!!!」

残った隊長格や、一般兵たちが更なる攻撃を仕掛けるも、全ては無駄に終わる。

「思い上がるな、雑種共があああああ!!!!」

慢心王と仲良くなれそうなセリフに続き、ソラは帝国軍の攻撃を紙

一重で避けて、インターセプトした水風船でカウンター攻撃を行う。
一個大隊が全滅するのに、約5分。凄まじい戦果を、ソラは一人で
上げていた。

「脆弱な……これならエステルとの夜の格闘技の方が……ゲフ
ンゲフン……！」

危ないことを言いそうになったので、作者権限で咳をしてもらいま
した。

ソラは、全滅させた隊には目もくれず、新しい敵を探して走り出す。
そもそもが退屈しのぎ、ここで楽しめなければ拍子抜けなのである。

「サーチ&デストロオオオイ！！！！！」

主人公その？としてのセリフとしては若干悪役っぽいけど、その戦闘
能力だけは目を見張るものがある。

そう、本気になったエロティック大統領と互角、いやそれ以上のも
のを感じさせた。

ソラが通った後には、水浸しになった男の骸が並べられ、一種の道
のようになっている。

が、ソラの進行は突如ストップする。無論、被弾したからではない。
彼の目の前に、手強そうな男が現れたからである。

「へえ……なかなか出来そうな奴、居るんじゃない……！」

「……誰だか知らないけど、君は通さないよ。僕がここで止める」

そう、エロティック大統領の懐刀、リオス「コーネルドその人であった。

「閣下、フェイト先輩方を第三防衛ラインまで後退させました。が、すでに第一防衛ラインが落とされてしまい……………」

「リオスはどうなっている？」

「は、歩兵部隊のアシストにより、移動を再開されました。あと二分弱で例の敵と接触する模様です」

ルークは部下からの報告を聞き、小さく頷く。

現状で打てる手は打った。後は偵察部隊からの報告を待つてからである。

と、その時、ルークの背後に音もなくある人物が現れた。

「戦況が芳しくないようだな、ルーク」

「ヒスイ先輩……………。ええ、どうもデータにない敵がいるようで……………。こちらの戦略を、めちゃくちゃな動きでことごとく破壊されている有様です……………」

その人物は、頼れる先輩ヒスイ・ハーツだった。彼にはフェイト達を守る警護部隊を指揮してもらっている。

「なるほど、今は情報を待っているということか……」

「ええ。幸い、今のところ、謎の敵の出現によるこちらの被害と、共和国軍の被害はイーブンの状態ですから。まずは情報の地盤を固めてから策を練ります」

「ふむ、良い判断だ。闇雲に兵を動かしたところで、得られる物など何もないからな」

ヒスイもルークの考えに賛成のようで、頷いてくれる。

ヒスイ自身、非常に優れた指揮官であり、それゆえにフェイト達の警護を任せているのだ。

「閣下……！ 偵察部隊からの映像、来ました……！！」

「っ……！ モニターに出せ……！ 信号のレベルをマックスにしろ……！！」

その時、待ちに待った偵察班からの情報、しかも映像データがリアルタイムで送られてきた。どこから持ってきたのか、ノートパソコンのディスプレイ上に、荒い映像が映し出される。

「しばしお待ちを、信号を安定させるまでに少々時間が………はい、これで大丈夫なはずです！」

と、映像班の男子が素早く映像データの信号を強くして、荒い映像を見やすくしてくれる。

そしてその映像には、信じられない光景が映っていた。

「単独だと！！？ 加えてあの異常な身のこなしとスピード……なるほど、我が軍の精鋭でも齒が立たんわけだ……」

ルークは映像に映し出された黒髪の少年の恐ろしいまでの戦闘能力を目の当たりにしてそう呟く。

単独であそこまでの戦果を挙げれるということに関しても驚嘆するものの、やはり彼の並外れた身体能力が嫌でも目に入ってくるのだ。

「コーネルド元帥より入電！！ これよりアンノウンと交戦に入るとのことです！！！」

「追加で部隊を派遣する！！ それまで何としても持ちこたえろと伝える！！！！ 私もある！！！」

この状態で兵力の温存は意味がない。もしかすると、全軍の力を以て相対しなければならぬ相手がそこにいるのだから。

「ま、待て、ルーク！！！！ 奴には正攻法では勝てん！！！」

しかし、そのルークの耳に、ヒスイの珍しく驚きに満ちた声が飛び込んできた。常に冷静がここまで動揺しているなどと、一生に一度見られるかどうかである。

「どうしたんですか、ヒスイ先輩？ こちらにも策はあります、如何に相手が一騎当千でも……」

「いや、あれはそれ以上の戦闘能力を持っている……。恐らく、今の俺やお前と同等、いやそれ以上かもしれない……」

ヒスイは冷静さと驚嘆を交じり合わせたような表情でそう告げてく

る。

どうやら、ヒスイはこの謎の少年のことを知っているようだ。

「あいつは……ソラ・アオミネ。対人戦闘のスペシャリストにして、
聖祥学園中等部生徒会長。加えて、ハーツ家と同等の名家、碧嶺家
の若頭だ。」

ルークは、その時この体育祭での最大の敵の正体を知ったのだった

……

「ほらほら！！！！ おにーさん！！ 動きが鈍くなってきたよ！
！？」

「くっ………なんて動きなんだ………」

ソラと戦闘を開始していたリオスだったのだが、形勢は圧倒的に不利だった。

一緒に連れてきた部下たちは瞬く間に撃破され、残すところはリオスのみなのだ。

大統領の懐刀とまで言われる猛将、リオスをここまで苦しめるのは、この体育祭ではソラが初めてだろう。

ソラの三次元性をフルに活用した動きに、リオスの攻撃は一発も当たることなく逸れてしまう。

「これなら………どうだ！！！！」

リオスは反撃とばかりに時間差を計算して水風船を投げる。避けるに
くいタイミングをシュミレーションし、そのイメージに乗せて投擲
する。

リオスの頭脳プレーはここの一番で光るものだ。

しかし……

「避けられないなら、キャッチしちやえばいいんだろ？」

その時間差攻撃を、水風船を割らずにキャッチするという離れ業で
防御するソラ。

まさに人間離れた身体能力である。

「お返しだよ！！！」

ソラはキャッチした水風船を投げ返す。

水風船を意図的に変形させて投げているのか、ソラの投げた風船を
変化球となってリオスを襲う。

「く……このカーブする風船……なんて厄介な……」

「だったらスライダーでもさせてみようか？」

言いながら、ソラは補充用の水風船ボックスから弾を補給し、リオ
スに攻撃を仕掛けてくる。

あまりの攻撃回数に、リオスは徐々に追い込まれていく……

「うわっ！！？」

「これで……チャックメイトだ！！！！！」

と、追い込まれて足元が疎かになっていたのか、リオスは足を纏れさせてしまう。

そこをソラが見逃すはずもなく、勢いの乗った水風船を投げってくる。

「（やられる……!!?）」

リオスは被弾すると思い、覚悟を決める。この時、彼の頭にはなのはとの思い出が走馬灯のように流れたという。

だが、その時だった。

「させるか!!!」

パシャァン!!

なんと、リオスを襲おうと迫ってきていた水風船が、誰かの投げた水風船によって撃ち落されたのだ。

リオスとソラは、その水風船を投げた人物を確認すべく、水風船が飛んできた方向に視線をやった。

「やあ、リオス。俺の助けは欲しくないかい？」

「ルーク!!!」

そう、リオスの助けたのはエロティック帝国大統領、頼れるスケベ男ルークだった。

ルークは、ポカンとしているソラに目をやり、一緒に来ていたヒスイに尋ねる。

「あの子が……そうなんですか？」

「ああ、間違いない、ソラ・アオミネだ。相変わらず滅茶苦茶な動きをするものだ……」

ヒスイは、直にソラの顔を見ると、ルークにそう答える。
謎の敵の正体は、ヒスイの思った通りの相手だったようだ。

「これはこれは……ハーツ家の若頭さんじゃないか？　なるほど、姿が見えないと思ってたら、敵側だったのか……」

どうやら、ソラもヒスイのことは知っているらしく、そう言うてる。

敵対心のようなものは感じられないが、面白いものを発見したというような、そんな感情が伝わってくる物言いだった。

「なぜ貴様がここにいる？　今日は中等部の体育祭ではないぞ？」

「いやさあ、生徒会の用事で来てただけど、終わっちゃってさ。暇を持て余してたら、グラウンドで面白そうな事してたから、ちょっと遊びにね。結構楽しませてもらってるよ」

ヒスイの問いに、ソラは楽しそうに答える。リオスという強敵に出会えたことで、それなりにこの体育祭を楽しんでいるようだ。

「え？え！！？　この人、中学生なの！！？」

「ああ、どうもそうらしい。ヒスイ先輩の家と同じくらいの名家の跡取りらしいしな」

事情を初めて知らされるリオスは、かなりビックリしたようで、ルークに再度確認してしまう。

今の今まで、良い勝負をしていた相手が、自分たちよりも一つ年下というのだから、仕方ないことではあるが。

「どっち道、この乱戦じゃあ、そんなこと気にする奴はいないだろうからな。このまま競技を続けてもいいだろう」

「はやてさんのことだから、『面白いからOK!』って言うに決まってるもんね……………」

ルークとリオスは、ある種の諦めを感じながら、そう言った。

あの生徒会長ならば、確かにそう言うだろう。そのシーンが想像に難くない。

「で？ どうすんの？ 三人纏めて相手すればいいのかな？」

そんなルーク達の心中など知るはずもないソラが、ルーク・リオス・ヒスイにそう尋ねてくる。

彼としては、楽しみが増えたらしく、少しウキウキしているようにも見える。

「どうします？先輩？」

「フォーメーションを組んで掛かるぞ。3対1なら勝機は十分にある」

「で、でも、相手は中学生なんでしょ？ いくらなんでもそれは……………」

相手の戦闘力を知っているヒスイが最も合理的な策を提案し、ルークもそれに賛同する。しかし、心優しいリオスとしては、3対1という戦闘には素直に頷くことは出来なかった。

「コーネルド、相手はただの中学生ではない。下手をすれば、今のお前やルークよりも力は上なんだぞ？」

「なのはさん達の安全が最優先なんだ。ここは先輩の案を選択するほかない」

「なのはさん……そ、そうだね……ここで負けたら、なのはさんやフェイトさんの写真までが……。ごめん、僕まだまだ甘いね……」

「いいさ、それがお前の良い所でもある」

ルーク達とのやり取りで、当初の目的を思い出し、迷いを振り切るリオス。ルークは彼の優しいところが美点だという事を理解しているので、非難するつもりなど毛頭なかった。

「ね〜ね〜、作戦会議はまだ終わらないの〜？」

「心配するな、今終わったところだ。俺たち全員で相手をさせてもらっ」

ヒスイはがそういうと、ルークとリオスはヒスイを戦闘に三角形に展開し、フォーメーションを組む。

「あ、あの三人の連携……これは見ものだぞ……」

「大統領、そして元帥閣下、特殊部隊総隊長。流石のあいいつもこれなら……………」

「え？え？ も、もしかしてルーク君、リオス君だけに飽きたらず、ヒスイ先輩まで食べちゃう気なの！！？ 3Pなの！！？」

約一名、この体育祭を通しておかしな子がいるようだが、やはりスルーさせてもらう。

リアクションした瞬間、世界が薔薇色に染まりそうになるからだ。

「リオス、ルーク！！！！ 俺に続け！！！！ 止めはお前たちに任せろ！！！！」

「「はい、先輩！！！！」」

そして、さまざまな声援と誤解を招く発言に包まれながらも、ルーク達三人はソラに向かって攻撃を開始した。

どうやら、ヒスイは捨て身の攻撃を行うらしい。体を張ってソラの動くを止めたのち、リオスとルークが決めるという作戦なのだろう。

「いくぞ、ソラ！！！！ 悪いが年下だからと言って容赦はしない！！！！」

「ええ、そうでないと張り合いがない」

ソラもまた、水風船を手に地面を蹴る。トップスピードに入るまでの時間が短く、彼の脚力の力強さが窺える。

「フッ！！！」

ヒスイの正確無比なコントロールによって投げられた水風船。流石は弓道部というか、こういった遠距離戦はお手の物で、間合いの取り方や攻撃のタイミングが絶妙である。

「おっと」

対するソラも、見事な身のこなしでこれを回避。胴体を狙って放たれた水風船を、踊っているかのように避けてみせた。

「まだだ！！」

「?!」

が、ヒスイの攻撃はそれだけではない。なんと、いつの間にかソラの背後に弓道部で構成された狙撃兵たちが陣取っていたのだ。

「（なるほど、さっきのあの二人とのやり取りはブラフ……。本当の攻撃手段は、後ろのやつらか！）」

ヒスイの合図によって、弓道部たちはソラに向かって水風船を投げてくる。どうあっても避けることなどできない距離。部隊の配置や攻撃のタイミングにかけて、ヒスイの見事な作戦である。

「だったら、こうするまでだ！」

ソラは回避を諦めて防御にでる。

先程叩きのめした、帝国軍側の兵士の死体（死んではいないが）を

掴み上げ、飛来する水風船の射線上に放り投げたのだ。

「秘技・人間バリアー！！！！」

「ぐああああああ！！！！？？」

ネーミングセンスのかけらもない技である。

水風船の弾幕をソラの代わりにもろに食らうことになる兵士の死体A。断末魔のような悲鳴がしたような気がしたが、気にしたら負けである。

「さて、これでそっちの手は……………」

と、ソラが標的をヒスイたちに再び向ける。二段構えの策を、何とも悪役っぽい技で凌いだソラに、周囲の人間はある種の絶望感を覚えてすらいた。

しかし、忘れてはいけない。今戦っているのはエロティック大統領、ルークなのだ。

彼が戦場にいる限り、必ず奇跡が起こるのだ。

「?!」

「これなら！！！！」

「どうだ！！！！」

ソラの一瞬の隙を狙い、ルークとリオスが両サイドから挟撃を行う。が、着目すべき点はそこではない。

ルークとリオスの手には、水風船が握られたままなのだ。どうやら、投げるつもりで水風船を持っているのではないらしい。

「（そうだ……これが俺とルークの最後の手。水風船は投げなければならぬというルールはない。要するに相手に水を掛ければ被弾したことになる。つまり、『水風船を投げずに、掌底を放ち、直接相手にぶつける』という戦法も認められることになる）」

ヒスイとルークが考え出した奥の手だ。

水風船を直接相手に叩き込む、イメージで言えば人気漫画 N A U T O で、主人公が使用する螺旋丸を想像していただければ分かりやすいだろう。

自分も被弾するというリスクを背負う形になるが、捨て身の攻撃としては突進力、命中力においてはこれを凌ぐ技はない。

「（む、これは無理か……？）」

ソラの身体能力を以てしても、この完璧のタイミングで決まった挟撃をどうにかすることは難しい。回避も防御も不可能な、まさにジョーカーのような技だ。

が、しかし。ここで、奇跡が起こってしまう。

ズルッ！！

「のわぁ！！！！？」

なんと、ソラが足を滑らせて、見事に転んだのだ。どうやら、水風船から零れた大量の水によって、地面がかなりぬかるんでいたらし

い。

ルーク&リオス「「げっ！！！？？」」

無論、挟撃という事は、攻撃を行う二人の間に敵がいるという事だ。だが、敵が転んで挟撃の間からいなくなってしまう場合、攻撃を行う二人を待っているのはもちろん……

ルーク&リオス「「ふべらっ！！！？？」」

互いにソラにぶつけるべく手にしていた水風船が、顔面にストレートで入ってしまう。

まあ、これも一種の正面衝突というモノである。

ルーク「あく……………」

リオス「きゅう……………」

そして、夕日をバックに殴り合う二人の男のような構図を再現しているルークとリオスは、同時に地面に倒れ込む。

『リオスがルークを押し倒すような形で』

シーン……………

その瞬間、世界の時間が止まったかのような、そんな静寂が訪れた。だが、一人の女の子の一言で、その場がカオスになってしまふ。

「り、リオス君が……ルーク君を……押し倒した!!?」

きやああああああああああ!!?!?!?!!?!?!?

その一言が着火剤だった。

まるで、二トロに火が付いたような勢いで、女の子達から興奮しまくりなことが分かるほどの歓声が上がった。

「やっぱり、そうなのよ!!! リオス×ルークだったのよ!!!」

「こんな公衆の面前で……ああ、でもありなのかも……」

「このまま二人は禁断の世界に……じゅるり……」

「やっぱり、をピーーーーーッ!!して、× をドキュン!

!!! するのかしら……?」

と、リオスがルークを押し倒したという事で、女の子達（主にそっち方向の趣味があるお方）が次々と声を上げる。

なんとなく、この学校の女の子たちの感性を疑いたくなる。

「痛たたた……ご、ごめんルーク……痛かったかい?」

「い、いや……下がぬかるんでたからな……大事にはなっ
てない……」

が、倒れたことで周囲のことが頭に入っていないのか、リオスやルークはそんな会話をしてしまうものだから、波乱は最高潮に達する。

「痛かったかい？……だつて！！！？　しちゃったのよ、やっぱり
リオス君が攻めだったのよ！！！」

「そ、そんな……ルーク君がずっと攻めだと思ってたのに……明
日からどうやって生きていけばいいの……？」

「聞いちゃったわよ……やっぱり　をピーーッ！して……」

これほどのカオス空間を超える物を、皆さんは見たことがあるだろ
うか？

皆、水風船投げなどお構いなしに、ルークとリオスに注目しまくっ
ている。

「ん？なんか周りが……騒がしい？」

「なんだろう……ものすごく嫌な予感が……」

と、流石に周囲の様子がおかしいことに気が付いたルークとリオス
が気が付いた時にはすでに手遅れで……

「る、ルーク！！？」

「り、リオス君……？」

リオス&ルーク「ほえ？」

二人の名前を呼ぶ声に、ルーク達は振り返ってみる。そこには、こ
の場に最もいてはいけないお姉さん方が顔を真っ赤にしてご降臨召
されていた。

「り、リオス？ 気のせいかもしれないんだが、今の俺たちの状態。かなり誤解を呼んでいるような気がするんだけど……………」

「奇遇だね、僕もだよ…………。ていうか、なのはさんやフェイトさんの目が怖いんだけど……………」

二人は、自分たちを取り巻く環境を一瞬で理解した。

周囲の女の子や、フェイト達が今の二人の状態を見て考え付くことと言ったら、一つしかないだろう。

「る、ルーク！…！？ いくらエッチだからって、男の子同士はちよっとダメだと思うよ！…！？」

「リオス君……………噂だと思って聞き流してたけど、やっぱりルーク君と、そういう関係だったんだ……………？」

「ちよちよ、ちよっと待とうかねーさん！…！？ 多分、今ねーさん達、大きな勘違いをしてると思うんだ！…！？」

「なのはさん、違いますよ！…！？ 僕もルークも、そっちの気はありませんからね！…！？」

慌てて弁解するルークとリオスだが、それくらいではこのお姉さんたちの誤解は解けることはないだろう。

なのはなど、アニメ三期、八話の魔王降臨の時の表情をしていらっしやる。正直怖い。

「も、もうね？お姉ちゃん思うんだ。女の人にだけ、興味を持つ事が出来るように姉としてルークにしてあげなきゃいけないことがたくさんあるって」

「いやだからね、違うからね、これは!!?」

「今日から、ルークは寝る時もお風呂の時も、お姉ちゃんと一緒だから!!! 隙あらば食べちゃうくらいの勢いで行くからね!!!?」

「話を聞けええええええええええ!!!!!!!!」

ルークがそう言うが、こうなつては妄想列車新快速・フェイトは留まる事を知らない。

周囲の女の子たちの声に、彼女のセリフが隠れてしまっていることから、FFF団には聞かれてはいないようだが、正直フェイトが本気の目をしている事が何よりも怖いのだ。

「なななな、なのはさん……?」

「リオス君……? ちよつと……頭冷やそうか?」

「ああああああああ!!!!!!??」

こつちもこつちで、別の意味での恐怖体験をしていた。

リオスの断末魔でさえ、女の子たちの喧騒によって、一瞬で掻き消されてしまう。

「哀れだな……2人とも……。すまんが、俺は次の作戦の準備があるのでな。これにて失礼する」

ルークとリオスに聞こえているかは不明だが、ヒスイはそう言ってその場を後にした。

若干早歩きだったことは、これを読んでいる読者様たちの胸の中に閉まっておくことにしよう。

「痛てて……まさか水で足を取られるなんて……」

「バカなことするからだよ……。ほんとソラって、変なところで子供なんだから……」

一方、地面に足を取られてスツ転んだソラは、エステルに介抱されていた。怪我などはしていないが、心配性なエステルが頑として譲らなかったのだ。

「なんだか……向こうはかなりエキサイトしてるみたいだな……」

「うん。なんでも、ＢＬがどうか……あと受けとか攻めとか……。お姉ちゃんがルークのこと美味しく頂くとか……結構な騒ぎになってるよ?」

「なんだろう、最後の一行だけ明らかに犯罪の匂いがあるんだけど？」

エステルに膝枕してもらいながら、ソラは喧騒に包まれているグラ

ウンドの一角を見ながらそう呟く。

「でも、楽しかったなあ……………」

だが、さっきの戦闘は本当に楽しかった。

始めは詰まらないものだったが、あの三人が出てきてからは、テンションは最高潮だった。

「これは、最後まで付き合ってみる価値ありだな……………」

「え？」

ソラの呟きに、エステルはまたしても嫌な予感がする。

物心つく以前から、ずっと一緒にいたらしいソラの事なのだが、たまに分からない時がある。

「エステル、あの人たちのところに行くぞ。挨拶くらいはちゃんとしておかないとな」

「はあ……………体育祭、まだ参加しちゃうんだ……………」

諦観に満ちたエステルの溜息。だが、ソラはやる気満々だ。

こうなつては、彼女もまた付いて行くほかないだろう。彼が暴走した場合は、自分が抑止剤にならないといけないのだから。

「ほれ、行くぞエステル」

「もう……………しょうがないなあ……………」

そう言いながら、エステルはソラに手を引かれながら、歩き出した。

午後の部・水風船割り
結果：引き分け

第二十二話 動き出す戦闘凶（バーサーカー）、そしてBL疑惑（後書き）

F20C「BL疑惑再びwww」

ソラ「だっはっはっはwww」

ルーク&リオス「笑い事じゃないから!!!!!!」

ソラ「ルークの旦那はフェイトさんに襲われそうで、リオスの兄貴はなのはさんにお置きされてるしww」

F20C「いやはや、これほどにドタバタコメディーが似合うやつもそうそう居ないだろうww」

ルーク「あの後大変だったんだからな？ねーさんとなのはさんの誤解を解くの……」

リオス「僕なんか、なんか意識を持って行かれたかわかんないよ……」

F20C「ま、それが主人公というものさ。来週あたりには、ソラにも大変な目にあってもらう予定なんだし……」

ソラ「（。。。）／「え」」

リオス「ま、君も同じ目に合わないと……ねえ？ルーク？」

ルーク「当然だな。お前もエステルにプギャーされるがいいわ」

ソラ「いや、あいつはそういうことする奴じゃ……………」

F20C「それは私の気分次第で……………」

ソラ「ちょ、おま、やめろ??　ここは平和的に行こう。誰もそんなの望んでないから」

ルーク&リオス「俺たちが望んでいる…………キリッ」

ソラ「orz」

F20C「今回は借り物競争ですww楽しみに〜」

ソラの名字、^{アオミネ}碧嶺を考えてくださったライムズさん、採用させていただきました………

他の皆様も、ご協力本当にありがとうございました………

キャラクター大図鑑その？　　＼若干作者の趣味が多めですが突っ込んだら負け

ソラとエステルのプロフィールでございます。

この二人は、裏主人公と裏ヒロインみたいな感じです。

内容は、若干作者の思いのたけを暴露してる感じにも見受けられますが、タイトルにあるように突っ込んだら負けです。

キャラクター大図鑑その？　　～若干作者の趣味が多めですが突っ込んだら負け～

主人公その？

ソラ・アオミネ

年齢：14歳　聖祥学園中等部三年生

身長：160cm　体重：50？

髪型：黒髪（パツと見はギアスのルルーシュ的な感じ、彼を幼くしたのをご想像ください）

瞳：黒色

性格：自称変態紳士。しかし、変態度ではルークには勝てないらしい。常に余裕を持っている感じ。が、DS度は間違いなくこちらの方が上。

どこか世の中を斜に構えて捉えている傾向アリ。しかし、面白そうな事は大好きであり、積極的に首を突っ込んでいく。良くも悪くもアクティブな性格である。

備考

作中で登場するヒスイ・ハーツの家と同じくらいの名家の跡取りであり若頭（だが決してヤの付く人たちではない、絶対に違います。大事な事なので（ry）

作中では、間違いなく最高ランクの戦闘能力の持ち主。運動神経が

良いつてレベルじゃねえぞ。

聖祥学園中等部の生徒会長であり、中等部でもその存在は大きらしい、だが変態紳士。

童貞ではない、ということも無いような感じもしない、こともない気がしたがそんなことはなかったぜ。

世話係のエステルとは、物心ついた時から付き合い。今ではお熱い仲のようだ。（リア充が……………ねば良いのに……………）

イメージCV

福山 潤さん（ギアスシリーズより、ルルーシュ役。ぬらりひよんの孫より、リクオ役）

ラジオでのトークに関しては、作者的には大絶賛。だが、たまに噛む。作者的には、男性声優さんの中では間違いなく一番好きな方である。

最近妙に、オカマ、変態の役が多いが、気にしない気にしない。

称号

・変態紳士：男は皆変態であり、それを認めるか認めないかでその後の人生が決定づけられる。

・バーサーカー：戦場を一瞬にしてひっくり返す。そんな驚異的な力を持つあなたに。

出演作：【魔法少女リリカルなのはStrikers Blood
of Promise】

エステルⅡクライファル

年齢：14歳 聖祥学園中等部三年生

身長・体重・スリーサイズ 一切不明（だが胸は大きい、行く行くはフェイトに迫る勢らしい。）

髪型：空色のロング。腰に届くか届かないかくらいの長さ。

瞳：インディゴ

性格：一途で健気（BOP本編中での読者様談）。心配性でもあり、ソラの事を常に気に掛けている。

ソラ曰く、M属性。誘い受け……ゲフンゲフン！！

ソラのことは、『もう好きとかいう感情を通り越している』とのこと。（本人談）（まじ羨まs……）

備考

聖祥学園生徒会副会長兼、ソラの世話係。隠しているようだが、ソラとは懇ろな仲。

実家は別にあるらしいが、アオミネ家にてソラと同居中。（家事などは完璧）

中等部では『嫁にしたいランキング・幻のナンバーワン』。幻なのは、周囲からは彼女は既にソラの嫁として認知されているため。

最近のマイブームは『抱き枕にされること』らしい。誰のなのかは野暮ってもんだ。

称号

・嫁：すべてが揃ったと言ってもいい嫁。時には厳しく、時には甘く。そのさじ加減を心得ている嫁。
・一途つ子：健気で一途。気持ちは昔から決まり切っていた、そしてこれからも。

出演作：【魔法少女リリカルなのはStrikers Blood
of Promise】

イメージCV

堀江由衣さん【17歳】 これ重要（D・C・シリーズより、白河ことり役。ぬらりひよんの孫より、つらら役。）

親友のゆかり姫を追いかけるように17歳教に入信。まあ、個人の意見としましては、そんなの関係なしに17歳ですが。
作者的には、女性声優さんの中では一番好きな方ですね。

ラジオでの最初の挨拶は『こんばん天^{いんばんでん}』、締め挨拶は『あなたのハートにエンジェルビーム！』（堀江由衣の天使のたまごより）
これ聴くたびに、作者はハートを撃ち抜かれこんな感じに……

（ 、 、 ） …… ズキーン！！ （ 艸 ）

ほっちゃん！ ほ、ほーっ、ホアアーツ！！ ホアーツ！！

すみません、取り乱しました。

キャラクター大図鑑その？　く若干作者の趣味が多めですが突っ込んだら負け

ソラ「ほっちゃんリスペクトwwwまじばねえww」

F20C「ふ、こんなものではないさ。まだまだ語るべきことは」

エステル「あ、やっぱりあるんだ……」

F20C「キャラ別にほっちゃんの素晴らしさを語りたいくらいだよ。ほっちゃーん！　ほ、ほーっ、ホアアーツ！！　ホアアーツ！！」

エステル&ソラ「ダメだこの作者……早く何とかしないと……」

あ、ソラとエステルの称号に関してもアイデアお待ちしておりますく

第二十三話 ルーク、大統領から皇帝へ……………（前書き）

どうも、最近豆乳クッキーうまい、なF20Cでございます。

ていうか、まずはじめにごめんなさい。

またしても一万文字オーバーでございます。最近おかしいですね、一万オーバーとか、もう卒論書くときもこの勢いで行きたいですよ。

さてさて、本日は借り物競争とか、ソラとエステルの挨拶とか……
…盛り沢山なお話になっておりますので、皆様どうぞお楽しみください。

第二十三話 ルーク、大統領から皇帝へ……

「うう……酷い目に遭った……」

「ルークなんかまだマシだよ……僕なんか、三途の川の向こう岸の一步手前までバタフライさせられちゃったんだから……」

B.L.疑惑によつて、フェイトとなのはによつて方や性的な、もう一方はお話（肉体言語）により、きつい折檻を受けていたルークとリオス。

彼らの表情はメンタル面でかなりダメージを受けたようでやつれ気味になっている。

「ご、ごめんねルーク……？ 私てつきり、リオスとはもうアレしてアレな関係になったんだとばかり……」

「わ、私も……勘違いしちゃって本当にごめんなさい……。昔から2人ってどこか怪しい気はしてたから……余計に……」

ルーク&リオス「お願いですからその手の分野に俺（僕）達を叩き落さないください」

申し訳なさそうに謝ってくるフェイトなのは。どうやら疑いそのものはかなり昔から掛けられていたようだ。
ルークとリオスは軽く泣きなくなった。

「ええと……多分この辺にいますと思うんだけど……」

と、そんな感じでリオスとルークがフェイトとなのはとの誤解を解いて一安心しているとき、先ほど見知った顔が当たりをきよろきよろしながら誰かを探していた。

見れば、彼の傍には青い髪を伸ばした超美人と一緒にいるではないか。

「あれ、あの子って……………」

「さつき、ルークさん達と戦ってらした方ですよね？」

ティアナとアイリスがその存在に気が付き、そう呟く。彼女たちの言う通り、その視線の先にいたのはついさっきまでルーク達と熾烈な戦いを繰り広げていたソラだった。

円卓のバカたちは、先ほどまで敵として一騎当千の戦闘を見せつけられた相手がノコノコと、しかも美少女を伴って歩いていたので、警戒の色と共に羨望の眼差しをこれでもかというほどに投げつけていた。

本人たちは全く気が付いていないようだが。

「確か…………ソラ君…………だったかな？」

「隣にいる子は誰なんだろうね？ 物凄くかわいいけど……………」

フェイトとなのはがその存在に気が付いたのと同時に、ルークとリオスも彼がこちらに来ていることに気付く。

その視線を感じ取ったのか、ソラと謎の美少女はルーク達がいる方

向を見やって、探し物を見つけたような表情を浮かべながら、まっすぐこちらにやって来た。

「やーっと見つけた。どうも、ええと……………リユーク先輩とリオス先輩だったかな？」

「惜しい！！！！ 一文字違いで俺の職業が死神にジョブチェンジしちゃってるから！！！！ ていうか、なんでリオスは間違えなくて俺の名前は間違えるんだよ！！！！？」

「ま、まあまあ……………ルーク落ち着いて……………」

モノの見事に名前を間違えたソラに、死神の名前を図らずも頂戴してしまったルークを宥めるリオス。

なんとなく、場の空気が漫才劇場のようなものになってしまった。

「すみません、普通に間違えました。えと……………ミヒヤエル・キュヒマイスター・フォン・シュテルンベルク先輩でしたよね？」

「せめて原型を留めて間違えろおお！！！！！！ なにその名前？
？ 最早ルークと何の関係もないじゃん！！！！ 掠りもしてないわ
！！！！！！」

「すみません、噛みました」

「どこをどう噛んだらあなるんだよ！！！！？」

最早、狙っていると思えないソラの名前間違い。まあ、実際ソラはルークで遊んでいるのだが。

そして、それを見ていた円卓のバカたちは……

「……（か……閣下をあゝも簡単に弄り倒すとは………で、出来る………）」

とか何とか、どうでもいい所で感心してしまっていた。

「そ、ソラ……いい加減にしないとダメだってば……。先輩なんだよ？」

「冗談だってば。お前はいつまでたっても心配性だなあ………」

頃合を見計らって、傍にいた青い髪の美少女がソラを窘める。この手の展開には慣れているのか、ソラの扱い方を熟知しているようだ。

「皆さん、ソラ様の失礼をお詫びします。なんと言いますか………ソラ様はマイペース過ぎるところがございまして………」

そして、今度はルーク達に謝って来た。マイペースとか、その次元を軽く超えている気がするが、この際気にしない方が良さそう。そんな事よりも気になる事がある。先ほどまでソラと呼び捨てだったのが、様を付けて読んでいる。何やら訳ありのようだ。

「い、いや。別に気にはしてないけど……。ええと、ソラのこととはヒスイ先輩から聞いているんだけど、君は……？」

謎の美少女のプロフィールを把握していなかったルークは、彼女が誰なのかを聞いてみる。瞬間、フェイトの視線が突き刺さったが、別にナンパとかではないと断言しておく。

「申し遅れました。私はソラ様のお世話係としてアオミネ家でお世話になっております、エステル〶クライファルと申します。」

「お、お世話係？」

聞きなれない役職である。まあ、一般的に世話係などはお金持ちの類の方々の特権のような印象が強いので仕方なくはあるのだが。

「エステル。別のここは家じゃないんだ、様は付けなくてもいい。」

「あ、はい……じゃなくて、うん」

ソラにそう言われ、すぐに話し方を変えるエステル。

ルーク達の頭の上の？マークは増えていく一方である。

と、その時だった。エステルのような美女が近くにやって来たのだ、円卓のバカたちが放っておくわけではない。

円卓のバカたちは煩惱全開且つ、下心丸出しでエステルに声をかけてくる。

「え、エステルちゃん……よければメアドを……」

「これから二人でエメラルドの都までランデブーしない？」

「寧ろ嫁に来てください」

などなど、ハイエナの如き素早さ且つ狡猾さを武器に、化石時代のような口説き方を交えながら迫っていく円卓のバカ達。

無論、年上の男の子にそんなことをされれば、女の子の中にはドン引きしてしまう子もいるわけで……

「ひゃう……」

エステルはソラの背中に隠れる感じで、円卓のバカ達から身を隠してしまった。

が、しかし、KYな円卓のバカ達がこんなことで諦めるわけがない。

「ああ、そんなかわいい仕草をされたら……」

「し、辛抱溜まらん……」

「ハアハア……（；、）ハアハア」

今すぐ通報されてもおかしくない連中である。まあ、体育祭での動きを見る限りその兆候はかなり前からあつたのだが。

と、その円卓のバ力達に釘を刺す奴がいた。

「先輩方？一つ言っておきますけど、エステルの髪の毛一本にでも触ったら……」

そう、言わずもがなソラである。彼はハアハアしながらエステルに近づいてくる円卓のバカ達の方を向きながら、笑顔でこう言った。

「ぶち殺しますよ？」

「ひいひいひいひいひい！！！？？」

笑顔ではあるが、尋常でない殺気を放ちながらそう言われると恐怖度はトランザム状態である。

円卓のバカ達は、一瞬にして煩惱を捨て去り、賢者モードでその場を後にした（逃げた）。

「そ、ソラって……結構怒ると怖い？」

「み、みたいだね……さっきのだって脅しじゃない感じだったような……」

年下ながらにこの貫禄。将来が非常に楽しみ且つ、不安で仕方がないルークとフェイトだった。

「ところで、ソラ？ 何か用があつてここに来たんじゃないの？」

「ああそうでした。さっきはバタバタしてたんで、挨拶が遅れたなあと思つて。そこんことを改めてちゃんとしようかと思ひまして」

どうやら、ソラの用件はしっかり挨拶しておきたかただけのようだ。なんというか、イメージと違って礼儀正しい少年である。

「暇潰しのつもりだったんですけど、あなたたちと遊ぶのは結構楽しいので、今日は最後まで参加しておこうかなと思つてます。」

「って、次の借り物競争にも参加するの??！」

ソラはこのまま競技に参加するつもりらしい。まあ、さっきの水風船当ての時からいるので、最早突っ込むのも面倒なのだが、彼は一応中学生なので本来ならば高等部の体育祭には参加できない。

が、彼にとってはそんなルールはどこ吹く風のように、全く気にし

ていない様子である。

「すみません…………ソラはお祭り好きなので…………」

「ああ、別に大丈夫だと思うよ？　うちの生徒会長はかなり適当な人だし…………」

エステルが代わりという感じでペコペコ頭を下げているが、彼女の日頃からの苦勞が窺え知れるシーンでもある。

まあ、リオスが言う通りはやてが生徒会長な時点で、この体育祭は何でもありなのだが。

「ねえねえ、エステル？」

「？　はい、なんでしょうか？」

と、ソラの用件が済んだところで、なのはがエステルに話しかける。その表情はどこなく乙女のような雰囲気を含んでおり、リオスは当然のことながら彼女のそんな新しい仕草にハートキャッチされてしまった。

「もしかして…………エステルとソラ君って…………恋b…………」

「にやにやにや、にやにを言うんですか……！？　私はその…………ソラのお世話係であって、その…………個人的な感情は全くない…………ことも無く…………その…………あの…………」

「言い切る前に否定したわね…………。」

「否定になっていないところがまたかわいくもありますけどね…………」

なのはのセリフを言いきらせる前に、顔を真つ赤にして話すエステルに、ティアナとアイリスが「おやおや、まあまあ」というような、可愛らしいものを見るような視線を向けながらそう話す。

「そ、ソラから何とか言ってお……／／／／／／／」

変なタイミングでバトンタッチされたソラだが、何を言えいいのか分からないといった感じである。

そして、少し悩んだ拳句に彼が口にしたのは……………

「そうそう、ベッドの上ではソラにイジメられt……………ってそうじゃなくてええええええ！！??　なんてことカミングアウトしてるの！！！！?」

一、同、

485

ソラの言葉の意味を正確に、且つ若干のピンク色のシーンと共に理解してしまったらしい。

「あ、そろそろ競技が始まるみたいですね。それじゃ俺たちはこれで。」

「あ、ちょっとソラ！！？ まだ話は終わって…………… ああもう！！
！ では皆さん、私たちはこれで！！ もう、ソラってばマイペー
スにも程あるっていくら言っても治らないんだから……………」

未だにフリーズから立ち直れない一同を置いて、ソラとエステルは行ってしまった。

時間的には、ソラが言った通り競技が始まる五分前なので、すぐに移動しなければならぬのだが、その場から動ける人間は誰一人としていなかった。

「ええと…………… なんていうか…………… 最近の中学生は進んでいる
ってことで…………… なあ皆？」

「あ、ははは…………… そ、そうだね…………… そういう事なんだよね……………
……………」

リオスとなのはが、凍りついた世界から何とか脱出出来たので、その他の皆のフリーズを解こうとそういうのだが……………

「中学生で…………… 私…………… もうすぐ大学生なのに…………… まだルーク
と一緒に布団で寝たことしかないのに……………」

フェイトは変なところで敗北感を感じてしまっている。まあ、早いからどうこうという事ではないのだが、彼女の的には若干の焦りを覚

える内容らしい。

というか、一緒に布団で寝る時点で突っ込みを入れたくなるのはなぜだろうか？

そして、エロティック大統領及び円卓のバカ達は……

「なあ、お前ら……リア充ってさ……殺しても罪に
ならないよね？」

「「「「「おおおおおおおお、血祭じゃあああああ
あああああ！！！！！！」」」」」

ルークの一言で、彼らの闘争本能に火がついてしまっていた。

大統領自身、羨ましさと性への興味と、若干の焦りを覚えたのか、目が血走っている。

どうやら、数年ぶりに覚醒したようだ。

今の彼を例えるなら、最早大統領ではない。そう、『皇帝』である。

「お前たち！！！！ 次の借り物競争、死んでも勝て！！！！ 勝てなくても勝て！！！！ 負けたら私自らが処刑を行う！！！！」

Yes, Your Majesty!!!

そう、大統領を越えたルークは皇帝となつた。多少の無茶ぶりは日常茶飯事、しかも、部下たちがその命令にまったくの疑問を示さない。

いわば、死をも恐れぬ無敵の集団の完成である。ルークがエロティック皇帝として覚醒するという事は、単に彼自身のパワーアップに

は留まらないのだ。

1+1が10にも100にもなる状態。
今のエロティック帝国はそういう連中なのだ。

「行くぞお前たち！！！！ 私に付いて来い！！！！ そして私のために死ね！！！！」

「「「Yes, Your Majesty！！！！」」」

そうして、無敵の集団は進軍を開始した。恐れる物は何もない。帰る場所さえも必要ない。

これから向かうは戦場。男の尊厳を賭けた、加えてリア充を滅ぼすための聖戦には、帰り道など必要ないのだ。

「ああ）……………僕らも行きましょうか？」

「にやはは……………だね……………」

そして、リオスは未だにフリーズしたままのティアナとアイリスを、
なのはは未だにブツブツと『もう、今夜あたり襲っちゃおうかな』
とか言っているフェイトを引きずりながら、借り物競争に赴くのだ
った。

さてさて、借り物競争の定義をいままら説明するまでもない。

紙に書いてあるものを、『どんな手段を使っても』入手したうえでゴールすればいいだけのシンプルな競技なのだから……

現在、競技は開始されており、エロティック帝国軍からのトップバツターはリオスである。

借り物が記された紙は、グラウンドの中央に配置されており、早い者勝ちで選択し、紙に書かれたものを持って係りの先生にチェックしてもらい、OKなら得点となる。

そして、気になるリオスの借り物はと言うと……

リオスⅡコーネルドの場合

【嫁にしたい女の子（P・S・リオスがこれを見た場合は当然なのはちゃんやろうなあ……え？もちろん別の子もアリやで？でも、人生には往々としてフラグというもんがあつてやな……）】

「あの豆狸いいいいいい！！！！！！ ていうかこれ借り物じゃなくない！！！！？ P・S・が尋常じゃなく長いんだけど！！！！最早手紙なだけで！！！！！！」

恐らくというか、100%はやての仕業だろう。リオスをピンポイントで狙ったかのような借り物指令である。

「うう……………これってカミングアウトになりそうなんだけど……………ああでも、フラグを叩き割るなんて出来ないし……………。ルークや

クラスのみんなは『逝つて来いや』みたいなジェスチャー送つてくるし……………」

男リオス、今年最大の悩みどころである。

というか、ある意味嫌がらせに近いこんな指令を律儀に守ろうとする彼の誠実さには脱帽せざるを得ないだろう。

そして結局……………」

「えっと……………」リオス君？」

「すみません、なのはさん。こんどパフェ奢りますから、耳栓つけた状態で一緒に来てもらえますか？」

と、耳栓を差し出しながらなのはにそう懇願している彼の姿がそこにはあった。

アイリス・オルセルンの場合

【応援したくなるカップル】

「カップルですか……………。なるほど……………」

応援したくなるカップル。聞いた感じではそうそう難しいものではないが、如何せん彼女は転校したばかりである。

クラスの恋愛事情には詳しくない。そう言った点から、彼女としては難易度が少し高めである。

[illegible]

と、何かを思い出したようなアイリスは、頬を若干赤らめながら借り物を探しに移動を開始する。

この様子だと、アイリスが応援したくなるようなカップルは、大層お熱い関係のようだ。

そして、アイリスは借り物としてカップルの二人に同行してもらい、担当のクロノ先生に用紙を見せて借り物のチェックをしてもらう。

「え……応援したくなるカップル。オルセルン……確かに世界には様々な愛の形があるが、これは少し本人たちがかawaiiそうかもしれないぞ……？」

「いえ、お二人ならばどんな困難も打ち破って行かれるはずです。例え性別という壁があつたとしても……」

ルーク&リオス「アイリスウウウウウ！！！？　一周跨いでこのネタ繰り返されると流石に凹むからね僕らだって！！！！？」

無論、アイリスの応援したくなる『カップル』はルークとリオスだった。

女性陣からは『あの子は分かっている』、『なかなか見どころがある』などなど、アイリスの潜在能力の高さを評価する意見が多く出たらしい。

フェイトⅡハラオウンの場合

【赤ちゃん（誰とのかつて？ それは聞いただけ野暮って奴やで……？）】

「……………ゴクリ」

その指令を手に取った瞬間、フェイトの中の何かが弾けた。

「ルーク……………」

「え、なにねーさん……………？ ちょ……………何でねーさんそんな真っ赤な顔しながら息を荒くしてるの……………」

「気にしなくてもいいんだよ？ ちょっと私と一緒に来てくれればいいだけだから……………」

フェイトが一步踏み出す ルークが後ずさるの繰り返しが始まる。

いきなり真剣な表情のフェイトが現れてびっくりしたルークだが、それ以上にフェイトの真っ赤な顔と艶っぽい息遣いにドキドキしていた。

「ね、ねーさん？ ちょっと借り物の指令見せてくれない？ 気の所為か嫌な予感しかないんだけど？」

「向こうに着いたら見せてあげるから……………。ね？ だから今はお姉

ちゃんの言う事、素直に聞いてほしいな……………」

その間も、手をワキワキさせながら迫ってくるフェイト。ルーク以外ならば喜んでその手を握って駆け出すのだが、この二人の場合はそうもいかない。

フェイトが普段ルークにしている事を思えば、彼が警戒しても仕方のないことだろう。

「大丈夫だよ、ルーク？ 世間の目は厳しいかもしれないけど、二人で乗り越えていこう？ 学生結婚ってことになっちゃうけど、私大生出たらバリバリ働くからね？」

「なんか未来予想図が出来上がってる！！？ ていうか今の一連の流れでねーさんの選んだ指令書の内容が読めちゃったんだけど！！！！？」

ルークは後ずさりの状態から、すかさず立ち上がり、ダッシュで逃げ出した。

あのままホイホイフェイトに付いて行けば、何か大切なものを無くしそうな予感がしたのだ。

しかし、今のフェイトから逃れられる者などいない。彼女もまた、ルークと同じく覚醒しているのだから。

「ルーク？ どこに行くのかな？ ゴール（いろんな意味で）は…………… あっちだよ？」

「あ、ちょ…………… ねーさん……………？ やm……………」

一瞬でダッシュして逃げていたルーク追いついたフェイトは、まさ

に雷光。一瞬の出来事で、スローカメラ（ここにはないが）でも捉えることは出来ないほどだった。

「ルークウ……………痛くしないから……………ね？」

「あああああああああああ！！！！！！！！！？？？？」

そうして、また一つ若い芽が散って行ったのだった……………

ちなみに、もちろん体育祭なのでアレな事にはなっていないので悪しからず。というか、物理時間的に不可能なので……。フェイトは結局、競技を観戦していた子供連れの親子さんに協力してもらい、条件をクリアした。

「惜しい……………あと少しだったのに……………」

フェイトが後に悔しそうにそう呟いていたことは、皆さんの心の中に仕舞っておいてください。

「二年前のジャンプを持っている方はいませんかあああああ！！！！！！？」

「ガンブラのランナー（プラモなどの部品の周りの部分のアレ、普通なら捨ててしまうアレ）の部分を5kgくらい持つてる人……………」

「いたら返事してくれええええ！！！！」

「ドリームキ スト、まだ持つてる人いませんかあああ！！！！？」

さてさて、競技は順調に進み、エロティック帝国軍はかなりの戦果を挙げている。だが、指令書の中には如何せん実現が不可能に近いものも交じっており、帝国軍の士官たちでさえかなり手を焼いていた。

そんな中、戦場のご真ん中にて、エロティック大統領改め、エロティック皇帝へとジョブチェンジしたルークは、今体育祭での最大の敵、同時にリア充の敵と相対していた。

「ソラ……………やっとサシでやりあえるみたいだな……………」

「いや、別にやり合うとかはないと思うんですけど……………。これ借り物競争ですし……………」

皇帝陛下は先ほどまでフェイトに追っかけ回されていた時に疲れなど全く見せる様子もなくソラにそう告げた。

ソラ自身は、何がなんだか分からないという顔をしているが。

「エステルは一緒ではないのかな？」

「ええまあ。これは俺の個人的な趣味なんで……………。あいつは応援です。それに、競技中に万が一にでも怪我させるわけにはいきませんから」

「ほう……………変態紳士として、ある程度は心得ているようだな……………」

ルークは皇帝然とした、畏怖さえも感じてしまつようなオーラを飛ばしながら、ソラにそう言う。

「だがしかし。お前がリア充という事には変わりはない。悪いが……散つて行つた部下たちのためにも、私はお前を倒さねばならん。」

そう、ルークがソラに戦いを仕掛ける理由はそれだけだ。いや、だからこそと云うべきか。

エロティック帝国にとって、リア充とは最も危険な存在であり、最大の敵なのだから。

「はあ……。ていうか、リア充っていうならルーク………ミヒヤエル・キュヒマイスター・フォン・シュテルンベルク先輩だつて十分リア充だと思いますけど?」

「なんで今言い直した!!!!? そのまま行けばよかったじゃん!!!! わざとだろ、今の絶対わざとだろ!!!!」

「すみません、噛みまみた」

「いつまで化物語ネタ引つ張るつもりなんだお前は!!!!?」

皇帝として覚醒したルークでさえ、こうも簡単に突っ込ませられるソラの能力。やはり彼は、何かを持っているのかもしれない。

「と、兎に角!!!! 今日の体育祭もこの借り物競争と、最後のリレーで終わってしまう。その中で、我ら帝国軍がリア充であるお前を下さねばなんのだ……………」

「だからリア充はあなたもそうだと……………」

「シャラップ！！！！細かいことはいいの、読者さんだつてセルフで突っ込みいれてくれるはずだから大丈夫、無問題！！！」

「（なんて力技な論理なんだ……………」

メタな発言によってソラの返し手を退けた皇帝陛下。

もう、なんだか皇帝としての威厳もへつたくれもない気がするが、ここはスルーしてあげるのが優しさというモノなのかもしれない。

「んじゃ、兎に角。借り物競争始めましょうか？　なんだかこのままだとお話が一向に前に進まない気がしますし……………」

「ふ…………その余裕がいつまで続くか…………見ものだな……………」

そして、二人はそのあたりにあった手ごろな指令書を拾い上げる。ソラは余裕を崩さず、ルークはどこかニヒルな笑みを浮かべながら、指令書の内容を把握した。

ルークの借り物【婚姻届（ルークとフェイトちゃんの氏名を記載の上、捺印を忘れないようにすること（笑））】

「笑えるかああああああ！！！！！！　あんの豆狸！！！！　どんだけ人を弄り倒したいんだよ！！！！？　ていうか、婚姻届なんぞどこで借りるんだよ！！！！　そもそも借りるもんじゃないし、貰いに行くもんだし！！！！」

指令書の中身を見た瞬間、ルークは明らかな豆狸の悪意の塊で出来た指令書を破りたくなった。

「婚姻届って…………… どんだけ引きが悪いんですか、ルークさんは……………」

「やめて！…！ その可哀想なモノを見るような目はやめてくれ！
！…！」

ソラは同情半分な気持ちでそう言ってくれるも、それがルークにとってはとんでもなく精神的なダメージになって襲ってくるのだ。

「つつか、どうすれば…………… 名前や捺印のことはこの際放置しておくとしても、婚姻届なんて、役所にまで行ったら日が暮れちゃうよ……………」

と、ルークは途方に暮れてしまう。確かに、時間的にも役所まで行く余裕などない。加えて、一度手にした指令はチェンジ不可なので、ルークは是が非でも婚姻届を探し出さなければならないのだ。

仮にこのミッションを失敗しようものなら、皇帝として、下の者達に示しがない。

「ええい…………… どうすれば……………」

「ルーク、ルーク」

「へ？ ねーさん？」

その時だった。困り果てていた様子のルークに、みんなのお姉さん

フェイトさんが何やらものすごく嬉しそうな顔で声を掛けてきた。手に、何か紙的な物を持って……

「はいコレ　こんなこともあるつかと、いつも持ってたて正解だったよ／＼／＼／」

「……………」

フェイトが頬を赤らめながら差し出してきたのは、『紛うこと無き』婚姻届』だった。

しかも、ご丁寧にフェイトの名前が書かれており、後は夫の記載欄を埋めれば書類として成立してしまうものだった。

「いつも持ってたって……………」

「え？　いつルークにプロポーズされてもいいようにだよ？」

どうやら、最早フェイトの中の未来予想図は実現までのカウントダウンが始まっているらしい。

というか、婚姻届を常時携帯しているとは、流石はフェイトさんである。

「しないから……！　ていうか、俺たち姉弟で結婚なんかできないからね……！　あと、俺まだ15歳だから……！」

ルークは当然ながら、フェイトにツツコミを入れる。

すると、フェイトは少し目をウルウルさせながら、上目づかいで……

「して……………くれないの……………」

「ぐはっ！！？」

フェイトの反則級、いや戦略ミサイル並みの威力の攻撃にルークは見事にハートキャッチされてしまう。

もうお前ら結婚しちゃえよ、みたいなコメントが読者さんから飛んできそうで怖い。

「いや……やっぱりその……ねーさんは美人で……その優しいから……女の人としてもものすごく魅力的で……」

「う、うん……／／／／」

「でででも、姉弟だし……。ああ、それ以前に俺は15歳で……。でも、ねーさんの事は……。その……。あああああ！！俺は一体どうすりゃいいんだああ！！？」

ルークは頭を抱えながら、悶絶し始める。地面をコロコロ転がりまくって、傍目から見れば不審者として通報されるレベルである。

「何をしてるんだあの人は……？」

ソラは、そんな意味不明な行動を続けるルークを見ながら、若干引いていた。

まあ、いきなり唸りながら地面を転がりだせば当然の反応ではあるのだが。

「さて、俺も借り物を探さないとな……」

ルークのことは放っておいて、自分の借り物競争に集中することにするソラ。

借り物がなんなのか、それを確かめてどうにかして手に入れなければならぬ。周囲の動きや、ルークの借り物の中身を見る限り、一筋縄ではいかないことだけはハッキリしている。

「うゝむ、俺の借り物はっと……………」

ソラの借り物【おにやのこの下着（レース的な素材を使っていたりするアレ、男のロマンの一つでもあるアレ）】

ルークも引きが悪い種類だろうが、ソラの借り物もそれに引けを取らないくらいの物だった。

が、それは普通の人間ならばの話である。今、この指令書を手にしているのはソラなのだ。

彼には、ルークと同様、常識など通用しない。

「よし、借りに行くか」

そう呟いて、ソラは走り出す。

下着などと言う、有得ない借り物に驚くことも無く、いつもと変わらない様子で有得ない借り物をしようとっている。

そして、彼が向かった先は……………

「エステル、下着貸してくれ」

「はえ！……？ し、下着！……？ ていうか、いきなり何！……？」

当然の如く、エステルのところだった。真顔で、しかも何の迷いもなく下着を貸してくれと言われたものだから、エステルは驚きのあまり声が裏返ってしまった。

「いやさ、借り物が女の子の下着らしいからさ。エステルの今履いてる下着（白）を……………」

「なんで色まで把握してるの！！？ ていうか、貸せるわけないじゃない！！ 私、ノーパンになっちゃうでしょ？？」

ソラの目はどうなっているのか、彼はエステルの履いている下着の色を見事に言い当ててしまった。

流石変態、ルークの跡を継ぐのは彼しかないだろう。

「お前の履いてる下着の色くらい、常日頃から把握しているんだよ！！！！」

「ソラの……………変態っ！！！！」

大きな声で下着の色をカミングアウトされてしまったエステルは、どこから取り出したのか広辞苑を手に、おおきく振りかぶりソラに向かってブン投げた。

「くぎゅっ！！！！？」

広辞苑は、若干ホップした上に、トルネード回転をしながらソラの顔面にヒットした。

ソラの身体能力を以てしても躲す事が出来ない剛速球ならぬ、剛速辞典。

エステル、恐ろしい子！！

「え、エステル……酷い………がくし………」

「ふ、二人の時にならいくらでも見せてあげるけど、こんな公衆の面前では絶対に嫌！！！」

という様に、エステルはソラをものの見事にKOしてしまった。

セリフの中にツッコミどころが満載な気がするが、突っ込んだ瞬間
広辞苑が飛んできそうなのでやめておいて方が賢明だろう。

こうして、ドタバタ&カオスな借り物競争は終了した。

ルークは結局、フェイトとの婚姻届をどうするかで悶絶し続けていたらしく、フェイトに引つ張られる形でゴールしたらしい。

しかし、婚姻届は流石にまずいという事で、クロノが取り上げたことは言うまでもない。

それに加えて、FFF団にフェイトとの一連のやり取りを見られていたらしく、異端審問会を開かれた拳句にボコボコにされていたこともまた、言うまでもないだろう。

皇帝といえども、絶対的な支配者・強者ではない。

エロティック帝国の厳しい掟は、何人たりとも逃れられない。その事を身を以て証明した皇帝に敬意を表したい。

借り物競争

勝者……………エステル&フェイト？

借り物競争終了直後……………

「あれ？どうしたん、ルークにリオス？　なんでそんな怖い顔で…
…うわ、ちょ…やm……………ぎゃああああ！！！！？」

「「自分の胸に聞いてみる！！！！！！」」

はやてがルークとリオスによって吊し上げられていた事は、最早お約束である。

第二十三話 ルーク、大統領から皇帝へ……………（後書き）

F20C「エステルの広辞苑攻撃……………侮れないな……………」

ソラ「痛い……………」

エステル「そ、ソラが変なこと言うから……………／＼／＼／」

ルーク「まあいきなり下着貸してだもんねえ……………」

フェイト「ルーク、ルーク。お姉ちゃんのなら今すぐにでも……………」

ルーク「良いから！！！！ そんなところで対抗しないでいいから！！！！」

F20C「ていうか、フェイトさんの壊れ具合が深刻化してきてる希ガス」

ソラ「今日とかリアルに第一線を越えようとしてたしな」

ルーク「その主たる原因が自分にあるってことを自覚してくれ……………」

F20C「次回、ついに体育祭が終了です。次回でファーストシーズンが終了し、次々週からはセカンドシーズン、第二期ですね。OPとEDを変えようかなあって思ってます。」

ルーク「また何かいいOP/EDアイデアがあれば、お教えください。片方は作者の趣味全開で決めますので、OPかEDのどちらか

は皆さんのご意見を採用したいと思います」

ソラ「ではでは、また次回」

フェイト「ねえねえ、エステル？ エステルの胸のサイズってどのくらいなの？」

エステル「え？サイズですか？ ええとですね、確か先月測ったときは……………」『ゲフンゲフン！！』…サイズでしたね」

ルーク「ソラ、風邪でも引いたのか？」

ソラ「かもしれないです……………」

第二十四話 終戦とお姉ちゃん大好きっ子（前書き）

ふう…… やつとこさ、体育祭編が終わりましたね。長かったです……
……ていうか、体育祭という言葉がゲシュタルト崩壊しそうになりました。

さてさて、最後のリレーにてまたしても、というより、閣下がやはりやって下さいますよっw

そのほかのランナー達にも是非注目してあげて下さいねww

あ、ガンダム小説を連載（不定期ですが）し始めました。よろしかったらそちらも楽しんでもらえれば嬉しいですよww

第二十四話 終戦とお姉ちゃん大好きっ子

「さ、さて……………最後の…競技…………チーム対抗リレー……………行ってみようか？」

「いやいや、ルーク？ 傷が痛むなら今回は休んでた方が……………」

「止めるなりオス……………。男には…………やらねばならない時があるんだ……………」

「全身包帯グルグル巻きで言われても、全然説得力無いんだけど……………」

さて、体育祭もついに最終競技に突入した。体育祭と言えば、シメはリレーと相場は決まっている……………はずだ。少なくとも作者の高校はそうでした。

そして、前回の最後でフェイトとイチヤ付いていたところをFFF団に見られてしまったために、皇帝なのにボコボコにされたルークは、リオスの言うとおり全身を包帯でグルグル巻きにした状態で、競技に参加しようとしていた。

リレー対決は、紅組・白組の中で代表者を5名ずつ選出し、タイムを競う事になっている。

ちなみに、白組ことエロティック帝国軍のメンバーは、リオス・ヒ

スイ・ティアナ・フェイト・閣下の五名となっている。二年生が一人も居ないのは仕様である。

対する紅組には陸上部が多く、かなりの戦闘力が予想され、その上にソラの存在も気がかりである。あの様子ならば、リレーにも参加することは確実だろう。

「例え……この身が尽きようとも……私は行かねばならんだ……
ねーさんの写s……みんなの勝利のために……」

「今、本音がポロツと出てきたよね!!? フェイトさんの写真って言っただよね今!!?」

我らが閣下は、チームのためにその命を燃やして（実際写真目当て）戦場に赴こうとしている。その気高い姿に、円卓の馬鹿達は……

「閣下……あんたって人は……」

「その心意気……しかと見届けるぜ……」

「なんて、大きな背中なんだ……俺たちの期待を全て背負って、あの人は戦おうとしてくれているのか……」

「ねえねえ、アイリス？ あんたはリオス君かルーク君、どっちが受けて攻めだと思う？」

「そ、そうですね…… / / / / 私としましては、ルーク君が攻めだと…… / / / / 」

「はい、アイリスはこっちの派閥ね」

「ちょ、待ちなさいよ！！！！ 今のは誘導の可能性があるわ！！！！」

若干、最後あたりにおかしな連中が居たが、例の如くスルーすることにする。

というか、円卓の馬鹿達に一言言っておきたい。閣下をボコボコにしたのは、主に君たちだと言うことを忘れてはならないと。

「ねーさん、ティア、ヒスイ先輩……………、この前なのはさんと遊園地デートしてたりオス……………。この戦い……………最後に笑うのは俺たちだ！！！！」

「……………コーネルドを血祭りに上げろおおおおおお！！！！！！！！！！」

「ちょ！？ルーク、なんて事してくれんのさ！！！！？ 僕まで巻き添えに……………あ、やm……………アッ……………！！！！！！！！！！」

ルークの最後の演説により、心身共に固い絆で結ばれた一つのチーム（リオスはFFF団にボコボコにされている最中だが）。

この夢のドリームチームに死角はないのだ。そう、恐れるものは何もない！！！！

「さあ、行こう。そして、豪華旅行と豪華ディナーを頂きに行こうじゃなイカ！！！！」

フェイト達「……………おお……………！！！！！！！！！！」

こうして、戦士達は戦場に赴く。目指すものは勝利のみ、後に戻る道もない。

だが、彼らの目には見えていた、勝利という名の美酒でわかめ酒をしている皆の姿が。

「うう……………始める前から……………死にそうかも……………」

リオスがFFF団にボコボコにされていることにツツコミを入れてくれる人物が居ないくらい、ルーク達エロティック帝国軍の集中力は高い水準を保っている。

ついでに言うと、ルークが某イカの娘的なキャラクターに侵略されていることについても、気にするものなど誰も居ない。

彼らが見ているものは、前だけだった。

パン！！

乾いた音と共に、スターターから火薬の匂いが空气中に広がる。スターターと言えば、徒競走に付きものの道具であり、先程の乾いた音もまた、その例に漏れることはない。

「ヒスイ先輩iiiiiiii！！！！！！」

「ぶつちぎっちゃって下さい！！！！！！」

ルークとリオスの声が、今まさにスタートを切ったヒスイに投げかけられる。

リレーの第一走者は、ヒスイ、無敵の風紀委員兼シスコンのヒスイ・

ハーツである。

リレーの概要についての詳しい説明はいらないだろう。

楕円上のコースを、五人でバトンを繋いでタイムを競う。ごくごく一般的な、且つオーソドックスな体育祭のフィナーレを飾る競技である。

さてさて、第一走者のヒスイの走りはかなりものである。相手は二年生ながらも陸上部の短距離走選手なのだが、互角以上のスピードで渡り合っている。

「ていうか、なんでヒスイ先輩は弓道部にいるんだろう……」

「基本的に何でも出来る人なんだけどね……。」

「確か、弓道は子供の頃からずっとやってたらしいよ？　それが今に続いてるって……」

ルークとリオスの疑問に、フェイトがそう答える。

基本的に何でも出来るハイスペックなお方なのだが、何故に弓道部？という意見が度々あったものの、漸くそれに答えが出た感じである。

そして、コースを半周したところで、ヒスイの動きに変化が現れた。

「おにいちゃん！！！！　がんばって~~~~！！！！」

そう、ヒスイ・ハーツが溺愛する妹、コハクの応援がヒスイの眠れる力を完全に呼び覚ます。
シスコンパワー

「っ！！！」

瞬間、ヒスイの姿が消えたように思えた、いや、それくらいに急激な加速を掛けたのだ。

それはさながら、るろくに剣心で登場するキャラ、瀬田宋次郎が得意とする『縮地』の如き加速である。

「今あの人、妹の声援聞いてから、走り方変わったよね？！ ていうか、一瞬姿が消えたよね今！！！」

「うーん……今のヒスイ先輩なら『瞬天殺』とかリアルで出来るんじゃない無かるつか……………」

「元ネタ分かんない人も居るかもしれないから、その辺りにしておいた方がよいよ、ルーク？」

元ネタが分からない方、申し訳ない。要するに、もの凄く速い加速をしたって事です。

そして、その異常な加速によって、紅組の二年生ランナーに5メートル程の間を開けてヒスイは第二走者、ティアナにバトンを繋いだ。

「ティア……………！！！！ ガンバレー……………！！！」

「（る、ルーク……………ちゃんと応援してくれるんだ……………／／／／／）」

ルークの声援に、思わず顔が綻びそうになるティアナ。だが、此処で力を抜くわけにはいかない。ヒスイの作ってくれたマージンは大きい、次の相手も陸上部なのだ。気を抜いていれば一瞬でマージ

ンが吹き飛んでしまう。

「っ！！！！」

ティアナは、走ることに全神経を集中させる。体から無駄な力を抜き、もっとも最適なフォームで走ることが出来るように精神を沈め
「……………」

「…………ランスターさああああん！！！！！！ 僕たちを罵つてくださああああい！！！！！！」「…………」

「…………ツンデレ、ツンデレ、ツンデレ！！！！」「…………」

「…………あなたになら踏まれてもいいいいいい！！！！！！」「…………」

る事が出来なかった。

客席からの大声援によって、集中が乱されたのだ。というか、この学園の男子達はどうかしていると思う、いや女子も含めれば全校生徒だろうか。

「うっさいわね！！！！ 誰がツンデレよ！！！！！！ 変なことばっかり言っていると、張り倒すわよ！！！！！！？」

「是非、お願いします！！！！！！」

「いや、俺だから」

「張り倒すだけじゃなくて、蹴って下さい！！！！！！」

「縛ってもらっても結構です！！！！ 鞭も縄も、蝋燭も三角木馬も、

猿轡だつて準備は万端整つてます！！！！」

ティアナが走りながらも、ツツコミを入れると、変態達は力強くそう返してきた。約一名、準備が整いすぎていて怖い。

と、そうこうしながらもティアナはかなり良いペースで走っている。怒りが彼女の力の根源だとも言うのだろうか？

だが、相手も流石に陸上部の短距離選手。走ることのスペシャリストには勝てるはずもない。ヒスイの作ってくれたマージンが、残り2メートルになった辺りで、ティアナはリオスにバトンを繋いだ。

が、その瞬間、事件は起こった。

「リオスく~~~~ん！！！！ 頑張つて~~~~！！！」

そう、リオスの思い人、なのはの声援が彼の耳に届いてしまった。普段は、温厚且つ人当たりも良いナイスガイなリオス（女装が似合う）だが、なのはの事になると、途端にポンコツ性能にデチューンされてしまうのだ。

「な、な、なのはひゃん……………そ、そんなに僕のことを…………… / / / / /」

リオスは一瞬で耳まで真っ赤になり、走るスピードがガクンと落ちた。無論、敵がその隙を見逃すわけがない。

相手ランナー、一年生サッカー部で、MFとしてレギュラーとして活躍している……………名前が出てこないので山田君とする。

兎に角、その山田君がフニャフニャになってしまったリオスを華麗

に抜き去ってしまった。

「リイイイオオオスウウウウウ！！！！！！？ グラウンドで走りながらラブコメってんじゃないよ！！！！ ていうか、そのフニャフニャした走り方やめろ！！！！ なんか酔いそうになるから！！！！！」

「はっ！！？ ぼ、僕は一体…… ってしまった！！！！？」

ルークの声で何とかこっちの世界に戻ってこれたリオスだったが、遅すぎる。すでに、山田君との差は6メートルまでに開いてしまっていた。

「くっそおおお！！！！！」

改めて気合いを入れ直して走るも、挽回できるはずもない。いくらリオスでも、6メートルの差を一瞬で詰めることなど出来ない。

じわじわと追い上げはしたものの、最終的に4メートルにまで近づいたところで、第四走者である、フェイトにバトンを手渡した。

「やばい……これで負けたら確実にルークに磔にされちゃう……。ていうか、殺気が飛んできてるよ…… FFF団からも飛んできてるって……」

今すぐグラウンドから逃げたくなったりリオスだった。

さてさて、終わったことは置いておいて、今はフェイトの走りに注目すべきだろう。

流石はテニス部のエースだけあって、身体能力は申し分ない。無論、

バストサイズもだ。

「ハアハア……フェイトさん……堪らん……（；、）ハアハア」

「一回で良い、あの胸に包みたい」

「ピッタリした服着て欲しい……」

などなど、ティアナの時に引き続いて、変態達の勢いは留まることを知らない。

と、そこでもちろん黙っちゃいられないお方がいらっしやる事を忘れてはならない。

「コラアアアアア……！！　なにねーさんに色目使ってやがる……！！？　目玉に硫酸流し込んでやろうか……？　ああ……！！？」

言うまでもなく、我らがエロティック皇帝、ルーク閣下である。

アンカーである彼は、フェイトが来るのをスタート地点で待っているのだが、あまりにもフェイトに対する注目が集まってしまったので、それを何とか阻止しようとしている。

やり方が、脅し文句が非常に怖いのは、仕様である。

「引つ込め、シスコン……！！　俺たちのフェイトさんへの愛、弟である貴様なんぞに止められるものか……！！？」

「貴様らああ、我らが閣下に何たる暴言……！！　全員東京湾に沈めてくれるわああ……！！！！」

「閣下、戦闘の許可をお願いします……！！！！　我らに、あなたの誇

りを守らせて下さい！！！」

ルークに喧嘩を売ってくる、紅組の変態に対し、エロティック帝国軍の怒りに火が付いてしまった。

皇帝たるルークへの侮辱は、自身への侮辱。その固い絆で結ばれた部下達が、ルークに代わって戦おうとしてくれているのだ。

「許可する、敵は残らず殲滅させよ！！ 私の前に、屍を積み重ねるが良いわああああ！！！！！」

「「「「「Yes, Your Majesty！！！！」」」」」

ルークのその言葉で、観客席でも乱闘が始まってしまった。忘れてはいけない、今日この日のイベントが、『体育祭』であることを。

「る、ルークウ！！！」

「よしきた！！！」

そして、乱闘が開始されたのと同時に、フェイトからバトンが渡る。姉弟だからこそその息の合った……………

モニユン…

「ひゃう！！？」

「あ」

がしかし、ルークが手にしたのは、バトンではなかった。

彼の手には、棒状の金属で出来た固いバトンではなく……………

「る、ルーク……………／／／／え、エッチなのは仕方ないと思うけど、競技中にこんな……………／／／／」

「……………」

ルークがバトンの代わりにつかんだものそれは……………

フェイトの『撓わに実った胸』だった。

「あ、あのねルーク？ 触りたいなら、いつでも言ってくれば良いんだけど……………出来れば家に帰ってからの方が……………嬉しいな……………色々準備もあることだし……………シャワーとか、赤mamシとか、ウナギとか、液キャベとか」

「え、いや……………これはちが……………」

ちなみに、液キャベは精力剤ではない。と、ルークは突っ込みたくなったが、問題はそこではなかった。

全校生徒の目の前で、姉の、フェイトの、大きな、胸を、鷲掴みにしてしまったのだ。

ルークの脳裏には、考え得る最悪の事態と、生まれてからの出来事が走馬燈のように流れていた。

「お先」

そうこうしている間に、予想通りというか、どうやったのかは分からないがリレーに参加していたソラがバトンを手にはささと走って

行ってしまった。

途中でフェイトがリードを取り戻したのだが、それもすっかり無駄になってしまった。

というか、フェイトもルークも、胸を掴み、掴まれた状態から全く動かない。

無論、そんな光景を見ていれば、紅組の変態達も、円卓の馬鹿達、並びにFFF団が黙っているはずもない。

「『敵はルーク、ルーク・ハラウンなり』いいいいいいいい！！！！！！」

先程まで血を洗うような戦闘を観客席で繰り広げていた変態達が、大挙してルークを滅しようと襲いかかってきた。

ルーク、二週連続に渡って同じ、いやそれ以上の罰ゲームを食らうことになったようだ。

「てめええ！！！！なんて羨まけしからん！！！！」

「言え！！！！　どんな……どんな感触だった！！！！？」

「マシユマロか！！！！？　それとも低反発枕か！！！！？」

「そんなことはどうでも良い……。このものは異端審問会に於ける、血の掟を二週連続で破った……。最早、生ぬるい刑では割に合わない……」

等々、羨ましさ妬ましさに加えて、FFF団からの死の宣告。すて

きな贈り物が、リレーの勝利による美酒の代わりにルークに振る舞われることになった。

その日、ルークは星になった。

体育祭の閉会式が終わり、結果が発表された。

もう、途中から本当に体育祭なのかどうかも怪しいものだったが、得点計算だけはしっかりしていたらしい。

エロティック帝国軍：525点

共和国軍（紅組）：515点

最後辺りは、完全に押されてしまい、リレーでは最早競技になっ
ていなかった。ルーク達の勝利は危ぶまれていたのだが、序盤で
の貯金が大いに役立ってくれた形で、エロティック帝国軍の勝利と
なった。

学年別の優勝も、ルーク達1年3組が勝ち取り、今晚は豪華ディナ
ーフルコースである。

それに加え、組別優勝の賞品である豪華旅行もある。明日からの三
連休で、南の島でのパラダイスがエロティック帝国軍の全員に用意
されることになった。

「ははは……最後らへんはなんか滅茶苦茶でしたけど、結構楽しかった。今日はありがとな」

「ソラがご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありませんでした……」

ソラとエステルは、フェイト達にそう言って、二人仲良く帰って行った。

が、途中で、どこからともなく黒服の方達が現れて……

「「「若頭……！……！ お勤め、ご苦労様です……！……！ お迎えに上がりました……！……！」」」

「おー、サンクスサンクス。よし、さっさと帰ってみんなで飯にしますかね」

「作るの私なんだけど……」

「「「「姐さん、よろしくお願いしやす……！……！」」」」

というような、何だがアットホームでアットホームでないような、奇妙な絵が展開されていた。

まあ、微笑ましい絵だったので、ツツコム輩は居なかったが。

でもって、ほぼ全校生徒の男子達による異端審問会の罰を受けたルークはというと……

「おい、ルーク？」

「ルーク……？ 生きてる？」

「ルークう…… 大丈夫？」

リオス、ティアナ、フェイトが心配そうに声を掛ける先に、ボコボコにされて全身包帯グルグル巻き（本日二回目）になったルークの姿があった。

異端審問会にて、どのくらい恐ろしい目にあったかは定かではないが、ルークは一向に目を覚まさなかった。

「保健室に運ぼうか？ このままここで伸びたままじゃ、風邪引いちゃうよ」

気を利かせたリオスが、ルークを保健室に連れて行くという提案をする。どのみち、今日はもう授業もないので、家に帰るもよし、打ち上げを開いてもよし、自由な時間なのだ。

「あ、リオス。肩のそっち持って？ 私はこっちを……」

「あ、はい。」

というわけで、リオスとフェイトがルークを支えるような形で立ち上がらせる。完全に気を失っているようで、ルークはピクリとも動かない。

拷問は、かなりの熾烈を極めたのだろう。

ちなみに、ルークをボコボコにした輩は、ヒスイ率いる風紀委員に

捕縛され今現在、委員会室にて折檻を受けているはずだ。
理由はどうかあれ、これは流石にやり過ぎである。

「にやはは……ルーク君、疲れも一緒に出ちゃってるのかもしれないね」

「今日ははっちゃけてましたからね……」

なのはがそう言うと、ティアナが苦笑混じりで同意する。エロティック大統領、いや皇帝として今日のルークは勝利とエロのために全開で戦っていたのだ。

その疲れが、ダメージと同時に出てきてしまい、パワーダウンしてしまったのかもしれない。

「う……んん……？」

と、その時だった。かすかに、ルークの目が開かれ、意識を取り戻した。

「ルーク？ 大丈夫？」

フェイトは、優しくルークにそう問いかける。ルークはどこか焦点のずれた眼をフェイトに向け、数秒見つめる。
どこことなく、様子がおかしい。リオスとフェイトはそう感じた。

そして、その違和感は現実のものとなってリオス達を驚愕させるのだった。

「ああ……お姉ちゃんだあ」

一同「へ？」

ルークの口から発せられた、あり得ない一言に、その場にいた全員
の時間が止まってしまった。

ルークの様子が、明らかにおかしい。普段よりどこか幼いという
か、丸くなっているというか、兎に角様子がおかしい。

「お姉ちゃん！！」

「きゃ?!」

「うわつと!?!」

様子のおかしなルークは、トロンとした目をしながら、フェイトに
向かってダイブした。

というか、彼女の胸に抱きついたのだ。

リオスもフェイトも、思わぬ事態に体勢を崩し、フェイトがルーク
を受け止めるような体勢になる。

「る、ルーク!?!?!?!」

フェイトは、いきなり且つ、最高においしいシュチュエーションに
若干の興奮を覚えながら、ルークを見やる。

彼は、まるで子供のようにフェイトに甘えて来るではないか。なん
とけしからん。

「お姉ちゃん……大好き……」

そして、ルークのこの一言がトドメだった。

何をどうしてこうなったのか、ルークはフェイトにただ甘えの状態

になり、まるで子供の頃に戻ったようにも見える。

そんな、懐かしくもあり、フェイトにとっては可愛い弟であるルークにこれほどまでに甘えられれば……………

フェイトの状態 キャー ム ＊（ ム ） ＊ （ ム ）
キャー

となってしまうのは当たり前である。

「ね、ねえこれって……………」

「う、うん……………もしかすると……………」

なのはが呟くと、リオスと同じ考えのようで、変な汗を掻きながら頷く。その間も、ルークのフェイトに対する甘えぶりは留まることを知らない。

「ねーねー、お姉ちゃん……………今日、一緒のお布団で寝よう?」（上目遣い＋小首を傾げる形で）

「グハツ!!!!??」

フェイトにとつての、最大級のご馳走をルークは惜しげもなく叩き付けやがりました。

フェイトは、鼻血を出しながら、どこか満足そうな表情を浮かべて昇天してしまった。

「ふえ、フェイトさんが……………」

「もの凄く幸せそうな顔で気絶してるね……………」

「しかも、ルークのことは抱きしめたままという……………」

リオス、なのは、ティアナは近年まれ見る、いや正しくは懐かしい光景を見るような感覚を覚えた。

そうだ、これは昔の、フェイトにべったりだった頃のルークそのもののなのだから。

「これは確定だね」

「ですね……………。頭は子供、体は大人……………まさに逆コナン君状態……………」

「拷問の結果が幼児退行って……………。一体何されたんだか……………
…?」

そう、ルークは信じられないことに、精神が子供の頃に、フェイトお姉ちゃん大好き、な時代のそれへと逆行してしまったようだ。それ故に、フェイトに対して此処までハッキリと好意を全開して甘えているのだろう。

「どうすんのよこれ……………?」

「明日から旅行なのに……………ねえ?」

「あ、あははは……………はあ……………」

新しいトラブルの予感に、リオス達は溜め息を吐くしかなかった。

第二十四話 終戦とお姉ちゃん大好きっ子（後書き）

ルーク「おねえちゃん」

フェイト「るーくう」

スリスリ、（＊・）（・＊）ノノスリスリ

F20C「うわぁ……………」

はやて「これはひどい」

リオス「どうしてこうなった」

F20C「次回から海外旅行編だつてのに……………。ていうか、ルークは一体何されたんだか……………」

はやて「でも、これはこれで中々に面白い……………」

リオス「言ってる場合じゃないですよ……………何とかしてあげないと、このままじゃルークが……………いろんな意味で危ない人になっちゃいますって」

F20C「と、まあ……………意外すぎる展開かも知れませんが、次回から海外旅行編でございます。幼児退行してしまったルークはどうなってしまうのか、こつこ期待ww」

ルーク「お姉ちゃん……………柔らかい……………」

フェイト「こ、これだよ……これなんだ……私が忘れかけてた感覚は……はにゆう」

一同「駄目だこりゃ」

次回から、セカンドシーズンに入りますので、心機一転。OPとEDを変更いたします。

以前、皆様の意見を伺って決定すると言っておりましたので、OPは皆様からのアイデアで決めさせていただきましたw

OP【シンフォニック・ラブ】 song by 橋本みゆき
PCゲーム「ましる色シンフォニー」より

ED【Iris】 song by 佐倉 紗織
アルバム曲

バルディッシュ先生、アイデアありがとうございました!!

次回からもどうぞお楽しみにw

第二十五話 デフォルメルークが行く、ぶらり南の島（前書き）

というわけで、今回からセカンドシーズンでございます。前回の終わりで、皇帝陛下が幼児化してしまったので、今回からはルークの外見は基本的にデフォルメキャラ、具体的には2頭身な感じのキャラでイメージして下さいw

灼眼のシナたんとか、とある魔術の禁書目録たんでもオツケーですw

さてさて、フェイトさん&なのはさんのライブ、そして中の人ネタ、理不尽な金属探知機など、盛りだくさんな内容ですので、お楽しみ下さいw

セカンドシーズンOPテーマ

『シンフォニック・ラブ』

song by

橋本みゆき

PCゲーム「ましろ色シンフォニー」より

第二十五話 デフォルメルークが行く、ぶらり南の島

体育祭の翌日、今日から世間は三連休に入る。無論、学生であるルーク達もそれから漏れることはない。

が、しかし、彼らは少しばかり豪華な連休を味わうことになる。日本ではなく、海外という、箱庭の外で。

「で……………集合したわけなんやけど……………」

「もう、初っぱなから突っ込みたいことが多すぎてどこから突っ込めばいいのか分からないね……………」

体育祭の商品、南の島で2泊三日旅行の集合場所である聖祥学園前。数台のバスが停車しており、車内ではテンションが若干上がり気味の輩が、思い思いに話に花を咲かせていた。

その中であって、はやて・なのは・ティアナ・アイリスは朝っぱらからゲツソリしていた。加えて、目の前の意味不明な光景に頭を抱えていた。

「おねーちゃん、いまからどこいくの？」

「旅行だよ？ とつても楽しいところだから、ルークもきつと気に入ると思うよ？」

「おれ、おねーちゃんと一緒ならどこでも楽しいな」

「はふう〜 やばいよお〜……ルークが……ルークが可愛すぎるよお〜」

ほんわかオーラをまき散らしながらフェイトと話すルーク（幼児化）と、彼の言葉に悶えながらも喜びまくっているフェイト。若干、目が星になっていることから、ものの見事にハートキャッチされてしまっているらしい。

加えて……

「うう………なんで、こんなに体が重いんだろう……？」

彼らと同じタイミングで集合場所にきたリオス、しかも、彼の目には隈ができており足取りも覚束ない。というか、一見ただで異常な疲労の仕方をしている。

一体、一晩の内にリオスに何があったのか？

「り、リオス君は一体どうしちゃったの？ なんだかもの凄くやつれてるけど……」

「あはは………ちょ、ちょっと………昨日色々ありまして………」

なのはの問いに、リオスは無理矢理笑顔を作りながら答える。

「幼児化したルークと、フェイトさんをそのままにしておいたら、何が起こってもおかしくなくと思って……。昨日、ルークの家に泊まったんです………」

「ああ………なんか納得………」

流石はフェイト、すごい信頼のされ方である。はやては、リオスのその台詞だけで何があったのかを悟ったようで、黙って懷から栄養剤とリポビタンを手渡した。

「何もなかったんですけど………ルークのフェイトさんへのただ甘えと、フェイトさんのただ甘お姉ちゃんっぷりを、一晚中見せつけられてしまつて………この有様というわけです………あ、はやてさん、どうも………」

リオスは疲れた体に鞭打つように、はやてから手渡されたリポビタンを一気に飲み干す。

何もないよりかは、気持ちの面では幾分か楽になるだろう。

「にやはは………リオス君、お疲れ様だったんだね………」

「あんた、なんて友達思いな奴なのよ………」

「これが、愛の力なんですネ………ポッ／／／／」

「アイリス!!? 違うからね??! そっち系の話は全くゼロだから!!! ていうか、いい加減このネタやめない!!?」

なのは、ティアナ、アイリスからの労いの言葉（約一名おかしいが）がリオスに掛けられる。お人好しも此処まで来れば立派なものである。

リオスを一言で表せば、善人。この一言に尽きる。

「で、ルークは相も変わらずフェイトちゃんラブかいな………」

「微笑ましいって言うか、ちょっと見てると照れちゃうねこれ……」

「おねーちゃん」

「ルークウ」

二人の今の状態 スリスリ、（＊　・　・　）（　・　・　＊）ノノス
リスリ

はやてとなのはは、いつまでもラブラブ（エロゲーなどで見られるそれとは別のやつ）しているルークとフェイトを見ながら、溜息を吐きながらも、やれやれという感じで苦笑いを浮かべる。

「まあ、乗りかかった船や。今日から三日間は、うちらでなんとかルークとフェイトちゃんの面倒見るで。幸い、先生に無理言うて部屋をまとめてもらえるように手配だけはしといたし」

「おお、なんだかはやてさんが、『無駄に』格好いい」

「リオス？　その無駄に、の意味についてじっくり話し合おか？」

リオスの余計な一言に釘を刺しつつ、当面の方針を固めるはやて。面倒を見る対象にルークだけでなくフェイトまで入っている理由は………説明するまでもないだろう。

というか、今までのフェイトの行動と、現在の幼児化したルークを溺愛するフェイトを野放しにしておけば、どんな化学反応が起こるか分かったものではない。

はやては、最悪を想定しつつ打てる手を打っていたまでだ。この狸、かなり指揮官向きである。

「それじゃ、そろそろ出発の時間だし、皆バスに乗ろうか？」

「そうですね。もう殆どの人が乗ってるみたいですし」

なのはとティアナの言うとおり、出発時間が近づいてきている。空港までの時間を考えれば、さっさと乗車するのが賢い選択だ。

一行は、荷物をバスの倉庫に詰めてもらい、バスに乗り込んだのだった。

さてさて、バスと言えば何が付き物だろうか？ 古今東西、様々な地域によって旅行中のバス内でテンションを上げるために、もつともポピュラーと思われる出し物。

そう、それは

『カラオケ』である。

なのはによる、バス内での歌声の披露に、主に男どもが歓喜の声と同時に、彼女をリスペクトしまくる

円卓の馬鹿達「「ゆかりくん!!!!!!!!!!!! 世界一可愛いよ!!!」」

今現在、バスの車内はなのはオンステージとなってしまうている。実在する王国のお姫様の名前が出ているが気にしたら負けだろう。円卓の馬鹿達が、皆お揃いの法被を着て、軍事演習さながらの息のあった相の手を披露していることも同じくだ。

「……テンション高いなあ…さすがはゆかり王国……」

「まあ、ライブではよくある光景や……」

リオスのツツコミに、はやてが冷静に答える。なのはは意外とノリノリで、絶好調の様子でマイク片手に熱唱している。彼女、意外に歌手なのかも知れない。

でもって、我らが皇帝陛下（幼児）と皆のお姉さん、フェイトさんはと言うと……

「くう……」

「る、ルークが……ルークが……私の膝枕で寝てくれてる……ふみゅう……」

こっちはこっちでご満悦状態だった。

ルークはバスに乗って10分ほどで寝てしまった。どうやら、体内時計が子供のそれと同じレベルになってしまっているらしい。どれだけ面倒な体の作りをしているのだろうか。

さて、ここで話しておくべき事がある。ずばり、FFF団である。普段なら、フェイトの膝枕で寝るなど、彼らの血の掟の前では極刑に相当する行為なのだ。

しかし、今日に限ってはルークに手を出すものは居ない。いや、皆堪えているのだ。

「諸君、今日は……今回は我慢するのだ……。皇帝陛下がああなつてしまわれた責任は、我らにある……。堪えるのだ!!」

「仕方ないな……。ここで閣下に手を出そうものなら、フェイト先輩のお叱りを受けるのは確実……」

「まあ、今回くらいは……。だがしかし……。くう!!」

FFF団もルークの幼児化には一応の責任を感じているらしく、今回に限ってはルークとフェイトのイチャイチャを容認せざるを得ないのだ。

彼らとしても、やって良いことと悪いことの分別は付くらしい。その冷静さを常日頃から発揮して欲しいと願ってしまうリオスだったが。

「だから今は……」

「ああ、同士よ……」

故に、今彼らに出来ることは一つだけだった。

FFF団「「ゆかり~~~~ん!!!!!!」
「じゃなかった、なのはさああああん!!!!!!」」

そう、ゆかり王国の姫君の歌声に癒され、彼女に声援を送ること。彼らのミッションはただそれだけである。

「みんな〜！盛り上がってるかな〜！！？」

馬鹿一同「「「姫さまああああああああ！！！！！！」
！」「」」

「ていうか、なのはさん歌上手いなあ……………」

「まあ、中の人も上手いなあ……………」

はやてとリオスもまた、テンションを上げるまでには行かずとも、
なのはの歌声によって、バス酔いという天敵と戦っていた。

二人「「うつぶ…………ぎばちわるい……………」」

変なところで気が合う二人である。

が、皆さんはお忘れではないだろうか？この車内にはまだもう一人
歌姫が、紅白にも出場したあのお方……………が中の人なキャラの、あ
のお姉さんの存在を……………

そう、奈々様こと……………フェイトさんである。

馬鹿その？「奈々様あああああああ！！！！！」

馬鹿その？「ヘッドオオオオオオオオ！！！！！！！」

馬鹿達「「「「ヘッド！！！！　ヘッド！！！！」」」」

円卓の馬鹿達は、なのはからマイクが回ってきたので、戸惑いながらも歌い始めたフェイトさんの歌声にバスが壊れんばかりのテンションでフィーバーしていた。

中には、ライブでよく見られるサイリウムなどを持参していたのか、それを振り回している輩も居る。

何故荷物にそれをチヨイスしたのかいまいち判断に迷うが、まあ、盛り上がるための必須の道具のようなもので仕方ないかも知れない。

「あはは　おねーちゃんすごい」

フェイトのライブさながらの歌声に、幼児化したルークも目を覚ました様子で喜んでいた。

それを見たフェイトもまた、さらにテンションを上げていき、当初の戸惑ったような感じが吹き飛び、本物の歌手のような風貌さえ感じられる歌声を披露する。

普段のポワポワした雰囲気は形を潜め、フェイトは歌手になっていく。

その姿はいつそ、神々しくもあり、まるで別次元の出来事かのように、見る者全ての心を掴んでいく。

「みんな、ありがとーーーー！！！！」

一同「「「うおおおおおおおお！！！！！！！！」」」

「

その一言で、観客達はスタンディングオベーション……とまでは流石にバスでは無理なので控えたが、それくらいの盛り上がりを見せた。

やはり、フェイトさん、延いては奈々様の力とは凄まじいものである。しかし、堀江由衣派である作者はブレな……ゲフンゲフン！！！！

馬鹿その？「あれ……？何でだろ……気がついたら涙が……」

その？「お、俺もだ……これが……歌の力だ……？」

その？「フェイトさんとなのはさんがデュエットで歌うなんて……なんか感動的だ……」

その？「生きてて良かった……」

なんと、フェイトとなのはによる、デュエットという貴重なシーンまで公開したのだ。

車内にいた、一同、運転手、歌に聴き惚れていたバスガイドのお姉さん、皆が涙を流していた。そう、『感動』という涙を……

バスの中にあつて、そこはさながら武道館と化し、リオス（車酔いやルーク（幼児化）達の心を打った。

二人の歌姫の存在により、一行の旅は暖かな祝福を受けることになったのだった……………

バスに乗って、空港に着けば、次は飛行機である。

ちなみに、パスポートはどうするの？というツツコミは無しでお願いしたい。そこはそこ、このお話の中では、大抵のことは何とかなってしまうのだ。

ルーク達は、荷物を預け、自分たちの乗るべき飛行機に乗り込む前に金属探知機のゲートを潜ることになる。

その？ ルーク&フェイトの場合

「あ、あのお客様？ 出来れば、お一人ずつでお願いしたいのですが……………」

「むう……………おねーちゃんと一緒になきゃヤダ」

「ルーク……………！！！！ うん、そうだね、金属探知機なんかで、私たちの仲は裂けないもんね……………」

「いえ、そういうことではなく……………」

ルークと手を繋ぎながらゲートを潜ろうとしたフェイト達は、当然のことながら係員お姉さんに止められてしまう。

グズるルークに、彼の言葉に感動のあまりさらに強く抱きしめるフ
ェイト。もう何が何だが分からない状態である。

ちなみであるが、今話からのルークは精神年齢の幼児化に伴い、
見た目はデフォルメ化された感じになっているので、2頭身キャラ、
もしくは灼眼のシナタン、とある魔術の禁書目録たんのようなチ
ビキャラ化したルークをご想像下さい。

「すみません、この子を抱っこする形で潜っても良いですか？」

「いえその……………出来ればお一人ずつで……………」

「ホンマ、すみません!!!! すぐに通らせますんで!!!!!!」

強硬手段に出るフェイトを必死に止めながら、係員のお姉さんに頭
を下げるはやてとリオスの姿がそこにはあった。

その？ ヒスイ・ハーツの場合

ブーーーー!!!! ブーーーー!!!!!!

「む？」

「申し訳ありません、お客様。金属製のお荷物はこちらにお預け願
いたいのですが……………」

ヒスイがゲートを潜った瞬間、ブザーが鳴り響いた。どうやら、何
か金属類を持ってきていたらしい。

係員のお姉さんが、ヒスイに荷物のチェックをお願いしてくる。

「ふむ……これくらいなのだが……」

そう言いながら、ヒスイは全身から様々な者を取り出した。

背中：鋼鉄製で出来た額縁に入ったコハクの写真

服の袖：コハクに持たせるためのスタンガン×2

ズボンのポケット：レーション多数

ズボンの裾：懐中電灯・方位磁石

「サバイバルにでも行く気なんか、おのれは……!!?」

スパアアアン……!!

ヒスイの異常な持ち物の……というか隠し持っていた品々に、はやてはハリセン片手にツツコミを入れた。

「ていうか、なんでレーション……!? 旅行行くのに非常食持つて行く奴初めて見たわ……!!」

「すごいや……この額縁、合金素材で出来てる……」

「よっぽど大切なんでしょうね……大事にするベクトルを間違っている気がしないでもないけど……」

はやてのツツコミに、リオス・ティアナが続く。まあ、ヒスイのシ

スコンぶりを考えれば当然なのかも知れないが、旅行に行くには確かに不釣り合いな品である。

「申し訳ありません、お客様……。こちらの品は、一旦こちらでお預かりさせていただきます」

「なん……………だと……………？」

係員のお姉さんの言葉に、ヒスイはその場に崩れ落ちるのだった。

その？ リオス・コーネルドの場合

オオオオオオオオオオルハイル・ブリタアアニアアアアアアア
!!!!!!!!!!!!!!

「え?!」

リオスがゲートを潜った瞬間、どこかの国の皇帝の若本ボイスでの声が鳴り響いた。

「なんでギアス!!? ていうか、どんな警報音なのさ!!!?!」

リオスが身に覚えのない反逆に片足を突っ込みそうになっていると、またしても係員のお姉さんがやってくる。

金属類の類の他に、なにか特殊な者が反応すると、先程のような警報音が鳴るのだろうか？

「申し訳ありません、お客様。金属製のお荷物、若しくは『女装の

性癖』をお持ちではございませんか？」

「ありませんから！！！！ ていうか、女装の性癖持ってたから、あんな警報音になったの！！？ なんだか納得できないんだけど！！！！？」

流石は最新技術を使つてある金属やその他のあらゆるモノを感知するゲートである。その精度はかなりのモノである。

「もし、女装の性癖をお持ちの場合は、あちらの『女装癖保有者様専用ゲート』から今一度のチェックをお願いしたいのですが……」

「世界の……いや、作者の悪意が見えるようだよ……」

その？ アイリス・オルセルン&ティアナ・ランスターの場合

「さ、私たちもさっさと潜っちゃいましょう」

「そうですね。金属の類もありませんし……大丈夫とは思いますが……」

そう言いながら、次にゲートを潜つたのはティアナとアイリスだった。まあ、この二人なら万が一にも、ブザーが鳴るようなことは……

みっ みっ みらくる みっ くる ん ん ん みっ みっ みらくる みっ くる

んるん

「え？」

アイリスが潜った瞬間、どこかで聞いたような、というか明らかにアイリスの声にそっくりなボイスの歌が流れ……

『嘘だっ！！！！！！！！』

「きゃあ！！？」

ティアナが潜った瞬間、これまた彼女の声と似たボイスで、狂気じみた台詞が流れる。

二人「な、なんなの（ですか）……？！」「

「ああ、これは確実に中の人ネタやな……ていうか、なんちゅうチヨイスや……」

ティアナとアイリスの戸惑いの声に、はやては呆れながらそう言った。

その？ 八神はやての場合

「まあ、うちみたいな善良な人間に限っては、なにもない……」

侵略！侵略！侵略！侵略！侵略！侵略！イカ娘！

「なんでイカ娘！！！！？　うちのどこが侵略されてる言っんや！！？」

流石は芸人魂を持つ女、八神はやてである。ブザーまでもが空気を読んだらしい。

そして、本日多忙になってしまっている係員のお姉さんが三度やって来て…………

「申し訳ありませんお客様。金属製品、または……………侵略されておられたりは……………？」

「されとらんわ！！！！　ていうか、うちがブザーに引かかる理由、全然無いやなイカ！！！！……………あ……………」

どうやら、はやては知らない間に侵略されていたらしい。

「ちゃうで！！？　これは侵略とかやのうて、空気を読んだだけでゲソ！！！！……………あ……………」

「侵略されていらっしやるお客様は、あちらの『िकासミゲート』からチェックし直しということをお願いしたいのですが……………」

「い、一体何なんや……………िकासミゲートって……………？」

はやては、侵略されていたことを認め、とぼとぼとिकासミゲートの方に歩いて行った。

久しぶりにスポットライトを浴びたと思えばこの扱い、はやては世界をぶっ潰してやるうかと思案してしまっていた。

結局……

「まともにゲートクリア出来たんは、なのはちゃんだけかいな……」

「にやはは……。な、何でだろうね……？」

あの金属やその他の類のモノを探知するゲートを問題なく潜れたのは、なのはただ一人だけだった。

これぞ、人徳が成せる技だとも言うのか。それとも、事前に作者を脅してこうした……いえ、何でもありません。

「おねーちゃん、飛行機まだ動かないの？」

「もうすぐだつて。大丈夫、すぐにお空の上だからねー？」

「うん　おねーちゃん」

「あふう……／＼／＼／＼　もう私……このまま一生を飛行機で過ごしたいなあ……」

と、フェイトが何やら危ない発言をし始めているが、はやて達にはすでにツツコム元気すら残ってはいない。

現地に着く前から、此处まで疲労してしまうなどと誰が予想できただろうか？

「と、兎に角や……！　あと数時間もすれば、うちのユートピアが目の前に現れるんや……！　みんな、それまでに体力を回復のために英気を養うんや……！」

一同「……お、お………」

はやてが無理矢理にテンションを上げたが、リオスやティアナ達は、それにすら付いていけないようであった。

こうして、一同は空路にて目的地である南の島へ……

そこで彼らを待っている、地獄と天国、悪魔と天使。二面性のある豪華旅行の真の意味を……この時の彼らは知る由もなかった。

「おねーちゃん」

「ルークウ」

このアホの子二人は、どんな状況にあってもこのスタンスが崩れそうにないのが怖い。

そんな作者の不安も一緒に乗せながら、飛行機は空に舞い上がるのだった……

第二十五話 デフォルメルークが行く、ぶらり南の島（後書き）

リオス「あの金属探知機、狙ってるとしか思えないって！！！！」

はやて「うちなんてイカ娘やで！！？ 侵略されてるんやで！！？」

F20C「いいじゃないか、出番が増えますよ？」

はやて「もう少しまともな増やし方を希望するわ……………」

F20C「さてさて、次回はつと……………南の島に着いてからのお話になりますね。」

リオス「ていうか、ルークはいつまで、デフォルメキャラ&幼児化のままなの？」

F20C「うん……………フェイトさん、若しくは読者様のご希望次第というか……………」

はやて「一生あのままフラグやな、それは……………」

リオス「ちょっと可哀想になってきたよ……………」

セカンドシーズンEDテーマ

『Iris』 song by 佐倉紗織

第二十六話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？（前書き）

さてさて、南の島に来たからと言って私が普通にバカンスさせるわけじゃないです。

きっちりと、笑いの場にさせていただきますとも。

今回から、今まで出せなかった原作キャラをどんどん出していく予定でございます。もしかすると、他作品からも……………

加えて、出来ればですが、以前から出演のご希望があつた方などもゲストで出演させることが出来れば……………なども考えています。確実にとは言えませんがw

さて、絶対に笑ってはいけない南の島、ルールは某ガキの使いと一緒です。笑えばアウト、それだけでございます。すこし、皇帝陛下の出番が少なくなってしまうますが、その分準主役であるリオス君達にも頑張ってもらいますねwww

第二十六話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？

Perhaps I know best why it is
man alone who laughs; he alone
suffers so deeply that he had
to invent laughter.

なぜ人間だけが笑うのか、それはたぶん、人間だけがあまりに深く
苦しむので、笑いを発明する必要があったのだ。

フリードリヒ・ヴィル

ヘルム・ニーチエ

人間というモノは、感情に支配される生き物であり、同時に感情を
持つことを許された生き物だ。笑ったり、泣いたり、怒ったり、喜
んだり。おおよそ、喜怒哀楽という感情によって、人はコミュニ
ケーションに強弱、アクセントをつけることを知っている。

では、仮にこのうちの一つ【笑い】を強制的に、封じたならば人は
どうなってしまうのか？

この企画は、それを検証し、読者様方に愉快的笑いをお届けするモ
ノである。

「着いたでえええ！！！！！ ザ・南の島！！！！！」

空港に到着し、荷物を受け取って外に出る。そして、その一番乗りを果たした我らが生徒会長の八神はやてが口にした言葉はそれだった。

「はやてさん…………アロハシャツまで持参してきたんだ…………」

「にやはは…………この旅行を一番楽しみにしてたのは、はやてちゃんだろうしね…………仕方ない…………のかな？」

そのテンションマックスなはやてを見て、リオスとなのはが苦笑混じりにそう呟く。さらにその後ろからは、ヒスイ・ティアナ・アイリスが続いて出てくる。
でもって最後に…………

「にゅう…………おねーちゃん…………お風呂…………」

「はいはい、ホテルに着いたら入ろうね」

デフォルメ化されたルークと手を繋ぎながら歩くフェイトさんがやってきた。その表情は先週に引き続き、デフォルメルークの甘えっぷりに完全に心を奪われてしまっている。
悦に浸っていると言っても良いだろう。

「取り敢えず、ホテルに着いたらルークをベッドに押し込んで寝かせちゃいましょう。でもって、フェイトさんと二人にしないように」

「にやはは……そ、そうするしかなさそうだね……」

リオスとなのはの気苦労は増えていくばかりであった。

「ってあれ？」

と、その時だった。ティアナが何かに気がつく。頻りに周囲を見回して、何かを探しているようなのだが……？

「どうしたんですか？ ティアナさん？」

「うん……。他の連中……クラスの子達とか、先輩達の姿が見えないなって……」

「ふむ……そういえば……」

ティアナがそう言うと同時に、アイリスとヒスイも同じくして周囲を見回す。が、ティアナの言うとおり、周囲には引率の先生も、エロティック帝国軍の兵士……白組所属だった生徒達の姿はない。

というか、この空港の入り口には、ルーク・フェイト・リオス・なのは・ティアナ・アイリス・ヒスイ・はやて以外の聖祥高校の生徒が一人も居ないではないか。

「はやてさん、これって……」

「うん……そこはかたなく嫌な予感しかせえへんな……」

「おねーちゃん、ジュース飲みたい」

「ダゝメ。さつき飲んだばかりだよ？　夜、ご飯食べられなくなっちゃうかも知れないから、ね？」

「むう……」

誰か、このアホの子二人、ルークとフェイトさんを何とかして下さいと、はやてとリオスは天を仰いでそう願った。かなり強めに……

「でも、どうします？　これってどう考えてもおかしいですよ。さつきまで乗ってた飛行機はみんな同じなのに……」

「ですよ……。みんながみんな居なくなるなんて……ちょっとしたホラーみたいですし……」

「電車じゃないんだし、乗り換え間違いとかはないでしょうし……。それ以前に、ここまで直通だったしね」

リオス、アイリス、ティアナの言うとおりである。これは明らかにおかしい。先程まで居た人間が、それも大勢が纏まって消えるなどあり得ないことだ。

若干の気味悪さに、女性陣達は不安そうな顔になる。

と、その時だった。

天の声『あー、あー……。テスト。ええーと、聖祥学園の、ルーク君、リオス君、フェイトさん、なのはさん、ティアナさん、アイリスさん、ヒスイさん、狸。あてんしょんぷりーず』

「ん？」

「この放送は？」

「ていうか、なんでうちだけ狸呼ばわりなん！！？ 他のみんなは普通に名前呼びやのに！！！」

突如として空港内に響く、日本語の放送。しかも、その放送はルーク達の名前を呼んで鑄るではないか。

他の連中が居なくなっただけに加えての、この放送にリオス達が不審に思いながらも耳を傾ける。

天の声『え〜とですね、取り敢えず、南の島にようこそ。早速なんですけど、今から皆さんに殺し合いw……………ちよつと失礼。……………』

……… ちょ、エステル、これ台本間違ってる！！！！青い方じゃなくて、赤い方持つてこいって言ったじゃん！！！！」

『 あわわ！！！？ ご、ごめん！！！！ ソラ！！ ええと、こつちがバルロワイヤルで、こつちが……………』

リオス達「……………し、しまらねえええええ……………」

突然の台詞、いや台本間違いに加えて、放送の要所要所から知っている奴の名前が聞こえてきた。

ていうか、もろにソラとエステルである。

「ええと……………ソラにエステル？ なにやってんのさ？」

天の声『いやね？ こちとら優雅な三連休を過ごすつもりだったんですけど、いきなり作者から仕事が飛んできたもんで……………。』

天の声その？『私たちもビックリしてたんですけど、気がついたらここに…………』

リオスが放送が聞こえてくるマイクに向かって声を掛けてみると、そんな返事が返ってきた。どうやら、彼らも作者の気まぐれに付き合わされることになった被害者というわけだ。

「他のみんなはどこに行ったの？ ていうか、これって一体どういうことなの？」

続いて、ティアナがそう尋ねる。わけの分からない状態にあってか、ティアナの語気が若干強い。

その問いに対し、天の声こと、ソラはこう答えた。

天の声『他の皆さんは、これから始まるイベントのエキストラとか、係員になってもらうとかで別の場所にいらっしやいますよ。というか、皆さん以外の全員、今日の旅行の本当の意味を知っていたらいいです』

「てことは何？？！ 僕たち嵌められたってわけ？？！」

天の声『そうらしいッスね』

どうやら、此処まで一緒だった連中が急になくなったのは、最初から織り込み済みだったらしい。リオスの台詞を肯定した天の声には若干の哀れみさえ含まれていた。

「イベントつちゅうのはなんなんや？」

天の声『ええ、それを今から説明しますね。ええと……………台本による

と……………」

天の声その？『ソラ、3ページ目の5行目からだよ』

何というか、授業中に居眠りをしていたところで、教科書を読めと言われたが、読む場所が分からず、フラグ構築中の女の子に場所を教えてもらうという王道的なやり取りがマイクの向こう側で発生していた。

天の声『今日から2泊三日の旅行なのですが、皆さんはその間、【絶対に笑ってはいけません】。もしも笑ってしまった場合、FFF団及び変態騎士団で構成された、お仕置き隊によって、【お仕置き棒 Ver4.2】によってお尻を叩かれます』

「って、それ完全にガキ使やん！！！！ この前年越したばっかやで！！？」

要するに、笑ったらダメ、笑ったら尻を叩かれると言うことだ。大晦日の風物詩となりつつある、あの番組に強く影響されて……………と
いうかそのまんまである。

天の声『旅行の道中や、ホテルなどには様々なギミックやネタが配備されており、皆さんを徹底的に笑わせに掛かるのでそのつもりで。』

「ていうかこれ、完全に選択権無いわよね、私たちに……………」

「にやはは……………これはもうどうしようもないかも……………」

ティアナとなのはどこか諦観の表情を浮かべる。人間、時には諦

めも肝心だと言うことも知れない。

天の声『あ、そうそう。ルークさんとフェイトさんは、今のところポンコツ状態なんで、ゲームには参加しません。こちらの仕掛け人として活躍していただきますね。加えて、アイリスさんもお二人のお守り役と言うことで、仕掛け人になって下さいな』

「まあ、ルークとフェイトちゃんはしゃあないな……。それに、お守り役は必要やろうし……。アイリス、よろしゅう頼むわ」

「は、はい……。何故でしょう……。助かったという感情と、大変なモノを押しつけられたという気持ちがせめぎ合っているのは……？」

ルークは幼児化、フェイトは甘甘お姉ちゃん化してしまっているの
で、今回のゲームには向かない。まあ、アイリスがお守り役になる
のは仕方ないことだろう。

だが、この時、はやて達は知る由もなかった。ルークとフェイトが、
はやて達を地獄の底に叩き落とす刺客になろうなどとは……

天の声『では、今回のゲーム参加者を確認しますね。まずは、
ミスター女装、リオス・コーネルドさん』

「やめてくれない、その二つ名……!!??」

天の声『妹のことになると夜も眠れない、シスコンの中のシスコン、
ヒスイ・ハーツさん』

「……シスコンではない……最近何度言っても信じてもらえないが……」

天の声 ♪ ツンデレ幼馴染み、ティアナ・ランスターさん ♪

「誰がツンデレよ!!!?」

天の声『聖祥の白い悪魔……もとい、聖祥の白い天使、高町なのはさん』

「今、言い直したよね！？ 明らかに不名誉な名前が台本になかった！！？」

天の声
……
狸

「なんでやあああああああ！！！！！！！！！！？」 名前

天の声、ソラは台本通りにゲーム参加者の名前を読み上げていく。それぞれのコール時に、全員が全員、不名誉な二つ名にツツコミを入れることを忘れなかった。

天の声『これより、聖祥学園主催、【絶対に笑ってはいけない南の島】、開始となりまゝす!!!』

そうして、はやて達にとっては忘れることが出来ない（強制的に）ゲームの幕が、切って落とされた……

ここからは、台詞がメインになってきますので、台詞の前にキャラ名を記載しておきますので、あらかじめご了承下さいませ。

天の声『それでは、皆さん。もうすぐバスが到着するので、それに乗って一旦ホテルまで行くことにしましょう。荷物は既に運ばれているので、ご安心を』

はやて「はあ……何でこないな事に……」

なのは「し、仕方ないよ……。こうなったらあるがママを受け入れないと」

リオス「まあ、笑わなければ良いだけですしね。ルークとフェイトさんも、アイリスに連れられてどっか行っちゃいましたし、爆弾を取り除けたとしてポジティブに考えましょう」

ティアナ「なんだか身も蓋もない言い方だけど、否定できないのが悲しいところよね」

ヒスイ「そうだな……。あいつらには悪いが……」

ブロロロロ……

天の声『あ、バスが来ましたね。では皆さん、順番に乗り込んで下

さい』

到着したバス 劇場版なのはイラストをあしらった痛車

【リオス、はやて、アウトー】

リオス「なんで、なんでバスを痛車にw……ふぎゃ!？」

はやて「第二弾もよろしく……あう!!?」

ティアナ「あぶなかった……」

なのは「だ、だね……」

ヒスイ「というか、あの全身黒タイツ共は一体どこから……?」

天の声『ではでは、席について下さい。順番は、リオスさん、なのはさん、ティアナさん、はやてさん、ヒスイさんです』

はやて「はぁ……やっと座れる……」

なのは「シートは……特に何にもないね……」

リオス「痛車に乗るのって、これが初めてかも……」

ティアナ「これって、誰の持ち物なのかしら……?」

スカリエツティ「私だが?」

【全員、アウトー】

はやて「な、なんでアンタがwwwあいた!？」

ティアナ「疑問系にするんじゃないかった……ひぐっ!?!？」

ヒスイ「顔とやることがマッチしていない……ぐっ!?!？」

リオス「こつちの世界じゃ、ただの化学の先生なのに……いたっ!?!？」

なのは「ていうか、車運転できたんだ……きゃう!?!？」

スカさん「おかしなモルモットたちだ。まあ、いい兎に角出発することしよう」

数分後……

乗車ポイントに到着。

はやて「なんやろ、嫌な予感しかへえへん」

リオス「僕もです……」

ティアナ「右に同じ」

シャル（女子高生っぽい服装）「て言うか、あの先公マジ、チヨベリバだよねー。説教ならよそでやって下さいって感じいー」

シグナム「マジでそうだよー。ていうか、知ってるうー？ あの校長、実はズラしいよー？ マジウケるんですけどwww」

シャル「ええーマジー！？ それヤバくない？！ 軽くヤバくない！！？」

【はやて、ティアナ、なのは、アウトー】

ティアナ「あ、アレって、はやて先輩のところの…キャウー！？」

なのは「お手伝いのシャルさんと、シグナムさん……普段はあんなキャラじゃないのに……あ痛！！？」

はやて「服装から言動まで、どっから突っ込んだらいいのかわからんwwwはうー！？」

リオス「使ってる言葉が死語ばかりですよね……」

ヒスイ「あの人達なりに頑張った結果だろう……」

乗車ポイント通過

リオス「はあ……まさかシャルとシグナムが出てこようとは……」

……」

ティアナ「完全に予想外よね……………」

はやて「……………予想外デス」（某携帯電話会社のCMの真似で）

リオス「……………」

ティアナ「……………」

はやて「予想外DETACH」

リオス「……………ぶふw」

ティアナ「……………くふw」

【リオス、ティアナ、アウトー】

リオス「はやてさあああああん！！！！！！！！？？ はぐ！！！！？？」

ティアナ「しつこいですってばあああ！！！！… うう！！！！？？」

はやて「いやな、これは流れるに空気を読んだ方がええんかと……………」

……」

なのは「さ、流石ははやてちゃん……………」

ヒスイ「敵は味方の中にもありと言つことか……………」

はやて「もうすぐ……ホテルに着くみたいやな」

なのは「空港から結構近いところにあるんだね。もうちょっと掛かるかと思ってた」

リオス「まあ、ある意味助かったと言えるかも知れませんが……」

ティアナ「そうよね……これ以上このバスの中にいたら、何回お尻を叩かれるk……」

キヤロ「きゃあああああああ……!!?! ち、痴漢ですううう!!?!」

ヴァイス「ちょ、これは違うつて……!! ちよつと手が当たっちゃっただけで……」

キヤロ「お尻触られました……!! 私……私……妊娠しちゃいます……!!」

ヴァイス「触られただけでするわけない。だ、だから落ち着いてくれ」(泣)

【リオス、はやて、ティアナ、アウト】

リオス「ヴァイス先生www ロリコンは犯罪……痛あ……?!」

はやて「ていうか、あの子初等部の子やでwwwわざわざこんなとこまで連れて来たんかwはうつー!」

ティアナ「ヴァイス先生のイメージって一体w……うきゅー!」?

数分後、一行を乗せたバスはホテルに到着。

天の声『はい、それじゃあバスから降りて、ホテルにチェックインしましょうか。』

はやて「や、やっと着いた……」

リオス「数分間の出来事なのに、異常に長いように感じたなあ……」

ティアナ「このホテルでも何が待っているやら……考えただけで恐ろしいわ……」

なのは「確かに……」

ヒスイ「油断せずに行こう…キリッ」

【はやて、リオス、なのは、ティアナ、アウトー】

リオス「ヒスイせんぱあああああい!!!!!!!!!!　ぐあー!」?

はやて「なんでテニプリの手塚www　痛い!」?

なのは「狙ってないんだろうけど…それが余計におかしくて……ひう！！？」

ティアナ「き、気をつけて下さいよおお！！ きゃうん！！！！？」

ヒスイ「す、済まない」

一行は下車し、荷物を荷台から受け取る。

スカさん「む？バスが動かない…？」

はやて「ん？なんや、スカリエッティのバスがエンストしたみたいやで？」

リオス「整備不良でしょうか？」

ヒスイ「機械のご機嫌取りは難しいと言っからな……」

スカリエッティ、セルを回すがバスは反応無し。

スカさん「動け、ジ・O！！！！ ジ・O、何故動かん！！！！？」

【はやて、リオス、アウトー】

リオス「シロツコwww ぐう！！！！？」

はやて「木星帰りの天才さんがwww あいたっ!!?」

ティアナ「ていうか、このネタ、Zガンダム知らない人分かるのかしら……」

ヒスイ「そこは謎な部分だな」

ス力さん「動け、動け、動いてよ!!! 今動かなきゃ、今やらなきゃ、みんな死んじゃうんだ……。もうそんなのいやなんだよ!!! だから動いてよお!!!」

【全員、アウトー】

リオス「スカリエツティイイイイ!!! ふが!!!」

はやて「ちよつと新しい作品にできよつたwww うは!!!」

ティアナ「エヴァとか……いい加減にしなさいよおお!!!? 痛っ!!!?」

なのは「今は……今は卑怯だよお……あう!!!?」

ヒスイ「くっ……不覚……ぐう!!!」

ドルウン!!!

スカさん「ふう、何とかエンジンは掛かったな。では、私は行くでしょう」

はやて「早う行ってまえ、いやマジで」

リオス「これ以上爆弾を投下されるまえに……………」

なのは「だ、だね……………」

スカさん「さうで、来週も、サービスサービスウ！」

【はやて、ティアナ、アウトー】

はやて「分かつつたのに…………分かつつたのにいい！！！！はぐう！！！！」

ティアナ「エヴァネタ引き摺るのやめなさいよ！！！！　つきゅ！！！！？」

リオス「あ、危なかった…………のど元まで来てた…………」

なのは「お、同じく…………」

こうして、一行はなんとかホテルに到着。

しかし、ここからが本当の戦い、これまでのはまだまだ前哨戦である。

次々と襲いかかる笑いの刺客達の襲撃を、一行は乗り切ることが出来るのか？

次週につづく……

アイリス「ふえ、フェイトさん！！！！ ルークさんと一緒にお風呂は流石にマズイですから！！！！」

フェイト「で、でも、ルークが私と入りたいって……………」

アイリス「甘やかしすぎてダメですから！！！！」

ルーク「じゃあ、アイリスおねえちゃん、一緒にはいろ？」

アイリス「そ、それはその……………私はやっぱり、リオスさんとルーク君のセット入浴シーンの方が……………きゃ」

ルーク&フェイト「……………」

こちらはこちらで、イロイロ大変だったそう。

第二十六話 絶対に笑ってはいけない南の島 その? (後書き)

はやて「なあ、冒頭のニーチェの名言と英文……………入れ
る意味あつたん?」

F20C「まじめな台詞の後に、ふざけた感じにしてのギャップを
狙ってみました」

はやて「ふざけたっていうか……………ただ単にウチらがケツ叩かれ
まくっただけって気が……………」

F20C「次回もそんな感じなので、覚悟しといて下さいな。ス力
さんの出番もまだあると思うし」

ス力さん「ふむ、中々興味深いな。是非協力させてもらおう」

はやて「せんで良いわ!!!!!!」

F20C「出来ればゲストさんなども交えることが出来れば嬉しい
んですけどね。まあ、それは展開との相談という感じでw」

はやて「はあ……………次回も笑ったらあかんのか……………
つらい世の中や……………」

第二十七話 絶対に笑ってはいけない南の島 その? (前書き)

その?でございます。ていうか、この企画で何週間保つのやら……

……

私の保つネタの量次第と言うことでしょうか。

関係ありませんが、インフィニット・ストラトスのシャルルが可愛いですね。花澤さんのボイスもピッタリです。ISは原作の方が面白いのかな? と思いつつアニメ見てますけど、これはこれで中々……

……

ですが、私の萌えキャラはゆかなボイスのセシリアさんなので、私がブレることはありません、ええ、ありませんとも

はやて「作者、あんたのiphoneの画像ファイルに、三枚ほどのシャルルくんのpixivで探した画像が保存されとるで?」

F20C「いえ、違うんですよ? ロック状態の待ち受けはセシリアさんですよ? 通常待ち受けは、聖 お姉さんですけど。これは浮気とかではないですよ?」

では、第二十七話をお楽しみ下さい。

注意: 今回、若干ネタが濃くなってしまったかも知れません。後書きにて補足などをします。

第二十七話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？

バスから降り、ホテルに到着したりオス達一行。

だが、憩いの場であるはずのホテルでさえ、彼らに安息を与えることとはない。

そこはまさに、笑い地獄と化していたのだから。

天の声『さて、ここが今日から約三日間お世話になるホテル。O S A W A R I ホテルです。』

はやて「お触りホテルで……………どういつ名前やねん……………」

ティアナ「ここって海外なんですよね……………？」

リオス「果てしなく嫌な予感しかないホテルじゃないで…………ぶぶw」何かを見つけたリオス

なのは「どうしたの？ リオスく……………くふw」

【リオス、なのは、アウトー】

リオスとなのはの目線の先には、『頭に下着を被り、フェイトにボディタッチをしているルークの銅像』が。

リオス「ちょ、何なんですかアレは！！！　ぐは！！？」

なのは「もしかして、お触りってそっち方面の……………うきゅう
！？」

天の声『あれは、このホテルのマスコットキャラクター、お触り君
です。とても変態なので、女性の方は注意して下さい』

はやて「気を付けるいうても、当のルークは今はポンコツ状態やし
なあ」

ヒスイ「まあ、気にしていても仕方なかるう。」

天の声『では、早速ホテルのカウンターで、ちゃっく……………チエ
ックインしてください。』

はやて「……………」

ティアナ「……………」

はやて&ティアナ「ぶふっw」「」

【はやて、ティアナ、アウトー】

ティアナ「ちよっと、司会のくせして噛まないでよおお！！！！　う
く！！！！？」

はやて「あかん、こんな事で笑ったたら、この先保たへん……………」

…はう!!?」

気を取り直して、一行はチェックインのためにホテルに入り、ロビーのカウンターへ。
そして、そこには……………

リオスの父・ユリウス「初めましてだなあ、ガンダム!!!!」

【全員、アウト】

ユリウスさんについては、体育祭編で登場されたりオスのお父さんです。パツと見は、ガンム00のミスター・ブシドー的な、グラハムさんの人に瓜二つです。

リオス「と、父さん、こんなところで何を……………うぐ!!」

はやて「不覚や……………まさかこんな刺客が……………あぐ!!」

ティアナ「ていうか、ガンダム居ないし……………はゆ!!」

なのは「外見はそっくりだもんね、声も……………うきゅ!!」

ヒスイ「此処までのあまり役が……………っ!!」

ユリウス「この用紙に代表者の名前を書いてくれ、手早くな。……………私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ」

【はやて、アウトー】

はやて「あかんwww台詞にんとしてでも、ハムの台詞を入れてくる気やw……………つつうー!」

リオス「すみません、うちの父が……………」

なのは「あれ?でも、私たちが本来泊まるはずだったホテルって此処じゃないよね? 部屋の空き具合とかは大丈夫なのかな?」

ヒスイ「企画の上でそれくらいは都合してあると思うが……………」

ユリウス「そんな道理……………私の無理でこじ開ける……………」

【なのは、ヒスイ、アウトー】

なのは「言わなきゃよかったああ! はう!」

ヒスイ「く、敵も中々やる……………ぐ!」

何だかんだではやてが代表者として、名前を記入し、手続きを完了させる。

そして、一行は今日からお世話になる部屋に向かうことに。

なのは「えと、私たちのお部屋は、何回の何号室ですか?」

ユリウス「15階の105号室だ。そのエレベーターを使うと良い。」

はやて「そんなら、早速登るとしよか」

リオス「ですね。いつまでもフロントにいても仕方ありませんし。もしかしたらルーク達が待ってるかも知れません」

ユリウス「あえて言うぞ、息子よ……………笑うなよ」

【リオス、アウトー】

リオス「いい加減にしてよ、父さん……！ ふぎゅ……！」

はやて「今のは綺麗に決まったなあ……」

ティアナ「私もちょっと危なかったかも……」

一行はお尻を労りながらエレベータへ。

ユリウスの声「ガンダム、ガンダム、私のガンダム！！ 私は、ガ
ンダム！！ 私のガンダム！！（。　。）フハハハノ、ノ、ノ

【全員、アウトー】

はやて「どんだけガンダム好きやねんwww ぐへ!!」

リオス「しかも、ニコ動で有名なMADの台詞だしw」

なのは「武力介入できないシリーズだったねwww」

ティアナ「今日ほどリオスのお父様が怖いと思ったことはないわ……」

ヒスイ「ま、全くだ……」

一行は部屋に到着。五人が寝泊まりすると言うことで、部屋の総面積はかなり広い。と言うより、明らかに五人でも持て余すレベルのものだ。

ちなみに、男女が同じ部屋で寝泊まり？不味くイカ？ というツッコミは今更無しにして頂きたい。エロゲーではよくあることだ。

はやて「さてと、ウチらの泊まる部屋はどんなやろうな」

はやて、我先と言わんばかりの勢いで部屋のドアノブを触る。

べちょ……………

はやて「はい？」

リオス「ドアノブに……………何か張り付いてますね……………ふw」

なのは「これって……………ガムの食べかす？……………くす
www」

【リオス、なのは、アウトー】

リオス「くそ……………一タトラップが細かい癖に、こういう所にならないものを……………はうー！」

なのは「ていうか、はやてちゃんも、ガムだつて分かった瞬間に、どや顔するのやめ……………うう！？」

はやて「いや、これは利用する手はないかなあと……………」

気を取り直して、五人は部屋の中に。部屋には五人分のベッドと、システムデスクが完備されており、パソコンまで用意されている。当然ながら、そこにも笑いのトラップが数多く用意されていることは言うまでもないだろう。

天の声『システムデスクは、奥からヒスイさん、はやてさん、ティアナさん、なのはさん、リオスさんでお願いします』

はやて「このベッドとか、システムデスクにも細工してあるんやろ

うなあ……………」

リオス「パソコンとかも怖いですよね……………」

ティアナ「こうなったらトコトンまで突っ走るしかないわよ……………」

なのは「ティアナの言うとおりかもね、ここまで来ちゃうと……………」

ヒスイ「まったく、よくまあ此処まで手の込んだことを……………」

一行はぶつぶつ言いながら、それぞれ指定された席に座り、ベッドに荷物を置いておく。

はやて「おお……………結構景色がええとこやな……………」

なのは「窓の外が、一面海だね」

ティアナ「ここに来て初めてよかったと思えましたね」

窓の外くフェイト「た、戯け!! 躲せと言ったのだ、キャスター……………」

【リオス、はやて、なのは、ティアナ、アウト】

リオス「アーチャーwww……………ぐえ!!」

はやて「フェイトちゃんwww 恥ずかしさを隠し切れんみたいやな……………うがー!」

なのは「最初の方囃んじゃってるし……………wふぎゅー!」

ティアナ「ていうか、キャスター居ないですつてばwww あう!」

はやて「……………で、どないする?」

なのは「どないするって……………、なんだかこのシステムデスクとかをチェックしないといけないような空気になってるしね……………」

リオス「まあ、お約束ですもんね」

ヒスイ「だったら、誰から開けることにする?」

ティアナ「ある意味、トップバッターが一番怖くもありますしね」

と言いながら、一同の視線は自然とはやての方に……………

はやて「な、なんで皆してうちを見るん?」

なのは「だって……………」

リオス「ねえ?」

ヒスイ「だな」

ティアナ「ですよね」

どうやら、こういう役目はやはりはやてが一番手というのがこの世界のスタンダードらしい。

はやて「分かったわ!! 開ける、開けたらいいんやろお!!!!」

ガラ!!

一同の視線の力に屈服したはやてが、システムデスクの一番大きな引き出しを開ける。

引き出しの中身 北斗七星の形に並べられたクッキー（食べかけ）

【はやて、アウトー】

はやて「なんで北斗七星の形に食べかけのクッキーwww はう!!」

リオス「しかもこれ……………食べかけ……………」

なのは「引き出しは後1つあるね……………」

ヒスイ「何かしらあると見て良いだろうな……………」

はやて「こうなったらヤケや……！ 何でも来てみい……！」

ガラ……！

引き出しの中身 『合衆国ニッポン……！……！』と書かれた紙

【全員、アウト】

はやて「まさかのギアスwww へぐ……！」

リオス「ていうか、これMAD動画のwww あいた……！」

なのは「これは卑怯だよ………うみゅ……！」

ティアナ「……／のAA………www はゆ……！」

ヒスイ「まさかこんなものまで………っ……！」

リオス「じゃ、じゃあ次は僕が………」

はやて「リオスも結構弄られてそつやなあ………」

なのは「今からちょっと怖いかも………」

リオス「ええい、ままよ！！！」

ガラッ！！

引き出しの中身　ルークの自伝【もしも高校生のフェイトさんが、エロティック皇帝に『エロの何たるか』を学んだら】

【はやて、なのは、リオス、アウトー】

はやて「自伝とはwww しかもこれ、『もしドラ』のばく」……
……　んん！！」

なのは「ルーク君、こんな本出してたんだ………あう！！」

リオス「ポンコツ状態になっても僕らを苦しめるなんて、流石はルークだよ………くう！！」

ティアナ「あ、危なかったですね、今は………」

ヒスイ「ああ、タイトルだけでも破壊力抜群だったからな………」

リオス「でも、引き出しはまだあと一つあるんだよね………」

はやて「まあ、覚悟して開けるしかないわな………」

ガラッ！

引き出しの中身 幼少時のリオスの写真（なぜか女の子の格好）

【なのは、はやて、ティアナ、アウトー】

はやて「リオス、アンタって子はwww はうー!」

なのは「で、でも結構可愛い……………うみゅー!」

ティアナ「まさかこの頃から女装癖が?……………ううー!」

リオス「ち、違いますよ!!? 多分これ無理矢理母さんに着せられて……………」

ヒスイ「リオス、人の趣味というものは千差万別だ。個々人の趣味に、俺はとやかく言うつもりは……………」

リオス「だから違うんですってばあああああ!!!!!!」

閑話休題

ティアナ「で、では、次は私が……………」

なのは「き、気を付けてね……………」?

はやて「さて、何が来るか……………」

ガラッ！

引き出しの中身　スカリエッティの自伝【マッドサイエンティスト（笑）】　表紙はスカリエッティがバラを啜えて、恍惚とした表情を浮かべている写真

【ティアナ、はやて、リオス、アウトー】

はやて「自伝再びwww　ふぐー！！」

ティアナ「ていうか、この表紙は反則ですってばwww　ふみゅー！！」

リオス「（笑）って……………自分で笑ってるんじゃないかwww　ぐはー！！」

ヒスイ「なんと恐ろしい……………」

なのは「まともに見ちゃダメだねこれは……………」

ティアナ「二段目は……………」

ガラッ

引き出しの中身　空っぽ

ティアナ「と、取り敢えずはセーフって事ですか？」

はやて「見たいやね。まあ、全部の引き出しに入ってるなんて、ネタの数も限られてくるやろうし……………」

リオス「はやてさん、メタ発言は控えて下さい」

なのは「それじゃあ、次は私だね」

リオス「なのはさん、くれぐれも気を付けて下さいね」

ヒスイ「普通のもが出てくることはまずないからな」

なのは「う、うん……………えい!!」

ガラッ!

引き出しの中身 空っぽ

なのは「ほ……………」

はやて「取り敢えず、一個目はクリアやな……………」

ティアナ「と言うことは、必然的に次が問題ですね。絶対来ますよこれは……………」

なのは「でも、開けないことには前に進めないよ……………いくよ!

「！」

ガラッ！！

引き出しの中身　空っぽ

「なのは・はやて・ティアナ」「.....ぶふw」

【なのは、はやて、ティアナ、アウトー】

「はやて「此処まで来て.....此処まで来てええ！！！」　へぐ！」

なのは「絶対何か入ってるって思ったのにいい！！　はにゅ！！」

ティアナ「脚本家の悪意が見えてくるようです.....あふ！！」

リオス「残すはヒスイ先輩ですね。」

ヒスイ「うむ。ここまでの事を考慮すると、空っぽとの組み合わせが少し怖いが.....」

なのは「私のが良い例だね.....」

ティアナ「いい加減、お尻が少し痛くなってきましたよ……………」

ヒスイ「では……………いくぞー!!」

ガラッ!!

引き出しの中身 緑色のスイッチ

はやて「スイッチやな……………」

なのは「押したらどうなるんだろう……………」

ヒスイ「む？ 二段目もスイッチが入っているな。こちらは青色だ」

リオス「引き出しの中身がどっちもスイッチですか……………」

ティアナ「どうしますこれ？」

はやて「取り敢えず押してみようや。（ポチ）」

はやて、緑のスイッチを押す

はやて以外「……………あ……………」

【はやて、タイキックー】

はやて「へ？ へ？」

部屋のドアが開き、タイキック専用の訓練を受けたお仕置き隊が登場（BGMはタイっばいやっ）

はやて「え、ちょ、それは……………無理やって！！（バシン！
！！）へあ……！？」

リオス「うわ……………痛そう……………」

ティアナ「随分綺麗に決まりましたね……………」

はやて「うう……………まさか押した本人が叩かれるやなんて……………」

ヒスイ「成る程……………緑は押した本人が叩かれるというわけか」

リオス「と、取り敢えず、これはどこかに仕舞っておきましょうか」

はやて「うん、是非ともそうして……………」

リオス「さて、問題は残りの青いスイッチだね」

なのは「これも、直接罰ゲームに関わりそうなスイッチだね」

ティアナ「流れからして、タイキックが待ってますよきっと……………」

「……………」
はやて「今度は押したら、ランダムに蹴られるって言うのがセオリー
ーっちゃセオリーやな。でも、そう思わせて、また押した本人が！

って事も」

一同「「「「「」……………」」」」」

リオス「ぼ、僕が押してみます」

なのは「り、リオス君!!?」

ティアナ「む、無理しなくても良いのよ?こっいつのははやて先輩の役目で……………」

はやて「ちよつと待って!!? その役割分担当はやめて欲しいんやけど!」

ヒスイ「男になってこい、リオス」

言いながら、ヒスイは青いスイッチをリオスに渡す。

リオス「では……………行きます!!」(ポチ)

部屋のスピーカー<<マクミラン大尉『ステンバ
ーイ……………ゴー!』

【リオス、タイキツクー】

リオス「なんでマクミラン大尉がwwwていうか、COD4ネタ分

かる人居るのk……………ふげ！！！？」

はやて「まさかマクミラン先生が来るとは……………しかも、しっかり押した本人が蹴られとるし……………」

ヒスイ「無敵砲台と言われたあの方が来るとはな……………」

部屋のスピーカー<<マクミラン大尉『ビューティフォー……………』

【はやて、リオス、ヒスイ、アウトー】

はやて「ちょwww大尉しつこいwww あへ！！」

リオス「蹴られてビューティフォーって……………あぐー！！」

ヒスイ「く……………大尉の登場の余韻を残したまま来るとは……………
…ぐー！！」

引き出しトラップの威力に、流石のはやて達もかなりのダメージを受けているようだが、笑いの仕掛けはまだまだ用意されている。

このホテル自体が、言うなれば笑いの巣窟なのだから。

笑うという行為を禁止された五人、最早ご褒美旅行と呼ぶべきなのが不明だが、次回に続く……………

フェイト「いい、ルーク？ ルークはね、昔からお姉ちゃんのお婿さんになりたいって、毎日のように……………」

アイリス「ふえ、フェイトさん！！ 間違った再教育をしないで下さい！！！」

フェイト「じゃ、じゃあ…………… ルークの初めてはもう私が……………」

アイリス「それも違いますよね！！？ 限りなく既成事実を作ろうとしてますよね！！？」

ルーク「初めてって、何の初めて？」

フェイト＆アイリス「…………… そ、それは私たちの口からはちよつと……………」

ルーク「????」

仕掛け人としての台本を確認中の三人なのだが、作業は遅々として進んでいなかったそうなの……………

第二十七話 絶対に笑ってはいけない南の島 その? (後書き)

F20C「というわけで、その?だね。ちなみに、リオス君のお父さん、ユリウスさんのネタですが、ニコニコ動画で大人気のMAD『武力介入できないソレスタルビーイングシリーズのネタですw」

はやて「初見で作者を笑い地獄に叩き落としたMADやね。」

F20C「読者の皆様も、是非見てみて下さいw 基本的に、マリナ姫がヤンデレですので、心臓の弱い方はご注意ください」

はやて「でもって、マクミラン大尉についてなんやけど、これはゲーム作品の、Call of Duty 4: Modern Warfareってゲームの中で出てくる登場人物なんや。」

F20C「別名、無敵砲台。でも、プレイヤーが大尉から離れすぎると死んでしまいます。寂しがりやなのかしらwあと、犬に噛まれても死んでしまいます」

はやて「作者がハマったゲームの中でも、高レベルの作品やね」

F20C「という感じで、補足は以上でございます。ルークとフエイトさんの出番が少なくて御免なさい。この企画では、基本的にはやて達が主役なので……………次回辺りに出せればなあと思ってます」

はやて「次回はどんな感じになるん?」

F20C「今回は、部屋のトラップの続きと、待ちに出ての探索がメインです。まあ、頑張つて下さいなw」

はやて「……………作者も参加せえへん？いやまじで」

F20C「読者様達からのブーイングが来るのでやめておきます。決して、お尻を叩かれるのが嫌なわけじゃありませんから。違いますよ？本当に」

はやて「大事なことなので（ry」

第二十八話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？（前書き）

皆さん、おはこんにちこんばんわ、ゆっくりでs……………F20Cで
ございます。

最近、普段は髪をまとめ上げてツインテール、ツータールにしている子が、ある日突然髪を下してみると、以外にグッとくるという理論を研究中のF20Cです。

え？就活はどうしたのかって？

もちろんやってますよ？

先週も面接に行ってきましたよ。……………行ってビックリ、社長面接でした。

事前に、役員面接とは聞いていたのですが、まさか社長さんがこんなに早く来られるとは思ってもみなかったので、若干緊張してました。

三月までの今回の選考の結果が来るらしいのですが、恐らくもう一回くらい面接あるんだろうなあ、と思いつつ、今自分に出来ることを頑張っている所存でございます。

と、堅苦しいお話はここまでにいたしまして、本編をどうぞ！

第二十八話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？

ゲーム開始から一時間……

引き出しネタでガツポリと体力（お尻的な意味で）を持って行かれた一同。

しかし、まだまだ序の口。このホテルの部屋にある笑いのトラップは遠慮なしに襲い掛かってくる……………

はやて「はあゝ……………お尻が痛いわ……………」

リオス「ていうか、はやてさんだけ叩かれ過ぎですよ……………」

なのは「だね……………ていうか、狙われてるとしか思えないネタの配置の仕方だもん……………」

はやて「作者の悪意が目には浮かぶようやわ……………」

窓の外：フェイト『私、堪忍袋の緒が切れました！』

【はやて、リオス、アウトー】

はやて「まだフェイトちゃん頑張ってたんかいなwww あふえ
!!」

リオス「ていうか、プリキ アwww 中の人繋がり以外の何物で
もないww あう!!!」

ティアナ「セリフ的に慣れてるのが、今回は噛みませんでしたね、
フェイトさん」

なのは「この前放送終わっちゃったけどね」

ヒスイ「メタは発言はそこまでにしておけ。作者がプリキユアを見
ていないことが奈々様スキーマの方に知れたら処刑されてしまう」

日曜の朝になんて起きてられません。 by F20C

天の声『さて皆さん、そろそろ街に出て観光と行きましょうか。皆
さんのパソコンに、今日の観光コースを送信しておきましたから、
パソコンを起動して確認しておいてくださいね』

はやて「うわぁ……これ絶対フラグやん……」

リオス「壁紙が弄られてたりしてそれで怖いですね」

ヒスイ「とは言っても、見てみないことには観光コースの地図も分
からんのだ。ここは立ち上げてみるしかあるまい」

ティアナ「こんなにパソコンが怖いと思ったことはありませんよ私…

……」

なのは「私も……」

各員、ぶつぶつ言いながらそれぞれ、システムデスクに備え付けてあるパソコンの電源を入れる。

OSは最新のWindows7、Vistaよりも格段に速い起動に、パソコンを買換えた作者も感動のあまり目からGN粒子が出てしまいました。

と、どうでもいいことを言っている間に各自のパソコンが立ち上がり……

全員のパソコン起動音『俺のこの手が光って唸るう！ お前を倒せと輝き叫ぶうう！！！！ 必殺！ シャアアアイニング フィンガアアア！！！！』

【全員、アウトー】

リオス「まさか起動音を弄って……はみゅー！！」

はやて「ドモンwwwwwwへぶしー！！」

ティアナ「Gガンネタはダメだって……はゅー！！」

なのは「嫌な予感だけはしてたんだけど……あうー！！」

ヒスイ「不覚……ぐ!!」

全員、お尻を叩かれながらも、本日の観光コース及び名所のデータを入手。

荷物を最低限の物だけにまとめ、観光に繰り出すことに……。

が、無論町にも笑いの仕掛け人はスタンバッテいる。観光という名の地獄が、一行を待ち受けていたのであった。

はやて「はあ、やっとホテルから出れたわ……」

リオス「ある意味、外の方が安全かもしれませんね」

ティアナ「リオス、その台詞自体がフラグなような気がするんだけど、気のせいかしら？」

天の声『では、早速観光といきましょうか。ガイドは俺がやりますんで、予め指定されたコースを進んでもらうことになります』

なのは「だったら、道に迷う心配とかは大丈夫だね。」

ヒスイ「そうだな。ここは俺たちにとってはジャングルも等しい場所だからな」

はやて「ま、ガイドは心強い限りや。」

天の声『では早速、繁華街の方に……………おや?』

天の声がそう言いかけた瞬間、周囲に弾けるような音が鳴り響いた。

パアアン!!!! パアアン!!!!

はやて「な、なんや!!!!?」

リオス「じゅ、銃声!?!」

ティアナ「なんでこんな街中で……………」

天の声『皆さん、あそこの売店の前を見てみてください。何やら大変な事件が起きているようです』

はやて「事件て一体……………」

リオス「こんな真昼間から……………」

軍曹?『コッペパンを要求する!!!!!!!!!!』

【はやて、リオス、ティアナ、アウトー】

はやて「ちょｗｗフルメタｗｗ はぎゅー！！」

リオス「軍曹殿何してるんですかこんなところでｗｗｗｗ ぐへー！」

ティアナ「なんでゲストがこんなに豪華なのよｗｗｗｗ ふもっふー！」

はやて「はあ、はあ……甘く見とったで……ホテルの外の方が安全なんてとんでもないわ……」

なのは「だね…これはもう、この街全体が笑いのトラップだらけになってるって見た方がよいね……」

リオス「舐めてましたね、作者はこの企画にかなりノリノリですよこれ」

ティアナ「ていうか、観光させる気は……」

ヒスイ「無いのだろうな、確実に」

リオス&ティアナ「「ですよー」」

この企画の本格さに、一同は認識を改めるしかなかった。作者は、本気で自分たちのお尻を真っ赤に染め上げるつもりなのだ……

天の声『さて皆さん、まずは海岸にでも行ってみましょうか。水泳は明日の予定ですが、今日の内に地理を少しでも把握しておくことにしましょう』

はやて「まあ、尤もやな。うちらもよく知りもせんところを土地勘なしで歩くのは怖いしな」

リオス「ですね。では、早速言ってみましょうか」

ということで、一行は一路、海への道を歩くことになる。天の声のナビにより、海辺への道を把握しながら進む一行。だが、彼らに休息の時間が与えられることはないのだ……

はやて「結構賑わつとるところなんやな。未だに地球上のどこかは分からんままやけど」

リオス「町も活気づいてるみたいですから、そんなにヤバいところではないと思いますけど……」

ティアナ「私たちにとっては別の意味でヤバいところかしてるけどね」

天の声『ティアナさんの言う通りです。ほら、あそこを見てみてください。真昼間から変態行為に勤しんでいる輩もいるんですから』

はやて達「……………」

天の声がつ方向を見てみると、そこには……

ルーク「なあ、なあ、おねえちゃん……今どんなパンツ穿いてるの……？」（台本片手に学芸会よろしくな棒読み）

フェイト「あう……ちょっと、やめてください……。わ、私……恥ずかしい……／＼／＼」

ルーク「ええやないか、ええやないか……ぐへへ……」（お姉ちゃん、これなんて読むの？）

フェイト「だ、ダメですう……（それはジョウモノって読むんだよ）」

ルーク「姉ちゃんみたいな上物、そうそうお目にかからへんからなー、今日はたっぷり可愛がったるさかいなー」

フェイト「あ〜れ〜（くるくる回りながら、お代官様に帯を取られるモーションをとる）」

ルーク「ぐへへ、良いではないか、良いではないかー」

フェイト「お、お代官様〜〜〜」

【リオス、はやて、なのは、アウトー】

リオス「ちょ、ルーク何してんのwww はぶー！」

はやて「台本持ったまま完全な棒読みやしwww ていうか、なんでお代官様ww はにゅー！！！」

なのは「しかも、フェイトちゃんが若干嬉しそうな顔してるのがwww あうんー！」

ティアナ「ま、まさかこんな形で参加してくるだなんて……」

ヒスイ「うむ、完全に予想外だったな……」

予想外のルークとフェイトの登場にリオス達はあっさりと屈伏してしまう。

ルークの幼児化も、学芸会並の棒読み、漢字の読み方を尋ねるなど、今現在のルークのポンコツスペックを何とか生かした結果であろう。

おバカコンビをやり過ごした一行は、気を取り直して海岸方面を目指すことに……

でもって、歩くこと数分後、一行は海に到着した。

ティアナ「へえ……綺麗な海ねえ」

リオス「海水が透き通ってるね。これは人で賑わうのは当たり前かもね」

はやて「ここで泳げるとなると、明日の水泳タイムが今から楽しみ

やで」

はやて達は、海の綺麗さ、浜辺の優雅さに大満足。がしかし、作者がただの娯楽の場を提供するはずがない。

天の声『おや、皆さん見てみてください。向こうでは釣りも楽しめるようですよ?』

ヒスイ「ふむ、遊泳域と釣りをする場所をしっかりと区切っているようだな」

なのは「安全面もしっかり考慮してあるんだね」

はやて「折角やから、うちらもちょっとやっていこうや。そんな位の時間はあるやろ?」

天の声『ええもちろん。そう来ると思って、釣りの道具は用意してあります。どうぞみなさん、あそこの釣りゾーンで楽しんでください』

ということ、はやて達は海釣りを開始。

これが、作者の用意した罫とも知らずに……

はやて「マグロとか釣れへんかなあ……」

リオス「いやいや、流石にマグロとかは沖まで出ないと無理でしょう。釣れてもそんな大きなものは無理ですよ」

ティアナ「釣りなんて久々ね……。何年ぶりかしら」

なのは「私、実は初めてなんだ……………」

【リオス、アウトー】

リオス「違います、決してあっち方面を意識したわけじゃなくって……………あヴえ!!」

ヒスイ「これが若さか……………」

はやて「ヒスイ、今の状況でそれはあかん。一つ間違えたら笑ろてまう……………」

ティアナ「はやてさんダメですよ、釣り場では騒いだりしちゃあ……………」

????「へい、嬢ちゃん達」

と、ティアナがそう言った矢先、野太い声ははやて達に降ってくる。釣り場では騒がないのがマナー（だと思っ、多分）、企画とは言え、少しはしやぎすぎたかもしれない。

ティアナ「す、すみません。お邪魔をしまっ……………」

ダンディなおじ様（ＣＶ小杉十太郎さん）「気をつけな嬢ちゃん達
……ここは遊び場じゃねえ……荒野のウエスタンだ……」

【ティアナ、リオス、はやて、アウトー】

リオス「またしてもＣＯＤネタｗｗｗｗ へぐー！」

はやて「荒野のウエスタンって……ここ海やしｗｗｗｗ あふー！」

ティアナ「ていうか、このおじ様のＣＶが小杉さんｗｗ 豪華過ぎ
るわよｗｗｗｗ はうー！」

なのは「確か、荒野のウエスタンって……」

ヒスイ「ああ、ＣＯＤ４のゲーム内での英文の誤訳だ」

なのは「なんてマニアックなところを……」

と、そんな感じで笑いの刺客、ダンディなおじ様が登場した頃、は
やて達の竿に本日最初のヒットが来た。

はやて「あ、リオスリオス…… 引いてるでー！」

なのは「ほんとだー！ リオス君、早く引いて引いてー！」

リオス「は、はい！」

はやてとなのはに急かされ、慌てて竿を握り直し、リオスはヒットした獲物を獲りにかかる。
そして、リオスが釣り上げた物は……

釣り上げたもの　ダ○チワイフ（俗に言う空気嫁）

【リオス、ヒスイ、はやて、ティアナ、アウトー】

はやて「た、確かにこれもベッドの上ではマグロかもしれんけどww はみゅー！」

リオス「ていうかこれ、どこの銀魂ww あべー！」

ヒスイ「見事なマグロ違いだ……がふー！」

ティアナ「ていうか、これ……お子様アニメタイムで出しているものじゃない……ww うにゃー！」

なのは「（あれ……何に使うお人形さんなんだろう……？）」

空気嫁の使用方法を知らない純真なのはさんは、罰ゲームを逃れることに成功。

言うまでもないことかもしれないが、この空気嫁もまた、作者の用意した笑いトラップである。

もしも、空気嫁あるいはダ○チワイフの意味が分からない方、あなたはそのままの純真な心を保っててください。決して、絶対にGoogle検索に掛けないください。

検索するなよ！！？　　いいか、絶対するなよ！！？

リオス「で、どうするんです？　これ……」

ティアナ「どうするって……その辺に捨てるわけにもいかないでしょう？　回収してくれそうなゴミ箱に空気抜いて入れておくしかないわよ……」

ヒスイ「空気嫁を捨てるとなると、ある種の勇気が必要になるな……」

はやて「……………」

リオス達が相談する中、はやては一人、空気嫁を見ながら何かを考えている様子である。

無論、彼女が考えることだ。こういう状況下において、彼女が思いつくこと言えばろくなものがない。

はやて「なあ、皆、ちよいこれ見てえな」

一同「「「「?????」「」「」

はやて「月光蝶である……！！！！！！」　　空気嫁を荒ぶる御大将のポ
ージングにさせながら叫ぶ

【リオス、なのは、ティアナ、ヒスイ、アウトー】

ヒスイ「お、御大将www ぐは!!」

ティアナ「はやてさああああん!!?? うみゅ!!」

なのは「ていうか、はやてちゃんの声真似が微妙すぎるよww まにゅ!!」

リオス「な、なのはさん、ダメwww そこを追及されると、追加で笑いそうになっちゃうからwww あぶ!!」

はやて「空気嫁見た瞬間、笑いの神様が下りて来たんよ」

リオス「はやてさああああん!!!!!! お願いですから余計なことしないで!!!!!!」

天の声『兄弟よお…… 今、女の名前を呼ばなかったかい……? 戦場でなあ、恋人や女房の名前を呼ぶときというのはなあ…… 瀕死の兵隊が甘ったれて言うセリフなんだよおお!!』

【はやて、リオス、アウトー】

リオス「違いますって、今のはそういう意味ではやてさんと呼んだんじゃないかってwww へぐ!!!!!!」

はやて「ていうか、ソラも御大将ネタに乗っかってこんでもええって!!!!!! はぶ!!!!!!」

天の声『すんません、俺にも笑いの神様が降臨召されたみたいで』

なのは「あ、危なかった……。巻き込まれて笑っちゃったところだったよ……」

ティアナ「でも、流石にこれでこのネタもお終いなんじゃ……」

フェイトの声『我が世の春が来たあああああ！！』

【なのは、ティアナ、アウトー】

なのは「フェイトちゃん、声が合ってん……ふぎゅー！！」

ティアナ「まさか、三連続で御大将ネタがww ううん！！！」

はやて「ていうか、なんとなくなんやけど、フェイトちゃんもちよつと慣れてきた感じがするなあ……」

リオス「僕たちとしてはあんまり嬉しくありませんけどね……」

ヒスイ「その分、作者からの攻撃の手数が増えるという事でもある、厄介極まりない」

御大将ネタ三連発に、はやてたちのお尻は悲鳴を上げつつある。笑うという感情の封印とお尻の激痛。

この二つの波状攻撃には、流石のリオス達も少し参り始めていた。

天の声『さて、一通り釣りも楽しめたことですし、そろそろホテルに向かいましょうか。時間も夕食の頃合ですし』

はやて「ぜ、是非ともそうしよ……このまま海に居たら潮風がお尻にボディーブローの如く効いてきよるし……」

リオス「ですね……。もうどこに居ても危険なことに変わりないですからね……」

ティアナ「帰りましょう……いたた……」

夕食の時間が迫っていたので、一行はホテルへの帰路に就くことになる。潮風が叩かれたお尻に染みるようで、リオス達全員は手でお尻を労わりながら歩いて行った。

ホテルに到着した一行は、一度部屋に戻って荷物を置いておくことにする。夕食の準備は既に整っているらしく、後は指定されたホテル内のレストランに向かうだけである。

リオス「あ、僕ちよっとトイレに行ってるので、皆さんは先に店に行ってください」

はやて「了解や。道に迷わんようにな」

なのは「先に行って待ってるね」

リオス「はい、お願いします」

会場に向かう途中、リオスは、少しトイレに行きたくなったので、はやて達を先にレストランに向かわせることに。
廊下の突き当たりにトイレがあるので、リオスはそこに入る。

リオス「うわ……全部入っちゃってるよ……」

が、こういう時に限ってトイレはすべて使用中。しかも、このホテルには立って用を足すタイプの便器は無く、全て洋式トイレが入っている。

リオス「とりあえず、ノックしてみるか……」

コンコン

何はともあれ、とりあえずノックしてみるリオス。たまにだが、鍵が微妙に閉めてあって、実は中には誰もいないということがあったりするものだ。

しかし……

ム○カ『三分間待ってくれ』

【リオス、アウトー】

リオス「や、やられたwww ぐへー!!」

まさかのム○カ登場に、リオスは別ゲームの餌食になってしまう。

リオス「ていうか、なんであんたがこんなところに居るんですか!!
! ラピ○タはどうしたんですか!!!!」

ム○カ「君はラピ○タ王の前に居るのだぞ」

【リオス、アウトー】

リオス「ちくしょおおおおwww あべし!!」

その頃はやて達は……

【リオス、アウトー】

はやて「……トイレで何があったんやろ……」

ティアナ「トイレに行くのが怖くなりました……」

なのは「リオス君……大丈夫なのかなあ……?」

ヒスイ「哀れな……」

リオスの被弾（お尻的な意味で）に気を揉みながらも、レストラン

前で彼の到着を待っていた。

このレストランの門を潜れば、またしてもそこは笑いの巣窟である。
このゲーム参加者には、食事中であろうと休息の時間はない。
これは、そういうゲームなのだから……

ム○カ「どこへ行こうというのかね？」

リオス「トイレだよ！！！！ この状況で竜の巣に飛び込むなんて
選択肢があるわけないだろ！！！！！！」

トイレでは、未だにム○カとリオスの扉を挟んでの押し問答が続いて
いたそうなの……

第二十八話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？（後書き）

F20C「さてさて、今回もネタの確認といきましょうか。」

はやて「コッペパンを要求する！！は有名やね」

F20C「フルメタルパニックですね。軍曹殿のセリフです。ていうか、今回は御大将ネタの三連コンボでしたねwww」

はやて「あれは無理やわ……フェイトちゃんがまさかあのセリフを言うなんて思ってもみなかったから……」

F20C「油断大敵ですよ、はやてさん。ちなみに、ム○力のネタは、某掲示板の面白スレを参考にしましたww」

はやて「他にも、君も一緒にどうだね？とかあったんやけどなww」

F20C「個室のトイレで一緒につて……やば、想像したら気持ち悪くなってきた……」

F20C「今回は、夕食、そして余興、就寝タイムのお話でございます。容赦無しでネタを詰め込んでいきたいと思いますので、次週もよろしければお付き合い下さいませ」

第二十九話 絶対に笑ってはいけない南の島 その? (前書き)

ヒッハー!!!! 汚物は、消毒だ!!!!!!

すみません、取り乱しました。

先週の社長面接の結果が出ました。……………通過だそうです。

ヒッハー!!!!

選考通過メールの続き

今回の選考は現場の社員による面接を予定しております

F20C「解せぬ……」

ソラ「いや、あと一回で内定なんだから気張れよ」

F20C「そ、そうだな。この難問をクリアすれば、今のしんどい状況も少しはマシに……」

ソラ「内定取ればの話だけだな」

F20C「ああ、刻が見える……」

第二十九話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？

トイレに行っていたリオスと合流したはやて達一行は、ホテル内の最も豪華なレストランにやって来ていた。というか、今晚の夕食はここだと、わざわざ指定されていたのだ。

無論、ここまで来たのだ。この夕食がただの楽しいご飯を食べる時間になるなどははやて達も考えてはいない。作者にもまた、そんなつもりは一切ない。

言うまでもなく、笑わせにかかる事は明らか事だった。

はやて「はあ……企画とか関係なしでこういうところに来たかったわ……」

なのは「だね。ここって普通に食べようと思ったら、ものすごく高そうだしね」

ティアナ「あのステージとかものすごく怪しいですね。何が飛び出すのやら……」

リオス「僕としては料理に何か仕掛けてそうで怖いなあ。ここってコース料理らしいから、蓋を開けたら……ってことも考えられるし」

ヒスイ「なんにしても、警戒は厳にする必要があるな。今日の昼間だけでもかなりの回数叩かれているからな」

といった感じで、一行の警戒レベルもかなりのモノにレベルアップを果たしており、油断しているという様子は感じられない。しかし、警戒しているからと言って回避・我慢が出来ないのが笑いである。

フェイトの声『汚物は、消毒だー！！！！』

【はやて、アウトー】

はやて「もうええて、フェイトちゃん！！！！ そんな頑張らんでも！！！！ あぐ！！！！」

リオス「まさかの北斗〇拳……」

なのは「というか、ネタが尽きないね、フェイトちゃんネタに関しては」

ティアナ「ある意味、フェイトさんが言うからこそ効力を発揮すると言っても過言じゃありませんからね」

ヒスイ「確かにな。作者もかなりお世話になっているらしいしな」

シグナムの声『天を見よ…… 見えるはずだ、あの死兆星が！！！！』

【ヒスイ、リオス、ティアナ、なのは、アウトー】

リオス「トキｗｗｗｗ はぶー!!」

ティアナ「ていうか、またシグナムさんがｗｗｗｗ にゅうー!!」

なのは「これ多分、作者さんがさっきの私たちの会話を聞いて……
あにゅー!!」

ヒスイ「間違いなく、合わせて来たな……うぐー!!」

はやて「あ、あぶないあぶない……シグナムがここまで、はっちゃん
けるやなんて思いもせんかったわ……」

夕食を食べる前から、笑いの刺客（音声のみ）の襲撃にやられてしまっ
た一行。しかし、夕食タイムは始まったばかり。ここからが本番
である。

天の声『あ、皆さんようやく前菜が出てきましたよ』

はやて「お、高級料理の定番みたいな銀の丸蓋やな」

なのは「なんだか、こういう蓋があるだけで高級感がにじみ出てく
る気がするよね」

リオス「で、でも……開けるの怖いなあ……」

ヒスイ「そうだな……。流石に食品関係ならば、食べれないものは
出てこないだろうが……」

はやて「まあまあ、議論しとる暇があるんやったら、開いてみた方が早いわ。」

ガチャ……

そう言いながら、はやてが前菜の入っているであろう皿のふたを開ける。

皿の中身 カップヌードル（ミルクシーフード味）

【はやて、リオス、アウトー】

はやて「なんでここまで来てカップヌードルｗｗｗｗ しかもミルクシーフードｗｗ あぎゅー!!」

リオス「ていうかはやてさんも、見つけた瞬間どや顔するのやm……ぐえー!!」

なのは「ていうか、はやてちゃんのみだけみたいだね、カップヌードル」

ティアナ「私達のは普通に美味しそうな料理ですし……」

ヒスイ「だが、ここにはお湯がないぞ？ そんなことで大丈夫なのか？」

フェイトの声『大丈夫だ、問題ない』

シグナムの声『一番いいのを頼む』

【ヒスイ、ティアナ、なのは、アウトー】

なのは「ひ、ヒスイ君のバカああああ！……！……ふぎゅー！」

ティアナ「今はフリ以外の何物でもn……いうー！」

ヒスイ「す、すまん……エルシャダイネタを忘れていて……ふぐー！！」

次々と襲い掛かってくる他作品ネタに、夕食をゆつくり食べること
もままならない一同。

前菜の次はメインディッシュなのだが、次の笑いの刺客はそこで出現することになっていた。

はやて「ふう……よかった、メインディッシュは普通やな……」

リオス「どっちにしろ、味なんて全然わかんないですけどね……」

ティアナ「なんなんでしょうね、このもったいない気分は……」

天の声『皆さん、ここでステージをご覧になってください。今から、
有志による出し物が始まるらしいですよ？』

はやて「……………」

ティアナ「……………」

なのは「……………」

リオス「……………なんだか……………」

ヒスイ「……………だな…嫌な予感しかない……………」

2人の声を代弁するかのように、部屋の照明が消され、レストランにあるステージに光が灯される。
ステージはそれなりに立派なもので、やろうと思えば演劇の一つでもできるくらいのレベルのモノだった。

そして、ステージに備え付けられているスクリーンに、今回の出し物のタイトルなのであろう文字が浮かび上がってきた。

『コードエロティック 反逆の就活生ルーク&逆襲のフェイト それでも僕はやってない』

【全員、アウトー】

リオス「もうどこから突っ込んでいいのかwww ぐは!!」

はやて「ルークとフェイトちゃん、頑張りすぎやってwww はぐ!!」

ティアナ「ていうか、他作品に進出し過ぎwww うにゅん!!」

なのは「コラボっていう範疇を越えてるような……うく!!」

ヒスイ「これでは内容も……ぐ!!」

全員が叩かれたのを見計らったようなタイミングで、スクリーンの映像が動き出す。どうやら、出し物というのは映画の事を指しているようだ。有志によって制作された（超高速で）映画という事だろう。

ここからは、映画（全部やろうとすると時間が足りないので要所のみではありますが）をお楽しみください。なお、リオス達が笑っても、映画は進行していきます。

ナレーション（エステル）『西暦20XX年……プリニアは日本に宣戦布告した……。日本は、日本という名前を失い、あらたにエリア11と名付けられた……。そして、その戦火の中にあつて、気高い魂を失わずに毎日を送っている男が居た……』

クロノ『ええ〜と、それじゃあまずは簡単に自己紹介と自己PRをお願いします』

ルーク『はい、聖祥大学から参りました、ルーク・ハラオウンです。

私の最大の長所は、躊躇わないことです（いろんなことに）――！！」

来る日も来る日も、彼はエントリーシートor履歴書を手に、企業に赴き面接という名のお見合いを繰り返す……

が、世間というモノは厳しい。内定を勝ち取るという事は、生半かな事ではない。この戦いは、自分との闘いである、それもかなりの持久戦である。

『時下、ますますご健勝のことと、お喜び申しあげます。』

このたびは当社の採用試験にご応募いただき、厚くお礼申しあげます。

さて、試験の結果につき慎重に協議いたしました。誠に残念ながら、今回は採用を見送らせていただくことになり、貴意に添えぬ結果となりました。

ご期待に応えられず申し訳ございませんが、悪しからずご了承の程を、お願い申し上げます。

末筆ながら今後のご精進とご発展をお祈りいたします。『

このようなお祈りメールが来たとしても、決して折れてはいけな

そう、この企業と自分では求めているモノ、相性が悪かったのだと納得して前に進むしかない。

そうでもしないと、就職活動においては正気を保っていることなど不可能。

ルーク「間違ってたのは俺じゃない！！！！ 企業の方だ！！！！」

男の叫び。それが如何に無駄且つ、虚しい行為だと知りながらも、人はそれをやめられない。自身の中にある黒い何かを振り払うように、男は叫ぶ。

そんなある日、彼がまたしてもお祈りメールを受け取った日の事だった。

その女は、彼の前に現れた、

リインフォース？（大人モード＆C・C・コスで）「力をあげる代わりに、私の願いを一つだけ叶えてもらおうですう」

ルーク「いいだろう……結ぶぞ！！！！ その契約！！！！」

男は手に入れた、王の力を。ギ〇スを…………

力を手に入れた男は、行動を開始する。彼の選択が、世界をどう変化させるか、それはまだ誰も知らない……

アイリス「こ、この人痴漢です！！！！」

ルーク「揉んでいいのは……捕まる覚悟のある奴だけだ……」

だが、男の霸道は思わぬところで邪魔が入ることになる。そう、痴漢容疑でのタイーホだった。

シャマル裁判長「あなたは、アイリスさんの胸を揉みしだいた。この事実には相違はありませんね？」

ルーク「それでも僕はやってない！！！！！！」

王の力を手にした男の力も、裁判長には通じない。彼のギアスは、『金髪ロングで巨乳でお姉さん属性の、ぶっちゃけフェイトさんに対してのラッキースケベを誘発する』というものだったのだ。

そして、その頃。宇宙^{そら}では新たな動きが……

高官「このルナ2に我々ネオ・ジオンの艦隊が投降した後で、ですか？このアクシズをスィートウォーターに移動させるのは……」

レジラス「その条件が飲んでももらえないのであれば、和平の話は無しですな」

高官「アクシズは我々が買い取ったわけですが……。アクシズをスィートウォーターに移動させる仕事は、我々の艦隊にやらせたいのです……」

レジラス「了解です。アクシズの移動に関しては、装備されている核エンジンがまだ使えますから、大丈夫です」

高官「昔の核エンジンがまだ使える？ そりゃすごいー！！」

フェイト「では……………（…俗物が……………）」

あの金色の閃光、フェイト・ハラOWNが動き出した。

リンフォース？「フェイト・ハラOWNって、一年戦争（性的な意味で）でルークと戦った？」

ルーク「……………姉さん……………」

その一報は、ルークの耳にも届き、痴漢容疑で拘留中だったにも拘らず、彼は宇宙に召集される……………
金色の閃光の恐ろしい計画、隕石落下による地球壊滅作戦を阻止するために。

そして、舞台は宇宙へ……………

ルーク「なんでこんなものを地球に落とす！！？　これでは、地球が寒くなつて人が住めなくなる！！！！　核の冬が来るぞ！！！！」

フェイト「地球に住む者達は、自分たちの事しか考えてない！！！！
だから抹殺すると宣言した！！！！」

ルーク「人が人に罰を与えるなどと……………」

フェイト「わたし、フェイト・ハラOWNが粛清するんだよ、ルーク！！！！」

ルーク「エゴだよそれは！！！」

フェイト「地球が保たん時が来ているのだ！！！」

姉弟同士という、壮絶且つ悲しいMS戦が宇宙に次々と閃光を飛び散らせる……

フェイト「ルーク！！ 地球に残った人たちなんて、私たちのイチヤイチヤを邪魔するだけの、地上のノミだっていうことが何で分からないの！！？」

ルーク「このくらい！！！」

そして、戦いは終局に向かう……。

フェイト「あはははは！！ 私勝ちだね、ルーク！！ 今計算してみたけど、アクシズの後部は地球の引力に引かれて落ちる！！ 君たちの頑張り過ぎだよ！！！」

ルーク「なめるな！！ たかが石ころ1つ！！ ガンダムで押し出してやる！！！」

フェイト「バカな事はやめて！！ アクシズの落下は始まっているんだよ！！？」

ルーク「ねーさんの胸（大きさ的な意味で）は伊達じゃない！！！！！」

瞬間、アクシズに虹が掛かる。人の心の光とでもいえるのか。
ルークとフェイトのダダ甘成分によって、地球の引力に引かれていたアクシズの破片が、コースを外れていく……

こうして、地球は核の冬を迎えることなく、事なきを得たのだった……。

しかし、忘れてはいけない。ルークは痴漢の容疑で拘留中、加えて容疑はまだ晴れていないことを……

当然、内定を取るところの話ではない。

今年の就職内定率、68.8%。この数字の厳しさを舐めていてはいけないのだ。加えて、大学生には、卒業するにあたってやるべきことが残っていた……

フェイト「……ルーク、そういえば卒業論文は……？」

ルーク「ああ……俺は……世界を壊し……世界を……つく……る……」

これが、世界同時不況の煽りを受けた……就活生の悲劇の物語である……

【全員、アウトー】

五人「……ツツコミきれるかあああああああああああ
ああああ……あぐ……」

その断末魔と共に、各自笑った回数だけお尻を叩かれる。その当たりのカウントは抜かりなくアイリスが担当していた。

はやて「なんで痴漢容疑かかつとる人間が地球の運命背負って戦ってるん……？ ていうか、ルークのギアス能力全然意味ないやん……」

リオス「ていうか、リインフォース？さん……何してるんですか……」

なのは「中の人繋がりだろうね……。他作品のオマージュもすごかったし……」

ティアナ「後半なんて、ほとんど逆シ〇アでしたしね……。ルークも、ポンコツ状態なのに、一生懸命演技してましたね……」

ヒスイ「というか、就活生の下り……あれは必要だったのだろうか……」

天の声『そのあたりは、多分作者の心の叫びなんでしょうね……。実際は、お祈りメールは一通貰っちゃったそうですし……。』

SPI2の試験で完全にミスりました by F20C

天の声『さあさあ、出し物はまだまだ続きますから、皆さん最後までお楽しみくださいね』wwww

五人「「「「「もういやだあああああああああああ！！！！！！」」」」」

その後も、はやて達は出し物による笑いの刺客たちの攻撃に晒され、次々とお尻を叩かれていったのだった……………

一日の終わり……………。

夕食を終え、入浴を済ませた一行は、今日のところはさっさと寝ることにした。ちなみに、流石にお風呂では笑いの刺客が来ることはなかった。

普通ならば、今日は夜まで騒ぐぜ、ヒヤッハー！！という、オールナイトな気分にもなるのだが、リオス達はお尻を襲う激痛によってそれどころではなかったのだ。言うまでもなく、全員うつ伏せ、または横になってベッドに入ることになる。

はやて「あ……………お尻が痛いわ……………」

なのは「今日だけで何回叩かれたか分からないね……………」

ティアナ「これが明日も続くと思うと……………はあ……………」

リオス「思ってたんですけど、僕たち観光しに来たんでしたよね？

拷問受けに来たんじゃなくて」

ヒスイ「リオス、言うな……。それはここにいる全員が思っていることだ……」

ベッドに入って、少しの時間話す五人。男女同じ部屋で寝ることは褒められたことではないが……。悲しいけど、これ小説なのよね。

【リオス、アウトー】

リオス「作者あああああ！……！……！はぶし……！」

はやて「地の文で笑かしに来るやなんて……」

なのは「これ、夜も油断できないってことなのかなあ……？」

ティアナ「ていうか、なんでスレッガーさん……」

ヒスイ「作者の趣味だろうな……」

そう、この作者が黙って彼らを眠りに着かせるはずがない。隙あらば、どこでも笑いを狙って手を尽くしてくるのだ。就寝時間だからと言って、決して気は抜けない。

リオス「と、兎に角寝ましょう……！……！もうそれしかないですよ……！」

はやて「やな。耳栓とか欲しいけど、そんなもんもあるはずないし……」

なのは「だよね、寝ちゃえば何されても笑いようもないし」

ティアナ「なんででしょうね……この会話自体がフラグのような気がして……」

ヒスイ「……………zzzzzzzzzz」

リオス達「」「」「ヒスイ（さん）、寝るの早っ！！？」」「」

ヒスイが一足先に、というか異常な寝つきの良さで熟睡モードに入ってしまったようで、リオス達は若干の羨ましさを感じた。
そして、彼らもまた、ヒスイに続こうと布団を被り、寝る態勢に入るのだった……

しかし……その数分後……

天の声『……今夜が山田あゝ』

はやて「……………」

リオス「……………」

ティアナ「……………」

なのは「……………」

天の声『今夜が、山だあゝ』

はやて「……ぶふww」

【はやて、アウトー】

はやて「ちょww ソラ、いい加減にwww はぶん!!」

リオス「うわぁ……これ、僕らを寝かす気ゼロですよ絶対……」

ティアナ「気にしちゃダメよ、ここで負けたら朝までコースだわ……」

なのは「出来るだけ体力を回復しておきたいしね、みんな頑張ろ？」

天の声『今夜が山田ぁ……………』

四人「……………」

天の声『……本屋が……山田ぁ……』

ティアナ「……くふww」

なのは「うふwwww」

【ティアナ、なのは、アウトー】

ティアナ「なんなのよ、本屋が山だって……!ww いあん!!」

なのは「そ、ソラ君www 意地悪しないでえ〜……あふん!!」

【リオス、アウトー】

リオス「だから違うって!!! 決してやましい方向に考えてなんかなくて……はぎゅ!!」

はやて「リオス……あんたって子は……」

ティアナ「ああもう!!! 兎に角寝ましょう!!! このままじゃ、エンドレスでこの流れに取り込まれちゃいます!!!」

天の声「……今夜が 山だあ」

四人「……」

天の声「……今夜が……山田あつふん!!」

四人「……」 (プルプル……) 「……」 必死に耐えてる

天の声「……ショウヘイヘイ……ショウヘイヘイ!!」

四人「……ぶはwww」

【なのは、ティアナ、はやて、リオス、アウトー】

なのは「アクセントの付け方がwww あみゆ!!」

はやて「ていうかこれ、何年か前のオンエアであつたような……ふひゅ!!」

リオス「突っ込んだら負けですよ、はやてさ……んん!!」

ティアナ「ふ、不覚だわ……ふうん!!」

天の声「……シヨウハイヘーイ」

四人「……」

天の声「……シヨウハイヘーイ!!」

はやて「ぶww」

リオス「はふww」

【はやて、リオス、アウトー】

はやて「一体いつまで続くんやwww あふ!!」

リオス「いい加減に……www うご!!」

ティアナ「お二人ともいつまでやってるんですか……」

なのは「特にはやてちゃんとリオス君が集中的にだしね……」

天の声
.....

四人「……（はあ……やつと終わったかな？）」「」「」

一方〇行さん「木イイイ原くウウウウウウン!!!!!!!!!!!!」

【なのは、ティアナ、はやて、リオス、アウトー】

なのは「これはwww卑怯www」なの……うつん!!!」

ティアナ「ていうか、この為だけにわざわざ出張して……」
ww
「あく!!」

はやて「木原君おらへんからWWW あぶし！」

リオス「まさかのインデックスとはwww
ぐは!!」

そして数分後・
・
・
・
・
・

四人
┐
┐
┐
┐
⋮
└
└
└
└

[illegible]

突如流れ出すBGM、『千の風にな〇て』……

四人「……（なんなんだ一体……？）」「」

クロノ『私の、お墓のまゝえでえ……泣かないでください』

四人「（く、クロノ先生……！？）」「」

クロノ『そこに私はいまふんふんへふってなんかふふふん』

リンディ『智和……！ ちゃんと歌いなさい……！』

四人「ぶつぶつぶ」

【なのは、ティアナ、リオス、はやて、アウトー】

はやて「ちょｗｗ これクロノ先生の中の人ネタやんｗｗ くあ……！」

リオス「た、確か、銀魂の中で……杉田智和さんが、千の風にな〇てを歌って……ｗｗ がう……！」

ティアナ「ちゃんと歌えてなかったから、電話でお母さんに怒られたらしいわねｗｗ うきゅ……！」

なのは「なんてマニアックなネタなのかな……ｗｗ あう……！」

こうして、夜は更けていく……。深夜の内に、お尻を何回も叩かれるという珍しい体験をした……。もとい、させられたリオス達。彼らが、作者に言いたいことは、次の一言に限るだろう……

四人「……いい加減に寝かせろおおおおおおおおおおおお！
！……！！」

フェイトの声『いい台詞だ 感動的だな だが無意味だ』

【なのは、ティアナ、はやて、リオス、アウトー】

四人「……おのれディケイドオオオオオオオオオ！！！！！！！！」
「（すぱーん！！）」

第二十九話 絶対に笑ってはいけない南の島 その? (後書き)

F20C「さてさて、次回で絶対に笑ってはいけない南に島はお終いにあります。少しはラブコメ展開も進めないでだし」

ソラ「あ、ちなみに最後のディケイドネタは、作者がググって調べた物です。確か……海東さんって人のセリフだっけ? フェイトさんのセリフは?」

F20C「らしい。最後の、【おのれディケイド!!!】については、ニコ動で字幕として流れたので使ってみました。なんか、流れるにドンぴしゃかなあと思って」

ソラ「仮面ライダーファンの皆さん、とりあえずごめんなさい」

F20C「これ書いたやつ誰だ。ちょっと来い、走って来い」

ソラ「お前だよ。ほれ、土下座しろよ」

F20C「いや……なんか頭がヒットするであろうポイントに五寸釘がさり気無くセットしてあるんだけど?」

ソラ「残像だ」

F20C「なわけあるか!!!!!!」

第三十話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？（前書き）

さてさて、今回で絶対に笑ってはいけない南の島もお終いになります。

私の貧相なネタの数々ではありましたが、皆さんの笑いにつながったのでしたら幸いです。

読者様方からのご要望があれば、またやりたいなと思いますw

では、本編をお楽しみくださいませ

第三十話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？

旅行……もとい、絶対に笑ってはいけない南の島、二日目の朝。昨晩は、ぎりぎりまで笑いの刺客（声のみ）の妨害によって寝る事が出来なかったはやて達だったが、相当疲れていたのか、気が付けば熟睡してしまっていたようだ。

天の声『はあゝい、おはようございます皆さん。昨夜はぐっすり眠れましたか？』

はやて&リオス&なのは&ティアナ「「「お陰様でね！……！！！」」」

ヒスイ「（俺の寝てる間に一体何が………？）」

世の中には知らないままの方が幸せだという事もある。まあ、今回に限っては、ヒスイの早寝スキルという彼自身の力による部分が大きいが。

さてさて、只今一行は朝の朝食を済ませ、ホテルのロビーに集まっていた。今日は、午前中は海水浴という事で、海に繰り出すという事になっている。

漸く、旅行に来たという感覚を覚えるが、言うまでもなくただ単に海水浴などさせるつもりは全くない。

天の声『この絶対に笑ってはいけない南の島も、残すところあと半

日。つまりは今日のお昼までってことですね。名残惜しくもありますが、最後まで頑張ってくださいね』

はやて「はぁ……やっと終わるんかいな……」

リオス「それでもお昼までか……。海水浴の間も何かしら来るって思ってた間違いなだろうなあ……」

ティアナ「でも、終わりが見えて来たから精神的には少し楽に……」

リオスの父・ユリウス『ガンダム！！ガンダム！！私はガンダム！！愛を切り裂き！！その手に勝利をこじ開ける！！……人呼んで……グラハム・ガンダム・阿修羅・SPECIAL！！！！』

【全員、アウトー】

はやて「忘れとったwww ここがロビーやっちゅうことをwww w はぶし！！」

ティアナ「ていうか、また武力介入できないシリーズwww はうん！！」

なのは「リオスのお父さんwww どや顔はやめ……はにや！！」

ヒスイ「昨日の事を忘れていた……ぐは！！」

リオス「父さああああああんん！！！！！！！！？？？ふ

べし……！」

天の声『では、景気づけもそこそこに、そろそろ海に繰り出しましょうか。道は昨日の案内にあった通りですが、念のために迷わないようにお願いしますね』

はやて「景気づけで一々叩かれとつたら身が持たんわ……」

リオス「ほんとすみません……父さんも結構乗り気なみたいで……」

ティアナ「あんたの所為じゃないわよ……多分……」

ユリウス『破廉恥だぞ……！！！！ ガンダムウウウウウ……！！！！』

【はやて、ティアナ、リオス、アウトー】

はやて「やつぱりリオス……！！一回だけでいいからストレート決めさせてくれへん……！！？ あぐし……！！」

ティアナ「あんたの所為じゃないって思っても、体が勝手に……ふにゃん……！！」

リオス「ぐは……！！？（ティアナ&はやて&お仕置き要因によるトライアングルアタック）」

天の声『皆さん、仲がよろしいようで見ているこっちとしても気持

ちがいいですね』

三人「「「これのどこが仲良さげ!!???'」」」

とまあ、こんな感じでがやがやしなから、ユリウスのグラハム攻撃に晒されながらも、一行は海に繰り出すのだった。

ルークの声『これから毎日家を焼こうぜ?』

【リオス、はやて、アウトー】

はやて「チャー研www ていうか、このネタ分かる人居るんかw
w はぶえ!!」

リオス「ジュラル星人どこだよwww ふご!!」

海について約五秒、早速のルークの奇襲にはやてとリオスが撃墜された。というか、チャー研ネタが分かる方がいらっしやることを願うばかりである。

ティアナ「ていうか、ルークってもう結構幼児化が治って来てるよ
うな……?」

なのは「昨日の映画の件もあるし……まさかとは思うけど……」

ヒスイ「まあ、どちらにしろこの企画が終わった後にでも何らかの対策を練る必要がある事だけは確かだな」

はやて「そやかて、それこそ病院とか、下手したら研究機関あたりに……」

フェイトの声『ボルガ博士……！ お許しください……！』

【はやて、なのは、ティアナ、ヒスイ、アウトー】

はやて「またしてもチャー研www はぶえ……！」

なのは「フォイトちゃんもかなりセリフに力が……きやう……！」

ティアナ「というか、さっきのはやてさんの研究機関から燃え広がりましたよね確実に……ううん……！」

ヒスイ「発言には十分注意を……ぐは……！」

天の声『さて、皆さんの水着はこちらで用意しておきましたので、あちらの更衣室で着替えてきてくださいな。あ、一応断っておきませんが、水着のチェンジは一切認められておりませんので悪しからず』

はやて「……読めたな……」

リオス「ですね……………」

ティアナ「うう……………チェンジ不可つてのが如何にもな感じよね……………」

なのは「で、でもでも……………裸で泳ぐわけにもいかないし……………」

リオス「……………ぐは！！！？（鼻血ぶー）」

【リオス、いろんな意味でアウトー】

リオス「だって……………だって仕方ないじゃないか！！！！ 僕だって男……………はぐ！！！！」

ヒスイ「何を自滅しているんだお前は……………。ほら、ともかくここで間誤付いていても何も始まらん、さっさと着替えるでしょう」

四人「……………は、は……………（はあ……………）」

ヒスイに促され、彼も含めて若干の溜息を吐きながらも、更衣室に入って行ったリオス達。

念のために言うておくが、ムフフなイベントなどはありません。これ、エロゲじゃねーから！！！！

そして、待つこと五分……………。

まず最初に出てきたのは……………

なのは「よ、よかったあ……………普通の水着だったよお……………」

ティアナ「わ、私もです。まあ、これで水着の心配は要りませんね……。問題は後続の三人ですけど……」

なのはとティアナの水着は、普通のと言ってもそれなりにセンスのいいデザインの水着だった。（どんな感じ水着かは、皆さんの脳内妄想で保管してください。作者のセンスの無さが露呈してしまうので）

しかし、ティアナの言う通り、問題は後続の三人である。下手をすれば、水着事態が笑いの武器と化している場合がかなりの可能性があるのだ。

自分たちの水着が普通だからと言って、安心ばかりしてられない。

そして、その懸念は現実となって二人を襲うことになる。

はやて「……………お、お待たせ……………」

はやての水着 救命胴衣

【なのは、ティアナ、アウトー】

なのは「水着って……………水着ってなんだったk……………ふぎゅー!!」

ティアナ「最初から溺れる気満々www はうん!!!!」

はやて「……………しかもリバーシブルや」救命胴衣の裏地を見せながら。

【なのは、ティアナ、アウトー】

なのは「はやてちゃああああん！！！！？？ あうー！！」

ティアナ「救命胴衣によくもまあリバーシブル仕様なんて作れましてねww はにゅー！！」

はやて「まあ、浮かぶからええんやけどな……。他の二人はまだ見たいやな……。って、来たみたいやな……。ぶふww」

ヒスイ「すまない、待たせた」

ヒスイの水着 ライダースパッツ＋袖の部分を切り取った革ジャン（ロッカー的な）

【はやて、なのは、ティアナ、アウトー】

はやて「もうそれ水着やないやん！！！！ はうー！！」

なのは「というか、なんて言うコーディネイト（もちろん悪い意味で）www うきゅー！！」

ティアナ「なんで革ジャンの袖ギザギザに切つてあるのよおお！！！！ あうんー！！」

ヒスイ「心配は要らん、ライダースパッツの下はボクサーパンツだから」

【はやて、ティアナ、アウトー】

はやて「それも水着やないから！！！！ ただの下着やから！！！！
ほげ！！！」

ティアナ「ていうか、一々見せないでくだs……くうん！！！」

なのは「危なかった……。ええと、後はリオス君だけなんだけど………」

ヒスイ「あいつなら、何やら悶絶していたぞ？ 更衣室から妙な悲鳴が聞こえていたしな」

はやて「あの子の水着もかなりアレなんやろうな………」

ティアナ「なんで泳ぐ前からこんなに息が上がってるのかしら………」

と、最後の一人であるリオスの到着を待つはやて達。はやてとヒスイの姿を見て、若干の注目を浴びつつある集団が、そこにはあった。そして、待つこと三分ほど。ようやくリオスが更衣室から出てきたのだが………」

リオス「お、お、……お待たせしました……／／／／／／／／／／」

リオスの水着 普通の水着（女性用）

はやて「……………」

なのは「……………」

ティアナ「……………」

ヒスイ「……………」

リオス「……………（死にたい……………）……………」

まさかの女物の水着装備のリオスに、笑いではなく静寂がはやて達を襲った。

というか、ヒスイを除く女性陣は凍り付いていたのだ。リオスの水着姿（女物）があまりにも似合いすぎていたために……………」

はやて「ま、負けた……………orz」

ティアナ「リオス……………あんたがそれやったら反則も良い所よ……………orz」

なのは「なんでだろう……………女の子として完全に負けちゃった気がする……………orz」

リオス「やめてください！！！！お願いですから僕のこの格好見て傷付かないで！！！！泣きたくなってくるから！！！！！」

リオスのまさかの水着姿に、笑いではなく羨望という感情を抱いてしまったのは達は、その場に崩れ落ちてしまう。彼女たちも十分に似合っている（はやての救命胴衣を除く）のだが、男の身でありながら、ここまで女物の水着を着こなすリオスに対して、劣等感を抱いてしまったようだ。

リオス「~~~~~っ！！！！！！／／／／／／／すみません、僕先にホテルに帰ってます！！！！」

なのは「あ！　り、リオス君！！？」

はやて「ああゝあ、逃げてしもうた……」

ヒスイ「あれはお前たちが悪い……」

羞恥心のあまり、リオスはその場からの脱出を図る。ホテルまで水着のまま走り抜けるというのも、それはそれで恥ずかしいと思うが、今の彼にそんなことを考えている余裕などあるはずもなかった。

がしかし、この企画の運営委員がそんな暴挙を許すはずもない。対策は無論、展開済みある。

リオス「こ、このままホテルまで一直線！！　逃げ切ってや……」

一方〇行さん『悪いが、こっから先は一方通行だあ！！！！！！』

【リオス、アウトー】

リオス「ちくしょおおおおおおおおお！！！！！！
あぐ！！！！」

はやて「あ、なんか捕まった」

ティアナ「ついでにペナルティなんでしょうか……タイキック食らってますね……」

なのは「あの白い髪の男の子は一体誰なんだろう……？」

ヒスイ「ゲストか何かだろう……」

天の声『さて、皆さんの着替えも終わったところで、海を満喫するためにまずはテンプレな遊びを試みましょうか？』

はやて「テンプレて……この一本の棒から推測できる遊びって一個くらいしかないんやけど……」

なのは「それに目隠しに……少し離れたところに置いてあるスイカ……」

ヒスイ「典型的なスイカ割りだな」

天の声『まあ、そうですね。では、まずはお手本をお見せ

しますので、皆さんもお手本のとおりにスイカを割っちゃってください。お願いしまーす！！！！」

五人「……手本？」「……」

一行が戸惑っている中、突如海の家でスタンバイしていたのであるう、どこかで見たことのあるピンク色の長髪をポニテにした、我儘なボディの持ち主なお姉さんがやって来た。

そして、彼女の手にはレヴァ剣を模した木刀が握られており……

スパアアアアン！！！！

抜刀すると、神速の太刀を以てスイカを真つ二つ、いや綺麗に六等分に切り分けてしまった。

そして、ポニテのお姉さん……もうなんだか面倒なのでシグナムさんがはやて達の方に視線を向けて、どこか興奮したような表情でこう言った。

シグナム「濡れるっ！！！！！！」

【全員、アウトー】

はやて「毒島さんｗｗｗｗ あぶ！！」

リオス「スイカ割りってそういう遊びじゃないからｗｗｗｗ ぐは！！」

はやて「確かに、確かにあれもスイカッパではあるけどもwww
はぐえー！」

リオス「あの二人は一体何にしてんのさ！！！　こんな公衆の面前
でwww　ううー！」

なのは「た、確かにフェイトちゃんのはスイカ……かもしれないね
……」

ティアナ「あれを見るといつも泣きなくなってくるんですよ……」

ヒスイ「あの様子を見ると、ルークの幼児化はまだ治ってはいない
ようだな……」

はやて「はあ……なんか、あの二人のポンコツ具合見てたら、すごい
疲れてしもたわ……」

リオス「大人しくスイカ割りでもしましょうか……」

なのは「そ、そだね……」

その後、一行はなんとか一太刀でスイカを六等分しようと四苦八苦
していたが、実現することはなかったという……

天の声『はい、それでは。絶対に笑ってはいけない南の島、間も

なく終了となります』

スイカ割りなど、海をそれなりに満喫した一行に、ようやく良いコースがやって来る。即ち、この笑いを封印するという企画、絶対に笑ってはいけない南の島の終了時刻となったことだった。

はやて「や、やっと終わるんか……」

なのは「な、長かったね……」

ティアナ「うう……お尻が痛い……」

リオス「僕は心が折れそうだよ……いろんな意味で……」

ヒスイ「リオスは特に難儀だったな……」

一行は、終了間際の知らせを聞き、ホツと胸を撫で下ろす。ようやく、笑いという感情を抑え込むという苦痛から解放されるのだ。

やはり、人間は我慢をし過ぎると、逆に体に悪いという事が証明された。彼らのお尻のダメージによって。

「はやて、でも、なんか嫌な予感がするんやわ……」

リオス「はやてさんですか？ 実は僕もです」

ティアナ「まあ、作者が考えた企画なんだし、このまま平和に終わるなんて思っていないけど……」

フェイトの声「あ、アメリカアアアアアアアアアア！！！！！！！」

ルークの声『さすがゴッグだ、なんともないぜ!』

【全員、アウトー】

はやて「か、カクリコンwww はぶえ!!」

リオス「ルークの方は、まさかのコーカ・ラサ曹長www あぶえ!!」

ティアナ「ゆ、油断してたわ……………きゃう!!」

なのは「作者さん、どれだけガンダムネタが好きなの……………? あう!!」

ヒスイ「フェイトもルークも、この企画を通して声優でも始めたらどうなんだ……………ぐ!!」

終了間際になっても必要に攻め立ててくる。この作者、容赦がない。だが、まだまだ最後の火花が残っているのだ。奴の存在を、皆さんはお忘れではないだろうか?

天の声『あはは、皆さんの警戒心もかなりのレベルになってしまいましたね。おっと、皆さん見てください。あちらに変質者が出現したようですよ?』

シグナム（警官のコスプレ）『ほら、キリキリ歩け、この変態め』

スカリエツティ「違うよ。私は変態じゃない。私は下半身を露出させてると何か興奮することに気付いただけなのさ。変態じゃない。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ」

【全員、アウトー】

全員「スカリエツティイイイイイイイイ！！！」
はにゅん！！！！」（スパーン！！）

そうして、彼らの叫びと同時に絶対に笑ってはいけない南の島、終了の合図がホテルに響き渡り、この地獄のような、罰ゲームのような企画は幕を閉じたのだった……

Next Episode.....

「なのは「もう……！！」 リオス君の分からず屋……！！」

リオス「なのはさんだって……！　人の気も知らないで……！！！！」

すれ違ふ二人……

バカその？「はっはあ！！　こんな上物の姉ちゃんを見つけちゃう
とはなあ~~~~」

バカその？「へへへ……今夜はお楽しみだぜ……」

なのは「い、いや！！！！　離してください！！！！　触らないで！！！！」

なのはに迫る危機……

リオス「うう……………」

バカ（ry「はっ！！王子様気取りもいいけどよお…………多勢に無勢
って言葉知ってるかあ？」

なのは「り、リオス君！！」

駆けつけるリオス……だが……

ソラ「ううん…………とりあえず、一人残らず三分の二殺してこと
でいいのかな？」

エステル「そ、それってほとんど死んでるんじゃない…………？」

駆けつける助っ人…………のような悪役

そして……………ようやく奴が帰ってくる……！

ルーク「エロティック帝国軍の皆よ……！！ 私は帰って来た……！！」
「……」

円卓のバカ「閣下……！！閣下……！！閣下……！！閣下……！！」

円卓のバカ「ジーク・ハイル……！！ハイル・ルーク……！！」

乞うご期待………？

第三十話 絶対に笑ってはいけない南の島 その？（後書き）

F20C「さて、やっとこさ終わりましたね。絶対に笑ってはいけない南の島」

ソラ「皆さん（読者様）が楽しんでいただけたのなら何よりだよね」

エステル「で、でも、はやてさん達……ちょっと可哀そうかも……」

F20C「これを機に、皆さんにはM属性に目覚めて頂くという素敵過ぎるアイデアが……」

はやて達「……ほんと、勘弁してください」「……」

F20C「さて、今回はラブコメ回ですね。リオス君となのはさんにラブコメってもらいますので。ていうか、いい加減一組くらいくっ付けようかしら？」

ソラ「そこから鬱展開に持って行くのか……」

F20C「なぜバレたし」

リオス&なのは「普通にハッピーエンドでお願いします（真剣な表情で）」「」

F20C「知ってるか？私の最近の好きなエロゲーのジャンルが……鬱ゲーだという事を……」

> な、なんだってー！？

はやて「何を言ってるんやあのアホ三人は……」

第三十一話 あれ？スクラパって、こんなシリアスダークなお話だっけ？ 前編

どうも、地震のニュースが絶えませんね……F20Cでございます。
自然の力の恐ろしさ、まさに脅威です。

さてさて、こんな状況下ではございますが、今週のスクラパも楽しく行きたいと思います。

タイトルにありますシリアスダーク……前半は全くそんな影も形もありません。というか、いつも通りのスクラパですね……

今回の見どころは、フェイトさんの目覚めでございますww

でわ、本編をどうぞ〜

「close to my love 瞳閉じて、いつか叶うから」
素直な気持ち抱……」[illegible]

そしてお次はきしめん……もとい、紗織無双である。ちなみに、上がなのは、真中がフエイト、きしめん弾幕はルーク達のモノである。弾幕、薄いぞ！！何やってんの！！！！

「あれ？　今なんか変な声聞こえんかった？」

「気のせいでしょう?」

はやてとリオスが聞こえるはずのない声を感じ取りながらも、ライプは続く。というか、先ほどからなのはとフェイトだけしか歌っていないような気がするが気にしない方が良さそう。

「いやはや、お二人とも歌がお上手なんですね」

「私もびっくりしました！　紅白歌合戦に出たり、ヘッドつて呼ばれたり、もしくは横浜アリーナでコンサート開かれてたり、王国のお姫様のな存在だったりしてる方たちと、お声がソックリでしたね？」

「エステル、中の人ネタはその辺でやめとき。あんたかて、日本武道館でコンサート開いたりしてる、作者が大ファンな人と声ソックリやから」

ソラとエステルは、なのはとフェイトの歌の上手さを知らなかった

ので、中の人ネタを漏らしつつも、二人の歌を大絶賛した。

ほっちゃーん！ ほ、ほーっ、ホアアーツ！！ ホアアーツ！！

「ねえ？ 今変な叫び声聞こえなかった？」

「気の所為ではないでしょうか？」

今度はティアナとアイリスが変な声を受信するが、またしても華麗なスルー技術を見せてくれた。

絶対に笑ってはいけない南の島終了後、打ち上げということで一行はホテルのカラオケボックスを貸し切って、大いに盛り上がるという事になり、現在に至るわけだが。

予想通りと言うか、何と言うか、室内は大盛り上がりである。

「よし！！ 次はうちやで〜 そやな…………… 『神田川』でも……………」

「なんで、か〇や姫！！？ あんた年いくつだよ??!!」

はやての渋すぎる選曲に、リオスが間髪入れずに突っ込む。いつもならルークと交互にツッコミを入れているところなのだが、今はそうも言っていない状況なので仕方ないだろう。

「おねーちゃん、ジュース飲みたい〜」

「ダメ。さっき飲んだばかりだよ？ ジュースばかり飲んでると、夜トイレに行くことになっちゃうんだから、めっ!!」

「ぶうゝ、ぶうゝ」 ルークの顔（- -）ブーブー

「こつちもこつちで……ああ、なんか疲れるよ、突っ込み役が僕しかいないと……」

ポンコツルークと、すっかりお姉ちゃんなフェイトの姿に、お尻の痛みと共に頭痛がしてく気さえしたりオスである。この旅の間、彼にはいろんな意味で心の休まる時はない。

ちなみに、再度断っておくが、今現在のルークは通常サイズのルークではない。デフォルメキャラ化された、ポンコツビルークが今の彼である。（こもわた遙華先生原画が理想。分からない場合はググってみてください。超かわいいキャラを書いていらっします）

「にははは……大丈夫だよ、フェイトちゃん。もし、ルーク君がトイレに行きたくなったら、フェイトちゃんが連れて行ってあげればいいんだよ。」

「……………」 フェイトさん、何かをシュミレーション中…… Now Loading……

待つこと数秒……突如、フェイトさんの瞳が になる。

「る、ルーク……／／／／／ 可愛いころに戻ってたはずなのに……そ、そんな事……／／／／／はう……だ、ダメ……／／／／／ そんな蔑むような……家畜を見るような冷たい目で見下されちゃうと……私い……ふみゅう」（フェイトさん、両目が の状態で昇天）

「ちょっと待って！！？　今の数秒の間で、フェイトさんの脳内では何が起こってたの！！！！？　明らかに、フェイトさんがMに目覚めてたよね！！　蔑まれて悦んでたよね今！！！！？」

「トイレの下りから、どこをどう間違ったらSMっぽいドラマが出来上がるんや……。相変わらず、フェイトちゃんの妄想族っぷりは神の領域やで……」

彼女の脳内の造りの恐ろしさに戦慄すら覚えるリオスとはやて。前々から、そっちの気があるかとは思っていたが、こんな形でそれが露呈するなど、誰が予想できただろうか。

「はい、ルーク君。私のオレンジジュース飲む？　飲みかけなんだけど……」

「ありがとう　なのはおねーちゃん」

「うんうん　ちゃんとお礼まで言えるんだね。偉いね」

でもって、ポンコツルークはさり気無く『なのはさんの飲みかけのジュース』という超プレミアアイテムをゲットしていた。

なのはもフェイト程ではないが、子供の事は好きなので、ポンコツ化したルークは同年代の男の子には見えていないのだろう。

だが、傍から見れば微笑ましいシーンも、見る人によっては大変面白くないモノになってしまうという事がある。まあ、そこが人間関係の面白いところでもあるのだが。

「（ななななななななな、なのはさんの……………飲みかけのジュースだとおおおおおお！！！！！！！！？　る、ルークの奴、ポンコ

ツ化してるのを良い事に、なんて羨まし……けしからんアイテムを
おおおおお！！！！？）」

そう、なのはの事をもう十年近く思い続けている、リオス・コーネ
ルドその人である。

ルークがなのはからもらったジュースを飲んだ瞬間……

飲みかけのジュースⅡ間接 KISS

という、黄金の方程式が彼の脳内で、光の速さを以て弾き出された。
黄金の方程式には他にも種類があり、『お風呂の戸を開けるⅡ同居
人の女性と鉢合わせ』、『気になる女の子Ⅱ何故かちよつかいを出
したくなる』などなど、大統領時代のルークが次々と公式を証明し
てきたのだ。

『絶対 黄金 方程式 〽ここを押さえろ！！ フラグを建てる！
！〽 ルーク・ハラウン著 税込620円』を参考にし、皆さ
んも勉強しておいてください。気の早いセンター試験対策です。

「な、なのはさん？ 見た目はチビキャラですけど、ルークは一応
男で……」

「え？ なにか……まずいかな……？」

リオスが動揺を隠せない様子でなのはに進言するも、彼女としても
何一つ悪いことはしていないし、ルークに対するピンク色の感情を
持っているというわけでもない。

彼女の場合、昔に戻ったかのようなルークを見ていると、少し可愛
がってあげようという思いからくる優しさなのだ、先ほどのジュ
ースの件は。

「いや……その……まずいと言いますか……その……」

「なんや？ えらい煮え切らへん態度やなあ？ もう、素直に言うたらええやん。『なのはちゃん』の飲みかけジュースを貰ったルークが羨m……ふごへ！！？』」

言い詰まったりリオスを、奮い立たせるためにはやてのからかいだったが、その瞬間絶対に笑ってはいけない南の島にて、大ダメージを負った彼女のお尻に、どこから飛び出してきたのかハリセンが炸裂していた。（見れば、リオスの目が怪しく輝き、はやてに怖い笑みを浮かべていた。）

「はやてさん？ よほどお尻の残機に自信がおありのようですね？」

「ほんま、すみませんでした……」

はやては目にも止まらぬ速さでリオスに対して土下座して謝った。流石に、これ以上のお尻への被弾は避けたいところなのだろう。

「リオス君？」

「あ、あのえつと……その……ルークには……随分優しい……っていうか……」

「リオス君、ハッキリ言ってくれないと、私も分かんないよ？」

言えない。

ルークとは言え、ポンコツな子供に嫉妬してしまったなど、口が裂けても言えるはずもない。リオスとて、立派な漢。女装がやたらと似合うが、漢なのである。

漢のプライドを守るために、彼にも譲れないモノ、ハッキリと言えないことだつてあるのだ。

その時である、事態を最悪な方向に。そして、ある種この二人の關係性を変化させる原因となる事件が発生する。ポンコツ化した、我らが皇帝陛下の手によって……

「なのはおねーちゃん」

「ひゃう!？ つて、ルーク君？ にやはは……今日は随分甘えんぼさんだね？ なんだか昔を思い出すなあ……。ルーク君つてば、いつもフェイトちゃんの後ろにくっ付いてたもんね」

「……………っ!」

そう、あるうことがポンコツルークがなのはに抱き付いてしまったのだ。加えて、なのはもそれを嫌がることも無く、逆に微笑ましいものを見るような目で優しげに対応した。

リオスは、それを見てしまい、心の中の黒いモヤモヤが急激に大きくなるのを肌で感じていた。

しかし、その反面。その黒く、嫌な感情を抑えることもできず、その気さえ起らなかった。

この時リオスは、どうしようもないくらいルークに焼き餅を焼いていた。

「る、ルーク!!! そんな軽々しく、女の人に抱き付いちゃダメだろ!!! 今すぐ離れてくれ!!!」

「ひう!!!?」

しまった……。

そう思った時には、全てが遅かった。大きな声を出して、ルークを怒鳴ってしまったリオス。ルークは一瞬にして縮み上がり、なのはから離れて未だにムニヤムニ言いながら気を失っているフェイトの陰に隠れてしまった。

「（やつちゃった……………）」

人間と言う生き物は、なかなかどうして合理的にはなり切れない。どんなに非情を演じたところで、結局は感情に行動が引っ張られてしまう生き物だ。感情に引っ張られながら生きていくのが人間なのだから。

そして、今回のリオスの焼き餅もまた、人間であるのなら当然の感情と、それを起因とした行動だった。

「リオス君！！　今のルーク君は、いつものルーク君じゃないんだよ！！？　なのに、そんな大声出しちゃダメだよ！！」

「で、でも！！　どうあったって、ルークはルークでしょう！！　どんな状況でも軽率な行動は控えるべきだと思います」

ルークを怯えさせたりリオスに、なのはが少し怒った様子で食って掛かる。対するリオスは、先ほどの行為を後悔しながらも、感情に引っ張られながら反論してしまう。

なにやら、雲行きが怪しくなってきたカラオケボックス。はやてはやれやれと言った表情を浮かべながらも、状況を静観していた。

「（この二人、かなりの頑固者やしなあ……………。うちが何か言ったと

こで、意見を変えるやなんて思えんし……。ここは流れに任せてみよか……）」

はやては冷静にそう考え、あえて事態を静観することにした。それに、たまには新しい刺激でも与えないと、この二人の仲は進行しないとも考えていた。

「ね、ねえソラ……。止めなくていいの？」

「そうね……。ちょっと雲行きが怪しくなってきたわ……。」

「お二人とも、怖い顔をされてます……。」

エステル、ティアナ、アイリスもリオスとなのはの様子を見ながら、傍らで注文したピザを美味しそうに食べているソラを見ながら言う。彼ならば、いざとなったら力づくで事態の收拾が出来るだろう。しかし……

「放つとけ、放つとけ。あの二人、見た感じ普段から全然喧嘩とかしそうにないし……。たまには空気の入替えでもした方が良く。それに、他人の色恋沙汰には興味ない」

「そ、そんなあ……。」

頼みの綱のソラも、冷静な様子でそう言うに留まった。エステルは情けない声を出しながら、彼の言うとおりにするしかなかった。

そして、その間もなのはとリオスの良い争いはヒートアップしていく。お互い、全く意見を譲ろうとしないので、事態は平行線を進んでしまっている。

「もう!!! リオス君の分からず屋!!!!!!」

「なのはさんだって!!!! 人の気も知らないで!!!!!!」

なのはが珍しく大きな声をだし、リオスもそれに対抗して怒鳴ってしまう。こんなことは本当は言いたくもない、喧嘩なんてしたくもなかった。

でも、ここで相手の意見に合わせてしまったら、それはなのはに自分の気持ちを偽ってしまうことになる。

好きな相手には、正直な気持ちを伝えて、気持ちを通い合わせていきたい。時には、そういう話術や手法を取ることが正解な時もある。だが、リオスの中の本能のようなものが告げてきた。『それはダメだ』と……

「もう知らない!!!! リオス君のバカ!!!!!!」

「ちよ、なのはさん!!?」

「……………」

そして、平行線をたどった言い争いの終着点は、なのはの捨て台詞と、荒っぽいドアの開け方によって生まれた、無機質な金属音だけだった。

ティアナが、カラオケボックスを出て行ったなのはに声を掛けようとするも、なのはは足早にその場を後にしてしまい、取りつく島もなかった。

リオスはただ、少し悲しそうな表情を浮かべて、俯いていた。

カラオケオックスを飛び出したのはは、トボトボとホテルまでの道のりを一人で歩いていて。
時刻は夕方を越え、段々と夕焼けが水平線から姿を消して、街は夜の化粧を施されつつある。

「……………リオス君の……………ばか……………」

ぼそっと、なのはは先ほどまで言い争いをしていた、一つ年下の気になる男の子の名前を呟いていた。

彼女とて、リオスとあんな言い争いをしたいはずはなかった。しかし、いつもと違う彼の様子と、ルークへの態度は許せなかった。いつもの優しい彼ならば絶対にやらないことをやったことが、なのはにとってはどうしようもなく腹立たしいことだった。

人間、生きていれば笑うときもあれば、怒る時もある。気に食わないことがあって、それに対して反抗したくもなる。

それこそが感情というものであり、なのはもそれに従ったまでだ。

感情を押し殺してまで、相手の意見に合わせなければいけないというのは、世間体を気にする良家の離婚間際の男女だけで十分である。フレッシュな彼らには、お互いのありのままの気持ちをぶつけてでもお互いを知ろうとすることの方が余程お似合いだ。

「で、でも……………私もちょっと……………言い過ぎちゃったかな……………」

後悔するのも、また人間らしさの一つだ。そこから学べることもあれば、一生そこで立ち止まってしまふことだってある。

人生のターニングポイントは無限に存在するが、今回の喧嘩もまた、それに入っている事だろう。

なのはは、先ほどの言い争いを少し後悔しながら歩く。

「（少し……頭冷やした方が良いかもね……）」

その台詞をなのはが口にとすると、背筋が凍る思いになってしまふのはなぜだろうか？

だが、この時のなのはは完全に不注意だった。ボーっとしたまま街中を、見知らぬ土地の夜の世界を女一人で歩いていたことが……

ドンッ！！

「きゃっ！！」

「うお！！？」

ボーっとしていたのが災いしたのか、道角で人とぶつかってしまったようだ。それも、野太い声を聞く限り、相手は男のようである。

「おいおいおい……何ぶつかって来てくれたんの君い？」

「あ、す、すみません……少しボーっとしてて……」

「ボーっとだあ?? おいどうしてくれんだよ……アニキの腕折れっちゃったかもしれねえだろう?」

「うっはあああああ！！！！ 痛たたたたた！！！！ やべえよ、これ折れっただって。絶対折れたって！！！」

すぐに謝るなのはだったが、ぶつかった男と、その取り巻き二人が因縁をつけてくる。

というか、一体いつの時代の当たり屋だと言わんばかりの猿芝居だが、猛禽類のような目には下心と、暴力的な意思が見て取れた。

「こりゃ、慰謝料だな。手術料合わせて200万、耳揃えて払ってもらおうかあ？」

「ちょ、ちよつとぶつかっただけで折れるわけ……………」

「つるつせえんだよ！！！！ こっちは被害者だぞこらあ！！？金がねえなら、体で払えや！！！」

大きな声を出しながら、チンピラの一人がなのはの手を掴む。助けを呼ばうとなのはが声を上げようとするが、すぐに口を塞がれてしまい声を出すこともできなくなってしまった。悪いことに、なのはが連中とディープインパクトした場所は、人のあまり通らない場所であり、夜が近づいているという事で、周囲は閑散としていた。

「はっはあ！！ こんな上物の姉ちゃんを見つけちまうとはなあ」
「」

「へへへ……今夜はお楽しみだぜ……」

「（り、リオス君……………！！！！）」

男たちは、下心全開の笑みを浮かべながら、なのはを拘束し、どこかに連れて行こうとする。女の細腕で、なのはがこの拘束から抜け出すのは不可能だった。

彼女に出来ることは、リオスの名前を心の中で叫ぶことだけだった
……

『もしもし？ ソラですか？』

「おー、シオン。ようやくと連絡が付いたな」

『その言葉、そっくりそのままお返しますよ？ まったく、あなたもエステルも本来の仕事をサボってどこをほつつき歩いているんですか？』

「今は、迷子のお姫様探し中だよ。」

ソラは、エステルを伴って夜の街を歩いていた。無論、遊んでいるわけではない。

リオスとの言い争いの末に、カラオケボックスを飛び出していったなのはを探す為である。

そして、その傍ら、ソラは携帯電話で友人兼腹心であるシオンと連絡を取っていた。

ちなみに、リオスもまたソラとは別ルートでなのはを探している。

はやてはティアナと共に、なのはの搜索を開始しており、アイリスはカラオケボックスに残って昇天中のフェイトと、ポンコツルークのお世話中である。

『厄介ごとですか？』

「いんや。ただの痴話喧嘩だ。でもって、その末にロメオのお姫様が夜の街に単身飛び出して行っちゃった。すぐに回収すれば何の問題もない、ノープロBLEMだ」

ロメオ「リオス、お姫様」なのはである。

冗談を言うかのように、電話の先に居るシオンにそう言ったのだが、向こうから帰って来た答えは、ソラの思っていたものとは違っていた。

『ふむ……少し、まずいかもしれませんね』

「ん？ どういうことだよ？」

『いえ、確定したわけではないのですが、今回そちらの街の民警から依頼されていた仕事のターゲット……その下っ端の連中にね……最近悪い噂が絶えないらしいんですよ。まあ、シャブ売り歩いてる連中の下っ端なので、悪い噂の定義付も難しいところなんですけどね』

彼らだけの秘密の話。この時点で、ソラ達が絶対に笑ってはいけない南の島のアシスタント役だけで、日本から遠く離れたこの地に来たわけではないことが分かった。

そつだ、彼らは遊びに來たわけではない。これはアオミネの家の、
列記とした『仕事』である。

『女性を拉致監禁しての暴行……が主な容疑となっています。そ
ちらの民警も捜査は続けているようなのですが、未だに成果は上が
っていないようです。もしかすると、その国の人間ではないモノの
仕業なのかもしれませんね』

「穏やかじゃないな。と言うかシオン、この話を俺が聞いた時点で、
何かのフラグが成立した気がするんだが？」

『奇遇ですね。私も同じことを考えていました』

メタな発言はやめてもらいたいところだが、彼らの会話は続いて行
く。どこの地域、町、国にも薄暗い部分は存在している。

問題は、その薄暗い部分が、人が暮らしている生活コミュニテイの
どこまでに浸透しているかである。

ソラ達の仕事と言うのは、その薄暗い部分の根元を抉り出すことだ。
依頼通りに……

時に、アウトサイダーな人間にしか解決しえない問題というモノが、
世の中にはあるものだ。

『兎に角、そのお姫様とやらの安全を第一に。私たちの杞憂であれ
ばいいのですが………』

「オーライ。もしもの時は何とかするさ。今日は『相棒』も持って
きてるしな」

『お願いします。でも、精々半殺しにとどめておいてくださいよ？
仮に網に掛かったのが、ターゲットの下っ端だったとしても、そこから情報を引き出せなくなるのだけは御免被ります。目標は古典的ですが、芋づる式逮捕なんですよ？』

シオンが、釘を刺すようにソラに言ってくる。ここからは少々荒事になる。もしかすると、なのはがその荒事に巻き込まれ、危ない目に遭っているかもしれないのだ。まずは、人命第一である。

「そいつは相手次第だろ？ それに、仮にお姫様に傷でも付けてたなら、王子様が大層お怒りになるだろうしな」

『王子様と言うのは……先ほどのロメオさんの事ですか？』

「そうそう。ありや、怒らせるとマジで怖いタイプだよ。精々、流血沙汰にならないように努力するさ。お前は事後処理だけを心配してりゃあいい」

ソラはいつもの調子でシオンにそう言う。思えば、彼とも長い付き合いである。

エステル程ではないにしろ、かれこれ五年近い付き合いだ。こんな冗談の言いあいも、日常の一つになってしまっているのだから。

『その事後処理が最もハードな仕事なのですが……まあ良いでしょう。この時間、人氣が殆んど無くなってしまふポイントが近くに数か所あります。まずは、手分けしてそちらを当たってみることをお勧めします』

「うし。んじゃ、他の皆さんのところにもその場所のポイントを教えておくしますか……シオン、あんがとさん」

『いえ。では、状況が進展した際にはご一報ください。失礼します』

ツーー…ツーー…

そうして、ソラとシオンの通話は終了した。

現段階で、夜のこの町は少し危険なブラックシティと化している。

第一目標は、なのはの安全確保。他は二の次でいい。

「（ま、俺たちが気張らなくても、リオスさんなら何とかしてくれ
そうな気もするんだけど……。念には念を入れておこうかな……）」

「

何かを思いついたソラは、再び携帯を操作し、とある人物に連絡を
取ることにした……………

ソラ達が出払ったカラオケボックス内

「あふう……………／／／／／ ルークウ……………もつと罵倒して」

……………そしたら私……………／／／／／／／ええ！！？ そんな汚い言葉
で罵られちゃうと……………／／／ あう、ごめんにゃさい！！！ 謝
るから放置プレイだけは許ひてえ……………」

「アイリスおねーちゃん。おねーちゃん、なんの夢見てるのかなあ
？」

「…………る、ルーク君には、まだ早いと言いますか…………何と言いますか…………あ、あははは…………（何故でしょう…………またしても貧乏くじを引いてしまった気分になってしまっているのは…………？）」

そして、今回の事件でも、アイリスはある意味一番面倒な仕事をすることになってしまったのだ……た…………

第三十一話 あれ？スクラパって、こんなシリアスなお話だったけ？

前編

ソラ「スクラパって……こんなダークな感じだったっけ？」

F20C「今回と次回だけだね。基本的に、なのはさんとリオス君をメインにおいて話を進めたいと考えております」

はやて「ソラは一体何を企んどるんや？依頼とか言うつつたけど……」

F20C「まあ、端的に言えば……」

ソラ「アルバイトみたいなもんですよ。ゴミ掃除です」

F20C「なにこのコードブレイカー的なノリ……」

はやて「まあ、このお話は魔法関係はゼロやしな。現実的な話になるんやろっけど……」

F20C「なのはとリオスの関係を含めて、ソラ達の活躍もよろしくお願いいたします。では、また次回……ノシ」

第三十二話 あれ？スクラパって、こんなシリアスダークなお話だった？

後編

最初に申し訳ありません！！

今回、過去最高となる15000文字という長丁場になってしまいました……

切るところがなかなか見つけれず、気が付けばこんなことに……

加えて、今回は会話に英語が結構入ってきます。まあ、要約は書いてあるので普通に読めるのですが……

え？なんで英語で書いたのだった？

何か……素敵やん？

すみません、もろに作者の趣味ですね。英語もあまり得意ではないので、間違っそうところもあるかとは思いますが、英語の部分は間違い探し無しでお願いしますww

では、本編をどうぞ！

第三十二話 あれ？スクラパって、こんなシリアスダークなお話だった？

後編

「はっはっはっ……！！！ くそ……なのはさん、一体どこまで……」

リオスは一人、日本に非ざる土地の夜の街を疾走していた。手には携帯電話を持ち、しきりにディスプレイを見ている。

ディスプレイ上には、先ほどメールでソラから送られてきたこの付近の地図に加えて、この時間帯における人気が無くなってしまいう地点のデータだった。

一体、どうやってこんなデータを仕入れたのかは不明だが、今はそんなことはどうでもいい。

リオスが今やるべきは、なのはの事を探し出す。そう、たったそれだけのシンプルな目標だった。

「僕の所為だ……僕が……変な意地張って……焼き餅なんて焼いて……畜生……」

走りながら、苦い表情を浮かべて後悔するリオス。

原因を辿れば、別にどちらが悪かったという事はない。たまたま、意見が食い違った。

喧嘩の理由にはよく見られるモノなのだ。

だが、彼らの場合、喧嘩などすることも無く、今日まで円満過ぎる仲でい過ぎたのだろう。

突発的に起こった喧嘩、飛び出してしまったのは。リオスにとつて、こんなことは経験範囲外の話だった。

「もし……なのはさんに何かあったら……っ!」

口にただけでも恐ろしい。そんなことはないと言いたところだが、現にどこを探してもなのはは見つからない。

ホテルの方にも電話を試みたが、未だに帰ってはいないとのことだ。飛び出して行ったとして、なのはには行く当てなどあるはずもない。

「なのはさん、無事でいてください!」

ネガティブな事ばかりを考えていても仕方がない。今現在、リオスに出来ることは、ソラのくれたデータにあるポイントを手分けして探すこと、そして走る事だけだった。

この時のリオスの悪い予想が、現実になっていることなど知る由もないまま……

監禁、拉致。

この二つの単語を聞いて、どんな場所を思いつくだろうか？
尤もポピュラーなところから言えば、港の空き倉庫、廃屋の一室、
雑居ビルの部屋の中……などなど、人が来ないであろう場所、人

の関心が向かない場所が候補に挙がってくることが多い。

上記などの犯罪を犯す連中が、アジトにそういった場所をセレクトする理由は簡単だ。

要するに、他人の関心を引いてしまつと商売が上がったりになつてしまふ、或いは務所でまずい飯を食ふ事になるのを嫌っているからだ。

そして、日本から遠く南の島という閉ざされた土地の中においてもそういった輩は存在している。

今回、なのはを拉致つたのもまた、そういった後ろ暗い商売に手を染めている連中である。

「（…………ど、どうしよう…………これって、ひょつとしなくても拉致されちゃったのかな…………？）」

そして、今回の場合、なのはが連れ込まれた場所は街中にある、数年前に廃棄された工場だった。

なのはの手と足には縄が巻き付けられており、口はガムテープで塞がれている。テンプレートな形ではあるものの、彼女は現在進行形で拉致されている状況である。

彼女のトレードマークでもある、サイドポニーもリボンがどこかで外れ落ちてしまったようで、ストレートに下した形になっている。

「へへへ…………こいつは、えらく上物を掘り当てたもんだ……………」

「この前の奴よか、何倍も美人ときてる……………売っちまうのが勿体ないぜ……………」

「何言つてんだよ？ 売る前に俺たちが楽しむに決まってる……
…？ このねーちゃんにたっぷりサービスしてもらってなあ……」
なのはの目の前には、如何にもガラの悪そうな、加えて明らかに犯罪チックな事に手を染めていそうな男が三人立っていた。

更に付け加えると、工場の中にはこの目の前の男たちのほかに、6〜7名ほどの人間がいるようで、敵の総数は10人程度という事になる。

女性であるのはが暴れたところで、状況は万が一にも引つ繰り返らないだろう（少なくとも、この世界では）

「んん~~~~~!!! ンむ~~~~~!!!」

「だつはっはっは!!! そんな睨むなよ……興奮しちまうだろお……?」

「おい、順番は守ろうぜ……? この女最初に見つけたのは俺なんだからよお……」

それでも、こんな非常時だ。なのはは一応抵抗の意を表すと共に、連中を睨み付ける。

しかし、その挑発的な態度ですらも、目の前の男たちには興奮を誘発する触媒にしかならなかったらしい。

卑下た笑み、下心が丸見えの怪しく光った目が、なのはの胸や足を舐めまわすように動く。

「（やだ……やだよ……こんなの……リオス君……）」

日本と言う、比較的治安の穏やかな、悪く言ってしまうえば平和ボケ

が進んでいる国で育ったなのにとって、男たちの言動一つとっても恐怖の対象である。

何をするべきなのか、何が出来るのか、そう言った状況判断、冷静な精神状態をこの時のなのには求めるのは酷というものだろう。

彼女に出来るのは、想い人であり、ついさっき喧嘩をしたばかりの男の名前を心の中で叫ぶことしかなかった。

「Hey, leave me some for us!!!
(ヘイ！ 俺たちの分も残しとけよ！)」

「Shut up!! You must become silent and be looking there!! (うるせえ！ おめえはそこで黙って見てろ!!)」

どうやら、目の前の三人以外は日本人ではないらしく、英語を使っている。

英語の成績は優秀なのはだが、こんな状況で冷静に翻訳など出来るはずもない。彼らの英語での会話は、耳を駆け抜けていくだけだった。

そして、男たちはゆっくりとなのはに近づいていく。手には、脅しのつもりなのだろう、ナイフを持っている。

「(い、いや……いやぁ!!)」

なのははじたとと暴れるが、手足を拘束されているので事態は変わらない。これから何をされるのか、考えただけでも悍ましい。

彼女は、目をキッと強く閉じて、外界からの映像をシャットダウンする。それくらいしか、今のなのには残された抵抗手段は残されて

いなかったのだ。

ガシャアン！！！！

「な、なんだ！？」

「おいおい、何の騒ぎだこりゃあ？」

しかし、なのはの肌に男たちの手が触れる直前、今現在彼らが根城にしている廃工場のドアが蹴り破られた。その轟音によつて、なのはを汚そうとしていた男たちの手は止まり、視線は蹴破られたドアの方に注がれる。

「ぐへあ！！？」

そして、同時に、ドアの前で見張りをしていた下っ端のチンピラ一人が倒れ込んできたではないか。見れば、その下っ端チンピラは誰かに殴られたらしく、完全に伸びてしまっている。

「ああ……………」

チンピラたちの視線は、一斉に工場の扉に注がれる。なのはもまた、同じように大きな音がした方に視線を持って行く。そこには……………

「はあ……………はあ……………やっと……………見つけた……………」

プラチナブロンドの短髪、金色の瞳が特徴的な、女性とみられてもおかしくない中性的な顔立ちの青年が息を切らせて立っていた。

「（リオス君！！）」

なのは声が出ないことも忘れてそう叫んだつもりだったのだが、ガムテープで口を塞がれているので上手く話す事が出来なかった。しかし、目の前に現れてくれた彼女だけのヒーローの姿だけは見間違う事はない。

「Wow……………What, are you?（おいおい、なんだおめえは…………?）」

突然のリオスの登場、そして彼に殴り倒された仲間を見て、目を血走らせながらチンピラの一人がリオスに迫る。

しかし、今の彼は虫の居所が悪い。なにせ、想い人であるなのはを拉致られた上に、目の前で屑どもに触れるところだったのだから。

故に、リオスをただの子供と思って、軽く捻るつもりだったチンピラの末路は一つだけだった。

「がばお！！?」

リオスの渾身の右ストレートが、チンピラの顔面にクリーンヒット。完全に油断していたチンピラAは、リオスの拳の速度にまったく反応する事が出来ずに、その攻撃をもろに受け、綺麗に吹っ飛んだ。

「お前たち……………なのはさんに何をした……………」

そして、一步、また一步と、リオスは歩みを進め、工場内に足を踏み入れる。

見れば、リオスの手にはなのは愛用の髪留め用のリボンが握りしめ

られている。どうやら、数ある検索ポイントの中でここを突き止めたのも、なのはの落としたリボンがあつたからであろう。

「Wow, Japanese...? What are you doing what you know how you are? (おいおい、日本人？ お前、自分が何してんのか分かってんのかあ？)」

仲間の二人目が殴り倒され、リオスはチンピラどもにとって完全なエネミー指定を受けることになる。

ガラの悪そうな連中が、一斉にリオスと対峙するように立ち上がる。

「悪いけど、僕は英語は苦手なんだよ……。フランス語なら得意なんだけどね」

「へっ、心配すんなや。俺ら三人はお前と同じ日本人だからよ……」

「ま、だからつてお前をこのまま返すつもりは全くないんだけどよお……くくく……」

リオスが口を開くと、なのはを拉致つた実行犯である、日本産のチンピラがリオスにそう言ってくる。

だが、周囲の地元版チンピラとの相違点を上げるならば、日本語を扱えるかどうかだけである。

同郷の仲という事で、なのはを解放した上でリオスと仲良くティータイムを楽しむつもりはゼロであろう。まあ、リオスの方から願い下げな展開ではあるが。

「その人は、僕の大事な人だ。あんた達は、その大事な人を泣かせ

た……。だから……」

「だからなんだってんだよ、王子様あ？ お前ひとりでこの状況何とかできると思ってんのかあ？」

リオスのセリフを遮って声を荒げてくるチンピラB。

正直、リオス自身、この数をまとめて相手にするのは厳しい。武術に多少の心得はあるのだが、上手く事を運んで一対一で各個撃破を狙わねばならないだろう。

この世界では、あくまでリオスは普通の人間。魔法のような力でもあれば別だが、ここでは自分の腕つぶしだけを信じねばならない。

しかし、そんな考えすら、リオスは怒りで吹き飛びそうになっていた。

なのはを泣かせた、連中を叩きのめすのにこれ以上の理由が必要だろうか？

否、断じて否である。

「お前たち……ただで帰れると思うなよ……？」

リオスは、鋭い視線を相手に叩き付けながら、拳を握る。

いつものリオスから垣間見えるお人よし、少し頼りない雰囲気は微塵も感じられない。

「（リオス君………／／／／／）」

そんないつもと違う彼に、なのはは自分でも気が付かないうちに頬を赤く染めてしまった。

状況など完全に頭から吹き飛んでしまっている。今はただ、目の前

のリオス・コーネルドという『男』に、心を奪われてしまっていた。

「Guys, kill him!!!!!! (お前ら、やっちまええええ!!!!!!)」

リオスのその一言が、スタート合図だった。チンピラが、全員纏まってリオスに襲い掛かって来た。

「らあああああ!!!!!!」

リオスは、先ほど頭で考えていた戦いのセオリーなど完全に無視し、感情の思っままに体を走らせる。冷静な彼ならば、敵をしつかりと観察し、的確に相手の弱点を突きながら、戦力を削っていく戦法を取っただろう。

しかし、今日のリオスにはそんな様子は全くない。

今日のリオスは、完全にキレてしまっている。なのはを泣かせたチンピラどもに対して、加えて彼女をこんな危険な目に遭わせた自分自身に腹が立って仕方がなかったのだ。

バキィ!!!!

「ぐが!!?」

まず一人、リオスの左ストレートで、チンピラCを殴り飛ばす。相手の鼻の骨が折れた気がしたが、彼は全く気にもしていない。

「Don't get carried away, the Japanese!!! (調子に乗るなよ、日本人!!!!)」

一人目を殴り倒したりオスの背後から、鉄パイプを持ったチンピラが襲い掛かってくる。がら空きになったリオスの背後を取って、後頭部に鉄パイプを叩き込んでやるうという算段だったのだろう。

しかし……

「あああああ！！！！！！！！」

「がべ！！？」

雄叫びと共に、リオスは体をターンさせ、鉄パイプを避ける。そして、それと同時に回し蹴りを、鉄パイプ男の腹部にヒットさせた。鉄パイプ男は、昼食に食べたハンバーガーをリバーズしながら地面に倒れ伏す。

正直、汚い。

「いただきます！！！！」

だが、相手は数だけが多いのだ。二人目を沈めたリオスに、日本産チンピラの一人が殴りかかってくる。タイミングだけを見れば、あっぱれを上げてもいいくらいの攻撃だった。

バキ！！

「へっ、どんなもんだ………」

日本産チンピラの攻撃は、リオスの顔面にヒットした。攻撃をヒットさせたチンピラ君は、若干の優越感に浸っていた。しかし、それも数瞬のことである。

次の瞬間には、彼の顔面にお返しとばかりにリオスの右膝蹴りが叩き込まれたのだから。

リオスは、顔面に食らったチンピラの拳など気にも留めずに、攻撃を繋げてきたのだ。

その鬼神の如き戦いぶりに、流石のチンピラ勢も、リオスが只者ではないことを理解した。

今のリオスはまさに、バーサーカーのような状態である。怒りで我を忘れてしまう一歩手前辺りで、ギリギリ残っていた理性によって、体を動かしているのだらう。

だが、怒りを利用しての肉弾戦は、視野を極端に狭めてしまう。それは、目の前の相手を殴り倒すことだけを考えていることからくる、精神的なモノが大きい。

そして、今回。リオスはその視野の狭さゆえにピンチに立たされてしまうことになるのだった。

ガァン！！！！

「ぐっ！？」

一瞬だった。

何かが、リオスの腕を掠めて、彼の背後にあったドラム缶にヒットしたのだ。

その瞬間、リオスは左腕に焼けるような痛みを覚える。見れば、リオスの腕からは鮮血が流れ出していた。

「（リオス君！！？）」

撃たれた。

そのことにいち早く気が付いたのは、なのはだった。彼女の見張りをしていたチンピラの一人が、暴れまわっているリオスに向けて、懐から取り出したリボルバー式の拳銃で発砲した瞬間を見ていたのだ。

「が……くう………」

リオスは、左腕を押さえて地面に崩れ落ちる。弾は命中はしていないようだが、掠めただけでも怪我は怪我。出血も当然のように発生し、リオスのバーサーカー状態もそこから来る痛みによって正常なモノに戻っていく。

「なかなかやるねえ、王子様？　だが、ここは日本じゃねえ。腕つぶしだけで物事は解決しないってもんだぜ？」

「く、そ………」

リオスに向けて発砲したチンピラは、卑下た笑みを浮かべながらリオスに近づいていく。それと同時に、他のチンピラどもも懐から銃を取り出し始める。どうやら、この連中の間では銃の所持は基本条件のようだ。

リオスは掠めたとはいえ、出血するほどの怪我、それによる痛みによって思考がクリアになっていくのを感じていた。

同時に、先ほどの頭血が上った状態での喧嘩を悔いる。もう少し冷静になっていれば、相手が銃を取り出すことを見逃しはしなかった。それこそ、一人で突入などせずソラ達の救援を待つことだ。出来たはずだ。

しかし、それではなのはに危害が及ぶことになっていただろう。どちらにせよ、今回に限っては100満点の答えは存在していなかった。

「ほらほら……さっきまでの威勢はどこ行つたよお!!? 王子様あ!!!?」

「がふ!!!?」

チンピラは、動けないリオスの腹部に蹴りを放つ。当然、腕の激痛でそれどころではないリオスは、その攻撃をともに食らい地面を転がることになってしまう。

リオスとて、元を辿ればただの一般人である。銃で撃たれた経験などあるはずもない。

そんな初めての激痛に加え、多人数を相手にしての喧嘩、相手は銃まで持っている。

敗色濃厚という言葉がリオスの頭を過るが、未だになのはは敵の手の中だ。ここで倒れてしまえば、彼女を救うことは出来ない。

「ああ……あああああ!!!!」

リオスは痛みを雄叫びを上げながら無視し、体を動かそうとする。もはや、体がどうこの問題ではない。今のリオスを動かしているのは、なのはを救いたいという気持ちだけだった。

「うつせえんだよ、大人しくしてろ!!!」

バキィ!!

「ぐう!!?」

しかし、立ち上がったところをまた蹴り飛ばされてしまう。先ほどの鋭い動きは見る影もない。

「うち……面倒くせえ野郎だな………さきに殺っちまうかあ?」

「(リオス君!!!)」

そして、リオスに向かって再度向けられる銃口。しかも、今度は外しようもないくらい近距離である。それを見たなのは、声にならないことを承知で叫ぼうとする。

「(くそ……くそくそくそ!!! こんなところで……こんな奴らに……なのはさんを助けることもできないで………僕は………!!!)」

リオスは心の中で自分を責める。目の前で自分に銃を向けている男ではなく、自分の情けなさを。

だが、そんなことをしても時間は巻戻ることはいし、手元に勇者の剣が現れることも無い。目の前の突きつけられた銃口、それだけがリオスに残された現実だった。

「あばよ、王子様!!!」

「(いやああああ!!!)」

ガン!!!

なのはの声にならない叫びと共に、工場内に銃声が木霊した。一つの命が消えた、終焉の音。

なのはは、目の前の現実を直視できず、思わず目を背けてしまう。

しかし……

「ぎゃあああああ！！！！？ 手が…手があああ！！！！？？」

「（え……？）」

聞こえてきたのは、先ほどのチンピラの苦痛に満ちた声だった。

目を開いて現状を把握してみると、なのはの視界には思いもしないモノが映り込んできた。

リオスは相変わらず地面に倒れているが、新たな怪我などはないし、ましてや銃弾に倒れているということも無かった。

代わりに、リオスを撃ったはずのチンピラの手からおびただしい量の出血が見られ、手に持っていたはずの拳銃はどこかに吹っ飛んでいた。

「な、なにが………？」

リオスもまた、いきなりの事に理解が追いついていない。殺されると思った次の瞬間には、目の前のチンピラの手から赤い鮮血が飛び散り、銃が飛んで行ったのだ。

そして、その謎の現象に答えを出せる人間が、廃工場の中に入ってきた。

「危ないところでしたね、リオスさん。あと少しで頭が破裂した

トマトみたいになるとこでしたよ？」

「そ、ソラ……………」

リオスの視線の先には、つい先ほどなのはを手分けして探そうという事で、一緒に街を駆けていた、ソラの姿があった。

だが、彼の様子というか纏っている空気がいつもとは全くと言っていいほど違っていた。

目はどこか冷たい印象が強く、いつものほほんとしている彼のイメージは窺えない。

そして何より、ソラの両手にはおおそ15歳の中学生が持つのに相応しくない、無骨な二丁の銃が握られていたのだ。

ベレッタ・M92FS

イタリアのピエトロ・ベレッタ社が生産・販売している、9?口径の自動拳銃である。装弾数は15発。

ソラの手に二丁あるそれは、グリップ部分が黒く、銃身は綺麗な銀色をしている。加えて、アウターバレルは交換してあるようで、一般のモノに比べ、バレル部分が少し長い。

「があああ……………て、てめえ……………一体何を……………」

先程、リオスを撃とうとしていたチンピラが、二丁のベレッタを手にしたソラを睨み付け、そう言ってくる。

ついさつき、リオスの危機を救ったのは言うまでもなくソラである。チンピラの銃を持っていた方に手に、ベレッタで風穴を開けてやったのだ。

「あゝ……シオン？　ロメオとお姫様発見。ついでにウ　コ屑共も発見。今から制圧しにかかるから」

『了解です。その中で一番権力持ってそうな人は生かしておいてくださいね。上の方を捕まえるのに情報を吐かせないといけませんので』

「オーライ、また終わったら連絡する」

ソラは、チンピラDの声を無視してシオンに通信を入れておく。そして、インカムタイプの通信機のスイッチを切って、改めて殲滅対象を確認する。

「てめえ！！！！　無視してんじゃねえぞ！！！！」

「うるさいなあ……構ってちゃんですかあんたは……暑苦しい顔には似合わないからやめた方が良くと思うけどね」

ソラは冷たい目を、チンピラDに向けながら、鬱陶しそうにそう返事をしてやる。

とてもではないが、同じく銃で武装した相手が何人もいる状況の中にある人間の対応とは思えない冷静さである。

「Hey, do not police it?　（なあ、こいつ警察の奴なんじゃねえのか?）」

「No way... Such courage to people who never... (まさか... あいつらにそんな度胸あるはずが...)」

チンピラたちは、突然の来訪者その？（武装あり）に警察の介入を疑い始める。だが、それはソラの口からすぐに否定される。

「No way that... This time, the police just asked the Lord... The guys are selling, it killed me at the request of the organization and production of illicit drugs. (そんなわけないだろ... 今回、警察はただの依頼主さ。お前たちの売っている、非合法薬物の生産組織を潰してくれとの依頼でね)」

「Talk such nonsense... (そんな馬鹿な話...)」

「Starts to move massive police will flee as soon as you guys? Some guys not stupid, begged for help to outsiders like us, so that is just that. (警察が大規模な動きを始めると、お前たちはすぐに逃げるだろう？連中も馬鹿じゃない、だから俺達みたいなよそ者に助力を乞うた、つまりはそういうことだ。)」

以外にも、ソラは英語に明るらしく、流暢な英語でそうチンピラ勢力に告げた。

だが、彼のような子供、それも海外である日本になぜ、外国警察が助力を乞うのか、チンピラたちにはまったく理解できない。

しかし、それを一々懇切丁寧に説明してやるほどソラも暇ではないし、心優しくもない。

「So let me you guys are annihilated . (そう言うわけで、あんた達を潰させてもらう)」

「Stupid to me . . . hey , a perso
n is a man , once to kill you !
! (バカにしゃがって おい、相手は一人だ!!! 殺つちま
え!!!!!!)」

そして、ソラのその一言で廃工場での戦闘第二弾が開始される。しかも、今度は銃を使った本物の命のやり取りである。

「なのはさん、リオスさん、頭を低くしててくださいよ」

なのは&リオス「へ ? (え . . . ?)」

ソラは相手が銃を構えた瞬間に、なのはとリオスにそう警告し、ベレッダを構え走りだす。

ガン!! ガン!! ガン!!!

それと時を同じくして、チンピラどもが発砲。ソラは体育祭の時とは比べ物にならないほどのダッシュを見せ、リオスとなのはを主戦場から離すようにポジションを確保する。

なのはモリオスも、防弾チョッキなど持っているはずもないので、流れ弾にでも当たれば一巻の終わりである。

ソラは、出来るだけ彼らとの距離を開き、チンピラたちをおびき寄せていく。

ガン！　　ガン！！

「ぎゃあ！！？」

「ぐえ！！？」

そして、走りながら側面に捉えた敵2人に対して、ベレッタが火を噴く。ソラの放った銃弾は、その二人に命中し沈黙させる。

この時のソラに躊躇いはなかった。いや、それどころかどこか慣れているというか、こういう世界に居てこそ、ソラ・アオミネという存在は確立するのではないかと思えるほどだった。

「すごい……」

ソラの戦闘の様子を見ていたリオスはそう呟くしかなかった。

武術は出来ても、リオスは銃火器の扱いには素人である。機械に強いと言っても、流石に銃を持ったことはないだろう。

それ故だろう、目の前で起こっている銃撃戦が、まるで映画のワンシーンのように感じてしまうのは。それほどに、ソラの動きは戦場において際立っていた。

「Uh, what? The only one to was
the a lot of bullets and number

s? (ほらほらどうした? 多いのは人数と無駄弾だけか?)」

「Shut up, brat! ! Now, I'll make a bee hive! ! ! (黙れ、クソガキ!! ! 今すぐ、ハチの巣にしてやる!!!)」

ガン!! ガン!! ガン!!

「がは!!?」

「ぐは!!?」

「ぎゃう!!」

ソラの挑発に、簡単に引つ掛かり、突撃してきた馬鹿三匹をソラは一瞬で無力化させる。銃の腕だけではない、戦い方、戦法、度胸など、ソラは『命のやり取り』の術を熟知している。

「In such a thing, I can't stop it? (そんなもんじゃ、俺は止まんないよ?)」

ガン!! ガン!!

言いながら、ソラは工場のベルトコンベアを空中で一回転して乗り越える。そして、その最中に二発の銃弾を放ち、また二人を沈黙させた。

ソラは空になったマガジンを破棄し、新しいマガジンをベレッタに滑り込ませる。

気が付けば、チンピラの数に日本産チンピラの三人だけになってし

まっていた。

「く……何なんだこの化けもんは……！！!?」

「は、歯が立たねえよ………」

「ちくしょおお！！！」

ガンン！！ ガアン！！ ガアン！！

撃てども撃てども、男たちの銃弾が届くことはない。ソラの戦い方は、そこら辺のチンピラとは違う。
どこか、特殊部隊か軍人の訓練で設けているような、俊敏且つ無駄の無い動きなのだ。

そして……

ガンン！！！！ ガアン！！

「あ、当たらねえ！！!?」

「何なんだよこいつはよお！！!?」

涙目になりながら銃を乱射するチンピラたち。

しかし、幾ら撃っても銃弾は虚しく虚空を貫くのみだった。

ソラは、驚異的な脚力を持ってチンピラ三人組に肉薄しながら、ベレッタを吠えさせる。

ガンン！！ ガアン！！！！

「うが!!?」

「ぐほ!!?」

ついに、廃工場に居たチンピラは、下っ端の中でもリーダー格である男だけになってしまった。

シオンに言われた通り、戦闘中に指示を出しているモノを探し出し、結果的にリーダーであろう人間を残しておかなければならなかったのだ。

ソラは、雑魚二人を片付けた後、間髪入れることなくチンピラリーダーの腹部に蹴りを入れ、壁に叩き付ける。

「がばえ!!?」

「Game set but , damn bugs . (ゲームセットだ、くそ虫)」

チャキ……

ソラは壁際に敵を追い込み、銃口を向ける。リーダーと思しき男は拳銃をこちらに向けて引き金を引こうとするが、弾切れらしく虚しい金属音が響くだけだった。

今現在、ソラがラストチンピラを追い込んでいる位置は、リオス達からは見えないくらい離れた場所だ。

ソラが二人を気遣いながら戦った結果、こんなに離れた場所まで来てしまっていたらしい。

「た、助けてくれ!! 何でもする、何でも言うこと聞くからよお

「!!」

「Oh? Then I'll have to tell you guys hide out boss? Requests from clients that want to securely carryage. (おや? それじゃあ、お前らのボスのアジトの場所を教えてもらおうか? クライアントからの依頼はしっかりとこなしておきたいからな)」

「お、お安い御用さ……サンセット通りのデカイビルの15階さ……ボスやお偉いさん方はそこに……こ、これでいいだろ!!? 頼む、命だけは助けてくれよ!!?」

ソラの質問に、命からがら素直に組織のある住所を教えてくるチンピラ。

まあ、ここまでやられてしまっっては、目の前に居る青年に勝てないことはバカでもわかる話だ。

噛みつく相手を間違えたと言えばそこまでだが、チンピラの取った選択は間違っではない。

「I see. Thanks, See you later, goodbye. (なるほどね。ありがとさん、それじゃ、さようなら)」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ!!? 命だけは助けてくれるんじゃないのかよ!!? って……ちょっと待て……その銃のグリップに付いてる龍のエンブレム……」

だが、ソラは銃口を下さなかった。助かると思っていたチンピラからすれば、死刑宣告をされた気分だっただろう。

パニックになる寸前に男だったが、ソラのベレッタのグリップ部分に装飾されている模様を見て、さらに驚いたような顔になる。

「お、お前まさか……ドラグーン 青龍商会の………??！」

「Good night」

ガァン!!

その一発で、チンピラリーダーのお喋りは中断された。彼のバカみたいな髪型をした頭の数センチ上に銃創が出来上がっており、男は恐怖と撃たれたという錯覚によって泡を吹きながら気絶してしまった。

「お喋りな奴だ。………あゝゝゝゝゝ殺さないように戦ってこんな疲れるとは………」

ソラは周囲を見渡しながらそう呟く。

あれほど激しい銃撃戦だったにも拘らず、死者は一人も出していない。発砲したことはしたのだが、全て急所は外してあるのですぐに治療すれば問題ないだろう。

「さてと……救急車とアジトの住所を報告して帰りますか………」

そして、ソラは両脇に下げていたホルスターに二丁のベレッタを収めて、シオンに通信を入れることにした。

「リオス君、大丈夫？ 痛くない？」

「だ、大丈夫で……痛ああああ！！？」

「痛くないわけがなかるうが……掠めただけとはいえ銃創だぞ……」

「でもよかったです。この傷の浅さなら、すぐに良くなりますよ」

廃工場の入り口付近。リオスはなのはに心配されながら、ヒスイ、そしてエステルに傷の手当てをしてもらっていた。

なぜ、ヒスイがここに居るかという、ソラが予め連絡を入れてここに来るように言っておいたのだ。

リオスは包帯で応急処置を受け、とりあえずは出血を止めることに成功した。殴られたりした箇所も、ダメージとしては軽微なようで、ヒスイの肩を貸してもらって歩くことは出来た。

「ふ、顔に傷が出来なくてよかったな。お前の場合、箔がついても絵にならないからな」

「そういう問題でもないような気がしますけど……」

ヒスイの冗談に、苦笑交じりに応えるリオス。

だが、彼の表情は暗い。なのはを守れなかった、助ける事が出来なかったという事実が、彼の中の無力感を苛んでいた。

「なのはさん、立てますか？」

「にやはは……ありがと、エステル。ごめんね、なんか腰が抜けちゃってて……」

なのはもまた、エステルに肩を貸してもらいながら立ち上がる。どちらにしろ、二人は病院送り決定だろう。楽しいはずの旅が云々という、ニユースの中だけの話だと思っていた事態に巻き込まれたのだ。精神的な疲労も当然あるだろう。

「おゝい、お二人とも無事っすか？」

そんなところに、呑気な声を出しながらソラが戻ってくる。ボロボロなのはとリオスに対し、服の汚れひとつない彼。その様子から、敵は何とか退けたという事が見て取れた。

なのは&リオス「そ、ソラ（君）！！ 君って一体、何を……！！」

「はい、ストップ。申し訳ないんですけど、そこから先はお答えできません。」

先程の銃撃戦の一端を見ていたソラとなのはは、彼の姿を見るや否や、即座に説明を求める。

一体何が何なのか、彼の両脇にぶら下がっている厳つい銃は何なのか、なぜソラが銃を持って暴れまわれるのか、などなど、分からないことだらけだった彼らとしては、聞きたいことは山積みだっただろう。

しかし、それらを言いきる前にソラの方から質問はご法度指定にされてしまう。

「お二人は無事、俺も怪我はない、犯罪者は務所行き。それでいいじゃないですか。世の中には、知っていいことと、知らなくていいことがあるんですよ？」

「で、でも！！ 僕は君に……」

助けられた……

リオスは最後まで言い切る事が出来なかったが、心の中でそう思っていた。下手をすれば、リオスは確実に死んでいた。なのはもチンピラたちの良いように嬲られていたかもしれない。

リオスは、なのはの危機を救いはしたが、結果的には自分を見失ったまま暴れ、窮地に迫られた。ソラが来なければ今頃どうなっていたのか、あまり考えたくなかった。

「…… エステル、なのはさんを連れて先に救急車に乗っててくれ」

「…… うん、分かった」

ソラの頼みに、彼の意図を理解しているのか、何も聞かずに彼の言うとおりにするエステル。

なのははこちらの事が気になる様子だったが、渋々といった表情でエステルに連れられてその場を後にした。

「…… 羨ましいな……。ソラとエステルの関係が……」

その二人の様子を見て、リオスは思わずそう呟いてしまった。自身の中の無力感がそうさせるのか、何故か今の自分がひどく惨めに思

えてきてしまった。

そんな彼にとって、強い信頼関係を築く事が出来ているソラとエステルの関係が少し眩しく見えたのかもしれない。今現在、なのはとリオスは喧嘩中なので、余計に……

「良いことばかりでもありませんよ……口うるさいし、ほぼ生まれたときから一緒に居ますから、恥ずかしい過去とか秘密とか……いろいろ握られてたりしますから」

リオスのそんな言葉に対し、ソラは思ったことを伝える。ソラの中には、リオスがひどく疲れているようにも見えたので、ゆっくりとした口調で。

「……………ソラ、今日の事は……………」

「他言無用でお願いします。まあ、バイトみたいなもんなんで、深く突っ込まないでもらえると嬉しいですよ」

「……………分かった」

命を救われたのだ、聞くなど言われれば、口を閉じるのが筋というものだろう。

ソラはヒスイに対しては何も言おうとしない。恐らく、ヒスイは知っているのだろう。ソラがやっているバイトの内容を。

「でも、一つだけ聞かせてくれないか？ エステルは、君が何をしているのかは知っているのかい？」

「ええ、まあ……………」

リオスは気が付けばそんな事を聞いてしまっていた。
本当なら、そんなつもりはなかったにも拘らず。もしかすると、ソラとエステルが薄いガラスの上に成立しているものかもしれないと考え、少しでも自分となのはの関係と接点を見つけたかったのかもしれない。

そんな自分の卑しさと情けなさに、リオスは聞いてから後悔してしまった。

だが、そうでもないというリオスは無力感に押し潰されそうだったのだ。それを理解してなのか、ソラは何も言っていない。

「君はどうして……そんなに普通にしていられるんだい？ エステルと一緒にいる時も、僕たちと一緒に居る時も……」

質問はこれが最後だと、自分に言い聞かせながらリオスは問うた。
無力感を感じながらも、なのはとの関係を何とかしたいと思った彼は、ソラに何かしらのヒントを求めたのかもしれない。

喧嘩、拉致、そして先ほどの乱闘騒ぎ、敗北。

色々な事があり過ぎて、考えることが多すぎて、何から気持ちにケジメをつけていいのか分からなくなっていた

そして、ソラはリオスの問いに答える。こんな『非日常』なバイトをしながらも、『普通』と『日常』を謳歌している。

その強さがどこから来るのか、リオスは知りたかった。もしかすると、前に進むためのヒントになるかもしれない。

「……あいつがね、言ったんですよ。『ソラの事は、私がしっかり覚えておいてあげるから、君がどんなに変わっても大丈夫だよ』」

って。だから、さつきみたいな銃撃戦の後でも、俺はちゃんと『日常』に戻ってこられる。あいつはいつも、俺にとっての道しるべなんです。」

「……………」

「前見て歩いてれば、あいつが居ますからね。『日常』だろうが『非日常』だろうが、俺は元居た場所に戻ってこれます。だからこそ……………」

遠い。

思わず、そう思ってしまった。ヒントになるかもしれないと思っていたがとんでもない。

今のリオスにとって、ソラは遠すぎた。年下ながら、尊敬してしまうほどに。

「……………でも、それは俺達の事です。リオスさんとなのはさんは……………また別なんじゃないですか？」

「え…………？」

思わぬ言葉に、リオスはそんな声で返事をしてしまう。

しかし、ソラの言葉がなぜが心に響いた。天啓というのも言い過ぎだが、それに似た感覚は確かにあった。

「俺とエステル、リオスさんとなのはさん。人と人との関係なんて、それぞれですよ。考えてみたらどうですか？ リオスさんが、なのはさんとどんな関係になりたいのか。」

「どんな……関係……」

「大丈夫ですよ。俺みたいな人間の屑にでも、時間は掛かっても見えて来たモノですから」

そう言い残し、ソラは行ってしまった。

見れば、地元警察だろうか、パトカーが数台こちらにやって来ている。どうやら、ソラは彼らに用があるらしい。

「まあ、焦らないことだリオス。俺もソラも、少し遠回りをし過ぎたが、お前ならもっと早く答えを出せるはずだ」

「僕は……」

ヒスイにそう言われ、自分自身に問いかけながらリオスは歩みを進めた。

なのはとの関係、これからの関係を……

こうして、波乱を含みながらも体育祭ご褒美旅行は終了となった。

リオスとなのはの関係、お互いを思う気持ちに、大きな波紋を生み出しながら……

「Well well, Mr. Sola. This degree of cooperation, I would like to thank on behalf of the Police station. (これはこれは、ミスター・ソラ。この度の協力、署を代表して礼を申し上げます。)」

「No, I'll know is the era of coexistence. Police also you, as our existence... (いえいえ、今は共存の時代ですからね。あなた方警察も、我々のような存在も……。)」

ソラは、リオス達と別れた後、今回のクライアントである地元警察の署長と、パトカー内で依頼完了の話をしていた。

今回の依頼は、海を越えての大仕事。それなりの報酬も出ているし、ソラ達にとっての『都合のいい』商売にも繋がるのだ。

「You are really great strength... In the future, I hope we able to keep a good relations hip. (あなた方の力は本当に素晴らしい……。今後とも、良い関係が続けていけると良いですな。)」

「If you would like it appropriate to pay out... However, the headliners will not be mistaken. We're standing on an equal footing and do not believe you. (それに見合った報酬を出していただけののなら……。しかし、勘違いはしないで頂きたい。我々は、あなた方と対等な立

場に立っているとは考えていない。」

「Hmm . . . ? What does it mean that? (ふむ……? どういう意味ですか?)」

ソラの返答に、署長は怪訝そうな表情を浮かべて問い返してくる。

「(所詮は地方民警の署長……おつむの出来もこんなものか……)」

ソラは、心の中で目の前に居る、ややメタボリック気味な男を評価しながら続きを話す。

そうだ、彼らとソラ達是对等ではない。あるはずがないのだ。なぜならば……

「We are moving just for the benefit of the firm Blue Dragon. In the process, if the stones block the road as you, no mercy. To annihilate, crush You are for us, please remember that thing about the presence of the chief builders. (我々は、^{ドラゴン}青龍商会の利益の為にだけに動いている。その過程で、あなた方が道を遮る石ころとなるのならば、容赦はしない。殲滅し、踏み潰す……)。あなた方は我々にとって、その程度の存在だという事を覚えておいてください、署長殿。)」

「……………」

ソラの暴言ともいえる発言。

だが、署長は何も言い返すことは出来ない。目の前の、年端もいかない子供の立つ場所、組織の大きさはもちろんだが、それだけではなかった。

単純に、恐怖していたのだ。

目の前の少年の目が、異常なまでに冷徹且つ、強者を思わせる色をしていたからだ。

その後、パトカー内で彼らが言葉を交わすことはなかった……………

第三十二話 あれ？スクラパって、こんなシリアスダークなお話だった？

後編

はやて「ソラって何もん？」

ソラ「……………さあ？」

F20C「そのあたりは、本編と同時進行で進めていく、だ〜くさいど・くろにくるで明らかになってますw こちらは、本編と比べてガチダークシリアスな感じですww」

はやて「ソラをメインに、募集したゲストキャラの人らと大暴れするんやろ？」

F20C「元も子もない言い方っすね……………。まあ、向こうは裏の世界などをメインに捉えているので、銃撃戦とかは普通にありません。今日の後半みたいに」

ソラ「ていうかさ、俺の銃がベレッダってのは…………」

F20C「私の趣味です。」

次回、もしかしたら閣下が復活……………かもしれない……………！！

第三十三話 魔人が目覚める日（笑）（前書き）

皆様、お待たせしました！！！！

ついに我らが、陛下が復活なされる時が！！

え？誰も待ってないって？

そう思ったそこのあなた、指の逆剥けが酷くなるでしょう。

今回は、かなりアホな内容となっております。私自身、書いてる途中に『あれ？俺何やってんだ？』とか考えてしまいました。

とまあ、強烈な片頭痛に見舞われながら描いた作品ではありますが、どうぞお楽しみくださいませ〜

第三十三話 魔人が目覚める日（笑）

波乱のご褒美旅行が終わってから、約一週間が経過した。

世間は、もうすぐ夏休みという事で浮つき始める頃であり、聖祥の野球部も大会に向けて練習を欠かさない。

ポンコツルークの練習への参加が危ぶまれたりもしたのだが、そこは流石の主人公。野球の事なら体が覚えているのか、プレイにはまったく支障は出なかった。

まあ、フェイトが保護者的な立場で手を焼いてくること以外はいつも通り言っただろう。

そんな中…… かもしれませんが、来るべきものが来たというか。

ともかく、事件というのは往々にして小説やドラマの中では付き物である。今回の一件もまた、その部類から漏れることはない。

血で血を争う（笑）戦い、謀略、戦略、変態、軍隊、そして変態。

（大事な事なので（ry）

その始まりが、とある日のハラOWN邸で静かに起こり始めていたのだ……

『それじゃあ、今日は……と……しに出掛け……のね?』

『うん、帰りは……から、ルークの事……いね?』

「む……?」

朝、ルークはベッドの上で身動きしながら、かすかに聞こえてくるフェイトとリンディの会話で目を覚ました。

ポンコツ化しているせいで、普通の生活とは言えないが、まあ不由な生活にはなっていない。

寧ろ、寝るときはフェイトがベッドまで引つ張り込んでしまうので、『同衾』という羨まけしからんイベントを毎晩のように発生させている始末である。

ガチャ……ボタン……

そして、玄関のドアが閉じる音が聞こえた。どうやら、フェイトが出かけたらしい。

今日は日曜日であり、ルークもフェイトも部活はオフだ。外に出かけることくらいは当たり前だろう。

相手ははやてかなのはか……もしくは兄であるクロノとかもしれない。どちらにしろ、休日には有意義に過ごすのが賢明だろう。

「……………む……………」

でもって、我らが閣下も半覚醒状態ではあるが、ベッドから起き出

す。そして、自分の部屋に戻り、覚束ない手つきで着替える。
最初の頃は、ボタンもろくに止められなかったのだが（フェイト的には、それがど真ん中ストライクだった）、今ではこのとおりである。

着替え終わったルークは、朝ご飯を食べるべくリビングに向かう。
時刻は朝の9時、少々寝過ぎたかもしれない。

「はよ……」

「あら、ルーク？ 随分遅いわね？ って、まだ半分寝ちゃってるわねこれは……」

息子の様子を見て、未だに半分しか起きていないことを理解したりンディ。ポンコツになる前ならそこまで気にもしなかったが、今は状況が状況である。

「朝ご飯、パンとご飯どっちにする？」

「……………おねーちゃん」

「……………フェイトは食べちゃダメっていうか……………（なんでかしら？ 聞こえようによつては危ないワードな気がするの……………）」

無邪気ゆえの欲求なのか、それともルークの本心なのかは定かではないが、彼の朝食はフェイトが御所望のようだ。

まあ、しかし、こんな朝っぱらからピンク色全開なシーンをお見せするわけにもいかないの、リンディはやっぱりルークの希望は難しいことを理解させた。

ルークは、パンとサラダなどを平らげ、ソファでボーっとしている。フェイトが居るのなら、彼女が何かと構っているのだが、今日はその本人が居ないので、ハラウン邸は静かなモノである。

「おかーさん、おねーちゃんは？」

「フェイトはお出掛けよ。なんでも、同じクラスの男の子と用事だとか……デートだったりしてね」

なんとなく、ルークはいつも居るはずのフェイトの所在をリンディに聞いてみたのだが、意外や意外。フェイトは出掛けてしまっている、それも『男』とである。

まあ、彼女ほどの年頃ならばそんなに驚くことでもないし、寧ろ当たり前の事でもある。

しかし、日頃からのフェイトが、如何にルークを溺愛しているかを鑑みれば、今回の出来事はある意味珍しいことでもある。

「デート………」

その単語に、ルークのポンコツ化した心の中で嫌な痛みが走った。なんとなく、放っておけないというか、ムカムカするというか……。兎に角、なんだかジツとしていらなくなったのだ、ルークは。

「おれもデート行く……！」

「あ、ちょっと！ ルーク……！」

そして、突然飛び上がるように、ソファから走り出したルークは、

家から出ようと玄関までダッシュし始める。

大好きな姉に置いてけぼりを食らったのが悔しいのか、寂しいのかは不明だが、兎に角ルークはフェイトのところに行きたかったのだ。

しかし、何事も焦っていい結果を生まない。逆に、注意力散漫になってしまい予期せぬ事故を起こしたりするものである。

「のわ!!?」

でもって、我らが主人公であるルークもまた、その例に当て嵌まっていたようで、フローリングで足を滑らせ、玄関に通じるドアに向かって頭から突っ込んでしまう形で扱ってしまったのだ。

ガッシャン!!

「くぎゅ!!?」

「る、ルーク!!? 大丈夫!!?」

リンディは、慌ててドアの前でうつ伏せになって倒れているルークに駆け寄り、怪我の有無を確認した。幸いなことに、少したんこぶが出来ている程度で、厄介な怪我などは負っていない。

ホッとしたリンディだったのだが、この頭への衝撃こそがスイッチ、ターニングポイントになるなどとは、夢にも思っていなかっただろう。

魔王が、ついに目覚める時がやって来ることなど……

「は…… やっちゃったなあ…… やっちゃったよあ……」

悩める美少女…… もとい、美男子がトボトボと学校へ向かう道を歩いている。今日は日曜日なので、学校も何もないのだが、彼、リオス・コーネルドは散歩という事でその道を歩いていた。

「あんだだけ啖呵切っておいて…… 最終的にはソラに助けられただけで…… はあ……」

ここ一週間、リオスはずっとこんな感じである。理由は簡単、先日のなのはを拉致られた際の出来事がまだ尾を引いているのだ。なのはの危機を救ったことは救ったのだが、結果だけを見れば、ソラに助けられたという見方もできる。

リオスは、自身の無力感から、年下のソラに助けられた事と、なのはを自分の手で救えなかったことで落ち込んでいたのだ。

これが影響してか、この一週間はなのはとともに話をしてもらえない。というか、リオスがなのはを避けているとまでは行かなくても、あまり話したがないのだ。

「もっと冷静になってれば、怪我もしなくて済んだかもしれないし……。 もっとうまく事を運べたはずだよなあ……」

尤も、今回の件に限ってはリオスの手に余る事は誰の目から見ても明明白白なことであり、なのは達もリオスの勇気に賞賛を送る事はあれど、責めることなどは全くなかった。

そう、リオスは良くやったのだ。端的に言ってしまうえば、本人が今回の結果に納得がいていないだけなのだ。
まず、銃を持った相手に生身で勝てるはずもない。ここでの彼は、あくまで『普通の人間』なのだから。

「はあ~~~~~」

しかしまあ、こういう奴なのだ、リオス・コーネルドという男(?)は。責任感が強く、何かを一人で背負いこみがち。
確かに美点とも取れるかもしれないが、時にはそれが周囲からは寂しく見えてしまうものだ。

ここ最近では、はやて達が何かと気を遣ってリオスの事をそつとしておいてはいるが、彼女たちからすれば心苦しいことだろう。

ソラから言われた、『リオスとなのは』の関係についても考えてはいるのだが、そうそう答えは出てくるものではない。
自分の中にある無力感などが邪魔をして、そんなことを考えている余裕がないというのが実情である。

「はあ~~~~~」

と、これで何回目の溜息かも分からないが、体に溜まった憂鬱な気持ち吐き出すかのようにリオスは溜息を吐いた。

その時だった。

「急げ!!!! あのお方がついに!!!!」

「分かつてる！！ でも、今日は一体何の呼び出しなんだ？」

「分からない。だが、あのお方の事だ、何の意味もなく全軍に召集を掛けたりはしないだろう」

「だな。よし、早いところ教室に向かおう！！」

という感じで、数人の男子が、それもリオスの良く見知った顔の聖祥学園一年三組のクラスメートたちが、彼の目の前を焦った様子で走って行ってしまった。

どうやら、誰かに呼び出され学校の教室に向かうようだが、聞く限りではかなりの人数が召集されているようである。

「な、なんなんだ？」

嫌な予感しかしないが、自分の携帯のディスプレイを見て、自分もまたこの一件に関係しているのだと、リオスは一瞬で理解した。

リオスの携帯には、新着メールが一件。差出人は……

「え！！？」

リオスは、そのメールの差出人の名前を見て驚愕する。なぜなら、その人物は今現在、いろいろな意味で使い物にならない状態のはずだからだ。

そして、メールの文面は次のとおりである。

緊急事態

至急、学校の教室に全員集合せよ。集合時間は10:00。

一秒でも遅れた者は、フランケンシュタイナー+エロゲー電波ソングを、新宿アルタ前で熱唱のこと。

以上

「……………はい？」

メールを見たリオスの第一反応は、戸惑いだった。まあ、至極当たり前なりアクションではある。

遅れた場合の罰が、二重の意味で痛い思いをすと思うと若干の危機感を覚えはするが。

「と、兎に角行くしかないのかな……？（気分転換になるかもしれないし……）」

リオスは、胡散臭さを覚えながらも、学校への道筋を歩き始める。彼の中にある無力感を紛らわせる事が出来るかもしれない、そんな理由での選択だったのだが、事態は彼の予想をはるかに超えるモノになるなど、この時は誰もが分からなかった。

ざわ……ざわ……

日曜日であるにも拘らず、聖祥学園の一年三組の教室の席は男子メンバーだけが全員出席状態である。

しかも、全員が全員、なぜか体育祭でも見られたような特殊部隊染みた戦闘服に身を包んでいる。

……リオスを除いて。

「（おかしいiiiiiiii！ここ学校じゃなかったっけ！！
？　なんでみんな戦争しに行く感じの武装してるのさ！？　表情とか目茶目茶強面なんですけど！！）」

心の中で、周囲に展開されている異常な光景に一人で懸命にツッコミを入れるリオス。

彼だけが普段着なのだが、逆に悪いことをしているようで、若干居心地が悪かった。

まあ、リオスの場合は皆が来ているような戦闘服は持ってすらいないのだが。

「（みんなのこの服装と、真剣過ぎる表情、それにあのメール……。もしかして、ほんとに……？）」

リオスは状況と、自身に届いたメールの差出人の名前を総合し、頭の中で思考を巡らせる。仮に、彼の予想通りの展開であるのなら、今この教室に居るのは普段の見知ったクラスメートたちではない。

そう、今の彼らは軍隊なのだ。………純粹な目的、敵を共有し、とある男によって鍛え上げられた最強の戦闘部隊。その男を絶対の指導者として行動する軍隊だ。

ガラッ！

そして、静寂を切り裂いたのは教室のドアが開いた音だった。兵士一同は、一斉に起立し一糸乱れぬ動作で敬礼をする。ドアを潜って現れるであろう人物に対する敬意を表すために。

カッン……カッン……

その人物は、ゆっくりと、そしてしつかりとした足取りで教卓に向かって歩みを進める。

教卓の前にまで来ると、くるっと兵士一同の方向に顔を向けた。その瞬間、リオスは本日一番の驚きを経験することになった。

「皆、良く集まってくれた。そして、この数週間間の私の不在を許しいて欲しい」

彼は、堂々と、王の風格を前面に出しながら皆に向かって声を出す。

「（う、嘘だ……なんであいつが……？）」

リオスの視線の先に居る人物、一年三組のエロ部門担当兼、エロティック帝国皇帝たる人物。

『ルーク・ハラオウン』がそこには居た。

「エロティック帝国軍の皆よ！！！！ 私は帰って来た！！！！！！」

＼（ ）／

円卓のバカ達「閣下！！！！閣下！！！！閣下！！！！閣下！！！！」

円卓のバカ達「ジーク・ハイル！！！！ハイル・ルーク！！！！」

円卓のバカ達「オールハイル・ルーク！！！！！！」

おおおおおおおおおお！！！！！！！！！！

日曜日の教室に、喝采が木霊する。

そう、ついに帰って来たのだ、我らがエロティック皇帝・ルークが。

今日この日、教室に魔人が復活したのである。

「諸君！！！！早速ではあるが、メールで伝えたように緊急事態である！！！！」

ルークがそう鋭い声で叫ぶと、兵士諸君は兵士の表情に戻って彼の声を耳に収める。完全に統率された、運命共同体。
今の彼らは、そう言う存在である。

「姉さん……我が姉、フェイト・ハラオウンが……本日、『男』とデートをする……！！！！！！」

ざわっ！！！！？

そのお告げがあつた瞬間、教室内が震えた。声ではない、皆の驚きが空気を震わせたのだ。まあ、日頃のフェイトの様子から見ても、デートをするなど想像もできない気もするのだが、問題はそこではない。

「諸君……この事態をどう見るかね……？ 私としては、昨今の円高よりも緊急度は上だと認識している……」

「（いやいや、円高の方が上だと思う……）」

常識的なツッコミをリオスは心の中で行う。口にして突っ込もうものなら、制裁という名の袋叩きに遭わないとも限らないからだ。

「諸君……私は……ねーさんのデートを……ぶっ壊す……！！！」

おおおおおおおおおおお！！！！！！！！

どこかの王子のようなセリフを使い、部下たちの心を鷲掴みにするルーク。カリスマ、ルークには確かにそれが備わっているようだ。なんという才能の無駄遣い。

「神は言った、『デートとは、邪魔をするために在るのだと』・『創造の前には破壊が必要だと』・『A○B48の全員の顔と名前を把握して覚えるには時間が掛かると』」

「（AK○48は関係ないと思う……）」

リオスの冷静なツッコミ、だがそれは心の中で留めておく。（F20Cは、未だに誰が誰なのか分かりません。48人も多すぎる……）

ルークの宣誓と同時に、円卓のバカ達は、一斉に蜂起した。フェイトがデートする、それも男と。

これを放っておくなど神が許したとしても、彼らが許さない。

「血祭じゃあああああああ！！！！！！」

「年上だろうが容赦しねええええええ！！！！！！」

「やってやろうぜ、お前ら！！！！！！」

妙な一体感と、無駄な熱気。この一生懸命さをもっと他のところで発揮してほしいと、切に願うリオスだった。

そして、皆の殺る気満々な様子を見て、ルークは満足げに頷き、さらに続ける。

「よろしい、ではこれより状況を開始する。第一班は先行し、ねーさん達の動向を探れ。二班は狙撃ポイントを確保、三班は情報統制を。四班は衛生部隊として後方待機、五班は私に付いて来い！！！！前線だ！！！！」

全員「「「「Yes, Your Majesty！！！！！！」」」」

「

ルークの素早い指示、そしてそれに勢いよく答える優秀な兵士。今ここに、最強の軍隊が本格的な覚醒を迎えたのだ。

最早、彼らを止められる者など、この地上には存在しない。

「（何この人たち怖い…………）」

ルークと円卓のバカ達の勢いに、ドン引きしながらもリオスは仕方なく行動を共にすることにする。

ここで逃げ出した場合、恐らく敵前逃亡という事で軍法会議（異端審問会）に掛けられることは必至だろう。

「皆、合言葉は分かってるな！！！！？」

全員「「「フェイトさん、マジ女神！！！！」「」「」

「女の子の胸は！！！！？」

全員「「「大きじゃない！！！！ 形とバランス、そして萌えるかどうかだ！！！！」「」「」

全員が同じ合言葉を共有している。この無駄過ぎる統率力………確実にルークは才能の使いどころを間違えていると言っていていいだろう。

「よし、では声優さんの中で一番なのは！！！！？」

バカその？「ひよっち（日笠さん）しか見えない！！！！」

バカその？「はぁ？ ゆかりんに決まってるだろうが？？！」

バカその？「アスミン（阿澄さん）一択だろうがそこは！！！！」

バカその？「これだからゆとりは………ゆかなさんしかいねえよ！！！！」

バカその？「あやにゃん（竹達さん）しかいねえ！！！！」

F20C「ほっちゃーん！ ほ、ほーっ、ホアアーツ！！ ホアアーツ！！」

バカその？「伊藤かな恵さん以外、眼中にないね」

バカその？「くぎゅうううううう！！！！！！」

「（なんか変なところで意見分かれた！！！？？ ていうか、一人変なのが混じってたような……）」

ここまで完璧だと思われたチーム力だったが、声優争いにおいては完全な一致には至らなかったらしい。

兵士たちはお互いに威嚇し合いながらも、掴みかかりたりしている。しかし、それも一瞬の事だ。皇帝たるルークの一声さえあれば、事態は一瞬で片が付く。

「バカ野郎どもがああああ！！！！ 声優と言えば奈々様だろうが、常考！！！！！！」

「うるせえ！！！！ 変態は黙ってろ！！！！」

「こればかりは譲れないんだよ！！！！！！」

「ちょ、おま！！ 皇帝に向かってなにその口の利き方！！？」

と、思われたが、現実はそう甘くなかったようだ。各人の声優に対する思いは強く、意思の統一など難しい話なのだろう。

リオス、悩み多き男の娘。
彼と、変態たちの戦いが、ついに開始されてしまったのである………

第三十三話 魔人が目覚める日（笑）（後書き）

ソラ「なんで個人があそこまでの軍隊を……流石はルークさん、侮れないね」

F20C「単純にアホなだけでしょう……あの連中が」

ソラ「で？フェイトさんってマジで男とデートしてるの？」

F20C「一応ね。フェイトさん自身はデートとは思ってないだろうけどね。」

ソラ「相手の男……南無阿弥陀仏だな……同情するよ」

F20C「さて、今回はルークが殺し屋（笑）に！？ フェイトのデート的な何かの正体とは？ まあ、そんなに真面目な話ではないので、笑っていただけるようなものをお届けします」

次回、第三十四話『殺し屋、ルーク13（サーティーン）』

第三十四話 殺し屋、ルーク13（サートイーン）（前書き）

はい、と言うわけで作戦行動開始でございます。

書いてて思ったんですけど……ルークのシスコン具合が最早病的なものに思えてきてなりません。まあ、フェイトのそれかなり危ない方向な気もしますが……

いやでもさ、フェイトさんがお姉ちゃんとか、正直羨ましいじゃない？ルークでなくても、シスコンになるよ。

と言うわけで、シスコンパワーからすべてが始まるこの作品、今週も楽しんでくださいませ

第三十四話 殺し屋、ルーク13（サートイーン）

不幸とは、往々にして突然やって来る。いや、中には気づかない間に不幸にヘッドダイビングしている事もあるが、それにしたって突然なモノだ。

何が言いたいのかというと、今回、フェイトと出掛けるという超プレミアイベントを発生させた、とある三年生の男子生徒、マコト・タチバナという青年も、唐突にやって来た不幸に見舞われる運命にあったという事だ。

そう、シスコンと言う名の不幸に……………

「ごめん、待たせちゃったかな？」

「い、いいえ！！！！ 全然、今来たところですから！！！！」

まるでデートの待ち合わせの際に出てくる、テンプレートなやり取りからすべては始まった。

マコト・タチバナの目の前には、クラスのアイドル兼マドンナ兼嫁にしたい女子ナンバーワンの女の子の称号を持つ（無自覚）、フェイト・ハラオウンである。

本日は、綺麗な金髪を黒いリボンで先の方で纏め、大人っぽい服をコーディネートした彼女は、マコト・タチバナの目にはいつその事神々しくさえ映った。というか、完全に鼻の下が伸びかけていた。

「よかった　ちょっと、昨日の夜いろいろあつて少し寝坊しちゃったんだ／＼」

「あ、あははは……そ、そうなんだ……はははは（夜にいろいろつて何！！　なんでだ、ものすごくエロく聞こえるううう！！）」

フェイトの口から何気ない一言が飛び出すだけで、彼の脳内では思春期特有のピンク色の妄想が広がっていく。それが、死への片道切符の代金になるとも知らずに。

因みに、フェイトが昨日の夜にしていたことは、ルークを膝に乗せての映画鑑賞や、ルークをモフモフすること、ルークで（ry

と言った感じで、男の妄想虚しく、ピンク色な事件は一切起こってはいない。

「（あのハラオウンさんとこんな形で、デートっぽいシチュエーションで街に繰り出せるなんて……今日まで生きてよかったああああ！！！！）」

マコト・タチバナは、感動のあまり心の中の全米が拍手喝采状態になっていた。

この男、実家が大手の薬品メーカーを一代で育て上げた、敏腕社長の息子であり、そこそこにセレブなお坊ちゃまである。

加えて、見た目もそれなりに整っており、女生徒からの人気も高い。

しかし、彼はそれらのアプローチをすべて断つて来た。理由は単純

明快、彼は我らがフェイトさんに『ホの字』なのだ（誰だ、死語つて言った奴）。

「それじゃあ、時間も限られてるし早速行こっか？」

「ははは、はい！！！　よろしくおねがしまふ！！」

「あはは、タチバナ君って面白いね」

そんな彼が、ラッキーな事に遭遇したイベント、フェイトと街に出るという一見するとデートにしか見えないこの状況。

今まさに、彼の人生のラッキーメーターは最高潮に達していた。

そもそも、なぜ彼がこんなラッキーイベントを発生させているのか？
？答えは簡単だ。

この二人が、学園祭実行委員だからである。

学園祭自体は二学期が始まって少ししてから、つまりはあと二か月ほどの猶予があるのだが、聖祥学園の学園祭は地元の商店街などとの繋がりが強く、スポンサーという強い味方の存在がある。

そのスポンサーである、地元の商店街など、経営者の人々に今年の学園祭の概要を今の中から説明して回らなければならないのだ。

気が早い気もするが、早過ぎても損をすることはないので、今の内にやっておこうというのが毎年の恒例になっている。

でもって、その役目をマコト・タチバナとフェイトが担うことになり、休みの日にこうしてデートのようなシチュエーションを成立させてしまったという事だ。

「じゃあ、まずは駅前から行ってみよっか？　ここから近いし」

「う、うん。そうだね／＼／＼／」

しかし、世界は歌のように優しくはない（クルーゼ的な言い方で）。
フェイトに促され、哀れな子羊は歩き出す。一歩、また一歩と、踏み出すべきではない一歩を地に刻んでいく。

そうだ、これから先は狩場なのだ。子羊をハントするために用意された、血も涙もない戦場。普段から目に見えている何気ない街並みだが、本日そこは、確かに狩場だったのだ。

そして、早速仔羊に対して、ハンターからの洗礼が行われる。

「？　なんだかタチバナ君、嬉しそうだね？　何かいいことでもあった？」

「あ、ええと……ハラオウンさんとこんな形だけど、デート……」

チュイン！！！

「……………」

その一言を言う寸前、マコトの鼻先を何かが掠めていった。その何かは、地面深くに突き刺さり、彼以外に気付く者はいない。

ギギギ……と、まるで油の切れた機械のような動作で、マコトは何かがり込んでいる地面を見ている。

そして、そこにはマコトの心臓を縮み上がらせるものが埋まっていた。

7.62mm NATO弾

スナイパーライフル用の弾丸が、地面に向かって深く、そして子羊を嘲笑うかのように突き刺さっていたのだ……

「っち、外したか」

「目標、いまだ健在。右に5センチ程ずれたようです。」

「意外と風の影響が出ているな……だが、牽制の意味は伝わっただろう……」

スプリングフィールド・M21

アメリカ、スプリングフィールド造兵廠において開発された、M14をベースに派生した、狙撃専門のモデル。

元来、400～500m程度の中遠距離での命中精度が非常に良好な銃として知られているM14の特性を狙撃に特化させ、前線での野戦狙撃に適したモノがこのM21である。

エロティック皇帝・ルークの手には、黒光りするそれが握られており、レティクル（照準機）には今まさにフェイトの前で青い顔をしている敵勢力が映り込んでいる。

ルーク達が陣取っているのは、フェイトのいる地点から少し離れたビルの上、そこを野営地として利用しているのだ。

「って、何してんのお前……？　なんで街中でスナイパーライフルぶっ放してんだよ……？　ていうか、そのライフルどこから持つ

てきたの！！？」

「何を今更……我らが覇道を妨げるものは、何人たりとも容赦はしない。ただそれだけだ。因みに、ライフルはさっきヒスイ先輩に借りてきた」

リオスの全力のツツコミに対して、陛下は『何を当たり前のことを？』と言うような表情を向けながら答える。

因みに断っておきますと、M21に装填されている弾丸はすべて実弾に限りなく近いゴム弾でございます。ヒスイ先輩が、空気を読んですり替えておいてくれました。

流石はヒスイ先輩やでー（、・・・）キリッ

「いやいや、でもこれそう言う小説じゃないから！！！」

「大丈夫だって、外伝でだ〜くさいどなくろにくるも始まつてるんだし、ちよつとくらい……」

「メタ発言はやめて！！世界が崩壊するから！！」

どちらの発言もメタな感じが否めないが、この場にツツコミ担当はリオスしかいないので、ディスプレイの向こう側に居る皆様にツツコミを入れてもらうことで、この場は乗り越えることにします。

「大体、フェイトさんのデートくらいで……狙撃までしなくても……」

「俺だつてさ、いろいろ考えたんだよ。頭が痛くなるほど考えて考えて……この状況を何とかしようとして……で、最終的に『暗殺』っていう結論に達したんだよ」

「どこをどう間違ったらそういうイベントが発生するんだよ!!!? 明らかにフェイトさんを取られるのが嫌だから、邪魔者を消そうとしてる奴にしか見えんわ!!!」

建前はどうかあれ、ルーク的には今回のフェイトのデート（本人はどう思っているかは不明）は面白く無いようで、帝国軍の皆の賛同を得て今回のオペレーションを実行に移しているわけなのだが……

「ルーク、もうこの辺にしようよ。大丈夫だって、基本的にフェイトさんってルーク以外に興味なさげなんだし」

「ルーク？ 誰の事だ？ 今の私は、殺し屋・ルーク13（サーティーン）だ」

「どこのゴルゴ!? 言いながらM21構えるのやめろって!!!」

尚も暗殺活動を継続しようとするルークを必死に止めるリオス。しかし、そんな時、伝令部隊からの報告が入った。伝令部隊のステイブン（ヨシダ君）が、紙に書かれた特殊な暗号を即座に解読し、ルークに伝えてくる。

「閣下!!! 目標が移動を開始!!! 駅前方面に向かう模様です。両者の間隔は約20センチ、男の方はフェイト先輩をかなり意識しているようです!!!」

「よし、我らも移動だ!!! これより、状況をフェイズ2に移行する。各員、速やかに行動を開始しろ」

円卓のバカ達「「「「Yes, Your Majesty!!!」

！」「」「」

リオスに抑えられながらも、部隊の皆に素早い指示を出していくルーク。どうやら、このまま作戦を続行するつもり満々のようである。特殊部隊の制服に身を包んだ兵たちが、ビルとビルの間を軽々と飛び越え、フェイト達が向かうであろう駅前には先回りしていく。

こういう時限定の身体能力らしいが、もっと他の事にそのパワーを利用できないモノか疑問である。

「閣下、情報班のジョゼフ（本名はタケムラ君）から入電。今日のフェイト先輩のデート相手……ゴミ屑野郎の身元が判明しました。名前はマコト・タチバナ、聖祥学園高等部三年生。フェイト先輩とは同じクラスで、実家は大手薬品メイカーの御曹司だそうです」

「よろしい。情報を全隊員にリーク。ジョゼフ（タケムラ君）には、継続しての情報収集を」

「Yes, Your Majesty」

そして、ルークもまたリオスの拘束を関節を外すという荒業で掻い潜り、隊員の後を追う。

その最中に送られてきた追加情報に目を通し、作戦に与える影響、変更点などを一瞬でシュミレートする。

「ま、待ってよルークー！」

リオスもやけくそ気味になりながらも、ルーク達の後を追う。人間、必死になればビルとビルの間をジャンプで飛ぶくらいは楽勝という事が証明された瞬間であった。

（危険なので、良い子のみんなは絶対に真似しちゃだめだからね？
フェイトさんの約束です）

「（さ、さっきのは一体……？銃弾に見えたんだけど……そんなわけないよな……？）」

「タチバナ君？　どうかした？　ボーっとしてるけど……」

「えあ？　iiiiiiiiえ、大丈夫ですよ！？　はははははは」

「そう？」

駅前方面を目指して、フェイトと肩を並べて歩いていたマコト・タチバナは、先ほどの奇妙な現象によって、命を狙われているのでは？というような、言いようもない不安に襲われていた。

まさか、彼の周囲を完全にエロティック帝国軍の手のモノが包囲した上で、スナイパーライフルでスナイプされているなどは夢にも思っていないが。

とまあ、彼の話もそこにして、二人は駅前にまでやって来た。駅前という事で、それなりに人は多く、ショッピングやデートに勤しんでいる人々が多い。

マコト・タチバナもまた、自分とフェイトがそんな中に見えているのだろうか？とか、エロゲの主人公のような妄想をしていた。

「あ、ちよつとごめんね？ あの服……………」

「服？」

と、隣を歩いていたフェイトが、突然方向転換。彼女の目線の先には、メンズファッションを取り揃えたショップがあった。

「うーん…………あれとこれを組み合わせ……………。中にはこれを着てもらって、下はこれとかなあ……………」

フェイトは、店に入ると色々な服の組み合わせを思案し、何やら楽しそうに悩んでいる。しかも、彼女の服のセンスは抜群に良く、これらの組み合わせはかなり良い線を行っていた。

「（こ、これは！！！？ まさか、僕に似合う服をコーディネートしてくれているのでは！！！？ は、ハラウンさん……………やっぱ、今日のこれは仕事と言う建前のデートなんだね！！！）」

と、そんなところを目の当たりにすれば、純情すぎるこの男はバツチリ勘違いをしてしまうようで。顔を赤くしながら、近くの電信柱にしな垂れかかりたりしていた。

それを見た子供たちが、あまりに気味の悪い光景に、泣き叫んでいたことは言うまでもないだろう。

「ねえ、タチバナ君？ こういうのって、男の子から見えてどうかな？」

「い、良い…………です…………とつても…………／／／／／／／」

フェイトが意見を求めてきても、ヘブン状態のタチバナは生返事を

返すことしかできない。それでも、一応は意見として認められたように、フェイトは満足気だった。

「（うん、男の子からの意見はやっぱり頼りになるなあ……。これなら『ルーク』も気に入ってくれるかなあ）」

やはりというか、予想通りと言うか。タチバナの妄想は所詮妄想で……。

この服選びは、フェイトがルークに似合いそうなモノをチョイスしていただだけである。まあ、訓練された読者様方ならば予想済みだったかもしれないが……

余談になるが、ルークは基本的にファッション関連については、完全にフェイト任せらしい。本人曰く、『買いに行くのが面倒、ねーさんのセンスに任せておけば失敗はないから』という事らしい。ルークの身長・体重・体脂肪率・ウエスト・お風呂で一番先にどこを洗うか・好きな関数等々を完全に把握しているフェイトならではの業である。

こうして、傍からはウィンドウショッピングデートをしている仲睦まじい男女にしか見えないタチバナとフェイト（実際は両者の間で、激しい認識のずれがある）は、少し寄り道をしつつも文化祭関連の用件を済ませてべく、駅前の商店街の店舗を回っていくことになる。

その様子を、史上最強の軍隊に包囲＆監視されているとも知るはずもないまま……

場所は変わって、とあるビルの屋上……

まるでデートをしているようにしか見えないフェイトと、マコト・タチバナの姿を見て、心中穏やかではない男がそこには居た。

「うおおおおおおおらあああああ！！！！ 気絶しろや俺えええええええええ！！！！ これは間違いだ、これは仮想世界の出来事なんや！！！！」

ガスン！！！！ ガスン！！！！ ガスン！！！！

ルークは、怒りと混乱のあまり、ビルの壁に頭を全力で打ち付けていた。衝撃で再び幼児化しないか心配だったが、怒りがそれを凌駕しているらしい。

「か、閣下！！！！ お気を、お気を確かに！！！！」

「閣下が怒りのあまりご乱心だあ~~~~！！！！」

「落ち着いてください閣下！！！！」

部下たちが必死になって彼を押さえつけるが、どこからそんなパワーが出ているのか、全く歯が立たない。

いい加減しないと、出血多量になって今いかなない。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！！ 往生

せえや、俺ええええ！！！！！」

「る、ルーク落ち着けて！！！！ このままだと、本格的に往生しちゃうから！！！！」

そこで活躍するのが、やはり腹心であるリオスである。彼は、こんなこともあるかと、以前はやてから貰っていた、フェイトの秘蔵生写真を彼の前にちらつかせながら、彼を捕縛しにかかる。因みに、なのはの生写真は彼の部屋の秘蔵ボックスに何重もの鍵をした上で、厳重に保管されている。

「はあゝ……はあゝ……す、すまん。取り乱した……」

ルークは、リオスから渡されたフェイトの生写真を懷に仕舞いながら、リオスに謝る。現金と言うか、流石のエロティック皇帝ぶりである。

「い、良いけどさ……。もうやめない？　なんだか、かなり不毛な事してる気がしてならないんだけど……。オチが見えてるっていうか……」

「よおゝし、諸君！！！！ 最早、敵に対しての手加減など無用！！！！ 総力を持つて奴をミンチにしようぞ！！！！」

「って聞いてない……はあ……」

落ち着いたところで、このデートぶち壊し大作戦を取りやめさせるように誘導したりオスだったが、ルークにはそのつもりは全くないらしい。

部下たちも、何故か『マコト氏ね』とか『マコトMOGE RO』などの、全く関係ないあの『誠』を意識しているのが丸分かりな事を叫んでいたりしている。

（何のネタか分からない方、『スクールデイズ』は絶対に検索に掛けないでください。いいか？ 検索するなよ？ 絶対するなよ！？）

フェイト達の仕事^{デイト}から始まった、このバカげた作戦。マコト・タチバナは生きて帰る事が出来るのか？ フェイトさんが彼の気持ちに気づくことはあるのか？ いつになったらBLACK LAGGONの新刊は発売されるのか？

分からないことだらけのこの状況ではあるが、閣下の奮闘（バカ騒ぎ）が過激且つ陰湿になる事だけは確かだった……

第三十四話 殺し屋、ルーク13（サートイーン）（後書き）

F20C「お前街中でスナイパーライフルとかwww」

ソラ「まあ、ゴム弾なら死ぬことはないだろうし……良いんじゃない？」

レーネ「そうよね。でも、やるなら徹底的に叩き潰した方が……」

F20C「あんたら鬼か……」

F20C「ここで皆さんに質問、というかご意見を賜りたいと思うんですけど、このデートぶち壊し編が終わった後は、どうするべきでしょうか？」

ソラ「というと？」

F20C「いやね？ 夏休みっていう事で、野球の大会とかもあるし、それを重点的に描くか、夏休みはスルーして二期に突入、文化祭にGO。みたいな感じ。要するに、夏休みの内容を掘り下げるかどうかなんですよ。」

ソラ「ちなみに、夏休みをあまり触れずに行った場合は……」

F20C「二期の文化祭編で、リオス君となのはさんに……口では言えないような関係になってもらおうかと」

ソラ「どんな仲だよww まあ、要するに恋愛関係のお話を進めて

いく感じか」

F20C「夏休みを入れる場合は、スポコンな感じで野球の大会の話とかを入れていこうかなと思ってます。読者の皆様方は、どちらが良いと思われそうですでしょうか？よろしければ、ご意見を窺いたいですww」

次回第三十五話『シスコン×ブラコン×トランザム』

ソラ「次回予告がハンター×ハ○ターwwww」

F20C「連載再開はいつですか？」

第三十五話 シスコン×ブラコン×トランザム（前書き）

さて、今回でルーク13編も終わりですね。

次回からですが、アンケートなどの結果を考慮した結果、野球の大会そのものは無しにして、合宿やプール、夏祭りなどのイベントを挟んだ後、二学期の文化祭という事にしたいと思います。

合宿では紅白戦でもやろうかと考えているので、スポコン分は補充できるかと。

加えて、今回でもルーク君のスポコンフラグを建てておきましたのでww

でもって、今回もネタが多いです。ていうか、最早MADに部類されるべきものになるかも……小説？と呼んでいいものか……

と、そんな感じではありますが今週もどうぞお楽しみくださいな

第三十五話 シスコン×ブラコン×トランザム

『ジャスティン（ノダ君）からブラボー（オオタケ君）へ。女神と腐れ外道の両者、南南西の方角に移動中。文具屋・魚八に向かうと推測される、オーバー』

「了解、ジャスティン（ノダ君）。閣下より『現状のまま追尾を続行』とのこと。五分後に定時連絡を厳に。オーバー」

『了解した、ブラボー（オオタケ君）。ジャスティン（ノダ）、アウト』

情報の共有、精度、迅速な伝達は戦場での生死に関わる。今回のような、追跡と暗殺を目的とした作戦においてもそれは変わらない。

「閣下、フェイト先輩とゴミ屑野郎の両者はこのままの進路を進み、文具屋・魚八に向かうとのことですよ。」

「周囲には狙撃ポイントはないな……。ふむ……」

「（ていうか、魚八って…文具屋なのか魚屋なのかよく分かんないな……）」

部下たちと移動しながらのブリーフィングをこなしつつ、ルークは海鳴市の駅周辺の地理を示した地図を眺めている。

リオスは、この町の商店街の名前のギャップに今更ながらに気が付いてしまった。

「むう……こう人が多く、且つ遠距離からとなりますと打てる手も

かなり限られてしまいますな……」

「しかし、だからと言って、ねーさんに悪い虫が付くのを黙って見逃がすことは出来ん……。攻勢に出たいところだが……」

参謀長のアーノルド（スズキ君）と作戦についての方針を話し合う皇帝。

今までも十分攻勢に回っていると思うのだが、ルークと円卓のバ力達からすればまだまだ序の口。

本気で攻勢に打って出たら、この町がどうなってしまうのかが激しく心配になったリオスだった。

と、そんな時だった。この八方塞がりな状況を打開する、勇猛果敢な帝国軍の猛者たちが名乗りを上げたのは。

「閣下!!」

「それならばこの状況!!」

「我々が!!」

「解決してご覧に入れましょうぞ!!」

ババーン!!

そんな背景効果音が、リアルに見えるくらいのバカ丸出しの登場の仕方をした、四人の帝国軍士官。

見れば、その四人だけ制服が他の隊員とは違い、肩の部分の装飾が豪華になっている。

それだけでも、この四人がただのエロティック帝国軍士官ではない

という事が見て分かる。

「おお！！ お前たちは……」

「エロティック四天王！！」

そう、この四人こそ帝国軍のもう一つの要。元帥リオスと共に、ルークを陰から支える戦闘集団、『エロティック四天王』である。幾多の戦場（コミケ会場などが主な戦地）を、主君ルークと共に駆け抜け、数々の功績（どれだけ多くの目当てのサークルの同人誌を手に入れたか）を打ち立ててきた帝国軍の象徴である。

「閣下、此度の戦、我々が先陣を切り事態を打開してみせましょうぞ！！」

そう言うのは、エロティック四天王・一の槍、グラフィール（タカハシ君）

好きなエロジャンルは妹モノ、特に背徳感が強いやつ。好きな元素記号はキセノン（原子番号54）である。

「このような些事、閣下のお手を煩わせるまでもありません！！」

続いて、グラフィール（タカハシ君）に倣って、エロティック四天王・二の槍、ヒョードル（ムラカミ君）がルークの前に跪きながら進言してくる。

好きなエロジャンルは人妻、趣味は畳の目を数えることという、ちよつとシャイな男子生徒である。

「閣下、我ら四天王、あなた様のご命令さえあればどんな過酷な任務、強大な敵にも臆することなく立ち向かいましょうぞ！！」

三人目に跪いたのは、四天王・三の槍、フォックス（アイザワ君）だ。

好きなエロジャンルはお医者さんプレイ、最近のマイブームはカスピ海ヨーグルトという、拘りを持った日本男児である。

「我らが拳は閣下のために在ります、どうぞご命令を！！（そしてリオス君との絡みを！！）」

最後に現れたのは、四天王の紅一点らしい四の槍、ロザリア（イシムラさん）。

好きなジャンルはBL、座右の銘は『×、これ最強』らしい生粋の腐女子さんだ。

外見がかなりレベルが高いだけに、残念な美人と言う他ない。

「ていうか、今更なんだけど何なんだろうエロティック帝国軍って……。その内パワースタイルフレキシブルで怖いなあ……」

リオスは、四天王の登場に驚きはしたものの、登場の仕方よりもその存在自体に呆れ返りながらドン引きしていた。

まあ、突然現れて意味の分からないパフォーマンズ掛かった登場をされれば、どんな奴でもこんなリアクションに……

「おお！！ 逝ってくれるか、お前たち！！」

「ふふ……呼び出そうとしていたのだが、手間が省けたな……。良いだろう、この膠着状態を見事に打開してみせよ！！！」

四天王「……Yes, Your Majesty!!!!」

ならなかった。

というか、ものすごく歓迎されていた。

閣下からの勅命を受けた四天王は、次の瞬間にはヤードラット星人に教わった瞬間移動の如きスピードでその場から消えていた。（ヤードラット星人、分かる人いるかな？）

「僕が間違ってるの？　僕のが感覚がずれてるのこれ！！？　誰か教えて！！！！」

そう叫ぶリオスに答えをくれる者は誰もいなかった……

四天王・一の槍、グラフィール（タカハシ君）の場合

「それでは、ご検討の程よろしくお願いいたします」

「はい、ご丁寧にも。良いお返事が出来ると思いますので」

これで文化祭の共催候補店舗8件目を回ったことになる。結果は上々、毎年恒例と言う要因も然ることながら、フェイトが交渉、説明をしているのでウケがいい（主に男性から）。

タチバナが細かな補足を入れたりもするので、ここまでの活動はスムーズと言っているものだ。

「ええと、あと12件だね」

「は、はい。その他は別の担当が割り振られてるらしいから……」

中々に良い雰囲気の中、二人は次の共催店舗に向かう事にする。その二人の姿は、さながらデート中の男女そのものであり、エロティック帝国軍の者でなくても羨ましさを隠すことは出来ないだろう。

憎悪を込めて〇してやる…………… b y ルーク

と、そんな二人の歩く道の傍らに、何やら白いモノが。

あ、白いものと言っても別にいやらしいモノじゃありませんよ？まったく、訓練された読者の皆さんの脳内変換術には敬服してし（ry

話を戻して、その道に佇んでいる何やら白っぽい生き物は、進行方向から歩いてくるフェイト達の前に突然身を乗り出してきた。

「ほえ？」

「なっ!？」

両者、それぞれ驚いたような声を上げながら、歩みを止める。そして、そんな二人に対して白い生き物は顔を上げて……

「（????）僕と契約して魔法少女になってよ！」 何故かジヨジョ立ちの状態で

2人「……………」

白い生き物、四天王・グラフィール（タカハシ君）の渾身のモノマネだったらしい。それをして、一体どうやってこの二人のデートを

潰すつもりだったのかは分からないが。

「じゃ、じゃあ、次はあっちの店だね」

「う、うん。行こうか……」

意味不明な生き物の登場に、面食らってしまったフェイト達だが、露骨に目をそらして平静を装いながらスルー。白い生き物（QB的な何か）を無かったことにして行ってしまった。

「ぐふ！！ も、申し訳ありません、閣下……」

ドサ……

その場に残ったのは、白い着ぐるみを着た、一人の勇敢な（いろんな意味で）兵士の亡骸と、その亡骸に対する通行人の皆様の痛いモノを見る視線だけだった……

帝国軍野営地……

「我らが同志、グラフィールの栄誉ある戦死に敬礼！！！」

円卓のバカ達「「「「敬礼！！！！」」」」

（、・・・？）ゝ ビシッ！！ ルーク達の状態を表すところな
感じ

同志グラフィール（タカハシ君）の戦死に、ルークが軍を代表して敬礼。そして、部下達もそれに続いて一斉に敬礼し、一人の同志の魂を弔った。

惜しい男を亡くした……、皆の表情には悲しみと悔しさが滲み出ていた……………」

「いや、あれって完全に自爆だと思うんだけど……………ていうか、あそこからどうやってフェイトさんを男の人から引き離すつもりだったんだ……………」

ただ一人、一般常識人なりオスだけは、この状態に冷静なツツコミを入れていた。

しかし、これは由々しき事態である。四天王が敗れるという前代未聞の珍事。この状態に、参謀のアーノルドは表情を歪ませながら呟く。

「まさか、四天王のグラフィールがやられるとは……………」

「ふ、心配するでない。次のヒョードルならばやってくれようて。あやつはなにせ、皆も知っている日本一有名なヒーローの化身なのだぞ？」

「（なんでだろ、心なしかルークの喋り方が権力持ってる人っぽくなってきたる気がする……………）」

皇帝たるルークは、平静を保っている。こういうところは流石と褒めるべきなのか、それとも力を注ぐべきところを間違っていると教えるべきなのか迷うところではある。

そして、リオスの心の中のツッコミもそこそこに、二の槍・ヒョードルの活躍が期待されていた。

四天王・二の槍、ヒョードルの場合

「へえ、ハラオウンさんって将来は保育士さんになりたいんだ？」

「うん、小さい子の面倒見るのとか好きだし、子供たちの将来について、成長をサポートするような仕事がしたいなあって」

「ハラオウンさんにピッタリな仕事だと思うよ。想像しただけで絵になるし。じゃあ、大学も教育学部ってことになるね……てことは、このまま聖祥の大学に？」

「そうだね。結構実績あるみたいだし、何より……海鳴市を離れるのは……ね……」

フェイトとタチバナは、何と無しに将来の進路について話し合っていた。どうも、フェイトは保育士志望らしく、その方面で進学を考えているらしい。

「そっか。ここは良い所だしね。離れづらいの分かるよ」

「うん。（ルーク無しの生活なんて無理だもん）」

いつになったらこのお姉さんは弟離れできるのか、激しく心配になってしまふ心の声が聞こえた気もするが、今は気にしないでおう。

そして、二人は将来の話もそこそこに、次の目的地である近所では有名な和菓子店を訪れた。

フェイトは良くお世話になっているらしく、店の人ともそれなりに顔見知りなのだ。交渉の方もスムーズに行えること間違いなしだろう。

それと時を同じくしての事だった。

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ。悪を倒せと俺を呼ぶ！！ 聞け、そのくそ虫野郎！！私は正義の戦士、仮面ラ○ダー『ムツツリ』！！！！」

突如、ビルの上に現れたそいつは、またしてもジョジョ立ちの状態。でポーリングを決め、声高らかにフェイト達に向かって宣言する。そう、彼こそがエロティック帝国軍四天王・二の槍、ヒョードル。またの名を、仮面ラ○ダー・ムツツリである。

台詞が昭和50年のどこかのライダーが叫んでいたような気がするが、気にしたら負けである。

「わが主君の姉君様に手をだし、剩えこのような羨ましいデートシチュエーションを手にするなど言語道断！！ 貴様の命、ここで貰い受ける！！！」

「こんにちは、聖祥学園・学園祭実行委員の者ですが」

「あら、こんにちはフェイトちゃん。今日も一段と美人ね」

「び、美人だなんてそんな……／＼／＼／＼」

仮面ラ○ダー・ムツツリの激しい殺気の籠った声が響いたにも拘らず、フェイトとタチバナは普通に文化祭についての仕事を進めている。

というか、普通に仮面ラ○ダー・ムツツリの声など聞こえていなかった。なぜなら……

彼がボーシングを決めて、セリフをビシッと、かつこつけて叫んでいるビルと言うのが、フェイト達のいる地点から『約600メートル』ほど離れているからである。

どれだけ声を張り上げたところで、この距離では町の喧騒によって人一人の声など掻き消されてしまうだろう。

なぜ、このような離れたところで無意味なボーシング＆amp;セリフを決めているのかと聞かれれば、答えは1つだ。

先程の四天王のプロフィールにもあるように、仮面ラ○ダー・ムツツリであるヒョードルはシャイな男子生徒、要するに目茶目茶恥ずかしがり屋なのだ。

「また一人、惜しい男を亡くしたな……」

「彼にしては頑張った方なのですが……600mも近づけたのですし……」

「いやいやいや!!! 論点そこじゃないよね!!!? なんでジヨ
ジヨ立ちしながら仮面ラ○ダーストロンガーのセリフ丸パクリして
るのさ!!! 恥ずかしがり屋なのになんで変身モノに手を出すのさ
!!!?」

ヒョードルの仮面ラ○ダー作戦も、ものの見事に失敗し、ルーク達
は再び離れた地から哀悼の意を表していた。

ツツコミどころがあり過ぎて、リオス一人では捌き切れないようで、
彼は肩で息をしながら必死にツツコミ業務に専念していた。

「むむ……エロティック四天王でも難しいとは………」

「すこし、敵の力を甘く見過ぎていたかも知れぬな………」

「いや、だからさつきから自爆してるだけだと思っただけど………」

参謀と共に再び戦場の確認をしながら苦い顔をするルーク。歴戦の
猛者、エロティック四天王の力を以てしても、フェイト達の足止め
にもならないところを見る限り、問題は全く解決していない。

「これはあ、最後の二人の共同戦線に期待するしかありませんな……」

……」

「うむ……いや、二人に伝達、人員はいくら使っても構わん。今から
私自らも出る、作戦実行は私の到着を待てと」

「は、仰せのままに閣下」

そして、事態を重く見た皇帝ルークは、共同戦線を張るということ

らしい残りの四天王、フォックス（アイザワ君）とロザリア（イシムラさん）の加勢に向かうべくその重い腰を上げたのだった……………

「そう言えば、ハラオウンさんって弟さんが居るんだっけ？」

少し会話のネタが尽きてきた頃、タチバナは何か話題はないかと頭をフル回転させ、フェイトに関連するネタを探し、彼女の弟の事を持ち上げた。

別に、女の子が隣を歩いているからと言って、無暗やたらと喋繰り回せばいいという話でもないが、彼としては無言の時間に精神力が耐え切れなかったのだろう。

その判断が、フェイトのブラコン魂に火をつけるとも知らずに……

「うん　二つ下なんだけどね、ルークって言うんだ」

「へえ」。ハラオウンさんとは結構似てるのかい？」

「え」と……髪と瞳の色が同じだから、髪型と背丈を合わせちゃえば結構……。顔立ちも結構似てるって言われるし」

フェイトは弟、ルークの話という事でギアを一段上げた感じになって饒舌になる。若干目がキラキラしているのは、タチバナの錯覚ではないだろう。

普段からの、フェイトのブラコンぶりを知らないタチバナとしては、

今のところ弟の話を楽しそうしているようにしか見えてはいないが、フェイトはかなりハイになりつつある。

「もうね……どうしてこんなに可愛いのかってくらい愛くるしくて……。小っちゃい頃は、いつも一緒だったなあ……。一緒のお布団で寝たり、お風呂入ったり……。サブリミナル効果を狙って、寝てる時に『ルークはお姉ちゃんの婿』って囁き続けたり……」

「（なんだろう、今おかしい単語が入ったような……？）」

都合良く、フェイトが危ない単語を発した時に、バスが傍を通って行ったので、フェイトのブラコンがタチバナに露呈することは避けられた。

というか、サブリミナル効果とか、子供が狙う事じゃない。流石フェイトさん、逆光源氏物語をそんなに昔から狙っていたとは……

「確か、野球部だったよね？　野球には疎くてよく分からないのだけど、ハラオウンさんの弟さんってことは、花形なピッチャーとかなのかな？」

「え……あの……」

と、タチバナのその問いを耳にした瞬間、フェイトの歩みが止まってしまう。その表情には、先ほどの幸せオーラ全開なブラコンお姉ちゃんの姿はなかった。

何か、辛いことを思い出したような、そんな表情をしていたのだ。

「ハラオウンさん？」

「あ、ご、ゴメンね……！　ええと、その……昔は……そうだった

んだけどね……。ちよつといろいろあつて……ルーク、ピッチャーやめちゃったんだ……」

何とか取り繕いながら話すフェイトだったが、いつもとは違いどこかぎこちない。

今でこそ、バッティングの能力の高さでは折り紙つきだが、ルークが投手をしていたことはフェイトの中の思い出だったのかもしれない、それも何か言いにくい事情を内包した厄介な思い出だ。

「えつと……あ、そろそろ次の目的地だね。行こうか」

「う、うん」

そんなフェイトに対し、主人公でもなんでもないモブキャラに気の効いたセリフの一つも言えるはずもなく（というか、作者が許しません）、二人は目的地向かって歩く。

どこか気まずい雰囲気になってしまったが、これを打開するような術をモブキャラが持ち得るはずもない。

しかし、そんな時にやって来た『奴等』がそんな空気をまとめて吹き飛ばしてしまった。

突如、少しボロボロ気味な服を着た女の子が、ドクロな仮面つぽい何かを付けた、如何にも悪人みたいな怪人に襲われているではないか。

「アッー！ イヤアッー！！ いやめてーッ！！ 止めてー！！ たす

wwけwwてえ！！！！くひやひやひやwwww ヒヤーツ！！？」

「うえwへあwへあwwww 待てええええいw 私の名前はドクロ仮面、今日からお前は俺のカキタレになるのだあ！！！」

「やだ~~~~！！ 誰か助けて~~~~！！！」

というか、この二人、エロティック帝国軍の最後の二人、ロザリアとフォックスだ。ロザリアが襲われている女の子、フォックスがドクロ仮面なる怪人役である。

どうやら、この流れでフェイト達をどうにかしようというつもりらしい。

ちなみに、カキタレⅡ『セフレ』の意味だ。

「……………」

「……………」

当然のことながら、目の前で起こっている珍事に、フェイト達の足は止まる。というか、止まらざるを得なかった。

「待てエエエエエエエエエツ！！！」

と、それと同時に週に轟く大きな声。ドクロ仮面フォックスの動きも、止まってしまう。フェイト達は『何々？』と言った表情で周囲を見回す。

そして、突然周囲にスモークが発生したかと思うと、路地裏から何やらぞろぞろと怪しげなコスチュームに着替えた妙な連中が現れた

ではないか。

ここからは、セリフが多くなりますので、セリフの前に名前を入れます。どうぞ、茶番をお楽しみください。

円卓のバカ？「赤レンジャイ！！！！ キリッ」

円卓のバカ？「黄レンジャイ！！ キリッ」

円卓のバカ？「赤レンジャイ！！ キリッ」

円卓のバカ？「赤レンジャイ！！ キリッ」

ルーク「黄レンジャイ！！ キリッ」

シュタツ！！

そんなSEが似合う登場をして、五人はそれぞれのポーズ、とは言ってもやはりと言つか、なぜかジョジョ立ちだが、をとる。

見れば、その内のひとりは我らが皇帝ルークではないか。

ルーク「五人揃って！！」

全員「！！！！ゴレンジャイ！！！！」

円卓のバカ？「さあ！！ 今の内に逃げるんだ！！」

ロザリア「ありがとー」

円卓のバカ？「早く逃げるんだあああ！！！！！」

・
・
・
・

フォックス「違う」

ルーク「へ？」

フォックス「自分らおかしい。何て何？ 自分ら何？」

ルーク「ゴレンジャイ」

フォックス「ゴレンジャイじゃないよ、自分何色よ？」

ルーク「……黄レンジャイ！！！！」

円卓のバカ？「五人揃って……」

全員「「「「ゴレンジャイ！！！！」」」」

フォックス「待てや！！！！ ちょ、待て待て……な、何？君何？」

ルーク「黄レンジャイ！！！！」

フォックス「君は？」

円卓のバカ？「黄レンジャイ！！！！」

フォックス「おかしい！！！！　なんで黄色が二人おんねん？」

円卓のバカ？「赤レンジャイ！！！」

フォックス「まあ、君はなあ……。君は？」

円卓のバカ？「赤レンジャイ！！！」

フォックス「君は？」

円卓のバカ？「赤レンジャイ！！！」

円卓のバカ？「五人揃って……」

全員「「「「ゴレンジャイ！！！！」」「」「」」

フォックス「違う違う……ちがあああああう！！！！！
おかしいやないか！！　なんで赤が三人で黄色2人やねん！！？」

ルーク「あゝ、俺らそのおゝ……色とかそう言っんじやないから」

円卓のバカ？「うん！」

フォックス「いや、色じゃあ……」

ルーク「一人一人の個性見てもらいたいから」

フォックス「いやいや、そんな分からへんで……そんなお前……
ちびっ子は見た目で？」

ルーク「まあそれは……努力で何とかなっていくと思うし……」

円卓のバカ? 「うん」

ルーク「同じ赤に見えるかもしれんだけど、彼とかすごい、妹思いな（シスコン的な意味で）とことがあるし。一ついい話あるんやけど……」

フォックス「いや、そんなんええねん。そんなんどうでもええねん、見た目のこと言うてんのや。」

「……………ええと……………ルーク?」

「え?」

茶番が続けている中、名前を呼ばれたルークは思わずその声のする方に振り返ってしまった。黄レンジャイと言っただけあって、全身黄色尽くしなその衣装の調達方法を教えて欲しくなってしまう。

それはさておき、ルークの名前を呼んだのは言わずもがな、フェイトさんである。まあ、顔丸だしな時点で、変装にもなっていない為、ばれないほうが不思議なのだが。

「ルーク、だよな? 何してるの……………? ていうか、元に戻ったのかな……………?」

「……………」

その瞬間、茶番を繰り広げていた円卓のバカ達、敵であるタチバナを含めて全員が硬直した。

まあ、弟がこんなところで、こんな茶番を演じている理由も然ることながら、幼児退行していたはずのルークがなぜここに居て、もの通りになっているのがフェイトには分からなかったらしい。

「ぜ、全員ちよつと集合　！！！」

ルークは堪らず、部下全員を招集する。一瞬で彼の目の前にエロテイック帝国軍の手の者達が集合する辺り、統率が取れ過ぎていて逆に怖くもある。

「や、やばくね？　これヤバくね？　ていうか、さっきの芝居だって、あのノリでねーさんを人質にとって、その上であのタチバナって人を抹殺するって作戦だったのに、みんな完全に忘れてたよな？　！　自分の演技に入り込んでたよな！？」

部下達「……も、申し訳ありません……つい……」「……」

まあ、その点を言えばルークもなので、強く言う事はない。しかし、状況は最悪、下手をすればルークはフェイトからのお仕置きを食らう羽目になる可能性すらあった。（それはそれで我々の業界ではごく褒美ですが）

「ルーク……！？」

「は、はい！！！！　と、取り敢えず、今日は皆解散！！！」

部下全員「……いえ、Yes、Your Majesty！！」

！
「「「

身の危険を感じたルークは、取り敢えず部下たちの安全を第一に考え、彼らを解散させた。普段は優しい姉ではあるが、フェイトは怒らせると怖い、とっても怖いのだ。

そして、その場に残ったのは道路に正座しながら冷や汗ダラダラなルークと、ちよつと怒ってますという表情のフェイト、何が何やらと言う顔のタチバナ、やれやれと言った感じで事の成り行きを見守るリオスだけだった。

「それで？ どうしてここにルークが居るのかな？」

「え、ええと……………き、キノコ狩r……………すみません嘘です、ねーさん達の後をつけてましたorz」

冗談を言っではぐらかそうとしたのだが、その瞬間フェイトに睨まれたルークは一瞬で答えを訂正した。

こういう時、男と言うものは弱いもので、目の前の女の人自分よりも大きく見えてしまい、さらに縮こまってしまう。

「なんでそんな事したの？ 私達、遊びに来てるんじゃないんだよ？」

「……………だ、だつて……………／／／／／／／」

フェイトの追求に、俯き加減になりながら顔を赤くしつつルークは呟く。どうやら、ものすごく恥ずかしいようだ。

「だつて？」

「だって……その人と……」

「タチバナ君の事？ タチバナ君は、文化祭実行委員の仕事で、今日一緒に共催店舗を回ってくれてただけだよ？」

「なん……だと……？」

ルークが信じられないという表情をしながら、加えて今日の自分の行動の無駄さ、先ほどのフェイトへ言葉を思い出し、顔を真っ赤にしよう。

言ってしまう、フェイトに対して『自分はやきもちを焼いてました』と直に言ってしまったのと同じなだから、恥ずかしいのは当然だろう。

「それに、タチバナ君とは、『ただの友達』だもん。デートとかはしないよ？」

「た、ただの……友達……orz」

その瞬間、一人の男子生徒の淡い恋が終わりを告げた。

彼女にそのつもりはなくても、タチバナ的には今の一言が止めだった。流石はフェイトさん、無意識の内に自分に惚れている男を完膚なきまでにぶっ壊してしまうとは……恐ろしい子！！

「あ、あれ？ タチバナ君？ どうかしたの？」

「な、なんでも……す、すみません……今日はここで失礼しますうううううううう！！！！！！」

「あ、え…ちよつと!？」

フェイトが止めるのも聞かず、タチバナは走ってその場から消えてしまった。去り際の彼の眼から涙が溢れていたのは錯覚ではないだろう……

「うん……困ったなあ……この後も仕事残ってるんだけど……。
あ、そうだ!」

文化祭実行委員の仕事はまだ少し残っている。まあ、今のタチバナの精神的ダメージを考えれば、無理強いも出来ないので仕方はないのだが。

そこで、フェイトは何か妙案を思いついたらしく、未だに照れまくっているルークの目をまっすぐ見て……

「ねえ、ルーク。まだ少し文化祭の仕事でこの辺りを回らなくちゃならないんだけど……一緒に来てくれないかな？」

「ふえ……？」

意外な申し出に、ルークは少し固まってしまったようだ。だが、その言葉の意味するところを徐々に理解していくと、また顔を赤くしながらも返事を返す。

「べ、別にいいけど……？ 暇だし……で、でも勘違いするなよ？！
ねーさん一人じゃ大変そうだから仕方なく手伝っただけだからな!」

「あはは うん、分かってるよ。それじゃあ、早速行こう？」

「デートも兼ね、ね？」

「デデデデデデ、デート！！？にやにやにやに言ってるだよ、ねーさんは！！　ちょ、胸が当たって……………」

と、そんな感じでパニくりながらも、フェイトに手を引かれてルークは歩き出す。その表情には、満更でもないという感じが全開で出ている。

そして、その一部始終を見ていたリオスは……

「……ルークとフェイトさん……かあ……。ああ言うのも……一つの関係っていうのかな……?」

ソラから言われた、自分となのはの関係について、ルークとフェイトの関係を見ながらその事を頭の中で反芻しながら、そう呟いていたのだった。

悩める男の娘、リオスだが、今回の事でまた少し何かヒントになるようなモノが掴めたのかもしれない。

それが形になるのは、そう遠いことではないだろう……

余談になるが、幼児退行していた時期の事をルークは完全に忘れていたのだが、後日その一部始終を、いつの間にBDに録画していた

はやてによつて、『おねーちゃん大好き ルーク君』という映像タ
イトルを見せつけられ……

「嘘だああああああああああああああああ！！！！」
「！！？」

「ルーク……責任、取つてね？／／／／／／／／」

顔を赤くしたフェイトに抱き付かれながら、空を仰ぎ見て叫んでい
たとかいないとか……

第三十五話 シスコン×ブラコン×トランザム（後書き）

F20C「と言うわけで、ルーク復活&ツンデレ乙」

はやて「自分ほんまに素直やないな？」

ルーク「う、うるさいな！！ 仕方ないだろ、ストレートにお願いされるとどうしていいか分かんなくなるんだよ！！」

はやて「うわぁ……とことんまでフェイトちゃんに惚れとるわ……こっちでは姉弟やのに」

F20C「まあ、それはそれで置いといて。ルークが昔、投手だったという伏線ですが、早速来週から回収していただきます」

はやて「一体何があってルークは投手をやめてしまったんか。でもつてもう一度マウンドに立つことはあるのか？って感じやね。青春やなぁ」

ルーク「ババくさ……」

はやて「ルーク、ちょっとあつちで話しよか？」

F20C「ていうか、今回のネタ、こつつつええ感じのネタ分かる人いるんだろうか……」

ルーク「大丈夫なんじゃない？結構ニコ動でもMAD出てるし」

次回第三十六話『白球を追いかけていたあの頃が今ではとても懐かしい』

第三十六話 白球を追いかけていたあの頃が今ではとても懐かしい（前書き）

どうも、Webブラウザを使う際、Firefoxの方が良いのか、Google Chromeの方が良いのか、最近悩んでいるF20Cでございます。

どちらも良い部分があるので、悩んでしまっんですよね……

どっちが良いよ、またはこのブラウザなんかいいんじゃない？など、私のどうでもいい悩みにお手を貸してくださる方、いらっしましたら、何卒お願いします。

さてさて、本編ですが、前半は野球、後半はギャグと言う感じで色分けしております。

ラッキースケベの力の源、ルークの宝具『約束された勝利の手（エクスカリバー（笑））』の力が……！？

大袈裟に言ってますが、そこまですごいものじゃないです。ただ単に、フェイトさんの胸とかお尻にダイブ、若しくはタッチできるくらいですので……

あれ？ 超高性能な宝具じゃね？

ではでは、本編をどうぞ～

第三十六話 白球を追いかけていたあの頃が今ではとても懐かしい

夏。

この季節と言えば、何を思い出すだろうか？

花火？ 祭り？ 甲子園？ 夏コミ？ プール？ エロゲ三昧な夏休み？

まあ、この辺りが『至極一般的な』夏の楽しみだろう。基本的に、昨今の温暖化の影響で茹だる様な暑さが続く夏ではあるが、イベントの豊富さもそれに比例して多くなる。

そして、そのイベントの中でも、学生にとっては辛くもあり思い出深いのが部活動である。

夏と言えば、運動部の大会などが集中しており、夏を最後に引退し、受験勉強に専念する三年生も出てくることだろう。

ルーク達を通う、聖祥学園の野球部もまた、それから漏れることはなく。つい五日前に三年生参加の最後の大会である、夏大地区予選に出場した。

結果はベスト4。準決勝にて、昨年の甲子園出場校と対戦し1対0という接戦の末に、惜しくも敗退した。ルークやリオスといった一年生レギュラーの活躍もあったが、世の中そんなに甘くない。

主人公だからと言って、初年から甲子園に出れるなどと思っていては痛い目に遭うのだ。

でもって、最後の大会をベスト4という成績を残し、聖祥学園野球部の三年生は引退。残った1、2年生たちは、聖祥の保有する合宿所において、来るべき新人戦及び秋季大会に向けて合宿をすることになり、引き続き暑い夏を過ごすことになるのだった……

「よし、お前らアップは済んだな？ 今日からの強化合宿だが、新人戦までにチームとして三年が居た頃と見劣りしないものにレベルアップするのが目標だ。各自、気合入れてけよ」

一同「……はい！！！！」「……」

合宿所の練習グラウンド、練習用の道具や機材など、それらからこの合宿所の練習環境が整っていることがよく分かる。

夏休みに突入してすぐの合宿ではあったのだが、ルーク達にとっては絶好の機械とも言える。

アップを終えた1、2年生野球部に、監督兼ルークの昔からの馴染みでもあるライルが頼り甲斐のある声で今回の合宿の趣旨を伝えてくる。

ルーク達はそれに大きな声で返事をして、自らの気合の入りを伝え返した。

「最終日には、一年対二年で紅白試合を予定している。この試合も今後のスタメンの選考基準にしたいと思ってるから、励むように」

「……はい！！！！」「……」

「よし、そうじゃ、各自事前に決めたメニューで練習を開始しろ」

紅白試合の旨を伝え、その返事を聞いたライルは、連絡事項は終了ということとで部員たちに練習に入るように指示を出す。

監督としては、今後のチーム編成における選手の能力や、伸び率、欠点などを把握した上でベストメンバーや、打順や守備配置などを考える必要がある。三年が抜けたという事は、ある意味、チームを一から作り直すのも同じで出来るだけ多くの判断材料が欲しいところだろう。

「あぁっと、ハラオウンとコーネルドは残ってくれ。少し話があるからな」

「は、はい」

「了解です」

そして、ルークとリオスだけをその場に残し、他のチーム名とつたいは各々の練習を開始した。

「監督、僕たちに何か……？」

「も、もしかして俺達だけ別メニューで鬼シゴキとか………？」

「お前らがそうしたいなら、それでもいいんだけどな。ま、今回は違うから安心しろ。お前たちに少し相談っていうか、話だな」

リオスとルークの問いに、ライルは冗談を交えながらそう答えた。

まあ、合宿自体がそれなりにハードなので、これ以上のハードルがあると思うと少し気が重たくはなるが。

ライルは、チームのメンバー一覧などを見ながら、残ったルーク達に話の本題を伝えることにした。

「三年が居なくなったのと同時に、選手が少なくなるってのは、毎年の事ながら痛いもんだよ。エースが居なくなり、四番の強打者が居なくなるってのは、チームのバランスが、この時期に一時的にだが崩れるってことにもなるしな」

コクコク

ルークとリオスは、ライルのいう事に首を縦に振りながら同意する。今のグラウンドを見てもそうだ。三年が抜けただけでも、部員の人数がかなり減ったことがよく分かる。

引退後もちよくちよく顔を出して、後輩を指導する三年もいるだろうが、今回は合宿なのでそれもない。

「ぶっちゃけて言うとだな、チーム編成に悩んでるんだ。攻撃力に関しては現状でも満足できるものなんだが、問題は守備。特に、投手ポジションのボリューム感に欠けてるんだよ」

「あ……（もしかして、僕とルークを残したのって…）」

「……………」

投手の話の下りに入ったところで、リオスはライルの言いたい事、ルーク達に期待している事の内容を理解した。同時に、リオスはルークの表情を窺ってみると彼はどこか難しそうな表情をしていた。

ルークにしては珍しい、どこか苦しそうな、それでいて何かを思い出しているようなそんな顔だ。

「単刀直入に言えば、だ。ルーク、もう一回投手やってみねえか？」

ライルの真意は、ルークの投手への復帰だった。それは、無論彼自身の為でもあり、チームの戦力アップの為と言う二つの意味がある。決して、私情だけで物事を考えているわけではない。

「俺は………投げない………」

ライルの問いに、ルークは苦虫を噛み潰したような表情でそう答えた。まるで、自分にはその資格がないという様に、戒めるような口調でもあった。

「はあ………お前も強情な奴だな……。ルークよ、お前いつまでバッテリーだけで満足してるつもりなんだ？　いつまで昔の事引きずりや気が済むんだ？」

「ま、待ってください！　ルークだって責任を感じて………」

「だとしてもだ。あれは試合上での事故みたいなもんだ、ワザとでもない限り投手を辞める理由にはならねえよ」

リオスが止めに入るも、ライル言う事の意味がよく分かってしまいうりオスは、黙るしかなかった。

「今の二年のバッテリーでも、かなり形にはなってる。でもな、一チームに形になってるバッテリー、ましてや投手が一人だけじゃ話

にならねえ。俺は、チームの為にもお前の為にももう一回お前に投げて欲しいと思ってる」

「……………」

途中で、ライルはルークの頭に手をポンと乗せながら話す。過去に何があったのか、それは今一つハッキリしていないものの、ルークが投手を辞めるほどの何かがあった事だけは確かだった。

「紅白試合、お前が投げてみる。そこで何か見つけれれば、お前はもう一度『本気』で野球に取り組めるだろうさ。お前がトラウマなんて詰まらんもんで潰れるとこなんぞ、指導者としても馴染みとしても見たかねえ。それに、お前も心のどっかで思ってるはずだ。『もう一回投げたい』ってな」

「……………俺は……………」

心の中を見透かされたように、ライルはルークの闘志に火を点けようとしている。それを理解したリオスは、もう止めるようなことはしなかった。

リオス自身も、もう一度、1年前のようにルークとバッテリーを組み、彼の球を受けたいと願っていたからだ。

「…………ふ。ちょっとやる気になってきたみてえだな。なら、今日からお前とリオスは別メニューで調整だ。昔の勘を取り戻しながら、何も考えずに投げてみる。おっと、球数の管理はリオス、お前に任せたぜ？」

「は、はい！」

「ティアナにもそっちのサポートをさせる。後で声掛けて、向こうのブルペンを自由に使え。人はあんまり来ないようにしとくからよ、んじゃな」

ライルはそう言っ、練習真っ只中のグラウンドに方に行ってしまった。どうやら、リオス達だけでも大丈夫だと確信を持ったのだろう。

ルークは、未だに苦い表情をしているが、その手の握り拳は少し硬くなっていた。

ルークとリオス、そしてティアナのいつもの三人組な一行は、ライルに指定されたブルペンにまでやって来ていた。グラウンドからは少し離れているため、ルーク達がここを使用していることに気が付く者はいないだろう。

「それじゃあ、ルーク。最初はペース緩めで、徐々にエンジン掛けていく感じで行こう。取りあえず、まずは30球投げてみて」

「ああ」

普段使用している野手用グローブではなく、キャッチャーミット、加えてレガースなどを付けたリオスがブルペンのマウンドに居るルークにそう言っ、同じく投手用のグローブを手にしたルークが短いながらも同意を示してくれた。

どうやら、未だにマウンドに立つことには抵抗があるようだが、今

すぐ辞めたいという気持ちはないらしい。

リオスはあまりしつこく声を掛けても逆に悪いと感じ、すぐに投球練習に移れるように移動した。

18・44メートル。マウンドからホームベースまでの距離がこれだ。ブルペンのマウンドという事で、円形ではなく横長のモノではあるが、この距離からリオスがルークの姿を見るのは本当に久々だった。

「ルークの奴は、どんな感じ？」

「うーん……少し難しい感じだね。でも、投げたくないってわけじゃないから大丈夫だと思う」

フェンス越しにティアナとそう言い交わすと、リオスは捕球体勢に移る。なんとなく気になるのだろうか、ルークは頻りにマウンドのプレートを足で弄ったり、ボールの網目などを確かめていた。

「ふう……」

迷いを捨てるように一息吐く。軽く手にロージン（白い粉のアレ）を付けて、グラブの中でボールを握る。

投球体勢に入ったルークは、グラブとボールを握った両手を胸の高さまで持つて行く、次に左足を後ろに、右足を軸にして体を少し捻り、下げた左足を引き戻しながら上げる。

そして、グラブからボールを握った手を抜き放ち、手首のスナップ、腕のしなりなどを意識しながらルークの久し振りの投球が始まった。

スパーン！！

「（……くう…良い球）」

リオスのミットに綺麗に収まったルークのボールは、小気味いい音を立てリオスを興奮させた。

約一年のブランクがあるのだが、それを感じさせないボールのノビ、重さが確かにあった。

「オツケー、ナイスボール！」

思った感想を口にしながら、リオスはボールを投げ返す。

この時、リオスは若干の感動を味わっていた。もう一度ルークとバッテリーを組めるという事に、心が躍るような気持だったのだ。

そして、軽い投球練習をししばらくし、肩が温まって来たところでそろそろ本格的に投げる練習に移る事になる。

実際の球数管理はこの辺りから始まるものだろう。言ってしまうと、今までのキャッチボールのようなものなのだから。

「ルーク」

「……（コク）」

その一言で、ルークは『ここから本番』というリオスの意図を理解し、一息吐く。心なしか、リオスの捕球に対する姿勢もどこか本番染みているようにも見えた。

先程の同じ投球フォームで、ルークは久しぶりに力を込めての投球を始める。

スパアーン!!

「（うん……投手を辞めても、野球の練習だけはサボってなかったからね……。基礎体力が付いたのに比例して、ボールにさらに勢いとノビが付いた感じた。今の球が、目算だけど128キロ。高校一年の夏でこの球なら、十分だよ）」

一球受けただけでも、ルークの身体的な成長によるストレートの進化を実感する事が出来たりオスは、心の中で大満足だった。ブランクはあるものの、サボっていたわけではないので球に力が付くのはある意味当然だったのかもしれない。

「（よし、次は変化球の調子を見よう……。まずは、スライダー）」

リオスは、ルークの能力面を確かめるために次は変化球をサインで要求してみた。使っているサインは、昔使っていたものなのでルークも理解してくれるだろう。

そして、サインを受け取ったルークはコクリと頷くと、再び振りかぶって綺麗なフォームでボールを投げた。

クク……スパアーン!!

「（ふむ……変化の幅は昔とあまり変わんないけど、キレがいい。制球も問題ないし、これなら試合でも大丈夫だね）」

リオスはルークに声を掛けながら返球し、先ほどのスライダーを評価した。

次に、下の変化球、フォークを要求してみる。ルークもそんな気が

していたのか、首を縦に振って投球を始める。

スパアン！

「（ストンって感じで気持ち良い落ち方するなあ……。次の球とで、左右のバッターに合わせていけば、高校野球でも十分通用するよ）」
フォークの状態もまずまず。制球やコースなど、洗い直す点はそれなりにあるものの、取り立てて問題になるレベルではない。紅白試合までに調整していけば良いだけの話だ。

そして、リオスはルークの持ち球である最後の球種、シンカーのサインを出す。シンカーを左、フォークを右の両バッターに対する決め球とし、それを軸にしての組み立てが出来ればリオスとしては理想的なのだ。

くくく……スパアン！

「（おお……変化の幅が大きくなってる。ストレートに比べて球速も落ちるから、落差を利用してやれば頼れる武器になるぞ……）」

成果としては予想以上。リオスの頭の中では、さまざまなタイプのバッターの攻略法が出来上がりつつある。

守備に定評のあるリオスだが、彼の本領が発揮されるのは間違いなく捕手として投手の能力を引き出す能力だろう。

「よし！ いい感じだよルーク。次からはコースも指示してくから、出来るだけ狙ってみてよ」

段階的にハードルを上げ、リオスはルークの今現在の限界を図る。

速球、変化球、スタミナ、制球力、などなど投手として一試合を投げ切るには様々なファクターが絡み合ってくる。

紅白試合でルークに気持ち良く投げてもらい、もう一度彼をマウンドに立たせたいという気持ちからか、リオスは今までになく張り切っていた。

なのはとのこと、それによって少し気が紛れるので、彼にとってもちょうどよかったのかもしれない。

スパアン!!

「オツケー、ナイスコース!」

その後も、ルークは無心になって投げ続け、リオスは球数制限を意識しながらルークの力を見極め続けた。

お昼ご飯や水分補給は、ティアナが面倒を見てくれたのでその日の練習はとても充実したものとなった。

「ふいっ……食った食った……」

「今日はかなり動いたからねっ……」

「だなあっ」

「ふへっ……死ねるぜっ」

ルーク、リオス、それに加えて合宿所でのルームメイトであり、エ

ロティック帝国軍隊員でもあるタカハシ君とアイザワ君は、夕食を取って満腹感を感じながら部屋を目指して歩いていった。
合宿所の部屋は基本的に四人一部屋であり、組み合わせはランダムで事前に決まっている。

エロティック四天王の二人が野球部であるという事は意外かもしれないが、実は彼らもかなりのやり手なのだ。

ちなみに、タカハシ君はパワータイプのバッターであり、長打力だけならルークより上なレフト。アイザワ君はバントなどの小技や走塁に長けたタイプでセカンドである。

「ルーク、今日投げてみた感じはどうだった？」

「……………まあ、悪くはなかった……………コントロールに若干の違和感があっただけだ」

「オッケー、じゃあ明日はその辺りを意識して調整していこう。ボール自体は走ってるし重みも十分だからさ。焦らずにじっくり行こうよ」

リオスは何気ない感じを意識しながら、ルークのデリケートなメンタル面に気を遣いながら明日の練習の内容を確認する。

捕手の役目は、投手の能力を引き出すこと。リオスはその当たりの事をよく理解している。

「基本的には、左打者にはシンカー、右打者にはフォークを決め球にして、それを軸に組み立てていきたいって思ってるんだけど、ルークはどうかかな？」

「…フォークは良いけど、シンカーが少し怖い。変化の幅は大きい

けど、あんな遅い球でど真ん中行ったりしたら間違いなくホームランコースだぞ。中学ならともかく……」

「大丈夫だって、その辺りも考えて配球を考えてるんだからさ。それに、ストレートだっていい感じに走ってるんだから、それも考えれば問題なしだよ」

リオスは自分が今日、実際に受けてみて感じたルークのボールの感想から、素直にそう言う。

自分のミットで、自分の目で見て、肌で感じたボールだ。自信は大いにあった。

「……分かった、お前に任せる」

「うん、ありがとう」

そう言って、野球の話はそこでお終いとなった。リオスもあまりしつこくピッチングなどの話をするつもりはなかったので、無理して話題を振るようなことはしなかった。

「それでさー、F20Cって変態作者さ、五月に出るエロゲー（移植版合わせて）が四本もあるって嘆いちゃって……」

「ははは、金がいくらあっても足りないじゃんwww」

「でも、『漢には、買わねばならぬ、時がある』とか言って、予約しに走って行ったww」

「あ、あはは………なんだか作者もいろいろ大変みたいだね……つてうわ!？」

???「きゃう!？」

そして、歩くこと数分。ルーク達の部屋に向かう曲がり角に差し掛かった時、不注意とでも言うべきカリオス達は、曲がり角から出てくる人影に反応する事が出来なかった。

リオスは、曲がり角から飛び出してきた何か、声からして恐らく女性、とものにぶつかってしまった。

モニユ……

「ひゃう………／／／／」

「むむ………?（なんだろう、この柔らかい何かは………?）」

顔からぶつかってしまったようなのだが、リオスは自分の顔にディープインパクトしている途轍もなく柔らかい何かを感じ取り、思わず手を伸ばしてしまう。

フニユ………フニャ………

「ふゆう………」

「（………なんだろう………嫌な予感と、人生が＼（＾o＾）／な展開にはまったような………」

その柔らかい何かの正体に、悪い意味での想像がついてしまったりオスは、恐る恐る顔を上げてぶつかってしまった相手の顔を見てみ

る。

そこには……

「あ、あのねリオス……。出来たら、離れてくれたら、嬉しいっていうか……。私の体はルークだけのもので……。／＼／＼／＼揉んでいいのはルークだけっていうか……。／＼／＼」

「／＼／＼／＼／＼／＼／＼／ ふう、ふうふうふうふうふう
エイトさん！！？」

そこに居たのは、金髪女神なお姉ちゃん、我らが嫁のフェイトさんその人だった。

どうやら、リオスはフェイトとぶつかり、豊満なバストにダイブ、剩えその乳を揉むという、本来ならどこかのエロティック皇帝にのみ許されたラッキースケベスキルは発動してしまったらしい。

「ななななな、なんでフェイトさんがここに！？」

「あれ？ ルークから聞いてないかな？ 私達テニス部は再来週から大会だから、その為の強化合宿で、野球部と同じ合宿所を使ってる」

「……………あ、そう言えばバスの中で聞いたような……………」

どうやら、フェイト達テニス部もまた合宿だったようで、この合宿所を使用するらしい。フェイトは三年生なので、次の大会が最後なのだ。なのは共々、張り切って合宿に参加している事だろう。

と、そんなことは今は大した問題ではなかったのだ。

そう、問題は『リオスがフェイトの胸にダイブして、胸を揉んだ』
という事実、それだけだった。なのはがこの場にいたとすれば、間
違いなく誤解される。

ここのところ彼女と顔を合わせるのを無意識に避けてきたリオスと
しては、これ以上のごたごたは真つ平御免だった。

「えと……なのはさんは……？」

「ふえ？　なのはなら、今頃部屋でお友達とお喋りしてると思うよ
？　私はジュースを買いに出て来たただだから」

リオスの願いが通じたのか、この場になのはは居なかった。

が、しかし、此度のリオスの狼藉（ラッキースケベ的な意味で）、
たとえ神が許したとしても、彼らが許さない。

そう、全てのエロ、加えて非リア充達の思いを背負っている、あの
男たちが……

「リオス・コーネルド……………」

「は……はい！！」

ギギギギ……

まるで油の切れた機械人形のような動きで、リオスはルーク達が居
るであろう後方に視線を向けてみる。

出来ることなら、このまま現実逃避でもしたい気持ちだったが、下
手な事をすれば逆に怒りを買ってしまう恐れもあった。

そして、リオスの目には奴らの姿があった。大きな鎌と、『F』の

はさんに言いつけてやる！！！！　それで社会的底辺に叩き落してくれるわ！！！！」

「やめてくれええええええ！！！！！！！！！！」

何と言う独裁政治。汚い、さすがルーク汚い。

しかし、これが帝国国家と言うものだ。悲しいけど、これ命令なのよね。

「もう、ルークったら／＼／＼　そんなにお姉ちゃんの胸が触りたいのなら、いつだって言ってくればいいのに……／＼／＼　はい、どうぞ」

「え？」

モニユ……

と、あと少しリオスの社会的な死が確定する寸前に、顔を真っ赤にしたフェイトがルークの手を自分の胸に押し付けた。
その瞬間、世界に電流は知る（アカギ的な意味あいで）

これぞ、本家『約束された勝利の手（エクスカリバー（笑））』

「異端審問会、被告に名簿追加。ルーク・ハラウン！！！！！！！！！！」

「判決、死刑！！！！！！！！！！」

その瞬間、ルークはリオスと同じ立場に綺麗にターンイン。一瞬にしてリオス同様に吊し上げられてしまう。

「ちょ、おまー！ 皇帝に何さらしてくれてんのー！？ 俺お前らの上司よー！？」

「掟を破るもの、これ全て敵なりー！！！」

「リオス共々、星になるがいいわー！！！」

「ちくしよおおおおおおおー！！！！！！！！！」

どうしてこうなった。

そんな言葉がルークの脳裏を過った。しかし、全てが後の祭り。

これがFFF団の血の掟、たとえ何者であろうが裏切り者には制裁が加えられる。例外など、あつてはならないのだから。

「くっそ！ リオスの巻き添えをくってなるものかー！！！」

「る、ルークー！！！ ここはバッテリー仲良く、読者様方からm9（＾＾）プギャーwwww されようよー！！！」

「いやだああああああー！！！！！！！」

「さあ、お前たちの罪を数えろ……」

ピチューン……

そうして、また二つ、夜空に輝く星が増えた。

その後……

「ねえねえ、ルーク？　今日はお姉ちゃんたちの部屋で一緒に寝よつか？」

「ほんと、勘弁してください」 or z 土下座

全く懲りていないフェイトさんが、そこには居たとか居ないとか……

第三十六話 白球を追いかけていたあの頃が今ではとても懐かしい（後書き）

F20C「最後、フェイトさんが叩き落したね」

ルーク「……やられたよ、マジで」

フェイト「うう、ゴメンね……？」

ルーク「べ、別に?! そんな……嫌じゃなかったし……」

フェイト「そ、そつか／＼／＼ それじゃあ、これからは毎日触らせてあげるね？」

ルーク「毎日俺に死ねってか!!?」

F20C「なんと羨まけしからん……あ、次週は夜の合宿所の部屋でのお話です。修学旅行を彷彿とさせる、恋バナなどをルーク達にしてもらいたいと思います」

ソラ「なあ、未だに修学旅行行ったら、夜に恋バナとかすんの？」

F20C「中学の時はしてた希ガス。高校生の修学旅行は、現地調達したモンハンとPSPで盛り上がったでござる」

ソラ「なんというダメ人間……」

次回第三十七話『俺も好きな女子の名前言うから、お前も絶対言えよなー!？』
基本的に裏切られるフラグ』

第三十七話 俺も好きな女子の名前言うから、お前も絶対言えよなー!？」

タイトル長えwww

皆さんは、どんな修学旅行をされたのでしょうか？私の時は東京でしたね。

そして、夜は延々とモンハンで盛り上がっていましたww

あのころは若かった……

このお話とは全く関係ないのですが、同時連載中のBOPがそろそろ完結なんですよ……。でもって、新作のプロットがすでに完成しているんです……

なのですが!!

ヒロインを決めかねてる今日この頃です。

基本的に、人間ドラマをメインに展開していく予定なんですけど、ヒロイン候補としては、なのはさんorアインハルトさんなんです。

BOPが完結した暁には、そちらの方でアンケートなどを取るかもなので、その際には是非ともご協力をお願いいたします。

ではでは、本日も元気に行きましょう。スクラパ本編をどうぞ！

第三十七話 俺も好きな女子の名前言うから、お前も絶対言えよなー!？」

「はい、と言うわけで、今から各員の持ってきたエロ本の鑑賞会を始めます!!! はいはい、みんなカバンの中から選りすぐって来たエロ本出して来んさい」

エロティック四天王2人「はいー!!」

「ちよつと待てええええええ!!!!!! そんな話聞いてないよ! !? ていうか、ここに来るまでにそんな感じの話欠片も無かったじゃん!! バスの中でも『午後○紅茶か、紅茶○伝か、リ○トン、紅茶の中ならどれが一番か』って言いながら拳を使った討論してたじゃないか! !?」

ちなみに作者は紅茶○伝派です。

さてさて、フェイトと別れた後、一行は部屋に戻り消灯時間を迎えたわけなのだが、この時期の若者が普通に寝てしまおうという事などあり得ない。

ましてや、こういった普段は寝食を共にしていない相手との貴重な時間だ、当然のことながら部屋の中は喋り場状態になる。

「え、なに? もしかしてコーネルドは持って来て無いの? 秘蔵エロ本?」

「無いよ!!!! 自分の部屋に厳重に保管したままだよ!!!」

「ちょ、おまｗｗｗ 空気嫁ｗｗｗ」

四天王の二人に、エロ本を持って来ていないことを責められる？リオス。

まあ、事前に何の通達も無かった状態で、示し合わせたかのように持ってきた目の前のバカ達の方がよっぽどおかしいのだが。

「リオス………絶望したっ！！！！」

「なんでこんなことで絶望されなきゃならないんだよ！！？　なんなの？！　やっぱ僕が間違ってるの！！？」

最後には、閣下までが絶望の意を表する。

最近、世界のルールが自分から離れて言っているような気がしてならないリオスだった。

まあ、しかし無いものはないで仕方ない。ルーク達も、いつまでも同じことを愚痴愚痴と言うタイプではないので、すぐに話題はシフトしてしまっ。

「では気を取り直して……タカハシ君！！　まずは君から見せてもらおうか……四天王として相応しいレベルのモノを期待している……」

「ははっ！！　では、ご覧くださいませ……」

スツと、タカハシ君は懷から一冊のエロ本を取り出した。先ほどルークが言ったように、ここで四天王として不釣り合いなモノを出そうものなら、彼は更迭を免れないので、その顔には大粒の汗が滲んでいた。

タカハシ君の秘蔵エロ本『俺の妹が　××で　××なわけがない』

「……………これ、薄い本（同人誌）じゃない？　いや、確かにある意味エロ本ではあるけどさ……………」

リオスの感想はこうだった。

まあ、エロ本の定義など曖昧なモノなので、セーフと言えばセーフだが、最終的に点数をつけるのは皇帝陛下その人である。

「タカハシ君……………」

「はっ！」

「89点……！」

「評価高っ……!?」

思った以上に、この同人誌の評価は高いものだった。姉モノが好きなルークがこのジャンルに対してこれほどの点数をつけるのは若干の違和感を感じるが。

まあ、彼としても人の趣向は十人十色という事で理解してい……………

「しかし、もう少しこう、うん、包容力のあるお姉さんのジャンルもだな……………」

「し、しかし閣下……………私にはリアル妹が……………私は、妹を裏切ることなど……………!!　くっ……!!」

やっぱり、ちょっと物足りなかったらしい。

でもって、タカハシ君はルーク同様シスコンらしく、血の涙を流しながらルークの助言を断っていた。

彼の、妹への（一方通行な）気持ちは堅いものがある。

「……………タカハシ君……………」

「……………閣下……………」

ガシッ！！！！！

「「Oh！！！！アミーゴ！！！！」」

ここに、シスコンを通じた新たな友情が誕生した。

「何なんだこのバカ丸出しなやり取りは……………」

リオスの呟きも、今の彼らに届くことはなく、二人は姉若しくは妹の素晴らしさについて熱く語りだしていた。

閑話休題

「さて、次はアイザワ君。行ってみようか？」

「はっ！！　どうぞ、お納めください……………」

話が本筋に戻ってきたところで、次のエロ本鑑賞に入る。なんと

うか、合宿に来てまで何をしているのだろうと思ってしまいが、彼らの目がマジだったので、そこには触れないことにしているリオスだった。

アイザワ君秘蔵のエロ本『 × × × な × と × × 』

「存在自体がモザイクだらけじゃないか……！ ていうか、ジャンルすら放送コードに引っ掛かってるよこれ……！！」

アイザワ君の出してきたエロ本は、まさかのモザイクだらけの一品だった。放送コードに触れまくり、タイトルすらハッキリしないほどの一品。

まさに、至高のエロスとも言えいいのか、マニアック過ぎてドン引きするレベルとも言えいいのか……

「むむむ………これは中々………ふむふむ………」

「閣下、24ページのところなどどうでしょうか？ 麻婆豆腐を体に垂らしているそ………」

「おお……！？ まさか麻婆豆腐にこのようなエロさが………麻婆………！ 中々やるようになったわ………」

閣下とアイザワ君達は、無駄に真剣な表情でエロ本を鑑賞しており、何とも近寄りがたい、いやあまり近寄りたくないオーラを放ってすらいた。

何が彼らをそこまで駆り立てるのか？ そう、それをひとりで表すならば、飽くなきエロスへの探求心だろう。

再び、閑話休題

「うむ、両者とも四天王の名に恥じぬモノであつた……」

2人「はは！！　ありがたきお言葉！！！」

エロ本でここまで畏まれる人種がいたのかと、人類の歴史に新たに刻まれた負の遺産を目の当たりにしたりオスは思いながら、オオトリであるルークのエロ本の公開を待っていた。
部下がここまでの仕事をしたのだ。皇帝たる彼ならば、それを超える物を持つてくることは間違いないだろう。

「（……なんだろ、嫌な予感しかしない……）」

最近、自身の嫌な予感レーダーの精度が上がっている事を悩みの種にしているリオスのその予感は、ものの見事に的中することになる。
「では、最後は私が……。いいだろう、見せてくれよう……これが、私の至高のエロ本だ！！！！！」

ババン！！！！

「おお！！！？」

「こ、これはあ！！！！？」

ルークは、段ボール製の効果音文字を背景に、自分の至高のエロ本を取り出した。

そして、そのタイトル、内容を見た瞬間、部屋にいた全員が凍りつくことになる……

皇帝陛下のエロ本『金髪ツインテお姉ちゃんのちよつとエッチな巫女巫女ご奉仕』お姉ちゃん……頑張るから』

「いやあ、この巫女さんの人がねーさんにそっくりでさあ、思わず衝動買いしちゃって……ってあれ？ みんなの視線がなんでか冷たいぞ……？」

三人「……」

まあ、訓練された読者の皆様方ならばお分かりだろう。

基本的にこのポンコツ皇帝は、姉であるフェイトさん万歳、至上主義なので、当然のことながらエロ方面でも姉優先になっていくのだ。本格的に、姉共々危ない橋を渡りそうで怖いと、リオスとはやて達で話し合っていた昨今だ。

「いや、分かったた、分かったんだけどね……もう流石に……ねえ？」

「だ、だな……流石にここまで露骨だと……なあ？」

「閣下……シスコンとしては尊敬せざるを得ませんが……これはこれで、まずいと言いますか……」

リオス、アイザワ君、タカハシ君の順で冷たい視線を送りながら、奥歯に物が挟まったような感想を送ってくる。

ポンコツ皇帝は、自分の趣向が悪いなどとは一切考えていない、というか自覚が無い。

まあ、だからこそフェイトとの関係が均衡を保っているのかもしれないのだが。

「さ、皆そろそろ寝ようか……」

「そうだな」

「おやすみー」

「え、あのちよつと！！？　こつからかなりエロくなっていく感じで……えつとその……」

こつして、微妙な空気を残したまま、エロ本鑑賞会は幕を閉じたのだった……

「むか〜し昔、あるところに、満月の夜になると猫耳が生えてしまつてどうしようもなく体が火照つてしまう巫女さんが居ました……」

「「う、ゴクリ……」」

「普段の彼女は清楚でお淑やか。村人からの評判も上々な、村のアイドル。しかし、満月の夜になれば、その仮面は剥がれ落ち、男を弄ぶ悪女になってしまうという……」

「……………」

「そんなある日、村の中でも一、二を争うシヨット……童顔で知られている、それは見目麗しい少年が、回覧板を届けにその巫女さんの家に……………」

「「っ、続きお願いします！！！！ 巫女さんとシヨタ君は一体どうなってしまうんですか！！？」」

「ていうか、寝ようって言うておいてなんでそんなエロ話に発展してるのさ！！？ 二人ともルークの話に食いつき過ぎでしょ！！？」

それぞれの布団に入って、寝ようという事になった一行は、お約束と言えいいのか、当然の如くねていなかった。

ルークの考案した日本昔エロ話に、エロティック四天王の二人は滅茶苦茶食いついていた。

「だってさあ、このまま寝るのもなんか勿体なくねえ？」

「まあ、折角こうやって寝食を共にしてる事だしなあ。たまには嵌め外して楽しむってのも一興だろ？」

「ま、まあ否定はしないけどさ……………」

タカハシ君とアイザワ君の二人に変な感じに諭されてしまい、思わず同意してしまうリオス。

まあ、彼とて楽しむという事に関しては拒否するつもりはないし、むしろ積極的に参加したい方だ。しかし、内容がエロ限定では身が持たない。

「閣下、何かいい案は無いですか？」

「ふむ……」

タカハシ君は、最後の砦ルークに意見を求める。というか、彼に何かアイデアを期待すること自体が間違いな気もするが、そこは突っ込んではいけない。

真っ裸にひん剥かれた上で、新宿二丁目または大阪市北区堂山町に放置される刑に処されてしまう。

ルークは、何か案はないものかと逡巡し、パツと目を開く。そして、無駄に洗練された無駄の無い無駄な間を空けてから口を開いた。

「よし、恋バナをしよう。チーム名は、リトルバستم……」

「普通に恋バナしようでいいだろ!!? なんでそうネタを持つてくるのかな!?!?」

「しょぼーん(´・・・´)」

ネタを最後まで言わせてもらえなかったため、閣下は落ち込まれてしまった。結構ガラスのハートらしい。

しかし、ここで無駄な行数を使っている場合ではない。てっとり早く話を進めることにしよう。

「はあ……。まあ、エロ話よりかはいくらかマシか……。で、するにしてもどんなこと話すのさ?」

「普通に好きな相手の名前とか馴れ初めとか、あとは相手の好きなこととかその辺で良くね?」

「だな。この場を限って異端審問会も無ってことで」

リオスとタカハシ君達でパパツとルールなどを決め、恋バナしよう的な空気は確たるものになった。

だが、問題はここからだ。恋バナをする上で最も重要な事。

それは、『誰が最初に話すか、である』

「で、誰から話す？」

ルークが一向に目配せしながらそう尋ねると、全員が少し顔を赤くしながら視線を外した。

どうやら、それぞれ思い人が居るようだが、面と向かってそれを自覚させられて照れているようだ。

そして、ルーク、タカハシ君、アイザワ君の視線は一斉に同じ方向に向くことになる。

三人「「「ジーーーーー……」」」

「……………え、なに……………？　なんでみんな僕を見るのさ……………？」

そう、この場で最も恋っぱい恋をしているリオス・コーネルドである。思えば、今のところこの作品内で最も恋愛関係のイベントを順調に進めているのは、奇しくも彼だった。

ここ最近、悩みの種の事もあってなのは少し上手く行っていないものの、彼のなのはへの思いは本物だ。

「リオス……………」

ポン……

「いや、そんな『分かってるよね？ お前、そう言う役だもんな？』
みたいな感じで肩叩かれても……………」

しかしまあ、恥ずかしいものは恥ずかしい。誰だって、自分の好きな人間の事を表ざたに話すことなど少ないだろうし、抵抗が無いという方が少しおかしいだろう。

リオスも、なのはとのことを話すのに気恥ずかしさがあるのだ。

「オーケー、オーケー。じゃあこうしよう。リオス、お前が好きな子の名前とか言ったら、俺も言うからさ。だから、な？ トップバツター行こうぜ？」

「コーネルド……………漢を魅せる……………」

タカハシ君とアイザワ君は、サムズアップしながら溢れんばかりの眩しい笑顔を向けながらそう促してくる。

ルークからも、無言のプレッシャーが飛んできており、どうにも逃げられないような雰囲気が出来上がっていた。

「わ、わかったよお……………。で、でも、絶対だからね！？ みんなも約束忘れないでよね！！？」

三人「……おkおkwwww……」

「あ、怪しい……………はあ、まあいいや……………」

なんとなくだが、先ほどの会話自体がフラグのような気もするが、ここまで来たのなら仕方ない。寧ろ、なのはとの事を話して皆から

アドバイスなどを貰うというのも一つの手だろう。
ここ最近のこう着状態からの脱却を狙うには、藁にも縋る思いなり
オスだった。

「で？ ずばり、コーネルドが好きなのって誰よ？」

「……………な、なのはさん……………／／／／／」

「あゝ、高町先輩なあゝ。いいよなあ、可愛いつていうか、年上
なのに愛でていたくなるっていうかなあ……………」

タカハシ君の質問に、リオスが正直に自分の思い人の名前を告げる
と、アイザワ君がうんうんと首を縦に振りながら、リオスの好みの
良さを評価してくれた。

ルークはこの辺りの事は知っているので、特に何も言うてはこない。
まあ、馴れ初めなどの話では食いついてくること間違いなしだが。

「ていうか、コーネルドって高町先輩と幼馴染なんだろう？ 一体い
つごろから一緒に居るんだ？」

「えと……………親同士が仲良くってさ、その縁で……………。物心ついたとき
には一緒にいたような気がする」

「ってことは……………もうその頃から……………？」

「……………コク／／／／／」

タカハシ君達になのはとの出会いや、いつから好きだったのかを聞
かれ、顔を真っ赤にしながら答えていくリオス。
なんというか、こういう時の彼は間違いなく男ではなく乙女な気が

してならない。

「で？ リオスってなのはさんのどの辺が好きなのさ？」

そして、皇帝ルークからの質問。ある種、当たり前な質問かもしれないが、好きな相手の事を具体的に示すというのは案外難しいものだ。

しかし、リオスにとってはもう10年以上の付き合いと気持ちだ。それなりの答えを……

「ぜ、全部に決まってるだろ…… / / / / /」

このリオス、完全にベタ惚れ状態である。

「全部つてお前……」

「なのはさんの笑ってるところも、ちょっとシヨンボリしてるところとかも…… 怒ったところも、優しいところとか、ちょっと頑固なところとかも…… もう、全部……。良い部分も、悪い部分も含めて、僕はなのはさんが好きだ」

三人「」「」……………」

しかし、ルーク達はそれを笑ったりはしない。リオスの気持ちを話しているときの表情がとても真剣で、どれだけ彼がなのはを思っているのかが分かったしまったからだ。

ルーク達にも、茶化すべきところとそうでないところの判断は付く。

「じゃ、尚更頑張らないとな。二学期からは文化祭とかもあるし、

チャンスはいくらでもあるさ」

「だな。リア充誕生は少し心苦しいが、ここまで言われちゃあなあ……」

「お前なら大丈夫だよ、コーネルド。きっと上手く行くって」

そして、ルーク、タカハシ君、アイザワ君の順でリオスにそれぞれエールを送る。特に、ルークはそれを手伝えることになる可能性が高いので、これからが大変だと感じながら。

「皆……うん、ありがとう……」

皆の温かい言葉に、少し目頭が熱くなってしまったリオス。ここ最近の悩みが、なのはとの関係について深く悩んでいた彼だが、着実に良い方向に向かって進んでいる。

この分なら、聖祥が誇るバカップルの誕生もそう遠い先の話ではないかもしれない。

ルーク達は、本当に友達思いな、伊達な心意気の持ちぬs……

三人『』（（だが、カップル成立の暁には………聖祥は血で血を洗う戦場になるがな………！！！！））『』

返せ、私たちの感動を返せ。

読者様方の感動をぶち壊しにしたルーク達FFF団。いつになったら、人は争いをやめるのか………そんな問いかけをしても、彼らからは同じ言葉が返ってくるのだらう。

『リア充を滅ぼすまで』と………

「さ、僕の話はこんなところだよ。じゃあ、約束通り、次は皆の番……」

三人「「さ、明日も練習練習！！ 頑張るぞ！！ お休みなさい！！」」

「ちょ、ちょっと待って！！！？ おかしくない！？ これおかしくない！！？」

既にお分かりの方もいるだろうが、修学旅行などで恋バナをした場合、『俺も好きなこのことは成すから、お前も絶対言えよなあ？』みたいなやり取りは、基本的に裏切られるフラグなのだ。

「え？ ちょつとみんな！！？ る、ルーク！？ ルークってば！！？」

三人「「zzzzzzzzzz」」

「……………え？ マジで？ これはくない？」

哀れリオス……………君は犠牲となったのだ……

そんな天の声が、どこからか聞こえてくる……………気がしたがあまりそれを現実として受け入れたくはないだろう。

まあ、男とはこういった経験を糧に、強く逞しく成長していくものだ。

頑張りリオス！！ 負けるなりオス！！ 君の戦いは、始まったばかりなんだ！！

ルーク達「俺たちの戦いはこれからだ!!!」

悪在る限り、ルーク達は戦う。その戦いに終わりが見えずとも、彼らは……歩き続けるのだ。

魔法少女リリカルなのはStrikers スクール・ラブ・パニック!! 完

長期にわたるご愛顧、誠にありがとうございました！！
F20C先生の次回作にご期待ください！！

「なにジャンプ漫画の打ち切りエンドみたいな感じにしてるのさ！
！！？　って、こら！！　起きろおおおおお！！！！！！」

三人
「
」
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
}
}
}
}
:
:
:
:
:
:
:

「ちくしょおおおおおおおおお！……！！！！！！」

リオスの叫びも虚しく、その声は夜の闇に溶け、消えていった……

注意

まだ終わりませんので悪しからず。

フェイト達の部屋……

「ふにゅ／＼／＼／＼／＼／　やあ、だめえルークう……………もうこれで五回目なのにい……………にゅふ／＼」

なのは達ルームメイト「……………」

「もう、ルークは甘えんぼさんなんだからあ……………／＼／＼／＼／仕方ないなあ……………ふにゅ、やん、そんなにしちゃダメえ……………／＼／＼　ま、麻婆豆腐はそんな使い方しちゃ……………／＼／／あう、でも気持ちいいかも……………／＼／＼／／」

「な、なのは……………？　フェイトっていつもこんな感じなの？」

「にゃ、にゃはは……………う、うん……………」

フェイトさんが、妄想全開の夢を見ながら、幸せそうな顔で寝ているのをなのは達は苦笑いしながら見ていたとか居なかったとか……………

第三十七話 俺も好きな女子の名前言うから、お前も絶対言えよなー!？」

F20C「リオスは、犠牲となったのだ……」

ソラ「いや、なんて言うか……リオスさん、お疲れっす……」

リオス「orz」

ソラ「え、ええと……で、でもさこうやって第三者に気持ちを明かせるくらいになのはさんの事を思ってるなんて、流石だなあ……。リオスさんなら、きっとなのはさんとのハッピーエンドを迎えられるって思えますよww」

リオス「そ、そうかな!? ほんとにそう思う!?」

ソラ「ええ! だから自信持ってくださいw リオスさんなら大丈夫ですって! (氣い使っなあ……)」

リオス「そ、そうだよね……うん、僕頑張るよ!」

ソラ「ええ頑張ってください、俺も応援してますから。」

F20C「ソラも苦労人だな……」

次回『紅白戦と復帰マウンド』

第三十八話 紅白戦と復帰マウンド（前書き）

活動報告でもお知らせしましたが、この度私、F20C。無事に就職活動を終えることに成功いたしました！！

来年の春から社会人ということで、今から身が引き締まる思いです。それに伴い、執筆活動に割ける時間も少し多くなるので、今後とも精進していきたいと思っております。

応援してくださった皆様、本当にありがとうございます。

お礼は、私の書いた一生懸命な作品という事で、粗末ではありますがお楽しみいただければ嬉しい限りですww

では、本編をどうぞ！

第三十八話 紅白戦と復帰マウンド

「よし、一年は三塁側のベンチ、二年は一塁側のベンチを使い。今回の紅白戦では、俺は口出しはしない。ポジション、打順、バントの指示やヒットエンドラン、スクイズなんかの判断も自分たちで考えてやってみろ」

「「「はい!!」「」」」

「うし、んじゃそれぞれのベンチに行ってメンバー票作って来い。時間は5分以内な。それじゃあ、解散!」

ルークの復帰マウンドとなる、一年生対二年生の紅白試合。それが始まる10分前、グラウンドではライルが今回の紅白試合の概要を伝える。

今回、監督である彼はどちらの側にも付くことはなく、主審としてのポジションに付くらしい。

選手の能力をしっかりと確かめるためでもあるのだらう。

「で、どうする? メンバーは」

「ああ、昨日みんなで話し合った通りで行こうと思う。メンバー票も、もう作ってあるしね」

一年生組のキャプテン、リオスはチームメイトの声にポケットから取り出したメンバー票を見せながらそう答える。

「しかし、驚いたよなあ。まさかルークが投手経験者だったなんてな。それにリオスはキャッチャーでって……………なんで今までやら

なかったんだ？」

「あはは、まあちょっとイロイロあってさ。でも、しっかりと仕事はこなすから期待しててよ」

「もともと、俺らの中に投手経験者居なかったしな。俺らとしては渡りに船だよ。期待してるぜ」

タカハシ君とアイザワ君、それに他のチームメイトたちもルークとリオスのバッテリーには大賛成のようで、特に問題もなく昨日の内に話はついていた。

この二人のセンスの良さは既知の事実であるし、何よりどうせやるなら先輩相手でも勝ちたいというものだ。

今日のリオス達は燃えに燃えていた。

何故かと言うと…………

「リオスくん！！！！がんばって~~~~！！！！」

「ルークも皆も頑張れ~~~~！！！！」

「応援してるわよ、一年生チーム~~~~！！」

「リオス君と、ルーク君の絡みが……………（*´、*）ハアハア」

そう、同じ合宿所で強化合宿に来ていた女子テニス部の面々が、野球部の紅白試合の応援に来ているのだ。

その中には、なのはも、当然ながらフェイトの姿もある。

一年三組のエロティク四天王の一人の姿が見えたような気がするが、気にしたら負けだろう。

と、何はともあれ、女生徒が応援してくれるというのだ、男の子ならば俄然やる気が湧きあがってくるというのが青春のページというものだろう。

「ルーク、肩とか肘の調子とか、どこか気になるところは？」

「いや、特には。一昨日言ってた、コントロールとか、変化球の気になるところの調整も昨日の内に済んでるしな」

「うん、分かった。じゃあ、今日もよろしく頼むよ」

リオスは、メンバー票を持って行くのと、先攻後攻を決めるジャンケンをしに行く前にルークに体の調子などを聞いてみる。

一昨日までは、投手と言うかマウンドに上がるのもためらっていた彼だが、少しはマシになって来たらしい。

出来ることなら、このまままた投手に復帰してくれればと、リオスは願わずにはいられなかった。

「じゃあ、僕メンバー票とジャンケン行ってくるから、皆はアップしててね」

「「「おー!!」「」」

リオスは願いを込めつつ、チームメイトたちにそう言つと、主審の格好をしたライルの元に走って行った。

「（はあ……何でこんなことになったんだか……）」

対して、ルークは久しぶりに上るマウンドに対する、若干の興奮を覚えながらも、心の中では、まだ少し引つ掛かりを覚えていた。用意してもらった、投手用のグローブも、渡されたロージンも、どこか持っていると気が落ち着かない。

「（もう二度と、マウンドに立つつもりはなかった……なのに……）」

思い返すのは、チームメイトからの非難の声と視線。そして、手に握りしめた退団届。

そして、悔しさのあまり涙を堪えきれなかった、あの惨めな気持ちだけだった。

「（……よそう、考えるのは……。今は、試合に集中するんだ……）」

ルークは、振り切るように頭を振りながら、タカハシ君とアイザワ君のキャッチボール組に混ぜてもらい、体を温めることにした。

「あ、リオス君達一年生チームが後攻みたいだね。二年生からの攻撃だ」

「ルークはいつも通り、サードかな……？　って、あれ！？」

試合が開始され、後攻のルーク達一年生チームが守備に付く。なのはとフェイトは、昔から彼らの試合の応援に来ているので、野球に対する知識はそれなりに豊富だ。

何故か、フェイトが阪神タイオースのメガホンとハツピを装備しているのだが、詳しくは奈々様のwikiを参照してみてください。

と、守備に付いたルーク達の配置を見て、フェイトとなのはは驚いた表情になる。

「ルークが……マウンドに……？」

「リオス君も、今日はキャッチャーだよ………？」

2人が驚いたのは、ルークとリオスがバッテリーとしてマウンドで話し合っているという事だ。

リオスはレガースを付けており、ルークはいつもの野手用グローブではなく、投手用のグローブを使っている。

「え、えつと……先輩、ルーク君とリオス君って、ピッチャーとキャッチャーじゃないんですか？」

「う、うん……。いつもは、ルーク君がサードで、リオス君がショートなんだけど………」

「……………ルーク……………」

質問してきた後輩に、なのはが答えている最中、フェイトは嬉しい

ような悲しいような、そんな複雑な表情を浮かべながら、マウンドにいる弟を見つめる。

その光景は、フェイトもリオスもなのはもが望んでいたもので……
本当ならもう二度と目にすることは出来ないと思っていたものだった。

「フェイトちゃん……ルーク君が……」

「うん……マウンドには上がれてるけど……やっぱり、まだ吹っ切れてない感じがする」

マウンドに上がったルークの表情を見て、フェイトはすぐにルークの心中を把握してしまう。

彼の事ならば、誰よりも詳しい、誰よりも知っているという自負もある。大事な、大事な弟なのだ。例えば、本人が無自覚の間にそれ以上の感情を抱いていたとしても。

「ルーク……はふう……／／／」

知らず知らずの間に、フェイトの瞳には熱が籠り、頬が若干赤みを帯びてくる。久しぶりの投手としてのルークに、嬉しさと温かい気持ち混ざり合って、フェイトの顔は完全に乙女な感じになっている。

「（ふえ、フェイトちゃん……完全に乙女モードになってるよ……
…ま、まあこれなら暴走の危険もないからいいんだけど……）」

親友の暴走を止めるのは、いつもなのは役目だけに、フェイトの暴走危険度の有無の判断も慣れたものだ。

その判断能力がついてしまったこと自体を、喜ぶべきか嘆くべきは分からないが。

「（そう言えば……最近リオス君と話せてないなあ……）」

親友の事も気掛かりではあるが、自分の事もそうだ。

ここ最近、なのはとりオスはまともに話すことはおろか、顔を合わせる時間もほとんどなかった。

タイミングが悪いと言われればそれまでだが、なのはにはどこかリオスが自分の事を避けているように思ってしまったのだ。そしてその予感は、大筋間違っではない。

「（この試合が終わってから……少し話してみよう……。それまでは頑張っただけで応援しなくちゃ！）」

そう胸の中で呟きながら、フェイト同様なのはも試合観戦、および応援に集中することにした。

グラウンドでは、主審であるライルがプレイボールの宣言をしたところだった。

「プレイボール！」

ライルの試合開始の合図が背中越しに伝わってきた。

目の前には、久しぶりのマウンドに少しぎこちない表情を浮かべているルークの姿、そして、守備付いたチームメイトの一年生たちの

姿が映る。

高等部が上がってから、リオスが見たいと思っていた光景が、そこにはあったのだ。

「(さて……………まずは二年生チームのトップバッターだ……………)」

そして、左を見れば左バッターボックスに入った二年生の一番バッターの姿が見える。

ルークが投手という事に、二年生たちは若干の驚きを見せており、目の前の先輩もまた同じくだった。

「(まさか、ハラウンとコーネルドがバッテリーとはな……………ったく、この二人はほんとに溢れんばかりの野球センスだなあ)」

「(一番はやっぱり前レギュラー通りでマサ先輩……………多分、二年生レギュラーだった人たちは打順も守備も同じって思っているかな……………)」

バッターとキャッチャー、それぞれ考えていることは違う。

バッターは、打つ事。キャッチャーは打ち取る事を考える。その上で、前々から保有している情報と言うものが、何度か試合をした相手若しくは紅白試合ではモノを言う。

その点で言えば、全くのノーマークだったリオスとルークのバッテリーにあるアドバンテージは大きい。

「(一番バッターの最初の仕事は、『探りを入れること』だ。データが無い相手に対して、球種やコントロール、球威なんかを把握しておきたい……………。てなわけで……………一球目は……………)」

「（一球目は十中八九見てくる。でも、素直すぎるコースに投げちゃえば手を出してくる可能性もあるからね……。よし、スライダーで外角のクサイところだ……）」

リオスが球種とコースを決めると、パパッとルークにサインを出す。基本的に、ルークはリオスのリードに首は振らない。

投げたくない時には、たまに別の球種などを要求したりはしてくるがそれくらいだ。

ルークから見ても、リオスのリードにはそれだけの説得力があるという事なのだろう。

そして、リオスのサインに従い、ルークは投球体勢に入り、紅白試合の第一球、復帰マウンドの一球目を投げた。

スパーン！！

「ストライク！！」

一球目、ルークのスライダーは外角低めに綺麗に決まった。まあ、リオス自身、下手なコース以外ならば、目の前のバッターボックス内の先輩が見送ってくることは予想済みだったのだが、クサイコースを狙ってストライクが貰えたのは非常に大きい。

「（なるほど……良いコースに決まったな、今のスライダー。変化も鋭いし。ストレートの球威も見ておきたいけど……速球タイプか変化球タイプかくらいの判断材料は欲しいところだ）」

「（出来るだけ、一巡目は情報を出したくないし……。よし、次

は外低めにストレートだ)」

一球目を様子見し、先輩バッターはフォームを崩すことなく次のボールに備える。

リオスはリオスで、相手が情報収集をしている事を理解しているの
で、出来るだけ球種を絞って先輩を打ち取りたいと考えている。

サインを出すと、ルークは頷いてから投球体勢に入り、二球目を投げた。

「（ストレート！ 外は好きじゃないけど……っ！）」

キン！

「ファール！」

当てただけ、先輩はルークのストレートをカットしたのだ。

ファールになってボールは、バックネットに当たって地面を転がる。
ライルが替えのボールをリオスに渡し、リオスは礼を言ってから受け取ってルークに投げる。

「（流石に当てて来るか……。でも、これで2 - 0（ツーナッシング）だし、一球遊んでもいいし、決めに掛かってもいい……。だ
つたら……）」

リオスはストライクカウントを先ほどのファールを結び付けて、次の球種とコースをサインとしてルークに伝える。

「（なるほど、ストレートもそれなりに伸びるし重い。こりゃ、来年の夏あたりが楽しみだ。と、2 - 0で追い込まれちゃったなあ……」

……球種もはつきりしないし、やりにくいったらねえよ」

バッターは投球状態に入ったルークを見ながらそう考え、バットを握る力を強くする。

ここまでで見た球種はスライダーとストレート。しかも、カウントは2-0と情報的にも打席としての余裕的にも不利だ。

しかし、だからと言ってゲームを中断などしては野球と言うスポーツが成り立たない。

ここは、カットしてでも四球目に持ち込んでルークの持ち球を確認したいところだ。

2-0ということも、悪いことではない。相手が一球遊ぶかもしれないのなら、来た球をカットすることに専念すればいい。

明らかなストライクボール、クサイ球はカット、絶好球ならヒッティング、ボール球は無視、と言う場合分けも出来る。

そして、ルークの第三球目が投げられた。

「（っ！ 俺の得意な内角高めのストレート！！ いただき！！）」

絶好球ならヒッティング。場合分けの二つ目のパターンだ。

迷うことなくバットを振り、ボールにミートさせに行く。ストレートだと判断したのは、先ほどの第二球目とスピードがほぼ同じだったからだ。それに、外角に二球も続けて投げれば、バッターにはその残像が残る。

内外の投げ分けは難しいが、バッターにとっては打ちずらいものがある。リオスが内外の投げ分けてくるという可能性、そして内角が得意という事もあり、残像もあまり効果は無いようで、先輩バッターは迷うことなくバットを振り抜きにかかる。

ククッ!!

「(なっ!?! 手元で曲がって……スライダーかよ!!)」

ガキンッ!!

しかし、予想に反してストレートだと思っていたボールは、先輩バツターの手前で鋭く変化した。

ストレートに合わせていたスイングと、スライダー。その両者は、まともにインパクトすることはなく、ボールはバットの根元に当たってフライになった。

「オーライ!」

パシン!

ファーストがそのフライをしっかりと処理し、まずは一人目を打ち取った。

先程の先輩バツターの得意コースに、2 - 0 から絶好球を放ってやれば、相手は間違いなく振ってくる。

そこで意地悪く変化を付けてやれば、絶好球は難しい球に変貌する。

「(ルークのスライダーは、大きめに変化するのと、カットボール気味のタイプと二つあるんだ。一球目に見せたのは大きめの変化、打ち取るのに使ったのはストレートに見せかけたカットボール気味のタイプ。うんうん、なかなか上手に行った)」

三球で勝負を終わらせる事が出来たのも大きいし、何よりルークに打者を打ち取る気持ちよさをもう一度思い出してほしかった。

まあ、一人打ち取っただけではダメだろうが、試合に勝てば話は別

だ。

「（まだまだ、試合は始まったばかりだよ、ルーク。しっかり楽しんで投げてくれ！）」

リオスは、目線でルークにそう訴えかけながら、次のバッターの攻略に取り掛かるのだった…………

「すごい……ルーク君、またアウト取っちゃった」

「昔から、三振でアウトを取るタイプじゃなかったけど、今日もそうみたいだね」

テニス部の後輩の言葉に、なのはが付け足しながら試合の状況を眺める。

現在、ルークが二番打者をショートゴロに打ち取ったところだ。大きく変化する方のスライダーを引っ掛けた感じだった。

基本的に、ルークは打たせて取るタイプのようで、ずばずば三振を取っていくタイプではないらしい。

派手さはないが、守備の恩恵をフルに活用した省エネタイプともいえる。

野球と言うスポーツの、守備において最も大事な事はアウトを取る他にはない。個人的な奪三振数も、防御率も、全ては過程的なものだ。

チームが勝つことが前提になれば、数字に拘りすぎるというのは個人プレー以外の何物でもない。

「あ、あの……………」

「ん？　どうかした？」

後輩の一人が、なのはにおずおずと何かを尋ねたそうにしながら、口を開く。

基本的になのはやフェイトは、部内では優しい先輩ではあるが、質問の内容によつては機嫌を損ねる可能性もある。

人間、誰だって、嫌な質問をされて嬉しいと感じることはないだろう。

「えつと…………その、どうしてルーク君は……………っていうか、リオス君もなんですけど、ピッチャーとキャッチャー辞めちゃったんですか？　あんなに上手いなら、春から投げててもよさそうにも思えるんですけど……………」

「ああ、ええと……………それはね……………」

「……………うん、私が説明するよ」

後輩からの質問の内容を半ば予想していたとはいえ、いざとなると同返答したものか困ってしまう。

なのはは、どちらかと言えば件の事に関わりの深い方であるフェイトの方を見ると、少し真剣な表情をして、昔何があったのかを説明してくれた。

話して困るような話ではないが、べらべら話すことでもない。

しかし、フェイト達自身も、どこか話すことで前進できるような気がしたのかもしれない。

事件の事を間近で見ていたフェイトとなのは達も、少なからず心に重いものを感じていたのだろう。

「ルークとリオスは、中等部の頃は学園の部活じゃなくて、リトルシニアで野球をやってたんだ」

「ああ、だから中学の時は学園でもあんまり活躍を聞かなかったわけですね……納得です」

「うん。で、ルークとリオスは、チームの看板選手だった。投手も出来て、打たせてもいい仕事をするルークに、投手の能力を上手く引き出せる能力を持ったリオス。シニアチーム間では、それなりに有名だったりしたんだよ？」

その話をするフェイトには、少し誇らしげなところが見えた。自慢の弟の活躍を、我が事のように嬉しそうに話す彼女に、なのはも後輩も、可愛いものを見るような視線になる。

しかし、話を続きを聞いてみると、決して良いことばかりではなかったという事が分かってくる。

「でもね、中学時代の大きな大会、ルーク達の学年にとっては最後の大会。あと一勝すれば、次は決勝だったんだ。勝てばもっと大きな大会に参加できた。皆、凄いやる気だった……………でもね……………」

そこで、フェイトの表情が少し暗いものになる。ここから、嫌な話

になるのだと後輩は理解した。

「準決勝の相手は、去年の優勝チームで、その年もものすごく強かった。ルーク達も頑張ったんだけど、試合はどっちのチームも点数を入れられないまま、回だけが進んでいった。それで……リトルシニアでの最終回になる、7回の表に、ルークがここまでの連投で疲れてたのか、大会で初めてのフォアボールを出した」

リトルシニアの試合は7回までが一試合だ（中学の部活でもそうだが）。通常のルールでは、9回まで行われるが。

その他のルールは、大体が普通の野球のルールと変わらない。

「それで、次の打者に、そのフォアボールで出たランナーをホームに返されちゃって……。それが決勝点になって、ルーク達の中学最後の試合は終わっちゃった……」

「……も、もしかして……その負けたショックで……？」

「ううん、実際の原因は、これから。その……ね……その試合が終わった後、ルークが……」

そこで、フェイトは一旦話を切る。そして、一呼吸入れた後、再び口を開いた。

その時の事を思い出し、あの頃のルークを思い出し、少し気持ちが入ってしまったようだ。

「ルークね、チームメイトの何人かから、『お前のフォアボールの所為で負けたんだ』って……そう言われたんだ。その他の子達にもいろいろなことわれちゃったんだって。リオスはそのチームメイトたちを止めようとしてくれたんだけど、悔しかったんだろうね、

ルークを責める声は消えなかった」

「え？　そ、それっておかしくないですか？　だって、野球って九人でやるものですよ？　それに、ルーク君がフォアボール出して結果的に点が入っちゃったとしても、他のチームメイトの人たちはルーク君に援護射撃して、得点することは出来なかったんですよね？　それなのに、一生懸命投げてたピッチャー一人の所為にするなんて……」

確かに、彼女の言い分も尤もだ。ろくに得点に貢献できなかったにも拘らず、試合に負けた途端に、敗戦投手一人にその責任を擦り付けるなどおかしい話なのだ。

野球などのチームスポーツは、基本的に総合戦力のぶつかり合いだ。その中であって、試合結果の原因を個人に負わせるのは酷というものだろう。

「そうなんだろうけど……やっぱり、人って理屈じゃないんだと思う。多分、その子たちも悔しくて悔しくて……負けた苛立ちを、間違ってるって分かっても誰かにぶつけたかったんだよ……。その矛先が、ルークだった……」

「結局、ルーク君はその後すぐにチームを辞めちゃって、リオス君もそれに続いてチームを去ることになった。引退まで、もういくらもなかったんだけど、ルーク君は相当堪えたみたいで……。リオス君は、ルーク君だけに責任を押し付けたチームメイトに嫌気が差して……。兎に角、あの頃のルーク君は見てるだけでも辛かった……」

ある意味、もう一度野球をしようと思ってくれたのが不思議なくらいだった。

バッターとしてだけ、野球に復帰したルーク、そしてリオス。高校

に上がってからは、それらしい素振りは全く見せなかったが、彼なりに努力した部分もあるのだろう。

「ルーク君、グローブとかバットとか……処分しようと思った時期もあったみたいだけど、その度にフェイトちゃんがこっそり元の場所に返してたんだよね」

「あ、あはは……それくらいしか、出来ることなかったし……それに、どんな形でもよかったから、ルークに野球して欲しかったんだ……」

一度だけ、本当に一度だけ、ルークはフェイトに泣き付いて自分の中のモノを全部吐きだすように泣いたことがあった。

その時のフェイトの一言が、ルークをもう一度野球の場に引き戻したという事は、フェイト本人が知るところではない。

「うわあゝ……………凄いです、フェイト先輩……………姉弟愛ですねゝゝ」

「あ、愛だなんて……………そんな、その……………／／／／／／／／」

献身的なフェイトのエピソードに、後輩は目を星にしながらフェイトに尊敬の眼差しを送る。

フェイトはフェイトで、愛と言う単語で真っ赤になっているが。

「コホン……………今でこそ、なんでもないような雰囲気だけど、やっぱり、あの出来事は大きかったみたい。でも、昔のチームメイトの子達も、今頃後悔しているんじゃないのかな……………」

「そうですね……………一時の感情っていうものは、確かにあると思いますから……………」

咳払いをして、なのはが話を締めくくる。

まあ、希望的観測ではあるが、なのはの言う様に元チームメイト達も、何かしら思うところはあるかもしれない。

しかし、それもまた今更な話だ。ルークとリオスが作った一年近いブランクが消えることはない。

「だからこそ、私は今日こうしてルークとリオスがバッテリーを組んで試合に出てる事が嬉しい……………／／／／今は難しい顔して投げてるけど、試合が終わる事にはまたあの楽しそうな顔になってると思うよ……………」

カキインー！

と、フェイトが頬を赤らめながらそう言った瞬間、三番打者がセクターフライに打ち取られ、ゲームはチェンジとなりルーク達一年生チームの攻撃に移る。

ルークは、チームメイトからの称賛の声などに若干苦笑いを浮かべながらも、一緒にベンチに戻って行った。

「（ルーク、頑張れ……………お姉ちゃん、応援してるからね……………」

……………帰ってから、またハグハグしてあげようかな／／／／／あわよくばそのまま同じお布団で……………はふう／／／／／」

「ふえ、フェイトちゃん！？ 鼻血、鼻血出てるから！！！」

「わわわ！？ て、ティッシュどこですかー！！！」

良い話をしたと思ったらこれである。まあ、流石のフェイトさんクオリティと呼ぶしかないだろうが……

フェイトの流血はさて置き、試合はまだまだ始まったばかりだ。ルークがマウンドに本当の意味で復帰できるかは、この試合に懸かっていた……

第三十八話 紅白戦と復帰マウンド（後書き）

F20C「やっぱり、フェイトさんは最後までフェイトさんだったんだな」

ソラ「でも、フェイトさんが居たからルークの旦那は今も野球を続けてるんだよな。捨てようとした道具を、こっそり元の場所に戻すとかして、フェイトさんなりに一生懸命だったんだろうさ」

F20C「ほんと、ルークってフェイトさんに愛されてるよなあ……（副音声：マジでリア充滅びればいいのに……）」

ソラ「さ、作者が若干怖い感じになってるけど、次回もルークさんとリオスさんの活躍、そしてフェイトさんのルークさん愛にご期待ください」

F20C「ていつかさ……」

ソラ「ん？」

F20C「DOG DAYSの五話見たんだけど、相変わらずユキカゼ可愛すぎんだろjk……」「にん！」「心を撃ち抜かれたわ！」

ソラ「……………」

F20C「次回の六話での活躍が今から楽しみでならん……ああ、もう！ユキカゼ可愛いなあ！……」

ソラ「…………とりあえず、110番しておこう」

次回『お姉ちゃんの事なんて、全然好きじゃないんだからね!!』
Byルーク

第三十九話 お姉ちゃんの事なんて、全然好きじゃないんだからね!!（前書き

ルークの二つ目の宝具がその真価を発揮する!!!!!!

どうも、最早、変態と言う、皆様からの認識がこの先変わる事はないのでは？

と、若干不安になっているF20Cでございます。

本日のお話は、ルークとフェイトさんメインでございます。

でもって……押し倒します。

何を？

それは見てのお楽しみでございますww

では、本編どうぞ〜

第三十九話 お姉ちゃんの事なんて、全然好きじゃないんだからね！！

昔。

そう、一年位前の話だ。

もう、どうしようもないくらい腐っていた。何で野球なんてやっていたのか分からなかった。

あんなに必死になって練習していた自分を、過去に行けるものなら殴る飛ばしてやりたいとか、せせら笑ってやりたいとか、そんな事を考えて毎日を空虚に過ごしていた頃の話。

ルークは、そんな自分と、空虚な毎日、何より……野球が出来ない、したくないという自分の心に押し潰されそうになり、一度だけ、フエイトに泣き付いたことがある。

その時は、本当に……どうしようもなかった。

『俺が……俺だけが悪いのかな……。俺が投げなきゃ……。あの試合は勝てたのか……。？』

『そんな事ないよ……。ルークは自分に出来る事をしたと思う。結果的に、チャンスを相手のチームがモノに出来て、こっちがチャンスを手繰り寄せられなかった。それだけだよ？』

『で、でも……。俺……。俺がフォアボール出して……。打たれて……。』

『それだけが、負けた原因なのかな？ ルークは、一人で野球して

たの？ 違うよね……。野球は9人でやるスポーツだから。もし、あの試合がルークのフォアボールだけが原因で負けちゃったって言うなら、ルークが今までやってたのは野球でもなんでもない。ただの一人相撲だよ』

フェイトの優しいながらに厳しい言葉。だが、彼女の言う事はやはり心にストンと収まっていく。

何もかもが正しいわけでもない。誰もが納得する正解など、あり得ない。

しかし、ルークにとってのフェイトの言葉は、フェイトの存在は、いつも正しいものだったように思う。

『俺は……どうすればいい………』

『どうするかは、ルークの自由だよ。野球をするのもいいし、やめるのもいい。誰もその選択を責めないし、責めるつもりもない』

突き放す。本当なら、ここでうんと甘やかして、彼の疲れた心を癒してやるのも手なのだろう。

ルーク自身、フェイトの癒しを求めているのかもしれない。だが、それではダメだ。

彼に考えさせ、自分で選ばせなければ、ルークはいつまでもこのままだ。

『でも、その選択をするのに急ぐ必要は全然ない。しばらくは、迷ってみるのもいいと思う。野球がしたいなら、リオスと遊びながらでもできるしね。幸い、高等部への進学にはまだまだ時間はあるし

……高校に上がってまた野球するかどうか、今はゆっくり考えてみればいいよ』

『……………』

何も、時間制限があるわけではない。これは心の問題だ。

ルークが納得できるまで考え、最良と思える結果を出してくれれば、フェイトはその選択を応援するつもりだった。

『難しく考えなくてもいいよ？　ただ、少しお休みするって思えばいいんだよ』

『休み……？』

『うん。ルーク、今日まで一生懸命頑張ってたんだから、ちょっとくらいは休憩してもいいんじゃないかな。私はそう思うし、休憩場所としてこうやっていつでも私の部屋に来てくれてもいい。ゆっくり、ゆっくり……………ルークのペースで歩いてみようよ』

フェイトとの、このやり取りの後。ルークはまた少し悩む時期に入った。

しかし、それは後ろ向きな悩み事ではない。自分の身の振り方を、前向きに考えるための休憩期間として、少し歩くペースを落としてみたのだ。

そこに、リオスとの軽い草野球や、フェイトとのフニャフニャした甘ったるい時間など（あくまでも節度を守った）、その中でルークの心の中で少しずつ、ぐるぐる巻きになった自己否定などが消えて

行つてようで、高校に入ってからルークは野球に復帰した。

打者として、という若干の妥協があつたのはフェイト達にとっては若干残念な気もしたが、ルークがもう一度グラウンドに立つてくれたのが何よりも嬉しかったので、深く追求することは無かつた。

そして、そのルークが今、昔のトラウマと再び相對することになるマウンドに立ち、一球一球何かを考えるように投球に励んでいた。

カキイン！

四回表、二年生チームの攻撃。

リオスが指示したコースに、ルークが投げたシンカーが、この回で一巡した二年生打線に新たな驚きを与える。

一番バッターの先輩は、先ほどまで影も形も見えなかつたシンカーと言う球種に完全にタイミングを外され、ものの見事にセカンドフライに終わってしまった。

「（４回まで引つ張るつて聞いたときは冷やつてしたけど………まあ、杞憂だつたかな）」

この四回まで、リオスは左打者用の決め球であるシンカーを一度も見せずに、ストレート、スライダー、カットボール、フォークを組み合わせ、配球を考えていたようで、それを聞かされた時は味方

ながらに冷やりとしたものだ。

ここからは、シンカーを混ぜ合わせた配球を考えてあるらしく、リオスの性格の悪さ（こういう時に限る）にルークも頼もしさすら感じた。

「（でも……………それ以上に…………）」

そう思いながら、ルークはロージンを手に馴染ませながらバックの守備陣に目をやる。

「オツケー、ルーク。打たせてこーぜ!!」

「後ろは任しとけー！ テニス部の女の子達に俺の活躍をだ……………」

「お前ばっかに言いカッコさせないからな〜！ フェイトさんが見てるからって調子に乗るんじゃないぞww」

と、言う感じで頼もしい声が飛んでくる。

冗談交じりな感じが尚良い。あの頃はこんな風ではなかった。どこかチーム全員がピリピリしているような、余裕がないような感じだった。

中学時代と高校時代の精神構造の成長と言うのも大きな要素だろうが、やはりこのチームだからこそ、と言うのが一番大きいとルークは改めて感じた。

「（投手を辞めて…………どこかホッとしてたのか…………俺は…………。もう、責められることはないって…………）」

事実、野球の試合において最も矢面に立つのは投手だ。ルークが責任を追及されたというのも、その部分も影響している事だろう。

しかし、だからと言って投手は誰でも良いというわけでもないし、誰にでも務まるものではない。ルーク自身、自分のポジションに誇らしさを感じていたし、責任感も持っていたつもりだ。

そうでなければ、チームメイトからの叱責を買ったからと言って、野球を辞めたりはしないだろう。

「（まだ……よく分かんないけど……でも……でも……）」

フェイトの言葉を思い出す。自分のペースで歩いて行けばいいと言われた。

その結果、打者としての復帰と言う形で野球を再び始めた。しかし、どこか物足りなさを覚えていたのかもしれない。

打者限定の復帰と言うのも、もしかするとまだまだ休憩中の範囲に入っているのかもしれない。

そして、今日。ルークはマウンドに立って、昔と同じようにリオスのキャッチャーミット目掛けて、自分の最高のボールを投げている。チームメイト達からは、しっかりとした助力の声。フェイト達の姿もある。

「（今……マウンドに立って……投げてる事が……楽しくて仕方ない！！）」

スパアアン！！

ルークのストレートが、右打者の先輩の内角高めに綺麗に決まる。

その気合の入ったボールから、ルークの今の心情を感じ取ったのか、リオスは嬉しそうな表情でボールを返してきた。

まだ、ルークの中でくすぶっている部分は確かにあるのかもしれない。

しかし、今日のマウンド、ライルが用意してくれたステージに立ち、今のチームメイト達とのゲームを楽しむことでルークは確かに前に進めたのだ。

その日、野球部合宿の最終日。

一年生対二年生の紅白試合は、0 - 0のまま9回に突入し、結局引き分けとなった。（球数制限などの諸事情で、延長戦は無し）

その日の夜、ハラオウン邸にて……

コンコン……

「はーい？ 鍵は掛かってないよー？」

ルークと同じ時間に合宿から帰って来たフェイトは、部屋で洗濯物を片付けていた。夏も本格的な暑さを振るう様になってきたので、普段着もかなり軽装になってきている。

短めのスカートなどを家で履かれた時には、ルークは必死でラッキ

ーシーンを見ないように努力するほかない。
まあ、フェイト自身はルークになら見られても全然構わないという
感じなのだが。

「お邪魔するよ、ねーさん」

「ルーク？ 珍しいね、私の部屋に来るなんて……………も、もしかして……………／／／／／……………夜這い？」

「ちげーよ！！ ていうか、まだ夕方だから！！ お子様アニメ
タイム真っただ中だよ！！」

いつも通りの困った姉に、ルークは頭を抱えつつも、彼女の部屋に
入りドアを閉める。

たまに、勉強を教えてもらうために訪れるフェイトの部屋ではある
が、女性特有とも言えいいのか、フェイト特有とも言えいいのか、
落ち着くいい匂いがする。

「ええと……………あの……………」

「??？」

部屋に入ったルークだが、突っ立ったまま何かを言いたそうにして
いる。視線がフェイトの方と床の方を行ったり来たりしており、ど
うにも落ち着きがない。

「とりあえず……………座る？」

ポンポンと、自分が腰掛けていたベッドの隣を手で叩きながら、フ
ェイトが言っていると、珍しくルークはそれに素直に従って彼女の隣、約

10センチに腰掛けた。

少し顔が赤いものの、風邪と言うわけでもない。となれば、恥ずかしがっているのだろう。

「あゝと……その……なんだ……。今日……俺、マウンドに立って……ピッチャーやってた……だろ？」

「うん、カッコよかった」

「カッコ……って／＼／＼／＼　そう言うんじゃないかってその……」

何とも歯切れの悪い。股についているマグナムはお飾りかと、読者様方から苦情が来そうな歯切れの悪さだ。（実際のサイズは分かりやせんので悪しからず）

が、ルークもいつまでも恥ずかしがっているわけにもいかないと悟ったように、思い切ってフェイトの方を見て、勢いよく口を開いた。

「きよ、今日！！　俺がマウンドに立てたのは……前に、ねーさんが俺を叱ってくれたお陰だと……思っただ。もちろん、リオスとかチームメイトの皆のお陰つてもあるけど……ねーさんには……ちゃんとお礼を言っておきたいって思っ……」

そう、今日彼がフェイトの部屋を訪ねたのは、一年越しではあるものの、彼が腐っていた時に叱ってくれたフェイトに礼を言うためだった。

フェイトからしてみれば、叱ったつもりはなく、ただ単にルークにもう一度野球をして欲しかったがために話をしたのだが、ルーク本人にとってはそれ以上の意味があったという事だ。

「……そっか。私、ルークの役に立てたんだね」

「うん……かなり……ほんと……ありがとう」

「どういたしまして。でも、最終的にマウンドに上がろうって思ったのはルークだからね？ 何よりも自分の事も褒めてあげなきゃダメだよ？」

「う、うん……」

フェイトの頭を撫でられながら、そう言われたルークは赤面しながら返事をする。

普段なら、フェイトに甘やかされるのを嫌がるルークだが、今日は本当に珍しく素直である。

デレ期が来たという事なのだろうか？

そのまま、何とも言えない甘ったるい空気がフェイトの部屋を支配する。ルークは真っ赤、フェイトは何とも言えないような女神的な表情でルークを甘やかす。

「あ、そうだ………今度の日曜日、夏祭りがあるよね……？ なのはたちと一緒に行くってことになってるんだけど、ルークも行かない？ リオスの事はなのはが誘って言ってたから、リオスも来ると思うけど」

「祭り？ ああ、うん、行くよ。その日は一日休みだし………」

フェイトの誘いは、夏祭りに一緒に行かないかと言うものだった。この近辺では、最も規模の大きな祭りが今週の日曜日に予定されており、なのは達と一緒に行く予定を立てていたらしく、ルーク達の

事も誘おうという算段だったのだろう。

無論、ルークの方にも断る理由もないのでオッケーを出す。

「あはは、だったら私の浴衣姿、ちゃんとチェックしてもらってからね？ それと、祭り中のエスコートも」

「え、エスコートって……俺に務まるかは分かんないけど……まあ、やってみるよ」

フェイトのお願いに、ルークはそっぽを向きながら答える。

まあ、今日のお礼の手前、それくらいはしようと思ってしまったのだろう。フェイトが満足そうな顔をしているので、今はそれだけで無問題だ。

「さって……俺はそろそろ部屋に戻るよ。今日は疲れたし、夕飯までちょっと仮眠取る」

「え……じゃあ、ここで寝ていけばいいよ。ほら、私も膝枕してあげるし」

「っ！？ って、い、いいよ！！ 俺は普通に寝るから！！」

何と言う羨ま展開。

しかしこのエロティック大統領、私たちが大枚はたいてでも手に入る事が出来ない権利を恥ずかしさに負けてフイにするとは、何とけしからん。

ほんと、一回くらい刺されればいいのに。

「知ってるんだよ？ ルークが最近、可愛い女の子のプリントが入った枕で寝てるのは！！ ああいうのは、まだルークには早いの！ だから、お姉ちゃんがりアル抱き枕になって……」

「いいってばあ！！？ っていうか、なんで抱き枕のこと知って……！！？ いや、違うからね！？ べ、別に通販じゃないからね！！？ ポチったりしてないからね！！？」

「ほら今自供した！！ やっぱり、お姉ちゃんより抱き枕の女の子の方が良いんだ！！ 三次元より二次元なんだね！！？」

「ちつがあああああああああうううう！！！！！！！！！！」

もうこうなつては、フェイトは妄想族から中々帰ってこない。ルークが必死になつて弁明しても、そこから新しい解釈を突っ込んでくるのだ。

ある意味、扱いづらいことこの上ない。

しかし、その日は予想外のアクシデントが、二人を襲うことになった。

床に疊んであつた、フェイトの下着によつて……

ズルツ！！

「ふにやあ！！？」

「きゃう！！？」

必死でフェイトを元に戻そうとしていたルークだったのだが、足元

の注意が疎かになってしまっていた。

結果、畳んであったフェイトの黒い下着（中々に色っぽい）に足を滑らせ、フェイトをベッドに押し倒しながら、ダイブしてしまった。

これぞ、ルークの二つ目の宝具突き穿つ変態の槍である。ゲイボルグ（笑）

ワザと足を疎かにしていると思えない状況からの、ベッドイン。彼の持つ、108個の宝具の内の一つにして、ラッキースケベの根元を支える役割を帯びている。

「……………」

「……………」

しかしまあ、今はそんなことはどうでもいい。

問題は、偶然とは言え、『ルークがフェイトをベッドに押し倒した』
と言っこの状況である。

両者共、状況を飲みこめたにも拘らず、お互いに見詰め合ったまま
身動き一つしない。

が、その代りと言っては何だが、脳内ではものすごい勢いで性的興
奮を促すホルモンが出まくっていた。

「……………ね、ねーさん……………な、なんで何にも言わないんだよ…
……………？／／／／／」

「（どどどどどどど、どうしよう……………／／／／／これってあれかな？ルークの好きなエッチなゲームでいう、えちいシーン突入ってことなのかな！！？ううん、それはそれで寧ろ願ったり叶ったりで、既成事実を作っちゃう絶好のチャンスで、近親婚を世に広める第一歩になるっていうか……………ううん、それ以上に私の初め

てをルークが貰ってくれるって……。あ、でも大丈夫なのかな……。このお話基本的に朝9時更新だし……。だ、大丈夫だよね！！　愛さえあれば、多少の事は……。」

どちらかと言えば、フェイトさんの暴走が危険域にまで迫っていた。

しかし、こんな状況だ。男であるルークもまた、目の前に倒れ込んで煽情的且つ、艶っぽいフェイトの姿を見てしまえば、いろいろ妄想してしまう。

「（……………な、なんか……………ねーさんから、虐めてオーラが出てるよ
うな……………。た、確かにねーさんってかなりMっぽいけど……………
ってそんな事じゃなくって！！？　ああううでも、こんな恰好のねー
さんをどうしろってんだよ！！？……………や、やばいよ……………こん
なねーさん見てたら……………いろいろイジメて、めちやくちやにした
って……………だああああ！！？　何この思考！？　これじゃあ、
俺がまるで変態みたいじゃないか！！！！）」

ルーク、一つ言っておこう。

お前は既に、『生粋の変態』だということ！！！！

加えて、フェイトのM属性に反応してなのか、ルークのドS心に火が付いたようで、頭の中では様々なイジメてプレイが再生されまくっている。

ほんとこの姉弟、妙な部分がソックリである。

だがしかし、この小説はR-18ではないので、そう言った描写はNGな訳だ。残念だが、ここはルークの理性の総動員によって危機を乗り越えてもらう事にする。

「くあwせdrftgyふじこlp!!!!!! お、お邪魔しましたああああああ!!!!!!」

ボタン!!!!

ルークは、混乱とエロイ妄想でパンパンになった頭をドアにぶつけながらも、何とかフェイトを押し倒していた体勢から立ち上がって、何故か四足歩行でフェイトの部屋から逃げ出した。

ドキドキドキ.....!!

「な、なんでだろう.....ドキドキが.....治まらない..... / / /
/ / ルークに.....押し倒されちゃった.....から.....? はうう
.....恥ずかしいけど、なんだかものすごく幸せな気持ちになってる
..... / / / /」

フェイトさんは、いつもと違う自分の感情に戸惑いながら、ベッドの上でコロコロ転がりまくっていた。

危うく、一線を超える一歩手前まで来た二人ではあったが、小説ジャンルと言う絶対的な壁に助けられたのであった。

同時刻、リオスの家付近。

「（ルークももう一回ピッチャーをやってくれそうな感じになって

来たし……うん、今回の合宿、成果としては十分だったなあ……」

リオスは、ルンルン気分でいつものランニングコースを走っていた。ここ最近のなのはとのギクシャクした関係も、今日の出来事の嬉しさで少し忘れそうになっていた。

しかしまあ、そうは問屋が卸さないというのがこのお話の特徴と言うもので……

「リオス君」

「な、ななななななのはさん……?!」

リオスの家の前で、なのはが彼の帰りを待っているという、ルート突入直前のイベントが発生してしまった。

本当なら、試合が終わった後にも話をしようと思っていたなのはなのだが、タイミングが合わなかったので、直接彼に会いに来てしまったのだ。

「…………その……ご、ごめんなさい!!」

「あ! り、リオス君!!」

急に浮上してきた、無力感となのはとの顔を合わせずらいと言う感情から、リオスはなのはの横を通り過ぎて、自宅に駆け込もうとした。

しかし、なのはも手ぶらでは帰りたくない。少しだけでも、目的だけでもリオスに伝えたいと思いい手を伸ばした。

ガシ！

「うわつと……………な、なのはさん……………」

「……………こ、今週の日曜日！！ 夏祭り……………一緒に行こう！！？」

「……………ふえ？」

なんとかリオスの腕をつかみ取ることに成功したなのは、彼としっかりと話すための土台作りのために、今日の目的であった夏祭りのお誘いの件を手早く伝える。

「集合は、学校前！！ 時間は夜6時！！ いいよね！！？」

「は、はい！！」

「うん、じゃあ……………待つてるから……………」

なのはの気合いに押されながらも、思わずYesの答えを返してしまったリオス。そして、なのははリオスが何かに悩んでいる事を汲んでなのか、他には何も聞かずにお隣の翠屋に駆け込んでしまった。

かなり顔が赤かったのは、リオスの見間違いではあるまい。

「……………え……………？ ええええええええええ！！！！？ どどどど、ど
うしよう！！？」

でもって、漸く状況が飲みこめたりオスは、なのはの迫力に押されて夏祭りへの同行を承諾してしまったことにパニックを起こしてし

まうのだった。

またしても、大波乱が予想される夏祭りイベント……その時は、刻一行と迫っていた……

またまた所変わって、ハラウン邸のルークの自室。

ルークは、目の前に置いてある黒い布きれを睨み付けながら、頭を捻っていた。

その布きれと言うのが……どうにも、女性の下着のような形をして……
……というか女性の下着だった。

しかも、姉であるフェイトのモノである。

どうやら、慌ててフェイトの部屋から逃げてきたときに、気が付かない間に床に在ったフェイトの下着を引つ掴んで逃げてしまっていたらしい。

「つて、どーーーーーすんだこれええええええええええ！！！！？？
これ、完全に下着泥棒みたいじゃないか！！？返すにしてもなん
て言っで返せばいいんだよ今畜生！！！」

若干キレ気味に、フェイトの下着に向かって怒鳴り散らすルーク。だが、幾ら下着に話し掛けても答えが返ってくるわけもなく、彼の声は部屋の中で反響して消えてしまう。

「う〜〜〜……さっきの事もあるし、ねーさんと顔合わせずらい
つてのに……」

またまた……実はフェイトの下着をゲットしてラッキーとか思っ
てくせに……夜中にこっそりクンカクンカしようと計画している
くせに……

「ねーよー!!! 大体俺は、べ、別にねーさんの事なんか好きでも
なんでもないんだからな!!!? 勘違いすんなよ!!!?」

あまりに混乱しているようで、地の文に対してツンデレ回答をして
しまう始末。

リオスとは別のベクトルで、姉・フェイトとの関係に悩みまくって
しまう我らがエロティック皇帝なのであった……

「ルーク? 今日の夕飯、洋風か和風、どっちがいい……」

「あ……」

その時、母・リンディがルークの部屋に（ノック済み）。

でもって、リンディの目には女性もの下着を目の前に、頭を抱え
ている我が息子の姿が……

バタン……

そして、ゆっくりとドアが閉じられる。

「ルーク……? その……フェイトにはちゃんと謝っておくのよ
? あの子なら、あなたが自分の下着を取って……その、イロイロ
な用途に使ってたとしても、受け入れてくれると思うから……」。

そ、それじゃあ、夕飯が出来たら、また呼びますからね……」

パタパタ……

そう言い残して、リンディはルークの部屋を後にした。完全な誤解をしたまま。

「あああああああああああああああああ……！！！！！！……？？
？？？」

ルークの魂の叫びが、夕焼け色に染まっている空に木霊した。

はい、では皆さん。今のエロティック皇帝に対して、一緒に……

せーの！！

m9 (^ ^) ぷぎゃー w w w w w

第三十九話 お姉ちゃんの事なんて、全然好きじゃないんだからね!! (後書き

m9 (^ ^) ぷぎゃーwwww

ルーク「な、なんてこった………これじゃあ、完全に俺が下着フェチな変態みたいじゃないか……」

F20C「認めちゃいなYOU!!」

ルーク「やだよ!!? っていうか、ただでさえねーさんの事押し倒しちゃったつてのに……次回から夏祭り編とか……気が重い……」

F20C「とか言つて、既に脳内はフェイトさんの浴衣姿(若干乱れた)の事で一杯なんですネ、分かります」

ルーク「う、うるさいよ!!!!」

次回第四十話『りんご飴を舐めているシーンって、なんかエロイ』

第四十話 りんご飴を舐めているシーンって、なんかエロイ（前書き）

ヒャッハー！！BOPの連載が終わって、新作ばかり書いていましたww

スクラパに関しては、木曜日の時点で書き上がっていましたが……

…ふむ、どうしてこうなった……

新作に関しては、明日の月曜日の9時から連載開始となっておりますので、皆様何卒よろしくお願い致します（^-^）／

まあ、いつも通りフェイトさんがエロくて、ルークがおバカな内容となっております。

リオスとなのはの絡みもちろんですので、どうぞお楽しみにw

では、本編行ってみましょう

第四十話 りんご飴を舐めているシーンって、なんかエロイ

夏の風物詩の一つと言えば、祭りである。花火や露店、少し色っぽいお姉さんの浴衣姿にハアハアなど、祭りには様々なイベントが転がっている。

ルーク達の住む、海鳴市においても毎年大規模な夏祭りが開催されており、盛況な様相を見せている。

今年もその例に漏れることはなく、祭りは開催される予定であり、その日程が今日この日となっている。

「えへへ……／＼／＼」

「なに笑ってんのさ………？」

「だって、ルークとこうやって一緒に夏祭りに行けるんだもん、嬉しそうにするなっていう方が難しいもん……」

ルークとフェイトは、はやて、ティアナ、リオス、なのはと夏祭りに行こうという事になっており、集合場所である学校前に向かっていた。

道中、フェイトが嬉しそうにルークの手を取って、腕を組んでくるので、彼女のけしからん成長を遂げた胸がルークの二の腕辺りに押し付けられて、ふによふによと形を変えている。

先程から、ルークは鼻血が出そうなのを必死で堪えながら、頭の中で素数を数えてなんとか理性を保っていた。

「ゆ、浴衣……似合ってるな……それなりに……」

「そう？ ルークがそう言ってくれるなら……うん、嬉しいな……
／／／」

フェイトの今日の装備、いや服装は黒をメインにした浴衣である。
髪はアップでまとめ上げており、彼女の綺麗なうなじがルークを事
あることにドキドキさせている。

浴衣の醸し出すナチュラルな色気と、フェイトの醸し出すナチュラル
な色気が同調し、軽くトランザム状態と化していた。

今日のフェイトは、ルークにとって最終兵器以外の何物でもなかった。
た。

対してルークは、普段着とあまり変わらないような軽装だ。まあ、
男性版浴衣などを着てもよかったのだが、ルークが面倒だと言って
却下した。

「なのはたち、もう来てるかな？」

「どうだろ……。ていうか、最近のリオスとなのはさんって、なん
かきこちくない？ リオスがなのはさんを少し避けてるっていう
か……」

「あ、それは私も思ってた。なんだか態度が余所余所しんだよね……
…この前も、なのはからその事で相談のメールが来たんだよ？」

学校まであと数百メートルと言うところで、フェイトが今日のお祭
りメンバーの到着具合についてそう口にする。

何気なく口にしたそのフレーズなのだが、ルークは最近目についていたリオスのなのはへの態度の変化についてを思い出し、フェイトにその話を投げ返してみた。

そのフェイトも、二人の事は気になっていたようだ。加えて、なのはから相談のメールまで受け取っていたらしい。

なのはも、表面上では何でもないような態度を取ってはいるが、不安を消し去ることまでは出来ない。親友にくらいは相談したくなるというものだ。

「あの2人ってさ、前々から思ってたんだけど……………」

「うん？」

「お互い意識しまくってるのに、なんで付き合わないんだろうね？
ていうか、ここまで何もない方がおかしい気すらして来ちゃうよ…………。もしも、少し昔から上手く事が運んでれば、今頃は俺達、お赤飯炊きまくってる状態になってもいいように思っただよね」

自分たちの事は棚に上げて、というか完全に意識の外に置いておいて、リオスとなのはの関係について首を傾げるルーク。

まあ、彼の言う事にも一理ある。お赤飯はともかくとして、なのはとリオスと言えば傍から、360度どこから見ても相思相愛にしか見えないのだが、一向に関係が進展しないことで、はやて達の頭を悩ませている。

「前になのはに聞いたんだけど、今の関係が壊れちゃうのが怖いんだって…………。もしも、リオスとの関係を違うものにしようとして、二度と元に戻れなくなったらって…………」

「うん……リオスがそれを断るとは思えないんだけど……。あの2人って、ほんとビックリするくらいお互いの事に鈍感なんだよなあ……」

「あはは、それは私も同感。2人とも、気持ちなんかバレバレなのにね」

人のふり見て我がふり直せという、諺がある。今まさに、この諺を書いた紙を二人の頭上に振らせたくなくてしまつのは間違いなのだろうか？

リオスとなのはの関係について、あれこれと言ってはいるものの、自分達も同じような立場にあるという事を自覚してほしいものだ。

「まあ、こればかりは俺達ではどうしようもないかと……。今回の夏祭りで少しでも前進してくれればいいんだけど……」

「うん、そうだね。あ、そうだルーク？ どうせなら私達も前しん……」

「さー、早く集合場所行くよ……」

「……………うう、ルークの意地悪……………」

と、こんな茶番を繰り広げつつ、ルークとフェイトは集合場所である聖祥学園前に急いだ。この時のフェイトの『意地悪……』が、ルークの萌えキュンポイントを激しく揺り動かしていたのは、彼の中だけの秘密である。

聖祥学園前

「すまーん、俺とねーさんが最後っぱいな」

「ごめんね、ちょっと浴衣の着付けに手間取っちゃってて……」

学園前には、既にはやて、ティアナ、なのは、リオスが揃っており、ルークとフェイトが最後だった。

リオスはルーク同様、普段着で、はやて達女性陣は全員浴衣装備で気合が入っている。

「ええで、まだ集合時間の5分前やし。それに、どうせフェイトちゃん浴衣着替えシーンをルークが盗撮でもしとったんやろ？」

「うん……実は……／＼／＼／」

「ちげーよ！！！！ ていうか、ねーさんもなんで俺の社会的立場を崩壊させようとするのさ！！！！？」

いきなりのはやての冗談に、フェイトは意識しているのかいないのか、悪乗りをするものだから、ルークは即座に否定する。

というか、フェイトの場合は進んでルークに見せてくる節があるので、彼としては盗撮などと言う手段は必要が無い。なんと羨まけしからん。

「あんたの場合、普段からの行いがアレな所為でしょうが……」

「俺に言つなよ……作者の思うがままなんだからさ……」

「おっと、メタ発言はそこまでや」

ティアナに突っ込まれ、ルークが若干危険な発言をしたため、はやてさんが即座にルークを制する。

「で？ あの二人は一体何なの？」

「ああ……うちらが来た時からずっとああなんや……」

話を変えて、ルークは少し離れたところに、距離を取って並び立っているリオスとなのはの姿を見つけて、二人の余所余所しさと言うか、違和感丸出しな状況について尋ねてみる。

リオスはなのはの事を気にしているようなのだが、いまいち煮え切らないような表情をしており、なのははなのはで、リオスからのアプローチを待っているようにも見える。

ここ最近の二人の余所余所しい関係の事は既知の事ではあるが、まさかここまで長引くなどとは考えてもいなかった。

夏祭りに、リオスの事をなのはが誘ったという事で、多少なれども関係の改善、変化があつたのかとも期待したのだが、当てが外れたらしい。

「……………」

「……………」

「重傷だな、こりゃ……………」

「下手に刺激してもあれやし、今日は二人に気い使いながら行こか。あんまり目を離さん方がええやろつし」

「ですね……………」

ルークとはやて、ティアナはそう示し合つて頷く。フェイトも話を聞いているようで『うんうん』と同じように頷いていた。

まあ、二人がギクシャクしている状態が続くと、ルーク達の精神衛生上も大変よろしくないなので、今日はその当たりの事を意識しながら夏祭りを楽しみ、二人の関係改善に取り組んでみるのもいいだろう。

ということ、今日の活動・遊び方針が決まったところで……

「さあゝて、面子もそろったことやし、そろそろ祭りに繰り出すとしかゝー！」

と、はやてが号令を掛け、一行はまず、露店などが軒を連ねているであろう商店街方面に足を延ばすことにした。

時間も6時過ぎという事で、それなりに小腹もすいてきたところなので、花火鑑賞の前に少しお腹に入れておきたいところだ。

はやて達は、少し俯き加減で最後尾を歩くのはとりオスに気を配りながら、商店街方面へ向かった。

・
・

・
・
「おお、いろいろあるなあ…………たこ焼き、焼きそばにイカ焼き……………」

「ああ、うちはベビーカーステラ欲しいところやな…………あの甘い匂いは堪らん……………」

「私は綿飴が食べたいですね」

「ええつと…………私は…………あ、りんご飴食べたいかも」

商店街に着いた一行は、目の前に広がる数多くの露店、食べ物のレパートリーの多さなどを目にして、どれから手を付けようかと悩んでいた。

「ねえ、ルーク？ りんご飴食べない？」

「うーん…………合成着色料が口の周りに付いちゃうからなあ」

「むう…………じゃあ、私だけ買ってくるもん。後で欲しいって言うても上げないから」

「何でもいいから買ってきてきなよ…………お腹すいてるんでしょう？」

クウと、フェイトのお腹から可愛い音がする。まあ、露店での胃の活躍を見越してお昼は少なめに抑えていたので、お腹が空くのは当然の帰結である。

フェイトはルークにそう言われると、少し顔を赤くしながらそそく

さとりんご飴を買いに行った。

「えへへ」

「りんご飴でそこまで幸せそうな顔できる人も珍しいと思うよ」

「ふうんだ。意地悪ばかり言うルークなんか知らないもん。いただきます」

子供っぽい口調でそう言うフェイト。まあ、いつも通りの彼女である。

しかし、彼女もルークも気が付いていなかった、フェイトがりんご飴を食べるシーンと言うものが、どれほどの破壊力を兼ね備えているのかを……

「ぺろ……あむう……ぴちゃ……おいひい……」 りんご飴を食べている音です。

「!!!」

フェイトがりんご飴を食べ始めた瞬間、ルークに電撃走る。

ルークは、フェイトが飴を舐めるシーンから、目が離せなくなってしまう。その、あまりのエロさに。

「（こ、これはああああ!!!? ま、まさか、これが世界的に有名な『りんご飴と舌の使い方』の方程式だとも言っのか!!!?）」

一体何の方程式なのか、あまり詳しくは知りたくはないが、まあ彼の事だ十中八九エロいことだ。

確かに、ルークを硬直させるほどのエロさを、フェイト×りんご飴は実現していたのだから。

「れろ……くちゅ……あむ……」 何度でも言いますが、りんご飴を食べている音です。

「……………／／／／／／／／／／」

ルークは、フェイトから目が離せない。いや、離してはいけないのだ。エロティック皇帝たる者、目の前で起こっているエロから目を背けるようなことなど言語道断。

そう、敵前逃亡は士道不覚悟なのである。

と、そんな時、ルークの目にとある物体が目に入ってくる。

「（あ、あれは……！？ フランクフルトとチョコバナナ……！ し、しまった…… 私としたことが…… 何故ねーさんにりんご飴を食べさせてしまったんだ……！ ここでの最も適当な選択肢は、上記の二つであるという事は最早世界のルールだ……！ ！！！！！！）」

そう、彼の目に映ったのはフランクフルトとチョコバナナの屋台だった。その二つの形状から、ナニを想像するのは読者様の妄想力にお任せするが、小説の年齢制限の手前ここで注意喚起をしておく。

『卑猥なものではない、と思います。……………お察しください』

と……………。

「（待て、待て待て……落ち着け、まだ慌てるような時間じゃない……）」

どこかの誰かの名台詞を脳内で呟きながら、ルーク、いやエロティック皇帝は何かフェイトにフランクフルトorチョコバナナを食べさせるべく策を巡らせる。

しかし、この状況下にあつて、何の下準備もしていない上での策など無意味。

ここは、口八丁でフェイトに上記のアイテムを食してもらつ様に誘導しなければならぬ。

「ね、ねーさん？ 次はチョコバナナとか食べない？ フランクフルトとかも美味しそうだよ？」

しかし、この時のルークは、興奮しすぎて普段の交渉術を全く言っていないほど発揮できていなかった。
というか、ストレート過ぎる。

「うーん……まだりんご飴もあるしね……それに、次はたこ焼きとか食べたいかも」

「あう……そうっすか……（ジイイイイイザアアアアアアアアアアス……！！）」

そんなストレート過ぎる、且つ未だにフェイトがりんご飴を食している状態にあつて、次の食べ物を進めるなど、普段の彼ならばなかっただろう。

しかし、フェイトのあまりのエロさが、彼の判断力と思考力を奪つたのだ。

「（くそ！！ やられた！！！！）」「 いや、誰にだよ

どこかの死のノートの主人公の如く、エア机に向かって頭を抱えて悔しさ満点の顔でそう心の中で叫ぶルーク。

先程も述べた、冷静な判断力と思考力、戦場においては、その二つを欠いたものから散っていく。それこそが戦いの何たるかだと。それがルーク自身の自論でもあったにも拘らずだ。

「（ルーク・ハラウン……戦いの中で、戦いを忘れた……！！）」

どこぞのラル様のセリフを、こんなひどい場面で使いながら、ルークは自分が敗戦を喫したことを痛感し、その場に崩れ落ちるのだった……

それにしても、エロティック皇帝をここまで打ちのめすとは……

フエイト……恐ろしい子！！

「orz」

「何でルークは、道の端っこでもものすごく落ち込んでるんですか？」

「いろいろあるんや、男の子には……今はそつとしたいたり……」

はやてが気を使って、ティアナを諭す。ルークは、血の涙を流しながら、買ってきた水飴をちびちびと食べるのであった。

「（あ………ねーさんの下着の事………どうしよう………）」

家の自室にある、本棚の辞典のケースに隠してきた問題の一つを、
タイミング悪く思い出しながら。

「……………」

「……………」

一方、ルーク達がアホな事をしている最中、リオスとなのはは未だに口を開けずに、ただ一緒にいるだけだった。

本来なら、ルーク達同様この祭りを楽しんだり、浴衣姿にドキドキしたりとやるべきことは多いのだが、今の二人にそこまでを考える余裕はなかった。

「（僕……………何してるんだろ……………折角なのはさんが誘ってくれたのに、こんな風に暗い顔して……………」

リオスは、自身の情けなさに嫌悪感すら覚えてしまった。しかし、分かつてはいても心の中の霧・モヤは中々晴れてはくれない。

何をすればいいのか、どこから始めるべきなのか、何もかもが分からなかった。

「（なのはさんは……………多分、僕が何かを言うのを待ってくれてるんだ……………これは、僕自身の問題だって、理解してくれてるんだ……………」

そう、なのはが自分から話題などを振らないのは、リオス自身の問題を、彼自身の力で乗り越えて欲しいと思つての事だ。本当なら、今すぐリオスの腕を取つて、祭りの中を引っ張り回し、思い切り楽しみたいのだろう。

しかし、リオスの悩みが深いことを悟つて、彼女はあえてそれを我慢している。きっと、リオスなら抱えている悩みを払拭できると信じて。

ここまで悶々と考えて、リオスが気が付けたことが、なのはが自分の事をよく考えて理解してくれているという事実だった。例の事件において、なのははリオスに感謝すらしているし、情けないなどそんなマイナスな感情は一切持つてはいない。

しかし、リオスは結果に囚われていた。何も出来ず、年下の後輩に助けられたという事実、結果に。

「（こんなダメな奴に……なのはさんみたいな良い人を好きになる権利なんか……あるのかな……？）」

自分の事を大事に考え、自らを律する強さを持っているなのは。それが分かっているからこそ、リオスの悩みは深くなる。

そんな強い彼女に、自分のようにいつまでもうじうじと悩んでいる人間が釣り合うのかと……

弱い自分では、彼女を守ることが出来ない。弱い自分では、いつかは愛想を尽かされる……

リオスは自分の弱さを追い払いたいと、自分の弱さを疎ましく思つた。強くあれば、こんなことで悩まずに済むのに、と。

しかし、リオスの本当の欠点は、そんなものではない。彼は、その事に気が付いていないのだ。

なのはとの関係を変える、このままのギクシャクした関係をどうにかするためには、リオス自身が、その『欠点』を見抜き、知ることが絶対条件だ。

その欠点は何なのか、リオスがそれを知る時、認識するときはずぐそこまで近づいていた。

第四十話 りんご飴を舐めているシーンって、なんかエロイ（後書き）

ルーク「ふ、フランクフルト……………ゴクリ……………」

F20C「フェイトさん×チョコバナナ……………ゴクリ……………」

はやて「あんたらそればっかか……………」

F20C「仕方ないじゃん、だってフェイトさんがりんご飴食べてるだけでも『ピー！』が『バキュン！』になるんだもん！！」

ルーク「そうそう、これはもう仕方のない事なんだよ。おや、読者さんの中にも、前傾姿勢の方が……………」

はやて「ほんま、変態度に定評のある2人やで……………」

F20C「ていうかさ、スクラパにアインハルトと、ホムラを追加しようかと悩んでるんだが」

ホムラ「僕達をですか？」

アインハルト「それは構わないのですが……………どういった立ち位置で？」

F20C「まあ、当然二人にはくっ付いてもらう事前提なんだけど、幼馴染にするか、中学で出会って、なんとなく気になってる相手、な感じにしようかとか……………その辺りで悩んでるんだよね」

ホムラ「くっ付く……／＼／」

アインハルト「……………（ボフ！）／＼／／」

はやて「あ、アインハルトが頭から湯気出して倒れた……」

F20C「読者様的には、どんな形が良いでしょうか？ 何かアイデアがございましたら私目にお恵み下さいませ……」

はやて「ふふふ……これでホムラとアインハルトが加入したら、『絶対に笑ってはいけない海鳴市（仮）』の実現に一步近づけるで……」

F20C「次回では、あなたは仕掛け人ですもんね。楽しそうでないよりw」

次回『リオスとなのはと変態姉弟』

第四十一話 リオスとなのはと変態姉弟（前書き）

アインハルト&ホムラ……… 幼馴染設定で出そうかなと思ってお
ります、F20Cでございます。

先週の更新の際に、皆様のご意見を窺ったわけですが、やはり幼馴染安定ですよねww

お話の展開も広げやすいし、本編では中学で出会いですからねww

さてさて、今回のお話ですが、リオスとなのはさん……… 衝撃の展開ですね。

あと、ルークとフェイトのお話も前進いたします。何気に結構重要なお話になってます。

それでは、内容については本編で………

ゆっくりして行ってね!!

第四十一話 リオスとなのはと変態姉弟

「さうて、そろそろ花火の打ち上げ時間やな……」

「ですね、そろそろ移動しましょうか。途中で食べる物も調達しながら行けば、時間的にはちょうどいい感じになるでしょうし」

「場所は……去年と同じ、『あそこ』でいいよね？」

「賛成」

さてさて、露店の食べ物や的屋などを一通り楽しんだ一行は、手元の時計、または携帯のディスプレイを見ながら夏祭りのメインイベントである花火を見るために、相応しい場所に移動することになった。

彼らは基本的に毎年この祭りには来ているので、どこへ行けば花火がよく見えるか、人が少ないかを熟知しているので、穴場スポットの確保は既に万端だ。

「リオスとなのはちゃんも、それでええな？」

「あ、うん……」

「うん、問題ないよ」

はやてが、相変わらず気まずそうな雰囲気を出している、リオスとなのはにも尋ねると、二人はぎこちない笑みを浮かべながら、賛成した。

「あゝああ……………2人とも気まずさ全開やで……………」

「うゝん……………これは何かしらの手を打った方が良いのかな……………」

はやてとフェイトは、そんな二人の様子に『どうしたものか』と頭を捻ってみる。だが、はやて達は二人の間で何があつたのかなど知らないのです、どこをどうすれば、何をああすれば二人が元通りに仲良くなれるのか、皆目見当がつかない。

「いつその事、二人きりにして学校の体育倉庫にでも閉じ込めてみる？　もしかしたら、出てきたときには、お赤飯が必要な状況に……………」

「なるわけないでしょうが……………。ていうか、それどんなギャルゲーよ……………」

「る、ルーク……………／／／　そんな監禁プレイがしたいだなんて……………／／／　うん、でもルークがそこまでして私を虐めたいなら、お姉ちゃんはそれを受け止めてあげないと……………！」

「フェイトちゃん、誰もそんなアブノーマルな解決方法提案したらんから。ていうか、こういう道筋辿ったらその思考に行きつけるんですよ……………」

ルークのアイデアを曲解、というかグニャグニャに曲げまくった状態にして解読しているフェイトに、はやてが冷静に突っ込む。
もう、本当にこのお姉さんの将来が心配です。

「あ……………でも、二人きりにするっていうのもアリかもしれんな

あ……。少し荒療治な気もするけど、このままずるずる行くよりは……」

「少し離れたところから監視しておけば大丈夫でしょ？　ほら、この通り双眼鏡も常備してあるし」

「ほお、なかなか準備がええやんかルーク？　……………その双眼鏡、ホンマは何に使うつもりやったん？」

「ねーさんの着替……………もとい、バードウォッチング……………」

「嘘吐け！！　明らかに覗くつもりやったやろ？！　先週の冒頭でうちが言ってた覗き疑惑が真実味帯びて来たわ！！」

ルークの双眼鏡の用途に、一抹の、いや犯罪的な意味あいでの危機を覚えたはやて。まさか、先週のお話の、しかも冗談が以外にも真実だったかもしれないとは夢にも思わなかった。

「フェイトちゃん……………あんたええんか？　弟の覗きを黙認して……………」

「大丈夫！　私もちゃんと双眼鏡持つて来てるから！！　ルークの……………ううん、コアラウォッチングの為に！」

「なんでやああああああ！！！！？　なにか？！　もしかしてフェイトちゃんもルークの着替え覗いとったんか！？　どんだけ変態姉弟なん！！？　ていうか、コアラなんてどこにもおらへんし！！！！」

こんな姉弟で大丈夫か？　と今問われれば、間違いなく『大丈夫じ

やない、大問題だ』と答える他ない。

まさに変態姉弟である。

「ま、まあまあ……はやてさん。今は花火の見物スポットに急ぎましよう。人も多くなつてきてますし」（スツと背中は何やら双眼鏡らしきものを隠しながら）

「そこ！！！！ ティアナ、あんたもか！！？ ていうか、なんで皆が皆用意周到に双眼鏡装備してるんよ！？ うちか！？ うちが間違つとるんか！！？ 流行に乗り遅れてるんか！」

何と言うか、今回のはやてはツツコミ要員と化している気がしてならない。周囲の双眼鏡ブームに乗り遅れてしまった結果がこれである。

この三人がどんな用途で双眼鏡を装備していたのか、真相はあまり知りたくない。

「ちょっと、皆はここで待つといて！！ うちちょっと双眼鏡買ってくるから！！ うちもブームに乗っかるから！！！」

「よし、はやてさんは放っておいて、花火見に行こー！！」

ティアナ&フェイト「おー」

「ウソウソウソー！！ 嘘やから！！！！ だからおいて行かんといて………なんでこうなるんやあああああ！！！！！」

はやてさんのオチが決まったところで、一行は花火を見るための穴場スポットを目指して移動を開始したのであった。

一行は少し入り組んだ道を進み、近くの神社に来ていた。その神社の裏手は、花火を見るのには絶好のポイントであり、加えてあまり知られていない為、人ごみを心配しなくてもいい場所となっている。

「今年もここは絶好の花火見物ポイントやな」

「ですね。今年もあまり人は集まってないですし、結構気楽です」

はやてとティアナがそう言う様に、この見物ポイントを利用しているのははやて達を含めて数人だ。爺ちゃん婆ちゃんの夫婦が一組に、家族連れが一組。その他には誰も居らず、なんだか申し訳ない気分にならなってしまう。

「花火まであとどのくらい？」

「え〜と……………15〜20分くらいかなあ……………」

「ちょっと早く来ちゃったみたいだね」

フエイトが携帯を持って来ているルークに時間を尋ねると、花火までまだ少しあるようだ。そして、その時間をはやて達はリオスとなのはのために使う事を決め、目線で示し合わせた。

「ほんなら、うちとティアナでジュースでも買ってくるから、皆はここで待つといてえな」

「え？ それなら僕とルークで……」

「俺はねーさんと一緒に、下で食べるもん買ってくるから。さっき買ったの、もう無くなっちゃったし。リオスはなのはさんと待っていてくれ」

はやてがそう言うのと、ティアナが頷く。リオスが代役を買って出るが、それでは意味がないので、すかさずルークが逃げ道を塞ぐ。

「男が一人は残ってた方が良いだろ？ じゃ、そう言う事でなのはさんの事は頼んだからな」

「ほな、そう言う事で」

「あ、ちょ……！……行っちゃった……」

リオスの制止も虚しく、ルークはフェイトと、はやてはティアナと共に行ってしまふ。その際、フェイトがルークに体を密着させて、彼の体がびくと反応したのは最早お約束だろう。

「……………」

「……………」

2人残されたりオスとなのは。なんとなく気まずい雰囲気になってしまふが、この状態は間違いなく二人きりだ。

ルーク達が、二人のあまりのもどかしさに採った荒療治だが、上手く行くかどうかは二人次第だ。

「（……………ルーク達、もしかして気を使ってくれたのかな……………？
いや、絶対そうだ……………今日の僕、酷いもんな……………」

ルーク達の気遣いを、リオスは理解していた。改めて考えてみれば、今日の自分となのはの様子を見れば、あの四人が気を使わないわけがない。

逆に言えば、自分たちが微妙な関係になってしまったことで、彼らに気を使わせてしまった。

恐らく、なのはも同じことを考えているのだろう。少しだが、この状況に困った表情の中に、申し訳なさそうな感情が含まれていた。

「（僕は……………恵まれてるな……………。こんな風に、気を使ってくれる友達が居て……………不甲斐ないこんな自分を、ずっと待っていてくれる素敵な女の人……………。ほんと、恵まれてる……………」

普段、考えもしないことが頭を過る。

思えば、ルーク達の気遣いや、なのはの優しさがあまりに当然のようにそこにあった為か、その貴重さをリオスは忘れていたのかもしれない。

人間というものは、意外と貴重なものでも、慣れてしまうとその有難みを忘れてしまうものだ。環境への適応能力が高いというのも、中々に考え物だ。

嫌な事でも嬉しい事でも、人間は簡単に慣れてしまう事が出来る。リオスは、そのことを改めて実感した。

「（僕は、自分の情けないところが……………嫌だ……………。でも、それよりも……………その事で皆やなのはさんに迷惑をかけるのは、もっと

ダメな事だろう………？」

自身の無力に、やるせない気持ちになるのは仕方がないことだ。そうやって、落ち込む、ナーバスになることもまた、人間に許された感情の一つ。

しかし、それを原因に自分を大事にしてくれている人達に、不安を与えすぎるのは褒められたことではない。

事実、少し今回のリオスとなのははナーバスになる時間が長すぎた。その事が、ルーク達を心配させてしまう事に繋がってしまう。

「（確かに、僕は弱い………けど………！）」

だが、その事にリオスは気が付き、自覚した。

無自覚のまま、周囲に依存するだけの存在ではなく、自らの間違いに気が付き、自覚する。これが出来る人間と出来ない人間では、大きく違う。

「（僕が弱いからって、なのはさん達を心配させていい口実にはならないし、いつまでも皆に甘えてはいられない………そうだろ、リオス！！）」

先程まで、暗い気分だったリオスの心に少しずつ光が差してくる。見えていないことは、まだまだ多いし、悩むべきことは沢山ある。だが、それが人生と言うものだ。

短い時間でその全てに答えが出せるほど、人間は万能に作られてはいない。だからこそ、目の前の問題に一つ一つ取り組んでいくことが、何よりも大事なのだ。

「……………なのはさん……………」

「……………うん……………」

リオスは、気が付けば自分でも驚くほど自然に、なのはの名前を呼んでいた。

今日まで、目を合わせることも出来なかった相手の名前を、すんなりと……………」

「まず、謝らせてください。今日まで、ずっと変な態度でなのはさんを心配させて……………本当にすみませんでした」

リオスは、なのはに勢いよく頭を下げて、そう謝った。だが、その表情はどこか吹っ切れたようなもので、なのはも少しホッとした。

「僕は……………なのはさんが攫われて……………助けに行っただけど、逆にやられて……………結局は自分よりも年下のソラに助けてもらった……………。その事が、堪らなく情けなく感じて……………悔しくて、なのはさんが心配してくれているのに、それをずっと無下にしてました」

「……………」

なのはは、リオスの話を黙って聞く。一旦、リオスに話したいことを全部話させてやる。溜まっていたものを、すべて吐き出させてやりたかったのだ。

「こんな弱い自分が嫌で……………。何より、その弱さを理由にして、なのはさんを避けてしまって、ルーク達にも心配を掛けてた自分になんて気が付きました……………」

人間誰しも、弱さを持つて生きている。リオスもなのは、ルークもフェイトも、はやくもティアナも。

リオスの事を助けたソラにだって、弱さはある。

だが、重要なのは『その弱さを認めて、受け入れる強さを持てるかどうか』だ。

「僕は、心も体も……まだまだ弱いです。皆に助けてもらわないと、全然ダメダメです。なのはさんにだって、この先また助けってもらう事もあると思います」

弱さを認めて受け入れる、その強さ。

それを手に入れる第一歩は、誰かに助けてもらうことを、誰かに頼る事を恥じないことだ。

そして、誰かが助けてくれている事の有難さを、忘れないことだ。

そうすれば、リオス自身もまた、なのはやルーク達にとって、助けになる存在となれる。一方通行ではない強さ。お互いに支え合う強さ。

人がお互いに持つ弱さを補う。一番の近道なのだが、なかなかどうして、実行するのは難しい。

「こんな僕だけど……また、前みたいに……なのはさんの傍に居ても……いいですか？」

そして、リオスなのはの瞳をまっすぐに見つめて、そう尋ねた。リオスの目には、真剣になって自分の話を聞いてくれるなのは

が
いる。

ずっと懂れていて、一緒にいるだけで胸が熱くなる、そんな素敵な女性が。

ぎゅ……

「え……？」

リオスの問いに対するなのはの答え。

なのはは、リオスを優しく抱きしめる。ガラスでも扱つかのように、繊細に且つ暖かく。

リオスの弱さを受け入れるかどうかなど、なのはの中の答えは決まり切っていたのだ。

「私は、リオスの君の弱いところも強いところも……。恥ずかしがり屋なところも、少し責任感が強すぎるところも、お菓子作りが得意なところも、女の子の格好が似合うところも……。全部まとめて、リオス君の事を受け入れるよ……」

「な、なのは……さん……」

「だから……ね？ 私の弱いところも、強いところも、全部まとめて、ひっくるめて……。リオス君には受け入れて欲しいな……」

なのはは、そう言いながらリオスを抱き締める力を強くする。

心臓が、うるさいばかりに高鳴る。自分でも、どうにかなくなってしま
いそうだ。

だが、この手を緩めたくないし、目の前の優しい少年を他の誰にも渡したくない。

だからこそ、高町なのはは行動を起こす。

「あ、あの……その……二学期の……学園祭で………」

「え？」

「二学期の学園祭で、私、高町なのはは、リオス君に聞いてほしいことがあります」

二学期の文化祭。九月の下旬に予定されている、聖祥学園の学園祭。時間にして数えれば、あと一か月と少しだ。夏休みも後半戦に突入したという事もあり、部やクラスによつては、既に夏休み返上で活動の準備をしているところも少なくない。

「だから……それまで……もう少しだけ……わたしの『友達』でいてくれますか………？」

「あう……あの……は、はひ………」

それは、事実上の告白にも等しい宣言だ。いや、ある意味では予約とでも言うべきか。

リオスも、なのはの言葉の意味を理解できない程鈍くはない。だからこそ、なのはと同じくらい顔を真っ赤にして、何とか返事を返す事が出来た。

あと、一か月と少しの間だけの、『友達』としての関係。

だが、学園祭で何かが変わるのだ。良くも悪くも、確実に。

ドォーン！！

「「あ……」」

そして、二人の頭上に広がる夜空に、綺麗な花が咲いた。
花火が、爛々と輝き散って行く。

毎年見ている幻想的な光景だが、リオスとなのはは思った。

『今年の花火は、きっと特別なものになる』と……

「あ、あはははは！！」

「ぷ……くす……あはは」

そして、リオスとなのは、どちらからでもなく自然に笑いが込み上げてきた。2人は、花火の下で、晴れやかな笑顔を咲かせた。

久しぶりの、想い人との触れ合いはとても優しく、同時に甘酸っぱいものだった……

「なあ、ええと……これ、うちらはいつ出て行けばええや……？」

「ここで二人の邪魔でもしてみろ……………我々は世界の鼻摘み者だ……………」

「グラハムｗｗｗｗ」

「あの……………２人で漫才するのはやめておこうよ……………気付かれちゃうって」

はやてとルークの漫才に、フェイトが冷静にツツコミを入れた。
リオスとなのはを二人きりにした四人だが、なんとなく二人の前に出にくい状態に神社の陰から二人の姿を監視することしか出来ないのだ。

花火見物など、まともに出来るはずもない。

「ま……………今回はそつとしいてあげましょうよ。あの二人、とっても楽しそうだし」

「そつ……………だな……………ズルズル……………」

ティアナがそう言うと、ルークは買ってきた焼きそばを囓りながら同意した。祭りで出てくる食べ物、何故こつにも美味しいのか……………全くの謎である。

「……………いいなあ、なのは……………幸せそうで……………」

そして、フェイトは親友の笑顔を見て、羨ましそうにそう呟いた。
なんとなくルークの方をしてみるが、相変わらず焼きそばを囓りながらティアナと話している。

「（……………私も……………ルークと……………」

フェイトの顔に、少し朱が差す。その表情は、姉でもなければ、ただの色ボケお姉ちゃんでもない。

本当のフェイト、女の子としてのフェイトのモノだ。

「（でも、ルークはきつと、姉弟だからって……………私とは一緒にはなれないって……………そう言うんだろうな……………」

今まで、積極的なほどにアプローチ（たまに一線を超えそうになった時があるが）を試みてきたフェイトだったが、やはり姉弟と言う壁がルークを思い留まらせている。

それがもどかしくて、フェイトはやるせなくなってしまう。

「（でも……………でもね……………ルーク……………」

だが、フェイトは知っている。ルークの知らない何かを。

だからこそ、その事実があるからこそ、フェイトはルークを想い続ける。

自分だけのルークになって欲しい、自分をルークだけのフェイトにして欲しい。姉弟という壁があるにも拘らず、フェイトはその気持ちを抑えきれない。

「（私達……………本当は……………」

しかし、その事を口にすることは許されない。何より、怖かった。拒絶されるかもしれない、距離を取られるかもしれないという恐れ

が、フェイトを押し留まらせる。

だからこそ……………今のフェイトに出来るのは……………

「ルークウ　お姉ちゃんにも焼きそば食べさせて」

「ちょ！？　ダメだって、そんな大きな声出したらばれるってば！
！　ああ、もう、ほら口開けて……………」

「あゝん……………うゝん、おいしいゝ　あ……………これってルークと
の間接キス……………キャ（ゝゝゝ）（ヾエへへ）」

「なななな、何バカなことやってんのさ！！　ていうか、顔文字使
うなよ！！」

こうして、姉としてのフェイトでいる事だけ。

女としてのフェイトは、今は要らない。こうして、ルークが居てく
れるのなら、今はこれで……………

「えへへ……………／／／　うん……………今は……………これでいいんだよね
……………」

「は？　なにが？」

「なゝんでもなゝい」

「なんじゃそりゃ……………」

だが……………この二人にも、変化は訪れる……………

第四十一話 リオスとなのはと変態姉弟（後書き）

F20C「いろんなフラグが立ったね」

はやて「たった！！ フラグが立った！！」

ルーク「ハイジはやめろww」

はやて「ていうか、なのはちゃん……ついに何かを始める気やな……」

F20C「フェイトさんもフェイトさんで、何か隠し事があるみたいだね……」

ルーク「ねーさんが……隠し事……？」

はやて「実は……夜寝るときは下着もつけない……とか？」

ルーク「……いや、ありえんだろ（ダラダラ……）」

F20C「鼻血噴出しながらも説得力に欠けるんだよww」

はやて「さてさて、こんな流れを引き込みつつ、次回はギャグ回や」

F20C「皆さん、どうぞお楽しみに」

次回『そんなに人生ゲームがしたいのか？ 球筋に出てるぜ？』

外伝EP1 無敵の生徒会長の華麗なる一日 朝の部（前書き）

さてさて、だーくさいど・くろにくる第一話でございますw

本編とは異なり、普通に銃撃戦とかが入ってきますが、ギャグの精神も忘れずに行きたいと思いますw

そしてそして、ゲストキャラである、レーネさんとフィルさんの活躍にもご期待くださいませ！！

では、本編をどうぞ〜

外伝EP1 無敵の生徒会長の華麗なる一日 朝の部

人の命の価値はどのくらいの重さを持っている？

「や、やめてくれ………は、話せば分かるってもんだ。今回の一件には、俺が絡んでないってことくらいはよ………へ、へへ………」

天秤に掛けようにも、命などと言う概念的で、質量的でないものは秤にすら掛けられない。

天秤に掛けるという表現自体が、実質的な重さではなく、概念的な意味の重さを求めるためのモノだとも考えられる。

「とぼけても無駄よ　　あんたの部下が洗いざらい全部吐いてくれちゃったんだし」

「ん、んなバカな……い、いや、フランクには何も握らせてなかったはず………ってしまっ………!?!?」

「はい、ダウト。誘導尋問に入る前に自爆するなんて、あなたの頭の中は空なのかしら?」

そも、今まさに人の命をどうしようかと悩んでいる人間にとっては、そんな価値や意味、重さなどといった物を考える行為自体が、何の意味も価値も持ちはしない。

彼らにとっての価値や意味とは、命のやり取りの場面では排他すべ

き無意味・無価値なモノなのだから。

「ソラ、どうするの？ このウスノロ」

「生死問わずデッドオアアライブっていう約束だしな。別に死体でもいいだろ。そいつが面倒起こしたのは、フィルの旦那の管轄地域なんだから処理は旦那に任せりゃいいさ。やれやれ、遠くロシアからご苦勞なこつた」

カチャ……

黒髪をツインテールにした女性が、傍らに佇む青年に問いかけるとその青年ソラは両脇のホルダーから相棒であるベレッタM92FSを引き抜き、銃口を哀れな男に向ける。

「ひ、ひい！！？ た、頼む！！命だけは勘弁してくれ！！ この通りだよ！！」

男は、半泣きで、というか完全に泣きながらソラと女に命乞いをしてくる。人間、誰だって死ぬのは怖いし、好き好んで死にたがる奴など極稀だ。

しかし、この男は運が無かった。というか、全てが遅く、そして何より先を見据えての行動と言うものが全くできなかった。それ故に今こうして銃口を突き付けられているのだ。

「アホか。お前が悪いんだろうが。困るんだよね、身内の管轄内で勝手に薬とか売られると……。ああ、あと違法改造した銃とかもか……。三点バースト・フルオート化したベレッタとか……。どこの漫画の主人公に送るつもりだったんだよ……」

「す、すまねえ！！！！で、でも俺だって命令されて仕方なく……！！！」

「バカね……あんたの事情なんて私達には関係ないのよ。あんたは私たちの縄張りで勝手に美味い汁を吸うための商売をしていた。死ぬ理由としては十分過ぎるわ」

そう、全てが遅すぎた。この男が目先の利益だけを見て行動し、彼らのテリトリー内で商売を始めた時点で、彼自身の死が決定していたのだ。

彼らが動き、男を処分する。理由としてはそれだけだが、彼らにとつてはそれだけで十分だ。

命の価値、意味、重さを論ずることなど、蛇足以外の何物でもなく、彼らの世界ではそんな理論は犬に食わせるか、ドブに捨てるべきものだ。

「そう言う事だ。呪うなら、自分の頭の足りなさを呪うんだな」

ソラはそう呟き、冷徹な視線を男に送りながらベレッタの引き金に指を掛け……

「や、やめ……ろ……」この……ひとでなs……」

ガン！！！！！！

迷うことなく、その指に力を籠め、ベレッタを吠えさせた。床には、男の脳髓や血液などがぶち撒けられ、室内全体を血の匂いが支配する。だが、それでもソラと女の表情は変わらない。

まるで、テレビで明日の天気を見ているかのように、普通の日常風景の一つを見るかのように男の死体に目をやっていた。

「人でなしですってよ？」

「お前の事だろ、レーネ」

ソラはベレッタをホルダーに収めながら、女、レーネの冗談に軽く返事をしておく。

そして、男の死体には用が無いのか、すぐに懐に入れてあつたフルタッチパネル式の携帯電話を取り出して、とある人物を呼び出す。

相手は2コールで電話に出た。

『ソラか。電話してきたってことは、例のバカの処分が終わったのか？』

「ああ、旦那のテリトリーで勝手な商売してたくそ虫駆除が今終わったんだ。一応、連絡しておこうと思ってさ」

電話の相手は、『組織』のロシア支部の頭目であるフィル・グリード。ソラにとっては、幼少期にはよく遊んでもらった相手でもあるので、兄貴的存在でもある。

今回の仕事の依頼人は、今現在電話で話しているこのフィルその人だったのだ。

『相変わらず仕事が早くて助かるよ。いや、すまなかった。大使館に根回しはしておいたんだが、他組織が一步先に手を出してたらし

「なんで俺が……………」

『やれやれ………… お前たちは本当に相変わらずだよ…………』

レーネとソラのやり取りに、電話の向こうのフィルは呆れたような声を出しながら苦笑する。

彼自身、この世界に入って何十年も経っているわけではないが、少なくとも経験だけで言えばソラ達よりも長い。だが、汚れ仕事の後にこんな自然な会話が出来るあたり二人を、大物だと思ってしまうのは仕方のないことだろう。

『おっと、そうそう。俺も近いうちに日本に渡る。本家に厄介になるつもりだから、一部屋開けておいてくれ』

「ああ、分かったよ。いつでも来てくれよ旦那」

『助かる。それじゃ、またな』

「ああ、また」

そうして、二人の会話は終了した。ソラは携帯を懐に入れると血の池地獄と化したとあるビルの一室をレーネと共に後にする。

「帰るぞー」

「ええ」

こうして、本日の二人の仕事は終わりを告げた。

これが、ソラのもう一つの世界。ルークやフェイトといった人達がいる明るい世界に寄り添うように存在している、暗黒の世界。一歩間違えれば、元居た場所には戻れなくなるような危険な世界と、明るい世界をソラは行き来して生きているのだ。

これは、喜劇の裏舞台。

光の物語の裏側に存在する、闇の物語…………

無敵の生徒会長の朝は遅い。

只今の時刻、朝の8時ジャスト。聖祥学園中等の始業時間まであと一時間である。

「にゅ~~~~~……………やっぱりさあ……………時代はPS3だと……………
思うんだよ……………ぐう……………」

「あ~~~~も~~~~!! 寝言でゲーム機の催促してないで、早く起きてよソラア~~~~~!!」

「いやマジでさあ……………HDMI端子でテレビに繋いだら……………ピフォーアフターも真っ青な感じに……………」

無敵の生徒会長の唯一の弱点。それは極度の低血圧だ。いつも、いや毎日の事なのだが、ソラはまともに起きることなど出

来ない。放っておけば、何十時間でも眠っていられると豪語しているくらいに。

だからこうして、もう何年も前から朝はエステルがソラを叩き起こす役目を担うことになっている。お世話係としての役目という事もあるが、想い人を自分で起こしたいと思うのはおかしいことではあるまい。

「も~~~~!! お・き・な・さ・い!!!!!!」

「げふら!!!!?」

なかなか起きずに、PSSの購入を催促してくるソラに、エステルはこれまた毎日の事なのだが、どこから取り出した広辞苑をソラの腹部に垂直落下させた。

これがある意味ではもつとの効率的且つ、確実な起こし方なのだが、ソラからは不評である。

「ソラ、おはよう!!」

「おはようござえます……………」

だが、起こすのならもつと優しく起こしてほしいとは言えない。広辞苑が、『大漢和辞典（全十五冊セット）』に早変わりしてボックスで襲い掛かってくるかもしれないからだ。

「ほらほら!! 早く顔洗って、ご飯食べて!! 学校遅刻しちゃうよ!?!」

「母親かお前は……」

基本世話焼きなエステルに叩き起こされ、朝を迎える。これが無敵の生徒会長、ソラ・アオミネの日常である。

アオミネ家は、今後分かっていくことではあるが『いろんな意味で』強力な力を持った名家だ。ソラは、その名家の直系、即ち跡取りでもある。

「おはようございます、若様」

「オハロー。あ、髪切った？」

「え？ あ、はい！！ お分かりになりますか！？」

「もちろん、女の子の小さな変化も見逃さないのが、俺のポリシーなんですけどなんで俺の足を全力で踏みつけておられるんでしょうかエステル様？？」

「むう……知らない！！」

このように、家にはお手伝いのお姉さん（美人）が常駐しており、家事などをしてきている。エステルもまた、食事を作ることに従事したりしている。

後になってしまったが、ソラは身近な女性の変化に敏感になるべきだと言いたい。

「おはようございます……!! 若頭あ……!!」

「おー、オハロー。今日も元気だなあ、お前ら」

と、次に会ったのは黒服たちである。いかにも武闘派っぽい彼らは、ソラを見つけると一斉に挨拶してくる。

毎朝元気が有り余っているかのようなだが、ソラ的には嫌いではないらしい。

「あれ……？ エステル、そういやレーネはどうしたんだよ？」

「レーネなら、朝早くにどこかに行っちゃったけど？ なんだか、妙にウキウキしながら」

「はあ？ なんだあいつ……変な奴だな……」

手早く朝食を胃に詰め込みながら、ソラはエステルにもう一人の同居人の所在を尋ねる。裏仕事（ソラはバイトと呼んでいる）での相棒でもある、レーネの事だ。

彼女との付き合いもそこに長く、仕事の上でのチームワークも中々である。

「あれ？ そう言えば……昨日なんか約束して、その何かを片付けてから爆睡したような……うゝむ……」

何かを忘れているような気がして頭を捻ってみるが、まだ寝起きなのでいまいちハッキリとしない。

まあ、やるべきことはやっておいた気もするので、深く考えること

も無かったが。

「んじゃ、学校行くか。時間は？」

「あと三十分だね。これなら走らなくても大丈夫だと思うよ」

朝食を済ませ、時間が迫りつつあったソラは、登校することに。玄関では、彼の分のカバンを持ったエステルが待っていており、後は靴を履きかえて家を出るだけである。

「坊ちゃん！！　ダメですよ、丸腰で外にお出になられるなどと！！」

「いや、学校行くだけだったの……」

「いーえ、ダメです。『天龍』を持って行ってくださいな。帯銃せずに学校に行つて。もしも学校がテロリストに占拠されでもしたらどうするおつもりですか！！」

さてさて、いきなり第一話からこのアオミネ家の、世間とはズレまくっている部分を紹介しよう。

現在、ホルスターに入っている二丁のベレッタを持たせて登校させようとしているこの女性は、この家のお手伝いさんの筆頭、言ってしまうばお手伝いさんの一番偉い人だ。

名前はアカネさん。この職に就く前は、どこかの国の諜報員をしたり殺し屋をしたりしてなかったりだとか。

少し高めの長身に、スラッとしたスタイル。栗色の長い髪が綺麗な、可愛いというよりも、美しいと形容すべき女性である。

「私は、奥様と旦那様から、坊ちゃんの事を任されている身……丸腰の坊ちゃんを送りだし、もしも学校の下駄箱でブービートラップによって坊ちゃんがお怪我でもされようものなら……」

「あるあ……ねーよ！！w　なんで下駄箱にブービートラップ？　精々、上履きに画鋏仕込まれるくらいしか思いつかんわ！！」

と、見ての通りなのだが、危機管理のベクトルを間違った感じに解釈していらっしやるようで、心配し過ぎと言えば聞こえはいいが、下手をすれば銃刀法違反で務所行きになってしまいかねない。

「戦場では一つの油断が命取りでございます。もしも、下駄箱に重量センサーで起動する生物兵器でも仕込まれていたら……」

「とりあえず、アカネさんの学校に対するイメージが俺の思ってるものとは180度違うことはよく分かったよ……」

「あ、あはははは……」

アカネさんの『これ』も、日常茶飯事なのだが、流石にソラとエステルでも苦笑せざるを得ない。

まあ、根はとても優しい女性なので、嫌悪感などは全くないのだが。

「分かった、分かりましたよ……。持ってけばいいんでしょ……」

「はい　あ、予備のマガジンは制服に忍ばせてありますので、ご安心を」

「なあ、エステル、俺ってこれから学校に戦争でもしに行くのか？」

「し、仕方ないよ、アカネさんだもん……………」

と、こんな感じで最後はソラの方が折れて、『天龍』ソラの相棒である二丁のベレッタを持って行くことになるのだ。因みに、肩にかけていてはバレるので、今は腰の裏に巻き付ける形で帯銃している。

「はい、それでは坊ちゃん、エステル行つてらっしゃいませ」

「行つてきまーす」

「行つてきますね」

そして、帯銃することで漸くアカネさんチェックを合格する事が出来、ソラとエステルは登校することになった。

エステルから鞆を受け取り、いつも通りの登校コースを二人で歩く。何でもないような、そんな日常だ。

「あ、リオスさんだ」

「ほんとだね……。やっぱり……………今日も元気ないみたいだね……………」

登校途中、見知った後姿を発見した二人。

発見した知り合いは、この間の体育祭ご褒美旅行でも一緒だったリオス・コーネルドであった。

旅行の最中に起こった、危ない事件になのは共々巻き込まれ、そのショックからなのか何なのか、今現在少しダウン―状態に入っているようだ。

「どうする？ 声、掛けてみる？」

「……………やめとこう。出しゃばつても仕方のないこともあるさ。それに、リオスさんなら自分の力で何とかするだろうしな」

「うん……………ソラがそれでいいなら……………」

ソラの目に、リオスの後ろ姿がどう映ったのかは謎だが、少なくとも他者の力を借りてどうこうする問題ではないことは、先日の事件の当事者としては理解しているつもりだった。

今、リオスを苛んでいるのは強い無力感だろう。加えて、なのはと顔を合わせづらいという、後ろ向きな気持ちも相まっている。

「（下手に関わるよりも、リオスさん本人が悩まないと意味がないだろうし……………」

ソラは、リオスの人柄や心の強さなどを勘定に入れた上で、そう結論を出した。

ソラには、リオスは強い人間だという風に感じる事が出来たのだろう。

そうして、ソラとエステルは、真っ直ぐに聖祥学園中等部の校舎を目指して歩みを進めるのだった。

「あ、生徒会長おはよー」

「おはようございます、アオミネ君、エステルさん」

「お二人ともおはよー」

下駄箱で上履きに履き替えて（一応ブービートラップに注意しながら）、ソラとエステルが自分たちの教室に入ると、フレンドリーな挨拶が飛んできた。

「オハロー」

「おはようございます」

ソラとエステルも、いつもどおりな感じで挨拶を返して自分の席に座る。中等部の生徒会長、つまりは王様なわけだが（待て、別段ソラ達の事を煙たがる奴はいない。

生徒会長と言っても、彼の場合はそんなに規則が云々等々の堅苦しいことを言わないからだ。

学校でのソラは、一言でいえばリーダーシップを執れる頼りになる存在だった。

「そうそう、生徒会長、今日転校生が来るのって知ってるか？」

「転校生？ いや、聞いてないはず……」

「そっかー、やっぱガセだったかなあ？ 職員室で、見たことない美少女を見たって奴がいたからさあ」

席に着いて早々、クラスメイトから妙な質問をされるソラ。転校生などの情報は、生徒会を確実に通るため、ソラが知らないはずがないのだ。

それを知っているからこそ、クラスメイトもソラに事実の確認をしてきたのだろう。

「転校生なんて……確か無かったよね、ソラ？」

「ああ。……あれ？ なんだろう、何か大事なことを忘れてる気がする……」

その違和感は、朝に感じたものと同じ。何か、大事な事を忘れたままのような感覚だった。

だが、その違和感の正体はすぐに分かることになった。事件は、朝のホームルーム。

担任の先生の口から告げられた、一言ですべてが解決する。

「えー、突然だが転校生を紹介する」

「「あ」「

教壇に居るのは、いつも見る先生だけではない。黒い髪をツインテールにした、意志の強い瞳を持った女も一緒だった。

しかも、ソラとエステルはその女の子をよく知っている。というか、一緒に住んでいたりするのだから。思わず二人は、ハモリながら間抜けな声を出してしまった。

「レーネよ、これからよろしく」

そう、転校生として教壇に立っているのは他でもない、ソラのバイトの相棒であるレーネその人だったのだ。

外伝EP1 無敵の生徒会長の華麗なる一日 朝の部（後書き）

F20C「と言っわけで、一話でした。レーネさんが転校してこられました」

ソラ「時間軸としては、スクラパ本編と同じなんだな」

F20C「うん。リオスさんの下りからそれが分かるよね。」

ソラ「でもって、作者が考えたオリジナルキャラのアカネさん。かなり世間知らずっていうか、戦場の匂いから脱し切れてないっていうか……」

F20C「学校行くのに帯銃だもんね……ベレッタ持ってるのばれたりなんかしたら、普通に務所行きだよw」

ソラ「まあ、ばれなきゃokでしょ」

F20C「さて、今回は今回の続きからになります。レーネさんのツンデレ模様を描ければと考えていますので、お楽しみに」

ゲストキャラを許可してくださった、神崎先生、アルフォンス先生、本当にありがとうございます！

第四十二話 そんなに人生ゲームがしたいのか？ 球筋に出てるぜ？（前書き）

タイトルが分かった方、先に言っておきますが、沙耶さんと佳奈多さんは私の嫁です。

今回からはギャグ回ですw

とはいっても、若干二名はポンコツになっていきますが……

かなりブラックな人生ゲームになる予定なので、いろんな意味でご注意くださいませ……

では、本編スタート！

第四十二話 そんなに人生ゲームがしたいのか？ 球筋に出てるぜ？

「暇や……………」

「暇ですね」

「暇だね」

「暇だな」

「なのはさん……………／／／／／／」

「リオス君……………／／／／／／」

上から、はやて・ティアナ・フェイト・ルーク・リオス・なのはの順に、ハラオウン邸のリビングにて、夏休みの宿題という中ボスを撃破した若者たちが、余暇時間の持て余しというラスボスの前に頭を悩ませていた。

「……………あれ？ なんかおかしくなかった？ 最後の二人、完全に空気読めてなかったよね？ 固有結界展開して自分たちの世界に入ってたよね？」

「ルーク、ちゃうで……………？ 今も現在進行形で二人の世界を形成中

や」

「どうりで熱いわけよ……………体感気温が3 は上がってるわ……………」

「あはは、なのはとりオス、この前の夏祭りからずっとあんなだよ
ね……………」

本日は、奇しくも部活がオフの日。夏休みの宿題をつい先日に関わらせてしまった、ルークと愉快的仲間たちは、完全に時間を持て余していたのだ。

どこかに出かけてもいいのだが、外は猛暑。ハッキリ言って、部活以外の用事で外に出たくは無かった。

なんとなくルークとフェイトの家に集まったのだが、リオスとなのはが固有結界を形成しつつあり、室内温度が徐々に上がってきている。

この前の夏祭りの件で、なのはとりオスのギクシャク関係が解消され、以前にも増して距離が縮まった二人なのだが、お互いがお互いを意識しまくって、且つ甘い空気を作り出すので周囲の人間への影響が懸念され始めている。

「まあ、ギクシャクされるよかはええけど……………」

「これはこれで問題なような……………」

「あ、誰かお茶飲む？ とびきり苦いのあるんだけど」

「……………いただきます……………」

はやてとルークが頭を抱えていると、フェイトがそれを見かね、対甘々固有結界兵器である、苦いお茶を飲む者を募ると、はやてとティアナ、ルークが同時に手を挙げた。

どうやら、皆相当に我慢していたようだ。

「ずずず……ふはあ！ やべえよ、全然苦くないよこれ……イチゴ牛乳にイチゴ大福プチ込んだ感じの甘さだよこれ……あれ？なんかおいしそう……」

「変ね……前飲んだ時はかなり苦かったような気がするのに……」

「フェイトちゃん、これホンマにあのお茶？」

「うーん……茶葉は間違っていないはずなのになあ……うう、甘みゃい……」

どうやら、リオスとなのはの固有結界の威力は相当のレベルの代物らしく、ルーク達の味覚を完全に甘味一色にプロデュースしてくれたらしい。

今のルーク達ならば、豆板醤などをそのまま飲み込んでも平気な顔が出来るだろう。

「えっと……なのはさん……」

「ん？ なぁに？」

「あ……その……呼んでみただけです……」

「もう、リオス君たら…… / / / /」

そんなルーク達を尻目に、リオス&なのははナチュラル且つ濃厚にイチャ付きまくっていた。

『もうお前ら結婚しちゃえよ』と、ディスプレイの向こう側の皆様からお言葉を賜る可能性が出てきた。

「ぬがあああああああああ……！！！！ やめて、これ以上は俺のライフが持たない……！！」

「ル、ルーク……！ 落ち着いて……！！（汗）」

「ついにルークが壊れてしもつたか………さあて、どないしたもんか……」

「まあ、私達もかなりキテますけどね……… もう喉元まで来てます」

その甘々攻撃に、ついにルークが発狂しかけてしまい、フェイトが必死になって彼を後ろから抱き付く形で抑え込む。

その様子を見て、はやてとティアナは自身の身の危険を感じながら、この状況、暇なこの現状をどうするかを思案する。

「あ……そうや……面白いもんがあつたんや……」

「何か持つてこられたんですか？」

「うん。この前、親戚のおじさんから貰ったんやけど……ああ、あつたこれこれ」

と、はやてが何かを思い出したようで、おもむろに持つてきたカバンを探りだし、何かを取り出す。
それはルークの家にもあるゲームハード機専用のゲームソフトのパッケージだった。

「『ブラック人生ゲーム』世の中そんな甘いもんじゃないんだよガキ共」……ず、随分と個性豊かなタイトルですね……」

「まあ、うちもそう思う。なんや、クソゲーオブザイヤーにノミネートされそうな匂いもするわ……」

ティアナとはやては、そのゲームタイトルを見て率直な感想を述べた。はやて自身、貰ってからプレイしておらず、ネタとして持つてきたに過ぎないのだ。

だがしかし、暇潰しくらいにはなるのでは？ と、ようやく落ち着きを取り戻し始めたルークとフェイトに、このゲームをプレイするかどうかを提案してみる。

「なあ、ルークにフェイトちゃん？ どうせ暇なんやし、ちょっとこれやってみる？」

「はあ、はあ……ど、どれ……？」

「はふう……ぶ、ブラック人生……ゲーム？」

2人は、息も絶え絶えになりつつはやての手にあるゲームソフトに視線を注ぐ。一瞬、先程のはやてとティアナと同じリアクションを思い浮かべたようだが、この事態から脱出出来るのならば何でもいいと考えたのだろう、二人ははやての案に乗ることにした。

「うん、暇だしやってみるか」

「だね、私も賛成」

「よっしゃ。ほんならルークはゲーム本体の用意を頼むわ。あ」と……それからはちゃんとリオスは………」

はやては、ルークにゲーム機の用意を頼みながら、この甘々空間の中心たるリオス＆なのはをどうしたものかと思い、二人の方を振り返る。

「リオス君………」

「はい……なのはさん…… / / / /」

「くす……呼んだだけだよ」

「あはは……さっきのお返しですね……」

「はい、放置決定……！！ いや、ホンマあれは勘弁やわ」

「「「異議なし……」」」

なのはとりオスのイチャイチャドライブのランザムバーストにはやて達は満場一致で現実から目を背けることを決定した。

今のなのはとりオスを何とかできるとしたら、それこそこの世のすべてのイチャイチャ成分を飲み干せるくらいの度量がある人物だ。

そして、準備を済ませたルーク・フェイト・ティアナ・はやては、件のゲーム、『ブラック人生ゲーム』を開始するのだった……

ゲームハードを起動させ、ゲームディスクを読み込ませると、液晶テレビの画面には軽快な音楽共に、まったく似つかわしくないおど

るおどろしい文字で『ブラック人生ゲーム』というタイトルが映し出された。

4人「「「「」」」」」

若干引き気味なルーク達ではあったが、それぞれの手に持ったワイヤレス型コントローラーを手にしながら、ゲームの画面を次に進めることにした。

「各プレイヤーの名前を入力やな……………」

「ええと…………ふえいと…………ふえいと……………」

画面の案内に従って、自分の操るプレイヤー名を入力していく。それぞれの名前を打ち終ると、画面がまた変わる。

初期資金という表示が出たところで、各プレイヤーたちの持ち金の欄に、それぞれ均等に1万円が支給された。

そして、ゲームのステージ選択というところに来た。どうも、ステージが10種類ほどあるらしいのだが、よく分からないのでランダムにしておいた。

どうやら、これでゲームの下準備は完了らしい。

「ここまででは普通の人生ゲームっぽい感じやな」

「まあ、ブラックって書いてあるけど、所詮は人生ゲームなんだろうな……」

「そう身構えることも無いわね」

「ゲームなんだし、やっぱり楽しまないと損だよな」

と、はやて・ルーク・ティアナ・フェイトは、ゲームの意外なほどの普通度に、警戒心を緩めた。

ここまでが、このゲームの『普通』というラインだったことに、この後すぐに気が付くことになるなど、この時は誰もが予想だにしていなかった。

「よし、まずは私からやな」

画面上のサイコロを振る事で、盤上のステージ上のプレイヤーキャラが出た目だけ進むというオーソドックスなタイプのゲームらしい。

そして、トップバッターのはやてが、先陣を切ってコントローラーを操作し、画面の中の大きなさいころを転がした。

「3やな……ええと……いゝち、にゝ、さんと……何々……？」

盤上の最初の何マスかは、職業を決定する、いわゆる職業マスにな
っており、全員がそれぞれ出たマス目によって異なる職業に就くよ
うに出来ているようだ。

はやての出した目は3。彼女は、コントローラーを操作して、キャ
ラクターを先に進ませる、そして……

はやての職業 『やり手の女社長』（毎ターン、給料として50万
円もらえる。ただし、婚期を逃す可能性大）

「婚期を逃すって何や……!? 隙のない女はあかんのか……!?
ていうか、大きなお世話や……!」

3人「くくく……」

「はいそこ……! 笑うの禁止やで……!」

何というか、余計な一言が光るゲームである。

まあ、ゲーム内ではあるが毎ターン50万円というのは大きい。婚
期云々は置いておいても、はやては中々に良い職につけたと言って
いいだろう。

「んじゃ、次俺な」

でもって、次のターンはルークだった。彼もはやて同様、コントロ
ーラーを操作し画面内のサイコロを振った。

出た目は、
『4』
である。

「えうと、いちに、さん、し……つと」

「何々、ルークの職業は……」

ルークがマス目に従ってキャラを操作し、フェイトが嬉しそうにルークの職業の欄にある文字を読む。そこには……

ルークの職業 『就活中の大学生』（毎ターン、親の仕送りで8万円もらえる。ちなみに、彼女無し、m9（ハハ）プギャーww）

[illegible]

「まあまあ、ルーク。彼女さんなんかいなくても、お姉ちゃんが居るじゃない」

「根本的な解決になってないからね！？ 現実から目を逸らしてるだけだからそれ！！」

「まあ、なんて言うか……ルークらしい設定やな……」

「
です
ね……」

ルークの力いっぱいツツコミに、フェイトが『まあまあ』と言わんばかりにボケをかます。なんと言つか、この二人は年中無休でこんな感じだ。

はやてとティアナは、いつもの事だと割り切りながら、その光景を見ていた。

「じゃあ、次は私ね」

三順目はティアナだ。普段はあまりゲームに興じることが無いティアナだが、コントローラーの扱い程度ならすぐに把握出来る。ルーク達と同じように、彼女もまたサイコロを振った。

出た目は、『2』だ。

「イマイチね……いち、に、と………」

出た目の数が小さいことから、少し勢いを削がれながらもティアナはコントローラーを操作し、進むべきマスにキャラクターを進めた。

果たして、ティアナの職業は……

ティアナの職業 『人気女子アナウンサー』（毎ターン30万円を貰える。斜め四十五度が何よりも重要）

「斜め四十五度って、どこのクリステルだよ……」

「ま、まあまだマシな職業ね……ていうか、そう思わないとこの先やっていけないような気がするわこのゲーム……」

ルークの感想共に、若干の諦観を含めてティアナは嘆息しつつそう言った。まあ、確かにはやて達を見ていると、自分の職業がどれだけマシなものかは一目瞭然だったのも事実だ。このゲーム、タイトルからして怪しげな匂いがプンプンしていたが、やはり期待を裏切るような真似はしないらしい。

「よっし！　最後は私だね！　それ……」

でもって、ローテーションの最後を飾るのは、我らがお姉さん、フェイトさんである。体を動かすたびに、その我が儘なボディの双丘が揺れ動き、閣下の喉をも唸らせる。

と、そう言った変態的思考は我らが閣下に任せておくとして、フェイトは三人同様に画面上のサイコロを振った。出た目は、『5』である。

「いち、に、さん、し、……と……ん……」

そして、フェイトの職業は……………

フェイトの職業 『人気声優』（毎ターン35万円を貰える。歌つてよし、演技してよし、な万能声優。奈々さm…………ゲフンゲフン。私はけえたん先生になりたい）

「うーん…………どこから突っ込めばいいのか……………」

「明らかにフェイトちゃんの中の人意識してる感じ全開やなこれ……………」

「ゲーム内でゲフンゲフンって…………ていうか、けえたん先生って？」

「けえたん先生に関しては、ググってみてください。きっと幸せになります。」

「けえたん先生、まじ羨ま……………」

「えへへ 声優さんかぁー面白そうかも」

「まあ、ねーさんなら美人声優としてやっていけるんじゃないの」

「び、美人だなんて……………／／／／／ もうルークったら…………私を褒めて褒めちぎって、手籠めにして、それからそれから……………しつかり調教した上で羞恥プレイで虐め倒したいだなんて……………／／／／／ ちょっと急展開過ぎて付いて行くのが大変だけど、私頑張ってみる！」

「そんな話は一ミリたりともしとらんわ！！！！ ていうか、前々から思ってたんだけど、ねーさんの妄想族っぷり半端じゃないよね！！？ 弟として真剣に将来が心配なんだけど！！？」

声優の職業にご満悦な様子のフェイトさんだが、ルークの褒め言葉からまたしても異次元ゾーンなレベルの妄想を垂れ流してしまわれた。

ある意味、学会で注目されるべき妄想族っぷりではなからうか。

「はあ……… なんやろ、フェイトちゃんの妄想は置いといて、さつさとゲーム進めよか………」

「賛成です………」

はやてとティアナは、赤い顔になりながら、『やん／＼／ ルークったら……… こんな人が見てる前でそんなこと……… ／＼／＼／ あ、申し訳ありませんご主人様…… 名前でお呼びしてしまうなんて……、どうぞお仕置きしてくださいませ……… ／＼／＼／』とか言いながら悶々としているフェイトさんを一旦放置し、ゲームを進めることにした。

「さてと……… うちの番や……… それっ」と

はやてが、先程のターン同様、画面上のサイコロを振り、目を見る。サイコロの示した数字は『5』。まあまあの前進だ。

加えて、この人生ゲーム。マスに書かれた内容が、プレイヤーがローションすることに変化する仕様になっているようで、同じマスにキャラクターが辿り着いても、それぞれに発生するイベントは別々になっているようだ。

はやてが止まったマス目のイベント 『持っていた株の株価が急上昇、売却した。資産が200万円増える。…………でもどうせ、税金でこっそり持って行かれることだろう』

「……………」

「な、なにか、最後の方に暗い一文が……………」

「明らかに子供向けの人生ゲームじゃないことはよく分かるよ……………」

資産が増えたのにも拘らず、まったく嬉しくないという奇妙な現象に、はやては無言、ティアナとルークは苦笑いを浮かべていた。

「じゃあ、次は俺と……………」

微妙な空気の中、ルークが二回目のターンを迎え、サイコロを振っ

た。サイコロは『3』を示しており、ルークは再びキャラを前進させた。

そして……

ルークが止まったマスのイベント 『就活にて、筆記試験としてSPI2（適性試験みたいなもの、基本的に対策さえしていれば突破可能。入社してからの資料としても使われることも）を受けるも、マークシートで一問ずらして解答してしまったようで、散々な結果に。お祈りメールを貰う。一回休み』

「……………これただの作者の実体験だろうがあああああああああああああ
あああ！！！！！」

「ケアレスミスやな……………あれほど解答の時には気を付けろ言ったのに……………」

「なんだか、はやてさんに引き続いて暗い気分になります……………」

フェイトを除く三人を、何とも言えない暗い空気が覆う。実際に身に起こった事でないにしろ、何故か猛烈に泣きたくなった。

自分自身の招いたミス。作者も、試験終了間際に気が付くも間に合わず……………当初かなり落ち込みました。

「じ、ご主人様……………この狐さんの耳と尻尾を付けて……………ですか？

は、はい、お望みとあれば、このまま夜のお散歩に……………／／／／
／／はいどうぞ、フェイト専用の首輪です……………」

相変わらず妄想に浸っているフェイトさんは一先ず放置し、はやて達はゲームを進める。

ブラック人生ゲームは、まだまだ始まったばかりである……………

第四十二話 そんなに人生ゲームがしたいのか？ 球筋に出てるぜ？（後書き）

閣下「もうさ、なのはさんとリオスが最初からクライマックスなんだけど」

F20C「君もフェイトさんとイチヤつけばいいじゃん」

フェイト「それでそれで、『最初に言っておく。俺はカーナーリ、エロイ！』って言っちゃうんだよね……………うん、ワイルドなルークもカッコいいよ……………」

閣下「それどつかで聞いたことのあるセリフなんだけど!？」

F20C「教えて！ エロい人！」

閣下「それももうやめろと言っに!!!」

アインハルト「あ、あの……………ホムラさん……………似合いますか?」
（犬耳と尻尾を装着した状態）

ホムラ「か、可愛い……………// // //」

F20C「あの二人な何をしとるんだ……………?」

はやて「まあまあ、可愛らしいもんやないか……」

次回 『人生そんなに甘くない、でも苦いばかりでもない』

第四十三話 人生そんなに甘くない、でも苦いばかりでもない（前書き）

最近、P S 3が、ブルーレイ再生専用機になりつつある件。

これはまずいです、何かゲームを買わないと、P S 3お姉ちゃんが
拗ねてしまいますね……

候補としては、

テイルズオブヴェスペリア

コール・オブ・デューティシリーズ

ロストプラネット

むう……悩む……

とまあ、私の悩みは一先ず置いておいて、本編をお楽しみ下さいませ

第四十三話 人生そんなに甘くない、でも苦いばかりでもない

皆さんは、人生ゲームにどのようなイメージ、または思い出をお持ちだろうか？

友達の家遊びに行くと、なんとなくゲームがしづらい空気なので『とりあえず人生ゲーム行っとく？』みたいなノリでプレイ

旅行先のコンビニで、小さいタイプの持ち運び可能な人生ゲームをUNO感覚で買ってしまい、旅館でプレイ。（以後、使われる可能性は低い）

まあ、人生ゲームに触れる機会はそれなりにあるだろう。

でもって、人生ゲームといえば、自らの駒をサイコロ的なもの出した目に委ねて、ボード上のイベントに従い、ゴールを目指す。まあ、大雑把に説明すればそういうものだ。

だがしかし。

ハラオウン邸で、ルークたちがプレイしている『人生ゲーム』は、そんな従来のイメージなどをあっけなく破壊する、そう、いわば黒船のようなゲームだったのだ……………

後に彼らはこう言った。

『あれは人生ゲームではない、もっとおぞましい何かだった』と……

「出た目は……3か……ええと、いち、に、さん……」

前回から引き続いて、ブラック人生ゲームをプレイしている、ルーク、フェイト、はやて、ティアナの四人。

あれから、数ターンに渡ってプレイしているのだが、彼らはすでに後悔し始めていた。自分たちがとんでもないゲームを始めてしまっていたことに……

ルークの止まったマス目のイベント

『痴漢容疑で捕まる。一回休み』

「休めるかあああああああ……!!!!」

「ルーク……さっきはナンパに失敗して傷心、そのまた前は、女子トイレに突入して捕まる、狙ってると思えんくらいにエロ関連のイベントばっかやな……」

「しかも、その度に一回休みですからね……全然進まない」

このゲームを開始して、最早何回目か分からない、ルークの一回休み。

しかも、その原因となるイベントがことごとく、エロ関連な匂いにするものばかりという、エロティック皇帝ぶりを全開にした引きの強さに、はやてを始め、ティアナまでもが嫌な意味での尊敬の念を覚え始めていた。

「それに比べて……フェイトちゃんは……」

「え〜と、いち、に〜、さ〜ん、し〜」

はやては、ティアナの次にサイコロを降っているフェイトの姿を見て脱力してしまう。このブラック人生ゲームにおいて、ただ一人このゲームを楽しんでいる者がいた。

そう、言わずもがな、我らが女神フェイトさんである。

フェイトの止まったマス目のイベント

『声優として二年連続の紅白出場を果たす。100万円もらう。マジパネエっす、超リスペクトするっす。あと、サインください』

「わあ！ やったあ ルーク、ルーク！ また紅白だよ！」

「あー……すごいすごい……その調子で三年目も頑張って〜」

「うわあ〜……ルークのテンションが……」

テンションマックスなフェイトに対し、痴漢（容疑）によって一回休みをくらってテンションダダ下がりなルーク。対照的な二人を見て、ティアナは苦笑いを浮かべる他なかった。

というか、マス目のイベントがどこかの歌姫様のことをダイレクトで示している気がしてならない。

「ここまで進めて来たんはええけど、やっと中盤戦に入ったとこくらいかなあ……」

「一番ゴールに近いのは……やっぱりフェイトさんですね。その次に私で、はやてさん、でもってルークがビリ……」

「いや、あのイベントの不遇具合でトップ走れてたら、それはそれで凄いなと思うわ……」

フェイトを筆頭に、女の子組は順調に駒をゴールに向かって進めているのだが、前述のとおり、ルークは驚くべき引きの悪さが起因して、全くと言っていいほど進んでいない。

まだ、盤上の半分も進めていないのだ。

「さてと……うちもそろそろ、一気にフェイトちゃんに追いつきたいとこやし……この一手、慎重かつ大胆に行くで！」

と、人のことばかり気にしては、人生ゲームは進まない。フェイトの次に順番が回ってきたはやてが、すでに慣れた手つきでコントローラーを操作し、サイコロを転がし出た目に従って自身の駒を進めた。

フェイトとの差は大きいが、まだまだ追いつけない程ではない。中盤でどれだけ詰めることができるか、ここが正念場である。

しかし、人生そんなに甘くない。

はやての止まったマス目のイベント

『デリバティブ取引に手を出し、見事に失敗。資産の三分の二を失い、一回休み。ま、まあ、そんな日もあるさ……次がんばれよ……』

「ガッデー……ムウウウ……!!……!!……!!」

「だっはっはっはwww ざまあwww マジざまあwww これがはやてさんの転落人生の始まりじゃああ……!!」

あまりにリアリティのある資産の失い方に、はやては海老反り気味に天を仰ぎ、痴漢容疑で一回休みなルークは、その様子を見て爆笑していた。

まあ、目くそ鼻くその戦いとも言えいいのか、傍から見ればアホらしさ全開だった。

「デリバティブ取引って……はやて、先物市場にでも手を出したの

かな……」

「ま、まあ、種類多いですからね……どれがどれとは言えないですけど……」

上位二人は、困惑気味にその五十歩百歩な二人に、哀れみの視線を送っていた。

でもって、ルークが一回休みなので、次はティアナの番である。彼女も、フェイト程ではないが、それなりに恵まれたマス目に当たり、資産と進捗状況共に優等生だ。

トップ奪回に最も近いのは、恐らく彼女だろう。

「行くわよ……ここで大きなのが出れば、フェイトさんとの差も……それ！」

ティアナは、少し気合を入れてサイコロを振る。人気女子アナという職業のアシストもあって、資産には余裕がある。はやてのようなマス目に止まりでもしない限り、多少のダメージはカバーできる。

ティアナの止まったマス目のイベント

『プロ野球のルーキーとの熱愛が報道され、会見を開く。その際、『ポイしないでください』という発言が物議を醸した。レギュラー番組を一つ降板する』

「どこのデイズンよ！！？ ていうか、女子アナがそんな事言うはずないでしょうが！！」

「まあ、デキ婚ってわけでもないし……あ、でもプロ野球選手の奥さんって、料理とか苦労しそうだよな」

「栄養バランスとかだね。しかも、結構離婚する確率が……」

「いやいや、もうそのへんの詳しい話はええから！！ 泥沼化する一方やわ……」

ティアナのツツコミに続いて、ルークとフェイトの身も蓋もない話をはやてが止める。女子アナの結婚裏事情などは兎も角として、このブラック人生ゲームにおいて、そういったリアルな話に入ると、まさに泥沼状態に陥ってしまいそうになる。

「じゃあ、次は私だね。それ！」

そして、お次は現在トップを爆走中のフェイトさん。恐らく、彼女だけがこのゲームを楽しんでいるようで、サイコロを振る様子も楽しげだ。

だが、少々オーバーアクション気味にコントローラーを操作するので、その度にけしからん胸が揺れてしまい、ルークは目のやり場に困ってしまう。（とか言いながらも、しっかりと凝視していたが）

フェイトの止まったマス目のイベント

『7月24日に、コンサートツアーの一つとして、さいたまスーパーアリーナにてライブを行う予定。200万円受け取る。行ける人が羨ましい、妬ましい』

「もうさ、これ完全にある個人を指してるよね。先週からのセットで、完全に狙ってるよねこれ」

「行ける人が羨ましい、妬ましくて……これ完全に作者の魂の叫びやん……」

「まあ、関西在住の作者にはちょっと遠い距離よね……」

フェイトさんは、相変わらずこのブラック人生ゲームに好かれていくらしく、いい感じのマス目に止まり、着実にゲームクリアに近づいていた。

というか、完全に独走パターンに入りつつあった。

そして、我らが女神が順調にゲームを進める中、ルーク達はどうと……

はやて・イベント

『合コンに出てみるが、結局お酒を飲むだけに終わる。婚期が遠のいた』

「うがーーーー！！！！！！！！！！」

「ハハッワロス！！www」

はやてさんの婚期がまたしても遠のいたり……それをルークが爆笑しながらバカにしたり……

ティアナ・イベント

『生放送中に、相方の司会者のカツラが取れてしまい、リアクションに困る。スタジオの空気が凍りついた、一回休み』

「私関係ないじゃない！！！」

「ああ、朝八時の……アレか……」

理不尽過ぎるイベントで、ティアナが一回休みになったり……

そして、拳句の果てに、本日エロ関連に取り憑かれ気味なルークに至っては……

ルーク・イベント

『姉とエロゲのような展開で、『あれ』も付けずに、朝まで『アレ』してしまい、賢者タイムに入る。二回休み（笑）』

「笑えるかあああああ！！！！！！」

「る、ルーク……／／／／ゲームの中もお姉ちゃんをそんな目

で見てるなんて…… / / / それに朝まで？ 私壊れちゃうよ……
/ / / / /

「なわけないだろうが……！ ていうか、『ゲームの中でも』って
言い方やめて……リアルでもそうみたいじゃん……！」

「いや、実際そうやる……」

「豆狸はシャラップ……！」

という感じで、狙いすましたようなイベントを発生させてしまい、
一向にゲームを進められないという、最早どうしようもない展開に
まで発展してきていた。

イベントの詳細を読んで、フェイトさんが何を妄想したのか『（；
、）ハアハア』し始めたのは言うまでもない。

閑話休題

とまあ、そんなこんなで、ブラック人生ゲームはプレイヤーたちの
精神的体力をガリガリ削り取り（主にルーク）、徐々にだがゴール
が見えてきた。

そして、ここまで踏んだり蹴ったりというか、踏まれたり蹴られた
りというか、兎に角碌でも無いようなイベントばかりだったルーク

に、ゲームの神様が微笑んだのか、それは起こった。

ルーク・イベント

『サイコロを振って、奇数の場合は最初からやり直し、偶数の場合はトップのプレイヤーとの位置が入れ替わる』

「お……？」

「おお、なんや初めて人生ゲームっぽいイベントが発生したな……」

「逆転のチャンスってやつですね」

テレビに表示されたそのイベント内容を見て、ルーク達は思わずそう呟いてしまう。ここまでのイベントがアレだっただけに、こんな普通のも物が来るなどとは思っていなかったのだ。感覚が麻痺し始めているのかもしれない。

しかし、これはルークにとっては好機である。ビリの彼と、トップを爆走中のフェイトの順位が入れ替わるのだから、まさに一発大逆転である。

確率は二分の一、負ければ最初からという、事実上のビリ決定のイベントではあるがやって見る価値は十分にある。

「ははははははは！……！ キタ (。。(! !

k t k r ! ! ! ! そうだよ！これぞ人生ゲームだよ！！ こういうイベントは、あって然るべきなんだよ！」

「る、ルークのテンションが一気に吹け上がった……」

「まあ、ここまで大富豪で言うところの、連続大貧民になってたみたいない扱いやったしなあ……」

千載一遇のチャンスに、ルークは高らかに笑い、順位入れ替えの対象となっているフェイトですら、少しホツとしたような顔になっていた。

ここまでのルークのイベントの引きの悪さを目の当たりにすれば、誰だって同情したくなる。

「ルーク、やるならやりなさいよ。ここで一発逆転すれば、ゴールまで直ぐそこなんだし」

「おお。ふふふ……ねーさん、悪いね……人生ゲームという世界で……俺は、新世界の神になってみせるよ」

「あ、あはは……う、うん、頑張つて……?」

ルークは、このブラック人生ゲームで精神をやられたのか、妙なことを口にしながらコントローラーを操作した。（さすがのフェイトも少し引いていた）

「俺のこの手が真っ赤に燃えるううううう!!! 勝利（サイコロの目的な意味で）を掴めと轟き叫ぶうううう!!! 爆アアアア熱!!!! ゴッ フィンガアアアアアアアアア!!!!!!」

フェイト達「「「なんか必殺技っぽいの出してきた!？」」」

完全にどこかのガンムファイターのセリフをパクって作った必殺技で、ルークはサイコロを振った。実際に転がるのはテレビの中のサイコロなので、実際には一ミリの意味もないのだが、本人の好きにさせてやろう。

そして、ルークは……勝利を手繰り寄せた。

出た目 $\begin{matrix} \nwarrow & \nearrow \\ 2 & \end{matrix}$ (偶数)

「ははははははは！……！！」　世界は今、我が手に落ちた！！！！
ふははははははは！……！！！」

フェイト達
（（（（
。；
））
））
ガクガクブルブル

女の子三人がドン引きしている中、狂った王が高らかに笑う。その勝利には意味はなく、逆にものすごくカッコ悪いということに気づくこともなく。

今の彼にあるのは、人生ゲームという箱庭の中での一位という称号。そう、それだけだ。

実に虚しく、滑稽なシーンではあるが、それでもルークは笑った。

「ふふふふ……これで、俺とねーさんの順位が入れ替わり、この私が世界の覇者となる……世界は、私の前に跪け！！！！はっはっはっはっは！！！！」

完全に皇帝化していらっしやる閣下。実に楽しそうで何よりです。そして、イベントに従えば、ルークとフェイトの順位が入れ替わる。ダントツトップのフェイトと、ビリのルークが入れ替わるのだ。後半戦に入ったこのゲーム、最早ルークの勝だろう。

しかし、次の瞬間、世界はルークを自らから弾きだした。ブラック人生ゲームが、ここに来て再び牙を向いてきたのだ。

「あれ？」

「これは……」

「あれま……」

「へ？」

ルークを含めた全員が、順位入れ替えイベントの結果が出されたディスプレイを覗き込んで、各々リアクションを取った。ルークとフェイトの順位が入れ替わるだけかと思いきや、ディスプレイには信じられない文章が表示されていた。

ルーク・イベント

『こんなイベント一つで、順位入れ替えるわけ無いだろうがwww
え？ なに？ もしかして本気にしたwww？ イベント成功させて、世界の覇者になったつもりとかw 必殺技っぽくサイコロ振っちゃったりした？ ワロスwww 人生そんなに甘くねーんだよw つか、これゲームだからw m9（＾ ＾）プゲラ 必死すぎワロタwww』

この文章を、一言で表してみよう。

『腹立つ』

この一言に尽きるだろう。でもって当然、閣下はこのイベントを、全力で本気にしていた。もう、世界獲った気で、フルスロットルかましてた。

そんな中で、こんなどんでん返しがあれば、彼の取る行動は一つだけだった。

「ここここ、このクソゲー風情があああああああ！！！！
ディスクごと真つ二つに叩き割ってやんよおおお！！！！」

「る、ルークウ！！！！ それはダメー！！ たしかに今のはちよつとイラッとしたけど、壊すのはダメー！！！！」

「は、離してねーさん！！ ゲームディスク、コンクリ詰にして東京湾に沈めちやる！！！！」

「落ち着きなさいってば、このバカ!!」

ゲームディスクを亡き者にせんと、ゲームハードに特攻するルークを、フェイトとティアナの二人がかりで止める。

まあ、ゲームにここまでコケにされれば、ディスクをフライングデイスクよろしく、投げ飛ばしたくはなるだろう。コンクリ詰はさすがにやり過ぎだが……

「はあ……このゲームは、永久封印決定やな……」

はやてが言うように、この『ブラック人生ゲーム』は、その日以来陽の目を浴びることはなかった……

こうして、ルークに対してトラウマ級のダメージを残して、ブラック人生ゲームは幕を閉じたのだった。

一方、リオスとなのは……

「なのはさん……」

「リオスくん……」

キャツキャツ（＊。。）（　　○）キャツキャツ　　二人の状態

未だにイチャついていた。

同時刻

海鳴市の閑静な住宅街。その中にある純和風な、大きな屋敷。その屋敷のとある一室にて、はね気味の朱色の髪の少年と、碧銀の髪をツインテールにした虹彩異色の少女が、厳格な顔つきをした男性の前で姿勢正しく並んでいた。

980

朱色の髪の少年の名前は、ホムラ・スメラギ。
碧銀の髪の少女は、アインハルト・ストラトス。

そして、彼らの目の前に立つ、全身から厳しいオーラを醸し出している、恰幅の良い、和風な服に身を包んだ男性は、シエン・スメラギ。

名前から分かるように、ホムラの父である。

ホムラとアインハルトは、突然シエンに呼び出され、何かと慌てて部屋を尋ねた。そして、今現在のように彼の前にたって、話が始まるのを待っていた。

「ホムラ、アインハルトくん……」

二人「はい！」

ようやく、シエンの口から二人の名前が呼ばれたので、ホムラとアインハルトは気を引き締め、且つ元気よく返事をした。

この様子では、かなり重大な要件で呼び出されたいらしい。加えて、ホムラとアインハルトはシエンがここまで真剣な表情になったところを、あまり見たことがなかった。

シエンは、その重い口で次のように二人に問うた。

「……孫の顔は……いつ見れる？」

瞬間、ホムラとアインハルトはすっ転んだ。

いや、新喜劇でやるような感じではなく、リアルにすっ転んだのだ。

「い、いきなり何言い出すのさ！……！？」

「そ、そうです、お義父さま……突然どうなさったのですか……？」

「お前達が、許婚という関係になって、早3年……。そろそろ、そういう話が出てきてもいい頃だとは思わんか？」

「いや、僕達二人ともまだ13歳なんだけど……中学生なんだけど……」

突然の父からの訳の分からない話に、冷静にツツコミを入れる二人だが、シエンは至って真面目な顔でそう返してきた。どうも、彼としては本気も本気。冗談で言っただけではないようだ。

余計に質が悪いのだが。

「……………無いのか？」

「無いよ！！ ていうか、呼び出した要件って、もしかして…………」

「うむ、孫についてだ」

ホムラは軽く頭痛を覚えた。アインハルトは、『孫』という単語の意味を理解し、真っ赤になっている。ホムラもかなり赤くなっているのだが、此処で冷静さを欠いてはいけない。

あくまでK O O Lに、スマートに行かなければ。

「た、確かに僕とアインハルトは…………その…………将来的には一緒になるわけだけどさ…………えっと…………／／／／／その…………子供って、その…………『イロイロ』しないと…………ねえ？」

「最近の子どもは進んでいると聞く。大丈夫だ、問題ない」

「大有りだよ！！ 親が子供になんてこと言うのさ！！？」

この時ばかりは、ホムラも生まれて初めて家出したくなった。未だに夫婦でラブラブなシエンと母、シラユキではあるが、両者とも若干常識から少し外れ気味だった。

「ふ、まだまだ青いなホムラ。私と母さんも、若い頃はそれはもう……」

「そんな生々しい話はいいよ!! ほんと誰得だから……」

「こ、子供なんてその……私たちにはまだ早いというか……その……」

シエンの話を打ち切って、今すぐにここを飛び出したい気持ちを抑えながら冷静になろうとするホムラと、真っ赤になりながらもホムラをサポートするアインハルト。

「というか、『まだ早い』というだけで、彼女の的にはそのつもりはあるようだ。」

しかし……

「早い? ははは、気にするな、ホムラも私たちが18の時に生まれたんだぞ。デキ婚だった」

「デキ婚!!? いや、ちょっと待って? そんな話聞いたこと無いんだけど……」

トントン拍子に話が進んでいく。もうこうなつては、シエンの勢いは留まることを知らない。

ホムラとアインハルトは、混乱の最中であつたものの、『二人で同棲する』という事だけは理解できた。

無論、嫌というわけではない。寧ろ、二人ともバツチ来いな心構えだ。だが、そんなモノはまだまだ先だと夕力をくくっていたところもあり、戸惑いを隠しきれない。

「これで間違いの一つや二つでも起これば、孫の顔も近いという物…… ストラトス夫妻にも、良いニュースを届けることが出来るだろう…… はっはっはっは！」

「……………あ……………」

「もう、これはどうしようもないですね……………」

シエンの様子を見て、事はひっくり返ることのない地点まで来てしまっていることを自覚した二人。どうも今回の話は、アインハルトの両親も大賛成の様子だ。

中学生に何をさせるつもりなのかと、小一時間説教してやりたくなるが、ホムラとアインハルトは顔を見合わせて、クスリと笑うと、どちらからでもなくお互いの手を握った。

「なんか、妙なことになっちゃったけど……………」

「はい。よろしくお願いします。ホムラさん」

と、二人は苦笑しつつもそう言って、シエンの言う『同棲』とやらに挑むことにした。

ルーク達がブラック人生ゲームをしている裏で、とある一組の夫婦見習いが一つ屋根の下で同棲することになった。

サードシーズン・予告（ここでギアスの次回予告BGM）

突然始まった、ホムラとアインハルトの同棲

ホムラ「とりあえず……このダブルベッドに対しては、どうリアクションをすればいいのかな？」

アインハルト「半分に割って、シングルにするというのはどうでしょう？」

ホムラ「その発想はなかった」

夫婦見習いと、エロティック皇帝の邂逅

閣下「ふむ、お前達……………中々のリア充力だな……………爆発
すればいいのに……………（ボソッ）」

エロティック帝国軍「……………異端審問会を開く……………」

ホムラ「か、カツコイ……………！！」

アインハルト「ほ、ホムラさん！！？」

リオス&なのはの恋愛模様は最終局面に……………

なのは「リオスくん……………ううん、リオス・コーネルドさん……………
わたし、高町なのはは……………」

リオス「なのはさん……………／／／／」

フェイトと閣下の関係とは？

フェイト「お帰りなさいませ、ご主人様」

閣下「つつがーう！そこは『ご飯にする？ お風呂にする？
それとも、大人の遊園地にする？』でしょうが……！」

フェイト「えー！私はメイドさんがいいよ」

乞うご期待？

第四十三話 人生そんなに甘くない、でも苦いばかりでもない（後書き）

F20C「ということで、セカンドシーズンのラスト、アインハルト&ホムラの参戦が決定しました」

アインハルト&ホムラ「よろしくお願いします」（ぺこり）

閣下「許婚設定とは……リア充か……」

F20C「いや、再三言ってるけど、お前も十分リア充だからな」

閣下「何か違うの！！ だってこの二人、もう将来誓い合ってるんだよ！？ 未だに彼女もない俺と比べたら、月とすっぽんじゃん！」

F20C「はあ？ お前がすっぽん？ すっぽんに失礼だろうが、ここで土下座しろ」

閣下「あ、すみませんでした……あれ、なんで俺謝ってるの？」

アインハルト「と、とりあえず……同棲するに当たって、決まりごとを決めましょう」

ホムラ「ふむ……家事は二人でやればいいとして……うん……あ、お風呂の順番とか？」

アインハルト「それも一つですね。あ、あとその……寝るときの事とか……／＼／＼」

F20C「いきなりストロベリってる……。あ、次回からサードシーズンに突入いたしますので、どうぞお楽しみに〜ノシ」

第四十四話 ある夫婦（見習い）の話（前書き）

サードシーズン突入ということで、今回のお話は とある訓練生と霸王つ子でお馴染みになりつつある、アイホム（読者様命名）ことアインハルト＆ホムラでございます。

初回からかなりイチャ付いていますが、訓練された読者様であれば、軽く乗り越えられる程度のものなのでご安心ください。

サードシーズン テーマソング

『ラブ・パラダイス』 song by 片霧烈火

PCゲーム『WLO（世界恋愛機構）』より

烈火姐さんならば、電波ソングだろうと許容できるぜ！！

第四十四話 ある夫婦（見習い）の話

「ふぁ……朝……ですか……」

アインハルト・ストラトスの朝は早い。

早いと言っても、毎日五時に起きてほにゃらら、というわけではない。まあ、大体が朝の六時半くらいだ。

しかし、学校の始業は九時。アインハルトが住んでいるここ、スメラギ邸から学校までは歩いて15分。

明らかに早起きなアインハルトだが、彼女には早起きしなければならない、早起きしたいだけの理由があった。

「さて……と……」

アインハルトは、スッキリとした朝に気持よく起床し、ゆっくりと行動を開始する。今日から新学期、聖祥学園中等部も高等部も今日から二学期が始まるのだ。

それと同時に、今日から、正確には今日の夕方からではあるが、アインハルトにとっては嬉しくもあり恥ずかしくもあり、でもやっぱり嬉しいイベントがスタートする。

そう思うと、着替え中にも関わらず、自然と気分は楽しいものになっていき、表情にも少し明るい感情が見え始める。

10分ほど掛けて、ゆつくりを着替えを済ましたアインハルトの姿は、聖祥学園中等部の制服姿であり、二期の始まりということでは、未だに夏服だ。

「では、行きましょうか……」

そうして、身なりを改めてアインハルトは自室を後にする。彼女が部屋を出て向かう先、そこはアインハルトの部屋のお隣り。スメラギ家の長男にして、アインハルトの許婚である、ホムラ・スメラギの自室である。

コンコン……

「ホムラさん……？　って、起きてるわけがないですね……」

アインハルトは、控えめな音でノックをして、ホムラの部屋の戸を開けた。ホムラの部屋はそれなりに綺麗に整頓されており、清潔感が漂っている。

そして、その部屋の中に置かれているシングルベッドの上にて、この部屋の主が気持よさそうに爆睡していた。

「うつ……ぬあ……い、イグサだけは……イグサだけは勘弁して下さい……」

「どついつ夢見てるんですかあなたは……………」

どうやら、ホムラは畳が苦手ようだ。

まあ、彼の意味不明な夢はさておき、アインハルトがホムラの部屋に何をしに来たのか、もうお分かりだろう。

そう、夜這……………ではなく、彼を起こしに来たのだ。

ホムラは低血圧なのか、朝がとことん弱い。それこそ、夜中に誰かがベッドの中に侵入して来ようとも、美少女が頬にチューしてもだ。あ、いや、別にどこかの誰かがやっているだとか、そういったことは恐らく、多分無いのだろうが。

「ホムラさん、起きてください。もう朝ですよ」

「ん……………まだ……………ちょっと……………」

「はあ……………。まあ、いつものことですね……………」

と、いつもの如く、ホムラは一発では起きてはくれない。

たっぷり時間をかけないと、体を揺すっても、布団を引っぺがしても起きてはくれないのだ。しかし、そんなホムラを見て、アインハルトは少し嬉しそうな顔をする。

「起きて……………ない……………ですよ……………?」

「む……………」

顔を真つ赤にしながら、何事もなかったかのように再びホムラを起こそうとするアインハルト。

この光景を、以前ユキナと、ホムラの母シラユキに見られてしまったときには、アインハルトは瞬間湯沸かし器のごとく、一瞬で顔が真つ赤を通り越して気を失ってしまった。

ホムラと許婚となつて3年、初めて出会った時のことは覚えていない。

何しろ、気が付いたら、いつも一緒に居たのだから。両親の話では、赤ん坊の頃からの付き合いらしい。そりゃ、覚えている方がおかしな話だ。

「ホムラさん……………遅刻してしまいますよ……………？ それに……………いつまでも寝ていると、また……………／＼／＼／＼」

「にゅ……………」

アインハルトは、自らの心の欲求に必死で抗い、ほっぺチュー（二回目）を堪える。

そのまま、ホムラの身体をユサユサと揺らしてみたり、頬とペシペシ叩いてみたりと、イロイロ試行錯誤して約15分後、ホムラはようやく目を覚ましたのだった……………

ホムラは、アインハルトに起こしてもらい、寝ぼけた頭で着替えを済まして、居間にて朝食を摂った。

昨日の晩、アインハルトとの同棲を提示してきためちやくちやな両親たちは、仕事なのか何なのか、既に出払っているらしく、朝食の席にはアインハルトとホムラ、ユキナしかいなかった。

「父さんと母さんは？」

「ん〜？ 用意するものがあるとかで、さっきどこか行っちゃったよ？ 有給使って」

「嫌な予感がしてきた……………」

ユキナに両親のことを聞いたホムラだったが、役立ちそうな情報はおろか、逆に嫌な予感がヒシヒシと伝わってくるような事を聞いてしまった。

昨日の同棲話が嘘でないとするのならば、きっとあの二人はそれ繋がりで様々な手を回してくるつもりだろう。

「兄さんとアインハルトさん、今日から二人で暮らすんだよね？」

「ああ、うん。気が付いたらそうだった」

「はう……………」

両親から話は通っているようで、ユキナも既に二人の同棲を知っているらしい。特に驚いた様子が感じられないのは、ユキナ自身もいつかはこうなるのではと思っていた節があるからだろう。

「今度帰って来る時は、お赤飯炊いておくね」

「全部ユキナが食べるんならいくらでも」

「ぶ……兄さんのヘタレ……」

「こう言うことは、ちゃんと段階を踏まないとダメなの。エスカレーターをバイクで駆け登る勢いなんだからね、父さんたちがやっていることは……」

妹にヘタレの烙印を押されようと、ホムラにも譲れないものがある。アインハルトとのことは、彼としても嬉しいことではあるが、両親たちの言う『孫』つまりは子供など、まだまだ先の話なのだ。

「僕達はまだ、所詮子供。安定した収入もないのに、そんな無責任なことしたら子供が可哀想だよ。アインハルトも僕も、そういうのはまだまだ先ってこと」

「……………それってつまりは、アインハルトさんとなら、将来的に子供が出来ることは悪くないってことだよな？」

「きゃふっ！！？」

ホムラの揚げ足を取ったユキナのセリフに、アインハルトが飲んでいた味噌汁と吹き出した。

ホムラも、自分の発言の意味を改めて噛み締めてみると、かなり大胆なことを言ってしまったと理解し、顔を真っ赤にしていた。

「そ、そういう事を言ってるわけじゃなくて、僕は……！」

「うう~~~~っ／／／／／／／／」

「あゝ、はいはいご馳走様です、いろんな意味で。………さつてと、私も学校行くっつと」

二人して真っ赤になりながら、あたふたとしている夫婦（見習い）を見て、朝から胸焼け気味になってしまったユキナは、空になった食器を片付けてカバン片手に立ち上がる。

聖祥学園初等部五年生になったユキナだが、ホムラ同様に少し大人びている美少女だ。銀色の長い髪が、その大人っぽさを際立たせ、10歳という年齢を疑わせるようなものになっている。

「じゃ、行つてきます。あ、二人の新居の住所とか、あとでメールしてくださいね。遊びに行きますから〜」

ボタン！

言うが早いのか、ユキナは言いたいことだけ言って登校してしまった。そして、必然的に居間に残ったのは真っ赤になったままのアインハルトとホムラ。

大変小っ恥ずかしい。

「えつとその………そういうのは………ね………？　もっと大人になつてからで………」

「え、ええもちろん！　分かっていますとも………／／／／／／／」

「あ、あはは………」

ホムラには、最早笑うことしか出来なかった。

二学期の一番最初学校のイベント、つまりは始業式だ。まあ、校長の長つたらしい話を立ちっ放しで聞くとところもあれば、その場に座って聞くなど、学校によってその形は様々だ。

ここ、聖祥学園中等部でも、その例に漏れることは………

『では、校長先生のお話………は、長ったらしいのでボツにする、という生徒会長のご判断から、スキップしたいと思います』

いや、かなり漏れていた。

中等部の校長先生は、『来年度から三行にまとめよう』などブツブツ言っているが、生徒たちにとってはまあ嬉しいことなのでオールオッケーだ。

でもって、この生徒の枠を飛び出した権力の使い方をしている生徒会長が誰なのか、皆さんはお分かりだろうか？

『では、続きまして生徒会長、アオミネ・ソラ様より、お言葉を賜りたいと思います』

そう、無敵の生徒会長、ソラである。

というか、生徒会長という地位が軽く王様並の扱いにまで跳ね上がっているのだが、この事実突っ込むものは誰一人としていない。

もはや、それが当たり前とかしているのだ。

人間は、当たり前、いつもと同じことにはあまり関心を向けないものだからだ。

『えー、今日はさっさと帰って積みゲー崩したいんで、さっさと終わろうと思いまーす。えっと、まずは……あぁ、学園祭のことで…

…学外からのお客さんも来るので……………とりあえず、皆さんテンション上げてガンガン客からお金を巻き上げてください。それからあゝ」

一つ目の話である学園祭の通達の時点で、この生徒会長のはちゃめちゃ度は理解していただけただろうか？

そこからのソラだが、いつもと同じような感じで始業の挨拶と、生徒たちに対する注意喚起などを行う。まあ、かなり端折られているので、普通のそれよりも格段に所要時間は少ないが。

『あゝと、それから、最近、未成年の不純異性交遊的な、まあぶっちゃけて言えば男女でのニヤンニヤン体操が問題になりつつあるとかで、PTAやら委員会やらからそういったことに対する視線が厳しいもんになってます』

ホムラ&アインハルト「（ギクツッ！）」「」

その話が出てきた瞬間、始業式に参加していたホムラとアインハルトは、揃ってビクついてしまった。

まあ、ある意味当然だろう。

「（い、言えない……。まさか両親から孫の顔を見せろって言われているなんて……………）」

アインハルトとホムラの間に、まだ『ナニ』かがあったわけではな

いのだが、その『ナニ』かを支援してくるのが、自分の親だとは言えないし、言いたくもない。

アインハルトも、同じことを考えていたようで青い顔をしている。

『まあ、別に一発しけこもうが、二発しけこもうがいいんすけど、するときはちゃんと付けるもん付けて、責任の持てる大人になるまで全力のニャンニャン体操は我慢してください。では、以上』

「（ソラさんもそうだけど……この学校もかなりめっちゃくだよなあ……………」

「（にや、ニャンニャン体操……………／／／／あ、でも猫同士がじゃれ合つてると考えると、可愛いかもしれません……………」

壇上を去っていくソラを、全校生徒が脂汗半分、尊敬半分の表情で見送る。

めっちゃくちな生徒会長ではあるものの、結果的にはいつも彼の行動が生徒にとってメリットになっていることから、ソラを支持する声は多い。

ホムラとアインハルト自身、ソラの組織する生徒会には属していないが、個人的な付き合いはある。二人とも、一応、彼のことは尊敬している。ちゃらんぽらんだが、やる時はやってくれる男なのだ。

『ソラ！！ あんな挨拶の仕方がありますか！！』

『ふー！！？　ちょ！　エステル！？　俺様ちゃんの完璧かつ優雅な始業式の挨拶のどこに不満が……？』

『全部に決まってるよ！！　バカ！！』

でもって、いざという時には彼のストッパー的な存在でもある、副会長のエステルが何とかしてくれるので、実際問題大きな問題は一つ存在していないのが実情だ。

ちゃらんぼらんな生徒会長と、しつかり者の副会長。

この公式さえ成立していれば、大抵のことはなんとかなるものだ。

『わ、分かった！　とりあえず落ち着け、こんど三段アイスとパフエ奢るから。いやマジで』

『さ、三段……パフエ……そ、それってデート……／／／　って、そんなので私は誤魔化されません！！』

とまあ、ややはちゃめちゃな始業式ではあったが、ホムラとアインハルトの二学期の初日はこうして恙無く過ぎていくのだった。

「はあ………初日だっていうのに、なんだかどつと疲れたね…

「……………」

「そうですね……。ですが、今日はもうこれで終わりですから、ほんとうに大変なのは明日からですよ？」

始業式が終わってしまえば、あとはHRをして帰るといのが新学期初日のスタンダードだろう。ホームラとアインハルトも、友人たちとの談笑の後、帰路に着くことにした。

だが、今日は少々帰り道が異なってくる。

「だね……。あ、さっき父さんからメールが来てて、僕達のその……」

……部屋を用意したから……今からそこに行けって……／／／／／

「へ、部屋……………ですか…………／／／」

「うん、部屋／／／／／／／／／／／」

なんとなく、先程のソラの話を思い出し、『部屋』という単語に少し卑猥な響きを覚えてしまった二人は、俯きつつ頼染める。

そういった行為に及ぶことは考えていないが、やはり意識はしてしまっているものだ。

だが、ここで恥ずかしがっていては、これからの生活などやっつけられない。二人はフルフルと頭を振って、邪な感情を押し込めて、冷静になる。

「あ、えと……荷物とかは、もう運んであるらしいからその辺りのことは心配するなって」

「そうですか。では、帰り道に夕食の買い物も済ませておきましょうか。今日は何を作りましょうか？」

「うーん……その辺りはブラブラしながら考えようよ。どのみち、調理は二人でするんだし、焦らなくてもいい考えが浮かぶよ」

「それもそうですね。では、少し寄り道しながら目的地を目指しましょうか」

と、傍から聞けばまるで新婚のような会話にも聞こえるのだが、二人はそんなことは全く考えていない。

これまでも、帰り道に夕食の買い物をしたこともあるし、一緒に夕食を作ったことだって何回もある。二人にとって、これは当たり前のことなのだ。

そうして、ホムラがメールに添付されていた地図と住所を確認すると、二人は教室を後にした。

靴を履き替え、ホムラとアインハルトは校舎から外へ。部活をやっている生徒たちの中には、気合を入れて練習に打ち込んでいる人達もいる。

アインハルトとホムラに関しては、部活には入っているものの、今日はお休みらしい。まあ、どのみち引越しに関連して忙しくなると思っていたので、もともと休むつもりではあったが。

ツン……

「あ……」

「わ……」

と、そんな外の風景を見ながらブーツとしてしまったホムラの手に、アインハルトの小さく可愛い手が当たる。

いや、正しくは『当てられた』というべきだろうか。

「ほ、ホムラさん……手を……繋いで行きませんか？／／／／／」

「う、うん……いいよ、もちろん／／／／」

どうやら、アインハルトはホムラと手を繋ぐつもりで、ワザと彼の手に自分の手を少し接触させたようだ。

こういう可愛いところが、普段の凜とした彼女とのギャップとなっていて、ホムラはそんなアインハルトに惹かれていた。

ギョ……

ホムラとアインハルトの手が、ゆっくりと、しっかりと繋がれる。
お互いの体温が、手を通して伝わってくるこの感覚が、二人は気に入っていたし、好きでもあった。

「行こっか……」

「はい……／＼／」

今日は、いつもよりも帰るのに時間が掛かる。しかし、それは裏を返せばその分長く、こうして手を繋いでいられるということでもあって……

それを自覚しているのかいないのか、二人はどこか嬉しそうな表情を隠せないでいた。

しかし、そんな二人のピンク色空間をぶち壊す出来事が、次の瞬間、本当に唐突に起きてしまった。

「きゃ！？」

「ね、ねーさん！」

ドスン……

ホムラ＆アインハルト「え??」

突然の小さな悲鳴と、少し鈍い、人が倒れこむような音がホムラとアインハルトの目の前で発生した。

二人は、その音の発生したと思われる方向に視線をやる。

そこには、ある意味でホムラ達以上に、ピンク色な空間が出来上がっていた。

「る、ルーク……………／／／こ、こんなところで白昼堂々と……………？ 人に見られながらでないと興奮できないってことは知ってるけど、私にも心の準備ってものが……………／／／／」

「なあゝに、アホのことってんのさ……………。ねーさんがコケそうになったから、助けようとしただけだったの……………」

「え？ みんなで見られてるのに、また『ご主人様』って呼ぶの……………？ あ、出来ればもつと蔑むような目で、私のことを見下して欲しいかも……………／／／／」

「人の話聞かないで、なんでそんな異次元空間にトリップ出来るのさ！！？ というか、ねーさんただMなのさ!？」

そこには、金髪の長い髪を先の方で黒いリボンで束ねた、赤い瞳を

したグラマラスなボディーの上級生のお姉さんと、同じ髪の色と瞳の色をした、高等部の制服を着た青年がいた。

青年が、上級生のお姉さんを押し倒し、大きな胸に手が当たった状態で。

アインハルト&ホムラ「……………」

目の前に広がっている、イケナイ匂いがプンプンするこの光景。ホムラとアインハルトは、手を繋いだ状態で完全にフリーズしていた。

「はあ……………とりあえず、ねーさんをこっちの世界に引っ張ってこないと……………あ……………」

「「あ……………」」

そして、金髪の青年（お姉さんを押し倒した人）と、ホムラ達の視線が正面衝突した。

いや、なんというか気まずい。ホムラたちとしては、リアクションに困るし、青年としてはなんといい訳すればいいのかで困ってしまう。

ともあれ、こんな困った状態ではあったのだが。

これが、ホムラとアインハルト、夫婦見習いコンビと、エロティックス皇帝・ルークとその姉フェイトの出会いだった。

第四十四話 ある夫婦（見習い）の話（後書き）

F20C「というわけで、ホムラ&アインハルト、アイホームと変態姉弟の出会いでした」

ホムラ「ま、まさかあんな白昼堂々と……／＼／」

アインハルト「だ、大胆です……／＼／」

閣下「違うから……！　ていうか、姉弟だからね？！」

F20C「いいかい二人とも？　ヨスガノソラっていうエロゲーがあつてだな……」

閣下「ヨスガらないから……！　ああもう……なんなんだ最近の俺の扱いは……」

F20C「だって、君って弄られてなんぼのキャラじゃない？」

閣下「納得出来るかああああアッア……！！」

ホムラ「あ、アインハルト……」

アインハルト「な、なんでしょうか……？」

ホムラ「その……僕は外でとかは趣味じゃないから。ちゃんとベッドだから。あ、あと、まだそういう事はその……しないから……／＼」

アインハルト「はは、はい……………／／／／　ホムラさん……………大胆
です……………／／／」

次回　第四十五話　新居と書いて『愛の巣』と読む

第四十五話 新居と書いて『愛の巣』と読む（前書き）

どうも、この四日間で随分とトイレお姉さんの好感度を上げることになってしまった、F20Cでございます。

いや、ほんとにね……腹痛が酷くて酷くて……回復傾向にありませんが、ひどい時には一時間に五回くらいトイレ行っていました。まさに、腸エイキサイティング!!

それ＋発熱&嘔吐って……なにか悪いもんでも食べたんでしょうか

.....

滑稽でしょ？ 笑えるでしょ？ 笑えばいいじゃない！！ あーはっはっはってね！！

では、本編どうぞー……………（ぎゅるるるる……）ぬがあああああ

!!!

第四十五話 新居と書いて『愛の巢』と読む

「ええと……………取り敢えず、怪我とか大丈夫ですか？」

「ああ……………うん、助かったよ。怪我とかは特に無いし……………」

アインハルトとの下校の矢先、二人は二人の金髪男女の先輩が、往來で押し倒し、倒されているという状況に出くわした。

いや、何を言ってるのか分からないと思うが、兎に角そうなのだ。

ホムラは金髪の男子生徒の先輩を助け起こし、アインハルトはナイスバディな金髪お姉さんな先輩を助け起こし、なんとも言えない微妙な空気の中にあつた。

「え〜と……………俺、ルーク・ハラウンって言うんだ。いやあ、危ないところをなんていうか……………」

「い、いえいえ……………困った時はお互い様というか、間違いを犯す一歩手前に阻止できて良かったっていいですか……………」

「ルークったら……………本当に大胆なんだから……………ポツ／＼／＼でも、そんなプレイに興奮しちゃう私も……………」

「あ、あの……………大丈夫ですか？　いろんな意味で……………」

ホムラはルークと、アインハルトはフェイトと軽く言葉を交わすが、どことなくぎこちない。まあ、目の前であんな事になってしまえば、普通に接するのはまず難しいわけ。

加えて、未だに目がトロンとしているフェイトに、アインハルトはいろんな方面からの心配が尽きなかった。

「僕は、ホムラ・スメラギです。それで……」

「アインハルト・ストラトスです」

「フェイト・ハラOWNだよ」

でもって、先にルークが軽く自己紹介をしてきたので、残り三人もお互いに自分の名前を名乗る。

ホムラとアインハルトの二人は、ルークとフェイトの名前を聞いて少し首を傾げた。

「えっと……お二人ともお名前がハラOWNさんなんですか？」

「ああ、俺たち姉弟だからさ」

「いずれは一線を超える予定なんだけど……そして行々はアレしたりコレしたり………キャッ」

「そんな予定はありません」

「ブー……」

二人が兄弟だと聞いて、ああなるほどと思った反面。フェイトの口から飛び出た発言に再びギョツとしてしまう。

ルークが否定するも、フェイトの目は明らかに冗談ではなく本気だったからだ。

「「も、もしかして……ヨスガ……」」

「違えよ!!! ヨスガらないから!!! 玄関先で同級生にエッチシーン目撃されるとかゴメンだよ!!!」

「そ、それはそれで興奮するかも…… エヘヘ……でヘヘ／／／／」

「駄目だこの人………早く何とかしないと………」

ホムラとアインハルトの他アニメネタに、ルークは鋭くツツコミを入れるも、またしてもフェイトがそれをぶち壊してくれる。

最早、どうしようもないんじゃないかと思えてしまうほど、ルークの逃げ場がないようにも思えてしまった。

「そそそ、そういう二人……ええと、ホムラとアインハルト………だっけか？ 二人もなんか仲良さ気だけど、もしかしてニャンニャン

してたりするのか?!」

「（うわ！ この人無理矢理、僕ら（私たち）の方に話振って来た?!）」

なんという大人気ない、いや、そう年が離れているわけではないのだが、フェイトの暴走阻止のためホームラとアインハルトに話の中心という役目を投げ渡してきたルーク。

バットで打ち返してやりたくもあるが、懐が深い二人は自分たちの関係についてどう言おうか迷っていたので、それどころではない。

無理やり振られた話でも、自分たちのことを正直に話すのには多少の勇気が必要だった。

「あ、それ私も気になるなあ……。なんだか二人とも手とか繋いじやってるし……………」

「あ、あう……………// //」

「こ、これはその……………// //」

ルークだけでなく、フェイトまでこの話に乗ってきてしまった。結果的に、フェイトの妄想ワールドを緊急停止させるというルークの見論見は成功したのだが、今度はホームラとアインハルトの逃げ場が無くなってしまった。

まあ、こんな状況になっても手を繋いだままの二人もどうかと思う

のだが……

「い……いいな………けです…… / / / /」

「え？」

「私とホムラさんは、許婚です！！ / / / / /」

「ちょ！？ アインハルト…… / / / /」

そして、この空気に耐えかねたのか、はたまた恥ずかしさを打ち消すために無理をしたのか、アインハルトが顔を真っ赤にしながら自分たちの関係、『許婚』という単語を口にした。

瞬間、フェイトとルークは固まってしまふ。良くて付き合ってます、というような答えが来ると思っていたのだろうが、実際は将来を誓い合った仲だったでござるの巻、というような感じだったのだから。

「い、許婚って、あの親同士公認で、お前らなら結婚してもおk、みたいな………あれ？」

「（コク……）」

ルークの確認するような問いに、ホムラとアインハルトは小さく頷く。

二人は、照れて顔を赤くしながらも、繋いだ手を放す様子はない。

そんな二人の姿を見て、ルークは急に真剣な表情になると、懐から何かを取り出した。

パツと見、某ドラゴン　ルで登場するスカ　ターにも見えなくもない。というか、明らかにパクリ商品にしか見えなかった。

「そんなバカな…リア充力がどんどん上がっていく…15万…16万…17…………（ガシャーン！！）」

「え、ええつと……………？」

いきなりの茶番に、ホムラ&アインハルトはポカンとしてしまう。フェイトはフェイトで、『許婚か……………いいなあ……………』とか何とか言いながら、ホムラ達の関係性をひどく羨ましがっていた。

「こ、ここまでのリア充が世に存在しているとは……………私もまだまだ視野が狭い……………」

「えつと……………？　ルークさん？」

いきなりルークの一人称が『私』になったことに、嫌な予感がしてしまうホムラ。あちらから飛んできた話に正直に答えたままでのだが、どうやら地雷を踏んだらしい。

一体どうしろと…………

「年下の子が許婚まで許されてるのに……俺って奴は……
彼女もいねえ……はは……あはははははははははは……！！！！」

「ひい！！？」

自身の暗い青春に軽い失望を覚えたのか、ルークは血の涙を流しながら、無理しているのが丸分かりな笑いを上げる。

無論、ホムラ&アインハルトはドン引き、涙目状態だ。お互いに身を寄せ合ってガタガタ震えている。

「ま、まあまあ……ルークにもそのうち良い人が見つかるって……主に私とか……」

フェイトは、慰めのつもりなのか、orzになっているルークに優しいげな声でそう言うが、明らかに自分を売り出しているようにしか聞こえない。

「あ……えっと、その……」

先週の後半からのセットで、こんな異次元空間に放り出されたホムラとアインハルトの二人。

そんな彼らの取るべき道は、一つだけしか存在していなかった。

「「う、うめんなさーい！！！！」（何が何だか分からないけど）
」

その場から、猛ダッシュで逃げ去ることだけだった。

ダッシュしている最中、背後で『い、異端審問会だ！！！ エロテ
イック帝国軍の底力を見せちやるけん！！！！』
とか何とか、閣下^{変態}の叫び声が聞こえたのだが、その言葉の意味をホ
ムラ達が知ることになるのはもう少し後のことだった。

学校での異次元体験から、全力疾走で脱出したホムラとアインハル
トは、先程の事を心の奥底に押し留め、何事もなかったかのように
本日からお世話になる二人の家に向かうことにした。
というか、そうでもしないとやってられなかった。

途中で夕飯の買い物を済ませ、ホムラの手には食材の入ったビニ
ール袋がぶら下がっている。今夜は豚の生姜焼きだ。

「ええっと……………確かこの角を曲がって直ぐその……………ああ、
あった」

「わあ……………これはまた……………かなり綺麗なマンションですね……………」

携帯にメールで送られてきた新居の住所を頼りに、ホームラ達は道を選んで進んできたのだが、漸く目的地に到着した。

二人の住居として充てがわれたそのマンションは、かなり綺麗というかそれなりの家賃を出さねば住めないようなところだった。

パツと見、オートロックに指紋だか静脈だかで誰なのかを識別するシステムも見えて取れ、中学生が二人で住むには、些かお金を掛け過ぎなのでは？　と思いましたが、逆に中学生という子供だからこそ心配という、シエン達の親心というやつなのかもしれない。

「取り敢えず、管理人さんに会おうか」

「ですね。鍵なども頂いていませんし」

二人は、部屋の豪華さへの驚愕もそこそこに、そのマンションの大家さんの人物に会うことにした。

一回の管理人室のインターフォンを押し、事情を説明すると、すぐに人の良さそうな初老のオバサンが出てきて、二人を部屋まで案内してくれた。

部屋の前まで来て、ゴミ出しの日などなどの説明を受けた後、去りに際し『ここは防音は完璧だから、安心してね！』と言われたときは、本気で父親に対してグレたくなってしまったホームラだった。

閑話休題

さてさて、これからホムラとアインハルトが住むことになっているこの部屋だが、外見だけでなく、中身もかなり小奇麗かつ豪華っぽいものだった。

二人で住むということなので、このマンションの中では一番小さいサイズの部屋なのだが、それでも安っぽさは全く感じない。

見れば、ホムラの部屋にあった液晶テレビや、新調したのか冷蔵庫や炊飯器、洗濯機などというように、白物家電などは完備されていた。

「うわぁ……めちゃくちゃ張り切ってる感じがヒシヒシ伝わってくるよ……………」

「お義父さまとお義母さまが嬉々として準備に勤しんでいらっしやる光景が目に見えますね……………」

この頑張りを、もっと別の分野に活かしてもらいたいと思ってしまふのは、おかしいことではあるまい。

まあ、しかし。子作り云々を除けばこの部屋的环境はなかなか悪くない。学園からも10分ほどの道のりだし、近場に駅もある。

「ま、取り敢えずは二人で頑張っていこうか？」

「はい、よろしくお願いします、ホムラさん」

改めてそう言い交わす二人。

そのままつつ立っていてもアレなので、二人は取り敢えず部屋の中を物色しつつ、自分たちの着替えや荷物などを片付けることにした。

しかし、シエン達おバカ親の本当の力は、ここから発揮されることになるのだった……………

「さてと、買ってきたものを冷蔵庫に、と……………」

まず、ホムラがそう言いながら冷蔵庫を開く。冷蔵庫もそれなりに新しいモデルらしく、新品の家電という匂いがした。

が、冷蔵庫に予め詰め込まれていたものを目にすると同時に、ホムラは固まってしまった。

冷蔵庫の中身

赤マムシドリンク×5ダース

うなぎ3匹

オロナミンH×3ダース

チーズ鱈×3袋

スライスサラミ×3袋

ボタン！！！

ホムラは、光の速さで冷蔵庫の扉を閉めた。いや、別に省エネとかそういう高尚な目的のためではない。

冷蔵庫の中の力オスさに、めまいを覚えてしまったからだ。

「ホムラさん？　どうかしましたか？」

「いいいいい、いや！！　全然だけど！！！！？　至って普通の冷蔵庫だったよコレ！！」

「は、はあ……」

中身を悟られまいと、必死過ぎる様子でアインハルトに答えるホムラ。

というか、こんな事をする人に心当たりがあり過ぎで困ってしまう。

「（なんで精力剤みたいなのがダース単位で詰め込まれてるんだよ！！　ていうか、チーズ鱈とスライスサラミって、コレ完全にオツマミじゃないか！！　あの人達、確実にこの部屋に来るつもりだよ！！　酒の肴に僕達弄り倒すつもりだよ！！）」

アインハルトになんとか冷蔵庫の中身を見せまいと、彼女にお風呂場の様子を見てきて欲しいと頼んだホムラだが、改めて冷蔵庫の戸

を開いて買ってきた食材を整理しながら、このカオス冷蔵庫制作の張本人達の悪意というか、なんというかを身に染みて思い知ることになってしまった。

そして、お風呂場を覗いてみたアインハルトにも、同様の悲劇が……

「随分と立派な浴槽ですね……………あ、私がいつも使ってるシャンプーとリンスが……………」

お風呂の浴槽や、シャンプーなどの用意は完璧。恐らくは、シリユキあたりが気を使ってくれたのだらう。

「あれ？ これは何でしょう……………」

だが、そのシャンプーと一緒に、見慣れないボトルを発見する。透明な液体が詰め込まれているそれは、どこかシャンプーなどとは違った印象をアインハルトに与えた。

そして、そのボトルのラベルを見て、アインハルトは絶句する。

『身も心もヌルヌルに！ ×××プレイに超オススメ・スーパーロ
ーション』

「んな！！？」

思わぬ刺客に、アインハルトは女性にあるまじき声を出しながら、一瞬で顔が沸騰したかのように赤くなってしまった。

まあ、普通に生活していてその手のプレイ用のローションにお目に掛かることなど早々無いだろう。

「×××プレイ……………／／／／／／身も心もヌルヌル………
／／／／／」

アインハルトは、しばらくローションを眺めたまま硬直し、顔を赤くしながらお風呂場にヘタリ込んでいた。

彼らの両親たちの悪意（本人的には100%善意）の塊は、それだけに留まらなかった。

アロマオイルだと思っていたモノが、実はアロマタイプの媚薬だったり。

机の上に、保健体育の教科書がそれっぽいページで開いたまま放置されていたり。

アインハルトの下着の一部が、際どいタイプの勝負下着に入れ替えられていたり。

マンネリ化を防ぐためなのか、クローゼットの中には『客室乗務員』・『看護師』・『教師』・『巫女服』・『軍服』・『セーラー服』・『大きいサイズのワイシャツ』・『ゴスロリ』などなどの、多様性に富んだコスプレ衣装が満載されていたり。

そして、極めつけは寝室だった。

「……………ベッド、大きいね」

「ですね……………それに、部屋のどこを探しても、コレ以外のベッドを見つけることが出来ませんでした……………」

そう、この部屋の寝室に、ダブルベッドが鎮座しており、それ以外の寝床は存在していなかったのだ。

コレはもう、『一緒に寝る』・『出来れば一発か二発しけこめ』と暗に言われている気がしてならない。

「……………どうしようか、このベッド……………」

「取り敢えず、半分に叩き割って、シングルベッドにするというのはどうでしょう?」

「その発想はなかった」

ここまでの下準備の殆どを目の当たりにしてきたホムラとアインハ

ルトは、乾いた声で棒読み漫才を試みるが、状況は全く好転しない。

まあ、ここまで来てしまったのなら状況に身を任せてみるのも良いのかもしれないが、生真面目な彼らからすればそれはタブーである。

「えっと……………僕は床で寝るからさ……………アインハルトはベッドで……………」

「だ、ダメですよ！ そんな事したら、ホムラさんの身体に悪いですから。その……………／／／ 私は構いませんから……………一緒に……………寝ませんか……………？」

「はぐっ……………！」

しかし、こうなっては一緒に寝る以外の選択肢はないわけで、アインハルトの上目遣い＋赤くなった頬攻撃に、ホムラの自制心は軽く崩壊の危機を迎えてしまった。

「わ、私は少し……………寝相が悪いかもしれませんが……………たまにホムラさんに抱きついてしまったり、その……………体が接触してしまうかもしれません……………ダメでしょうか……………？」

「うう……………／／／／／ い、いいよ……………。寧ろ、ちょっと光栄なことだと思うし……………アインハルトさえ良かったら……………／／／」

「はい／／／ 不束者ですが、よろしくお願いします」

この一言に、ホムラの心が改めてアインハルトにハートキャッチされてしまったのは、言うまでもないことだろう。

兎にも角にも、こうして大人たちの陰謀全開な同居生活ではあるが、ホムラとアインハルトにとっては、また新たな刺激が詰まった新生活が幕を開けたのだった。

第四十五話 新居と書いて『愛の巢』と読む（後書き）

F20C「で？シタの？」

ホムラ&アインハルト「し、シテません！……！」

F20C「いや、一緒に料理したのかなあと思って聞いたんだけど……ナニを想像したんだい？」

ホムラ&アインハルト「っ……！！！！／／／（ハメられた！！）
っ」

F20C「さてさて、子作り包囲網が着々と完成していくわけだけど………今回は、二人となのは&リオスの出会いのお話にしようかと思います」

ホムラ「高町きょうど……じゃなくて、なのはさんとリオスさんがあ……ルークさんたちよりまともな気がするし、ちょっと安心だね」

アインハルト「ですね、少なくとも逃げる必要はないでしょうし」

F20C「この時、彼らは知らなかった……あの二人との出会いが、まさかあのような結果を招くことになるとは………」

ホムラ&アインハルト「妙なフラグ立てないでください！！」

次回 第四十六話 えっちい朝とバカップル

アインハルト「え、えっちい……?」

F20C「乞うご期待〜 (ぎゅるるる!〜) はぐうううう
!〜」 慌ててトイレに駆け込む

ホムラ「治りきつてないくせに無茶するから………」

第四十六話 えっちい朝とバカップル（前書き）

パソコンお姉さんが修理中なのでどうなる事かと思いましたが、意外と何とかなりました。

帰ってくるのは一週間少し先……………ストレスで私の精神の摩耗がマッハなんだが。

PS3のゲームでも買ってきます…………

あ、今週も甘いかもしれないので、何か苦い物を片手にお楽しみくだされませ。

第四十六話 えっちい朝とバカップル

基本的に寝坊助のホムラだが、極稀に朝早くに目を覚ますことがある。枕が変わったり、ベッドが変わったりと、その原因は小さなものではあるが、たまにあるのだ。

「ん……………」

ゆっくりと瞼を開く。いつものベッドと硬さが違う、少し柔らかい。加えて、窓から差し込む光の方向がいつもと違うことも気になった。そこで漸く思い出す、昨日からアインハルトとの二人暮らしを始めたということ。

住むところが変われば、間取りも変わる。数日経てば気にならなくなるであろうその違いが、同棲二日目ではひどく新鮮だ。

「……………」

「にゅ……………」

まぶたを開いたホムラの目に飛び込んできたのは、綺麗な女の子の顔だった。碧銀の髪がベッドに広がり、その女の子、アインハルト

とホムラとの距離は約10センチにまで近づいていた。

「……………ち、近くないか、これ…………？」

状況を飲み込んだホムラが口にしたのは、そんな言葉だった。いやまあ、近いといえば近い、少し動けば、おはようのチューが成立するほどに。

引越した部屋に、両親の陰謀からベッドがダブルベッド一つしか無かったため、ホムラとアインハルトは二人で一緒に寝ているわけなのだが、両者ともすっかり服も着ているし、ベッドの周辺にも『そついった痕跡』は見られないところから、昨夜は何もなかったようだ。つまらん。

「うう……………ん……………ホムラひゃん……………この子の名前は……………どうしましょう……………？」

「……………」

訂正しよう。アインハルトの夢の中では、何かがあっただけではなく、何かが出来てしまっているようだ。彼女の表情に、若干朱が差していることから、嬉し恥ずかしな夢を観ているのだろう。

「と、兎に角……………起きないと……………」

時計を見れば、時刻はまだ6時15分。今から朝御飯を作って、ゆつくり食べても学園の始業時間までには、お釣りが来るほどの余裕がある。

せっかく珍しく朝早く起きることが出来たのだ、アインハルトには寝ていてもらい、自分だけで朝食を作っておこうと、ホムラは布団から出ようとした。

のだが

「うゝん……………行つては……………いけません……………」

ギユウウゝ

「あふえー!!?」

布団から出ようとしたホムラの身体に、アインハルトが全身を使つて抱きついてきた。突然の出来事と、アインハルトの温かくも柔らかい体に、ホムラは素っ頓狂な声を上げてしまうが、幸いにも（何が幸いなのか分からないが）アインハルトは目を覚まさかった。

「あ、アインハルト……………／／／／／／／」

「んん……………ずっと……………こうして……………」

言いながら、アインハルトはホムラに抱きつく力を強くする。もう

こうなつては、彼女の捕縛から逃れる術はない。
アインハルトが、逃げようとするホムラの身体に、綺麗な脚を絡ま
せてくる。

「って、アインハルト……………なんて格好…………… / / / /」

と、掛け布団がズレてしまったことで漸く分かったのだが、アイン
ハルトの寝間着姿というか、今の服装は大変けしからんものだった。
下着はしっかりと付けている、まあこれはいいだろ。だが問題は
次だ。

上着は少し大きめのワイシャツを着ており、下が……………ない。ズ
ボンのな何かが、無かった。

大きめのワイシャツ一枚で、アインハルトはホムラの身体に抱きつ
きながら寝ている状態というわけだ。

「あ…………… / / / うう…………… / / / /」

と、そんな刺激の強い格好で同じベッド、加えて至近距離、という
か抱きついているのでゼロ距離となっている二人の体。

アインハルトが少し脚を動かせば、ワイシャツの裾のほうのスラッ
と捲れそうになり、先程からチリチリと白い下着のようなもの
が見えたり見えなかったりしている。

加えて、絡められた脚の柔らかい感触が、ホムラには毒過ぎる。ス

ラリと綺麗な脚をしているアインハルトだ、この状態はホムラにとつては拷問にも天国にも変わりうるものとなっている。

当然、ホムラだって男だ。人並みの感情もあれば、性欲だってある。許婚という、将来的な存在となつたアインハルトが、こんな格好で密着してきているとなれば、当たり前のように邪な感情は生まれてしまうもので……

「（だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ！！！！ 寝ている子に対してこんなバカみたいなこと考えちゃ！！ アインハルトのことは、大事にするって決めただらう！！）」

が、マスター・紳士の称号（今思いついた）を持つホムラとしては、こんな場の雰囲気になされた感情に飲まれるわけにはいかない。

アインハルトと、そういう行為に及ぶことは、もちろん嬉しいことだし、拒絶するなんてこともありえないだらう。

だが、自分たちの身分はまだ学生、親に養ってもらっている身分だ。そんな半人前以下の自分たちが、一刻の過ちを犯した果てに生み出す結果、それに対する責任を取れるかど分らない。（例え、親がそれを望んでいたとしてもだ）

「（アインハルトだって、僕のこと信用して一緒にベッドで寝てくれているんだ……。だったら、その信頼を裏切るわけにはいかないだろ！）」

古臭い奴かと思われるかもしれないが、ホムラはそう決めていた。

そして、対抗策としてホームラが考案したのが、アインハルトをイカ
なんだと自分に思い込ませることだった。

「（つて、こんないい匂いがして柔らかくて、綺麗なイカがいるか
ああああああ！！！！　ていうか、アインハルトがイカつてめち
やくちや失礼じゃん！！　こんな可愛くて美人で気立てもいいのに
いいいいいい！！！！！！）」

というか、彼自身、アインハルトとの密着状態によってテンションがおかしくなってきた。自分の立てたボケに、自分でツツコミを入れてるようにしか見えないのは気のせいではないだろう。

「（そうだよ……！ 変に意識するから駄目なんだ。心を無心にして、悟りを開く勢いで、賢者モードに突入するんだ……！！）」

最早、何をやっても手遅れな気もするが、ここは本人のやりたいようにさせてやることにしよう。

心を無にし、精神を鎮める………頭の中には、大宇宙の景色が広がっている。小宇宙^{コスモ}を燃烧させるイメージで、煩惱を燃やし、それを賢者モードへのエネルギーにする。

「（行ける！！ 今なら、ペガサス流星拳だろうが、盧山昇龍霸だろうが撃てる気がする！！！！）」

元ネタが分かる方がいるか不安だが、兎に角ホムラは賢者モードに突入した。

そして、改めて目を見開き、眼の前の状態を刮目する！

「……………ホムラ……………さん？」

「あ……………」

そこには、目を覚まして、ホムラに抱きついているこの状態をなんとか把握しようと必死なアインハルトの姿があった。

「……………」

「……………」

重い沈黙が、二人の間に流れる。ホムラに抱きついている、というか絡みつく形で密着しているアインハルトと、その状態からくる桃色妄想をブチ殺そうと必死なホムラ。

なにか言いたい、『おはよう』や、『あ、起きたんだ？』とか、そんな余裕のある態度でアインハルトに何かを言いたい。だが、ホムラの身体は金縛りにあったかのように（実際に縛られているようなものだが）なっており、全く動くことが出来ない。

二人が正気を取り戻して、真っ赤になりながらもゆつくりを体を離して、ベッドの上で正座しながら朝の挨拶を交わすことが出来たのは、そこからたっぷり10分後のことであった。

朝の登校。

ホムラとアインハルトの間には、微妙な空気が漂っていた。

「え、えっと……………アインハルト……………」

「ははは、はい！！　なんでしょうか！」

「うん……………その……………顔とかめっちゃめっちゃ紅いけど、大丈夫？」

「わ、私は至って健康ですよ？　ホムラさんの方こそ、お顔が真っ赤ですが……………」

「ぼぼ、僕も何とも無いよ！？　は、はははは……………」

会話終了。

何ともチグハグな会話ではあるが、二人とも平静を保とうと必死なのが丸分かりな程に照れている。

早朝での一件は、お互いに謝ることで一段落ついたのだが、やはり気恥ずかしさはそう簡単には拭えない。

あんなに密着してしまったのだ、お互いを過剰に意識してしまうのは無理ないことだろう。

「あの……………本当にすみません……………寝ぼけてしたとは言え……………」

「う、ううん。僕は大丈夫だから……………それに、それだけ気を許してくれてたってことだろうし……………」

「そ、それは……………そうなのですが……………／／／／／」

アインハルトが改めて謝ってくるが、無論ホムラが怒ったりするはずもない。逆に、ありがとうとお礼を言いたくなってしまう体験だったのだからというのは、口が裂けても言わないが。

「私、もしかすると……………この先も今朝のように……………また、抱きついてしまいかもしれません……………／／／／／それで、その……………嫌いにならないでもらえると……………」

「それはないよ。アインハルトのことを嫌うなんて、そんなこと絶対無い。一生大事にするって……………そう約束したから」

「はう／／／／／」

バキンッ！！

今、読者様のパソコンのマウスがお亡くなりになる音がしたような気がする。いや、きっと気のせいではないだろう。作者のワイヤレスマウスもまた悲鳴を上げている。

アインハルトとホムラの作り出すこの桃色空間、とんでもない破壊力を秘めている。

というか、朝の通学路でプロポーズまがいの発言をするという勇敢な行為。ホムラは意外と大胆な性格をしている。周囲に人が居なかったのが幸いである。

「い、一生………お側に置いてもらえる………ですか？」

「う、うん／＼／＼ アインハルトがいいなら………」

「わ、私はもちろん、『よろこんで』と………お答えしますけど……／＼／」

ガッシャーン！！

今、読者様のパソコン、または携帯・スマートフォンのディスプレイが砕ける音がした気がする。私のパソコンのディスプレイも粉々です。

駄菓子菓子。

どこぞの変態姉弟のような殺意を覚えないだけまだマシ、と思えるのは不思議なものだ。

「ホムラさん……／＼／／」

「アインハルト……／＼／／／」

ギユ……

そして、二人はどちらからということもなく手を差し出しあって、その手を握る。手を繋いだ状態で、通学路を再び歩き出した。その二人の表情は、恥ずかしさはもちろんだが、それ以上に幸せ――

杯という様子で、とっても充足しているように見えた。

「なのはさん…………… / / / / /」

「リオスくん…………… / / / / /」

ホムラ&アインハルト「??？」

と、ホムラとアインハルトが無限の糖製を展開している中、もう一組のバカップルの姿がいつの間にか二人の目の前にあった。
栗色の髪をサイドポニーにした女の子と、プラチナブロンドの髪をした男の子が、仲良く手を繋ぎながら、キャッキャウフフな感じで前を歩いているのだ。

「リオスくん」

「なんですか、なのはさん？」

「にやはは、急に名前呼びなくなっちゃった…………… / / / / /」

「あはは……………なのはさんらしいなあ……………」

ベコン！！！

今、読者様の（ry

ホムラとアインハルトの作り出した桃色空間を意図も簡単に凌駕する、固有結界。見れば、ホムラ達の固有結界に同調、いや侵食しているのではないか。さながら、使徒のA Tフィールドを中和する初号機の如き。

というか、昨日に引き続き、またしても異次元空間を形成する能力者に遭遇してしまったようだ。

「さ、最近は流行ってるのかな……………？ 異次元空間を作るのが……………」

「ど、どうなのでしょう……………」

自分たちの桃色空間を破壊されたアイホム（アインハルト＆ホムラの略）は、冷静に立ち直った様子で、なのはとリオスというらしいその二人のイチャイチャ風景を見せ付けられる。ちよつと砂糖を吐き出しそうになったのは内緒だ。

「なのはさん、今日ちよつと新しいお菓子を作ってみたんですけど、お昼に一緒にどうですか？」

「あ、うん じゃあ、二人っきりで……………ね？ 食べさせ合いつこしょうか……………」

「は、はい……………／／／／／」

アイホム「うつぶ……甘い……」

なんということでしょう（ビフォーアフターのな）

ホムラとアインハルトの固有結界を破壊するだけに留まらず、さらに追加攻撃までを放ってくるという、この徹底した攻撃。まさにイチャイチャ絨毯爆撃、イチャイチャのクラスター爆弾である。

「リオスくん……」

「なのはさん……」

と、そのままその二人は、延々とイチャイチャしながら聖祥学園へと繋がる通学路を歩いて行ってしまった。

見れば、道行く人々が次々と砂糖を吐きながら倒れていく。ある意味、戦略兵器にも成り得る二人の姿を見せ付けられ、アインハルトとホムラは傍にあった電柱に体を預けて、なんとか意識を保っていた。

「な、なんだっただあの二人は……」

「昨日のルークさんとフェイトさんとはまた違った方向で……危険というか……うう……コーヒーが欲しいです……」

二人は、呻くようにそう言いながらお互いを支えあって再び通学路を歩き出す。途中で缶コーヒー（無糖）を買って飲んでみたが、何

故か蜂蜜にいちご牛乳を混ぜあわせたような甘さを感じてしまった。

「今日の夕飯は、オールゴーヤ料理にしよう」

「私も全面的に賛成します」

謎の二人との遭遇によって、アイホムの夕飯のメニューがゴーヤ料理に決定された瞬間だった。

その日、聖祥の朝の保健室には、謎の糖分過多患者が次々と運び込まれ、校医をしているシャマル先生が大忙しだったとかなんとか。

第四十六話 えっちい朝とバカツプル（後書き）

F20C「おいおい……アインハルト積極的過ぎるだろ……ワイシヤツ一枚つて、完全に誘い受け…ひでぶっ!？」

アインハルト「ぱ、パジャマを持つてくるのを忘れただけです!!」

ホムラ「でも……アインハルトの……その……太ももの感触とかがまだ鮮明に思い出せて……グハッ!!（ダラダラ……）」

F20C「自分で思い出して、セルフで自爆かよ……まあ、刺激が強すぎたかな……」

アインハルト「ううゝ……／／／／／ 恥ずかしいです……」

F20C「本格的に、後二、三年したら子持ちになってそうで怖い……」

閣下「あれ？ 俺たちの出番……は？ ずっとスタンバッテたんだけど……」

F20C「先週、調子に乗った分のペナルティだ。お前はもう少し自分の立場の低さというものを自覚しろ」

閣下「真主人公の俺が……orz」

F20C「主人公（笑）の間違いだろwww」

次回 第四十七話 文化祭で無理にテンション上げるのは愚の骨頂、
そっというのはオートで上がっていくもの

第四十七話 文化祭で無理にテンション上げるのは愚の骨頂、そついうのはオ

閣下語録その2

『カップの大きさが全てではない。どのように揉みしだくか、それが問題だ』

B y 閣下

今回のお話は、出来ればパソコンからご覧になられたほうが面白いかもしれません。

第四十七話 文化祭で無理にテンション上げるのは愚の骨頂、そついうのはオ

学園祭といえば、模擬店や演劇、少し堅苦しいが研究発表、または面倒なので何もせずに、学園祭を楽しむ側に回るなど、様々な楽しみ方・参加の仕方がある。

まあ、年を取ることにそういった催し物が面倒に感じるという方も多かれ少なかれ居るのではないだろうか。まあ、仕方がない。

課外授業として単位に含まれている学園祭の場合は、学校に来るだけ来て出席にしておこうというのも一つの手だろう。学校行事など、所詮はその程度のものでしかない。

しかし、出来ることなら、可能ならば楽しんで過ごしたいという方も居るだろう。何かに取り組むことで、それがいい経験になったり、思い出になったりする。青春の1ページなどというと青臭くもあるが。

そして、少なくとも。

エロティック皇帝率いる、一年三組は、どちらかと言えば後者に力テゴライズされるべき集団である。

これは、そんな彼らの学園祭での出し物を決めるためのサミット（ただのホームルーム）の時間のお話である。

「はい、というわけで。学園祭の出しモノを決めたいわけなんです
が……………」

教卓を使用して、今サミットの議長を務めるのは、この2学期から
学級委員に就任したティアナ・ランスター議長と、書記のリオス・
コーネルド（男の娘）である。

議題は単純明快、一ヶ月後に迫った学園祭の出し物を何にするか、
ただそれだけだ。

しかし、この一年三組、別名エロティック帝国軍の連中にとっては、
男女問わずに自身の欲望を発散させるためのいい企画を考えるべき
神聖なる議会であり、バカの集まりとも言える。

「ベタベタだけど、メイド喫茶！！！！ ミニスカでガーターベルト
着用義務化！！！！」

「ぶち殺されてえか、そこは英国様式メイドに決まってるだろうが
jk そこから従順な専属メイドに調ky……………」

「リオスくんのファッションショー（女装限定）がいいなあ」

「えゝ…そこは、ルークくん×リオスくんのBL作品演劇を……………」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！！ そこは、リオスくん×ルーク

くんに決まってるじゃない！！ リオスくんが攻め！ 普段とのギヤップがソソるのよ！！」

「聞き捨てならないわね！！ 攻めはルークくんで、彼の壮絶な攻めに遭ったリオスくんが、涙目で『酷いよ……ルーク……』／／／／／あ……でも……やめないで……何故か嬉しいって……そう思う自分がいるんだ……／／／／／」って言うセリフを……」

リオス&ルーク「ちよつと待つて……！！？ 後半の何人か……！！ 明らかにそれつてもう演劇っていうレベルじゃないよね！？ 軽く同人ゲームでR指定掛けなきゃ世に出回るようなものにならないよね……！！？」

お分かりいただけただろうか？

これが、一年三組という名の、一つの帝国の実態であり、真の姿でもある。

メイドにB L、攻めに受け……傍から聞けば、様々な誤解を受けること確実だ。

要するに、皆が皆、おバカなのだ。

「では、閣下？ 閣下には、何かいいアイデアがおりなのですか？」

「ふうむ………いいアイデアねえ………」

そして、ツッコミを入れたうちの一人として、エロティック帝国

軍の一人からアイデアに関して何か意見をと、求められてしまう。
先程のアイデア、少なくとも後半部分は実現させるべきではない。
この小説の存続に関わってしまう。

唸りながらも、ルークは少しの間考えを巡らせ、ポンと手を叩く。

「……………よし、野球をしよう……………チーム名は、リトルバスターズ……………」

「帰れ」

「ツマンネ」

「パクリ乙」

「代打バース」

「オスツ、俺斉藤ツス！」

「（．．．）」 ルーク

ルークの会心のボケは、帝国軍の皆々からの身が裂けそうなくらい冷たい言葉で切り捨てられた。

中には、気を使ったのか元ネタになったゲーム内でのネタを含ませてきた強者もいるが。

とにかく、閣下に対する信頼が、目に見えて低いと分かった瞬間だ

った。

「よ、よし分かった！！　だったら、コスプレしたお姉さんたちに
恥ずかしい事を出来る喫茶とか……」

男性陣一同「……閣下、一生ついて行きます！！」「……」

いや、ただ単に単純な野郎の集まりなのかもしれないが。主に男性
陣からの支持を得ることに成功したが、それでもやり口があざと
すぎる気がする。

「え、でもそれじゃあ、女性客がイマイチの反応じゃないかな？」

「大丈夫。そんなこともあるかと、女性客向けには、リオスを好
きな格好にコスプレさせているんな命令ができるというコーナーを
……」

女子一同「……みwなwぎwつwてwきwたw w w！！！！」「
……」

「ちよつと待てええええええええええ！！！！？　本人の了解得る前
に、何とんでもない企画通そうとしてるんだよ！！？」

閣下の英断（リオスを犠牲にした）により、女子からの支持も得る
ことができた。というか、さすが閣下、閣下汚い。

興奮気味に、やれ『フリフリのスカート』だとか、『執事さん』だとか、『小学生』だとか、リオスにとつてはよろしくない計画が女子の中で構成され始め、堪らずリオスは待ったをかける。

「じゃあ、『夏祭りでなのはさんの浴衣姿を独り占めしつ、（＊ハアハアしていた』リオスには何かいい案あるのか？」

エロティク帝国軍「「「「コーネルドを血祭りに上げるおお
おおおおお!!!」」」」

「ちょ！？ ルークなんてこと言つて……あ、ちよつと……そこはダメだつ………アッ……！！！」

「はあ……こりや、なかなか決められそうにないわね……」

眼の前で繰り広げられている力オスを前に、ティアナにはそう小さく呟くほか出来ることはなかった。

閑話休題

「二つ目の案は何かある？」

「ライブとか面白そうだな。あ、もちろん俺らが歌うつて感じじやなくて、外からアーティストさん呼ぶのもいいし。ほら、大学の

学園祭みたいにさ」

「まあ、予算は実行委員を脅s……もとい、交渉すればもらえるところ……」

ひと騒動が終わり、黒板にはルークの出した案、『コスプレ喫茶（……；；……）ハアハア』という文字が追加されており、一つのアイデアとして採用されていた。リオスは、何故か『僕は抜け駆けをしましたゴメンナサイ』という看板を首から下げながら書記の仕事を継続している。

「アーティスト呼ぶって……一体誰呼ぶのよ？　とうか、高校の文化祭の予算で呼べるもんなのかしら……？」

「大丈夫だって、これそういう堅苦しいこと気にしなくてもいい小説だから」

「メタ発言は控えなさい、作者に消されるわよ」

ティアナとルークのそんなバカなやりとりもそこそこに、帝国軍の皆々は呼ぶならこのアーティストだという議題で、フリーダムに語り始めていた。

無論、それが建設的な話し合いでないことは言うまでもないことだろう。

帝国軍A「アーティストで歌姫……………ゆかりん一択だろ」

B「ゆかり王国の住民か？ 川原で相の手の練習でもしてる。そこはあいなま（豊崎愛生さん）だろうが」

C「けいおん！ 厨は豊郷 学校に聖地巡礼にでも行ってる。あやひー（高垣彩陽さん）以外考えられん」

D「おいおい、喧嘩すんなよ。だったらもうスフィアでいいじゃん」

E「アホどもが……………ナンジヨルノ（南條愛乃さん）の他に適任が居るわけ無いだろうに」

F20C「イエス！ アスミス……………ほっちゃーん！ ほ、ほーっ、ホアアーツ！！ ホアーツ！！」

G「おい、誰だ！？ 今、阿澄佳奈さんとほっちゃんの二刀流で行こうとした奴！！？ 浮気はご法度だぞ！！」

H「よし、この流れに乗って新谷良子さんを推しまくってやんよ！！」

I「甘ちゃんは無黙ってな！！！！ 坂本真綾さんで完全武装した俺の前に敵はいねえ！！！！」

この声優談義、いやアーティストは誰にするかという話題だったはずなのだが、どうしてこうなった……………。

シレッと会話に入ってきている変なやつは置いておくとして、この

光景、以前にも見た事あると感じる方、その感覚は間違ってます。
そして、今回もまた。この状況を収集すべく、我らが閣下が立ち上
がるわけなのだが……

「アーティスト声優つつたら、奈々様以外に有り得ねえだろうが
！！ なのにお前らときたら……スレが立つぞ！！」

【マジ変態】うちの閣下がマジで変態過ぎる、なんとかしてくれ
主人公（笑）】

46 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：ks
was5

おい、また閣下がやらかしたぞ

47 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：nl
oD66

いつものことだろ。

つか、最近の閣下ってキレイがないよな

48 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：Di
ki788

<<47

スレタイ見てみる

主人公（笑）ってなってるだろ、つまりはそういうことだ

49 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：nl
OD66

<<48

なるほど、把握したww

50 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：yU
65LO

話は変わるが、先週の日曜日、閣下がフェイト先輩に半泣きになりながら土下座してた

51 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：H8

Ryu

kws k

52 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：Di

ki788

<<50

そこんとこkws k

53 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：SE

852h

うほっww なんかテンション上がったww

54 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：yU
65LO

なんでも、閣下が買ったエロ本のジャンルが姉萌え系じゃなかったとかで、フェイト先輩がひどくご立腹だった様子。

『買うなら、年上系の金髪お姉さんのにしない!!』って怒られ

てた。

5 5 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：D i
k i 7 8 8

閣下が悪いな。

5 6 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：S E
8 5 2 h

全面的に閣下の所為。

日本の食料自給率の低さと少子化対策が進まないのも閣下の所為。

5 7 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：G H
7 2 H n

なら、俺に彼女が出来ないのも閣下の所為だな。

閣下、許せん。

5 8 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：N B
m k 6

俺が、曲がり角でパンを啜えた女の子と鉢合わせしないのも、閣下
の仕業だったのか…

道理でおかしいと思ったぜ…

5 9 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：o p
8 1 0 2

< < 5 5 - 5 8

おwまwえwらw

6 0 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：H 8
R y u

閣下『俺は悪くねえ！俺は悪くねえ！！』

つか、<<59のIDWWW

61 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：SE
852h

親善大使ww つか、今気づいたが名前一緒じゃねーかwww

<<59

俺のコーラ返せwww 8102で『ばいおつ』とかwww

62 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：JK

658f

<<60

あつちのルークは、後半はマシになる。だがこっちは(ry

8102(ばいおつ)www 把握したwww

63 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：WS
fg56

つか、この小説の主人公って、ホムラ君だろjk

アイホム、可愛いよアイホム

64 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：SE

852h

<<63

禿同

あの初々しい感じと、不潔感のない二人には好感しか持てない

65 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：TY
8Sta

あの二人だけは、FFF団のブラックリストに載せないべき

つか、大人として暖かく見守ってやるうぜ、俺達の真・主人公をさ

……

66 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：JK

658f

<<65

やだ……カッコイイ……

お前になら掘られてもいい

67 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：BY

69L

スレチだが、アイホムなら仕方ないな

68 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：Bu

9DD

もう次回から、アインハルト×ホムラの夫婦生活を描く感じでよく
ね？

69 名前：名無しの変態さん：2011/9/10 ID：jk

089K

ちよつと作者に直談判してくる

「って、誰がマジでスレ立てろって言ったよ！！？ていうか、なんで俺とねーさんの事がバレてんだよ！！そこからの流れもおかしいし！！最後とか完全に俺フェードアウトしてるだろうが！！！」

「ていうか、ホムラくんって誰？」

「リオス、それ以上はやめときなさい。メタ過ぎる話題だから」

スレでの会話もそこに、漸く閣下がツッコミを入れることができた。この流れを放っておけば、今日の小説は、2ちゃんスレネタで終わってしまうところだった。

メタ発言をしそうになったリオスを制したティアナは、もはや呆れ顔だ。

「閣下……閣下は主人公という立ち位置ではなく、あくまで閣下。つまりはそういう事ですよ……」

「いやいや、意味分からんから。主人公俺だから!!」

「閣下……現実にも目をお向けください……読者様方の中にも、『もう、ホムラが主人公でいいんじゃないかな……』というお声も多ございます」

「どうでしょう？ 学園祭終了と同時に……隠居されては……」

「なんで人生までフェードアウトさせられなきゃならんだ!!
あと、読者様のお声とかメタすぎる発言やめろ!!」

「「「はあ……」」」

閣下と帝国軍の言い争いが続く中、一年三組の良心、ティアナとリオス、アイリスは、深い溜息をつくほか、どうすることも出来なかった。

結局、一年三組の出し物は、コスプレ喫茶（女子も楽しめるVer）になり、話が進められることになった。

リオスがこの世の終わりのような顔をしていたが、まあ、嫌よ嫌よも好きのうちということなので、特に気にしないでおう。

「ちょっとは気にしろおおおおおお！！！！！！」

一方、その頃のアイホムは……

「ホムラさん、今日は帰りにスーパーに寄って行きましょう。卵が安いそうだから」

「あ、うん。じゃあ、今日はオムライスでも作ろうか」

「はい。では、チキンライスの為の鶏肉も買わないといけませんね」

「あとはサラダでもあればいいかな……」

呑気に、今晚の夕飯の献立を一人で考えていた。

第四十七話 文化祭で無理にテンション上げるのは愚の骨頂、そっいうのはオ

F20C「おい、前書きまじで自重しろ」

閣下「こんど、語録をまとめた詩集でもだそうかしら」

F20C「自費出版で頼む。それと、その詩集が出た瞬間、この小説のメインはアイホムに自動シフトするから」

閣下「解せぬ……ていうか、小説内で2ちゃんスレ開くなよwww」

F20C「つくるのに苦労したぜ……携帯からご覧の読者様には、見難くなってしまうかもですが……」

閣下「その点だけがネックなんだよなあ……」

次回 第四十八話 学園祭準備／アイホム夫妻の場合／

アインハルト「私たちのクラスは何をするんでしょうか？」

ホムラ「確か……なんとか喫茶だったような……うん……」

アインハルト「い、嫌な予感しかしません……」

第四十八話 学園祭準備くアイホーム夫妻の場合く（前書き）

今期アニメ、第一話視聴感想

ぬら孫：つらら、可愛いよつらら。

バカテス：玲さんのようなお姉さんが欲しい

いつか天魔の黒ウサギ：……………つまり、どういつ事だっばよ……………？

第四十八話 学園祭準備／アイホム夫妻の場合／

「ぬこぬこ喫茶？」

学園祭を一ヶ月後に控えた、聖祥学園中等部の一年二組の教室にて、アインハルトとホムラの二人は友人であるアキラ・ミギワメから、学園祭におけるクラスの出し物について詳細を聞いていた。

というのも、喫茶店でも開こうかというはなしで固まっていたことにはいたのだが、少しインパクトに欠けるということで追加要素として『ぬこぬこ』というファクターを追加することになったらしい。

「うちのクラスって、基本的に男女の割合的に女子のほうが多いだろ？ だから、その利点を活かしてみたってことらしい」

「ウェイトレスさん役のアインハルト達に、ぬこぬこな要素が追加される……ってこと？」

「だな。具体的には、本来から採用されていたミニスカメイド服に、どこぞのアニメで見た気がする猫耳カチューシャ、公用語は猫語って感じにまで計画が魔改造されたいらしい」

「ホムラさん、私帰ってもいいでしょうか………？」

アキラからもたらされた、非常に興味深い（悪い意味で）情報に、アインハルトは顔を青くしながら、そう呟く。まあ、ぬこぬこ要素が追加されることで最も被害というかなんとかを被るのは、女の子であることは間違いないので無理は無いのだが……

「じゃが、女子の大半はこの案に賛成のようじゃぞ？ 『可愛い衣装が更に可愛くなった』 キヤハ」という具合にな」

アキラとアイホムの会話に、さらにもう一人が参入してくる。独特のお婆ちゃんぽい口調、腰くらいまで伸びた茶色っぽい髪に、頭のとっぺんに自己主張している一本のアホ毛が特徴的な女の子である、デイル・クインルーティ。

彼女もまた、アキラ同様、アイホムの特に親しい友人たちだ。

さてさて、新キャラということなので、軽く紹介をすませることにしよう。

まずはアキラ・ミギワメというこの少年だ。

容姿は整っているが、途轍もないイケメンというわけではない。しかし、フレンドリーなその性格から、クラスメイトからは非常に頼りにされている存在だ。

アンリミテッド・シュガー・ワークス

アイホムの無限の糖製に気がつかずに突っ込んでいくことがあるくらい空気が読めないところがあるが、その甲斐あってか現在では、アイホムとの親交は深い。

部活はしていないが、運動部からの助っ人を頼まれることが多く、

運動神経は良いようだ。

そして二人目。ディール・クインルーティ。

容姿は先ほど言ったとおり、腰まで伸びた茶色の髪と、頭上のアホ毛、お婆ちゃん口調が非常に特徴的な女の子。それに加えて、身長は145センチなのに対し、バストがなんと…………『D』。

俗にいう、『ロリ巨乳』という奴だ。さらに、その容姿に加えてS気があるとのことで、『そういった方面のマエストロ』達にとつてはまさに神的存在らしい。

事実、今現在も廊下から教室をのぞき込みながら、『ディール様（*、*、*）ハアハア』とか、『の、罵ってください嬢王様』とか、『もつと…もつと強く踏んでください…あふん！』とか言っている連中がいるくらいだ。

本当に、この学校が大丈夫なのか心配になってくる。

さて、簡易キャラ紹介はこの辺りにしておいて、お話を先に進めることにしよう。

「詳しくは、キャラ紹介の更新を待つのじゃ」

「俺たちと一緒に、アインハルトとホムラ達の紹介も載せるので、少々お待ちを」

アイホム「二人とも、明後日の方向に向かって話してる……………」
「」

閑話休題

メタ発言が終わったところで、話を元に戻そう。

「えっと、どこまで話したか……………ああ、そうそう。名探偵コナンのコナンさんの正体が、実は工藤新一だったっていう話だったわけ？」

「そんな話は一ミリたりともしてないよね！？　ていうか、そんなの今更話するようなことでもなくない？！」

「その通りじゃ、今回の話題は、コードギアスのゼロの正体が、実はルルーシュくんだったというものでじゃな……………」

「デイルさんも間違ってます！！　その話題もものすごく今更ですからね！！？」

アキラとデイルの軽いボケに、アイホムはそれぞれの確且つ、スピーディなツッコミを入れた。

桃色空間を展開している場合は、この配置が入れ替わることになるのだが、普段のアイホムは至って常識人なので、通常はツッコミ役なのだ。

「冗談だ。ま、そういう訳で今回の俺達の出し物の決め手は、女の子たちに掛かってるってわけだ」

「はあゝ…猫耳カチューシャですか……メイド服の時点でもかなり勇気をかなぐり捨てるつもりだったのですが………」

「よいではないか。アインハルトには猫キャラが良く合っておるからの。試しにやってみたらどうじゃ？ こつ……『にゃん』という感じで」

クラスメイトの数人「……デイル様のニャンニャンモードキタ（。。）ッ！」「……」

アキラの言葉にボヤいていたアインハルト。それを見たデイルがお手本に思っただけでやってみたニャンニャンモードだったのだが、それによって教室の一部が、一瞬お祭り騒ぎになった。

「こつですか？………『にゃ……にゃあ……？』」

「グフツ！！？」

クラスメイト達「……ニヤインハルトさん頂きましたー……
ー……！！！！（。。）〇ミ。ニャンコ！ニャンコ……」

それに続いて、アインハルトも猫キャラ化してみたのだが、如何せん恥らしいの心が強かった。しかし、男にはその恥らいと、猫化への戸惑い等萌ポイントが堪らないものだったようで、ホムラは吐血して机に突っ伏し、クラスメイトは教室が割れんばかりのテンションに吹き上がる。

「ふゝむ……これは、デイルとアインハルトのツートップで頂上取れるんじゃないだろうか……」

「ふっふっふ……何を言うか、頂上どころか世界を獲ることも容易いことよ……」

「あ、あの……学園祭のイベントなんですよね……？ それ以外で、恥ずかしい格好は嫌ですよ……」

アキラとデイルはうんうんと頷きながら、嫌な予感しかしなない話を進めているが、アインハルトとしてはあまり詳しく聞きたくはなかった。

と、机に突っ伏したまま動かないホムラが、漸く復活して……

「あ、アインハルト……？ その……あんまり……スカートとか短くすぎないようにね？ あと、恥ずかしかったらすぐに逃げてもいいからさ……」

「ホムラさん……。……もしかして、私のこと心配してくれてるんですか？」

「そ、そりゃ……まあ……アインハルトが猫っぽい格好して、メイドさんで、公用語が猫語になったら……とんでもなく可愛いし……それで変な奴に絡まれたりしたら大変だからさ」

許嫁のことが心配なのか、はたまたジェラシーなのか。ホムラは少しバツが悪そうにアインハルトにそう言った。

ホムラにとっては、それだけアインハルトが大事だということでもあり、アインハルトもホムラから『大事にされている』ということが伝わってくる。

「……大丈夫ですよ。私はそれなりに強いですから。ホムラさん以外には、どこも触らせたりはしませんよ／＼／＼／」

「さ、触るって……／＼／＼い、いやいや、まあ、うん……。ああ、でも本当に気をつけて？ 何かあったら、僕も厨房から助太刀するから（主に包丁とか投げつけて）」

「はい、お願いします。ホムラさんも、お料理しているときは手元に注意してくださいね。流血沙汰はダメですよ？」

気のせいだろうか、流血沙汰の被害者になると仮定されるのは、ホムラの指ではなく、アインハルトにちよっかいを出す野郎のような気がするの。

加えて、地味に桃色空間を発生させているアイホム。クラスメイトの半数が、少し胸焼けを覚えたのだが、誰ひとりとして倒れること

はなかった。

皆、常日頃からよく訓練されているのだろう。

「相変わらず、お前ら仲いいな」

「アキラよ……お主は相変わらずじゃのう……………」

「へ？」

「いや、妾の独り言じゃ……………」

そのアイホムの絶対桃色領域、アイホムフィールドを『仲が良い』の一言で済ませてしまえるアキラに、ディールはやれやれといった様子で呆れ返ってしまうのだった。

・
・
・
・

そんな感じで、お昼休みを適当にお喋りしながら過ごしていたアイホム達だったのだが、その平和な休み時間が、突如として物々しい雰囲気包まれることになる。

始まりは、教室に備え付けられている音響スピーカーから流れてきた、重々しいBGMだった。

BGM『インペリアルマーチ（スターウズ、ダース・ベダ

「卿のテーマ」』

「こ、このBGMは……………」

「あ…………生徒会長だね……………」

「いつも思っのじゃが、ソラの権力は一体どうなっておるのだ……………」
「？」

「気にしたら負けだって、最近思っようになりました……………」

そのBGMの意味を知っている、アキラ、ホムラ、ディール、アインハルトの四人は、突然のBGMにも驚くことはなく、いつものことだという様子である。

どうも、このBGMは無敵の生徒会長、ソラの登場BGMに指定されているらしい。登場の際のBGMを指定するところからして、ソラが如何に怖いもの知らずなのがよく分かる。

でもって、待つこと数秒…………ホムラ達、一年二組の教室のドアがゆっくり開かれた。

「生徒会長に…………敬礼……………」
（…………）
「……………」

バツ……！

(・・) ズビシイ！ クラス全員

開かれたドアから、生徒会長であるソラが現れた瞬間、その場にいたクラスメイトの全員（アイホームたちを除く）が一斉に、且つ乱れなく敬礼をした。

その統率された姿は、ある意味どこその大統領の帝国軍を彷彿とさせる。

小説のBGMすらも操り、自信の思うがままにしてしまう男、それがソラである。

「さつさと入りなさいよ、ウスノロ」

「へぶ!!?」

ガッシャーン!!

クラス全員「……………」

が、その無敵の生徒会長が、突然吹っ飛んだ後、教卓に顔を強打した。彼の背後にいた女性が、スラリとした綺麗な脚を以て、ソラを蹴り飛ばしたようだ。

綺麗な黒髪をツインテールにした、少し気の強そうな女性だ。加えて、このお嬢さん……………巨乳である。

「やいコラ！！ レーネ！！！！ 何してくれやがるんですかね！！
？ 俺の登場シーン台無しだよ！！！！」

「あら、ごめんなさい？ さっさと入らないし、ソラのお尻が蹴つて欲しそうだったから……」

蹴飛ばされたソラと、蹴飛ばした女性、レーネ。二人は教室の入口付近で、いきなり不毛な言い争いを開始し始める。

「そんな願望、ケツ通してお前に伝えようと思ったこと一回たりともねえよ！！ つーか、どっちかって言うとか、蹴るのは俺の仕事だ」

「いーえ、あなたのお尻や、口では言えないようなところを踏んづけて、ヒーヒー言わせるのは私の方よ！ そうね、今日から嬢王様とお呼びなさいな」

「笑止！ お前ごときの足技で、俺を昇天（性的な意味で）させられるとでも？ 俺は苛虐嗜好は持ってないんでね…… お前の方こそ、今日から俺のことは御主人様と呼べ！！ もしくは『お兄ちゃん』・『にーにー』・『お兄様』・『兄さん』でも可！！」

「……………にーにー」

「……………／／／／／ な、中々やるじゃないか……………危うくハートキャッチされるとこだったぜ……………」

年齢制限的に危ない話題で言い争う二人。途中から、内容が果てし

なくどうでもいいような話題に流れていつている気がするが、最早周囲の皆々には彼らを止めることは出来ない。

最終的に、口論はレーネの『にーにー』によって平和的に解決されることになったのだが……若干、レーネの『にーにー』にソラが萌えてしまったのは言うまでもない。

「もう……二人とも何してるの？ 下級生の皆、そろってポカーンつてしちゃってるじゃない……」

その様子を見て、レーネの後ろから現れたこれまた巨乳のお姉さん。蒼い髪がとても綺麗な副会長のエステルである。

エステルは、二人の寸劇に溜め息混じりでそう言つと、騒がせてしまった一年生たちに深々と頭を下げて過つた。何というか、その謝る体勢というか、姿勢にかなりの年季を感じてしまった一年生たちだった。恐らく、かなり昔から謝るの担当だったようだ。

「えつと……ソラさん……？ 何かご用でしょうか？」

「おお、ホムホムじゃないか、ちょうどいいところに」

「だから、そのホムホムって言うのやめてください！！ どこそこの魔法少女と被るんですから！！」

事態が一段落したようなので、ホムラがソラに要件を尋ねてみる。ソラのあだ名呼びにツツコミを入れるだけになってしまったように

も見えなくはないが。

「コゝラ！ 年下の子をイジメちゃダメだよ？ めっ！」

「エステル……流石に中三で『めっ！』はどうかと思う……」

「相変わらず、お子様なのね……体は大人なのに……」

「ほ、ほつといて！！／＼／＼／＼」

ホームラに味方しようとしたエステルだったが、ソラとレーネの白い目＋ちよつと可愛い物を見る目に、耐え切れなかったようで顔を真赤にしてしまう。

ソラとレーネ、そしてエステルの関係というか力関係がよく分かる図である。

「え、えつとね！？ 各クラスの学園祭に向けての出し物の進捗状況を見て回ってるだけなんだけどね？ ホーム……ホームラくん達はどうなのかなって」

「ああ、なるほど生徒会のお仕事なんですか……ていうか、今エステルさんもホームホームって言いかけましたよね？？」

「そ、ソナコトナイヨ……」

ソラたちがホームラ達の教室を訪れたのは、学園祭に向けての状況の

確認のためだったようだ。何だかんだ言っても、一応仕事はしつかりしているらしい。

ホムラの愛称が、彼らの中で『ホムホム』に固定化されつつあるという新事実も明らかになったのだが。

「僕達のクラスは、えっと……『ぬこぬこ喫茶』なるものをやるみたいです。メイドさんと猫を掛けあわせた企画ってことみたいで」

「そっか。食品関係の出し物をする場合は、いろいろ許可申請とか手続きとかが必要だから、出来るだけ早めに申請してね？ あと、機材とかも早めに言ってくれたら良いものを用意できると思うから」

「あ、はい。分かりました」

ホムラが先ほどアキラから聞いた話を説明すると、エステルはナルホドといったように頷いてから、生徒会としての注意事項を説明してくれた。彼女たちとしても、そういった準備は余裕を持って行いたいのだろう。

わざわざ足を運んで調べている辺り、今はまだ目に見えて忙しいというわけではなさそうだが。

「ふむ……ぬこぬこということとは、アインハルトとかデイルも猫メイドになるってことか？」

「無論じゃ。遊びに来てくれたのなら、色々とサービスしてやるんじゃないかのお？」

「さ、サービスって……わ、私はしませんからね？ ホムラさんへの夜のサービスなら……あ、今のはオフレコです」

ホムラ達の企画に興味を持ったソラ。ディールは冗談なのだろうが、流し目を使いながらソラを誘うような発言をする。

アインハルトは、若干アブナイ方向に思考が飛び過ぎているようで、彼女のメイドという職業に対する妙なイメージが見て取れた。

「だ、ダメ！！ ソラには私がサービスするからいいの！！」

「エステル、あなたじゃ役不足よ。あつちのサービスは私担当よ？ ま、まあ私の場合？ ソラがあまりにも私に踏んで欲しそうな顔してるから、仕方なくシテあげるだけなんだけど」

「し、仕方ないならやらないほうがいいんじゃないかな！！ わ、私は自分がしてあげたいからするんだもん……」

と、ディールのソラ誘惑に触発されたのか、エステルとレーネがいきなりピロートーク全開で張り合い始める。

二人とも、ソラの両側から彼の腕を取りながら、豊かな胸を押し付ける。

マシユマロのような、それでいて温かみのある物体がソラの二の腕でいて、フニャフニユと形を変える。

「おい、暑苦しいから抱きつくなんての……あと、乳を押し付けるな、揉みしだくぞ」

エステル&レーネ「どうぞ?」「」

「はい、スミマセン。俺が悪かったです、お願いですから胸を押し付けないでくださいませんか」

変態紳士として、ソラは二人を上手いこと引き剥がそうとしたようなのだが、二人の意外過ぎる『乳揉み許容発言』に、ソラの白旗を揚げるほかなかった。

というか、仕事に来たのかイチャつきに来たのか、はたまたラブコメに来たのか、目的をハッキリさせて欲しいと、一年生組は内心で叫んでいた。

「ホムラ? 妾もそれなりのサイズなんじゃが……?」

「な、なんでそれを僕に言うのさ!!?」

「……………ムウ……」

「あ……………おい、ホムラ……………アインハルトがお冠に……………」

目の前で繰り広げられている、巨乳お姉さん二人と変態紳士の寸劇を前に、引つ掻き回しに成功したディールは満足したのか、今度はホムラに対して、少し両手で胸を強調しながらそう言ってきた。

それを見たアインハルトが、嫉妬ハルトになったことを、アキラがホムラに伝えようとしたのだが……

「ほ、ホムラさん!!! やっぱり、お義父さまのお話に乗りましよう!!! もうこうなったら、今すぐ既成事実を作って!!!」

「い、いきなり何言い出すのさアインハルトはああああ!!!!!?」

「ももも、問答無用です!!! 冷蔵庫に入っていた精力剤、帰ったら全部飲み干してもらいますから!!! もう、今夜は寝かせませんからあああ!!!」

「うわああん!!! いつものアインハルトじゃない い

!!!。。(。、。)。。」

こうして、デイルのお陰? いや陰謀か。それによって、一年二組は二つのカオスを内包する魔空間に早変わりしていた。

ソラを取り合うエステルとレーネ、顔を真赤にしながら、ブルブルと小動物のように震えるホムラに迫っていくアインハルト。

本日も、世界は平和そのものである。

「で? これどうやって收拾つけるんだよ?」

「…………困ったの…………（――；）」

アキラとデイルは、冷や汗を流しながら事の成り行きを見守ることにしか出来なかった。

第四十八話 学園祭準備！アイホーム夫妻の場合（後書き）

F20C「というわけで、友情出演のディール様とアキラくんの登場回でした」

閣下「……………俺の出番が……………欠片もない……………だと……………」

F20C「最近、ちよつとキミ調子に乗ってるからね。読者様からもお叱りの声が出てるんだよ」

閣下「orz」

ホムラ「というか、前書き完全に作者さんの個人的なことだよね？！」

作者「いやいや、ほんとぬら孫二期は期待してるんだよ（ほっちゃん的な意味で）、バカテスは安定した面白さだったし。いつか天魔の黒ウサギはしばらく様子見だな。テレビの前で（。。。）ポカーンってなってたし」

ホムラ「は、はあ……………」

F20C「最後になりましたが、友情出演にご協力くださったKの2乗先生、天破先生、ならびに応募してくださった皆様、本当にありがとうございました！」

次回 第四十九話 サイズの小さい服＋ナイスバディ！！×××

フェイト「次回は私が頑張るよ！」

閣下「カメラ&BD録画の準備は万端整ってるがなにか？」

第四十九話 サイズの小さい服+ナイスバディ〃×××（前書き）

閣下語録

『服のサイズが小さくて、胸元とお尻が窮屈？ いや、それで合ってるんだ、どこも間違っていない』

b y 閣下

第四十九話 サイズの小さい服＋ナイスバディ〃×××

学園祭まで、後一週間と少しまで迫ったとある日。

いや、かなり日数が飛んだ気がするが気のせいである。偽エロティック帝国軍の侵攻と激闘とか、閣下が女子大生のお姉さんに逆ナンされたとかで、フェイトさんのきついお仕置きがあったりとか、まあそのくらいのイベントしかなかった。

そんな中……

「衣装合わせか……アインハルトとディールは分かるとして、なんで僕まで……」

「ホムラさんは厨房で使うエプロンなどを受け取るだけなのでは？人数分と言ってもたいした量ではないですから」

「妾達はサイズの確認もあるらしいからの。他の女子も時間が開いた順に足を運ぶ必要があるそうじゃ」

ホムラとアインハルト、ディールの三人組は、学園祭の出し物で使う衣装合わせ、受領のために家庭科室に向かっていた。

学園祭に使う衣装に関しては、手芸部やその系統の文化部が全面監修・制作しているらしく、自分達で作る必要がない。その代わりに、

こうやってサイズ合わせなどに足を運ぶ必要があるというわけだ。

手芸部の人間たちにとっては、この衣装作りが学園祭の出し物、そして宣伝に等しいらしく、かなり気合が入っているとか。

「はあ……ネコミミ×ミニスカメイドですか……未だに気分は乗りません……」

「まあまあ。妾も多少やり過ぎな気もするが、インパクトを出すためには必要なことじゃ。それに、ホムラも可愛い格好をしたアインハルトを見てみたいじゃろ？」

「そ、それは……まあ……たしかに見たいけど……」

「お二人とも、さっさと家庭科室に向かいましょう。ええ、もう今すぐダッシュで！」

アインハルト、実はものすごく単純なのではなかるうかと、ホムラはそう思わずにはいられなかった。

デイルはデイルで、計画通り！ みたいな表情を浮かべながら明後日の方向を向いている。黒いノートの切れ端とかを時計に仕込ませていそうで怖い。

「あ、ここだね、家庭科室」

「失礼するのじゃ」

と、とりとめのない話をしながら目的地を目指していた三人だったが、学校の面積の広い聖祥学園と言っても家庭科室まで何キロもあるわけではない。

ものの数分で、家庭科室に到着し、ディールが呑気な挨拶をしながらそのドアを開けた。

そして、家庭科室の中では……

「お願いルークくん、リオスくん！！！！ そのベッドの上で、手を絡め合いながら見つめ合ってくれるだけでいいの！！」

「ルークくんが上で、リオスくんが下でね」

「何言ってるのよ！？ リオスくんが上に決まってるでしょ？！」

「あ、出来ればシャツのボタンは上3つを開けてもらえると嬉しいな……………」

リオス&ルーク「出来るかあああああああ！！！！！！」

ピシャン！！

三人「……………」

家庭科室のドアを開けたつもりだったのだが、どうやら部屋を間違えてしまっていたらしい。異次元空間への扉を開いてしまったようだ。

三人は無言で三步後ろに下がって、教室の名前が記されている無骨なプレートに視線を向けてみる。何はともかく、まずは落ち着いて状況把握に務めるのが吉だろう。

『家庭科室』

三人「……合ってる……」

がしかし、思いも虚しく、プレートには『家庭科室』という四文字が刻まれていた。にわかには信じがたい話だが、『（；、）ハアハア』と息の荒い女の子数人に、男二人が壁際まで追い込まれてBレチックなりクエストを受けているという意味不明な光景が広がっているこの教室が、家庭科室らしい。

ガラ……

今度は、思い切ってホームラがドアを開けてみた。さっきのは何かの見間違いかもしれない。きっとそうだと……そう思わなければ、この扉を開けて部屋の中に入るのを全力で拒否したくなりそうだった。

「ルーク……このお揃いのトランクスを……履いて欲しいんだ……」

「リオス……」

女子一同「「「ユニバアアアアアアス!!!!!!!!!!!!」」」

ピシャンー!!

またしても、扉の向こうには異次元空間が広がっていた。何度見直しても、入口付近に付いているプレートには『家庭科室』と書いている。

何故か、その四文字がホムラ達には血の色で書いてあるように見えてしまっただけだった。

「え……？ なんなのこれ……？ この、どうあがいても絶望、みたいな感じ……」

「か、家庭科室……もしかすると二つあるのかもしれないよ？ 学校の中を隈無く探すというのはどうでしょうか？」

ホムラとアインハルトの二人は、現実逃避しながら家庭科室の入り口から後退りしていく。というか、今部屋の中でB.Lチックな感じにさせられていた二人、片方は姉とイケナイ関係になっていたルークとか言う先輩ではないか。

それに、もう一人に至っては、登校中に栗色の髪の先輩と桃色空間を発生させて、多数の被害者を生み出していた人だった。

もう、今すぐここから逃げたい。帰って、二人で仲良くマリオパーティでもしたい、スマブラしたいとか思ってしまう。

「待つんじゃないお主ら。家庭科室は残念ながらここだけじゃ、ほれ、生徒手帳の地図にもかいていかしつはここしかないと書いてある」

「……………」

が、現実逃避していた二人を、冷静なディールが引き戻す。彼女の手には、聖祥学園の生徒手帳が広げられており、そのページ内に記されている学園の見取り図には、たしかに家庭科室が一つしか無いことが明確に記されている。

「覚悟を決めて逝くしかあるまいて……………」

「あれ？ 今、『行く』の変換おかしくなかった？ 誤字だよな？
これ誤字だよな？ 誤字って言ってよバーニイ！！！」

「ほ、ホムラさんが混乱のあまり訳の分からないネタを……………？」

三人の目の前に門を構えている家庭科室。ただ単に衣装合わせ、受領のためにやって来たわけなのだが……………まさかここまで手間取るとは思っても見なかったし、家庭科室の扉が魔界村への入口になっ

ているなどとは思ってもよらなかった。

しかし、ここでいつまでもウジウジしている訳にもいかない。こんなところに立ち止まっていれば、交通の邪魔にも……

「?? あれ? 君たちは……」

「あれ? フェイトちゃん、お知り合い?」

アイホム「……あ………」

そんな時、背後から鈴を鳴らしたような可愛らしい声が二つ。一人は、金髪にナイスバディ、ポワポワした印象が強いお姉さん。そしてもう一人が、栗色の髪をサイドポニーにしたカワイイ系のお姉さん。

フェイト・ハラオウン先輩と、高町なのは先輩が、三人の背後に立っていたのだ。

「……ほんと……」に、ゴメンナサイ!!!!」

家庭科室の室内。そのど真ん中の床にて、リオス、なのは、フェイ

トが何故か土下座していた。ルークも渋々といった様子で、フェイトに土下座させられていた。

ちなみに、手芸部の皆様は先程のリオスとルークの絡み映像をB
D録画していたらしく、その鑑賞会を始めてしまい、未だに（；
。）ハアハアしていらっしゃる。

「あゝ、えっと……お気になさらず。どっちの件も、昔のことです
し……実害があつたわけでもないの……」

土下座する四人の前には、アインハルトとホムラの姿が。
何故、彼らが下級生に対して土下座などしているのかといえば、答
えは簡単だ。

「ホントにごめんね？ 初めて会ったとき、ルークが怖がらせちゃ
って……根は悪い子じゃないんだけど……」

「フヒヒww サーセンww 『ちゃんと謝る!!』 スンマセン
……」

「私とリオス君も……まさかそんな被害を出しちゃってたな
んて思いもよらなくって……」

「お恥ずかしい限りです……」

フェイトとルークに関しては、アイホムが彼らと初めて会ったとき、
ルークがいきなり閣下化したことにより、怖がらせてしまった件に

ついて。

なのはとリオスは、登校中に砂糖精製空間を展開させ、二人に（と
いうか多数の生徒）に甚大な精神的ダメージを負わせてしまった件
について。

それぞれのこととて、二人に迷惑を掛けたということとて、こうして謝
っているという訳だ。

「ちょっとビックリしただけで、他には特に何もなかったわけす
し……高町先輩達も、仲が良いは喜ばしいことですよ」

「そ、そうかな……えへへ……」

「なのはさん！ 顔、緩んでますから！ へニヤってなってます！」

が、アインハルトが言うように、驚きはしたもののそれだけだ。な
のはとリオスに関しても、その日の夕食がオールゴーヤ料理になっ
ただけで、ある意味新鮮な夕食になってよかったと思えばいい。
何事も、前向きに考えれば多少は気が楽になるものだ。

「で、先輩方も家庭科室に衣装を取りに来られたんですか？」

「そうだ。俺達もコスプレ喫茶なるものをするんだ」

「私となのはも、暇な時間にお手伝いすることになってるんだ」

さて、謝罪タイムもそこそこに。ホームラはルークに、ここに来ていた目的を尋ねてみる。

話を聞く限り、彼らもホームラたちと似たような事をするらしく、家庭科室には衣装を取りに來ただけらしい。

リオスとルークのセットで來たのが、全ての間違いだったようだ。

「??　なのは先輩もフェイト先輩も、ルーク先輩たちとは学年が違うのではないのか？手伝うとはどういう……？」

「ああ、うん。私とフェイトちゃんのクラスは体育館でのライブが出し物なんだ。だから、出番が来るまでは暇なんだよね。だから、開いた時間はリオスくんのクラスのお手伝いでもしようかなって」

なのはとフェイトが、下級生の出し物を手伝うことに疑問を持ったデイルが、その件を尋ねてみると、なのはが答えてくれた。

彼女の言うとおり、体育館での出し物は演劇かライブとなっており、なのは達のクラスはライブを出しものにするに決定していた。

が、他のクラスとの順番などもあるので、延々と体育館が使えるわけでもない。ライブが始まるまでは暇だし、ライブが終わってしまった後も時間的に暇になってしまうのだ。

学園祭を回る時間も取るつもりだが、ルークたちも出し物がある。時間が合わないことも出てくるのなら、いつそのこと彼らの喫茶店を手伝えばいいという大胆な発想だ。

まあ、ルークたちのクラス（主にエロティック帝国軍の士官たち）は発狂する勢いで喜んでいたが。

「それで、私たちの分の衣装を頼んで……」

「試着も兼ねて、家庭科室にお邪魔させてもらったというわけ」

「「「なるほど……」」」

なのはとフェイトの説明に、納得した三人。まあ、コスプレ喫茶もネコミミメイド喫茶も、着るものが違うだけで、サービス内容に対して差はない。

どれだけ、衣装という視覚的な娯楽、萌えを提供できるかどうかが肝心になってくる。

「あ、あそこにあるのがそうじゃないかな？　なのは、試しに着てみようよ」

「うん　あそこに着替えるスペースもあるし」

と、フェイトが紙袋に入った衣装の山を見つけたので、なのはを誘って試着してみようということになる。どの衣装が自分達のものなのかはよく分からないが、手芸部の皆様は、未だにテレビの前で（；。）。＝3ハアハアしていらっしゃるので、使い物にならない。

「アインハルト、妾たちのものも向こうで見つけた。試着してみようではないか」

「あ、はい……うう…恥ずかしいです……」

アインハルト達のクラスで使う分は、中等部の配布分の方にしっかりと分けられていたので、ディールがそれを見つけて持ってきてくれた。

アインハルトは、紙袋を受け取りながらも少し気恥ずかしそうに、衣装の入った袋を見つめている。

「じゃあ、私たちが着替えてくるね？」

「覗いちゃだめだからね？」

「駄目だぞ？ リオス？」

「なんで僕！！？ 今フェイトさん、明らかにルークの方見ながら言ってたよね??！」

なのは、フェイトはルークとリオスにそう言って、試着室に入っただけでいってしまう。まあ、流石のルークもこんなところで堂々と覗きをしたりはしないだろう。というか、彼はそういった方向の趣味は無いようで、どちらかと言えば恥ずかしがりながらも、自分の方から脱いでいてくれるシチュエーションの方が好ましい。（激しくどうでもいい）

「ふふふ……ホムラよ…妾たちの萌え萌えな姿に、今夜は悶々とし

た夜を過ごすが良いわ……おっと、性欲の捌け口には使ってくれ
なよ？」

「ほ、ホムラさんはそんなことにはなりませんし！！ その場合は
私がちゃんと処理してあげますから大丈夫です！！」

「ああああ、アインハルトはなんてこと言ってるのさ！！？」

中一組も、なにやらヤラシイ単語が飛び出しているが、フェイト
達と同じように試着室に入っていた。

アインハルトの言うところの『処理』の内容が非常に、ひじょーに
！！ 気になるころではあるが、それはノクターンが、薄い本で
保管していただきたい。

「「「……………」」」

女の子組が着替えている間、男達は少し居心地の悪いというか、ソ
ワソワした様子で時間が過ぎるのを待つしかなかったのだった。

そして、数分後……………

「ど、どうですか……………」

「これぞ、妾の真の姿……………ネコネコメイドフォルムじゃ……………ムラムラするじやろ？」

「……すんばらしい……………」

まずは、アインハルトとディールのネコネコメイド二人組が着替えを終えて試着室から出てきた。

スカートは太もが見えるか見えないかの丈で、黒のソックスが絶対領域を形成している。フリフリな上着は言わずもがな、アインハルトとディールの頭には猫耳が装備されている。

ディールに関して言えば、注目すべきはやはり胸。少し胸元が開いた作りになっており、彼女のけしからん胸がグランドキャニオンさながらの谷間を構築している。

それに対して、アインハルト。スタイル的な勝負ではディールに及ばないものの、彼女の清楚な雰囲気と、綺麗な脚、繊細なガラス陶器を思わせるような綺麗な肌。

メイドとしての奉仕の心を体現しているかのような、完璧なメイド象がそこにはあった。

「ほれ、アインハルト。例のアレ、いくぞい？」

「ほ、本当にやるんですかあ……………」

「「「???」」」

素晴らしいメイド姿になりつつも、ディールはまだ何かを隠し玉として残しているようで、アインハルトを急かす。

ホムラ達が首を傾げていると、アインハルトとディールの二人は…

……

「「萌え萌え〜キュン?」」

「グハツ!!!!」

リオス&ルーク「「ほ、ホムホーーーーム!!!!?」」

いきなりの萌え萌えキュン? 攻撃に、ホムラは一気にライフポイントを削られ、見事なワンターンキルとなった。

鼻血を吹き出しながらも、何かをやり遂げたような表情を浮かべながら、スローモーションで床に倒れ伏してしまった。

「ほ、ホムラさん!!!?」

「むう… ちと刺激が強すぎたかの……?」

アインハルトは急いでホムラを抱き起こし、自分膝の上にホムラの頭を乗せてやる。が、ホムラは完全に意識を失っているようで、この世の全ての幸せを掴んだ上で力尽きたような表情で気絶していた。

「いや、今のは俺達も危なかった……………ネコミミメイド、これほどの性能だとは……………」

「ちょっと待ってよルーク……………まだフェイトさんとなのはさんが残ってるんだよ？ 僕達のライフがこのままじゃマツハだってば……………」

アインハルトとデイルの二人の攻撃でも、ハッキリ言って戦略ミサイル級の威力だった。しかし、ここからさらになのはとフェイトの二人がコスプレして現れるのだ……………ハッキリ言って、生き残れる気がしない。

いっそのこと、ホムラと同時に気を失っていたほうが幸せだったのかもしれない。

「リオスくん、ルークくん！！ 着替え終わったから、まずは私から行くね〜」

と、そんなもしものことを考えている間に、なのはの方の着替えが終わったらしく、試着室から声が飛んできた。

リオスにとっては、ある意味死刑宣告にも等しい（嬉しいことには変わりないが）。

「リオス……………骨は拾ってやる」

「ルーク……………向こうについたら、また友達になろう……………」

「勿論だとも、相棒」

ルークとリオスは、がっちりと握手を交わすと、なのはの出てくるであろう試着室に視線を送る。

本来なら、逃げてても罪ではない。しかし、彼らにはそうすることが出来ない理由があった。

『漢なら、女の子のかわいい姿から逃げるべからず』

エロティック帝国軍における軍規、第12条である。この鉄の掟故、彼らは逃げる事が出来ないのだ。

加えて、何よりも……見てみたいという気持ちが大きかった。

「ど、どうかな………?」

「んな!!?」

「こ、これは………?!」

そして、試着室のブラインドを開け、中から出てきたなのは。リオスとルークは、絶句してしまう。

なのはのコスプレは、一言で言えば和服。和服なのだが、少し特殊なものだった。真っ黒の和服……つまりは、喪服だったのだ。

「ふむ……衣装が入っておった袋には『男の温もりに飢えた未亡人』と書いてあるの」

「ゴハッ！！？」

「り、リオーーーーース！！！！」

デイルが、なのはの衣装、喪服が入っていた袋になにやらタグが付いていたので、それを読み上げると、衣装の詳しい設定が書いてあった。

その設定を読み上げた瞬間、目の前の喪服姿でありながら、妖艶さを出しているなのはの姿と少しやらしい設定が、彼の頭の中で化学反応を起こしたらしく、リオスもまたホムラの後を追って地面に倒れ伏した。

「設定萌えで倒れるとは……くっ！ 軟弱者が……！！」

「り、リオスくん？？！ 大丈夫？？」

なのはも、アインハルト同様にリオスの亡骸（死んでない）を抱き起こし、膝枕状態で介抱してやる。

リオスもまた、何かをやり遂げたような表情を浮かべて昇天してしまっていた。

喪服という一見味気ない服に、なのはというコア。そこに『未亡人』という設定を組み込んだ結果が、今のリオスの亡骸（死んでないが）だ。設定萌え、これもなかなかどうしてバカに出来ない。

「ルーク？　なんだかさつきから人が倒れるような音が聞こえるんだけど、大丈夫？　私も着替え終わったから、そっち行くね」

そこに響き渡る、ルーク終了のお知らせ。

フェイトが、着替え終わったのだ。恐らく、ルークを精神的に殺しにくるレベルの衣装を身に纏って……

「リオス……　ホムホム……　お前たちだけで逝かせはせんぞー！」

漢・ルーク。最近はずっかり変態というレッテルを貼られ慣れてしまつて久しいこの男。

しかし、今日の彼は一味違う。いや、軸は全くブレていないが……

倒れていった同志に後輩。彼らだけを逝かせておいて自分は助かるなど、今の彼には出来なかった。

「えと……　ルーク……　どう？　似合つてるかな……？」

「……………」

試着室から出てきたフェイト。その姿を見た瞬間、ルークの脳裏にはこれまで生きてきた人生の記憶が流れていったという。

走馬灯が見えるくらいの攻撃力を兼ね備えたフェイトのコスプレ、

その正体は……

「く、くノー……だと……？」

そう、忍者の女性Ver、くノーだった。太ももを大胆に見せてくる超ミニスカート。その美脚を覆う、黒のソックス。胸元を大きく開いた和風な意匠の上着に、網目が特徴的なインナー。ポニーテールにされた金色の髪。

色気という色気を凝縮した、ある種の完成型がそこにはあった。

「何々……？ 設定は……『敵の城に忍び込んだが捕まってしまい、情報を吐かせるためにお仕置き（エッチな）をされる寸前のくノー』

」

「く……！！ ま、まだだ……！！ やられはせん……！！ やらせはせんぞ……！！」

デイルが、設定を読み上げるが、ルークはその攻撃を根性だけで耐え抜く。お仕置きという時点で、既にルークのストライクゾーンと真ん中なシチュエーションなのだが、そう簡単に倒れるわけにはいかなかった。

「あう……この衣装……ちょっとサイズが小さいかも…… / / 胸が窮屈で……擦れちゃう……」

「ゴフツ!!?」

しかし、ルークの忍耐力もそこまでだった。最後の最後で、フェイトの恥ずかしそうにもじもじしながら呟いた言葉が、彼の残り少なかったライフポイントを吹き飛ばした。

彼女の言うように、このくノ一の衣装、少しサイズが小さかったのだ。フェイト並にスタイルが良すぎると、こう………サイズの小ささが新たに生み出すエロさというものが見えてくる。

ムチムチ感というか……何というか……。少しパツツンパツツンになってしまっている胸に、ムチツとした綺麗なお尻。腰の縊れもその存在感を大いに自己主張している。

想像してみてください。堪らんでしょう？

「我生涯に、一片の悔いなし………!!」

パターン!!

「る、ルーク!!?」

そんなエロエロなフェイトの姿を目の当たりにし、ルークはどこぞの世紀末覇者のようなセリフを残し、死兆星を指さしながら（今はお昼だが）、ゆっくりと瞼を閉じながら地面に倒れていった。

そして、前二人と同じように、ルークもまたフェイトの柔らかい太

ももに頭を乗せられ、膝枕状態に移行。

こうして、家庭科室には血塗れ（鼻血）になった男三人と、その三人を解放するコスプレ姿美女三人という、謎しか残らない光景が広がることになった。

「ホムラさーん？ 目を開けてください？」

ペチペチ……

「う、うう………」

「リオスくん……？ 大丈夫……？」

ツンツン……

「あ、ぐう………」

「ルーク？ 生きてる……？」

プニプニ……

「う………お、おっぱい………」

頬をペチペチ叩いても、おでこをツンツンつついてみても、ほっぺたを両側からプニプニしても、ルークたちはなかなか目を覚まさなかった。

結局、この日。ルーク・リオス・ホムラの三人は、夕方まで目を覚
ます事無く、気絶してしまっていた。

第四十九話 サイズの小さい服＋ナイスバディ〃×××（後書き）

F20C「さすがはフェイトさん、少し小さいサイズのくノ一衣装でルークをノックアウトしてしまうとは……」

フェイト「でも、実際かなり窮屈だったよ……でも、ルークは喜んでくれたみたいだったしw」

アインハルト「ううゝ……メイド服のスカートが意外と短かったです……恥ずかしい／＼」

F20C「大丈夫だって、ホムホムはキミの絶対領域に釘付けだからして」

F20C「さてさて、次回からは学園祭が開始されます。学園祭の出し物成功のために奔走するホムホムや、リア充になってしまうのか、リオス？なお話、学園祭には付き物？他校生との乱闘を一人で取り仕切る（制圧する）生徒会長……閣下は……まあいいや」

閣下「おいしいiiiiiiiiiiii 俺の出番がないとかどういふ事さ！！？ 一応主人公だよ俺??」

F20C「主人公（堕）だろ？」

閣下「堕ちてなーーーーーい!!!!!!」

F20C「まあ、キミにもそれなりの出番は用意するから……仕方無しに」

閣下「なんなんだろ、この気を使われた感は……」

次回 第五十話 学園祭開始〜ホムホム達の喫茶店奮闘記〜

第五十話 学園祭開始！ホムホム達の喫茶店奮闘記！（前書き）

～前回のあらすじ～

閣下がフエイトさんでハアハアしてた。

リオスがなのはさんに萌え殺された。

ホムホムが親友を死から救うため、魔法少女になって幾度もの時間逆行を繰り返し始めた。

閣下がカイザベルトで変身して灰になった。

第五十話 学園祭開始〜ホムホム達の喫茶店奮闘記〜

喫茶店。

それは時に、仕事前或いは仕事の合間に挟む、安らぎの一時を過ごす場であったり、メイド服着たお姉さん達とジャンケンしたりする場所であったり、ドラマではダメ男が女の人に水をぶっかけられたりする場所である。

聖祥学園中高合同学園祭、その出し物の中の一つである中等部一年二組の『ぬこぬこ喫茶』なるものは、どれかといえば二番目に当てはまるような種類の喫茶店だった。

女の子たち「「「おかえりニヤさいませ、ご主人様「「「（ニヤー）

と、そんな掛け声と同時に客は萌えと癒しを求めて、この喫茶店にやって来る。最近では、女性客でもこう行つた種類の店に入ること珍しくないようで、チラホラと男性客に混じって女性客の姿も見える。

「いらつしゃいませ、ご注文はお決まりですかニヤ??」

「お待たせいたしました、こちらニヤンコ飯風リゾット（ご飯に

みそ汁ぶっ込んだやつにかなり手を加えた感じ」になりますニヤ

「

メニュー数こそ、学園祭という事なので数は限られてしまいが、飲み物も合わせれば10種類近く用意出来たのだから十分合格点だろう。

的を広く狙いすぎると、どうしても食材の余りなどが生まれてしまう。こんなご時世、少しでも無駄を減らす努力はするべきだ。

さてさて、上記のとおり中々の客入りのぬこぬこ喫茶なわけなのだが、その人気の秘訣は大きく分けて二つだろう。

まず一つ目に来るのは、接客をしている女の子たち。ミニスカメイドに猫耳を掛けあわせたハイブリットメイドとして、せっせと動き回っている彼女たちのレベルの高さだ。

その中でも、人気を二分するのがこの二人。

「お、お帰りなさいませ……ご主人様…… / / / / にゃ、ニャア
……」

「かか、可愛い…… / / / /」

「ああ……恥ずかしいのを我慢して必死にメイドになりきろうとしているところがなんと……!!」

「それでいて、顔は赤くしながらも、短いスカートが気になって、裾を手で押さえてモジモジしてしまうとは……地上で天使を見る

ことが出来たな……………」

まず一人目。恥ずかしがり屋な真面目少女、アインハルト・ストラトス。

未だにメイド服と猫っぽい口調に慣れないようで、顔を赤くしながらモジモジと、動作も少し緊張気味で見えていて助けてあげたくなる気持ちに駆られてしまう。

しかも、これは狙ってやっているわけではなく、素でこの状態なのだから、そういった趣向が好きな客からの人気は最高潮、最高値を更新し続けている。

「あ、あの…！ 良かったら、もう一回『ニヤア』ってやってもらえませんか！？ 出来れば、ポーズありで！」

「え、えっと……………こうですか？ ……………にや、ニヤア……………（両手を前にしながら、猫っぽい仕草を交えながら）」

男性客達「……………テンション上ってキタ

（。。。）

！……………」

お客からのお願いも、恥ずかしさは拭えないながらも、一生懸命こなそうとするその姿、そして猫っぽい仕草とセリフ。

こうして、アインハルトはまた数十人の男とその虜にし、落とした訳だ。

アインハルト、恐ろしい子…！

そんな彼女と、人気を二分している存在。彼女とはまた違ったジャンル、方向性、サービスを以て、何人もの客を落としているのが……

「ほれ、このスープを飲みたくば、その三角木馬椅子の上でオネダリすることじゃの」

「お願いします、デイル様！！ この卑しい豚めに、デイル様の施しのスープを！！」

「もつと激しく、人格を否定するほどに罵ってください、デイル様！！ 三角木馬だけではまだ足りません！！ 今日のために、SMクラブ通いを一週間我慢してきてるんです！！（＊、）ハアハア」

「先程から、三十分以上放置されたままなのですが……ハアハア……、ああでもこれはこれで、少しイイかもしれない……（……；；；；；）ハアハア」

姿形は、他の女の子同様にネコミミメイドなデイル。

がしかし、そのサービスの方向性や、彼女を崇拜するお客たちは、明らかに何処かで道を踏み外してしまっただけと言えない。

まあ、人の趣味は十人十色なわけで、そこに深く突っ込むことはないが。

「デイルちゃん！！ 三角木馬の数が足りないんだけど！！」

「こちらの『女王様による三角木馬攻めフルコース』ご希望のお客

様はどうするの？」

「ふむ……そやつらは空気椅子じゃ。ほれ、そこに並ぶがいい」

変態ども「「「デイル様に命令されるだけで……しかも空気椅子などという理不尽極まりない命令……ムッハー　　！……みWなWぎWってWきWたW……！！」」」

果たして、喫茶店とはなんなのか？　このぬこぬこ喫茶に来れば従来の喫茶店に対する認識が180度変わることに間違いなしである。

萌えと奉仕のアインハルト、嬢王様プレイと攻めのデイル様。

内容の差と、客の趣味の濃さは様々ではあるが、ぬこぬこ喫茶の売れ行きは、目が回るほど忙しいことに比例して、右肩上がりである。

さてさて、ここで厨房を覗いてみることにしよう。

いくらメイド（約一名女王様）の質が完璧でも、食べ物がまずければお話にならない。

食事の完成度の高さ、それもまたぬこぬこ喫茶繁盛に一役買っているのだ。

その食事を調理する厨房、アインハルト達とはまた違った意味での戦場を取り仕切るのは、勿論この人。

タタタタタタッ……！！

「おお……」

「ホムラ、包丁使うのめっちゃめっちゃうまいな……………」

「ていうか、俺達アシスタントばっかしてるけどいいのかな…………？」

食材や調理道具などをセツセと運ぶ男子たち。女の子たちが接客に集中するということで、必然的に調理は男子の仕事として回されたわけなのだが、如何せん料理に通ずる男というのは中々見つからないわけで、最初はどうかと思っただが。

「アキラ、そっちのオムライスは？」

「おゝ、あと三分で完成つてとこだ。お前のリゾットとサラダは？」

「サラダを完成……………させたところ！ はいこれ、四番テーブルさんで」

「はい」

救世主というものは、それなりに人を見捨てないようで。困り果てていたクラス内に、二人の頼りになる男を追っていてくれた。

物凄いスピードで包丁を扱い、明らかに刃物類の扱いに慣れている感じのするホムラ。フライパンを自在に操り、オムライスのチキンライスを製作中のアキラ・ミギワメ。

そう、なんとこの二人、料理上手なのだ。

サラダをリゾットを完成させ、クラスメイトのネコミミメイドな女の子にそれを手渡すホムラは、その後すぐに次の料理に取り掛かり、あれよあれよと美味しそうな物を作っていつてしまう。アキラも、ホムラ以上に台所慣れしている動きで、料理を大量生産してくれていた。

「オムライス二つ、上がったよ」

「こっちのハニートーストも」

ホムラは、アインハルトとの同棲生活を始める以前から、度々台所に立つこともあり、同棲生活開始からはアインハルトと一緒に食事を用意しているため、料理自体は苦ではないとのこと。アキラもアキラで、家の人が帰ってくるのが遅いとかで、料理の用意は彼がしているのだとか。

そんな頼れる二人の存在が、このぬこぬこ喫茶の食事の質をレベルの高いものに昇華しているのだ。

「というかこいつら……………」

「ああ……………」

そして、他の男子たちは基本的に彼らのアシスタント。まあ、簡単な作業などを任せている部分もあるが、それでも一部だ。アシスタントの男子全員は、二人の方を見て頷きながらこう言った。

「『『『この二人……………主夫だ！！！』』』」

「いや、普通に学生だし……………」

アキラの冷静な返しに、アシスタント達のボケはキャンセルされた。まあ、それだけ忙しいということで、模擬店の成果としては申し分ないものがある。

そうしている間にも、アキラとホムラの手はせっせと動きまわり、調理を進めていく。

「いやでもホント……………ホムラちゃんとアキラくんっていつでもお嫁に行けるレベルだよな〜」

「ホントホント　　いや〜、我が家に是非とも来ていただきたい」

ホムラとアキラの主夫っぷりは、メイドをしている女の子たちにも好評というか、受けが良い。料理ができる男、というのはそれなりのステータスになると世間ではよく言われるが、あながち間違っていないものだ。

「いやいや、僕ら男だからね?!　嫁っていうか婿だよな?」

「じゃあ、じゃあ!　婿に来てよ〜」

「???!」

クラスメイトとの他愛ない話を楽しみながらも調理を進めていくホムラ。学園祭ということで、クラスでの仲間意識が重要視される中、ホムラ達のクラスはその点では非常に良いクラスと言えるだろう。しかしながら、女の子との他愛ない話の中身。自分の性別を考えれば、婿という言葉が妥当なのはホムラの考えているとおりなのだが、メイドのクラスメイトとのそのやり取りを、やはり見過ごせないお方がいるわけで。

「ムウ………（#・・）」

「おい、なんかアインハルトがこっち睨んでるぞ……?」

「う………」

その女生徒からすれば、完全に冗談のつもりだったのだろうが、アインハルトとしてはまあ……面白くはないだろう。

一応、将来的に嫁、または婿になる相手が他の相手と仲良くしていれば、心の中はモヤモヤしてしまう。

しばらくこちらを睨んでいたアインハルトだったが、少ししてから意を決したようにこちらにツカツカと歩み寄ってきた。そして、顔を真っ赤にしながら……

「ほ、ホムラさんは、私の嫁になるんです!!」

「だから僕は男なんだってば!!!」

モヤモヤしすぎて、婿と嫁の関係を逆転させたまま、そんなことを口走ってしまうアインハルトさんであった。

厨房内でなく、ホールでこの発言がなされた場合、恐らくホムラの命はなかったであろう。

開店から二時間後

「なあ……これ……ヤバくね？」

「やばいのお……」

「ヤバイですね……」

「困ったな……」

順調すぎるほどに売上を伸ばしてきていたぬこぬこ喫茶に、若干の緊張が走っていた。

アキラ、デイル、アインハルト、ホムラ達を筆頭に、クラスメイ
トたちもまた彼らの視線の先、空になりつつある冷蔵庫の中身を見
て冷や汗を流していた。

「ま、まさか開店2時間で食材がエンプティとは……………」

「予想外過ぎる売れ行きじゃの……………まあ、いい事ではあるんじゃが
……………問題はその後じゃぞ」

「でも、まだまだお客さんはいらっしやいますし……………後三十分く
らいは持ちますけど、何とかしないとお昼を乗り越えることも難し
いですよね……………」

「というか、お昼のラッシュタイムをあんまり想像したくないなあ
……………この冷蔵庫の中身見ると」

アキラが言うように、ぬこぬこ喫茶は好評に拍車がかかった状態で、
客の入りが良い過ぎるほどだった。千客万来とは言ったものの、流
石に売れすぎたのだ。

食材が満載されていた冷蔵庫の中身が、もうすぐ空になってしまっ
た危機に瀕していた訳だ。

デイルやアインハルトが言うように、この後からも来るであろう
お客さんのことを計算に入れれば、食材は全くと言っていいほど足
りていない。

お昼時ということで、あまりの忙しさに、ホムラ達の寿命がマッハ
な勢いになるだろう。

「店閉める………つてのは駄目だよな。流石に、外の客ほっぽり出したりすんのは目覚め悪いし」

「何とか食材さえ入手出来ればのお………」

「でもこれ、何人かで買い物行けば済む話でもないですし………」

アキラ、デイル、アインハルト達は、ムムム…と頭を捻りながら打開策を考える。しかし、食材を買い行くとしても学園から往復一時間ほど掛かってしまう。それに、この忙しさの中で、買い物に避ける人員は少ない。

2、3人で行ったとしても、持てる荷物の量は高が知れている。

「どうしたものか………」

ホムラもまた、このどうあがいても絶望な状況に、頭を悩ませる。まさか、売上が好調過ぎることで困ってしまうなどとは、思ってもいなかったことだ。

と、その時……

BGM〱白い 塔で流れるアレ〱

「あ、このBGMは……」

「ていうか、今日はいつもと違う感じだね……」

突如、BGMが強制変更され、生徒会長の登場を予感させる。いつもと違うBGMに少し戸惑ってしまうが、学園祭仕様というやつなのだろうか？

アキラとホムラが、ソラの登場を待っていると、彼は正面扉からではなく、予想だにしない場所から顔を出した。

ガパッ！

「ウス、なんか困りごとか？」

四人「……うわぁ！！？」
「……」

突然、天井の蓋が開き、ソラが逆さ吊りの状態で顔を出してきたのだ。当然、ホムラ達は腰を抜かす勢いで驚いてしまう。

「な、なんで天井から登場なんですか……？」

「いや、正面から入ろうとしたんだが、あまりの人の多さに心が折れた」

「ああ、ナルホドって……だからといって天井から現れないでくだ

さいよ……寿命が縮みますから……」

呆れながらそういうホムラに、特に悪びれる様子もないソラ。本当に、この生徒会長、唯我独尊である。

だがしかし、困りごとかと聞いてくる辺り、何らかの助けになってくれるつもりなのは確かだ。何だかんだ言っても、ソラはやる時はやってくれる。だからこそ、普段ちゃんぽらんな彼が生徒会長をやっているのだ。

「えっと、ソラさん。僕らの喫茶店なんですけど、売上が伸び過ぎて、食材が……」

「お……なるほど、その空になりつつある冷蔵庫がその答えってことか……」

ホムラの呟きに、空になりつつある冷蔵庫をのぞき込みながらそう呟くソラ。まあ、学園祭行事の中でここまでの成果を出してもらえるのなら、喜ばしい事ではある。

が、このままでは営業が成り立たなくなるのも事実だ。利益を上げるためには、それだけは避けたいところ。

「食材の手配をすればいいんだな？」

「で、出来るんですか？」

「そこを何とかするのが俺の仕事なんで……っ……」

ホームラにそう返すと、ソラはポケットから携帯を取り出して、どこかに電話をかけ始める。

どこかの業者にでも宛があるのだろうか？ まあ、彼ならそういった繋がりを持っていても何の不思議もないが。

「あ、フィルの旦那？ 取り敢えず冷蔵庫三つ分くらいの食材を用意してくれ。10分以内だ」

『ちょ？ おま！ いきなり電話かけてきたと思ったらそれかよ！？ ていうか、今こつちも仕事で……「ダダダッ！！」 うお！？ 危ねえ！！？』

「……今の銃声だよね！！？ 確実に電話の相手の人、ドンパチに巻き込まれてるよね！！？」

電話相手の生命の安否が気になるも、それ以上にどういった知り合いに電話しているのが非常に気になるところ。

本当に、彼の繋がりというものには謎が多いというか、知らないほうが幸せだというセリフを地で行っている感じがする。

「頑張れ頑張れ！ できる絶対できる！！ 頑張れもつとやれるって！やれる、気持ちの問題だよ！ 頑張れ頑張れ！ そこだそこで諦めるなよ絶対に！！ 頑張れ積極的にポジティブに頑張れ

頑張れ！！！！」

『うるせええ！！？ 耳元で炎の妖精召喚すんな！！ わ、分かった！！ 取り敢えず社に連絡して用意させるから！！ 20分ほど待ってる！！』

「四十秒で支度しな！！」

『どこのド ラだお前は！！？ と、兎に角！ 一旦切るからな！ 食材の件は15分ほど待ってる！！ ってRPGイイイイ！！？ 「チュドーン！！」……………」

ブツ……

ツー、ツー……

爆発音と共に電話は切られてしまった。（RPGⅡ携帯式対戦車擲弾発射機、詰まるところのグレネードランチャー）
本格的に、電話相手の命が心配になってしまったホムラ達だった。

というか、明らかに戦場、またはそれに類する場所からの電話という、レア過ぎる体験が出来たことを喜ぶべきなのか。

「あ、あの……電話の方は一体……？」

「ああ、でっかい会社やってる社長の知り合い。今は確か……………南米辺りに営業に行ってるとか何とか……………」

「営業！？ 明らかに命のやりとりに巻き込まれてましたよね！！
？ 命懸けの営業ってレベルじゃなかったたつですよ??」

アインハルトの質問に答えたソラだが、ホムラが光の速さでツツコミを入れた。そも、社長自ら営業は、百歩譲ってアクティブな社長なんだと割り切れればいい。しかし、流石に銃声や爆発音は流しきれないし、割り切れもしない。

「まあまあ。兎に角、15分後に食材が届くように手配はしてくれ
るから、しばらくは何とか持たせる。ああ、費用は後で別途請求で
生徒会に回してくれりゃあいい」

ホムラ達「……は、はあ……（いいのかなあ……？）」「……」

が、そんな一般ピーポーなホムラ達に対し、フィルという人物の営業？ に全く疑問すらいだいていない様子のソラ。

事務的な説明をしているところを見る限り、心配だとか焦りだとか
いう感情は見られない。

「そんじゃ、引き続き客から金を捲きあげ………もとい、利益最大
化を目指して頑張ってくれ。足りないもんがあれば、また遠慮無く
言ってくれていい」

「今、完全に捲き上げるって言いかけてましたよね！！？ 難しい言
葉風にしたけど、意味合い的には全然変わってないですよね!？」

それどころか、あくまでビジネス的な価値観で、この学園祭を成功させようとしているフシさえ見て取れる。ホムラが二連続ツッコミをかましたくなるのも無理はない。

フィルという人物に対して、よほどの信頼を置いているのだろうか。その真意はわからないが、今は兎に角、食材の目処が立ったことを喜ぶべきか。

P r r r r r ……

「あ、ちよつとすまん。……………はいはい、レーネか？ 今度は何だ？」

ホムラ達の問題も解決したというところで、いきなりソラの携帯が鳴る。相手は、以前もこの教室に来たレーネという先輩らしい。どうやら、彼女も生徒会の仕事を、ソラの手伝いの一環としてやっているようだ。

「あゝ……………分かった、了解……」

二言三言話すと、ソラは携帯を切ってポケットに放り込んだ。どうやら、また仕事のようだ。

生徒会長ということで、普段から多忙な彼ではあるが、やはりこの学園祭という行事になるとそれ以上の激務が待っているのだらう。

その点では、ホムラ達はソラのことを凄うしかなかった。

「そんじゃ、また仕事入ったから、俺はこの辺でな」

「またお仕事ですか？」

「まあな。なんか他校生同士が因縁付け合って、ヤバい感じらしいから……メンドイけどちょっと行つて殲滅してくる」なんとか

「…………あれ？　今、『なんとか』の当て字がものすごく物々しいものだったような……？」

「気のせい気のせい。んじゃ、頑張ってな。」

ホムラにそう答えながら、ソラは手をプラプラ振りながら教室を後にした。（天井から）

大きな問題を解決してくれた、非常に頼りになる人ではあるが、やはり只者ではないようだ。しかし、そんなことを言つてばかりもいられない。折角、ソラがツテを使って食材を用意してくれたのだ。ここで、彼の期待に応え、店をさらに繁盛させなければ。

「それじゃあ、この後も、皆で頑張ろ!!」

一同「「「「「お~~~~~!!!!!!」」」」」

ホムラの掛け声にあわせ、再び気合を入れ直すクラス全体。
その後も、お客は山のように押し寄せ、ホムラ達はクラス一丸とな
って店を切り盛りするのだった。

「デイル様!! もっと激しく罵ってください!!! (: ; ;
; ; ; ; ;) ハアハア」

「もっと、もっと強く、辱めて!! (; ; ; ; ;) 3 ハアハア」

「く、悔しい……でも感じちゃう……ビクンビクン………」

そんな、変態たちの声も、鳴り止むことはなかったとか。

第五十話 学園祭開始！ホムホム達の喫茶店奮闘記！（後書き）

閣下＆ホムラ「前書き、ほんと毎度毎度いい加減にしろ」

ホムラ「ていうか、僕のところ完全に別人のことじゃないですか！？」

アインハルト「……ほ、ホムラさんが魔法少女のコスプレ………
…（ツ）」

F20C「アインハルト、鼻血。鼻血出てるから」

閣下「俺に至っては、何故かカイザベルトで変身した後に灰になっちまってるんだが」

F20C「ということは、自動的に主人公はホムホムということに……真主人公・ホムラのお話が次週から始まるわけだ」

閣下「なんでそーなるの（。。）」

アインハルト「良かったですねホムラさん、出番が増えますよ」

F20C「やったね、たえちゃん！」

閣下＆ホムラ「おいばかやめろ」

次回 第五十一話 コスプレ喫茶・アヴァロンへようこそ

第五十一話 コスプレ喫茶・アヴァロンへようこそ（前書き）

私の作品内での、主要キャラクターの力関係

ソラ>>>>フェイト〃なのは〃リオス>>アインハルト〃ホムホ
ム>>>>>>【越えられない壁】>>>>セロハンテープ>>
>>使いきった消臭剤のボトル>>>>>>>>>>閣下

第五十一話 コスプレ喫茶・アヴァロンへようこそ

さてさて、中学一年生が喫茶店で奮闘している中、高校一年生のあるクラスもまた、喫茶店を開いている。

まあ、言わずもがなかもしれないが、ルーク率いる一年三組である。

彼らは、コスプレ喫茶ということで、女の子（一部に男の娘を擁する）が様々なコスチュームでウェイトレスをするという事で、学園祭前から話題になっていた。

それに加え、嫁にしたい女の子三年連続ワンツーフイニッシュを決めているのはとフェイトも、お手伝いということで参加するとの情報が入った日は、学園中がお祭り騒ぎになった。

ちなみに、一位：フェイト、二位がなのはだったのだが、その裏ではとある変態が暗躍していたとかいないとか……

ともかく、そんな事前宣伝はバッチリな出し物なわけで、ルーク達一年三組のコスプレ喫茶、『アヴァロン〜理想郷〜』は、学園祭開始と同時に最高潮の盛り上がりを見せていた。

薄暗い教室の中にあつて、本来教卓のあるべき場所のみが、スポットライトで照らし出されている。

加えて、ライトの光源を少し弄っているのだろうか、光の種類がム

ーディなそれになっており、同じくどこことなくいやらしい感じのする音楽も相まってか、一年三組の教室・コスプレ喫茶・アヴァロンは大人の遊園地スレスレにまで変貌していた。

そして、そのライトアップされたステージの上では、かなり際どい衣装。くノーコスプレをしたフェイトさんと、どこかの大名のごとく、お殿様のような格好をした我らがルークの姿があった。

「フッフッフッフ……我が城にねずみが入り込んでいたことには気づいておったが……いやはや、ねずみではなくメス猫だったか……それかなりの上物と来ておる……」

「捕まってしまった時点で、くノーとしては失格……煮るなり焼くなり好きにすればいい……」

「はは！！ そんな勿体無いことが出来るか……お前には喋ってもらいたいことが山ほどあるのでな……」

ルークとフェイトは、どこか芝居がかった口調で、いや実際に芝居なのだが、予め打ち合わせておいたセリフを口にする。

見れば、くの一姿のフェイトは、両手を縄で縛られ、ロープは天井の吊るされており、拘束された状態にあるではないか。そこはかとなくエロい絵である。

「は、話すことなど何もない！ いいから早く殺せばいいだろう！」

「ふん、そう生きがっていられるのもいつまでやら……口を割らぬというのなら……割らせるまでのことよ」

お殿様は、悪そうな顔をしながら、フェイトににじり寄る。

今回の設定は、城に忍び込んだがあえなく捕まってしまう、殿様にエッチなお仕置きをされながらも尋問されるというものらしい。何というか、かなりアブノーマルなプレイになっているような気がするのは気のせいだろうか。

「ほれ、これか？　これがええのんか？」

「あ……ふあ……そ、そこは……んあ……！　だめ……そこそんなにしちゃ……にゆう……」

変態ども「「これだ……！　俺たちはこれを見るために生まれてきたんだ……！」「」

ルークが習字用の筆で、フェイトの脇をくすぐったりすると、彼女は当然ながらくすぐったくなり、少し艶っぽい声を出してしまう。それ見た変態どもが、大フィーバー・スタンディングオーバーションになったことは言うまでもないことだろう。

ルークもまた、少し興奮してしまった。そのくらい、フェイトがエロかったわけ。

「ほれほれ……やめて欲しかったら、俺をご主人様として敬い、

誠心誠意尽くすくノーメイドになることだ……………」

「ふああ…な、なります……………！ ご主人様にどこまでも尽くすメイドになります……………だからその……………もっと虐めてください……………罵って、冷たい眼で私を見下してください……………私はあなた様に罵倒されて悦んでしまう、卑しいメス猫でございますう……………」

「（あれ？ こんなセリフあったっけ？）」

この芝居の目的は、喫茶店に来たお客を、視覚的に楽しませるといふ目的もあるし、コスプレしている女の子がどういった経緯で、コスプレメイドになったのかというストーリーをも知ること、ある種の設定萌のような効果も期待されている。

この企画を提案したルークは、クラスメイト（主にエロティック帝國軍の皆）から、祭の神とまで崇められていた。

と、芝居が進むにつれ、フェイトのドM魂に火が付いてしまったのか、セリフにないような台詞を口に出してしまう。まあ、特にお話をぶち壊すようなものではないので問題はないのだが……………

「（……………そんな熱っぽい視線を送りながら……………そんな事言われると……………意識しちゃうじゃないか！！ ああもう！！ くノーねーさん可愛いなあ……………！！）」

口に出しては絶対に言わない様なセリフ。

恐らく、フェイトが実際に耳にしていれば、彼女のテンションもお祭り状態になっていたことだろう。

だが、ルークが思わずそう感じてしまうほど、今のフェイトは魅力的だった。

そして、演技は良いところ、まあ放送コードギリギリの場面で切り上げられ、舞台は暗転する。

ライトが再び照らされると同時に、ルークとフェイトがステージに立ち。ペコリとお辞儀をする。

なんというか、完全にプチ学芸会になっているような気がするが、これも一興ということで、客からの評価は上々だった。

続き？ 薄い本にご期待くださいませ。

フェイトとルークのくノ一調教物語が終わると、ステージは一瞬間に包まれ、次の演目に移る。

黒子になったクラスメイトたちが、不要になった小道具などを片付け、次に使うものを素早く用意する。というか、この喫茶店、気合が入り過ぎていて逆に恐ろしい。

さて、次の主役はなのはとりオス。

プチ演劇は、なのはが事前打ち合わせのとおり、喪服姿で墓前の遺影（写真には何故かはやての変顔が）の前で涙しながら座り込んでいるところから始まる。

「うう……はやて……まさか、『ボケにツツコミを入れてもらえない病』なんて……うう……」

死因だろうか？ 人間としては絶対にかかりたくない病気によって、なのはの前夫、はやて（設定上で）は命を落としてしまったらしいが、それらについて観客たちからツツコミは全くなく、ただただ、喪服姿で泣いているなのはの艶やかさにその場にいた全員が喪中×エロという、言ってしまうえば不謹慎さの中に生まれるエロスに心奪われていた。

ここにいる全員、玄人すぎる。

「なのはさん……」

「り、リオスさん……」

そんな彼女の方に優しく手を置いたのは、幼なじみで、なのはにとつては現時点で心を許せる唯一の存在、リオス・コーネルドだ。夫・はやての死に、沈痛な面持ちのなのはを何とかして慰めようとしているのだろう。

何故か、女物の衣装、女物の喪服（洋風スタイル）の姿で……

「仕方ないわよ……はやてさんのボケ……正直ツツコミ切れな

い量なんだもの……周囲のーが断念するのは仕方ないことだわ……」

「で、でも……でも……こんなお別れ……悲しすぎるよ……。確かに、ちょっと面倒くさいなって思ったこともあったけど……それでもやっぱり、はやてちゃんの滑り気味のボケは……私の生活の一部になってたんだよ……」

「来た来た来たきた　　（。　。）　　ッ！！　リオスくんの女装！！　これよ、これ待っていたのよ！！　（＊　、　）ハアハア」

「なのは先輩との絡みを想像すると……ふはあ！！」

「これだけで、ご飯三杯は軽いわね……」

男女含めた変態達が、各々のリアクションを見せる中、なのはとリオスの熱演は好調の一言だった。はやて本人が聞いたら、恐らく血涙を流すことだろう。

まあ、彼女がこの場にいないので良いとして、リオス（女装）は悲しみに暮れるなのはの肩を抱きよせ、そう囁く。

なのはも、彼女？に体を預け、亡きはやてへの（死んでいないが）想いを吐露する。

「ねえ……リオスさん……私、これからどう生きればいいのか？　もう、ボケのない生活に慣れることは出来る、でも……はやてちゃんの温もりは……もう……」

「これからは、私がいるじゃない……はやてさんみたいな、滑り気味のボケは出来ないけど……その分、心温まる時間をあなたにあげることは出来るわ……だから……ね？」

「り、リオスさぁん……」

なのはは、リオス（女装）にしなだれかかり、両者は熱い視線を絡ませ合う。

加えて、演技ではない両者固有の感情故の、頬の紅潮が場面演出的な意味合いと、禁断の關係の加速を際立たせていく。

言ってみれば、今の二人は百合ン百合ンな關係なのだ。

「ああ……でも……はやてちゃんが『冥土』行きになったのに……私たちだけこんなに幸せになるんなんて……何だかすごくいいないことをしているような……」

「気にしなくてもいいじゃない……あなたと私、今日から二人、喪服メイドとして一緒に頑張っていきましょう……このお店のトップを、私たちでもぎ取るの……！」

そして、なんとなく無理矢理な形で、メイド話に持っていく。冥土とメイドを掛けているつもりだろうが、やはり観客からのツッコミはない。

それほどに、なのはとリオスの百合百合展開に見入っているということだ。

この続き？ 製品版を期待してくだしあ

「……………あ、あの……………なのはさん……………」

「な、なにかな…リオス君……………」

演劇が終わった直後、リオスは顔を赤くしながら、同じく赤面状態のなのはに声をかける。

時間的には、そろそろなのはとフェイトは、体育館でのコンサートの準備に行く必要がある。事実、その関係でなのはとフェイトは既に学生服に着替えた後だ。

「えっとその…………ライブ、頑張ってくださいね。僕も絶対見に行きますから」

「うん　というか、来ないと怒っちゃうからね？　その…………約束通り、伝えたい事も…………あるんだし……………」

「あ……………う……………」

なのはのその言葉に、リオスは少し赤面しながらも、頭の中で思い

浮かべる。

一ヶ月ほど前の夏休みにあったお祭りでの出来事を。なのはに言われた、『伝えたいこと』と『それまでもう少しだけ、友達でいて』という言葉。

いくら鈍感なりオスといえど、ここまで言われれば、それがどういった話なのかくらいは想像がつく。

そのためか、最近は気が付けばなのはに対してデレデレになってしまっている自分がいるほどなのだ。

「行きます、絶対に行きますから！　なのはさんの歌、気持ち絶対聞きますから」

「……………うん……………。じゃあ、待つてるから……………」

そうして、なのははデュエット相手のフェイトを呼ぼうとする……………のだが、向こうは向こうでルークと何やらお話中のように……………

「ルーク？　私のライブ、見に来てくれる？」

「際どい衣装なら考えないでもない」

「えっと……………結構ミニなふりふりの服装だったような……………あ、ガーターベルトありだよ？」

「絶対行くよ、この命に代えても」

さすが閣下、単純さに掛けては他の追隨を許さない勢いだ。
行くかどうかの基準が、ガーターベルトな辺り素直にフェイトの応援に行くのが恥ずかしいのだろうか……

「フェイトちゃん！！ そろそろ行く？」

「あ、うん！ それじゃあ、ルーク。体育館で待ってるね？」

「ういゝ。頑張ってる」

なのはに呼ばれたフェイトは、ルークに手を振りながら教室を後にしてしまった。ルークはプラプラと手を振って彼女を送り出し、自分たちの仕事を一区切りさせる。

ルークとフェイトは、フェイト達の応援に行くために、作業の分担を考えて組んでいたというわけだ。休憩ももらえるので、二人の応援に行くのは十分可能である。

「んじゃ、俺らも支度していくか、リオス？」

「う……うん……」

「おいおい……顔真つ赤じゃないか……そんなことで、実際なのはさんに告はk……」

「わーーーーわーーーー！！ 言わないでよ！！ ただでさえ緊張してるんだから！！」

「わ、分かった、分かったから……取り敢えずスリーパーホールドを解いてくれ……刻が見えそうなんだ」

二人も、フェイト達の方かった体育館に行くべく、使っていた衣装などを片付ける。その際、リオスの緊張を和らげようと冗談のつもりでいったルークの一言だったのだが、今のリオスには冗談が通用しない。

危うく、閣下の残機が一機減るところだった。

「あんた達、今からなのはさん達のライブに行くの？」

「ああ、ティア。そういえば、お前も今から休憩だったよな。なんなら、一緒にいくか？」

「うーん……そうね、ご一緒させてもらおうかしら。……いいものが見れそうだし……ね」

「あふ……」

と、そこにやってきた巫女服姿のコスをしたティアナも、休憩時間が来たということでルーク達と行動を共にすることになる。

リオスとなのはになにかが起こることは、彼女もなんとなく理解しているようで、リオスに視線を一瞬流してしまうものだから、またしてもリオスは赤くなる。

「んじゃ、さつさと着替えていこーぜ」

「うん」

「そうね」

そうして、三人は男女別に分かれた更衣室に入り、学生服に着替える。使っていた衣装などは、ライブの後のシフトの際に使用するの
で、丁寧に片付けておかねばならなかったので、少し時間が掛かっ
てしまったが、時間的余裕は十分にあった。

しかし……三人が更衣室から出てきた時……目の前には信じられ
ない光景が広がっていた。

「……」

エロティック帝国軍「……リオス・コーネルド……貴様を、高
町なのは先輩との不純異性交遊（予定）、及び抜け駆けの罪で逮捕
する……」

更衣室から顔を出した瞬間、帝国軍全員が特殊部隊さながらの服装
にチェンジした状態になって、リオス達の前に立ち塞がっていたの
だ。

全員、視線だけで人を殺せそうな殺気を放ちながら。

「同志コーネルドよ……残念だ……非常に残念だ……いつかこんな日が来るとは思っていたが……我軍の英雄をこんな形で、我等の手で裁かねばならないことになるうとは………」

「え…？　なにこれ…？どゆこと…？」

どうやら、エロティック帝国軍の面々にも、なのはとリオスの間に何かが生まれており、それが今日、何かの形になろうとしていることが知れ渡っていたようだ。

エロティック四天王のグラフィール（タカハシ君・好きなジャンルは妹もの）が、宣戦布告する形で堂々とした態度で、その旨を伝えてくる。

「ルーク？」

「いや、今度ばかりは俺も何も知らん。今週は、文化祭の準備に加えてエロゲー崩すのに忙しかったからな」

「あんたね……」

その主犯かと思われたルークだったが、ティアナの疑いの視線に対して、迷うことなくそう答える。

どうやら、今回の一見にはエロティック皇帝たる彼の意思は働いていないようだ。この帝国軍、時に主君の命令外の任務も率先して実行するフシがある。フットワークが軽いといえは聞こえはいいが、実際はそんなに綺麗なものではない。

「大罪人、リオス・コーネルドよ……………大人しく我らが軍門に下れ。そうすれば命の保証だけはしよう。閣下とティアナ財務大臣も、一時的に身柄を拘束させて頂きます……………」

「いつの間に私の地位が財務大臣に……………?」

「いいんじゃないの? そういう仕事向いてそうだし」

「って、そんな呑気なこと言ってる場合じゃないよ!! こんなところで捕まったら、なのはさんとの約束が!!」

帝国軍の降伏を進める宣言に対し、ティアナとルークは呑気にそんなやり取りをしているが、リオスにとっては今回だけは邪魔されるわけにはいかないのだ。

なのはとの約束の重要性、それは彼女が伝えようとしていることの内容の大きさを物語っている。ここでスッポカしてしまったとなれば……………なのはフラグは修復不可能なまでに破壊された後、リオスは女装への道にのめり込んでしまいかねない。

「どうする?」

「どうするってそりゃ……………」

「決まってるだろ!!」

ティアナとルークがそう言い合うと、この状況で最も焦っている男、リオスがそんな叫び声と共にその場からダッシュした。

「逃げるんだよ!!!」

彼らの取った選択肢は、至極単純明快。『逃走』だ。

エロティック帝国軍の面々に対して、現時点では交渉の余地もなく、時間的余裕も無限ではない。こうなってしまった以上、是が非でも体育館に逃げこむ必要がある。

一旦体育館に入ってしまったえば、一般客の集中している中で、帝国軍がリオスに手を出すことは難しくなるからだ。

「コーネルドと閣下、財務大臣が逃走したぞ!!! 追ええええええええ!!!」

「『うおおおおおおお!!! 待ちやがれコーネルドオオオ!!!』」

「『大人しく捕まって、この女物のふりふり衣装に着替えてもらうぞ!!!』」

「『あ、あと、ルークくんとベッドシーンとか……!!!』」

ルーク&リオス「『絶対に捕まれるかあああああああ!!!!!!?』」

捕まった場合の恐ろしい未来を想像してしまったルークとリオスは、改めて逃げるスピードを上げる。

男子生徒に混じって、またしても腐女子さんが混じっていたところを見ると、男女混合軍ということだろうか。どちらにしろ、厄介な事この上ない。

「はあっ！！ はっ！！ っていうか、体育館まで結構距離あるわよ！！ 逃げ切れるの？！」

「正直！ はあ！！ 厳しいな！！ 学園祭で、人が多いからどうしても移動スピードが遅くなっちゃう！！」

「向こうもそれを見越してか……！ 部隊を少数に分けて行動させてるみたいだし……！ このままじゃ……！」

逃走を図る三人だが、如何せん今日は道が混んでいる。人の密度が増えている学園祭中の学校内を逃げるのは、かなり難易度が高いミッションだ。

リオスの焦った声と共に、背後からは数人の追跡者の気配と、司令部との連絡の聲がかすかに聞こえる。かなり追い詰められているようだ。

「はあ！！ はあ！！ なのはさんの…… 約束なのに……！！ こんなところで、諦める訳にはいかない……！！ 絶対に逃げ切る……！」

「……………」

体育館まで、あと数百メートル。

だが、背後には徐々に隊列を成して追い迫ってくる帝国軍の面々の姿が。回り込まれたりはいらないようだが、三人との距離は確実に縮まっている。

だが、リオスの固い決意は変わらない。約束は果たすし、彼女の気持ちの答えたい。そんな思いから吐き出した言葉を、ルークはただ黙って聞くと……

「じゃあないわな……」

ザッ!!

「「ルーク!!?」」

突如、ルークが走るのをやめ、迫り来る帝国軍を待ち構えるように構える。突然のことに、ティアナとリオスも立ち止まってしまいそうになるが、そこでルークが一喝した。

「ここは俺に任せて先にいけ!!!」

「ルーク!?!」

死亡フラグ全開なセリフを地で叫び、止まりそうになっていたリオス達の足を奮い立たせる。

この男、自分を犠牲にリオスを体育館に辿り着かせようとしているのか。あまりに柄ではない。

「未来（なのはとのリア充ライフ的な意味で）への水先案内人は、このルーク・ハラウンが引き受けた！！！」

どこかのハムさんのようなセリフと同時に、近くにあった出し物で使うのだろう、ハリセンを二本手にして、帝国軍に突っ込んでいくルーク。

いつも変態として、読者様から愛されている（悪い意味で）かれだが、今のルークの背中には、漢という一文字が燦々と輝いているようにも見えた。

「ルーク……………あいつ……………」

「そこまで……………僕となのはさんの仲を……………一人で、あんな大軍に……………」

ルークの熱い友情に、リオスは思わず目頭が熱くなった。相棒、親友、マブダチ。

様々な関係が当て嵌まる彼らだが、その絆の強さは言葉では表現しきれないものなのかもしれない。

「うおおおおおおお！！！！　こいよベ　ット！！　ハリセンなんか捨ててかかってこいよ！！！！」

「どおおおけええ！！　ここからはずっと俺のターンじゃあああああ！！！！！！」

激突すれば、間違いなくルークは敗れる。圧倒的な戦力差、多勢に無勢。

ルークも、帝国軍を止められるなどとは思っていない。ただ、あと数百メートル。

リオスが体育館に入り込むための、たったそれだけの時間が稼げればいい。自らの命を賭して、親友の花道を、リア充への花道を作ろうというのだ、ルークという漢は。

「ルーク……君との友情……気持ちは……無駄にしないよ……」

リオスがそう言いながら、体育館のドアに手をかけると同時に、ルークは帝国軍と衝突した。自分の命が散ることを覚悟しながら……

「これは、死ではない……！！　俺の読者様からの人気アップのためのおおおお！！！！！！」

最後の最後で、全てが台無しだった。

「……………」

「……………」

そんな散り際の一言に、リオスとティアナは……無言だった。結果的に体育館には入れたので、勝ちも勝ちなのだが……この残念感漂う勝利はなんなのだろうか？

「取り敢えず、いい席探しましょう」

「だね」

ルークとの熱いやり取りを脳のメモリーから消去し、二人は体育館のライブ会場に姿を消した。

そして、体育館の外では……

「諦めるこのシスコンド変態！！ お前の人気は、もう何やっても挽回不能なんだっつの！！！！」

「時代はアイホムなんだよ！！　アイホム、可愛いよアイホム！！」

「ホムホムはアインハルトの嫁、アインハルトはホムホムの旦那！！！！」

「オ・ノーレ！！！！」

そんな事を口にしながら、閣下と帝国軍の壮絶な戦いが繰り広げられていたりいなかったりしていた……

第五十一話 コスプレ喫茶・アヴァロンへようこそ（後書き）

F20C「ないわ……………」

ティアナ「ひくわー」

はやて「これはひくわ……………」

閣下「（……………」

F20C「前書きの力関係……………あながち間違っちゃいないかもな」

閣下「おかしい！！ 何で俺がゼロハンテープ、ひいては空の消臭剤のボトルに劣るんだよ！？」

ティアナ「ホームラに主人公の格付けで勝てる要素がないところとか」

はやて「読者様から、名前を忘れられそうになるところとか」

F20C「人気回復に必死なところとか」

閣下「ふええええん！！！！ ねーさあああん……………（つ……………
……………ウエン」

次回、第五十二話 伝えたい想い、ありますか？

F20C「リオスの恋のキューピッド役は任せろーバリバリ」

リオス「やめてー!!」

第五十二話 伝えたい思い、ありますか？（前書き）

閣下はレベルが上がった！

力が3上がった

素早さが1上がった

性欲が8102上がった

×××が になった

主人公としての格が57下がった

読者様からの人気が10下がった

閣下は新しく現実逃避を覚えた！！

第五十二話 伝えたい思い、ありますか？

文化祭というイベントによって、一般に開放された学校というのは往々にして様々な人が入り交じり、人の密度が一気に上昇する。

そのイベントの知名度、規模などによってその上昇率は様々ではあるが、概ね平時の学園よりかは多くの人が学園にいることになる。

加えて、文化祭という雰囲気の流れテンションが異常に高くなったり、馬鹿みたいに騒ぎ立てる者もいるだろう。それは悪いことではないし、祭りというのはそういうものだ。

逆に、全く盛り上がり欠ける祭りにどんな魅力を感じるだろうか？

「おい、くおるうらあああ！？ な、に、人の方にぶつかって来てくれちゃってるんすかねえ！！？」

「ああ？ てめえが俺の進路上に来たんだろうが…？ イチャモンつけてんじゃねえよ！？」

だがしかしまあ、何事にも限度というものはあるわけで。

いくらお祭り騒ぎとは言え、乱闘騒ぎにまで発展してもらっては困りものである。

いつの時代の人間なのか疑いたくなるような、スカジャン姿のチンピラと、これまた化石としか言いようのない格好、長ラン（丈の長

い学ラン）姿のヤンキー。

最早絶滅危惧種とされていた種類のヤンキー同士が、聖祥学園の学園祭。学園のとある一角でガンを飛ばし合っている。

「なんだやんのかあ…？ この、『漆黒の赤蛇』と恐れられている俺様とよお…！」

黒い蛇なのか、赤い蛇なのかハッキリして欲しい二つ名である。

「ああん……てめえこそ、俺を誰だと思つてやがる…？ 海鳴市最強の喧嘩士と呼ばれてる、『エターナルインフェル永久煉獄のユーちゃん』であるこの俺を目の前にしてるんだぜ……？」

二人目は、厨二病が酷いのに加えて、そこから続く名前があまりに頼りない。名前負けとはこういうことを言うのだろうか。

というか、このチンピラ＆ヤンキー、二つ名が完全にネタとしか思えないのだが、本人たちにとってはカッコイイらしい。

こうというのが人の親になった時、騎士ナイトちゃんだとか、泡姫あきちゃんだったりとか、そういうDQNネームを子供につけてしまうのだろうか。

「「やんのかこらあああ……！！……？？」」

とまあ、そういう話は一先ず置いておいて。今はこの乱闘寸前の二人をどうにかするのが先だろう。

だが、この二人から発せられるヤンキーっぽいオーラが、やはり少し怖く感じてしまうのか干渉したがる者はいない。そういうのはよほど物好きか、同じように暴れたい奴か、または荒事の取締役を担っている生徒だろう。

「おい、やばいんじゃないのあれ……」

「で、でも私たちが行っても話がややこしくなるかもだし……」

「ていうか、あの二人、かなりエキサイトしてるみたいだし……近づいた瞬間ボコられそうなんだけど……」

「こ、こういう時、どうすれば……!？」

周囲の聖祥生徒たちも、この事態に戸惑っているようであたふたしてしまっている。彼らだって、出来ることなら何とかしてこの騒ぎを処理したい。

だが、人間やはり暴力は怖いし、その矛先がこちらに向くのは勘弁願いたいと思うことは至極当然のことだ。

「安心なさい。直に終わるわ」

「え？」

「あ、あなたは……」

と、そんな時。生徒の中でそんな声が響いた。黒髪をツインテールにした、気の強そうな少女。見るものを虜にするような抜群のプロポーションが非常に悩ましい。

中等部生徒会・書記（三日前に決まった）、レーネが悠然と、そして自信にあふれた表情でそこには立っていた。

「生徒会長の……………第二夫人の!？」

「だあああれが第二夫人よ!!!!? 私が正妻よ!!!」

「ええ!? じゃ、じゃあ副会長さんは……………」

「あの子は側室よ」

「……………どっちにしても生徒会長つて一体……………??」

中等部の生徒の呟きに、レーネは噛み付く勢いで突っ込む。まあ、実際のところはどうか知らないが、確かにソラの女性関係は謎過ぎる。

「れ、レーネ!! 嘘はダメだよ!! せ、正妻は私だもん!!」

と、そのレーネの発言に抗議しながら現れたのは、生徒会副会長のエステル。空のように青い髪と、こちらもあり見とれてしまうよ

うなスタイルの良さが目を引いてしまう。

レーネを美人系と称するなら、エステルは可愛らしい系というべきか。正反対の性質を持つ二人が、ムムム…と睨み合いながら対峙する。

「エステル、まあ今は状況が状況だから、この話は置いておきましようか？」

「む……不本意だけど仕方ないね……。今はお仕事中だし………」

が、目の前でガン飛ばし合っているチンピラを放っておいて、どちらが嫁なのかという議論をするほど、彼女たちは馬鹿ではない。

以前として一触即発なダブルチンピラ（絶滅危惧種）だが、どちらも暴れられてはこちらが迷惑することになる。

出来ることなら、草々にご退場願いたいところだ。

「はっ！… いいぜ、やってやろうじゃんか！！ ワンパンで沈めてやんよ」

「お前こそ……俺の黄金の右アッパーで地面の肥やしにしてやるよ」

長ランのチンピラ、自らの技の概要を説明するに等しい発言をしてしまったが、両者とも頭が悪いようで全く気が付いていない。

しかし、まずいことになった。二人とも、上着を脱ぎ始め、それっぽさを演出するためか指をバキバキと鳴らしている。

「れ、レーネ、どうしよう?」

「だから大丈夫だって。さっきソラに電話したんだし……………ほら、言ってる間に来ちゃったわよ?」

エステルにレーネはそう言いながら、指を校舎の二階の方向に向けて指す。

そして、それと同時に……

ダダン!ダッダダン!!　ダダン!ダッダダン!!

BGM『ターミネー　ーのテーマ』

「ああん…?」

「なんだこのBGMは…………?」

突如周囲を包み込んだ、ターミネー　ーのテーマ。チンピラたちも、当然ながら何だ、何だと、周囲を見渡す。

そして、とある方角。学園の校舎の二階の窓に、そいつは居た。

「はゝい、その絶滅危惧種のチンピラ二人ゝ…………ハフハフ…………あ、このたこ焼きウマ……………他のお客さんの迷惑になるんで、武装解

除するか、ケンカするなら学園の外でやってくだせえ……。ズルズル……ふむ…焼きそばも中々……」

颯爽と登場する生徒会長、ソラ。

その手には、学園祭の出店で大量に買い込んだとみられる食べ物が握られており、チンピラ二人の方など見ずに、食事に勤しみながら一応の警告を発している。

「良かったあ……生徒会長が来てくれたんなら、もう安心だ……」

「だね。後で、うちのお店の綿菓子ご馳走してあげようよ」

「賛成」

「もうちょっと普通に登場できないのかしらね、あの馬鹿は……」

「多分、お腹減ってたんだね。朝から働きっぱなしだったし……。今日の夕飯、おかず一つ多めにしてあげないと……」

ソラの登場に、ホツとする生徒たちに混じって、レーネは呆れ顔、エステルは今夜の晩御飯の献立を考えていた。

まあ、しかし。ソラのことなど知らないはずの他校生の者にとっては、妙な奴が妙な登場の仕方をしたということで、当然不愉快な気分になってしまうわけ。

「なんだテメエは！！？ いきなりBGM流しながら出てきやがって！！！！ ていうか、どうやってBGM変えたんだよ！！！！？」

「あと、モノ食いながら警告してくんじゃねえよ！！？ 力が抜けるわ！！！！」

ダブルチンピラの怒りの矛先がソラに向かい、そのボルテージも彼のふざけた行動によって一気に吹き上がってしまう。

ソラは、取り敢えず手に持っていた焼きそばとたこ焼きを平らげると、それを手に持っていたビニール袋（恐らくゴミ入れ）に突っ込み、二階の窓から飛び降り、地面に華麗に着地した。

「超主人公兼生徒会長たるもの、BGMを自由に変更するくらい造作もないんだなこれが」

当たり前のように、とんでもないことを口走るソラ。というか、若干メタな発言だけは勘弁してもらいたい。本当にこの生徒会長、フリーダム過ぎる。

「はあ？！ 超主人公ってふざけてんのか！！？」

「ていうか、俺たちお客様だぜ……？ 客に対して命令たあ……… テメエは何様かって話だよ……？」

「『俺様』」

チンピラース「テメエからぶつ潰す!!!」

ソラのフリーダム且つ、俺様な態度に、チンピラ二人は一気にブチギレ。

沸点が低すぎると、そう突っ込む暇もなく、彼らは一緒になってソラを殴り飛ばさんと襲いかかって来た。

「くらええええ!!! 必殺……スーパーギャラクティカル・メガトンビックバン……!!!」

「死ねえやああ!!! ダークネスエターナルインフェルノ・ブレイジングマグナムショットオ!!!!!!」

「うわぁ……必殺技の名前、長い上に、超ダサイ……」

鬼の形相でソラに襲いかかって来るチンピラースは、謎の必殺技を放とうとしているらしく、ダサく長い必殺技の名前を叫びながら突っ込んでくる。

そして…

ガシュッ!!

「へ?」

ソラに必殺技（笑）がヒットする一歩手前で、チンピラ二人の足元に異変が起こる。

ワイヤーか、または縄のようなものが地面に用意されていたらしく、そこに足を踏み入れたことでスイッチが入り、その縄が彼らの足を捕縛したのだ。

「ぎゃあああああああ！！！！？　な、なんじゃこりゃあああ！！！！？」

そして、その縄は近くの木の利用して、チンピラたちを空中に逆さ吊りにしてしまった。
漫画などによく出てくる、初歩的なトラップである。

「てめえ！！　こんな罠使いやがって……………正々堂々きやがれ！！！！」

「卑怯な真似しやがって……………恥ずかしくねえのか！！！！？」

気に逆さ吊りにされ、加えてエステルとレーネによって、全身を縄でぐるぐる巻きにされ、完全にミノムシ状態になっていた。

威勢よく喚きちらしてくるが、状況の悪さは理解しているのか、声に先ほどまでの力も勢いもない。

「こんな言葉を知ってるか？　『勝てば官軍、負ければ賊軍』　勝

負にキタねえもクソもあるか。というか、二人がかりで襲ってきたお前らだけには言われたくない」

「何をう!!!?」

ソラの回答に、少し焦りながらも語気を強くして虚勢を張るチンピラ。

だが、数分後、彼らはこの世の地獄を見ることになるのだった。

「さてさて、まずは学園祭の中で乱闘騒ぎを起こそうとしたことに対するお仕置きと行きますか……………エステル」

「はい、どうぞ」

これからどうなってしまうのか？ チンピラ二人がそんな不安に駆られていると、ソラはお仕置きと銘打って傍に控えていたエステルから、あるものを受け取る。

レーネは、これからソラが何をするのか分かっているようで、少し離れたところで爆笑していた。

「こ、コーラ……??」

ソラの受け取ったものは、炭酸飲料水であるコーラだ。キツイ炭酸が夏には気持ち良く、疲労回復の効果もあるのだとか。

まあ、飲み過ぎには要注意なのだが。

両手に持ったコーラを、不安気に見つめるチンピラ。何か、嫌な予感がしてきた二人である。

「ほれ、取り敢えずこれ、鼻から飲め」

ドポポポポ…！

「「んぎやああああああああ！！！！？ た、炭酸が、鼻に炭酸があああああ！！！！？」」

予感的中というか、ソラは手に持ったコーラを、チンピラ二人の鼻に向けて遠慮なしにぶち撒ける。

当然、彼らの鼻にはキツイ炭酸がダイレクトで侵入。想像絶する痛みが彼らを襲うことは言うまでもない。

「て、てめえ！！ なんてことしやる！！！！？」

「何って、拷問」

「ゲッホッ！！ ゴホッ！ 拷問って……………お前…」

「お楽しみはまだまだ沢山あるんで、最期まで楽しんでいってくださいな。ほら、次はこのアルミホイルを奥歯でギュッと……………」

チンピラ二人の苦しい表情と、若干涙目になった様子を見ながら、
『もの凄く爽やかな笑顔』でそう返すソラ。
そのソラの表情は、超サディスティックなそれであり、お仕置きを
完全に楽しんでおられる。
聖祥学園で狼藉を働いたこのチンピラの拷問（お仕置き）はまだま
だ始まったばかりだった。

「誰か、助けて下さああああああああい！！！！！！」

当然、二人の声が届くことは……なかった。

体育館の内部。
普段は体育の授業や、昼休みにバスケなどをするために使われるこ
の広い空間。

学園祭の期間中は主に演劇や音楽ライブなど、広いスペースを必要
とする出しものために利用されている。

「高町先輩……………い！！！！」

「フェイトさん、最高で……………す！！！！」

「メインライブきた！！　これで勝つる！！！」

「あ、やべ……サイリウム忘れた……」

「ほ、ほーっ、ホアアーツ！！　ホアアーツ！！」

「おい、今ほっちゃんファンが混じってなかったか？」

「いつものことだろ、どうせ作者だって」

という感じに、今現在の体育館は富に盛り上がっている。今さっきまでも、演劇部の出し物や、軽音楽部のライブなどがありそれなりの御盛り上がりを見せたのだが、これはその比ではない。

三年生の高町なのは&フェイト・ハラオウンによるダブルボーカルライブ。

体育館に集まった観客たちを、かつて無いほど熱狂させているのは、二人の歌姫の存在と、その歌声だ。

「みんなー、ありがとー」

「まだまだ行くよー」

観客たちの声援や、熱狂ぶりになのはとフェイトは向日葵のような笑顔を見せ、次の曲へ移る。

二人の衣装は色違いのお揃いで、かなりフリフリなデザイン、スカ

ートの丈も短い。アイドルユニットと見間違ってしまいそうになる格好ではあるが、二人の容姿のレベルの高さは全く服に負けていない。そこから見える二人の生足に、既に数十名の尊い犠牲が生まれていることをここに記しておこう。

ちなみに、二人はスパッツ装備なので下着が見えたりすることはない。

曲目のメインはアップテンポなそれがメインであり、元気が溢れてくるような選曲であることが分かる。

が、随所でバラードや気持ちが悪く落ち着くようなテンポの曲も含まれており、相対的にバランスがとれている。

「あはは……二人とも凄いね……」

「そうね……いつから体育館が武道館になったのかって思うくらいね」

観客の中には、プラチナブロンドの髪の毛……女の子と見間違えられても文句の言えないレベルの中性的な顔立ちをした少年、リオスと、橙色の髪とツンツンスタイルが特徴的な女の子ティアナも居た。

周囲の勢いに体が流されそうになるが、そこはもう自分も身を任せってしまったほうがいいのかもしいということ、二人も周囲の人同様に飛んだり跳ねたりしている。

無論、手にはサイリウムを持って。

「（なのはさん……か、可愛いな……服もそうだけど、あの楽

しそうな顔が……)」

リオスは、ステージ上で気持よさそうに歌を疲労しているなのはに目を奪われていた。

なのはの歌声、表情、一挙手一投足から目が離せない。

まるで、目が彼女だけしか見ることができなくなってしまったように、視線をなのはから外せない。

同時に、ずっと彼女を見ていたいと、そう思ってしまう。

そして思い出す。

夏祭りの時の、彼女の言葉を。

『二学期の学園祭で、私、高町なのはは、リオス君に聞いてほしいことがあります』

顔を赤くしながら、リオスにそう言ってくれたなのは。

『だから……それまで……もう少しだけ……わたしの『友達』でいてくれますか……？』

それは、事実上の告白にも等しかった言葉。

出来ることなら、その場で答えを出しても良かった。いや、答えなどとの昔から決まっていたし、一つしかなかった。

リオス・コーネルドという男は、高町なのはという年上の女性をずっと前から好きだった。

高町なのはが、リオス・コーネルドをそう思っていたように。

「僕も………伝えないといけない………」

「リオス？　って、ちょっとあんた、どこ行くつもりよ!？」

リオスは、自分の中の完全に固まった気持ちを胸に、観客の山の中を進んでいく。ティアナの声が聞こえたが、リオスは自分の足を止めることは出来なかった。

人口密度が急上昇しているこの体育館内において、ステージに近ければ近いほど前進するのは困難であるし、それ相応のリスクが伴う。

ガッ！　ゲシッ！

「ってイテテ………」

当然、ハイテンションになった周囲の人間の振り回している手や肘などが、リオスに襲いかかって来る。観客たちはリオスがステージに近づこうとしていることなど気づきもしていないので、ある意味仕方のないことだし、無理に前に進もうとするリオスにも非はある。

だが、なのはの気持ちをしっかりと聞き、それに応えるためには誰よりも彼女に近いところにいなければならないと、この先もずっと

彼女の一番近くにいる存在になるのならば、これくらいの痛みなど
どうということはないと、リオスはそう自分を奮い立たせ、人の波
の中を懸命に進んでいく。

「（もっと……もっと近くに……なのはさんの一番近くに……
！！）」

リオスの歩みは、大衆に飲み込まれそうになりながら、着実に前進
する。力強いその歩みは、彼の強い心から来ているということなの
だろうか。

そして……

「ぷっはー！！」

リオスは、必死の思いでステージの最前列、なのはとフェイト達の
真正面にまで辿り着く。

目の前では、先程よりも近くでなのはとフェイトがその歌声を披露
し、観客に笑顔を見せている。

そして、なのはは、リオスが一番前の位置にまで来ていることに気
がついたのか……

「……！（ニコッ）」

「あ……」

まるで待っていましたと言わんばかりに、花が咲いたような笑顔を受けべてくれた上で、リオスにウィンクを飛ばしてきた。

『それじゃあ……次が最後の曲になるんだけど………』

「「「ええ〜〜〜〜！！？」」「」」

リオスが最前列に辿り着いたのと同時に、ライブはクライマックスに入る。

なのはが、次が最後の歌になることを宣言すると、観客たちから残念そうな声が一斉に飛んできた。

まあ、この反応だけを見ても彼女たちのライブが大成功だったことの証明になるだろう。

『それで、皆にお願いがあるんだけど……最後の曲は……私の大好きな人に贈りたい曲なの。私の想いを伝えるために、最後の一曲を歌わせてもらえないかな…？』

ザワザワ……ザワザワ……

そのなのはの言葉に、観客たちは一斉にざわめき立つ。
当然だろう、ある意味それは『今から好きな人に告白します』と宣言しているのと同義なのだから。

なのは学園での人気は最早言わずもがな。そんな彼女の意中の人、彼女の心を掴んで離さない男、ハッキリ言って羨ましい限りだ。嫉妬に狂った奴らが暴走してもおかしくない発言でもあったが、体育館の中はざわめく程度でそれ以上のことはない。

傍にいるフェイトも、事の成り行きを黙って見守っている。

すると……

「いいですよー！ー！！ 頑張ってコクっちゃってくださいー！ーい
！ー！」

「羨まし過ぎるけど、なのはさんをお願いだったら応援します！ー！」

「ライブで告白………憧れるなあ………」

「ていうか、相手誰だよ羨ましい！！ でもなのはさんなら仕方ないな」

というように、観客の皆々からそんな温かい言葉が飛んできた。その中に、なのはの我侬を非難するような声は一切ない。

皆、なのはの真剣な表情、乙女な顔を見て心打たれたのだろうか？
それとも、なのはの日頃からの行いや、人柄がそうさせるのだろうか？

いや、恐らくはその両方なのかもしれない。

『みんな……本当にありがとう………！』

その声に、なのはは一瞬目に涙を溜め、それを隠すように頭を下げた。

ステージ上で、しかもまだライブは終わっていない状態では泣いたりできない。この声援に応えるためにも、なのははリオスに精一杯の想いを込めた歌を届けなければならないのだ。

『それじゃあ……聞いてください。今日最後の……私の気持ち全部を込めた一曲です……！』

その一言と同時に、伴奏が始まる。フェイトはこの曲には参加しないようで、隅のほうに移動しなのはの姿を見守る。

親友の長年の恋が成就するこの瞬間、それを黙って見守ることが自分にできることなのだと、彼女はそう思っていた。

「（なのは……ガンバレ………あれ、そう言えばルークがいないような………？）」

彼女の感じた違和感は、まあ今は一先ず置いておこう。大した問題ではないし、なのは&リオスの恋、ここが天王山になるのだ。

主人公（笑）の為に時間を割いては読者様からお怒りの声が届いてしまう。

「なのはさん……………」

リオスがなのはの名を呼ぶと同時に、最後の一曲が始まる。その一瞬、なのははもう一度リオスに、ニッコリ笑い掛けた。

本日最後の曲にして、なのはの思いを込めた曲。

それは、在り来りだとか、チープだとか言われるかもしれないが、典型的なラブソングだった。アップテンポなそれではなく、静かでそれでいて仄かな熱が感じられるバラード。

ずっと言えなかった気持ちを、気持ちを振り絞って伝えようとする女の子をイメージした曲。

その曲の中に、リオスは目の前のなのは自身を見た気がした。

「……………」

観客たちも、なのはの曲に聞き惚れていた。

この曲を送られている相手、即ちリオスに対する嫉妬心など、一瞬で吹き飛んでしまった。

それ程に、なのはの曲には彼女自身の想いと、相手のことを思う強い気持ちがしっかりと籠っており、彼らもそれに感じ入っているのだ。

なのはの気持ち、リオスへのメッセージ。

今まで、幼馴染という関係を壊したくないと、その怖さが二人の関係をあと一步のところまで踏み止まらせていた。

だが、なのはもリオスも、『一步』を踏み出し、自分たちの新しい関係に、新しい世界に足を踏み入れた。

「（リオス君、私は……高町なのはは……あなたのことが好きです）」

曲が終わる。

なのはの気持ちを、リオスに届けるための歌が。

彼女の気持ちは、歌詞となって旋律となって、リオスの心に届けられた。あとは、彼が動返事をするかである。

「リオス君……」

歌い終わったなのはが、ステージから降りて最前列にいたリオスの目の前に立つ。その頬は少し紅潮しているものの、目はいつもの真っ直ぐさを保ったままだ。

リオスも、彼女の視線に自分のそれをまっすぐにぶつけ、暫くの間見つめ合う形になる。

しかし、それはロマンチックなものではなく、先ほどの歌、なのはの気持ちがいっかりと伝わったということを伝えるためのものだ。

「なのはさん」

「うん……」

そして、リオスはいつもと同じようになのはに話しかける。なのは
も、そんなリオスにいつも通りに返事をする。

これが、二人にとっての、ただの幼馴染だった二人にとっての、『
最後のいつも通り』。

今日からは、また新しい関係となった二人の『いつも通り』が始ま
る。

「夏祭りの時の約束……今日この日まで、もう少しだけ『友達』
でいてくれるかって約束……覚えてますよね？」

「うん……もちろん」

今までは、幼馴染で、友達で。今の今まで、初めて会った時からず
っとそうだったそれが、今日変わる。

より近く、より親密で、より暖かく、より深い関係になる。

今日で、幼馴染からも、友達からも……卒業する。

「今日からは、いえ……今からは……もう友達じゃないです」

「うん……」

その答えに、なのは堪えていた涙を思わず溢れさせる。

なのはから、リオスに好きだったり、愛しているなどという『言葉』は送らない。言うべきことは、さっきの『歌』で全て伝えたのだから。

あとは、リオスの気持ちを伝え、友達という関係を終わらせるだけ。

「僕も、なのはさんのことが……好きです」

「うん……!」

おおおおおおおおおおお!! (パチパチパチパチパチ!!)

その言葉がリオスの口から出た瞬間、なのはは勢い良く彼に抱きついた。同時に、周囲の観客たちからは拍手の嵐と歓声が上がった。

大勢の前での告白劇、恥ずかしくもあり怖くもあった。

しかし、同時にこんなにも多くの人から祝福してもらえる。なのはは自分のなけなしの勇気全てを掛けた今回の告白を完璧な形で終わることが出来た。

「これからは、恋人同士……ですね……」

「うん……。だからね……。こういふこともしちゃうんだよ?」

「え……」

リオスに悪戯っぽい笑みを浮かべながら、なのはは少しか爪先立ちになり……

ちゅ……

おおおおおおおおお！！！！？

「あ……うう……なのはさん……いきなりですよ……」

「えへへ……でもね、これがこれからの私たち……なんだよね？」

「……そう……ですね……」

大衆の中、リオスの唇に当てられたなのはの唇。

恥ずかしそうでもあり、嬉しさを隠し切れないリオス。自分の大胆さに少し驚きながらも、素直な気持ちで彼に接することが出来る喜びを噛み締めるのは。

これが、二人のこれからの関係、形。二人にとっての、二人だけの関係。

こうして、学園祭に沸いた体育館のライブステージにて……伝説的
且つ、衝撃的な告白劇が大成のもとに幕を閉じたのだった。

……誰かのことを忘れていたような気がするが……まあ
いいか。

第五十二話 伝えたい思い、ありますか？（後書き）

F20C「ということで、なのは&リオスくんが見事にリア充となりましたー はぁ……リア充爆発すれば良いのに……（ボソツ）」

ホムホム「うわぁ……本音が全開ですね……ていうか、今週も前書きがエライことに……（；・・）」

アインハルト「ていうか……今週、誰かのことを忘れてていうか、見ていないというか……」

「???」俺だよ俺!! 前書きで弄られてるから気がついてよ!!
「?」

F20C「おや? 今何かいた気がしたんだが……? 俺のログには何も無いな……アイホムの二人はどう?」

ホムホム「僕のログにも何も無いです」

アインハルト「私の方にもないですね」

次回 第五十三話 フェイトさん観察日記

次回からは、ルークとフェイトさんをメインにして頑張っているのかなと思います。スクラパも連載一周年が目前に迫っているので、そろそろメインの二人の関係もハッキリさせなければ……

スクラパ本編が完結したあとは、だーくさいど・くろにくるとアイホムの甘々生活を不定期で更新していこうかなと思っています。

あれ？ スクラパの終わりが見えない件について。

??? 『世界に良き終わりを』

ドクターはお帰り下さい

第五十三話 フェイトさん観察日記 【一日目】（前書き）

本日のメインは我らがお姉さんフェイトさんでございます。ダメっ娘化してしまうフェイトさんのお姿をお楽しみください。

閣下「後悔するぞ、俺の出番を削ったことを」

主人公（笑）ではなく、真主人公がいる時点で、オメーの席ねーから。

閣下「い、いい冗談だ。感動的だな。だが無意味だ（´・・・´）」

申し訳ございません、このような前書きで。

第五十三話 フェイトさん観察日記 【一日目】

これは、甘やかしお姉ちゃん地球代表、フェイトさんのルークの居ない2日間に密着した、感動と涙のドキュメンタリー（笑）……………なのかもしれない。

【一日目】

「うう……………」

「ふえ、フェイトちゃん…………無理かもしれないけど…………げ、元気出して?」

「そ、そうですね! たかだか二日間のことなんですし」

「ぬう……………」

魂の抜けたような表情と、その反応。

なのはとリオスの言葉にも、電池の切れかけているロボットのようなりアクションしか取れない。

フェイト・ハラオウン、押しも押されぬ美人系ナイスバディな甘やかしお姉ちゃんの変わり果てた姿が、そこにはあった。

「でも、ルークさん凄いですね。野球の特別強化合宿のメンバーに選ばれちゃうんですから……」

「ですね。普段が普段なので、あまり直ぐイメージできないのが……その、少し残念ではありますが」

「むう~~~~~」

一緒に登校中のアインハルト&ホムホムの言葉にも、やはりこのように気の抜けた返事。というか、屍状態といったほうが適切だろうか？

兎に角、我らがお姉さん、フェイトさんは枯れていらっしやった。

というのも、今日からの二日間、フェイトの溺愛している弟、ルークが野球の特別強化合宿に招致されたとかで家と学校を空けることになったのだ。

普段は……『あんなの』だが、一応野球に関してはそれなりの実力があるということだ。

「はあ……」

が、ルークが暫くの間居なくなるということで、かなり精神的にやられてしまっているのが、今のフェイトさんなわけで。

禁断症状が出る手前のような感じがありありと見られ、先日付き合い始めたリオス＆なのはも、思わずイチャつくのを躊躇ってしまわ

れるような状態なのだ。

「これ……かなり重症みたいですけど……大丈夫なんですか？」

「あはは……ま、まあこれが初めてつてわけでもないし、今回は二日で帰ってくるだろうしね。そこまで酷い事にはならないと思うよ？」

「だね……前に、合宿で一週間ルークくんが家を空けちゃった時なんか、真っ白に燃え尽きてたから……」

ホムラが心配になつてか、リオスとなのはに尋ねるも、彼らにとつてはこういったイベントは初体験……少し表現がいやらしいのでもとい、初めてのことではない。

リオスとなのはが言うように、過去ルークが長期間家を開けてしまふことは、ままあつた。

その度、フェイトさんは今のよう……枯れているというか、萎れているというか。言うなれば、ダメダメフェイトさん状態になってしまうわけだ。

普段からダメダメなのでは？ という突っ込みは無しの方でお願いしたい。

「うう………」

「あ、フェイトさん、そのままだと……」

ゴンッ!!

「ふみゆ!!?」

「電柱にぶつかりますって……言おうと思ったんですが……」

このように、アインハルトが言わなければ、目の前に迫った電柱にさえ対処できない。まあ、結局ぶつかってしまったわけだが。

電柱にぶつかるフェイトさん……何故だろう、こつも萌えてしま
うのは。

「……し、心配だなあ……」

というように、それを見ていたなのは、リオス、ホムラの三人揃った
眩きから、ルークのいない2日間が幕を開けたのだった。

【午前11時20分、授業中にて】

現在、フェイトとなのはのクラスは現代国語の時間。

黒板には縦書きで書かれた、教科書の内容についてのポイントなどが
丁寧な字で書き出されており、教卓に於いては現国担当の先生が

教科書片手に教鞭を振るっている。

まあ、いつも通りの授業風景だ。

ただ一人のイレギュラーを除いては……

「あゝと……は、ハラウン？ 体調でも悪いのか？」

「いえゝ……ちょっとゝ……栄養不足で（ルーク的な意味合いで）……」

「そ、そうなのか……？ かなり顔色が悪い………というか、今日のお前、全体的に真っ白な気がするんだが……」

ルークという栄養分が朝から少し足りない気味のフェイトさん。

やはり、彼女の不調は教師にも伝わったらしく、いつも真面目且つ、成績優秀なフェイトを心配する。

教師というのは、基本的に流動的な役職なので、この現国の教師にとっては、今のようなフェイトは初めて目にするのであろうから無理はない。

「えゝとだな……大丈夫そうなら、次の段落からを読んで欲しいんだが」

「は……はい……えと……」

「フェイトちゃん、89ページだよ」

フェイトが若干色抜けしているような気がした教師だが、出来れば授業を円滑に進めたい。

そも、今日はフェイトの席がある列が当たることになっていたので、予定通りに事を運ぶだけの話だった。

少しポケーツとしてしながらも、フェイトは教科書を手に取り、なのはが小声で教えてくれたページを開く。

「って、ハラオウン！！教科書逆さに持ってどうするんだ……？」

「あう………」

「（ありゃ……今回ののはかなりキツメの症状みたい……）」

教科書を開けたのはいいのだが、漫画の如き失敗をしでかしたフェイト。

そんな彼女の姿に、なのはは今回の禁断症状の進行レベルが、過去最高なのではと思ってしまっただった。

「えと………」
『祐介は姉である灯に、あかり今回の事件について相談することにした。灯と祐介は、ご近所からも評判の……仲の良い姉弟で………』

「は……ハラオウン………？」

「姉弟……弟………ルークウ………。（。、。）。」

クラスにいた全員「~~~~~（ええ~~~~~）………??」
「」

更に、読み始めたはいいのだが、今日の授業範囲はよろしくなかった。先週から、姉弟の絆をテーマにした作品を扱った章に入っていたので、読む文章は言わずもがな、『弟』だったり『姉弟』だったり、今のフェイトにとってはNGワードのオンパレードだったのだ。

それらの単語に誘発されたのか、フェイトはSDキャラ化したように（実際、ダメダメフェイトさんは基本的にSDキャラ化しています）小さくなり、ヨヨヨと涙してしまった。

流石に、これには教師だけではなく、クラスメイトたちもどうしていいのやと、呆氣に取られつつ、困り果ててしまうのだった。

【午後12時50分、お昼休みにて】

午前中の授業が終了し、昼休みに入ってもフェイトはダメダメなままだった。

というか、時間を追うごとにダメっぱさが進行しているようにも見え、なのは達はアインハルトとホムラ達も誘った上で、お昼を一緒にすることにした。

大人数で食事をするので、フェイトの気分を紛らわせるように出

来ればと考えたわけ……なのだが……

「はい、リオス君……その……お弁当作ってきたんだけど……食べて、くれるかな……？」

「な、なのはさん……僕も、お菓子を作ってきたので……食べてもらえますか……？」

「うん……じゃあ、お互いのを……食べさせ合ったりして……えへへ……」

アイホム「……ティアナさん、あの二人って……」

「気にしたら負けよ。というか、固有結界に巻き込まれた瞬間、砂糖を吐き出すことになりかねないから、直視しないようにね」

そう、なのは&リオスだ。

つい先日、付き合いだしたばかりの二人にとって、一緒にいる時間というのは貴重かつ幸せなもの。

フェイトのことも勿論だが、やはりラブラブしたいということだろうか。

アインハルトとホムラが、ティアナに二人のことを尋ねた結果返ってきたアドバイス。ハッキリ言って、冗談では済まされない。

「それで……フェイトさんは……」

「……………あゝ……………あの大きな雲……………中にラピ　タとかあるのかな……………」

「こっちはこつちで、かなり重症ね……………というか、軽く精神疾患みたいな症状に……………」

ホムラがそう言うと同時に、アインハルトとティアナもフェイトの方を見る。

ダメダメフェイトさん（SDキャラ）は、空をぼーっと見ながらうわ言のようにそんなことをボヤいている。

というか、若干目のハイライトが薄くなっているような気がする辺り、かなりキテいるようにも見えなくもない。

「あ……………そう言えばお弁当……………」

と、唐突に今がお昼休みで、昼食タイムであることを思い出したように、フェイトはゴソゴソと自分のお弁当を取り出す。

だが、そのお弁当をみた瞬間……………アイホムとティアナは声を揃えて突っ込まざるを得なかった。

「よいしょつと……………」

フエイトの弁当箱の中身　　刻みネギ（冷凍庫に入れてあったのであろう品物）

「あ……間違えちゃった……」

「「「どんな間違え方！！？？」」」

どうやらこのダメダメフエイトさん、自分の弁当箱と間違えて、冷凍された刻みネギ（冷奴などに掛けるための）が入ったタッパを弁当を間違えて包んできたらしい。
わざわざ冷凍庫から刻みネギ入のタッパをだした上で、布でくるんでくる辺り、相当ボケている。

「うーん……これってかなり重症っていうか……」

「栄養失調みたいになってる気が……　ルークさんがいないことで、ここまでお変わりになってしまっんですね……」

「ルークも相当のシスコンだけど、フエイトさんの場合はそれに輪をかけて、深刻なレベルのブラコンなのよね……　将来的に、絶対一人暮らしとか無理なんじゃないかしら……」

ティアナの言うとおり、進学若しくは就職した場合、住む場所にもよるのだが、フエイトの生活が成り立つのか、甚だ疑問ではある。
アインハルトが栄養失調と形容するように、フエイトの必須栄養素の中に、ルークが欠かせなくなっている時点で、フエイトの一人暮

らしは絶望的としか言いようがない。

「そう言えば……刻みネギ……いつもルークが冷奴に掛けてたっけ……生姜は苦いから要らないって……うう……ルークウ……」

「ネギと冷奴から引火した!!?」

「ここまで来ると、何がキーアイテムになってルークに直結するか、分かったもんじゃないわね……」

最早、無理矢理としか言いようのない飛び火の仕方によって、再びフェイトは体育座りになりながら、シクシクと半べそ状態になってしまう。

半べそ状態のフェイトさん……ちょっと萌えた。

「これ……明日になったらどうなってるのか、かなり不安ですよね……」

「今でこの状態だし……時間経過と一緒に酷くなってる感じだしね」「ルークが帰ってくるのが……ええと、明日の夕方だから……今から大体24時間ってどこかしら?」

高々2日、だがされど2日だ。

しお姉さんに変身。

SDキャラ化していた状態も、いつものナイスバディにその姿を戻していた。

「る、ルーク!? え、えつと……今は休憩中?」

『まあうん。 昼休みで、少し時間が出来たから姉さんがどうして
るのかなって……か、勘違いしないでよ!!? 別に姉さんが心配
だったとか、そういうのじゃないんだから!! ただ単に、ちょ
つと暇だったから、姉さんに電話しようかなって……ただそれだけ
なんだからな!!』

「えへへ…… そっかそっかあ…… そんなにお姉ちゃんの声が
聞きたかったんだね…… もう…… ルークはやっぱり、私がいないと
ダメなんだから……」

ここで、アイホム&ティアナ、引いては読者様のお声を一言で表そ
う。

『お前が言うな』と……まあ、フェイトさんなので全てが許され
てしまうのだが。

ルークの声聞いたことで、ルーク分を補充することが出来たのか、
フェイトは先程のグロッキー状態が嘘のように活き活きし、どこか
ツヤが出てきたようにさえ見える。

「……………ねえ……? 初めから、ルークさんに電話とかしてもらえ
れば良かったんじゃない?」

「で、ですね……。練習などがあると思うので、頻繁には無理だと思いますが……」

「あとでメール入れときましようか……少し時間を見つけて、フェイトさんに電話してあげなさいって……」

と、そんな具合で、ルークの電話という、意外な方法でフェイトさんのルーク欠乏症の解決策が分かった。

ルークとの電話を、嬉々とした様子で楽しんでいるフェイト。その表情からは、心の底から嬉しいと思う気持ちが溢れんばかりで、どれだけ彼女がルークに対して愛情を抱いているのが分かる。

こうして、一応の解決を見せたフェイトさんのグロッキー&ダメっ娘化現象だったのだが……そうは問屋が卸さないとはよく言ったもので。

事件はまだまだ、始まったばかりということを、ホームホームやインハルト、ティアナ達は知る由もなかった。

「リオス君……ね、今日は私が全部食べさせてあげるから……
というか、もう今日からリオス君の家に通い妻に……」

「っ、妻って……そ、それはあと二年待ってください……僕が18歳になってから……」

「じゃ、じゃあ……18歳になったら、直ぐに結婚してくれるの……?」

「も、勿論ですよ……なのはさんは、僕の嫁です……」

「嬉しい……リオス君……」

なのはとリオスは……取り敢えず放置しておく。
突っ込んだら負けかと思っている。

二目目続く……

第五十三話 フェイトさん観察日記 【一日目】（後書き）

閣下「おい、また前書き……。ネタの出所をよく知りもしないのに、ホイホイ使うもんじゃないぜ」

F20C「申し訳ございません、このような変態で」

閣下「忠告しただけなのに……。。。。。。」

アインハルト「フェイトさんのダメダメ状態……。取り敢えずは治ったようなのですが」

ホムホム「うん……。なんだかイヤな予感がするんだよね」

アインハルト「それ以前に、なのはさんとリオスさんについては……ちょっと羨ましいというか……」

ホムホム「だね。仲が良いっていうか、ラブラブっていうか……。やつぱり、年上の人の恋愛って、大人って感じがしちゃうよ」

アインハルト「……。羨ましい（ボソッ）」

ホムホム「え？ なんかつた……？」

アインハルト「にゃ、にゃんでもにゃいです……！」

第五十四話 フェイトさん観察日記 【二日目】（前書き）

京阪電車の一部区画で、けいおん！のラッピング電車が運行するらしいですねw

滋賀県の大津線・石山駅～坂本駅間での運行とのことで、8月2日から12月の下旬まで走るそうです。

大津線って滋賀県のどのへん走ってるんだ？……（、・・・）

近かったら行ってみようかとか、あずにゃん（^ ^）ペロペロとか、そんな事を考えていたりいなかったりする京都府民のF20Cでございます。

第五十四話 フェイトさん観察日記 【二日目】

フェイトさん観察日記 【二日目】

【朝・通学路にて】

ホムラ視点

あ、どうも。ホムホム……じゃなかった、ホムラです。

実は僕とアインハルト、昨日のフェイトさんの様子が心配になり、今日もなのはさんとリオさんと一緒にフェイトさんを家まで迎えに来てます。

現在、家の前でフェイトさんが出てくるのを待ってるんですけど……。

「遅いね」

「だね……いつもなら、もう家から出てくる時間なのに……」

そうなんです。リオさんとなのはさんの言うとおり、中々フェイトさんが家から出ていらっしやらないんです。

時間にはかなり余裕があるので、遅刻はしないと思うけど……流石に心配になってしまいます。

「ルークさんの電話で、取り敢えずの危機は脱したと思ったのですが……まだなにか問題があったのでしょうか……？」

「うーん………なんだか最近、フェイトちゃんがどんどん不思議生物と化していつてるような気がするんだけど。ほら、SDキャラになって小さくなっちゃうところとか」

「なのはさん、それもの凄く今更なような気がします………」

アインハルトの言うような心配は僕にもあった。ここまで遅いとまた何かあったんじゃないかと思ってしまう。

「ていうか、なのはさん………その疑問、多分読者の皆様が感じていることだと思います。」

そして、待つこと数分。気になった僕達が、インターホンを鳴らすとしたまさにその時。家の玄関が、ガチャリと音を立ててゆっくりと開かれた。

そして、そこには……。

「おはこんばんちわ………」

四人「………」

朝昼夜の挨拶がごっちゃ混ぜになった、新型の挨拶をしながらフェイトさんが現れた。

『昨日と同じ、SDちびキャラ姿＋全身的に真っ白＋眼のハイライトが完全に消えている状態』で……………

え…？ どうなってるの…………？

「あ、えっと…………フェイトちゃん…？ その姿は…………？」

「ああうん…………昨日、お昼にルークと電話してから少しの間は元に戻ったんだけど…………それからルーク、もの凄く忙しくなっちゃったみたいで、電話できなくなっちゃったんだって…………それで、さつき起きたら…………こうなっていました…………えへへ…………（死んだような笑い）」

なのはさんが、フェイトさんにちびキャラ化、全身真っ白、目のハイライト消失の理由を尋ねると、乾いた笑いと共にフェイトさんがポツリポツリと答えてくれた。
正直、もの凄く怖い。

と、そんなことはいんだ。
うゝん…………多分だけど、昨日のルークさんの電話で一時的に回復した、フェイトさんのルークさん欠乏症は多分完全に治ったわけじゃないんだ。

寧ろ、一回ルークさん分を補給した場合、その供給が途切れちゃつて、リバウンドっていうか、反動が大きくなってダメダメ化が一気に進行しちゃった……みたいな感じなのかな？

まるで禁煙中のおじさんみたいだ……

「これは……下手にルーク分を与えたのがダメだったのかな……？
一旦ルーク分を摂取したはいいけど、それが途切れてしまつと前よりも症状が深刻化しちゃうわけなんだ……」

「にやはは……フェイトちゃん……本当にルークくんのこと大好きだよね……」

僕と同じ結論にたいたらしいリオスさんに、なのはさんは苦笑しながらフェイトさんのことを見ていた。

ていうか、これはもう大好きっていうレベルを超えてるような……。当のフェイトさんかというと……。

「えへへ……ルーク、そんなにお姉ちゃんの下着が欲しいだなんて……仕方ないなあ、一枚だけだよ？ え？ その下着を履いてスカーートをたくし上げて、口で啜える？ そ、そんなの恥ずかしいよお……」

「フェイトさん！？ 何、電柱に向かってとんでもないこと言ってるんですか！ お、お気を確かに……！」

電柱に向かって、かなり際どい発言をしていらつしゃった。

アインハルトが必死でちびキャラフェイトさんをこっちの世界に戻そうと奮戦しているけど、どういう力をしているのか、ちびキャラフェイトさんは全く動かない。

「お、お姉ちゃんがこんなに恥ずかしい格好してるんだから、ルークも……ああ、そんな……！ もうすでに蠟燭と三角木馬、鞭に縄を用意してるだなんて……やっぱり、ルークはお姉ちゃんのツボをちゃんと心得てるんだね……」

「フェイトさんダメ……！ それ以上はこの小説、もとい……！ お話消されちゃうからああああ……！！」

更に危ない方向に突っ走ろうとするフェイトさんを、僕も助太刀してアインハルトと二人で止めに掛かる。

朝っぱらからSMプレイは流石にまずい。フェイトさんの名誉のためにも、僕の鼻血の被害と、アインハルトからのお仕置き回避のためにも。

こうして、振り出しも戻った感と、昨日に引き続いての非常に大きな不安と共に、ルークさんの居ない二日目の朝が明けていったのだ。

【三時間目・体育の時間にて】

視点は引き続きホムホム。

その日の体育は、体育館にてバスケットボールの授業だった。さらにさらに、この日はとなりのコートで高等部三年生授業、フェイトさんとなのはさんのクラスの体育の授業が行われることになった。

ちなみに、三年生はバレーボールらしい。

聖祥の広い体育館でないとできない授業形態だろう。

そして勿論、僕とアインハルトが普通に授業に集中できるはずもなくって……

「し、心配だよね……あの状態のフェイトさんが体育とか……」

「というか、心配するなという方が難しいですよ……」

言いながら、僕とアインハルトはバスケットボールをパスし合い、フェイトさんたちの方に注意を向けながらパスの練習中だ。

アインハルトの姿は、いつもの制服姿から体操着に。大昔は『ブルマ』なるものが存在したらしいが、今では化石のようなものらしい。それはこの学園でも同じで、体操着はそういった劣情を抱くような

もデザインではない。

だが、やはり体操着姿のアインハルトはもの凄く可愛いということ
を、ここに宣言しておきたい。

おっと、まずい……あんまり脚とかを見てたら、何だか鼻血が……
危ない危ない……。

「ふえ、フェイトちゃん！！ 体操着の上着、前と後ろ反対だよ！
？」

「ふにゅう……」

「ああもう……ほら、フェイトちゃん、ちょっとこっち来て。 直
してあげるから」

「はにゅう……」

と、嫌な予感は見事に的中してしまって、上着を前後ろを逆転させ
て着てしまっているフェイトさんを、なのはさんが物陰に連れて行
ってしまった。

恐らく、着替えさせてあげるのだろう。ある意味、同じクラスなの
はさんが一番の苦勞人なのかもしれない。

でも、問題がバレーの試合が始まってからだ。

ちびキャラ&ダメダメ化したフェイトさんに、まともにバレーの試
合ができるとは到底思えない。

いくらフェイトさんの地の運動神経が抜群でも、やっぱり限度とい

うものがある。

そして、これまた僕の嫌な予感が的中してしまうことになって…………

「それ!!」

「任せたわ!!」

「合点承知!!」

三年生のお姉さんたちが、綺麗なトスを繋ぎ、攻撃担当の人にスパイクのチャンスを作る。
そして、そのチャンスのアタッカーのお姉さんはしっかりとモノにして、スパイクを放つ。

その方向には、もうお分かりだと思うがフェイトさんが居て…………

パコーン!!

「うにゃ!!?」

「ふえ、フェイトちゃん!!?」

ボーンとしていたフェイトさんの顔面に、バレーボールがクリティカルヒット。ちびキャラフェイトさんは、グルグルと目を回しながら

ら倒れてしまった。

うわぁ……アレは痛そう……

バシンッ！！

「あ痛っ！！？　って、アインハルトなにすんのさ！！？」

と、僕の方にも何故かもの凄く強いパスが飛んできた。フェイトさんと同じように顔面でそれを受けてしまった僕。

当然、そのボールを放ったのはアインハルトしか居ないわけで……

……？

なんで、アインハルトが僕の顔面にボールを……？

「何ですか……上級生のお姉さんたちの方ばかりをジロジロと……やつぱり、胸ですか、胸なんでしょうか……（ブツブツ）」

「……？」

うーん……小声でアインハルトがなんて言ってるのかよく聞こえない……。でも、何だか怒ってるのかな……？　ちよっとムスツとしてるし……。

「わ、私だってその……あと何年かすれば、ホムラさんを満足させてあげられるくらいには成長して……それでもってあんなコトと

か、こんなコトとか、そんな事までしてあげるプランがあるというのに……全く……ホムラさんは本当に全くです……（ブツブツ）」

「えっと……？ アインハルト……？ 何か、怒ってたりする……？」

「にゃ、にゃんでもありません！！（プイッ！）」

؟؟？

やっぱり怒ってるじゃないか……、女の子っていうのは難しいな……。それに、アインハルト若干猫語になってたし……。

あ、もしかして、今日の朝ご飯、お米よりトーストのほうが良かったのかな……。？ それとも、昨日洗濯機から洗濯物を取り出す時、アインハルトの下着と一緒に驚掴みしたこと、まだ怒ってとか……。？

おっと、いかんいかん……！ また鼻血が……。うう……。

ちなみに、フェイトさんは保健委員さんの手によって、保健室に運ばれたらしい。

それから、アインハルトは何故か、お昼休みまで口を聞いてくれませんでした……。ちょっと悲しい……。

ホムラ視点 終わり

そして、紆余曲折を経た後の放課後……

「かゆ……うま……」

「あ、あの……ちびフェイトさんがどこのラクンシティのゾンビみたいなこと言ってるんですけど……」

「授業中もね、いきなり泣き出したり、魂が抜けかけたりで大変だったんだ……」

リオス&アイホム「……なのはさん、ホントお疲れ様です………！」
「」

放課後に帰ってくる予定のルークを迎えに、アイホムとなのは&リオス、ちびフェイトは最寄りの駅まで彼を迎えに来ていた。

フェイトは、最早超えてはいけないう線の上をふらふらしている状態で、たまに電池が切れたようにボーっと空を見上げたり、来る途中にあったケンタキーのカーネおじさんの像に話しかけたりと、かなり危ない人になっていたが、ルークが帰ってくることを肌で感じているのか足取りだけはしっかりしていた。

リオスとアイホムは、この二日間フェイトの世話をメインで引き受けていたなのはに尊敬の眼差しと、労いの意味を込めて口を揃えてお疲れ様と言っておいた。

「私、この戦いが終わったら、ルークとチヨメチヨメするんだ……」

「フェイトさんはもう末期ですね……意味もなく死亡フラグ立ててますし……」

「ていうか、チヨメチヨメって……。まあ、フェイトさんには基本的にフラグは無効化されるから安全でしょうけど」

「ふ、二人とも？　メタ発言はやめようね？」

フェイトのいきなり且つ、意味不明な死亡フラグの呟きに対するアイホムのリアクション。かなりメタな発言だったので、なのはによって直ぐに窘められることになる。

まあ、流石にチヨメチヨメはないと、そう思ってしまうのには同意してしまうが。

そして待つこと数分。

ルークが乗っているであろう電車が到着し、多くの学生や、会社帰りの大人達が改札口から雪崩のように吐き出されていく。

その人の波の中を、四人はルークの姿を見つけるべく、注意して見守る。

事前に送られて来たメールには、予定通りの電車に乗ったと連絡があったので、どこかにいる筈なのだが……。

「……はっ！！ ルークの匂い！！」

と、その時。

いきなりちびフェイトさんが、いつものサイズのフェイトさんに一瞬で戻ってしまった。

そのまま、フェイトはいきなり走りだしてしまう。どうやら、ルークの匂いを嗅ぎつけ一気に欠乏症が治ったらしい。本当に、ある意味この小説内での不思議生物としてのランクを上げつつある御方だ。

「ちょ、フェイトさん！！」

「追いかけましょう！」

アイホム二人が止める間もなく、猛スピードでダッシュしていくフェイト。

残された四人も、彼女の跡を追い、全力でダッシュする。

しかし、この時のフェイトは世界記録を狙えるのではないかというくらいの速さで地面を駆け抜け、四人はあっという間にちぎられてしまった。

「は、速っ！！？」

「運動神経いいってレベルじゃないですよねこれ……!!」

リオスとホムラがそう言っている間にも、フェイトの姿は見えなくなってしまうそうになる。

ルークが絡むとんでもない身体能力を発揮する。ブラコンパワーは化け物かと思えてならない。

そして、その数秒後。どこかで聞いたような男の叫び声と共に、リオス達はフェイトに追い付くことが出来た……。のだが、目の前にはやっぱりというか、予想していた光景が広がっていた。

「ルークウ…… おかえり〜えへへ…… ああ〜本物のルークだ…… もう〜堪えないよお……」

「ちょ!! ねーさん、放してつてば!! 見てるから、周りの皆様方に見られてるから!!! だああああ!! 胸を押し付けないでえええ!!!」

公衆の面前、衆人環視の中、様々な言い方があるが、要するにもものすごく多くの人達の目の前で、制服姿のルークがフェイトに押し倒されていた。

加えて、フェイトはなぜかルークのワイシャツのボタンを少しずつ外しに掛かっている。

「そんな事言ってもダメだもん…… もう今日は、ルークを枕にして寝るから。あ、お風呂だって一緒だから、後ろだけじゃなくて前も

洗ってあげるから」

「全力で拒否させてもらっわー！！ ていうか、姉弟でそんな事出来るわけ無いでしょうが！！ 倫理的に！！」

「ルーク？ 倫理なんてものは、愛の前では大した問題じゃないんだよ？」

「謝れ！！ 世界中の倫理学者の方々に謝れ！！ ってやめ、見るから…… 周りの方々からの2828視線が痛いからああ！！！」

ジダバタ暴れるルークだが、フェイトの圧倒的なパワー（ブラコン・トランザムモード）によつて、全く抜け出せない。

周囲からは、生暖かい視線と、『あらあらまあまあ』というおば様方の視線が一点集中し、ルークは顔を真っ赤にしていた。

仲の良い姉弟が、久しぶりの再会（とは言っても2日だが）に感極まって熱烈なじゃれ合いをしている、という風に周りからは思われているらしい。

この町の住人、本当に寛容というか、いろんな意味で心が広すぎる。

「こ、こんな人前で…… 皆に見られながらとかは…… 俺初めてなのに……」

「大丈夫…… 痛いのは最初だけだから。そのうちそれが良くなってくるから…… 安心して？ お姉ちゃんがちゃんとリードして、ルークを大人の男にしてあげるから…… えへへ……」

アイホームとなのは&リオスの目の前で繰り広げられる、フェイトと
ルークの感動の再開シーン。

あと一歩進めば、間違いなくR指定が入るレベルのやり取りに、四
人は口を揃えてこう言った。

「……何か……逆じゃない……？」

「そういう問題じゃないだろ！！ ていうか、お前らも見えてない
で助けるよおおお！！ 上か下かとか、自分で言っというてなん
だけど、セリフの内容云々とかはどうでもいいわ！！！」

こうして、二日間にわたってのルークの居ない日々。そして、それ
によるフェイトさんのルーク欠乏症事件は、衆人環視の中、熱烈な
ハグと愛情表現と同時に幕を閉じることになった。

ちなみに、あのままでは警察の厄介になりかねないということで、
フェイトさんは簀巻きにされた上で家まで運ばれた。

こうして、なのはとリオス、アイホームの間にまた一つ、新たな教訓
が生まれた。

『フェイトから、ルークを離すべからず』

お後がよろしいようで。

「よろしくなあああああい！……！」

ハラオウン邸・フェイトの部屋

「スウ……むにゃ……るーくう……えへへ……やあん……そんな
とこ触っちゃあ……もう……そう言うルークだって……こ
ここんなに硬くして……むにゅ……」

「どういふ夢を見てるんだこの人は……」

家に帰ったルークは、フェイトをベッドに寝かせた後、彼女の部屋の
ソファに座り、フェイトに付いていてやることにした。

仕方のないこととは言え、ルーク欠乏症によって、フェイトはここ
二日間まともに眠れていなかったらしく、ベッドに入ると共に気持ち
よさそうに寝入ってしまった。

自分の留守が招いてしまったことと分かっていたルークは、少し責
任を感じてしまっていた。

「あんなコトまで……全くねーさんは……俺たちは姉弟だったの
……」

駅前でのことを思い出すルークだったが、直ぐにそう呟いて邪な思いを頭から振り払う。

目の前で気持ちよさそうに眠っている、息を飲んでしまうほどの美女に対しての劣情を何とかして振り払おうとした。

自分達は、姉弟なのだからと。

「でも……ねーさんは……そんなこと全然お構いなしなんだよな……」

だが、フェイトはそんなルールは知りません、ゴミ箱にポイします。という勢いで、ルークに愛情を向けてくる。

正直、嬉しい。

いや、嬉しくないわけがないだろう。ルークもまた、姉の事が大好きなのだから。

フェイトのことを、姉という人枠で括れなくなってしまったのは……そう、中学生あたりからだったか。気がつけば、彼女のことを異性として見るようになっていた。

「俺だって、好きなモノは好きって言いたいさ……でも、やっぱりダメなんだよ、ねーさん……」

フェイトのことを異性として意識するようになってから、ルークは

彼女に対して素直になれなくなった。

どうしても、姉弟という概念がルークの中では大きな壁となっていたのだ。

だからこそ、ツンツンしてフェイトを遠ざけようとしたのだが……
…その態度をツンデレだと思ったフェイトが（いや、多分実際ツンデレだった）、素直ではないルークに可愛さを見つけてしまうことになった。

結果、フェイトのルーク愛はますます加速したのだ。

「あゝやめやめ！！ こんなコト考えてたって、どうにもならない
つてーの……」

言いながら、ルークは頭を振る。

妙な考えを頭から追い出すために……と、その時、フェイトの勉強机の引き出しから、何か紙のようなものが飛び出しているのに気がついた。

「??」

何か、妙な胸騒ぎがしたルークは、気になったその紙を引き出しから取り出す……。

そこには……

「……………写真か？ で、ねーさんとクロノ兄さんと、父さん母さん

…このちっちゃいのが俺かな？」

それは、どうやら家族写真だった。写真には、フェイトにクロノ、リンディ達の姿が写っており、ルークも赤ん坊姿でしっかりと写っていた。

だが、ルークはその写真におかしな所、というか見覚えのない人物の姿を発見した。

「…………？ あれ？ 赤ん坊の俺を抱き抱えてるこの女の人と、その横に立つてる男の人…………誰だ？」

そう、その写真には、ルークが見たことのない女性と男性が、赤ん坊のルークを抱いて写真に写っていたのだ。

まるで、子供を抱く親のような表情で…………

第五十四話 フェイトさん観察日記 【二日目】（後書き）

閣下「前書きが久しぶりにまともかと思ったら、最後の最後でアレかww（^ ^）ペロペロってお前ww」

F20C「いや、ホントに行ってみようかなって思うわけよ。だってあずにゃんだし」

閣下「意味フだし…取り敢えず聖地巡礼って感じが」

F20C「大学生最後の年だしね。卒論書きつつ、資格とりつつ、目一杯遊んでやんよ（ー、ー、ー）キリッ」

閣下「まあ、どのみち金がいるだろうしバイト頑張らないとな」

F20C「（・・・・・）」

次回 第五十五話 二人きりって、何だかムラムラする

ええい、エクシリアの発売日が遠く感じてしまっ………！

早くミラ様のお姿を拝見し、エリーゼたんを愛でたいのに………

皆さん、予約はお済みですか？

第五十五話 二人きりって、何だかムラムラする（前書き）

閣下語録

ねーさんのことを思うと

ムラムラします

By 閣下

第五十五話 二人きりって、何だかムラムラする

【フェイト視点】

「「海外旅行？」」

冬が本格的に近づいてきた11月中旬のとある日。
夕食の場にて、私とルークは母さんの口から飛び出した単語を、そのまま復唱していた。

勿論、その意味が分からないとかではないんだけど……いきなりだったからかな？ ちよつと驚いちゃった。

「学生時代の友達とね？ ちよつと暫くの間、羽を伸ばしてみないかって誘われちゃって」……ほんの5日間のことなんだけど」

「てことは……ほぼ一週間位ってこと？」

「そうなるわね。ルークもフェイトも、家事は出来るだろうし、その辺りのことは安心できる。仕事も溜まり気味の有給消化しろって、部下からも上司からも言われてるのよね……だから、いい機会だからパアーツと使っちゃおうかしらって」

海外旅行に行くということで、一週間程家を空けるといふ母さん。

勿論、家事とかはなんとでもなるし、母さんにも羽を伸ばして来て欲しいという気持ちはある。

で、でも……母さんがいなくて、お父さんが単身赴任。クロノ兄さんはとつくに自立してて……必然的に、この家には私とルークの二人きりって言うことに……？

あつと、イケナイ……鼻血が……

「ふえ、フェイト……？　なんで鼻血なんか……？」

「き、気にしないで？　ちょっと興ひ……ううん、何でもないから」

「そ、そう……？」

イケナイ、イケナイ……危うく私が変な子だと思われるところだった。

兎に角、明日からの約一週間は、私とルークはこの家に二人だけになるということだ。

二人つきり……二人だけ……

ああ、そんなルーク……。母さんが居ないからって、いつもよりももっとハードなイジメで私を悦ばせるだなんて……。まずはメイド服に着替えるの？

それから……？　机に片方の足の膝を立てて座って、スカートをた

くし上げて口で啜えたままでいる？　そっか、これが興奮するんだね？　ルークはこういうポージングがツボなんだ……。

って、ルーク……あ、申し訳ありません、ご主人様……。その手に持った×××とか、　　は………もお、ご主人様ったら、どれだけ私のツボを心得てるの……？　それをそんなところに、あんなことしちゃ……私もおかしくなって……あふう……

「あのさ……ねーさんがへブン状態になってるんだけど……？　俺ちよっと、リオスの家に泊まってきてもいいかな？」

「そう言わないであげて。またフェイトがSD化しちゃったら、どうしようも無くなっちゃうでしょ？」

「ああ、そういえば………ねーさん………どんだけ不思議生物なんだよ………」

母さんとルークご主人様が何か話してるみたいだけど、私の耳にはしっかりと入ってこない。

聞こえるのは、ルークご主人様からのエッチな命令と、冷たい言葉。加えて、人を蔑むような、家畜を見るような冷酷な目………ああもう………もっと虐めてほしいです………。

「あの………俺の貞操の危機が感じられるんだけど、俺は一体どうすれば？」

「………フォ　スと共にあらんことを」

「諦めろってか!!?」

ルークと母さんが、何故か大量の汗を流しながら話してるみたいだけど……今日の夕飯、そんなに辛いモノあったかな……?

兎に角、そんなわけでその次の日からの一週間。

私とルークは、この家で二人っきり。愛の巣を作ることになったわけです。

ああ、ご主人様……今は料理中で……そんな後ろから……やあ、そんなところに手を……お料理ができなくなっちゃっ……。

おつといけない。また妄想が垂れ流しに……これじゃあ、私がちよつとエッチな子だっと思われちゃうのも時間の問題になりかねないからね。

うん、ちよつと自重しよう……。

二人きり……デヘヘ……

【ルーク視点】

母さんが一週間程家を開けると宣言したその夜。

俺は、この前ねーさんの部屋で見つけた、あの写真を手に部屋のベッドに寝転がっていた。

全く見覚えのない男女によって抱き抱えられている、俺自身だと思われる赤ん坊。

これが意味するところ、事の真相。

可能性は何通りかあったが、そのどれもが内容にはさして差はない。

「どういうことだ……………？ 確かに、俺はこの家で育って来たはずで……………」

そう口にしながらも、頭では分かっていた。

物心、ハッキリとした自我、意識を持っていない赤ん坊時代の頃の出来事であるのなら、俺自身がそれを覚えているはずがない。

例えば自分が捨てられていたとしても、養子だったとしても、ねーさんと姉弟ではなかったとしても……………そんな事、覚えているはずもないし、そんな事が出来る奴はどうかしてる。

「アホらし……………」

言いながら、俺は写真を机の引き出しに突っ込んでおく。
こんなこと、考えているだけ無駄だ。いくら考えたって、分かりっこない。

そう自分に言い訳して、心の中に生まれた疑問詞を打ち消そうとする。

けど……意識しないようにすればするほど、頭の中での暗いイメージは濃く、深くなっていく。

コンコン……

『ルーク？ ちょっといいかしら？』

「っ！？ ……あ、ああ……いいけど」

ビックリした……。

いきなりドアがノックされたもんだから、危うくベッドから転がり落ちるところだった。それも、相手は母さんだ。嫌でも写真のことが頭の中を埋め尽くしていく。

あの写真のこと……聞くチャンス……なのか……？
いや、でも……。

俺が迷っている間に、部屋のドアが開かれ、見慣れた母さんが部屋に入ってくる。

本当に……母さん……なのか？

「明日からの食費とかだけど、ルークかフェイト、どっちが持つておく？」

「え？ ああ……ねーさんでいいんじゃないかな……。落としたりはしないだろうし、まあ買い物とかは一緒に行くから、どっちが持つてても同じだと思うけど」

「それもそうね。分かったわ、じゃあフェイトに渡しておくから、明日からのことはよろしくね？」

「うん…」

いつも通り、とは少し違うけど、母さんの話し方や、俺に対する接し方は変わらない。どちらかというと、俺のほうが少しぎこちない感じた。

母さんと話していると、どうしたって写真が頭を過ぎって、『今日の前で話しているこの人は、本当に母さんなのか？』なんて、馬鹿みたいな疑問を同時に生みながら。

「ねえ、母さん」

「何かしら？」

と、気が付けば俺は口を開いていた。

あの写真のことを聞いてしまえば、全てが明らかになるかもしれない。写真と一緒に写っているんだ、間違いなく母さんならば、あの

写真のもう一組の男女が一体誰で、なぜ俺を抱いているのかを知っているはず。

このモヤモヤも、母さんを『本当に母さんなのか？』と、そんな風に疑わずに済むんだ。

聞いてしまえば、聞いてしまえば全てが……全てが……。

「……………」

「ルーク…？」

だけど……開いた口からは、その続きが出なくて……………。

俺は母さんと呼び止めたまま、黙り込んでしまいそうになる。

何やってんだ……………？ 聞けばいいじゃないか。

もしかしたら、俺の想像とは全く別の答えが返ってくるかもしれないじゃないか。今まで通りで、普通に生活できるかもしれないじゃないか。

【反転】

そんな希望的観測、期待するだけ無駄さ。

きつとお前の想像通りなのさ。それを聞いてしまえば、明日からはお前は『今までのお前』ではきつと居られなくなる。

今まで信じてきたものが、全てぶっ壊れるぞ？

そんな風に、俺の心の中では、二人の俺が言い合う。

どちらにも一理ある。だが、聞いてしまえば………それをしてしまえば………。

そう思うと、俺は怖くて………そのどちらも選択することが出来なかった。

「ごめん、何でもないよ」

「……？ そう？　じゃあ、母さんは荷造りとかあるから」

「うん」

ガチャン……

そして、ドアは閉じられた。

瞬間、何故か体から力が一気に抜け出し、俺はベッドにもう一度体を沈めた。

自分でも気がつかない内に、かなり緊張していたらしく、額にはうつすらと汗が出ていた。

結局……何も聞けなかった……。

声が出なかった………。

「クソッ!!」

俺は八つ当たり気味に枕を叩くと、目を閉じてそのまま睡魔が来るのを待つことにした…………。

なんて情けない野郎だ…………俺は…………。

「うにゅ……………」

「んあ？」

深夜

どうやら、あのまま眠ってしまったらしい俺は、耳元で聞こえた口から漏れ出したような声で、意識を覚醒させられた。

加えて、鼻孔を刺激する甘い匂いというか…………女の子特有といえもいいのか、それとも俺の知っている身近な女性特有なのかは分からないが、兎も角、いい匂いがした。

聴覚と嗅覚を刺激され、俺はそのまま意識を浮上させる。

さらに、視覚情報を追加更新するべく、俺は自分の目を開けた。

「うにゃあ……………」

「……………またか……………」

目の前には、白いパジャマ姿に俺から奪い取ったであろう毛布に体を包み、これまた俺から強奪したのであるうルク専用枕を使用しながら、極楽気分で爆睡していらっしやるお姉さん。

ここまで言えば誰か丸分かりなわけなのだが、俺の姉、フェイト・ハラオウンが目の前で眠っていたわけだ。

「はあ……………あれほど寝るなら自分のベッドでって言ってるのに……………」

この困ったお姉さん。夜中にトイレ行った時などに、寝ぼけた状態で部屋を間違え、たまに俺の布団の中に入ってくることがあるのだ。このお話の第一話でもご覧になったかと思う。

こちらら、健全な青少年なわけであって……………。ねーさんのようなスタイル良し＆顔良しな女の人ベッドの中で、それも至近距離で寝ているとなると……………当然のことながらよからぬ妄想、感情などを抱いてしまうわけであって……………。

「ああもう……………無防備すぎるんだよ、ねーさんは……………」

俺は一人でそう呟きながら、ねーさんの体に中途半端に掛かってい

た毛布をすっかりと被せてやり、自分は傍にあつた掛け布団を使う。正直、毛布なしでは少し寒いが、寝ているねーさんをたたき起こすのも可哀想だし、毛布を取ってしまうのも可哀想だと思ったので、これはこれで仕方ないだろう。

あれ？　いつもの変態なお前じゃない……だと…？

そう思った読者様の方もいるかと思う。そのことに関してなのだが、どうも最近、たまに意識が途切れてしまうことがあるのだ。

閣下だとか、変態だとか……そういった呼び名が付いてしまっているのは、その途切れた記憶の中に何か原因があるのだろうか……？
うーん……一度病院か、お祓いとかに行ったほうがいいのかもしいない。

「ううう……リオス……なのは……それ以上……ATフィールド……固有結界は……勘弁してくださいあ……」

「何だか、もの凄く切実な寝言を聞いた気がする……」

付き合つてからのリオスとなのはさんは……アンリミテッド・ジュガーワークスうん、たしかに夢に出てくるレベルで俺たちに無限の糖製を食らわせてくる。

母さんの好きな、砂糖を大量に入れたお茶など、比肩するにも及ばないレベルの固有結界だ。

最近、血糖値がどうなっているのかが心配でならない。

「あの二人……付き合い始めてから……物凄く幸せそうだよなあ……」

…」

別に、『リア充爆発しろ』とまでは言わないが、正直羨ましい。そりゃあ俺だって男だ、彼女が欲しいという願望くらいある。

ここで改めて言うておきたいのだが、俺は決して『あっちの気』はない。たまにリオスとの関係を怪しまれるが、あれはクラスの腐な女子さん達の妄想だ。

そういつた事実は何片もない。

「好きな人ねえ……」

目の前で爆睡している、二つ上の姉。

シスコンとか言われるかもしれないが、ねーさんは大層な美人だと思う。その上、スタイルもいい。

性格は………たまにアホだが、基本的には優しい。それこそ、女神様などと揶揄する野郎共の気持ちの痛いほどわかるくらいに。

俺の好きな………そう、ねーさんだ。

「………でも………あの写真が……『そういうこと』なら………俺は………ねーさんを好きになっていいのか………？」

もしも、ねーさんと俺が姉弟ではなかったとしたら………血の繋がりが無いのだとしたら………。それこそ、エロゲーのような展開で、

義姉弟で好き合ってという感じに……。

そんな事を考えていると、自然と顔が赤くなり、目の前のねーさんの寝顔が……。その。堪らなく可愛く、美しく見えてしまう。加えて、呼吸と共に少し動くねーさんの豊かな双丘が艶かしい。心臓など、さつきから16ビートを刻む勢いだ。

「いかん……………変な妄想が……………」

危うく、ねーさんの胸に触ってみたいとか（いや、ハプニング等で触ったことはあるが）、パジャマのボタンの上3つを外してみたいとか、ねーさんにモフモフしてもらいたいとか、そんな事を考えてしまうところだった。

危ない、危ない。また誰かに体に乗っ取られるところだった。

「でも……………ねーさんとそんな関係になれるとしたら……………いや、それ以前に姉弟で……………ああでも、そうじゃないかもしれない……………」

駄目だ、思考がぐるぐる同じ所を回ってる……………。まともに頭が動いてくれない。

姉弟じゃないかもしれない……………そんなショッキングな事実とは裏腹に……………もしもその事実が本当ならば……………ねーさんと……………というような展開……………アリなのか……………？

「あると思います!!」

「ほわっ!!?」

「むにゃ…………ご飯にマヨネーズ…………あります……」

なんだ寝言か…………ビクリしたなあ…………。

ていうか、ねーさんってマヨラーだったっけ…………?

はあ…………まあおかげで、変な妄想も一緒に吹っ飛んでくれたわけなんだけどさ…………。

「はあ…………ヨイショっと…………」

このままベッドの上で寝ていては、朝まで起きたままになってしまふと思った俺は。毛布はねーさんに着せたまま、そこに掛け布団を重ねてやり、自分は床で寝ることにした。

正直、ものっそい冷たい。

『男は床で寝ろ』と、緑色の髪をした魔女な人は言った。アニメの中でだが。

床のカーペットに寝転がった俺は、引っ張り出してきた予備の毛布に包まって丸くなる。

「頭を冷やすのには丁度いいかも……………」

妙な妄想や想像、それらが少し冷たい床とカーペット、11月半ばの冷氣と相まって俺の頭を冷やしてくれる。

ヒートアップしかけていた頭を冷やすのには、これ以上のものはないだろう。

俺はそのまま、落ち着きつつある感情と共に……再び眠りについた。

翌朝、39度の熱を伴った、風邪を引く事になろうとは考えることもなく。

第五十五話 二人きりって、何だかムラムラする（後書き）

F20C「このルークの前書きでの言葉を見てくれ、こいつをどう思う？」

アイホム「凄く……変態です……」

閣下「言ってねーし！！ ていうか、これ銀魂の近藤さんを思い出すんだけど！」

F20C「閣下のことはどうでもいいや。それより、僕は友達が少ないの最新七巻の表紙が、とらのあなのサイトで見たんだけど……映像特典付きVerの表紙は夜空。通常版の表紙は星奈……もとい肉なわけだが……」

閣下「全然関係ない話になったな……。 ていうか、この前の六巻とは真逆な感じだな」

F20C「通常版の表紙の肉が可愛いなのって……無論、通常版買いますよ私は。 特装版も、本屋行って、あったら買います」

次回 第五十六話 風邪引いた時って、周りの皆が少し優しくなる

次回、ルークが風邪を引き…… フェイトさんが……？

フェイト「ルークをついに……美味しく……」

ルーク「言わせねえよ!!?」

第五十六話 風邪引いた時って、周りの皆が少し優しくなる（前書き）

【閣下こそが】ルークがかっこ良すぎて生きるのが辛い【主人公】

5 5 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：k a
k k a 8 1 0 2

最近、イケメンナイスガイなルークの扱いが悪いのはホムホムって
奴のしわざなんだ

5 6 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：k a
k k a 8 1 0 2

なんだって、それは本当かい！？

5 7 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：h o
m o o 0 0 h o m

自演乙w

ID一致してんじゃねーかw

5 8 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：i h
o m 9 1 3
I D w w w

5 9 名前：名無しの変態さん：2 0 1 1 / 9 / 1 0 ID：F 2
0 C 3 3 3

どう見ても閣下です、本当にありがとうございました。

第五十六話 風邪引いた時って、周りの皆が少し優しくなる

【ルーク視点】

母さんが海外旅行に出たその日、つまりは俺とねーさんの……その、二人だけの生活になった初日。

朝っぱらから、何故か『ルーク！ お姉ちゃん、今日から五日間毎日勝負下着だからね！！』とか言ってきたねーさんには、取り敢えずチョップをかましておいた。

その時の、『ふみゅ！』という声が可愛すぎて、少し萌えてしまったのは俺の心の中だけに留めておく。

ねーさんの勝負下着云々のことはさておいて（いや、置いておけない気もするのだけど）、俺は、非常にまずいというか、面倒な状態に陥っていた。

「あ……体だるい……頭痛い、吐き気する、何故かねーさんが今日の夕飯のシチューに、何か粉状の……睡眠薬的なものを入れようとしている幻影が見える」

「ルーク……あなた、疲れてるのよ……」

そうか……ここのところ、少しリオスとなのはさんのイチヤイチヤオーラに当てられて、流石の俺も疲れが溜まっていたのか。

ははは、そうだよな。きつと疲れてるんだよ。

ねーさんが、俺の食べるものに睡眠薬的なものを入れるはずなんて無いし、俺の部屋のベッドの布団とかシーツとかが、全部新品に取り替えられてたのもきつと気のせいなんだ……。

「って、気の所為なわけないわ!!! ねーさんは、睡眠薬入りシチュー飲ませて、俺にナニするつもりなのさ!!!」

「ナニって………そんなこと、恥ずかしくて言えないよ」

「この人、変態だああああああ!!!」

ヤバい、睡眠薬云々は百歩譲って……いや、やっぱり譲れないな。

兎に角、俺の貞操の危機が目の前に!!!

い、いや……べつにねーさんが相手なのが嫌とかではないのだけけど、そこはほら………倫理的に……ねえ?

あ、でも……姉弟じゃないかもしれないわけで……うう、頭痛くて考えが纏まらない……。

「と、取り敢えず、その睡眠薬みたいなものは今すぐゴミ箱にポイしてよ」

「あはは……分かってるよ、冗談に決まってるでしょ、ルーク? ……

………惜しい」

「今惜しいって言った!?! 惜しいって言ったよね!?!?」

「あはは、気の所為、気の所為……で、ルーク？ 体調が悪いのかな？」

いい感じにはぐらかされた気もするけど……今は体の倦怠感や吐き気、頭痛などの総攻撃で俺自身そころじゃない。

テーブルに突っ伏しながら、自分の体調について分かるだけの状況をねーさんに伝える。

あんまり心配とかはさせたくないけど、黙ってたら黙ってたで、ねーさん絶対泣くし……。随分前、風邪なのに無理して野球の試合に出て、その後ぶっ倒れた時には、6時間にも及ぶお説教の後、さーん泣き付かれた記憶がある。

もう、あんなねーさんは見たくない。それと、正座してる時に膝に石とか乗せられたくない。

「なんか、学校から帰ってから……調子悪い…風邪でも引いたかな……？」

風邪を引いたと言う根拠は、一応ある。

昨日、というか昨晚。ねーさんが俺のベッドに潜り込んできたのは、記憶に新しいかと思われる。

その際俺は、自分の中の煩悩を叩きのめすため（決してヘタレとかではない）、ねーさんをベッドで寝かせたまま、自分は床で寝ていたわけだ。

冬も本格化してきた11月中旬の寒さもあつてなのか、床で寝るに

はちと寒すぎたとは思ったが、体を冷やし過ぎてしまったらしい。

「ん……どれどれ……？」

「って、ねーさん！！ 近い、顔近いつてばあー！！」

「こうしないと、熱測れないもん。はい、いいからジツとする」

「うう……」

ねーさんは、当然のように自分のおでこと、俺のおでこを触れ合わせ、親が子供にするかのような熱の測り方をしてくる。

そんな事をしなくても、文明社会の発達したこの現代、検温器という便利なものがあるわけで。

でも、ねーさんの行為を無下にはできないし、何より……ねーさんの醸しだす女の子独特の匂いが脳を痺れさせた。

いつも思っただけど、なんでこんなにねーさんはいい匂いがするんだろうか……？

「あ……ちょっと高いかもね。ちょっと、お口開けてみて？」

「あう……」

「ううん…… やっぱり、扁桃腺へんとんせんも腫れてるね…… 完全に風邪……
…みたいだね」

簡単な診断方法だけど、今の自分の体の状態を考えれば、かなり妥当な、それ以外にぴったりの原因が見つからないほどの診断結果だった。

やっぱり、寒さ厳しいこの冬の中、布団一枚で床で寝るのはいくらなんでもNGだったみたいだ。

幸い、明日から土曜日だし、土曜日曜としっかり休めばなんとかなるかな……………？

「取り敢えず、ご飯どうする？ シチューは食べられるとして、ご飯は……………」

「おかゆ的なもので……………」

「うん、りょーかい　じゃあ、ルークは寝間着に着替えてベッドで安静にしててね？　ご飯と一緒に、お薬持っていくから。病院は、様子を見て明日行ってみよう？」

「う……………」

ハッキリ返事を返したかったところだけど、体の怠さでそれどころじゃなかった。フラフラと体を揺らしながら、俺は部屋に戻り、言われた通り寝間着に着替える。

うう、寒気が酷い……………さっさと布団に包まろう。

ていうか、病院かあ……………行きたくないなあ……………。あ、でも看護師さんの格好したねーさんなら、ドントコイです。

約10分後…

「お待たせ」

「うう」……」

少ししてから、小さい器に、少量のシチュー、そしてこれまた小さいめの石鍋に入ったおかゆを持って、ねーさんが俺の部屋にやってきた。

量を少なめにしてくれたのは、正直助かったというか、流石というか……。今は食欲が殆ど無い。

そこで器たつぷりにおかゆなどが入っていれば、間違い無く残してしまっていただろう。

そこへ行くと、やっぱりねーさんはよく分かっているというか、よく出来た女の人だというか……。あ、これは決してシスコンとかではないから、違うから。

「ん」……？ ちょっと熱が上がってきたかもね……御飯食べて、すぐに薬飲んじやったほうがいいね」

「うん」……」

そう言いながら、部屋のテーブルに食事を置くねーさん。ああ、いい匂い……シチューもそうだけど、おかゆも美味しそう……。できれば、食欲がある元気な時に思い切り食べたかった。

僕も布団から出てスプーンを取ってそれを食べようとしたんだけど

……。

このねーさんが、そんな事許してくれるはずもなく……。

「だーめ、ルークはジツとしてるの。今日は私が食べさせてあげるから」

「い、いいって……ご飯くらいは食べれるよ……」

「拒否する場合は、口移しになるけど？」

「是非ともスプーンで食べさせてください」

口移しは……うん、流石にまずい。日曜の朝から、その……あれだ、少少きわどいシーンを描写するのは非常に危うい。………それを言ったら、今までのお話の中でも危ない感じなのは山程あったかもだけど。

観念した様子の俺を見て、ねーさんは『よろしい！』という感じで若干嬉しそうにおかゆの器を取り、スプーンで少量をよそい、俺の口に運んでくれる。

「はい、ルーク。あーんは？」

「あ……ん……………」

「どうかな？ 普通の卵粥なんだけど…………？」

「美味しい……………」

おかゆは元々、どことなく優しい感じの食べ物だと思うけど、ねーさんののはこう……それに輪を掛けて優しい味がした。もしかすると、ねーさんに食べさせてもらってることも関係しているんだろうか……？

お腹にスウッと入っていく温かさを感じながら、俺はおかゆに次いでシチューをご馳走になる。

小さめに切られた鶏肉と野菜がバランスよく調理されていて、これまた体が温まる。

ねーさん、また料理の腕上げたんだなあ……。俺なんか、まだカレーとか麻婆豆腐くらいしか作れないのに……。

「喉、痛くない？」

「ちよつとイガイガするけど…………それ以上の感じはないみたい。頭痛を倦怠感が酷くて……………」

「そつか……。でも、まだ食事できるくらいならマシな方かも。食べられないくらい辛いようなら、今の時間からでも病院かなって思ったけど、明日まで様子見てみたほうがいいね」

「うゝ……」

今現在、夜の7時を少し回ったところ。

夜間の診察もしてくれる病院……まあ、普通にあるだろう。でも、流石に夜は寒さが堪えるし正直外には出たくない。

ねーさんの言うとおり、明日の朝まで様子を見ておいたほうが楽だ。

「えっと……ルーク……ごめんね？ ルークが風邪引いたのって、昨日私に気を使って床で寝ちゃったからだよね……。ホント、迷惑かけてごめん……」

「別に……そういうわけじゃないけど……。俺が勝手にやったことだし、ねーさんが気にすることでもないよ。それに、こうやって御飯作って食べさせてくれたんだし……その……ありがとう……」

「ルーク……」

あれ……？ 何か、今日の俺……どこかおかしいぞ……？

素直についていうか、素でねーさんにありがとうって言ってるし……
…。

風邪引いて、頭が少し熱にやられたのか……？ ああ、でもお礼を言う分には何の問題もないな。実際、世話になってるわけだし。そこところはしっかりしとかなないと。

「うう……ルークったら、いつの間にかこんなにいい子に育って…

……グスッ……」

「いや、このくらいのことと感動されても……。ていうか、そのセリフ完全に母親ポジションじゃない？」

「違うよ？ 少し歳の離れた従姉弟のお姉さんっていう設定で……昔から、逆光源氏物語を狙っていた子の成長に涙して、勢いのままベッドイン。そのまま二人は朝まで口では言えないようなことを……」

「設定！？ 今設定って言ったよね？ ていうか、逆光源氏物語ってなにさ！！？ 不穏な匂いしかないんだけど？？」

人が素直に感謝したらこれだ……。まあ、ねーさんの場合悪気がゼロなのが更に厄介なんだけど。
はあ……。風邪引いてしんどいはずなのに、なんでねーさんとこんなに馬鹿みたいに話してんだろ……。いやまあ、話してて楽しいけどさ。

その後も、俺とねーさんは他愛も無い話を続け、食事を少し時間を掛けて済ませた。俺は、出されたものを全て平らげた後、市販の風邪薬を服用しておいた。

これで、頭痛と発熱は少しマシになるだろう。でも、やっぱり体の倦怠感は抜け切らない。

まだ、下痢や関節痛などがないだけマシなんだろうけど……。やっぱり、風邪は引きたくないものだとか改めて認識し直した。

病院……行くのやだなあ……。

【ルーク視点 終了】

【フェイト視点】

「にゅ………」

ベッドの上で、ルークは若干薄い汗を掻きながらも、一定のリズムを以て呼吸しつつ静かに寝入っている。

さっきまで、私とずっとお喋りしていたんだけど、やっぱり疲れが出ちゃったみたいでビックリするほど速く寝入ってしまった。

ルークが風邪引くなんて何年振りだろ………？5年ぶり………くらいかな？

「ん……………」

「布団蹴っちゃダメだよ、ルーク？」

寝ているルークから返事は返って来ないけど、私はそう言いながら、

少しズレてしまった掛け布団をルークにかけ直す。

汗を冷たいタオルで拭いてあげると、心無しかルークの表情が少し和らいだように思えた。ルークの看病……あ、看護師さんのコスプレしたら、ルーク喜ぶかな……？

うーん……でも、女医さんのほうがいいのかも……？　って、どっちにしても衣装関係とかは全部はやてが持つてるし、今はどうしようもないんだけど。

「スウー……」

「はあ……寝てる時のルーク……やっぱり可愛いなあ……。無防備なのがまた……。ああ、ダメダメ。寝込みを襲おうとか考えちゃダメ……。どうせなら、ルークの襲ってもらってめっちゃめっちゃに虐めて欲しい……って、そうじゃないよ!？」

一人ノリツツコミをしてしまい、部屋の中にはどことなく残念な空気と、ルークの寝息だけが響く。

まずい、今のはまずい。これじゃあ、まるで私は変態で、エッチな子みたいだよ……。『

ううー、でもでも、ルークに家畜を見るような目で見下ろされて、『俺の服を手も足も使わないで脱がせてみてよ。出来なかったら、虐めてあげないからね』

とか言われちゃって!!　ああ、でも虐めてあげないって言われた時点で、そこから焦らし、お預けプレイが開始されちゃうわけで!!

とと、いけないいけない。こんなだから、なのはにも『最近、フ
イトちゃん妄想力が神の領域に達し始めてきたよね？』って言わ
れたりするんだよね？

ちよっとは自重しないと…………。

でも、なのはだつて、授業中に『リオスくん…………今日はまだまだ
許してあげないんだから…………そんな声出してもダメ…………』とか『
リオス君のかわいい顔、上から見下ろすのすごく気持ちいい…………』
とか、『男の子なら、もっと頑張らないとダメだよ…………？ ほら、も
っと可愛い声で啼いて、私を愉しませてみて？』
とか、小声で言ってるの知ってるんだから…………。意味全然分かん
ないけど…………。

「さつてと…………食器片付けてこようかな…………。ルークも寝ちゃった
ことだし」

そう思つて、私はルークと私が使つた食器を、お盆の上に片付けて
立ち上がった…………。つもりだったんだけど、その動作は途中で止め
ざるを得なくなった。

ギュ…………

「あれ…………？…………あはは…………ルークったら…………」

よく見たら、ベッドで寝ているルークが、私の服の裾を掴んでいた。無意識に掴んじやったのか、何か意図があるのか……それは私には分からなかったけど……。

私はルークに必要とされているんだと……そんな風に思えてしまつて、自然を顔がニヤけてしまった。単純だなって、そう思われちゃうかもしれないけど……私は、これだけで幸せを感じられる。必要としてもらえている、居て欲しいって、そう思ってくれているんだと分かるだけで。

「……………」

私は、ルークの手を布団の中に戻してあげると、改めて立ち上がる。視線の先には、スウスウと眠っているルーク。

珍しく、無意識になんだけど、久しぶりに私に甘えてくれたルーク。うん、やっぱり私は……ルークのことが大切で……甘えて欲しくて、世話を焼きたくて……どうしようもなく大好きだ。

「おやすみ、ルーク」

チュ…

眠っているルークのほっぺに軽くキスして、私は食器を持って微笑む。

別に襲うとか、そういう事は考えて……いないといえば嘘になるよ。うな、そんな事もなきにしもあらずな感じなんだけど……これく

らいは……いいよね？

心の中に、暖かくて、確かな気持ちを感じながら……私はルークの部屋を後にした。

【フェイト視点 終了】

第五十六話 風邪引いた時って、周りの皆が少し優しくなる（後書き）

ルーク「前書きいい加減にしろwww スレ立てんなww ていうか、元ネタ分かる人いんのかよww」

F20C「まさか、閣下が掲示板を使って、自身の人気を回復しようとするとは。しかも、ちゃっかりホムホムのことを陥れる作戦だし」

ルーク「……俺、本格的にお被いと言ったほうがいいのか……」

F20C「それも手かもね。ていうか、閣下が完全に悪霊扱いな件ww」

次回 第五十七話 バカップルに付ける薬はない

次回、ルークとフェイトが訪れた病院に、許婚なアイツらが……
逃げて！ 病院、超逃げてー！！

第五十七話 バカッフルに付ける薬はない（前書き）

ジュード「ミラの服、短すぎない？」

アルヴィン「そこが良いんだろう？」

ミラ「動きやすいしな！」

ジュード「……」

テイルズオブエクシリアの戦闘後の掛け合いで、こんなやり取りを見つけました。

このやり取りを、ジュードをホムホムに、ミラ様をアインハルト、アルヴィンを閣下に変換すると……

全く違和感がないという。

では、本編どうぞ

今回、アインハルトが熱でかなりぶっ飛んだことになってます。
それはもう、過去最高に。いろんな意味でご注意くださいませm（

——）m

第五十七話 バカッフルに付ける薬はない

【ルーク視点】

病院に来る者。

それは、怪我をしたりだとか病気になったりだとか、見舞いに来たりだとか女性看護師さんの制服姿を拝みに来た人…… あ、最後のはやっぱり無しで。

兎も角、そういった人達が、自身の病気・怪我、またはそうなんじやないか？という疑問や不安を何とかするために一日に何人何十人とやってくるわけだ。

そんなカテゴリーの中に、無論風邪を引いてかなり体がダルイこの俺も入っているわけでして……。

「あのさ……ねーさんや？」

「ん？ なあに？」

「何故私めは、お姉様の御身足を枕にして、診察順を待っているのでありましょうか？ 宜しければその理由を簡潔に、原稿用紙三分の一枚くらいで答えてみやがってください」

「だって……弱ったルークって、やっぱり保護欲をそそられちゃ

うんだもん」

「原稿用紙の一行目しか使う気がない?!」

俺は、病院の待合席にて、ねーさんに膝枕してもらいながら順番を待っている状態でございます。どうしてこうなった……………。

ていうか、周囲からの視線が…………俺のS A N値をガリガリ削り取っていくんですけど。

おば様達からは『あらあらまあまあ…………』的な生暖かい視線。野郎連中からは、殺意の籠った視線、看護師のお姉さんたちからは『お幸せに〜』ってさつき手を振られた。

今すぐMRI検査用の機械の中に閉じ籠りたい。

「あのさ…………恥ずかしいんだけど…………この体勢…………」

「…………もしかして、いや？」

「いやってわけじゃないけどさ…………寧ろ…………かなり快適なんだけど…………」

「だったら何にも問題ないよね？ ルークはお姉ちゃんの膝枕が好き。お姉ちゃんはルークを膝枕するのが好き。うん、W I N & W I Nの関係だね」

冗談拔で、ねーさんの膝枕は絶品だ。今日、ねーさんの足を覆うの

はレギンスなのだが……ねーさんのムチツとした…その、見ていてムラムラしてくるあの太もを、レギンスが包んでいる……。一見硬そうなイメージがあるけれど、このレギンスがそこまで硬い素材でできていないことと、ねーさんの美脚の特殊効果によって、膝枕から得られる、俺の快適指数はかなり高い。

勿論、ベスト膝枕と言えば生足に限るのだが、これはこれでいいものだ。

はい、結論から言ってしまうおう。俺はねーさんの膝枕が、昔から大好b……大好きだと。

「はぁ……まあいいや……」

「そうそう、まあいいの」

ねーさんの顔を見ようとしたが、やっぱり見えない。

膝枕した状態では、ねーさんのご立派なおっぱいが影になって、顔が見えなくなってしまうのだ。

まあ、ある意味ご褒美、そして世界の絶景100選にも選ばれて然るべきレベルなので、文句などは一切ない。いや寧ろ、いいぞwもつとやれである。

「う……体熱い……何か喉乾いた……」

「はい、ルーク。ジュース飲む？」

と、俺が風邪からくる発熱、それによる喉の渴きを訴えると、ねーさんはすぐにパック式のりんごジュースを膝枕した俺に寄越してくる。

見れば、ストローも既に刺さっている所が、気が効いているというかなんというか……。

別に催促したつもりはなかったけど、折角ねーさんがくれたのだ、ここはありがたく厚意に甘えておこう。

「ありがと、ねーさん……………」

ちゅー……………」

俺はそのままパックに刺さっていたストローを使ってりんごジュースを飲む。果物らしい甘さとさっぱりした味が、火照った体と喉の染みこんでいくみたいでかなり気持ちいい。

というか、女の人の膝枕の上でりんごジュース……………何だか、新手的…そういう方面のプレイにも見えてしまうのではなからうか？

学校の連中に見つかりでもしたら、週明けにでも異端審問会に掛けられ命を取られかねない。

よし、その時は現在絶賛リア充中のリオスを盾に使って……………うんそうさ、リア充は厳しく罰せられなければならない。このお話をお読みの皆様方、その中でもリア充のあなた。月のない夜には十分ご注意くださいませ。

ていうか、今気がついたんだけど……………このりんごジュース、パッ

クの見た目よりも何だか量が少ないような……？

「えへへ………ルーク………お姉ちゃんと間接キスだね………」

「ぶほっ??！　かかか、間接キス………！！？」

りんごジュースの中身がやたら少ない理由は、ものの数秒で明らかになった。要するに、このりんごジュース………ねーさんの飲みかけの品だったらしい。

危うく吹き出しそうになったが、ここは病院。流石に床を汚してしまうのかまずいので、何とか飲み込んだけど危ないところだった。

どうやら、ねーさんがこのりんごジュースを飲んでいるところは、膝枕してもらっている俺からは、ねーさんのたわわに実ったおっぱいの壁によって見えなかったということらしい。

流石はねーさんのおっぱい………なかなかどうして策士、そして厄介な（決して邪魔というわけではないが）存在か………！！

「あはは………昔はいつも私のジュース横取りしたり、食べかけのアイス取ったりしてたくせに………　あ、もしかして私の食べかけだから欲しかったとか？」

「ち、違うわ！！　あれはその………単に俺の食べてるものより、ねーさんの持ってたヤツのほうが美味そうだったからだという、相互比較的な見地から判断した高度な戦術的接收であって………！！」

「でも………私とルークって、基本的におんなじ物食べてたような………」

………？」

「（。。。）アーアーきこえない」

ええい、変なコトばかりハッキリ覚えてるんだからもう…………。

いや、まあ、子供心ながらに昔はヤンチャしていたものだと思う。ねーさんの言うように、ジューズやお菓子の強奪は日常茶飯事だったように覚えている。基本的に、ねーさんの持っていたものばかりを失敬していたのは……その、アレかもしれない。

『好きな娘ほどイジメたくなる』という、小学生、幼稚園児あたりによく見られるあの現象だ……。

夢の中で、女の子がDQNに絡まれているところにさっそうと駆けつけ、リアルではそんな戦闘能力がないにも拘わらず、華麗に助け出したり。

これまた夢の中だけで、ギターも弾けないのに、いきなりバンドを組んで女の子からの黄色い声を集めたり。

漫画やアニメキャラ中に登場するクールキャラのように、目を閉じながら歩いたり、日常生活を送ってみたり（大抵、ものの数分で何かに衝突してやめる）。

ルールも分からないのに、テニスの試合を観戦しながら『ふっ、なかなかやるな……あいつなら俺の本気を出せる相手かもしれない』とか言ったり。

学校の休み時間に、教室の窓から、物憂気にずっと空を眺めているのがカッコイイとか思ったり。

急に洋楽を聴きだして、その一方で『最近の邦楽は云々』みたいな感じで批判してみたり。

「好きな子ほど苛めなくなる」つまりはこれは、これらと同じような、そう……子供っぽい、不良〃カッコイイと勘違いしているような若干厨二な時期には誰しもが通るかもしれない道だ。

あれ？ 何だか猛烈に死にたくなってきた。

「ルーク？ お姉ちゃんの食べかけが欲しい時はいつでも言っ
てね？ 口移して食べさせてあげるから」

「要らねえよ！！？ ていうかなんで口移し！？ 先週からセツ
トで、妙に口移し推してくるけどなんなのさ？！」

まあ、ねーさんの行動に逐一突っ込みを入れていてはキリがない。
でも、そんなチャーミング（死語？）なねーさん……嫌いじゃな
いわ。

「あれ？ ルークさんにフェイトさん？」

「「ほへ？」」

と、そんな感じで診察までの時間をねーさんと喋りながら過ごしていると、俺達の目の前に見慣れた顔がやって来た。

見れば、その声の主は背中に女の子をおんぶしているではないか。

おんぶされている女の子は、少し顔が赤く、苦しげにも見える。

「ホムホムにアインハルト……。こんなところで会うなんて、偶然だね？」

「ふえ、フェイトさん……。ナチュラルに僕の名前『ホムホム』で固定するのやめません……。？　まあ、もう諦めてる部分もありますけど……。」

俺たちの目の前に現れた、少年。碧銀の髪を持った女の子、アインハルトをおんぶした状態でそこにいたのは、ホムホム・スメラギ……。あれ？　名前これで合ってたっけ……。？　なんか違う気がするけど……。まあ、大体合ってるだろうからいいだろう。

「あれ？　アインハルト……。どうかしたの……。？　何だか辛そうだけど……。」

「ああ、はい。ちょっと体調が悪いみたいで……。本人はイイって言うんですけど、流石に熱が高いので無理やりおんぶして連れてきたんです」

「ああ……。俺と同じで風邪かもなあ……。」

「ていうことは…… ルークさんですか…… 最近寒くなりましたし、仕方ないといえば仕方ないですよね…… よいしょつと」

ホムホムは俺達の向かいの席に座って、アインハルトを降ろしてやる。アインハルトも俺と同じように、いや少し悪くらいに見える、風邪を引いているようで顔は上気し、呼吸も荒い。

体調が悪いのは傍目からでもよくわかるレベルだ。これで『何でもない』と言ったところで、誤魔化せる人間はいないだろう。

「ほら…アインハルト。これ飲んで？」

「うにゅう……………（ゴク…………）」

ホムラは、椅子に座らせた、いやもたれさせたアインハルトに、スポーツドリンクを飲ませてやる。

アインハルトも、ボーッとしているようだが、水分を体が求めているようで、スポーツドリンクを一口二口ゆっくりと飲んだ。

「はぁ…はぁ……………」

「かなり悪そうだね……。お腹とかは大丈夫なの？」

「はい、体の倦怠感と発熱、あとは頭痛が酷いみたいで。お腹とか喉はほとんどなんともない感じです」

ねーさんがホムラにアインハルトの容態を尋ねると、ホムラはアインハルトの隣に座り、彼女を耳聞の体のほうに寄り掛かせながら、分かっている範囲での状態を教えてくれた。
どうやら、アインハルトと俺の風邪は似ているタイプようだ。
その風邪の進行具合では、アインハルトがかなり進んでいる感じが。

「ああ、そうだ……。あと何だが、最近やたらと酸っぱい物を欲しがったり、急に洗面所に走って言ってそのまま吐き気を催したり……そういうのがあったような」

「いや、それは内科じゃなくて産婦人科行けよ」

「へ？」

酸っぱいものを欲しがるとか、洗面所でえづくとか……完全に妊娠……いや、まあこいつらに限ってそういう事はないだろう。
それに、まだまだ中1なのに……俺だってまだDTなのに……あれ？ 何だか前が霞んで見えないや……？

「あのね？ ホムホム……そういう兆候は実は……ゴニョゴニョ……」

「はい……？ ええ……！？ こここ、子供……ってそんな……！！ いやいやいや、僕とアインハルトはまだそう言うことはしてないですからね？ その、そういった夜のエキサイティンに関しては、結婚してからって……」

ねーさんが、ホムホムに自分の言った兆候が世間一般では、何を示すものなのかを教えてみると、案の定ホムホムは取り乱し、顔まで真っ赤になってしまっている。

うん、この反応を見る限り、やっぱり二人はまだシテないみたいだな。ホッ…………。

こうして、俺の小さな自尊心はなんとかクラツシュせず済んだわけだ…………。我ながら情けなさすぎる…………。

「結婚…………。ああ、そういえばお前ら許婚だったよな…………。ちくしよつ、勝手に幸せになっちまいやがれ…………!!」

「は、はあ…………。ありがとうございます?」

許婚、なんという羨ましい響きか。

まあ、実際そうだったモノを持っている人間からすれば、また違った反応や思いを持っていることは間違い無いだろうが、やっぱり独身からすれば羨ましい話だ。

お互いが好き合っているのなら尚更…………。

『アインハルト・ストラトスさん。2番の診察室にどうぞ』

『変…………。ルーク・ハラウンさん。5番診察室にお願いしまゝす』

「今、明らかに俺の名前、『変』からスタートしなかった!!?」

変の次に何を持ってくるつもりだったの！！？」

そうこうしている間に、俺とアインハルトの名前が呼ばれ、それぞれの診察室がアナウンスされた。

俺の扱い、ほんとにどうなっているんだろうか……？ 病院のアナウンスまで、何かに侵略されてる気がしてきた……。

「じゃ、行こつかルーク？」

「うん、んじゃホムホム、また後でな」

「はい。……ほら、アインハルト……？ 順番回ってきたから、早く診てもらおう？」

俺とねーさんが立ち上がると同時に、ホムラもアインハルトに声をかける。

だが、自分の足で立ち上がった俺に比べ、アインハルトはそれすら出来ない程に辛そうだ。

これは、本格的に早く診察してもらった上で、薬を処方してもらったほうがいいだろう。

場合によっては、点滴ということにもなり得る。

「うう……や、嫌です……行きません……」

「そんな我侭言っちゃダメだって。このままだと、辛いばかりだよ？」

アインハルトにしては珍しく、我侭と言えいいのか、診察してもらうのを嫌がつている。いつもは凜として、どこか大人っぽい少女というイメージが強いだけに、そのギャップは大きく感じられた。なるほど、これがギャップ萌えというやつか。ホムホムめ……日頃からこう言った萌え要素に触れているとは……お前でなければ万死に値していたところだ。

「それでも……いやです……………注射怖いです……………絶対行きません……………」

「注射するかは分かんないってば。酷くなければ、薬もらって帰れるからさ。だからね、行こう?」

「あはは……アインハルト、意外な一面だね……………」

「うん、俺もそう思う……………まあ、人それぞれってかんじなんだろうなあ、こういうのって……………多分熱に浮かされてるんだろうな……………」

注射が怖いと来たか……………気持ちは分からんでもないけど、そんな甘え口調でそういうセリフを言ってしまうと、普通の男は『別の注射』を思いついてしまうもんだけど……………。

流石はホムホム、全然分かってないっていうか、全然そっち方面に思考が走らない。

あいつが紳士と呼ばれる所以はその辺にあるんだろう。

「じゃあ……ホムラさん……お願い、聞いてくれますか……？
聞いてくれたら、行きます……」

「いいよ。何でもいいから言ってみなよ。僕に出来る事ならするか
らさ」

あ、ホムホムヤバイ……そのやり取りは、ある意味死亡フラグだ。

今の甘えたがりオーラ全開のアインハルトのお願いだぞ？ お使い
頼むノリとは次元が違うんだから……。

そんな俺の予想は、まあ、バツチり当たってしまうわけで……。

「……ちゅうしてくれたら……行きます」

「へ？！ ちゅ、ちゅうつて……こ、こんなところで何言い出す
のさ……」

「ちゅうしてくれないなら……絶対行かないです……」

アインハルトの熱っぽい瞳と、上気した頬、乱れた吐息。それらが
見事な融合を果たし、今のアインハルトからは言いようのない妖艶
さと、甘いオーラが放たれている。

見るものを強引に従わせるような魔力を、アインハルトは纏ってい
るのだ。

さてさて、ホムホム……自分で蒔いた種をどう処理するのかな……？

「ちゅう……してくれないんですか……？」

「あ、え……でも、こんな人前で……」

「……それでもするんです……ちゅう……してください」

なんだろ？　ちゅうって単語が何を意味するのか分かんなくなってきた。

見れば、アインハルトは目を閉じて、自分の顔をホムラの方に近づけて行っている。

もはやこれ、お願いでも何でもなくて、ただの命令になってるような気がする……。

アインハルト……恐ろしい子……！

「わ、分かった……！　分かったから……じゃあ……するよ……」

「はい……」

「……っ」

ホムホムも、このアインハルトのおねだりには完全に負けてしまったようで、少しバツの悪そうな顔をしたあと、ためらいながらも眼

を閉じているアインハルトに顔を寄せて行つて……。

チュ…

「ふにゃ……」

「こ、これでいいの？」

「はい……良いですよ……ふにゃ……」

僅かの間の接触、ちゅう、キスと言うには短い時間ではあるものの、確かにホムラの唇とアインハルトの唇が重なった。

はい、どう見てもチュウです。本当にありがとうございました。

というか、人の見てる前でなにさらしてくれてんだ。猛烈に羨ましいジャマイカ……。

あれ？ 俺って……ホムラのよりも遅れてる……！！？

ヤバい、診察室じゃなくて、精神科行きたくなってきた……。

「そ、それじゃあ……僕達も行きます……」

「あゝ……お、おう…俺が言うのも何だけど、お大事に」

「お、お大事に……」

ホムラは、アインハルトをもう一度おんぶして、俺とねーさんにそう言ってきた。

ねーさんも俺も、二人のちゅうをリアルタイムで見てしまい…まあ、当然ながら自然に応えることは出来なかった。

アインハルト……もの凄く幸せそうな顔してんな………アレはもう、骨の髄までホムホムラブに染まりきってる感じだ。

そして、ホムホムたちが行ったあと、俺たちも診察室に向かうわけなんだけど……。

「ルーク！」

「はい？」

嫌な予感をヒシヒシと感じながら、俺は声の主。ねーさんの方を振り向く。

そこには、少し頬を上気させながら顔をこちらに向ける我がお姉さまのお姿が。

思いっきり、今さっきのホムホムとアインハルトに影響されていることは、声から溢れる甘えオーラ一瞬でわかってしまった。さて、どうリアクションしたものか。

「ちゅうしてくれないと、一緒に診察室に行つてあげないよ」

「そう。じゃあ、一人で行ってくるから、ねーさんはここで待ってよ」

「ガ　（；。　）　ンー！」

実際、高１にもなって、保護者（とは言っても姉だけ）同伴で病院、それも診察とかは恥ずかしすぎる。
丁度いい、ねーさんにはここで待っていてもらおう。

あれ？　どこから『この鬼畜ドSー！』って罵倒が聞こえてきたような……？

気のせいだろうか……？

その後、診察を受けた俺だったわけだけど、結果は普通に風邪だった。薬を飲んで二、三日で治ると診断された。

ねーさんは、『放置？　これって放置プレイっていうのかな……？

あ、でもそう思うとなんだか興奮してきたかも……？』

とか何とか言いながら、診察室の片隅でいじけていた。先生からは『良い精神科医を紹介しようか？』と心優しいお気遣いをしていたんだけど、丁重にお断りした。

うん、流石にこれは病気ではないと信じたい。

余談ではあるけれど、その日俺たちが厄介になった病院では、原因不明の急性糖尿病が発生したらしく、院内では大騒ぎになっていたらしい。

曰く、『ブラックコーヒーが砂糖水になった』

曰く、『甘いのは……甘いものを近づけないでくれ!!』

曰く、『あれ？ お前口から砂糖みたいなもの出てるぞ？』、
H A H A H A そういうお前だって』

曰く、『あま……つま……』

などなど、かなり騒然とした状況だったそうなの。
俺やホムホム達に関係してない……そう願わずにはいられなかった。

第五十七話 バカッフルに付ける薬はない（後書き）

F20C「さっすがアインハルトさんやでー!!」

フェイト「私達ができないことを平然とやってのける」

閣下「そこに痺れる、憧れるう!!」

アインハルト「うううううう~~~~~!!!!」（あまりの恥ずかしさに悶絶）

ホムホム「大丈夫だってアインハルト。このお話、誰もがまともで居られなくなるのが一番の特徴だから」

アインハルト「それフォローになってませんか!!!!」

次回、第五十八話 ホムホム&アインハルトのいきなりお宅訪問

次回、アイホム二人がルーク&フェイトの愛の巣に泊まることになります。風邪を引いてまともではないアインハルトの甘えラッシュが更にひどくなって行きますので、お楽しみにm（――）m

クウ「……………」

コロナ「どうしたのクウちゃん？」

クウ「……………本編にあった黒歴史っぽい行動……………たまにやりそうになってた……………なんだか死にたい……………」

コロナ「だ、大丈夫だって……クウちゃんが厨二病でも、私は好きだよ？」

クウ「あれ？　これってフォローされてるの？　それともとどめ刺されてるの？」

第五十八話 ホムホム&アインハルトのいきなりお宅訪問(前書き)

一昨日、ティルズオブエクシリア、クリア致しました(´・`・´)
ワイ

感想としては、うーん……………良作の一步手前という感じでしょうか。戦闘はそこそこ面白かったのですが、シナリオ面で少し「ん？ おかしくね？」というところとか、『えー(。。(。』ってなる所が多かったので…………。

キャラが良かっただけに、そのあたりが少し残念かと思いましたが、ゲームとしてはしっかりと成り立っていたかと思います。

ただ、レイアが可愛すぎて生きるのが辛いです。何この子……………良い娘過ぎる…………。

一途な元気っ娘って、私大好きなんですよね。あと、CVが早見沙織さんですし。

発売前はミラ様で大盛り上がりしていた私ですが、クリア後は完全にレイア一択になってました(´・`・´)

でもって、月末には碧の軌跡が発売しますし……………あー！ー！！楽しみすぎるー！！

もうすぐティオとリーシャさんに会えると思うとw k t k が止まらんですw w

では、今週も熱暴走を起こしているアインハルトをお楽しみくださいw

第五十八話 ホムホム&アインハルトのいきなりお宅訪問

【ホムラ視点】

「はいどうぞ 遠慮せずに上がってね」

「はい……なんだかすみません。ルークさんが風邪で大変な時にお世話になってしまうことに……」

「いいっていいって。病院から一時間ちよつとも掛かる距離なんだろう？ そんな長距離、アインハルトにはきついだろうしさ。俺はもう結構治ってき始めてるし、気にしないでくれ」

風邪を引いたアインハルトを背負った僕は、今現在。ルークさんとフェイトさんの家にお邪魔している状態にある。というか、今日は泊まっていくことになっている。

なぜこうなったかといえば、先程ばかり出くわした病院にて、診察を受け終わった後、薬の処方までの時間で合流することがきた僕達。

その時に、僕とアインハルトの家が、病院からかなり距離があるということが話題に出てしまった。

病院に来るときはタクシーを使ったのだけど、それでもかなりの距離だったように思う。

すると、フェイトさんが『そんなに遠いなら、今日は家に来ない？』
と言ってくれたというわけだ。

今のアインハルトには、確かにあまり無理をさせたくない。車と言
っても、それなりに体力は削れてしまうので、出来ることなら近場
で休めるような所が理想的だった。

「ふにゅう……」

「アインハルト、もう直ぐ休めるから、ちょっと待ってね？」

背中では、アインハルトがフニヤツとした猫のような状態になっ
てしまっている。病院にきた直後に比べれば、風邪の症状は格段に改
善しているのだが、やはり辛そうなのに変わりはない。

ルークさんとフェイトさんの家は、病院から大体、車で20分とい
うところ。病院からのバスが出ていたので、それに乗って帰ってき
たわけだ。

やはり、風邪が流行っているのか、バスの中もマスクをしている人
や、咳などをしている人が多かったように思う。

さしものアインハルトも、の風邪には勝てなかったってことかな…
…？

「奥に客室があるから、そのベッドでアインハルトを休ませてあ
げようね。あ、ルークは直ぐに着替える！！ 汗掻いたまま動きま
わっちゃダメだからね！」

「わーってるって」

「あはは……なんだかフェイトさん、ルークさんのお母さんみたいです
ですね」

僕達を部屋に案内しながらも、ルークさんに対して世話を焼くフェイトさん。その口ぶりとか、物腰とかがどこか母親っぽいオーラのようなものを醸し出していたので、僕は思わずそう思ったことを口に出した。

でも、フェイトさんはちょっと困ったような顔になって……。

「うーん……お母さんは困っちゃうかな？ 私かルークのお母さんだと、私とルークが結婚出来ないでしょ？」

「いやいや！！ 姉弟でも出来ませんからね！！？ なに勝手に法律ねじ曲げてるんですか！？」

「ホムホム？ 血縁なんてね、ぶっちゃけ些細なコトなんだよ？ ほら、少子化対策にもなるかもしれないし……」

「無理矢理社会的利益に繋げて、自身の行動を正当化した！！？」

す、凄い…… 勿論悪い意味で……。

フェイトさん、ルークさんのことになるとおかしくなるとは思ってたけど、まさかここまでキャラがブレイクしちゃうなんて……。

というか、ホント、ルークさんの貞操、大丈夫なんだろうか…？

一週間位親御さんが出払ってて、二人つきりだつて聞くし……。

「さ、入って？　ここが客室になって……」

「あ、はい。ありがとうございます……」

と、ルークさんの心配をしている内に、僕とアインハルトがお世話になる部屋についたようで、フェイトさんがドアを開いて中に招き入れてくれる。

でも、やっぱり一軒家はマンションよりも広いんだなあ……。僕とアインハルトの家も狭くはないけど、やっぱり一軒家と比べると狭い。

取り敢えず、早くアインハルトをベッドに寝かせてあげないと……。

そう思つて、僕はドアをくぐつて部屋の中に。そして、そんな僕の目に真つ先に飛び込んできたのが……

「……ルークさんの……写真……？」

部屋の中には……なんというか、何かの儀式にでも使うのかと思つてしまうほど、大量の写真。それも、その全てがルークさんが被写体になっているシロモノだ。

あと、よく見ると写真のそれぞれの撮り方から察するに……明らかに盗撮チックな写真が多数展示してあつた。

加えて、部屋の奥にはルークさんがプリントされている抱き枕、そして何に使うのか、絶対に聞きたくない三角木馬や、蝋燭、ムチ、怪しげな仮面など……。

そこには異次元空間としか言えないような光景が広がっていた。

「あ、間違えた。ここは私の『ルーク資料室』だった……………」

「待つて！！　ねえ待つて！！？　今明らかに、一般家庭のインテリアにはそぐわない品々が激しくくらいに自己主張してましたよね！！？　ていうか、ルーク資料室ってなんなんですか！！？」

「あはは、それは乙女のヒ・ミ・ツ…　だよ？」

「可愛く決めても、ダメなものはダメです！！　あと、言うておきますが、僕はアインハルト以外にはトキメイたりしないので、その戦法は無意味です」

フェイトさんが光速でドアを閉めてしまったけど、流石にこれはツツコミを入れるほかない。というか、ここでツツコミを入れ忘れると、この先もズルズルと同じ展開が待っていそうで怖かった。

いやほんと……　フェイトさん、病的なまでにルークさんのことが好きなんだ……。その内、本当に姉弟の垣根を超えちゃいそうで怖い……。

それと、口には出さなかったけど、フェイトさんと話してる時、なぜかアインハルトの僕を掴む力が三割増しくらいになって来ていた

ので、誤解を取り除く意味でもこれは浮気ではないという意味表示をしておいた。

最近、アインハルトの嫉妬成分が急上昇しているのも少し気がかりだ。

「えっと、はい。今度こそ客室だからね」

「あはは……それじゃあ、失礼しますね……」

その後、改めて客室に案内された僕は、若干の警戒を怠らず、アインハルトをおんぶしたまま部屋に入った。

今度は普通の部屋だったみたいで、中はベッドにテレビ、ソファなどといった至って普通のインテリアが備えられていた。良かった……今度はまともな部屋みたいだ……。

「それじゃあ、アインハルトをベッドに寝かせちゃおうか？」

「あ、はい。それじゃあ、布団を一旦捲つて……」

この時の僕は、迂闊だったとしか言いようがない。いや、部屋の内装、目に見える部分がまともだったからと言って、警戒を緩めてしまったことがそもその間違いだった。

そう、敵は目に見えないところにいる事のほつが多いわけだ。

何が起こったのか、取り敢えず報告だけはしておこう。
僕が布団を捲ると……………そこには。

「……………な、なんか……………フェイトさんにそっくりな方がプリントされたベッドシートですね……………」

「あ……………これ前にルークがはやてから誕生日プレゼントでもらってたやつだ……………。自分の部屋で使うのが恥ずかしいから、この部屋の隠れて使ってたんだね……………」

そう、ベッドシートだ。それも、フェイトさんの……………若干際どいシーンをプリントした、少しエッチな感じのやつ……………。

あ。アインハルトの僕の首に回された腕が段々と締まってきてるううう……………！！

違うから、これは僕のせいじゃないし、別に興奮とかしてないから……………！！僕も、アインハルトがプリントされたベッドシート持つてるから……………！！実家の部屋に大切に保管してあるし、週一で使ってたしから……………！！

ていうか、アインハルト、ほんとに風邪でへバツてるの？ なんだかももの凄くはつきりした意識的なものを感じるんだけど……………！！

「と、取り敢えず……………替えのベッドシート持ってくるから、ちょっと待っててね……………！！」

「は、はい……………」

さすがのフェイトさんも、僕達にこのベッドシートを見られたのは恥ずかしかったようで、速攻でベッドシートを回収すると、部屋を飛び出して行ってしまった。

その後直ぐに、リビングの方向から『なんで本物の私はスルーしてベッドシートで萌え萌えしちゃうのかな、ルークは!!?』とか、『ベッドシートには、ベッドシートにしかないロマンがあるんだよ!!』とか、『もう今日から、お姉ちゃんがルークの布団になるから!!』コレ決定事項だから!!』とかいう声が聞こえた気がするけど、取り敢えず気のせいだと信じたい。

「ほ、ホムラさん……」

「ん？ どうしたの、アインハルト……?」

と、そこでアインハルトが目を覚ましたようで（というか、さっきから意識があったようにも思えるけど）、僕に背中越しに声を掛けてくる。

その時の、アインハルト吐息が僕の耳にダイレクトアタックをかましてしまい、ちょっと体から力が抜けてしまったのは内緒である。決して、耳が弱点とか、そういう事ではない。……ないですよ？

「はむ……」

「ひゅあわぁ!!?」

あ…ありのまま 今 起こった事を話すよ!!

僕は、風邪を引いたアインハルトをおんぶして、今日お世話になる事になったフェイトさん達の家ベッドに寝かせようと思ったら、

『アインハルトに耳を甘噛みされていたんだ……』。

な、何を言ってるのか分らないと思うけど、僕も何をされたのか分からなかった……。

頭がどうにかなりそうだった…催眠術とか超スピードとか、そんなチャチなものじゃあ、断じてない。もっと恐ろしい物の片鱗を味わったよ……。

「はむ……あむ……」

「ひあ…ちょ!?! アインハルト……耳を甘噛みしないで………か、体から力抜けるから………」

「はむう………お腹…空きました………あむ」

「だからって僕の耳を食べないでってばあ!!?!」

しよ、食欲が戻ってきたのはいいことなんだけど、だからといって僕のことを食べられても困る。………いや、別にいやらしい意味とかでは決して無い。

と、兎に角、一旦アインハルトをソファに座らせてあげよう……。このままじゃ、耳を集中攻撃されて新しい何かに目覚めそうになる……。

「お腹空いたって………なにか食べたいものある？」

「……………ホムラs……………甘いものが」

「今確実に僕の名前口にしかけてたよね！！？　そこはかとなくいやらしい感じしかしないんだけど！！！」

本当に、風邪を引いておかしくなってしまったアインハルトは行動がいちいち予測できない。

なんというか、気持ちの向かうがままに行動しているというか……そう、今の彼女にはしつかりとした理性、自制心というものが少し薄くなっているような……悪く言ってみれば幼児退行しているような感じだ。

可愛い。

そ、それはともかくとして、ここに来るまでに今日の夕飯の材料に関しては、既に調達済みだ。

作ろうと思えば、ルークさんやフェイトさんの分も含めて、今日の食事を準備する事もできる。どうせ、一泊お世話になるのだから、それくらいはしないとバチが当たるといふものだろう。

「なら、今から何か作ってくるよ。アインハルトはどうする？　ここで寝てる……？」

「嫌です……一緒がいいです……」

「……そう……それじゃあ、一緒に行く……?」

「……（こく）」

熱も薬が効いているのか、今はかなり下がっているし、咳もほとんど見られない。けど、体の倦怠感と、精神的な心細さがあるようで、アインハルトは僕の手を掴んで離してくれない。

これは、一緒に連れていったほうがいいなあ……。

「分かった。それじゃあ、行こう。立てる?」

フェイトさんには、ベッドシートだけ交換してもらって、あとは休んでいてもらおう。食事の用意は直ぐできるし、ルークさんがどのくらい食べるかも聞いておかなければ……。

そう思いながら、アインハルトに立つことが出来るか聞いてみた僕だったけど、アインハルトはやはり倦怠感が抜けないようで、一人で立つことが難しいらしく……とんでもなく可愛い言葉と共に、その小さな手を僕に差し出して……

「……抱っ」

「……………」

瞬間、僕の頭はいろんな意味でフリーズした。

だ、だって……普段はお淑やかでクールビューティな女の子である
アインハルトが……『抱っこ』ですよ？

萌えるなという方が難しいというもんです……。あ、やばい……。胸
のドキドキが止まらない……！！ ああもう！！ アインハルト可愛
いなあ……！！

あれ？ 僕も少しおかしくなってきたような気が……？

「わ、分かったよ………それじゃあ、ちよつとごめん………」

「ふにゅ……」

で、でも紳士として、ここは女性の願いを叶えるのが務め……！！
アインハルトが風邪で辛い思いをしてるんだ、こんな時に僕が助け
てあげないと、誰が助けるっていうんだ……。

僕は、アインハルトの華奢な体を、まるでガラス細工を扱うように
丁寧に抱き上げる。というか、さっきと同じおんぶなわけだけど……
…。

抱っこ発言の後のおんぶは、やっぱり何かこう……精神的に違うも
のがあるように感じる。

心のフワフワ感と言うか、こそばゆい感じと言うか………。

「うにゅう……………はむ」

「だから、僕の耳は食べちゃダメだってば!!?」

「はむ…ほむ……」

「か、体から力が抜けるって……………うう……………」

その後、僕はアインハルトに耳を甘噛みされながらも、なんとかピングに到着し、フェイトさんに訳を話して今日の夕飯の準備にかかることになった。

結局、休んでいてもらおうと思っていたフェイトさんには、『お客さんに全部は任せられないよ!』という事で、夕飯の支度を一緒にしてもらうことになってけど、おかげでかなりいいものが出来た。

ルークさんには、僕がアインハルトをおんぶしていたところを見られて…………『リア充め……………ふん、精々末永くお幸せになっちゃみやがれ…………!! 俺はもう知らん!!』というコメントを頂いたツンデレ? これツンデレなの?

それと、夕飯を食べた後、もう一度アインハルトをベッドに運んだわけなんだけど…………。

その時も、また耳を甘噛みされたことは言うまでもないかもしれない。

アインハルト、何かに目覚めちゃったのかな…………?

【ホムラ視点 終わり】

【フェイト視点】

ホムラと作った夕飯を皆で食べた後、私は干してあった洗濯物を取り込んで、それを片付けていた。

ホムラはそれなりに料理ができるようで、見ていてもかなり手馴れているのが分かったほどだ。うーん、アインハルトもいい旦那さんを貰えそうだね。

そのホムラは、今はアインハルトに付いてあげているみたいで、客室の方にいる頃だ。後で、何か飲み物でも持つて行こう。

ルークは、薬を飲んでかなり状態は改善しているみたいで、自分の部屋で大人しくしているみたい。パソコンは既に没収済みなので、エッチなゲームも出来ない筈。

全く……そんなにしたいなら、私がヨロシクしてあげるのに……。あ、でも私も経験ないんだった。

「うーん……で、でもそっち系の知識は、結構勉強してるから、かなりいい線いつてる筈！！ 頑張れ私！！ 負けるな私！！」

無理矢理自分を鼓舞して、私は改めて洗濯物を片付ける。ルークのジャケットや、私のスカートなどなど、いつもよりは量は少ないけど、この時期の洗濯物は冷たくてやりにくい。

いつもは、ルークも手伝ってくれたりするんだけど（なぜか私のソックスとかを手に掴むといつも顔を赤くしてるけど）、流石に今日は頼めないし、やらせるつもりもない。

「さつてと……それじゃあ、乾いた洗濯物はそれぞれの部屋に運んで……」

洗った洗濯物を干し終わり、乾いた洗濯物は畳んだ上でルークと私の部屋に運んでおく。

あ、ホムラ達の服とかも後で選択しちゃおう。替えの服はなんともなるし……。

それから、ホムラには後でお風呂に入ってもらって、その間に、私がアインハルトの体を拭いてあげないとね。回復の程度次第では、お風呂に入れてあげてもいいけど……うん、最低でも髪は洗ってあげたいところだね、女の子の宝物だし。

そんな事を考えながら、私は畳んだ洗濯物を手に、ルークの部屋の前に立つ。

寝てるかな……？ でも、まだ時間としては早いくらいだし、一応ノックはしておこう。

コンコン…

「ルーク？ 入るね」

『あ！？ ちょ、ちょっと待って！！ い、今はちょっとまずいつていうか…』

？？？

なぜか、私が部屋に入ろうとすると、ルークは慌てたような声を出して、私の入室を拒む。

むむむ？ これはまさか…… エッチな本でも見てた！！？

パソコンがないからって、画面上の女の子じゃなくて、本の中の女の子に欲情するなんて……！！ それに、あれほどエッチな本はいけませんって、叱ったのに……！！

これはもう、風邪だからって甘やかしてばかりじゃダメみたいだね… ちよっとお説教だよ！！

「ル~~~~~クー！！ あれほどエッチな本はダメって言うてるのに……」

私は、少し語気を強めながらルークの部屋のドアを開け、中に入る。ルークがエッチなのは百も承知で、そういう事に興味があるのは、男の子としては当たり前なのも分かる。

でも、出来れば、そういう事を考えるのなら、私にして欲しいなん

て思っていたり……。

どうせなら、そのままメチャクチャにして、ルーク好みの女の子の調教してもらうのも吝かではないわけで。

「え…？」

「あ……！」

だけど、部屋の中で私が見たのは、想像していたものではなかった。エッチな本も、エッチなゲームも……ルークは手にしていなかったのだ。

ルークが手にしていたもの、それは……一枚の写真……。

「その写真……どうして、ルークが……？」

「………じ、これ……その……」

その写真は、ルークの秘密が、悲しい思い出が、私とルークの新しい関係を作り出すかもしれない可能性が詰まった写真……。

私の部屋の引き出しに入れておいた、昔の写真。

ルークが持っているはずのない、『あの写真』が……彼の手に握られていた……。

一方その頃……

「ホムラさん………はむう………」

「もう、好きにしてください………グスン………」

ホムラは、部屋に戻った後も、ベッド寝ているアインハルトの隣に『無理矢理』寝かされた上で、耳を甘噛みされ続けていたとか………。

奇しくもこの日、ホムラはアインハルトに耳を『開発』されてしまったのだった。

【フェイト視点 終了】

第五十八話 ホムホム&アインハルトのいきなりお宅訪問（後書き）

ホムホム「うう…アインハルトひどい……」

アインハルト「ほ、本当に申し訳ないです…（*―*；）」

F20C「ホムホムの性感帯が見事に一つ開発されてしまったわけだけど……」

フェイト「流石はアインハルトだね……これ、私も負けてられないかな……」

ルーク「お願いだからがんばらないでくだしあ」

次回 第五十九話 変態だって悩んじゃうんです

今回は、少し真面目な話……………になればいいなあ……………（；・・・）

前書きでいい忘れましたが、11月にはコール・オブ・デューティ
モダウォーフェア3が発売されるとのこと……………。

やばい、胸のドキドキがとまんねえ！！！！ワイ、（。。）メ（。。）メ（。。）メ（。。）ノワイ

第五十九話 変態だって悩んじゃうんです(前書き)

閣下 (＊、＊) <俺は、流行る!!

閣下が、流行りたそうにこちらを見つめている。
閣下を仲間にしてあげますか？

- 1、逃げる
- 2、とりあえず石を投げる
- 3、今月の友達代を請求する
- 4、閣下の黒歴史ノートを大声で朗読する

第五十九話 変態だって悩んじゃうんです

【ルーク視点】

「その写真……どうして、ルークが………?」

「……………こ、これ………その……………」

現在、俺の心臓はいつもよりも、いや過去にないほどに自らの仕事に熱心になっている。

弾けそうだとか、壊れそうだとか、爆発してしまいそうだとか、破けそうだとか、狂ってしまいそうだとか、おかしくなってしまうそうだとか……………

様々な形容の仕方が、人間社会の言語的な階層には存在している。いや、そんな事は今はどうだっていい。

問題なのは、俺の心音などではなく、『俺が例の写真を持っていて』、『それをねーさんが見ている』という、この状況だ。

一つの部屋の中で、片方はベッドの上で、片方はドアノブに手を掛けたまま。

目の前の人物の存在を、目の前の人物が持っている物体を、まるで疑うかのような視線が、およそ十畳ほどの個室内で交わされている。

「……………」

「……………」

俺とねーさんは、何も言葉を察することもないまま、その場で固まる。時だけが、時間の矢の指し示す方向に流れていく。

おい…俺…何か喋れよ……。ちょうどいい機会じゃないか…この写真を持ってたねーさんなら、この薄っぺらい紙の内容について、何か知ってるはずだろ…？

俺の知らないことを、知っているんだ。聞けばいいじゃないか。

『俺とねーさんの今までの関係が壊れることになるような話』を、その耳で聞いて、その脳みそで理解して、記憶すればいいだけじゃないか……！！

ただ、それだけのことじゃないか……。

「あ、こ……の……しゃ……し」

けど、俺の喉の奥から出てきた言葉は、とても人間の言葉とは思えないほど囁けていて、声帯を震わせて空気を振動させて、自分以外の誰かとコミュニケーションを取るための道具として、その機能を全く果たしてはいなかった。

ただ闇雲に、俺の部屋の中の停滞した空気を揺らしたただけだ。

「……………」

ポン…

「う…………あ……………」

そんな俺を、俺の頭に、ねーさんは姿勢を落してそつと手を置いてくれる。『落ち着いて』と、言葉ではなく行動で、仕草でそう伝えてきてくれる。

多分だけど、今の俺に言葉で『落ち着いて』と言われても、恐らくは無理だっただろう。

それを理解してか、どうなのかは兎も角、ねーさんの行動は俺のおかしくなりそうになっていた体のあちこちの器官を徐々に正常運転に戻して行ってくれる。

「（ゆつくりでいいから、落ち着くまでいくらでも待ってるから）」

ここ最近、ずっと同じ思考のループを繰り返してきた。正直、ノイローゼになってしまっているのではないかと思ってしまうくらいに、何回も何回も何回も何回も何回も何回も……………。

睡眠時間も、五時間を着ることが多くなり、最近では四時間の大台に乗りかけていたところだ。いや、眠れるだけマシなんだろうけど。

ねーさんは、ただジッと、言葉を発することなく待っていてくれている。その心が、頭に乗っているねーさんの手の体温から伝わって

くる。

「み…見つけたんだ、偶然……ねーさんの……部屋で……」

「そっか」

「ホンの、好奇心で……写真を見ただけなんだ……でも、余計に気になって……。気が付いたら、手に持ったまま部屋に帰って……。この写真が、どういう意味なのか分からないから、ずっと考えて考えて考えて……」

「うん」

「どうしようもない、母さんかねーさんに聞くしか無いんだって、それだけは分かって……」

「うん……」

うわ……やばい……。

ものすごく安心して俺がいる。ねーさんにこうしてもらってるからこそ、今こうしてまともに話せてるんだ、俺……。

自分のことにも関わらず、まるでテレビを通してドラマを見ている時のような感覚で、自身の状態について考える。

頭の中が妙にクリアになっていくような、そんな気がしたが、今は心が向かうままに口を動かすしか無かった。

「苦しいんだよ……悩むのも、考えるのも、疑うのも、想像するのも、推測するのも何もかも……辛いんだよ……自分のことが、ねーさん達のことから分らないことが」

家族なのか、家族ではないのか？

姉弟なのか、姉弟ではないのか？

なぜここににいるのか？

写真の内容は、想像通りのことを意味しているのか？

考えて考えて、頭の中がおかしくなりそうだ。こんなコトなら、あんな写真は手にするんじゃないかった、好奇心なんかに負けるんじゃないかった、気にするんじゃないかった。

この胸の中のもやもやとした、億劫な気持ちを抱くくらいなら、いっその事……。

けど、それとは逆に、なおも知りたいと、その先を知りたいと思う自分がいる。

そんな、二律背反な気持ちもまた、俺の神経と精神を双方から圧迫する。

「なら、ルークはどうしたい？」

「え……？」

「ルークが、この写真の意味を知りたいなら、私はそれを話す。で

も、ルークが知らないなら、何も言わないし、この写真は今すぐゴミ箱に破り捨てればいい。少し難しいかもしれないけど、ルークもこの写真のことなんか忘れてしまえばいい」

それは、二つの道だった。

いや、元々道なんか、この2つのどちらかしか存在し得なかった。ねーさんは、それを改めて言語化して俺に提示してきてくれたに過ぎない。

ずっと、俺が見ようとしていなかった選択肢を。

「ルークがどっちを選んでも、私はここにいる。私の『意味』は少し変わっちゃうかもしれないけど、ルークが許してくれるのなら、私はルークの傍にいる」

「意味が変わるって……？」

「そのままの意味だよ。『私』に『新しい意味』が加わる……たつたそれだけのこと。だけど、その新しい意味はとっても大事なモノかもしれない。なにせよ、選ぶのは、選べるのはルークだから」

ねーさんの言っていることは、何故か謎解きと言つか、小難しいと言つか……。

だけど、ふざけているような感じは全然しなくて。

目を開いて目の前を見れば、真剣な表情のねーさんが、俺の頭に手を載せてくれていて。

この俺の観ている『ねーさん』に加わる、新しい意味。その『意味』

は、ねーさんをどんなふうに変えてしまふのだろうか？
それは……俺には分からない。

「目を閉じるのも、開くのも。耳を塞ぐのも、開くのも。会話をするのもしないのも。全部全部、ルークが決めていい。これは義務でもないし、必ず通らないといけないことでもない。何を選択しても誰もルークを責めたりなんかしないし、私がさせない。ルークのことは、私が守る」

守るって……。ねーさん、俺も一応男の子だからさ……。女の子に守ってもらうのは、抵抗っていうか、下らないけどプライドってものがあるんだよ。
ちっばけな自尊心だけど、それでも……。守ってもらうなんて言われたらさ……。今の俺、マジでダサいじゃん……。そのことが、嫌ってほどに分かつちゃうよ。

「ルークは……。どうしたい？」

そうして、ねーさんはもう一度尋ねてくる。俺が何を選ぶのか、それを待っている。

何を聞いても、何が変わっても、何が分かってても、ねーさんはそばに居てくれると言った。

情けない話だけど、その言葉が心底嬉しくて、思わず泣きそうになった。

母さんも父さんもクロノ兄さんも、そんなふうに思っていてくれる

のだろうか？

それを差し置いても、ねーさんは、ねーさんだけはそこに居るんだ。写真のことを聞くのは、怖いし、苦しいし、耳を塞ぎたいし、何かが変わってしまいそうなのが不安で仕方ない。

けど、ねーさんがそこにいるのなら……俺が取るべき選択は。

「…………聞かせてくれ、この写真のこと」

失うものがあるかもしれない、でも、失わずに済むものが、新しく生まれるものがあるかもしれない。

少なくとも、ねーさんが居てくれるなら……怖くはない。

シスコンだろうが、お姉ちゃんスキーだろうが、なんと言われてもいい。俺は、ねーさんが好きだから。

「うん……………わかった」

俺の答えに、ねーさんは静かに答えて、俺のベッドの上にというか、俺の隣に腰を下ろした。

ねーさん特有の、なんとも言えない良い匂いが鼻腔をくすぐり、それだけで体が安心する。

本格的に、俺はねーさん依存症、中毒。言い方が悪いが、ねーさんがいないと生きられない体にされそうだ。

でも、こうして隣に座って、その存在を確かめているだけで……怖いものなど無いように思えてしまう。
いや、実際に……もう、怖くもなんともなかった。

「この写真……この赤ん坊のルークを抱いているのはね……」

そうして、ねーさんの話が。

写真の本当に意味に繋がる話が……俺の部屋のベッドの上で……静かに幕を開けた。

昔々、とある一組の夫婦がいました。

出会いは、大学のキャンパス。気の置けない友人同士だった二人は、気持ちの赴くままに付き合い始め、職に就いた後、当たり前のように結婚した。

周囲の人間も、二人の結婚を当たり前のものとし、当たり前のように祝福した。

夫には兄がおり、その兄も既に妻子を持っていました。

夫と兄との仲が良かったこともあり、そのとある一組の夫婦は、兄夫婦とは特に深い交流がありました。

自宅が近いこともあり、何かと相談や悩みなど、お互いにそれを聞いて力になり合うほどに。

そして、数年後。

夫婦の間に一人の男が生まれました。第一子の誕生です。

兄夫婦の方にも、男の子と女の子の兄妹が出来ており、我が事のように喜んでくれます。

生まれた男の子は、兄夫婦の兄妹の、特に女の子の方に赤ん坊の頃から強く懐いていました。

彼を生んだ母は、出産後少し体調を崩してしまい入院、父も仕事などがあつたので、兄夫婦の家に預けられることになったのが、そのきっかけになったのでしよう。

入院中の母も、順調に回復し、男の子と父、そして兄夫婦達が見舞いに行く度に経過が良くなって行きました。
見舞いといっても、男の子はまだまだ赤ん坊。寝ていたりすることがほとんどでしたが。

そして、ついに母が退院する日が来ました。

その日は、男の子と父が母を迎えに行きました。男の子はベビーカーで寝ていましたが、これで漸く、家族で暮らすことができる。

そう言つて、母と父はこれから送れるであろう幸せの日々に胸をふくらませ、帰路に着きます。

今日帰ったら、どんな料理を作ろうか？

男の子はしっかりと母乳を飲んでくれるだろうか？

この子が大きくなったら、どんな子になるのだろうか？

どんな夢を持って、将来どんな人間になってくれるのだろうか？

好きな子は出来るのだろうか？

どんな女の子と結婚して、どんなふうな家庭を作って、私達に孫の顔を見せてくれるのだろうか？

願わくば、私達と同じように、幸せな家庭を持って、平穩に、ゆったりとした日々を、人生を送ってほしい。

親として、男の子に父と母が望むのは、たったそれだけでした。

そして、その子供の幸せを、この目で見ることの出来る日が楽しみだと。

その為にも、明日からも、そして明後日も、明明後日も、来週も再来週も、来月も再来月も、来年も再来年も、これからずっとこの子を守って、頑張って育てていこうと。

二人は、そう心に決めて、病院を後にしたのです。

それが、たった数秒で、夢に消えてしまうなどとは知らずに。

その狂音は、突然夫婦と男の子を襲いました。

アスファルトとタイヤのゴムが摩擦で強烈な熱を放ちながら、道路とのミューを保とうとする。

けれど、タイヤで以て走っている車は、よく言われることですが急には止まりません。

鈍い衝撃音、ついで地面に響く肉の叩き付けられる生々しい音。

そして、流れる血。アスファルトを赤く染める、生き物にとって不可欠なものが流れ出ます。

通行人の悲鳴が木霊し、周囲は騒然としてしまいます。

救急車の音が、数分後には聞こえてきましたが…今回の事件には、迅速さというものは意味を成しません。

夫婦は、即死だったのですから。

どうしてこんなコトになったのか。夫婦が生きていれば思った、そして口にしたことでしょう。

横断歩道の信号は、確かに青かったのに。

夢と未来大き夫婦の命が失われたこの事故ですが、残されたものがありました。

二人の子供である、まだ赤ん坊の男の子です。

両親が我が子を守ろうとした結果なのか、はたまた偶然が重なったゆえの結果なのかは分かりませんが、その男の子は信じられないことに無傷で助かったのです。

両親を失った男の子。

赤ん坊の彼が、両親が死んだという事実を認識、理解することなど出来るはずありません。

男の子は、すぐさま兄夫婦一家に引き取られました。

そして、本当の両親が死んだという事実を知ることなく、スクスクと育っていきます。

兄夫婦たちも、弟夫婦の忘れ形見である男の子を、我が子として育て、実子である兄妹と同じように愛情を注いでくれました。

その生き残った男の子は、今年で16歳。思春期まったただ中の高校生にまで成長しました。

彼が当然と感じ、当たり前前の存在となっている父と母、兄と姉。その存在が、実子と実姉、実兄という定義においては、正式なそれではないということも知らないまま……。

けどそれも……今まさに、その認識が変わろうとしているのです。

約15年という、長い年月を経て、男の子は本当のことを知ることになったのですから。

第五十九話 変態だって悩んじゃうんです（後書き）

F20C「え〜と何々……？ 伝説の魔剣、デュランダルについて、エリクサーの作り方……ぶっwwww」

ホムホム「材料……お酒、月見草に……クスwwww」

アインハルト「一週間の間、毎晩月の光に晒した真水、そして太陽の光を吸わせた砂糖水……ぶっwwww」

閣下「やああああめええろよおおおお！！ 俺惨めすぎるだろうが！！」

F20C「お前を仲間にしても、モンスター牧場に永久就職させるか、冬眠させるしかないだろうが。そんな事するくらいならいつもの事……」

閣下「本編がシリアス一色なのに、前書きと後書きのギャップが激しすぎるだろうが！！ ていうか、なんでモンスター牧場？ ティーなのか？ ワンダーランドなのか！！？」

次回 第六十話 男だって泣く時は泣く

今回は……ルークがすこしずつ素直になっていくかもです。
うーん……あと何話でエンディングに行けるでしょうか……？

あ、スクラパが完結した後は、だーくさいどくろにくるとかを不定期更新していければと思ってます。

メイン更新は、とある訓練生シリーズにシフトする予定です）・・

・（ノ

アインハルト「あむ……ほむ……」

ホムホム「あの……アインハルトさん？ 耳の次は指ですか……」

アインハルト「あむ……れる……ぴちゃ……」

F20C「なにこれエロいwww」

第六十話 男だって泣く時は泣く（前書き）

金曜日に買ってきたゲームを進めているんですが……一向に共通ルートが終わらない件について。

共通ルートが長過ぎると、ダレちゃうんですよね……。さっさと個別ルート入ってくださいあ

あ、でも妹キャラが可愛いので頑張ります。

第六十話 男だって泣く時は泣く

【ルーク視点】

「これが……この写真の中に込められた意味。ルークが知りたいと思ってたことだよ……」

「……………」

ねーさんの話が終わった。

時間にして、ほんの10分くらいの時間の……経過した時間にしてみれば、なんてことのない話だ。

けど、その話の中身は……複雑で、少し悲しくて……そして同時に、心の中で『やつぱり……』というような感情があるのを、俺は静かに感じていた。

話の結論だけを抽出すれば……俺の生みの親は、交通事故で既に他界しており、俺自身は兄夫婦だった……つまりは今の母さんと父さんに引き取られた。

そして、今まで本当の、血の繋がった兄妹だと思っていた……目の前のねーさんは……実は、従姉弟だったということだ……。

「ルークは……まだその時1歳くらいだったらしいから、覚えてい

なくて当然だね。私も…母さんから聞いた話で、その写真を見せられるまで信じられなかったから……………」

「俺に…………何も言わなかったのは……………」

「うん、自分で気づいた時か、成人する時になったら教えようってことになって……………。隠すつもりとかはなかったんだけど、ううん、こんなの言い訳にしかないね」

「いや、それはいいんだ…………俺のことを考えてくれてのことなんだから……………」

不思議と、頭の中はクリアだ。というより、何も考えられないと言うか、自然とボーッとしてしまいそうになると言うか……………。ショッキングな話の内容を聞いて、頭が混乱、フリーズでもしているんだろうか……………。

「……………ルーク……………悲しいの……………」

「え？」

「涙……………出てるよ……………」

そう、ねーさんに言われてから気がついた。
俺の目から、ツウーっと水気のある何かが流れ出ていることを。いや、水気のある何かと言うか……………誰がどう見ても涙だった。

自分手でその涙を拭いてみるとよく分かる。最後に泣いたのは……何時の事だっただろうか？確か、その時もねーさんが傍にいたはずだ。

「私が、お姉ちゃんじゃなつて分かったから？ それとも……本当のお母さんたちが……」

「……いや、俺にも……ちょっと分からない……。何が悲しいのか、なんで涙がでるのか……。全然……。でも……ねーさんの所為じゃないってことだけは……分かるから……」

静かに溢れる涙を、手で拭う。

途切れ途切れだけど、ねーさんに何とかそれだけを伝えようと、すこしばかり気が楽になってきた。同時に、頭の中がクリアになってきた気さえする。

胸の中につつかえていた蟠りと言うか、ストレスの塊とでも言えばいいんだろうか？

今日までずっと悩んでいたことで溜まっていたものが、綺麗になくなったことでの爽快感も少なからずある。

同時に、自分についての新しい……。いや、ずっと事実だけはそこにあったのだが、俺が知らなかったことに触れることが出来た、自身のこと。

「自分のことなのに……。ねーさんたちのほうが俺のことをよく知ってるのって……。なんか変な気分だよ……」

「そう……かもね……実際、そうそう簡単に話せることでもなかったし、父さんと母さん達もはじめは物凄く悩んでたんだと思う。ルークをどう扱っていくべきなのかって」

でも、父さんと母さんは、俺の我が子として育ててくれたんだ。それこそ、俺に『本当のこと』を悟らせる隙さえ与えないレベルだ。もちろん、あの二人のことだから、俺が気づいて尋ねれば答えてくれただろう。

今日のねーさんがそうだったように。

「あゝ…………でも、ねーさんが『姉さん』じゃないんだって…………
…なんだか実感湧かないよ」

「実質的には従姉弟だから、お姉ちゃんといえばそうなんだけどね……………」

「それでもさ、今までの時間っていうか、経験っていうか。ねーさんは、意外とお姉さんしてたから…………余計に実感がわかないんだろうけどね」

「むう…………それどういう意味かな…………？」

頬を膨らませながら俺を睨んでくるねーさん。
ねーさんが『姉』ではないという事実も、頭では分かっているのだからまいちピンと来ない。

『そうなのか…』と思う自分と、『やっぱりそうだったんだ』と、
そう思う自分がいてどっちが自分の正直な気持ちなのか推し量り切
れない。

それ以上に、俺はこう考えてしまっていた。不謹慎かもしれないけ
ど、頭で無意識に考えてしまうことがある。

『ねーさんが、本当の姉さんじゃなくて……ちょっと嬉しい』

と……。

今まで、ずっとねーさんに対して素直な態度ではなかった俺。そり
ゃ、スキンシップの激しい姉に対しての照れ隠しということでもあ
る。

でもそれ以上に、自分の中の『ねーさんが好き』だという気持ちを、
何とかして誤魔化そうとしていた。

俺たちは兄妹だからと……、そんな事は考えちゃいけないと……
…。

もしも、兄妹じゃなかったら……別の家に生まれていれば……と
か、そんなたればの妄想を何度繰り返したことが分らない。

それくらいに、いつからかは分らないけど、俺はこのちょっと残
念な美人さんで、心優しいねーさんを、『女性』として好きだった。

「……ねーさんが言った、『私に新しく加わる意味』っていう
のが何なのか……少し、分かった気がする……」

「……………そつか……………」

もし、ねーさんの過剰なスキンシップや、弟にするにはやり過ぎかもしれない好意の向け方の数々。

ねーさんが言っていた、新しい意味というものが、それらと深く関係しているのなら……………。

ねーさんは、俺のことを……………大切に思っていてくれるのか
もしれない。

言葉にして聞いてはいないけど……………自惚れかもしれないけど……………そうだったら、ねーさんも俺と同じ気持ちを持っていてくれているなら……………。

俺はこれから、何をして、どうやって……………ねーさんと向き合って、
歩んでいけばいいのか。

その答えも、徐々に見えてきているような、そんな気がした。

「ねーさん……………俺のこと……………話してくれて、ありがとう……………」

「……………いいよ。ルークが選んだことだからこそ、私も話したんだし。それにね？ このお話をルークがどう受け止めて、私達と向き合ってくれるかで……………私にも、『ご褒美』みたいなものが……………」

「……………そう……………」

今はまだ、お互いに気持ちの整理を付けたい。いや、どちらかと言

うと俺の気持ちの整理だろうか？

ねーさんに対しての気持ちに、真っ直ぐ向き合えるようになって、両親のことを聞いて、細かい所ではまだ少し混乱気味だから。

ねーさんも、そのことを察してくれているのか、俺の方を抱いて自分の方に抱き寄せてくれた。

ねーさんの良い匂いと、柔らかい感触を間近に感じる事が出来る。少し前なら嫌がっていたんだろうけど……今では、そんな感情すら起きない。

こうしてもらえるのが、純粹に嬉しくて……いつまでも身を委ねてしまいたくなる。

「珍しいね……こうやってギューってしてるのに……ルークが暴れないのって」

「そういう日もあるの……。いや……いつもこうされてる時……実は物凄く嬉しかったんだよ……」

「だったら、今日からは毎日でも、いつでもどこでも甘えさせてあげるよ……私は従姉弟の女の子だけど……お姉ちゃんでもあるんだから」

まだ、考えたり、決めたりすることは多い。けど、悩みという感じのものはほとんどが解決……いや、その先のステップに進むことが出来たという方が適切かもしれない。

ねーさんと俺、姉弟との関係に新しい要素が組み込まれて……数

分前の俺達とは、また違ったステージに立つことができていたんだと……俺はねーさんに抱きしめられながら、それを実感していた。

【ルーク視点 終わり】

本編が少し短いので、ここからは風邪でダウン＆爆睡中のアインハルトの夢の中を皆様にお見せしたいと思います。

おまけが本編？　そ、そんなわけ無いじゃないですか（
 ）キリッ

無いですよ？ (、;)

【アインハルト視点……？】

「パパ」

娘の声。今年で7歳になる私とホムラさんの子供……その子が、夫であるホムラさんの胸に飛び込んでいく。

その表情は本当に嬉しそうで、幸せそうで……私に対するドヤ顔』さえなければ、愛らしい姿そのものだ。

「よしよし……」 『は甘えたがりだなあ……」

「だって、パパの事『大好き』なんだもん」 （ニヤリ

「ぐぬぬ……」

ホムラさんの胸に飛び込み、顔をスリスリとくっ付ける我が娘。その容姿は、碧銀の長い髪をツインテールに、ホムラさん譲りの青い瞳。顔立ちは私に似ていると言えるだろう。

周囲からは、『昔のインハルトそのものだ』・『ミニインハルト』・『ロリハルト』などなど、そんなふうな評価が下されている（最後の発言をしたのは変態閣下）

要するに、私にそっくりなわけだ。恐ろしいほどに。

正確は、人懐っこいという感じで、そこは私ではなく、ホムラさんに似ているのだろうか？

「パパ、今日は日曜日だね？ お仕事行かないよね？」

「ああ、今日は」 『とずっと一緒に居るよ？ 何なら、今日はどこかに遊びに行くかい？ 好きなところに連れって行ってあげるから」

「ほんとー？」

「ムムム……」

子煩悩、親バカ。ホムラさんは、そんな言葉が似合うくらい、娘を可愛がっている。というか、リアルに娘を嫁にもらおうとする輩が来ようものなら、一昔前のドラマのお父さんキャラのような対応を取りそうで怖い。

まあ、娘を愛しているということなので、そこはいい。いいのだが……問題はホムラさんではなく……。

「じゃあじゃあ、今日は『私とパパ』の二人だけでお出かけ」

「あはは……ま、ママは来なくてもいいのかな？」

「いいの、だって私とパパの『デート』に女の人はいちやダメなんだもん」

「『……？ ほ、ホムラさんは私の夫ですよ……それにあなたは娘……そ、その時点でデートという概念は存在し得ないわけですよ……」

そう、この娘……、どこでどう、何を間違ったのか……。いや、私の血を色濃く受け継ぎ過ぎたのか……。

「ママ？ そんなの小さな問題だよ？ それに、血縁関係なんか私の気持ちは止められないもん」

「むむ……」

「あと……私、パパのこと愛してるもん……一人の女として……」

そう、この我が娘……私の夫であり父であるホムラさんに……非常に強い、というか目も当てられないくらいの愛を抱いてしまっているわけで。

子供心の気持ちだとバカに出来ればいいんですが、やたらと大人っぽい表情でさっきのようなセリフを言う辺り、どこまでが子供の発言と捉えるべきなのか判断に困ってしまうのです。

そもそも、それでも、ホムラさんは……私の旦那さんで、私を愛してくれていて……夜の営みの時も、一杯……一杯……はう……ホムラさんダメです、もう一回、もう一回だけ頑張ってください……。

え？ もうこれで5回目？ 何を言ってるんですか、今日は朝までコースですよ？

申し訳ないです、思考がドリフト気味になってしまいました。

「パパ、私みたいな若いフレッシュな娘の方が好きだよね」

「ほ、ホムラさんと私は、それこそ子供の頃から愛し合っていたん

です！ それに、私のオトナのっぽい魅力のほうで、ホムラさんは好きに決まっています！」

「わーたーし！！」

「私です！！」

ホムラさんを挟んで、火花を散らせる私と娘……………。

全くこの子ときたら……………隙あらばホムラさんと二人きりになろうとするわ、私からホムラさんを奪おうとするわで……………。

加えて、私とホムラさんが仲良くしていると、すぐに間に割って入ってきて……………。なんだか、最近はこうしてホムラさんを娘と奪いあう光景がデフォルト化してきているような気さえる。

でも、そんな時になるといつも……………

「まあまあ、二人共…？ 僕は、アインハルトのことも『』のことも同じくらいに好きだよ？ どっちがどうか、優劣つけられないよ」

「そ、そんな事を言って……………ふみゅ」

「ぱ、パパ……………大好きなんて……………にゅふふ」

と、こんな具合にホムラさんの言葉にうまい感じで言いくるめられてしまつて……………。

本当に、いろんな意味でホムラさんがこの家庭の中心的存在なんだと思い知らされる。

もちろん、頼りになる理想の夫という点で、どこに出しても恥ずかしくない、完璧な方なので、当たり前といえそうなんですが。

「僕は、そんな大好きな二人と一緒に、今日みたいな日曜の休日をお過ごしたいんだけど……だからさ、『三人』でどこかに出掛けよう？ どっちが欠けても、僕は悲しいな」

「はい……ホムラさんの言う通りです……」

「私も、パパがそこまで言ってくれるなら……ママと一緒にでもいいかな……」

私も娘も、別に嫌い合っているわけではない。

ただ、ホムラさんを巡っての激しい戦いが時たまあるというだけで……そう、愛しているんです。

私とホムラさんの間に出来た……私達の子供なんですから……。

「それじゃあ、早速出掛けようか」

「「はい！」」

「うん、良い返事だ……」

そう言つて、ホムラさんが私と『の頭を優しく撫でてくれる
……。
それだけで、私と娘は天にも登るような表情に……。

はふう……幸せすぎます……。

はあ……やはり、家庭とはいいいものです。
や、やっぱり、家族は多いほうがいいですね……出来れば、
もう一人』……欲しいなあと……。

だから、私はホムラさんにこう言つ……娘が生まれる前にも言つ
た、あの言葉を……

「あの、ホムラさん……？」

「うん……？」

「……家族、もう一人欲しくないですか？」

【アインハルト視点……？ 終わり】

【side out】

「にゅふふ……ホムラさん……二人目を……二人目を作
りましょう……？ ですから、今日も……わたしを……目一杯
可愛がって……ください……」

「……アインハルト、なんて言う夢を見てるんだろ……」

「一杯、一杯ください……はふう……ホムラさん……もっ
と、もっと……私をめちゃくちゃにして……」

看病をしていたホムラが、上記のようなアインハルトの寝言を聞き、
何故か自身の貞操に危機感を覚えたのは……また別のお話……。

第六十話 男だって泣く時は泣く（後書き）

F20C「姉萌え属性の私が……妹キャラに萌えてしまうとは……」

ルーク「いや、そういうのぶっちゃけここではどうでもいいし」

F20C「だってお前……嫉妬が物凄く可愛いんだぞ？ 頭撫でられると尋常じゃないくらいに喜ぶんだぞ？ 黒タイツなんだぞ？」

ルーク「お前の趣味嗜好の話はいいって言うに。ていうか、黒タイツで……」

次回 第六十一話 新しい朝と関係と

アインハルト「ところで、何故私の夢の中での娘の名前が『
』
なのですか？」

F20C「いいのが考えつかn……み、未来のこととは関係ないということを表現するためにだな」

アインハルト&ホームホーム「嘘乙」

閣下「アホスwww」

F20C「閣下、お前今後出番80%カットな」

閣下（ ）・（ ）

第六十一話 新しい朝と関係と(前書き)

いいぜ

へ(へへへ)へ

—

/

(へへへ)/ てめえが俺の

出番を

/ () 思い通りに

出来るって思ってたんなら

(へへへ) 三 / / >

\ (へへへ) 三

(へへへ) < \ 三

() /

/ <

まずはそのふざけた
幻想をぶち殺す

閣下の出番が95%カットされることが決まった瞬間であった。

閣下「反省してまーす」

第六十一話 新しい朝と関係と

【ルーク視点】

「ほんつとーーーーーに、ご迷惑をおかけしました！……！」

俺の出自の秘密が明らかになり、ねーさんとの関係がなんだか新しいステップに登りだした日の翌日……。

11月の冷たい朝、暖房で暖められた空気によって快適な環境となっているリビングにて、俺とねーさん、お客であるホムホムの前でアインハルトが勢いよく土下座をしていた。

その姿勢たるや、綺麗な土下座スタイルといってもいいもので、誠意の気持ちが伝わってくるものだ。

今朝になって、アインハルトも俺も風邪の峠を超えたようで、普通に生活するにはなんの問題のないレベルにまで落ち着いていた。

しかし、アインハルトは昨日の自分がしかしてしまった事を覚えていたらしく、こうやって朝っぱらから俺達に土下座しているというわけだ。

「ま、まあまあアインハルト？ 私達から言い出したことなんだし、それに風邪も無事に治ったんだからそんなに気にしなくても……。」

「そうそう…。それに、空いてるベッドを使ってもらっただけだし、ホムホムには家事まで手伝ってもらっちゃったしな。なにより、困ったときはお互い様だろう?」

「フェイトさん、ルークさん……………」

俺とねーさんがそう言つと、アインハルトは土下座の状態から顔だけを上げる。その表情は真摯なもので、流石はホムホムの婚約者といったところだろうか。

ホムホムからすれば涙目上目遣いコンボになってしまう形なので、ホムホムがちよつと顔を赤くしていたのは言うまでもないことかもしれない。

「あ、あと………… ホムラさんには………… 風邪を引いていたとはいえ………… い、『いろいろ』やらかしてしまったようで……………」

「あ…う、ううん………… その、気にしなくてもいいから……………」

「そ、そういう訳にはいかないですよ……………。あ、あんないやらしい事を……………うう、思い出したら顔が赤くなってしまった……………」

まあ、今回の件で一番の功労者というか、被害者と言うか、何と云うか。それに当たるのは間違いなくホムホムだろう。

風邪を引いたことによって、甘えたがりモードがフルスロットルになつてしまったアインハルトの相手を必死でこなしていたわけだ。

それこそ、耳の性感帯を開発されてしまうことになるまで……。まあ、ホムホム自身、アインハルトからの甘えを全く迷惑になど感じていないだろうけど。

「だ、だつてさ……いつもは僕が頼ってばかりだけど……ああやつてアインハルトが甘えてきてくれるのって……正直新鮮で……う、嬉しいんだ……なんとなく……。だから、アインハルトもそんなに気にしなくても……」

「ホムラさん……」

でもって、熱い視線を絡ませ合つて見つめる二人。はい、固有結界発動ですよ。ATフィールドですよ。

ホント、これで結婚してないってんだから、将来がいろんな意味で未恐ろしい二人だ。

もう結婚しちまえよww などのコメントを頂いてしまうのも無理は無い。

「じゃ、じゃあ……その……たまに……甘えても……いいんですか？」

「偶にじゃなくなつて……。いつでもいいよ……。甘えたがりなアインハルトもとっても可愛いし、今回のことを含めて、今までよりもっと好きになつたかも……」

「そ、そんなこと……。私も、そう言ってくれるホムラさんのことが……もっと好きになってしまいます……」

え？

なにこれ？ これなんなの？

俺達ほったらかしで、いつの間にかイチャイチャしまくりな空間作り出し始めてるんですけど？

あれ？ このコーヒー、ブラックなのにサトウキビの汁飲んでるみたいに甘いんですけど。

「ぼ、僕のほうが、もっとアインハルトのこと好きになってるよ」

「いえ、私の方が、よりホムラさんへの気持ちが大きなものになりました」

「僕が……」

「いえ、私が……」

おい、何でこの二人は『私のほうがずっと君の事好きだもん』、『いや、俺のほうがずっとお前が好きだ』以下エンドレスという、最早エロゲでも早々お目にかかれないようなやり取りをし始めたんだが。

このままだと、俺の寿命がストレスでマッハなんだが。

「あはは　ほ、ホント二人って仲良しっていうか、ラブラブだね
」（ヒクヒク……）」

「（何を呑気なことを言ってるんだ、ねーさんは……って、ねーさんの口元がちょっと引き攣ってる！？　耐えてるの！？　この甘甘空間に耐えてるの？　ねーさん！？）」

ねーさんの意外過ぎる強靱な精神力と言うか、固有結界に対する耐性の強度に改めて偉大な姉（従姉弟）の存在に、俺は思わず脱帽してしまう勢이었다。

俺なんか、既にブラックコーヒーが練乳入りのいちご牛乳に見えてきてるのに……。

ねーさん、パネエ。マジパネエっす、ねーさん。

「そ、そういうフェイトさんとルークさんも……仲の良さはかなりのものではないですか……」

「そうだよね……なんだか、二人共さっきから距離が近いっていうか、くつついてる感じがするようない……。ソファの座る位置もかなり近距離ですし……」

「ソ、ソナコトナイヨ……」

と、思わぬ形でブーメランが帰ってきてしまった。

俺とねーさんの座る位置と言うか、昨日から今この時にかけて……

体が自然とねーさんの方に近づいてしまうのだ。

ねーさんの方も同じような感じらしく、朝起きてからずっと……俺とねーさんは半径１メートルという距離内で共に時間を過ごしている感じだ（トイレ時は除く）。

昨日の一件があったからなのか……ねーさんに対する気持ちを理解したからなのか……自分でも不思議なくらいに、ねーさんに素直に慣れている自分がいる。

それも、全然違和感がないくらい自然に……。

「……………」

「……………ん」

少しの間視線が合わさる。すると、ねーさんはパッと花が咲いたような笑顔を浮かべて、満足そうな顔になる。

なんだろ、ねーさんが可愛い。というか、ふつくしい……。

「（この気持ち……………どうやって伝えようか……………」

俺は、ねーさんに対する自分の気持ちをどう表現し、どう伝達させればいいのか。

従姉弟という関係だったとしても、母さんや父さんたちはなんて言うのだろうか？ 祝ってくれるだろうか？ 反対されるだろうか？

一般的に考えれば、間違いなく後者だろう。

でも俺は……それでも、反対されたとしてもねーさんが好きなんだ。
もう、どうしようもない。

ギユ…

「あ……」

「えへへ……」

そんな俺の手を、ねーさんの手が包む。ソファの上に何気なく置いていた右手を覆うようにねーさんの白くて綺麗で、ほっとする暖かさを持った手が重ねられる。

ねーさんは嬉しそうに微笑み。俺もついつい、頬が緩んでしまった。何と言うか……こうしていただけるのが、本当に幸せと言うか……。

「「やっぱり、ラブラブですね」」

と、またしてもアイホームたちからそんな評価を受けてしまい、俺とねーさんは顔を赤くしてしまった。

そんな、俺の中での小さな決意と確かな気持ちと共に、ハラオウン家での清々しくも糖分過多な早朝は過ぎていったのだった。

【ルーク視点 終わり】

【リオス 視点】

「で、俺はどうすればいいと思う!!?」

「ルーク……まずは事情を説明してくれないとなんとも言えないんだけど………」

日曜日の昼下がり。

なのはさんの素敵なところを頭の中で数えながら、学園の宿題をしていた僕を、ルークが訪ねてきた。

で、何の用なのかと、取り敢えず部屋に上がってもらったんだけど……。その第一声が上の疑問形な質問だったわけだ。

訳がわからないよ。

「えっとな、つまりはだ。俺とねーさんが実は姉弟じゃなくて従姉弟なわけで、俺はねーさんが好きってことだ。言わせんなよ、恥ずかしいww」

「何その説明!? 端折り過ぎでしょうが!! ていうか、とんでもない事実をサラッと2行程度で済ませないでよ!!!?」

いやなんかもう、分かってただけだ。今日のルークはとんでもなくテンションが高くなってる。もう、初見の人から見ても明らかに何かいいことがあったと言うか、ハイテンションになってしまいうようなイベントがあったことが分かってしまうレベルで。

「兎に角……何があったのか、原稿用紙二枚分くらいでまとめてみてよ」

「400字詰めのほうが？ それとも200文字詰め of 原稿用紙か？」

「そこはどっちでもいいよね！！？ 果てしなく！！」

「ばっかお前……400より200文字詰めのほうが、反省文書く時楽だろうが。すぐ終わるし」

「この人反省文書く時そんな事考えてたの！！？ 絶対反省してないよね！？ 心にもない事書いて行数埋めてたクチだよな！？」

ルーク、小学生の頃はヤンチャしてたよなあ、とかそんな昔のことを思わず思い出してしまった。

というか、その度にフェイトさんが身元引受人的なノリで、ルークを迎えに来てた気がする……。

「反省文なんてな、結局は形だけのもんなの。心込めて反省文書い

てる奴なんていないっての」

「身も蓋もないよね……。まあいいや、兎に角何があったのか一から、事細かに説明してよ。400字詰めの方で」

それからルークは、昨日あった出来事とかを僕に洗いざらい話してくれた。

風邪を引いたこと、アインハルトとホムラを家に泊めたこと、その二人がイチャイチャしまくりで神経がすり減ったこと、自分の出生の秘密が明らかになったこと、フェイトさんが実は従姉弟だということ、そのフェイトさんのことが好きだという気持ちに素直に慣れたことを……。

あれ？ 前半部分要らなくない？

「ていうことだ。アンダースタン？」

「うーん……。ていうか、かなりショッキングなというか、インパクトが強すぎると思うか……。若干現実味持てない気もするけど……。」

「俺だってそうさ。でも、一応証拠とかもあるし……。ねーさんがそう言うなら本当のことなんじゃないかなってさ……。」

へえ……。フェイトさんに信頼を置いていたことは前々から分かりきってたことだけど、それをここまで他人にハッキリ分かるように話すルークなんて、初めて見たなあ……。

これは本格的に、自分の気持ちに素直に慣れたってことなんだろうかな……。

フェイトさんはフェイトさんで、年がら年中ルークラブだし……。

あれ、これっってもうエンディング確定してるっていうか、フラグ完全構築されてるような……？

「で、自分の気持ちをどう伝えていいのかで、ちょっと分かんなくなっただけ。今や絶賛リア充としての日々を、あの高町なのは嬢と送っているリオスに考えを聞こうかと思って参上した次第」

「そのリア充ってのやめてくんない！？ 確かに、なのはさんと一緒になれて幸せ絶頂で、向かうところ敵なしっていうか、もうなんかどんな悩みも馬鹿らしくなるくらいの幸せ者になってるっていうのは自覚してるけどさ」

「よし！！ 質問に答える前にまずお前を一発殴らせろ、話はそれからだ」

おっと、いけないいけない。最近、気がつくとなのはさんとの幸せライフに思考を持って行かれることがよくあるんだよね……。

ルークが拳をリアルに振り上げているので、取り敢えずそれをやりわりと止めてから話を前に進めることにする。

「えーと？ 取り敢えず、ルークはフェイトさんに告白したいって

「ことでいいの？」

「ま、まあ……世間一般的な解釈と言語表現の手法を適用して、俺の願望を文章化するとそうなるな……」

「いや、もうなんかその照れ方がものすごくめんどくさいんだけど……、まあいいや。で、どうやって打ち明けるのさ？ 直接言う感じでいいんでしょう？」

こういうことは、手紙や電話という方法もあるけど、手紙に至っては最早過去の遺物といってもいいレベルのものだし、電話ではいまいち気持ちが伝わりづらい。

手っ取り早く、ストレートにルークの気持ちを伝えるのなら、直接フェイトさんに思いをぶつけるのが一番だろう。

格言う僕もそうでした。

「いやまあ……そうなんだけど……」

「だけど？」

「恥ずい」

「……………」

「いやいや……そりゃ誰だって恥ずいでしょうよ。というか、顔赤らめながら言わないでよ……リアクションに困るじゃないか。」

人の事言えた身じゃないけど、誰だって自分の気持ちを伝えるのは
恥ずかしいし不安になるもんだろっし……。

「でもさ、ぶっちゃけフェイトさんって誰の目から見てもルーク一
筋な感じだし……ルークが気持ちをパツと伝えちゃえば、万事う
まく行くと思うんだよね」

「うん……そうかなあ……」

というか、フェイトさんはいつでもウェルカムなんだと思うけど……
……。今までルークが素直じゃなかっただけで。

多分、関係性が変わったことでルークが若干不安定になってるだけ
の話で、フェイトさんはルークのこと待ってるんだろっしな……。

「ストレートに伝えたとして……大丈夫なもんか……。だって、あ
のねーさんだぞ？ 天然ボケで、ポケーっとしてて、天然ボケなん
だぞ？」

「そ、そこは否定しないけど……なんで天然ボケ二回も言ったのさ
……」

フェイトさんには若干申し訳ないけど、ルークの言うとおり天然ボ
ケの部分は否定する要素が見当たらないです……。

これまでの行動とかを見てる身としては余計に……。

ま、まあ、それがフェイトさんの個性と云えばそうなんだろうけど
……。

「それにそれに、ねーさんは弟……ていうか、従姉弟の俺の目から見ても他の追隨を許さないくらい美人且つ、性格も文句なしでスタイル抜群の女性って感じだしなあ……俺なんかが気持ち伝えていいもんか……」

「いやいや、美人云々を言わせたら、なのはさんだってそうだよ。なのはさん以上の女の人なんてこの世に存在しないといってもいいね」

「いやいやいや、そこはやっぱりねーさんだよ。リオス知らないだろ？　ねーさんって物凄い良い匂いするんだぞ？　それに肌だってスベスベで目も綺麗、髪の毛だってサラサラで触り心地抜群なんだ。つまり、ねーさんこそが至高なわけで」

「いやいやいやいや、なのはさんもその点では負けてないよ。それに、なのはさんはもの凄く空気の読める気遣い上手な若奥様を彷彿とさせるモノを持ってるんだ。そこに加えて、僕の弱い部分をひっくるめて好きになってくれる度量……つまりはなのはさんこそが究極なわけで……」

二人「……………」

僕とルークは、知らない間に、ムムム……と睨み合っ。あれ？　ていうか、僕達何の話してたんだっけ……………？　少なくとも、自分の好きになった相手の自慢話をしながら、優劣を争ったりはしていなかったような。

「H A H A H A リオスもまだまだ分かってないなあ。ねーさん以上の女性なんぞいるわけなかるうて」

「はっはっはっは ルークこそ、何を言ってるのかな？ なのはさんこそが究極の理想の女性そのものじゃないか。そこに揺らぎはないよ？」

・ ・ ・ ・ ・

恋愛相談などどこへ投げ捨ててしまったのか、僕とルークは互いに惚れた相手の良いところを競い合うようなことを始めていた。でも、なのはさんの……か、彼氏としてここは負ける訳にはいかない………！

「ね、ねーさんのほうがおっぱい大きいし、超絶優しいし、サービス精神旺盛だし、理想的な嫁そのものなんだよ！ はい、論破したー！！！」

「な、なのはさんだって胸の大きさに関しては美乳っていうカテゴリーに入ってるし、器量良しな理想の奥様像そのものですー！！ こっちも論破したー！！！」

・

・ ・ ・

「「ああ！？ やんのかコリアー！！？」」

最終的に、自慢対決では勝負は着かず……………僕達は中学生日記ながら、胸倉をつかみ合って、ぐぬぬ…と睨み合う。

もうこうなったら、漢に残された武器はただ一つ……………己の拳一つだけだ。

後から思い返してみれば……………この時の僕達はどうかしていたんだと思う……………。

「リオオオス！！ 寝言はスマ ル・ギャング聞いてからにしろ！！ 冒頭の挨拶の『シャッス！』の可愛さと、福¥さんとの絡みが最高だろうが！！ ヘッド、可愛いよヘッド！！」

「そつちこそ、いたずら ウサギを視聴してくればいいさ！！ ゆかりん、世界一かわいいよ！！」

そのまま僕達は、訳の分からないことを叫びながら、互いに拳をぶつけ合い、男同士の肉體言語でお話を続けた。

ちなみに、作者は『私は断然、天使のた ご派だな！！ こんばん

天の挨拶の時のほっちゃんがたまらん！！　ほ、ほーっ、ホアアーッ！！　ホアーツ！！』
とか、訳のわからないことを叫んでいたけど、取り敢えず無視しておきました。

くしばらくお待ちくださいく

「はあ……………はあ……………」

「ぜえ……………ぜえ……………」

数分後、僕の部屋には息も絶え絶えという感じの、ルークと僕が部屋真中で大の字になって倒れ伏していた。

お互いに、体力の限界まで戦い、同時に力尽きた。

「はあ……………はあ……………へへへ……………リオス、なかなか……………やるじゃねえか……………」

「あはは……………ルークの方こそ……………」

仲の悪かった二人が、夕暮れの河川敷での殴り合いの末に友情を育んだ時みたいなセリフと共に、僕達はお互いの拳をコッソンとぶつけ

る。

うん……ほんと、この時の僕達はどうかしてたんです……。

「リオス……」

「なに？」

「俺さあ………いつちよ勝負に出てみるよ。ねーさんとの、大一番にさ」

今日、ルークが訪ねてきた理由。それは恋愛相談だったはず………
。だけど、本当のところはちよつと違っていたのかもしれない。

フェイトさんとの関係を明らかにした上で、自分の中にあつた気持ちを伝えようとしているルーク。

でも、やっぱり不安だったみたいで、それを紛らわすために、ルークは僕に相談をしに来たのかもしれない。今みたいに、二人して馬鹿をやつて、頭の中を空っぽにしたかつたんだろう。

気持ちの整理と言うか、気合を入れるためと言うか、恐らくはそういったメンタル的な部分でのリフレッシュだ。

「従姉弟だろうが、何だろうが関係ない。俺は、ねーさんが好きだ。だから、ねーさんにそれを伝えるよ」

「うん。フェイトさんも、きつと待ってると思うよ、ルークがそう

言ってくれるのをさ」

結果として……僕とのバカな触れ合いで、良い感じにガス抜きが出たみたいで、ルークはすっきりしたような様子でそう言ってきた。僕も、ルークの気持ちにフエイトさんに届くことを確信しながら、思ったことを口にした。

きっと、二人なら上手く行くだろうと。そう確信できていたから。

「ありがとな」

「どういたしまして」

さて……後は、親友の大勝負の行方を見守るだけかな……？
ああでも、ルークとフエイトさんが付き合ったりしたら、それこそバカップル化しそうだなあ……。

僕となのはさんみたいに、『落ち着きのある健全な関係』になっ
てくれればいいんだけど……。

あれ？ なんだかどこから、ものすごい数の『お前が言うな』的
な視線を感じるんだけど……気の所為、かなあ？

【リオス視点 終わり】

第六十一話 新しい朝と関係と（後書き）

閣下「前書きやめんかwww ていうか、俺の出番最早この後書きスペースしかない勢いじゃないか!!」

F20C「出番もらえるだけありがたく思えよ」

クウ「ほんと、閣下って身の程知らずだね、流石は雑種」

閣下「お前未だにギル様引つ張るつもりか!？」

次回 第六十二話 告白の定番といえば体育館裏

今回は、ついにルークがフェイトに告白するんですが………やっぱり、スムーズには行かないもので……
あと数話で、スクラパも終了ですね……。
とある訓練生の方は、終わりの後ろ姿すら見えない状況ですが（
、 ; ）

クウ「男子を足蹴に!？ おのれ、どうやら本格的に躡けられたいらしいなセイバアアアア………!!」

コロナ「クウちゃん、セイバーって誰!？」

ルーテシア「また新しい嫁候補かしら？ 全く、手が早いわねクウは……」

クウ「ああ、いえそのう……」
・
・
・
「（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647n/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS スクール・ラブ・パニック!!

2011年10月10日08時55分発行